

# 額見町遺跡 I

(A・D地区の調査)

— 串・額見地区産業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1 —



A地区SI13のL字型カマド付貯蔵穴建物

2006年 3月31日

石川県小松市教育委員会



# 額見町遺跡Ⅰ

(A・D地区の調査)

—串・額見地区産業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—

2006年 3月31日

石川県小松市教育委員会





## 例 言

1. 本書は小松市が施工する串・額見地区産業団地造成事業に伴って、平成6年から平成12年度までに小松市教育委員会が調査主体となって実施した額見町遺跡（ぬかみまちいせき）発掘調査報告書である。本報告は調査区割ごとに報告してゆくもので、平成20年度までに5分冊での刊行を予定しており、本書はこのうちのA地区とD地区の報告書、第1分冊である。
2. 発掘調査及び出土品整理は、小松市の単独事業として行なったものであるが、調査費は小松市土地開発公社からの受託という形態をとった。
3. 発掘調査の調査地、調査面積、調査期間、調査担当者は次のとおりである。  
《調査地》石川県小松市額見町な1番地外  
《調査面積》(A地区) 5,500㎡ (D地区) 4,700㎡  
《調査期間》(A地区) 平成7年9月20日～平成7年12月20日  
平成8年4月22日～平成8年12月5日  
(D地区) 平成10年6月1日～平成10年12月20日  
《調査担当者》(A地区) 望月精司 (D地区) 西田由美子
4. 遺構の測量図作成については、本文に記載した測量補助員らの協力の下、調査担当者である望月と西田が実施した。また、遺構全体測量及び基準点測量に関しては、アジア航測株式会社に委託した。
5. 出土品整理は、平成9年度から平成17年度の中で遺跡全体で行ったものであり、当該地区の整理は、その中で随時、出土品整理作業員を雇用し、望月精司が主に担当した。詳細は経過に基づく。
6. 遺物実測、製図、観察表作成、遺物構成把握、原稿執筆については、本文Ⅱ章に記載した出土品整理作業員の協力を得て、古代の遺物に関しては望月が、縄文時代以前の遺物に関しては西田が実施した。なお、縄文時代以前の遺物については、当時調査員宮田明より助言と協力を得た。
7. 本書の編集は望月が担当し、執筆者は目次に記載した。
8. 写真撮影はA地区遺構を望月が、D地区遺構を西田が、遺物は古代を望月が、縄文時代以前を西田が担当し、空中写真についてはアジア航測株式会社に委託した。また、太陽測地社より航空写真の提供を受けた。
9. 本調査において出土した遺物を始め、遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。
10. 本書に掲載の写真等については、無断で複写、転載することを禁じています。転載利用の場合は小松市教育委員会へ使用許可を申し入れてください。
11. 発掘調査と報告書の作成にあたっては、次の方々、機関、団体からご協力、ご指導を賜った。ご芳名を記し、感謝の意を表したい（所属及び敬称略、五十音字順）。  
赤澤徳明、浅川滋夫、穴澤義功、上村安生、宇野隆夫、大澤正己、小田和利、柿田祐司、柏原孝俊、春日真実、亀田修一、川畑 誠、木立雅剛、北野博司、金 鎬詳、小嶋芳孝、小林正史、酒井清治、坂井秀弥、定森秀夫、城ヶ谷和広、菅原祥夫、杉井 健、鈴木靖民、田嶋明人、出越茂和、戸調幹夫、西谷 正、丹羽野裕、橋本澄夫、畑中英二、菱田哲郎、藤原 学、松室孝樹、宮田浩之、森 浩一、森 隆、森内秀造、吉岡康暢、李 健茂、渡辺 一、(財)石川県埋蔵文化財センター、額見町町内会

# 目 次

例 言	i
目 次	ii
凡 例	iii
報告書抄録	iv
<b>第 I 章 調査に至る経緯と調査経過</b> (望月精司)	1
第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 発掘調査作業の経過	3
第 3 節 出土品整理作業の経過	13
<b>第 II 章 遺跡の位置と環境</b> (望月精司)	16
第 1 節 地理的環境	16
第 2 節 歴史的環境	19
<b>第 III 章 発掘調査の概要と調査・整理方法</b> (望月精司)	24
第 1 節 額見町遺跡と発掘調査概要	24
第 2 節 発掘調査方法と出土品整理方法	29
<b>第 IV 章 A 地区と D 地区で検出された古代遺構</b> (望月精司)	36
第 1 節 A 地区と D 地区の遺構分布と層序	36
第 2 節 A 地区で検出された遺構	44
第 3 節 D 地区で検出された遺構	123
<b>第 V 章 A 地区と D 地区で出土した古代の遺物</b> (望月精司)	139
第 1 節 A 地区出土の古代遺物	139
第 2 節 D 地区出土の古代遺物	222
付 表 額見町遺跡出土古代遺物観察表	229
<b>第 VI 章 縄文時代以前の遺構と遺物</b> (西田由美子)	243
第 1 節 遺構と遺物の分布状況	243
第 2 節 遺物	243
<b>第 VII 章 総 括 - 額見町遺跡の古代竪穴建物構造と造り付けカマドについて -</b> (望月精司)	251
第 1 節 古代竪穴建物構造に関する検討	251
第 2 節 造り付けカマドに関する検討	260
写真図版	269

# 凡 例

## 〔遺構について〕

1. 本書で示す方位は、座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標体系に準拠した。また、水平基準は東京湾平均海面水準（T. P.）である。
2. 遺構名称は竪穴建物跡をSI、掘立建物跡をSB、土坑をSK、溝状遺構をSD、竪穴遺構をSJ、井戸をSE、特殊祭祀遺構をSX、ピットをPとし、土器溜まりはグリッド名に土器溜まりを付した。Pは調査地区ごとに遺構番号を付したが、他は遺跡全体での通し番号とした。
3. 現場で付した遺構番号を変更したものについて、SI16→SK11・SK16、SI20→SK38とした。このため、SI16とSI20は欠番とした。
4. 遺構図の基本的な図掲載縮尺は、竪穴建物跡に関して平面図・断面図を1/60とし、掘り方平面図を1/120、造り付けカマド平面・断面図及び遺物出土状況図を1/30とする。掘立建物跡は平面・断面図を1/100、土器溜まりは平面図を1/80、土坑は平面・断面図を1/40縮尺とするが、一部1/80の場合もある。
5. 遺構図で示す平面図の+はグリッド枕の位置を、断面図—は水平レベルラインである。これに付記するH=とした数値は標高値を水平基準から求めた海拔高を示す。
6. 竪穴建物跡平面図に記載する細かいドット網掛けは被熱炭化範囲を、粗いドット網掛けはカマドソダ粘土範囲を、ストライプ網掛けは切石を示す。また、土坑と竪穴建物の遺物出土状況図に示す土器を結ぶラインは接合関係にあるもので、図Noは遺物図版の図に付した番号と一致している。
7. 竪穴建物跡の土層断面図に示す数字は覆土土層を、アルファベットは床下土層を示し、その間の太線は床面ラインを示す。また、土層註に示す色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」に基づく。

## 〔古代の遺物について〕

1. 本書または観察表で示す遺物の種別や土器の器種名については、本文139～140ページに示したとおり、須臾器は食膳具を田嶋明人氏の分類、貯蔵具を北野博司氏の分類、土師器を今回の新提案分類に基づく。他の遺物に関しては個別説明のとおりとする。また、観察表や本文に示す遺物帰属時期については、田嶋明人氏の北陸古代土器編年論（田嶋明人1988「古代土器編年論の設定」[シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題（報告編）]及び田嶋明人1997「加賀地域での10・11世紀土器編年と暦年代」[シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器探知]）に基づく編年標記であり、その編年の筆者暦年代観については観察表の巻末にまとめて掲載する。
2. 遺物図版の縮尺は鉄器を1/2に、それ以外を1/3に統一したが、一部須臾器中壺、大甕、甕型土製品については1/4または1/5で掲載した。また、造り付けカマド笑口部材の石材や台石などについても1/4とした。
3. 遺物図版で示す実測図の断面に指示した網掛けは、黒塗りが須臾器または須臾質製品、白抜きが土師器または土師質製品、ドット網掛けが陶磁器類、ストライプ網掛けが石器を示している。また、土器の内外面に示した網掛けについては、細かいドットが赤彩、粗いドットが黒色焼成、砂目が黒痕跡であり、カマドの支脚や笑口石材の網掛けは被熱部分を示す。
4. 実測図断面に示す「□」はヘラケズリ調整の範囲を、外面や内面に記される「→」はケズリに伴う砂粒移動の方向を示す。
5. 須臾器、土師器の実測図において、ロクロ（回転台など回転使用のものも含む）による成形や調整を行うものについては、口縁部ラインや底部ライン、内外面調整ラインを、非ロクロと意識的に分けるため、規定で線を引き、非ロクロについてはフリーハンドで示すよう統一した。
6. 観察表の流量に示す土器等容器類の口は口径、受は受け部径、返は返り径、鋸径はつまみ径、底は底部径、台は台径、脚は脚径、基は脚基部径、体は体部径、胴は胴径、頸は頸部径を示し、高は器高、鋸高はつまみ高、立高は口縁部立ち上がり高、返高は返り高、坏高は坏部高、脚高は脚部高、胴高は胴部高、頸高は頸部高を示す。器でないものについては、長は長軸長、残長は残存長、径は最大径、上や下は上端径と下端径、孔は孔径、また、特に部位記さずに○×○としたものは基本的に長さ×幅×厚さを示す。単位は全てcmとする。
7. 観察表の胎土で示す胎土凡例は特に観察表巻末にまとめて掲載する。
8. 観察表に示す色・焼については、色調は土壌観察同様の標準土色帖を、焼きは焼成具合を示す。
9. 観察表に示す調整等については主要なもののみ記載した。なお、甕の叩き具種別については内堀信雄分類案に基づき（内堀信雄1968「須臾器甕類に見られる叩き目文について」[シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題]）、日類を平行線文、D類を同心円文とし、H a類は平行線彫り込みに直交して木目のあるもの、H b類は右しがり斜交の木目のあるもの、H c類は左上がり斜交木目のあるもの、H e類は木目の見えにくいものである。D a類は木目の見えぬもの、D b類は同心円彫り込みに沿って同心円木目の見える芯材使用のもの、D c類は極目状木目のものである。
10. 観察表の備考に記すものは特記事項で、特に、煮炊き使用痕跡や使用に伴う磨耗痕、付着物、彩色や焼成状態、特殊な施文や施釉、器形特徴、ヘラ記号、重量、重ね焼きを記した。なお、重：○としたものは食膳具類の重ね焼き類型を示したもので、I類は蓋身を使用状態の正位で重ねる一段か二段積みのもの、II類は蓋を逆位に身に重ねるもので、そのまま柱状に積み重ねるII a類と身蓋身+身蓋と交互に重ねるII b類とに分けられる。蓋と身を別々にそのまま柱状に重ねるものについてはIII類とする。

## 報告書抄録

ふりがな		ぬかみまちいせき (Nukamimachi Sites)						
書名		額見町遺跡						
副書名		中・額見地区産業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1						
巻次		1						
編・著者名		望月精司・西田由美子						
編集機関		小松市教育委員会						
所在地		〒923 - 8650 石川郡小松市小馬出町 91 番地 (電話) 0761-22-4111						
発行年月日		西暦 2006 年 3 月 31 日						
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
額見町	石川郡小松市額見町 な 1 番地外	160	03089	36 度 21 分 16 秒	136 度 24 分 30 秒	A 地区 1995.09.20 ~ 1996.12.05 D 地区 1998.06.01 ~ 1998.12.20	A 地区 5,500 D 地区 4,700	小松市が施工する中・額見地区産業団地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
額見町遺跡	集落跡	飛鳥・奈良・平安時代 7 世紀から 8 世紀前半が主体の集落遺跡	A 地区: 竪穴建物跡 32 軒、 掘立柱建物跡 24 棟、 土坑 42 基、 竪穴遺構 14 基 D 地区: 竪穴建物跡 3 軒、 掘立柱建物跡 8 棟、 土坑 7 基		須恵器・土師器・朝鮮系軟質土器・甍型土製品・特殊煎・円面硯・各種紡錘車(陶・石・鉄)・棒状鉢・専用焼合・磁石・銅製耳環・鉄鏝・刀子・鎌		集落成立期に L 字型カマド付設の竪穴建物を検出する朝鮮系移民集落で、A 地区で 8 軒 (10 軒の可能性も?)、D 地区で 2 軒確認する。	
要約	6 世紀代に墓域であった台地上に、古墳群の消滅とともに突如出現する古代集落遺跡である。7 世紀初頭の集落成立時に L 字型カマドを付設する竪穴建物様式を高い確率で選択している点から、朝鮮系移民を主体とした集落遺跡と判断される。7 世紀後半に生産される朝鮮系技術を導入したような土師器群 (原始北陸型煮炊具) の存在や同時期に始まる鍛冶生産、須恵器製製品を産出した際に生じる副道具片の出土など、当集落が手工業生産に携わったことを示す。当集落の近隣にある南加賀丘陵製鉄・製陶遺跡群が 7 世紀に出現又は変革期を迎えることと関連性が強く、広域での台地上集落群 (A エリア台地) は丘陵部工業生産地帯の母体村落としての性格を持つ。7 世紀後半は集落増加期であり、8 世紀前半までに全盛期を迎えるが、7 世紀後半の新たな建物様式の導入や近江系煮炊具、丹波系煮炊具の導入など、朝鮮系移民のみならず、西日本各地または西を經由しての移民流入によって集落の拡大が図られたことを示す。律令政府主導の下で計画的に設置・経営された集落と言え、それは地方支配政策、評制施行前段階施策としての性格をもつ。当台地集落の成立は近隣地に置かれたらう江沼評や工業生産地と一体的なものであり、潟湖をその媒体として屯倉的な領域支配がなされた地域と性格づけられよう。							
S A M A R Y								
<p>The NUKAMIMACHI SITES are an ancient village ruins in the fee that appear suddenly on the plateau that was the grave region with the disappearance of the old tomb group in the sixth century. In view of the point to have selected the Ana building where L character type kitchen range is set up when the village is approved century seventh by short odds, this village ruins are judged to be ruins mainly composed of a Korean immigrant. The excavation of the kiln tool splinter caused when the blacksmith production and the Earthen kiln product that starts from existence of Earthenware group that introduces a Korean in be produced in the latter half of the seventh century technology and a simultaneous period are selected etc. show that this village was involved in the manual industry production. The vicinity Minamikaga hill steel manufacture and the pottery manufacture ruins group's in this village coming the revolution period in this in the seventh century has and the relation has the location village group on the plateau strongly said by the wide sense with the character as the mother's body village in the hill part industrial production zone. The latter half of the seventh century is a period of an increase of the village, and it is shown that not only Korean immigrants of the introduction of a new building style in the latter half of the seventh century and the Receptacle of cooking of the Ohmi system and the Receptacle of cooking of the Tanba system, etc. but also the expansion of the village was attempted by the immigrant inflow via West Japan various places or the wests though the glory period will come by the eighth first half of the century. It can be said the village that was set up and managed in premeditation under the Ritsuryo government initiation, and has the character as the steps measure by it before enforcing the criticism system of the local rule policy. The approval of this plateau village is an Enuma criticism, is industrial production ground that might have been put on the vicinity ground, is united, and it is thought the region where the seashore lake is assumed to be the medium and it was performed by area rule ton warehouse.</p>								

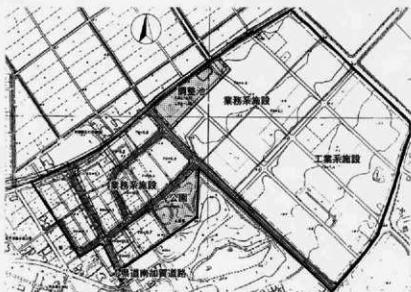
## 第1章 調査に至る経緯と調査経過

### 第1節 調査に至る経緯

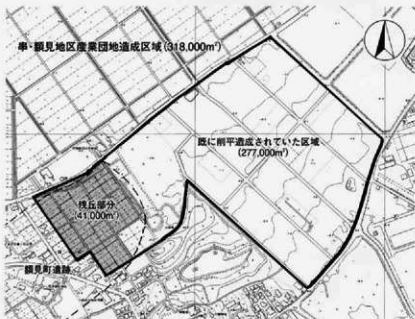
**遺跡の発見** 額見町遺跡は、昭和56年度に石川県立埋蔵文化財センターが文化庁補助事業として実施した県内詳細分布調査事業によって、新たに発見された遺跡である。その時の調査では、額見町の所在する台地のほぼ全域が周知の埋蔵文化財包蔵地とされ、奈良時代から中世までの集落跡とされた。当地は古くから、良質の山砂が採取できる地として知られ、今江潟や柴山潟の干拓のための土砂として台地縁辺部とくに北側の台地部分は広い範囲で削り取られてしまっていた。また、昭和初期のころに、台地のほぼ全域において田地確保のための耕地整理が行われており、起伏のある地形は切り土、盛り土により、段状に平地化されていた。当地には県詳細分布調査以前にも、茶臼山古墳や臼のぼぞ古墳、または茶臼山祭祀遺跡など、点的に遺跡が確認されていたが、大規模な古代集落が存在するとは予想していなかったのである。

**開発協議と試掘調査** 当台地に大規模な開発計画が浮上したのは、平成6年度のことである。小松市経済部が企画した南部地区工業団地計画で、当台地の北西側で既に山砂採取の削平工事がなされ、平地化されている区域が主な対象地であったが、開発計画はそこから一部、残丘部分に伸びることとなった。

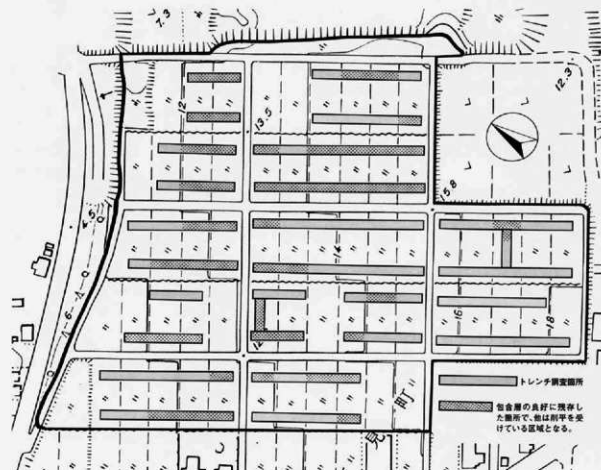
平成6年10月12日、市経済部から埋蔵文化財の取り扱いに関する協議書が提出された。串・額見地区産業団地造成事業と名称付けられたこの事業は造成面積が318,000㎡に上る大規模区画整理事業であった。ただし、277,000㎡は既に削平された区域であり、残丘部分の約41,000㎡が協議対象地とされた。全域が周知の埋蔵文化財包蔵地、額見町遺跡内にあるため、全域を対象とした試掘調査を平成7年5月30日～6月1日に実施した。試掘調査は一部の未買収地を除外する全域を対象としたもので、長さ40～80m、幅1mの試掘トレンチを20m間隔で、計30箇所、任意に設定した。当地は大規模な切り土、盛り土造成工事が行われていると予想されたため、掘削にはパワーショベルを使用し、掘削後に精査して遺構・遺物の確認を行った。試掘調査当初は予想していなかったことだが、当地の遺構確認面（掘り込み面）が黒色土地山であったため、パワーショベルによる掘削では、



第1図 串・額見地区産業団地造成事業計画図（当初計画）



第2図 造成工事区域内の地形と残丘部分（1/5,000）



第3図 試掘調査箇所と包含層遺存区域 (1/2,000)

遺構上面の把握が困難で、当試掘によって、結果的に多くの堅穴建物を掘り込んでしまうこととなった。ただ、その結果、試掘調査段階で堅穴建物が相当数存在することが判明し、調査費・計画の積算には役立つこととなった。

**発掘調査着手までの経緯** 平成7年6月13日、残丘地のほぼ全域に埋蔵文化財が遺存しているという試掘調査結果報告を、開発担当課である商工振興課へ提出し、その後の取り扱いに関して、調整を行った。組織文化財調査室では開発計画の変更を願ったが、計画変更は候補地変更を意味し、開発計画自体が大幅変更となるため、記録保存を前提とした、調査期間と調査費等の細部調整の協議を重ねた。平成7年8月18日に文化財保護法第57条の3第1項の規定による埋蔵文化財発掘の通知が文化庁長官宛で小松市長より提出され(発第4586号)、同日、教育委員会は受理し、平成7年から平成10年にかけての全域を対象とした発掘調査を実施する旨の添書をつけて、石川県教育委員会へ進達した(発教文理第26号)。また、同日、文化財保護法第98条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知を、市教育長名で、文化庁長官へ提出した(発教文理第27号)。初年度は突発的な調査事業であったため、経理事務、予算は開発担当課が直接執行する形となり、調査職員1名と調査補助員として臨時職員1名を配置する調査体制とした。平成7年8月18日、小松市長名で、市教育長宛に埋蔵文化財発掘調査実施依頼が提出され、平成7年9月20日より調査着手する旨の実施回答を平成7年9月12日付けで開発担当課へ提出した(発教文理第28号)。調査期間は、この段階では暫定的に平成10年12月20日までとしたが、調査体制が整わず、結果的には平成12年度までかかることとなった。

**発掘調査区の設定** 発掘調査区の設定は、耕地整理された田地区画を区画単位として任意で設定した。初年度は農道によって区画された北東側区域のうち、現場事務所に近い5,500㎡に着手し、これをA地区。その北側に隣接する7,700㎡の区域をB地区として、次年度区域とした。ほぼ1名の調査担当者が1年で調査完了可能な区域を3,000㎡から4,000㎡として設定し、B地区からは新人調査員との2名体制で実施した。初年度の平成7年度は年度後半期であったため、A地区は平成8年度の秋まで、B地区は平成8年度秋から平成9年度末まで

とした。その後の年度も農道と田地区画に基づいて調査区設定する予定であったが、当産業団地造成事業内を東西に横断する県道（南加賀道路粟津ルート）敷設工事計画が浮上し、道路区域を先行着手するため、区域設定を変則的な形状に変更した。以下で述べる県調査区及び保存対象区域をその後設定し、最終的な発掘調査区割は第4図のとおりとなった。

#### 県道区域調査と保存区域

当工事区域内を横断する南加賀道路粟津ルート敷設工事は、県事業関連調査となるため、石川県教育委員会の分担となり、当初は財団法人石川県埋蔵文化財センターが実施することとなっていた。しかし、市調査区を分断する形で道路区調査が行われると、作業効率が悪く、加えて広い範囲にわたって多くの遺構が分断されることとなり、遺跡の調査・整理を進める上で悪条件となることが予想された。このため、遺跡評価において最も影響が少ないと判断される南端区域を道路区代替地として設定したが、平成10年度以降、道路施工事業が市へ移管されることとなったため、県調査区域は代替地4,300㎡から2,900㎡へと縮減された（E地区。既に発掘調査報告書は刊行済み。（財）石川県埋蔵文化財センター『小松市額見町西遺跡』2000年）。

当該工事計画では第1図のとおり、当初は緑地公園区域を東側の既に削平された区域に設定していたが、当地の用地買収が難航し、最終的に事業区域外となったため、急遽、代替地設定の問題が浮上した。開発部局としては、北側の調整池区域付近に設定変更案を出したが、教育委員会は未調査区域内での緑地公園区域設定をする案、つまりは遺跡の一部を緑地として現状保存する案を提出した。西側の柴山湯に面する区域（約2,500㎡）は埋土が厚く、遺跡の残りもよいと判断し、現状保存区域に選定した。開発部局との調整においては、当地の遺存状態のよさ、遺物包含層の厚さなどから見て、調査経費、調査期間に通常以上を要することを説明し、現状保存が有効であることを説いた。その結果、当地は緑地公園用地に選定され、現状保存されることとなった。ただ、その後の隣接地調査によって、当地は遺跡の縁辺にあたり、遺物包含層は遺存するものの、遺構分布は比較的希薄であるという理解に達した。なお、以後の調査経過については、次節のとおりである。

## 第2節 発掘調査作業の経過

### 1. 試掘調査

#### 《調査体制》

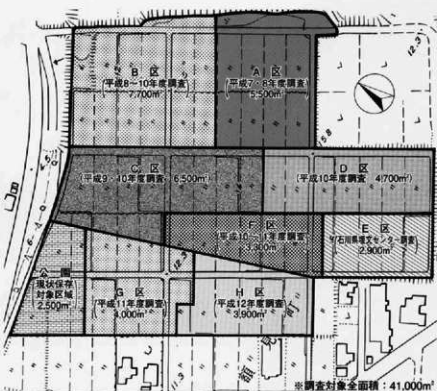
調査主体：小松市教育委員会 文化課 埋蔵文化財調査室

事務局：山崎昭（埋蔵文化財調査室 室長）・荒木和浩（同 主幹）

調査担当：坂下義規（同 調査員）・川畑謙二（同 調査員）

#### 《作業経過》

平成7年5月30日に現地試掘調査に着手。同年6月1日までに全ての作業を完了する。



第4図 額見町遺跡発掘調査区地区割図 (1 / 2,500)

## 2. A地区の発掘調査

### 〈調査体制〉

調査主体：小松市教育委員会 文化課 埋蔵文化財調査室

事務局：平成7年度 山崎昭（埋蔵文化財調査室 室長）・荒木和浩（同 主幹）

森山幸太郎（土工振興課 課長）・山崎博雄（同 参事）・大田啓文（同 主査）

平成8年度 街道孝志（埋蔵文化財調査室 室長）・小西隆子（同 室長補佐）

調査担当：望月精司（同 主査）

発掘調査作業員（測量補助員）：坂野直哉（埋蔵文化財調査室 臨時職員）・谷口佳代・田中勝美・柿崎とも

発掘調査作業員（掘削作業員）：小松市シルバー人材センター会員及び地元有志他29名

### 〈作業経過〉

平成7年8月18日、文化財保護法第98条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知を、市教育長名で、文化庁長官へ提出し（発教文埋第27号）、平成7年9月20日にA地区の調査事業に着手する（調査対象面積5,500㎡）。同年9月26日にパワーショベルを使用し、調査区域の表土除去を重機により開始する。10月2日、調査区域内のグリッド杭打ち（調査区に任意の5mメッシュ）作業を調査担当者の測量により打設。翌日から上層にて確認される遺構（以下、上面遺構とする）のプラン確認と遺構掘削を併行で開始する。10月31日、調査区域内上面遺構を全て掘削し、遺構平面図（1/40）作成を開始する。上面遺構は調査途中段階で、遺物等から近代以降（明治時代後半から昭和初期）に掘り込まれた開墾等の遺構であることが判明したため、擾乱という位置づけに変更し、遺構という認定からは除外して扱うこととする。ただし、遺構平面図と完掘後の全景写真は記録として残すこととし、11月29日に空中写真撮影（株）太陽測地社の協力により撮影）を実施する。

11月28日、上面遺構より下層に存在する遺物包含層の掘削を開始する。12月20日をもって、平成7年度現地調査は中止し、現場の越冬作業を行う。平成8年度事業は土地管理が小松市土地開発公社となったため、4月1日付けで小松市土地開発公社と小松市との間に受託契約を締結し、串・額見土地区画整理用地内埋蔵文化財発掘調査事業として事業費49,000,000円で事業着手する。現地調査を平成8年4月22日に再開し、遺物包含層の掘り下げと遺構プラン確認作業を実施する。同年4月25日以降は、上記作業と併行して遺構埋土の掘削作業を



写真1 A地区上層の近代遺構完掘後の全景航空写真（（株）太陽測地社提供）



開始。また、随時、掘削遺構の土層断面図・写真記録、部分遺構・遺物出土平面図・写真記録等、関連作業を行ってゆく。最終の遺構平面図、全体図、全景遺構写真記録は、航空写真測量図化業務において一括して行うため、それまでの作業は、個別遺構ごとに随時行ってゆくこととする。平成8年5月7日、SI02 検出のカマド遺構形状が通常のものと異なり、L字形を呈するものであることが判明し、オンドル状遺構と言われる渡米系カマドの可能性が高まる。5月15日、SI13においてもL字形カマドが確認され、渡米系カマドをもつ堅穴建物が複数存在する可能性が高まる。6月4日、地元校下の月津小学校6年生児童22名が遺跡見学する。7月11日、A区の南西側区域の主要遺構掘削がほぼ完了したため、堅穴建物を主体とした遺構分布状況全景写真を撮影する。7月15日、この頃から遺構平面図・断面図作成、遺構全景写真撮影を個別に行い、完了したものをから床下の掘り方遺構掘り下げを順次行ってゆく。7月18日、「北陸初のL字形カマド発見」という題で報道機関へ記者発表を行う。新聞社、テレビ局等7社の取材を受け、即日報道される。7月19日、鳥松大学文学部教授渡辺貞幸氏来跡。7月20日、額見町遺跡発掘調査現場見学会を開催し、遺跡の一般公開を実施。地域住民を中心に70名の参加を得る。また、同日、渡米系カマドや朝鮮半島系遺跡に詳しい岡山理科大学人文学部助教亀田修一氏、(財)滋賀県文化財保護協会松室孝樹氏の来跡を得て、当遺跡、当遺構の評価に関するコメントをいただく。7月25日、

立命館大学文学部助教榎木立雅朗氏、7月29日には國學院大學文学部教授鈴木靖民氏、國學院大學栃木短期大学酒寄雅史氏が来跡するなど、研究者の注目を集める。8月19日、北陸中日新聞の取材を受ける。9月5日、A区の堅穴建物はほぼ全ての掘削を終了し、当地区でのL字形カマド付堅穴建物数は7軒を超えるものと予想される。9月18日、松陽校下老人会の見学会。10月7日、埼玉県埋蔵文化財調査事業団中村倉司氏、赤熊浩一氏来跡。10月12日、小松市教育委員会主催市内文化財めぐり参加者見学。10月21日、調査区内の遺構掘削、個別遺構図、個別写真撮影をほぼ完了し、航空写真測量のための全体精査作業を開始する。10月30日、航空写真測量を実施。以降、11月26日まで、B地区の調査と併行しながら、遺構略図作成、掘立柱建物跡の柱穴並び検診作業を



記者発表風景



### 堅穴式住居跡に4件

【小松市】小松市立命館大学文学部助教榎木立雅朗氏が、小松市立命館大学文学部助教榎木立雅朗氏、7月29日には國學院大學文学部教授鈴木靖民氏、國學院大學栃木短期大学酒寄雅史氏が来跡するなど、研究者の注目を集める。8月19日、北陸中日新聞の取材を受ける。9月5日、A区の堅穴建物はほぼ全ての掘削を終了し、当地区でのL字形カマド付堅穴建物数は7軒を超えるものと予想される。9月18日、松陽校下老人会の見学会。10月7日、埼玉県埋蔵文化財調査事業団中村倉司氏、赤熊浩一氏来跡。10月12日、小松市教育委員会主催市内文化財めぐり参加者見学。10月21日、調査区内の遺構掘削、個別遺構図、個別写真撮影をほぼ完了し、航空写真測量のための全体精査作業を開始する。10月30日、航空写真測量を実施。以降、11月26日まで、B地区の調査と併行しながら、遺構略図作成、掘立柱建物跡の柱穴並び検診作業を



北陸中日新聞  
平成8年7月21日朝刊

第5図 額見町遺跡記者発表と報道記事

実施する。12月5日、アサヒグラフの1996年の古代史発掘総まくりの取材を受ける。本日を以って、A地区全ての作業を完了する。

### 3. B地区の発掘調査

#### (調査体制)

調査主体：小松市教育委員会  
 文化課 埋蔵文化財調査室  
 事務局：平成8・9年度 街道孝志  
 (埋蔵文化財調査室 室長)・  
 小西隆子 (同 室長補佐)  
 平成10年度 石田文雄  
 (埋蔵文化財調査室 室長)・  
 小西隆子 (同 室長補佐)  
 調査担当：望月精司 (同 主査)  
 調査補助：大橋由美子 (同 調査員)・  
 岩本信一 (同 調査員)

発掘調査作業員 (測量補助員)：谷口佳代・柿崎とも

発掘調査作業員 (掘削作業員)：小松市シルバー人材センター会員及び地元有志他29名

#### (作業経過)

平成8年11月1日、文化財保護法第98条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知を、市教育長名で、文化庁長官へ提出し (発教文理第43号)、平成8年11月1日にB地区 (調査対象面積7,700㎡) 調査事業に着手する (平成8年度まではA地区継続受託事業として実施)。同年11月5日よりパワーショベルを使用し、調査区域の表土除去を開始する。この際、A地区の調査経験から旧表土も表土として除去し、古代包含層の上面まで極力機械掘削する。11月19日、調査区域内のグリッド枕打ち (調査区に任意の5mメッシュ) 作業を調査担当者の測量により実施する。翌日から機械により削り残した旧表土部を人力掘り下げ、古代包含層上面まで出す作業を開始する。12月13日より古代包含層上面にてプラン確認作業を実施し、遺構検出がなければ包含層掘り下げを南側から順次実施してゆく。12月17日、本日で平成8年度事業に伴う発掘調査を完了。平成9年3月31日に精算額37,725,350円の委託事業執行結果報告書を提出する。平成9年4月1日、平成9年度事業として、小松市土地開発公社と小松市の間で受託契約を締結し、事業費53,000,000円で委託事業に着手する。4月14日、現地調査作業を再開する。4月24日、さ〜た-34・35G Fで広範囲な古代末土器溜まり層検出し、これをB地区上層土器溜まりとして遺物を出土状態のまま残しながら掘り下げ調査する。4月25日、遺構プラン確認で、A地区同様に竪穴建物にL字形カマドが付設される状況を確認する。5月6日、月津小学校6年生児童36名が体験発掘を実施する。5月7日、上層土器溜まりにて、瀬見町遺跡で初の鍛冶炉跡2基と酸化被熱面数箇所を検出する。5月13日より、遺構プラン確認作業、包含層掘削作業と併行して検出した遺構埋土の掘削作業を開始する。また、随時、掘削遺構の土層断面図・写真記録、部分遺構・遺物出土平面図・写真記録等、関連作業を行ってゆく。最終の遺構平面図、全体図、全景遺構写真記録は、航空写真測量図化業務において一括して行うため、それまでの作業は、個別遺構ごとに随時行ってゆくこととする。5月26日、上層土器溜まりにて、壁面酸化被熱した焼成土坑を検出する。遺構痕跡から土器焼成坑の可能性が高いと判断する。6月2日、本日より調査補佐として大橋由美子加わる。6月6日、鍛冶炉跡や鉄滓廃棄土坑などを複数検出し、鍛冶関連遺構の多数分布が予想されるようになる。炉の検出される面が黄色地山面よりもかなり高い黒色地山面であり、当時の生活面が黒色土面であったことが予想される。遺構検出を包含層上面で行うように今後努める。ただし、黒色地山と埋土との明確な識別は困難で、最終的なプラン確認面は黄色地山直上で行うこととする。7月18日、松東校下老人会の遺跡見学。7月24日、この頃から遺構平面図・断面図作成、遺構全景写真撮影を個別に行い、完了したものを床下の掘り方遺構掘り下げを順次行ってゆく。8月19日、松東中学校2年生2名体験学習で発掘調

「政治的な立場をなす歴史を背景に、過去の歴史を再考し、現代社会に活かす」という理念を掲げ、歴史を伝えるとともに、歴史を学ぶための場を提供している。また、歴史を伝えるだけでなく、歴史を学ぶための場を提供している。また、歴史を伝えるだけでなく、歴史を学ぶための場を提供している。また、歴史を伝えるだけでなく、歴史を学ぶための場を提供している。



第6図 アサヒグラフ「古代史総まくり1996」に掲載の遺跡紹介

査体験を行う。8月22日、徳島文理大学文学部教授石野博信氏、石川考古学研究会会長浜岡賢太郎氏来跡。9月3日、文化庁記念物課坂井秀弥調査官視察。また、同行の読売新聞記者の取材を受ける。9月10日、奈良国立文化財研究所浅井滋男氏、西山和宏氏が来跡する。10月7日、月津小学校6年生児童が、額見町遺跡採取粘土を使用し、土器製作、土器焼き体験を行う。10月14日、テレビ金沢の取材を受ける。10月27日、調査補佐として岩本信一が加わる。10月23日、A地区SI23で検出した壁周溝内に支柱を巡らす長方形竪穴建物を検出し、構造上の特徴を把握、壁立ち竪穴建物と名称付ける。12月25日、年内調査を本日までとし、平成10年1月13日より現場再開する。調査区内の遺構掘削、個別遺構図、個別写真撮影など未完了の部分を残したが、年度内航空写真測量を実施するため、影響のない範囲の作業を測量後にまわし、先行して、本日より、航空写真測量のための全体精査作業及び遺構略図作成、掘立柱建物跡の柱穴並び検証作業を開始する。予定していた航空写真測量が1月15日の大雨により延期されたため、16日をもって越冬し、3月に航空写真測量を実施することとする。3月11日、天候の安定を待って、現場を再開し、航空写真測量のための全体精査作業を開始する。3月25日、航空写真測量を実施。本日を以って平成9年度事業に伴う発掘調査を完了。平成10年3月31日に精算額48,241,116円の委託事業執行結果報告書を提出する。平成10年4月1日、平成10年度事業として、残りの作業部分について、小松市土地開発公社と小松市の間で受託契約を締結し、平成10年度事業費77,100,000円で委託事業に着手する。以降、6月29日まで、残りのSI72、SI73、SI76の調査を継続して行う。調査の優先順序から、SI72の調査のみを残して中断し、9月28日に作業再開する。9月30日、SI72の床面下掘り方土坑を掘り下げ、鍛冶炉を検出する。床面に掘り込まれた鍛冶炉で、当遺跡では時期のわかる最古の鍛冶炉が資料となる。10月1日、平面図の補足作成、レベリング作業を行い、B地区の調査作業全てを完了する。

#### 4. C地区の発掘調査

##### (調査体制)

調査主体：小松市教育委員会 文化課 埋蔵文化財調査室

事務局：石田文雄（埋蔵文化財調査室 室長）・小西隆子（同 室長補佐）

調査担当：望月精司（同 主査） 調査補佐：大橋由美子（同 調査員）

発掘調査作業員（測量補助員）：向出泰央（埋蔵文化財調査室 臨時職員）・谷口佳代・柿崎とも・木戸真由美・中村悦子・望月智美



月津小学校6年生児童の体験発掘



月津小学校6年生児童の土器作り体験  
(遺跡の粘土で土器作りをし、野焼きしました)

写真2 平成9年度の発掘調査現場普及活動

発掘調査作業員（掘削作業員）：小松市シルバー人材センター会員及び地元有志他 18 名

#### 〈作業経過〉

平成 10 年 3 月 23 日、平成 9 年度委託事業費の中でパワーショベルを使用し、調査区域の表土除去を開始する。25 日までに完了。平成 10 年 4 月 1 日、平成 10 年度事業として、小松市土地開発公社と小松市の間で受託契約を締結し、事業費 77,100,000 円で委託事業に着手する。平成 10 年 4 月 2 日、文化財保護法第 98 条の 2 第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知を、市教育長名で、文化庁長官へ提出し（発教文埋第 6 号）、平成 10 年 4 月 6 日に C 地区（調査対象面積 6,500 m<sup>2</sup>）の本格調査に着手する。同年 4 月 7 日より、C 地区内で既に削平を受けた区域の遺構残存状態を把握するため、遺構確認作業を実施し、その部分の検出遺構埋土掘削を実施する。4 月 20 日、調査区域内のグリッド杭打ち（調査区に任意の 5 m メッシュ）作業を測量業者委託により、実施する。翌日から機械により削り残した旧表土部を人力掘り下げ、古代包含層上面まで出す作業を開始する。4 月 21 日より古代包含層上面にてプラン確認作業を実施し、遺構検出がなければ包含層掘り下げを南側から順次実施してゆく。4 月 27 日、MRO テレビの取材を受ける。5 月 6 日より、遺構プラン確認作業、包含層掘削作業と併行して検出した遺構埋土の掘削作業を開始する。また、随時、掘削遺構の土層断面図・写真記録、部分遺構・遺物出土平面図・写真記録等、関連作業を行ってゆく。最終の遺構平面図、全体図、全景遺構写真記録は、航空写真測量図化業務において一括して行うため、それまでの作業は、個別遺構ごとに随時行なってゆくこととする。5 月 7 日、月津小学校 6 年生児童 45 名が体験発掘を行う。5 月 26 日、古代末の土師器とともに緑色凝灰岩製の管玉完成品が出土する。埋納土坑的なものと評価される。6 月 1 日、この頃から遺構平面図・断面図作成、遺構全景写真撮影を個別に行い、完了したのから床下の掘り方遺構掘り下げを順次行ってゆく。6 月 12 日、鍛冶に伴うと思われる木炭焼成土坑（製炭土坑）を検出する。7 月 1 日、韓国東国大学校史学科講師尹明植氏来跡。7 月 21 日、石川県すこやか教室生徒 5 名が体験発掘を行う。7 月 29 日、中世の積石塚状遺構（SX01）を検出し、精査。翌日、写真撮影、平面図、断面図作成を開始する。8 月 4 日から石の取り上げを開始し、8 月 9 日、下部遺構はなく、SX01 の調査を完了する。8 月 19 日、苗代小学校工藤千賀子先生発掘調査ボランティアに従事する。8 月 20 日、法政大学文学部小口雅史氏来跡。8 月 25 日、三重県齋宮歴史博物館上村安生氏来跡。9 月 14 日、北西半区域の調査がほぼ完了し、本日より、航空写真測量のための遺構略図作成、掘立柱建物跡の柱穴並び検証作業を開始する。10 月 1 日、韓国 KBS テレビの取材を受ける。10 月 3 日より、北西半区域の航空写真測量のための全体精査を行う。10 月 6 日、北西半区域の航空写真測量を実施し、翌日から南東半区域の遺構掘削作業に入る。随時、掘削遺構の土層断面図・写真記録、部分遺構・遺物出土平面図・写真記録等、関連作業を行ってゆく。10 月 20 日、この頃から遺構平面図・断面図作成、遺構全景写真撮影を個別に行い、完了したのから床下の掘り方遺構掘り下げを順次行ってゆく。10 月 30 日、SI98 で壁立ち堅穴建物構造に L 字形カマドが付設される事例を確認する。渡来系の堅穴建物として、4 本主柱立ち方形堅穴建物から壁支柱立ち長方形堅穴建物へと変化した様相が読み取れる。12 月 3 日、南東半区域の調査がほぼ完了し、本日より、航空写真測量のための遺構略図作成、掘立柱建物跡の柱穴並び検証作業を開始する。12 月 5 日より、南東半区域の航空写真測量のための全体精査を行う。12 月 13 日、南東半区域の航空写真測量を実施する。以降、補正調査を実施し、12 月 20 日、C 地区の発掘調査を完了する。平成 11 年 3 月 31 日に精算額 59,208,673 円の委託事業執行結果報告書を提出する。なお、当経費には同年度調査した D 地区の発掘調査経費と F 地区、B 地区の一部の経費及び出土品整理作業経費を含んでいる。

## 5. D 地区の発掘調査

### 〈調査体制〉

調査主体：小松市教育委員会 文化課 埋蔵文化財調査室

事務局：石田文雄（埋蔵文化財調査室 室長）・小西陸子（同 室長補佐）

調査担当：大橋由美子（同 調査員） 調査補佐：望月精司（同 主査）

発掘調査作業員（測量補助員）：向出泰央（埋蔵文化財調査室 臨時職員）・谷口佳代・柿崎とも・木戸真由美・中村悦子・望月智美

発掘調査作業員（掘削作業員）：小松市シルバー人材センター会員及び地元有志他 14 名

### 〈作業経過〉

平成10年4月2日、文化財保護法第98条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知を、市教育長名で、文化庁長官へ提出し（発教文理第6号）、平成10年6月1日にD地区（調査対象面積4,700㎡）の本格調査に着手する。同日よりパワーショベルを使用し、調査区域の表土除去を開始し、5日までに完了。同年6月8日より、機械により削り残した旧表土部を人力掘り下げ、古代包含層上面まで出す作業を開始する。6月17日より古代包含層上面にてプラン確認作業を実施し、遺構検出がなければ包含層掘り下げを順次実施してゆく。7月6日、調査区域内のグリッド杭打ち（調査区に任意の5mメッシュ）作業を測量業者委託により、実施。7月7日、遺構プラン確認作業、包含層掘削作業と併行して検出した遺構埋土の掘削作業を開始する。また、随時、掘削遺構の土層断面図・写真記録、部分遺構・遺物出土平面図・写真記録等、関連作業を行ってゆく。最終の遺構平面図、全体図、全景遺構写真記録は、航空写真測量図化業務において一括して行うため、それまでの作業は、個別遺構ごとに随時行ってゆくこととする。9月4日、この頃から遺構平面図・断面図作成、遺構全景写真撮影を個別に行う。9月11日に竪穴建物の床下調査を除き、ほぼ調査が完了。本日より、航空写真測量のための遺構略図作成、掘立柱建物跡の柱穴並び検証作業を開始。9月18日より、航空写真測量のための全体精査を行う。10月6日、C地区北西半区域とともにD地区航空写真測量を実施する。その後、調査担当者がB地区調査残務処理にまわったため、中断し、12月13日より調査再開する。以降、竪穴建物の床下掘り下げ及び掘り方の平面図、断面図、レベリング調査を行い、12月20日に全ての作業を完了する。なお、調査はC地区と併行して行ったため、調査中の遺跡公開、普及啓発作業、見学対応等はC地区と同様である。委託事業としてもC地区と一体的に行っているため、調査経費等もC地区事業の中に包括されている。

## 6. F地区の発掘調査

### 〈調査体制〉

調査主体：小松市教育委員会 文化課 埋蔵文化財調査室

事務局：北村孝志(埋蔵文化財調査室 室長)・小西陸子(同 参事)

調査総括：望月精司(同 主査)

調査担当：東地区 大橋由美子(同調査員)、西地区 岩本信一(同 調査員)

発掘調査作業員(測量補助員)：向出 泰央・坂利彦・稲石純子・松本敦子(以上埋蔵文化財調査室 臨時職員)・谷口佳代・宮川明美・本村美都子・山岸陽平・中村悦子・西島一代・久乘仁美

発掘調査作業員(掘削作業員)：小松市シルバー人材センター 会員及び地元有志他 26名

### 〈作業経過〉

平成10年10月12日、文化財保護法第98条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知を、市教育長名で、文化庁長官へ提出し（発教文理第72号）、平成10年10月12日にF地区（調査対象面積3,300㎡）の調査に着手する。同日よりパワーショベルを使用

第7図 地元地方紙に掲載された額見町遺跡の記事

し、調査区東区域の表土除去を開始し、14日までに完了。翌日より、機械により削り残した旧表土部を人力掘り下げ、古代包含層上面まで出す作業を開始する。10月19日、調査区東区域内のグリッド杭打ち（調査区に任意の5mメッシュ）作業を測量業者委託により実施、10月27日に完了する。10月23日にはこれらの作業を終え、C地区調査のため、作業を一時中断。11月29日より古代包含層上面にてプラン確認作業を実施し、遺構検出がなければ包含層掘り下げを順次実施してゆく。12月20日をもって、平成10年度現地調査は中止し、現場の越冬作業を行う。

平成11年4月1日、平成11年度事業として、小松市土地開発公社と小松市の間で受託契約を締結し、事業費79,000,000円で委託事業に着手する。平成11年度事業は、複数調査員による小調査区を設定し、同時併行で調査にあたる調査体制とし、望月がF、G地区全体の総括を行う形とする。4月12日に東地区の調査を再開し、遺物包含層の掘り下げと遺構プラン確認作業を実施してゆく。平成11年4月19日、西地区の表土除去をパワーショベルを使用して実施し、28日までに完了。これに併行して4月23日より、F西地区調査区域内のグリッド杭打ち（調査区に任意の5mメッシュ）作業を測量業者委託により、実施。5月10日に完了する。5月7日から機械により削り残した旧表土部を人力掘り下げ、古代包含層上面まで出す作業を開始する。西地区、東地区ともに、5月以降、古代包含層上面にてプラン確認作業を実施し、遺構検出がなければ包含層掘り下げを順次実施し、東地区では4月22日より、遺構プラン確認作業、包含層掘削作業と併行して検出した遺構埋土の掘削作業を開始する。また、随時、掘削遺構の土層断面図・写真記録、部分遺構・遺物出土平面図・写真記録等、関連作業を行ってゆく。最終の遺構平面図、全体図、全景遺構写真記録は、航空写真測量図化業務において一括して行うため、それまでの作業は、個別遺構ごとに随時行ってゆくこととする。5月10日、東地区で石川県埋蔵文化財センターがE地区で検出した道路状遺構の続きを確認し、調査に入る。6月1日、日末小学校6年生児童30名体験発掘。6月8日には、月津小学校6年生児童45名が体験発掘を行う。6月24日、北国新聞社の取材を受ける。7月20日、この頃から遺構平面図・断面図作成、遺構全景写真撮影を個別に行い、完了したものをから床下の掘り方遺構掘り下げを順次行ってゆく。7月26日、F西地区でも道路状遺構を確認する。9月1日、F西地区でオンドル状遺構付設大型堅穴建物の掘り下げを開始する。カマドも大型で、良好な遺存状態の資料である。11月26日、茨城県教育財団埋蔵文化財事務所瓦吹氏ら6名見学。10月17日、観見町町内会主催の観見町まつり事業の一環で、発掘現場説明会を開催する。50名を超える参加者を得る。12月4日、遺構掘削がほぼ完了し、本日より、航空写真測量のための遺構略図作成、掘立柱建物跡の柱穴並び検証作業、半蔵保留となっていたピットの完掘作業を開始する。12月28日、航空写真測量を残し、ほぼ全ての作業を完了するが、降雪や天候不順のため、越冬し、3月1日より作業を再開する。除雪作業を行い、3月6日からG地区とともに航空写真測量のための全体精査を行う。3月14日、航空写真測量を実施し、本日を以って、F地区の発掘調査を完了する。平成12年3月31日に精算額73,455,820円の委託事業執行結果報告書を提出する。なお、当経費には同年度調査したG地区の発掘調査経費及び出土品整理作業経費を含んでいる。

## 7. G地区の発掘調査

### 〈調査体制〉

調査主体：小松市教育委員会 文化課 埋蔵文化財調査室

事務局：北村孝志（埋蔵文化財調査室 室長）・小西隆子（同 参事） 調査総括：望月精司（同 主査）

調査担当：東1地区 津田隆志（同 学芸員）、東2地区 望月精司、西地区 福海貴子（同 調査員）

発掘調査作業員（測量補助員）：向出泰夫・坂利彦・稲石純子・松本敦子（以上埋蔵文化財調査室 臨時職員）・谷口佳代・宮川明美・本村美都子・山岸陽平・中村悦子・西島一代・久乘仁美

発掘調査作業員（掘削作業員）：小松市シルバー人材センター会員及び地元有志他29名

### 〈作業経過〉

平成11年5月13日、文化財保護法第98条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知を、市教育長名で、文化庁長官へ提出し（発教文埋第4号）、平成11年5月10日にG地区（調査対象面積4,000㎡）の調査に着手する。平成11年度事業は、複数調査員による小調査区を設定し、同時併行で調査にあたる調査体制とし、望月がF、G地区全体の総括を行う形としたが、途中からG東地区の一部を担当した。また、調査員の他の現場

の業務の関係から、G東地区の調査を先行し、G西地区の調査着手は7月からとなった。5月10日よりパワーショベルを使用し、調査区東地区の表土除去を開始し、18日までに完了。本日より、機械により削り残した旧表土部を人力掘り下げ、古代包含層上面まで出す作業を開始する。5月20日、調査区東地区内のグリッド杭打ち（調査区に任意の5mメッシュ）作業を測量業者委託により、実施する（完了6月1日）。5月26日より古代包含層上面にてプラン確認作業を実施し、遺構検出がなければ包含層掘り下げを順次実施してゆく。4月12日に東地区の調査を再開し、遺物包含層の掘り下げと遺構プラン確認作業を実施してゆく。6月、古代包含層上面にてプラン確認作業を実施し、遺構検出がなければ包含層掘り下げを順次実施し、6月中旬から、遺構プラン確認作業、包含層掘削作業と併行して検出した遺構埋土の掘削作業を開始する。6月21日、7世紀前半の堅穴建物で、カマドが戸外に直結するタイプを当遺跡では始めて確認する(SI114)。平成11年7月5日、西地区の表土除去をパワーショベルを使用して実施し、9日までに完了。これに併行して7月8日より、G西地区調査区内のグリッド杭打ち（調査区に任意の5mメッシュ）作業を測量業者委託により実施、7月15日をもって完了する。7月15日からG西地区の削り残した旧表土部を人力掘り下げ、古代包含層上面まで出す作業を開始する。7月21日、G西地区でも道路状遺構を確認する。これ以降、G西地区でも古代包含層上面にてプラン確認作業を実施し、遺構検出がなければ包含層掘り下げを順次実施する。遺構プラン確認作業、包含層掘削作業と併行して検出した遺構埋土の掘削作業を開始してゆく。8月以降、西地区、東地区ともに、随時、掘削遺構の土層断面図・写真記録、部分遺構・遺物出土平面図・写真記録等、関連作業を行ってゆく。最終の遺構平面図、全体図、全景遺構写真記録は、航空写真測量図化業務において一括して行うため、それまでの作業は、個別遺構ごとに随時行ってゆくこととする。9月10日、この頃から遺構平面図・断面図作成、遺構全景写真撮影を個別に行い、完了したものを床下の掘り方遺構掘り下げを順次行ってゆく。10月20日、G東地区の一部の調査を望月が担当する。



日東小学校6年生児童の体験発掘



願見町まつりでの遺跡・現地説明会

写真3 平成11年度の発掘調査現場普及活動

11月24日、G東地区の遺構掘削がほぼ完了し、本日より、航空写真測量のための遺構略図作成、掘立柱建物跡の柱穴並び検証作業、半歳保留となっていたピットの発掘作業を開始する。12月25日で当作業をほぼ完了する。G西地区も平成12年1月6日で作業を完了。本日を以って、航空写真測量のみを残し、ほぼ全ての作業を完了するが、降雪や天候不順のため、越冬し、3月1日より作業を再開する。除雪作業を行い、3月6日からF地区とともに航空写真測量のための全体精査を行う。3月14日、航空写真測量を実施し、本日を以って、G地区の発掘調査を完了する。なお、調査はF地区と併行して行ったため、調査中の遺跡公開、普及啓発作業、見学対応等はF地区と同様である。委託事業としてもF地区と一体的に行っているため、委託契約の締結や調査経費等、F地区に準じている。

## 8. H地区の発掘調査

### 《調査体制》

調査主体：小松市教育委員会

文化課 埋蔵文化財調査室

事務局：北村孝志(埋蔵文化財調査室長)

・河本勇三(同参事)

調査担当：望月精司(埋蔵文化財調査室主幹)

・大橋由美子(同調査員)

発掘調査作業員(測量補助員)：

坂利彦・松本敦子(以上埋蔵文化財調査室臨時職員)・谷口佳代

・宮川明美・塚原映織・南 健一

・森本雄介・中村悦子

発掘調査作業員(掘削作業員)：

小松市シルバー人材センター会員

及び地元有志他39名

### 《作業経過》

平成12年4月1日、平成12年度事業として、小松市土地開発公社と小松市の間で受託契約を締結し、事業費57,000,000円で委託事業に着手する。平成12年4月6日、地方自治法第245条の4第1項に基づく発掘調査報告(地方分権による法改正に伴い、文化財保護法第98条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知は不要となり、代わって今年度より、発掘調査報告の提出となった)を市教育長名



本郷小学校6年生児童の体験発掘



月津小学校6年生児童の体験発掘

写真4 平成12年度の発掘調査現場普及活動



で、石川県教育委員会へ提出し（発教文第6号）、平成12年4月10日にH地区（調査対象面積3,900㎡）の調査に着手する。

平成12年4月10日、パワーショベルを使用し、調査区域の表土除去を開始する。21日までに一部完了するが、5月8日から表土除去を再開し、5月18日で全ての表土除去作業を終了する。これと併行して、4月24日、調査区域内のグリッド杭打ち（調査区に任意の5mメッシュ）作業を測量業者委託により実施する。同年4月20日より、機械により削り残した旧表土部を人力掘り下げ、古代包含層上面まで出す作業を開始する。4月21日より既に包含層掘削の終わっているG地区側の部分から、プラン確認作業を実施し、遺構掘り下げ作業を開始する。5月8日、東側の包含層掘削作業に入る。5月16日、当遺跡では初の検出となる井戸（SE01）を確認し、掘削調査に入る。この頃から、遺構プラン確認作業、包含層掘削作業と併行して検出した遺構理土の掘削作業を本格的に開始する。また、随時、掘削遺構の土層断面図・写真記録、部分遺構・遺物出土平面図・写真記録等、関連作業を行ってゆく。最終の遺構平面図、全体図、全景遺構写真記録は、航空写真測量図化業務において一括して行うため、それまでの遺構平面図・断面図作成、遺構全景写真撮影作業は、個別遺構ごとに随時行ってゆくこととする。5月19日、木場小学校6年生児童25名が、5月23日には月津小学校6年生児童45名が体験発掘を行う。5月30日、井戸を新たに2基検出し、調査に入る。特に、SE03は張り出し部と覆い屋をもつ大型井戸で、周辺で灯明痕をもつ食器類が多く出土するなど、井戸祭祀を行った痕跡が見られる。なお、当遺跡検出の井戸3基であるが、台地上に築かれているため、井戸底は極めて深く、人力で掘れる限界深度の約3m程度で掘削を中断し、井戸底の調査は航空写真測量が完了してから行うこととする。6月20日、SJ70 鍛冶炉、7月17日にはSJ65 鍛冶炉を検出する。SJ65 鍛冶炉は銅滓も出土するなど、良好な炉床をもつ鍛冶炉である。8月1日、東側の石川県埋蔵文化財センター検出の道路状遺構の続きであるSD23の調査を開始する。9月1日、や20・21Gr付近で大規模な土器廃棄遺構を確認する。土器溜まり5としたこの遺構からは、多くの貯蔵具が出土しており、完形も多い。9月28日、主な遺構の掘り下げ作業が完了したため、本日より、航空写真測量のための遺構略図作成、掘立建物跡の柱穴並び検証作業を開始する。10月16日より、航空写真測量のための全体精査を開始し、10月19日、航空写真測量を実施する。10月24日、調査を再開し、井戸の掘り下げ調査、航空写真測量後の補足調査を実施する。10月30日、3基の井戸について、井戸底の人力掘削が不可能であったため、パワーショベルを使用した掘り下げ調査を行う。調査員が随時井戸掘削土内の土の状況と出土遺物の状況を確認しながら、井戸底近くまで徐々に掘り下げてゆく方法をとる。11月10日、SE03で井戸側材を検出したため、井戸側を残しながら、側面掘り方から掘削する方法をとる。11月14日、SE03の井戸側材の掘り下げと精査を行う。その結果、当井戸側材は井戸の下底近くのみ遺存しているものであることがわかる。11月15日、3基の井戸を完掘し、全景写真と平面図、断面図作成を順次行う。11月20日、SE03の平面図作成完了し、井戸側材の取り外し作業を行う。全ての井戸の調査を完了し、重機械による井戸の埋め戻し作業を行う。11月29日、全ての作業を完了し、H地区発掘調査及び額見町遺跡発掘調査を11月30日をもって完了とする。平成12年12月5日、額見町遺跡発掘調査事業の現地調査完了の通知を小松市土地開発公社へ提出する（発教文第100号）。平成13年3月30日に精算額52,426,705円の委託事業執行結果報告書を提出する。なお、当経費には平成12年度出土品整理作業経費を含んでいる。

### 第3節 出土品整理作業の経過

#### 〔出土品整理体制〕

作業主体：小松市教育委員会 文化課 埋蔵文化財調査室

事務局：平成12年度以前は発掘調査体制と同じ。

平成13年度 森田征三（埋蔵文化財調査室長）・河本勇三（同担当参事）

平成14年度 森田征三（埋蔵文化財調査室長）・本田一幸（同次長）

平成15年度 白井正夫（埋蔵文化財調査室長）・南次代（同主査）

平成16年度 白井正夫（埋蔵文化財調査室長）・埴田容子（同臨時職員）

平成17年度 西英一（埋蔵文化財調査室長）・埴田容子（同臨時職員）

出土品整理担当：望月精司（埋蔵文化財調査室主査～参事） 整理補佐：大橋（西田）由美子（同調査員）

出土品整理作業員（遺物洗浄・注記・接合・復元・計測集計等作業）：谷口佳代・柿崎由香・上田（井上）綾・  
 柿田康子・津曲優子・東久美子・松本敦子・宮川明美・吉田征可・駒澤美穂・寺本洋昭・  
 鶴田奈子・山口美子・国本久美子・上口広子・石浦保子・山崎千春・柿崎とも他35名

出土品整理作業員（遺物実測・トレース作業）：谷口佳代・柿田康子・鬼頭（江波）主・山崎直子・国本久美子・  
 上口広子・山崎千春・奥出桂子

### 〈作業経過〉

平成9年度 平成9年5月、出土品整理作業を発掘調査現場事務所にて開始する。本年度作業は、主にA地区の出土品洗浄、注記、分類作業を行う。なお、額見町遺跡より出土した鉄製品について、腐食防止のための脱塩処理、樹脂含浸等保存処理を専門業者委託で実施する。今年度は鉄鎌など8点の金属製品を委託料699,930円で行う。平成10年2月14日、額見町遺跡A地区発掘調査成果を一般向けに解説した概要報告書を刊行する（単・額見地区土地区画整理事業関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書一―）。

また、同年3月、額見町遺跡発掘調査成果を『加能史料研究』第10号に紹介する（望月精司1998「額見町遺跡とオンドル状遺構」『加能史料研究』第10号 加能史料研究会）。

平成10年度 平成10年4月、昨年度に継続して出土品整理作業を発掘調査現場事務所にて実施する。A地区出土遺物の注記、分類作業、B地区出土遺物の洗浄、注記、分類作業、加えてC地区出土遺物の洗浄作業も行う。平成11年1月、石川考古学研究会において、額見町遺跡の調査成果に注目した『オンドルのある村～小松市額見町遺跡と古代の北陸～』と題するシンポジウムが企画され、当席上で発掘調査成果を報告する。3月8日、出土品整理作業が本格化することに伴い、新規に発掘調査現場事務所隣接して出土品整理作業用仮設建物を借り上げする。3月31日、額

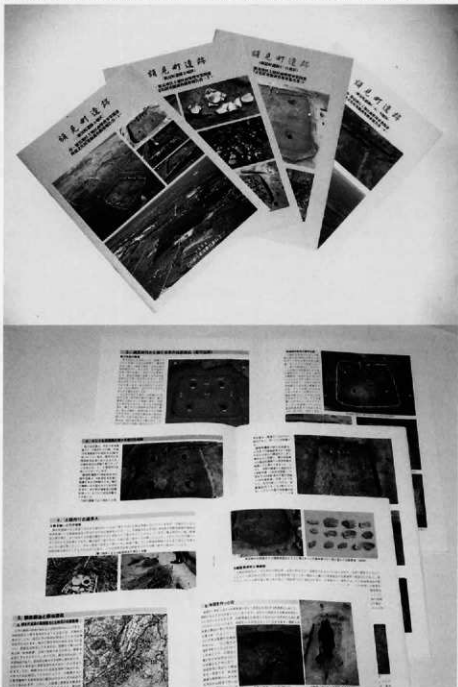


写真5 一般向けに刊行した額見町遺跡の発掘調査概要報告書

見町遺跡B地区発掘調査概要報告書（中・額見地区土地区画整理事業関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書—2—）を刊行する。

**平成11年度** 平成11年4月、昨年度に継続して出土品整理作業を発掘調査現場にて実施する。C・D・F地区の出土遺物洗浄と注記作業、並びに今年度からはA地区出土土器の接合、復元、数量計測作業を行う。なお、B・C地区より出土した銅鈴等20点の金属製品保存処理業務を専門業者に委託して実施する（委託料446,250円）。平成12年2月、当遺跡の発掘調査成果を日本歴史学会編『日本歴史』に報告する（望月精司「小松市額見町遺跡の調査—北陸の古代村落と渡来人の役割—」『日本歴史』621号 吉川弘文館）。同年3月31日、額見町遺跡C・D地区発掘調査概要報告書（中・額見地区土地区画整理事業関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書—3—）を刊行する。

**平成12年度** 平成12年4月、昨年度に継続して出土品整理作業を発掘調査現場にて実施する。F・G・H地区の出土遺物洗浄と注記作業、並びにA・B地区出土土器の接合、復元、数量計測作業を行う。なお、本遺跡の発掘調査成果を正しく位置づけるための作業として、本年度はこれまで本遺跡から出土した資料の理化学分析業務を専門業者に委託して実施する。内容は遺跡出土品類の種別同定作業、木炭生産土坑に残された木炭樹種同定作業、遺跡より完全な形で出土した容器内土壌の理化学分析作業（容器の内容物遺存を確認する）、墓坑内遺存土壌の理化学分析作業（骨が発するリン酸含有を確認する）の4項目で、委託料は241,541円。平成12年9月16日、石川県立博物館と大韓民国国立全州博物館との共催で行われた日韓国際シンポジウム「飛鳥の王権とカガの渡来人」で「小松市額見町遺跡と飛鳥時代の渡来人」と題する報告を行う。平成13年3月31日、額見町遺跡F・G・H地区発掘調査概要報告書（中・額見地区土地区画整理事業関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書—4—）を刊行。本書をもってこれまでの一般向け概要報告書の刊行作業を完了する。

**平成13年度** 本年度も4月より、昨年度に継続して出土品整理作業を発掘調査現場で実施。H地区出土品の洗浄作業及びG・H地区の注記作業を実施する。しかし、額見町遺跡発掘調査の完了に伴って、産業団地造成工事が現場事務所まで進行し、移転を余儀なくされたため、6月18日をもって現地整理作業場を撤去し、埋蔵文化財調査室へ作業場を移動する。7月以降は、これまでのC・D・G地区出土遺物の注記、接合、復元、数量計測作業に加えて、A地区出土遺物の実測図作成作業を開始する。なお、F・G・H地区より出土した鉄鍋等19点の鉄製品保存処理業務及び漆器類1点の木製品保存処理業務、刀子等鉄製品4点の金属製品保存処理業務を総額777,000円で専門業者に委託して行う。

**平成14年度** 4月より、埋蔵文化財調査室においてC・F・G・H地区出土遺物の接合、復元、数量計測作業、A地区、H地区の出土土器実測作業を実施する。なお、F・G・H地区出土の鉄鏝等13点の鉄製品保存処理業務を498,750円で専門業者に委託して実施する。

**平成15年度** 4月より、埋蔵文化財調査室においてC地区出土遺物の接合、復元、数量計測作業を実施し、9月末をもって完了。本遺跡全資料の数量データ集計作業を10月に行う。C地区、F地区、G地区の出土土器実測作業を実施。A地区の遺構トレス作業を開始する。なお、G・H地区出土の鉄鏝等14点の鉄製品保存処理業務を617,400円で専門業者に委託して実施する。

**平成16年度** 4月より、埋蔵文化財調査室においてB地区、C地区、D地区の出土土器実測作業を実施。A地区の遺構トレス、出土土器トレス作業を行う。なお、本遺跡の鉄関連遺物の整理作業について、7月26～30日と2月21～25日の計10日間、製鉄関連遺跡調査研究の第一人者である穴澤義功氏を招き、整理指導を受ける。当指導に基づき、鉄関連遺物の分類、計測、集計作業、実測作業を実施する。また、その際に穴澤氏が抽出した8点の鉄関連遺物の化学分析調査を専門業者に委託し、委託料478,296円で実施する。

**平成17年度** 4月より、埋蔵文化財調査室においてB地区の出土土器実測作業を実施。A地区・D地区の出土土器トレス作業を行う。なお、昨年度に引き続き、鉄関連遺物の整理作業を5月9～13日の5日間、穴澤義功氏を招いて実施し、鉄関連遺物の分類、計測、集計作業、実測作業を行う。また、その際に抽出した22点の鉄関連遺物の化学分析調査を専門業者に委託し、委託料1,198,000円で実施する。発掘調査報告書作成のための図版作成、原稿作成を行い、平成18年3月、額見町遺跡の全体概要、A地区とD地区の調査成果報告をまとめた「額見町遺跡I（A地区・D地区の調査）—中・額見地区産業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1—」を刊行する。なお、次年度以降、平成20年度までに、計5冊の発掘調査報告書を分冊刊行してゆく。

## 第II章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

#### 第1項 遺跡の位置と小松市の地形

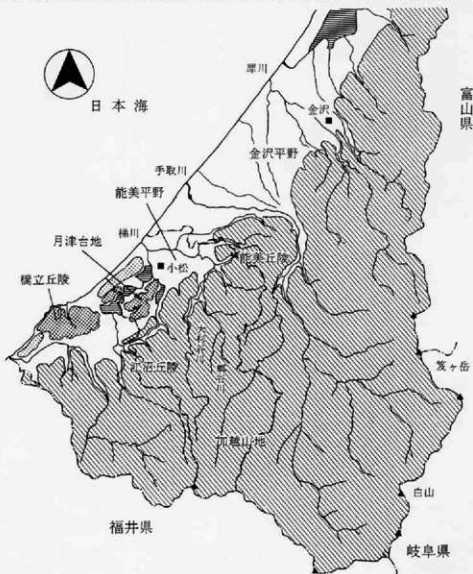
額見町遺跡の所在する石川県小松市は、人口11万人弱の県下南西部（南加賀地域）の中心都市である。市域は南北30km、東西18kmと、南北に長い形状で、北西端は日本海に面し、南端は市域最高峰の大日山を境に福井県勝山市に接する。市域の7割強が山地、丘陵地で、平野部は市域の3割に満たず、海岸線に沿って伸びる。平野部には、3つの大きな濁沼とその湿地帯が点在し、狭小な土地に市街地と農地が集中する。

市域の北部地区は、手取川扇状地の南縁と接して、梯川の沖積低地が広がる。また、その東側は、白山より連なる加越山地の北西縁をなす能美丘陵がとりまいている。沖積地を東流する梯川は、県下では手取川に次ぐ規模を持つ一級河川で、その流れは東側丘陵地を境に90度方向を変えて南へ遡上し、上流部の郷谷川・大杉谷川を介して、白山山系大日連峰に源を発する。

中南部地区は、かつては今江潟、木場潟、柴山潟の加賀三湖が存在する水郷地帯であったが、昭和27年に三湖国営干拓事業が開始され、昭和42年には今江潟が消滅。最大58mを有した柴山潟も西側の1/3を残して干拓された。加賀三湖はもともとは沿岸砂洲によって閉塞された、かつては日本海の入江であった潟湖であり、

今江潟のみが梯川河口で合流する前川によって海と連結していた。木場潟と柴山潟は直接海には繋がっておらず、今江潟と河川で繋がることでのみ、海へ出られたのである。各湖の周辺には沿岸砂洲閉塞後の潟湖積平野として広い低湿地帯が形成され、それに囲まれる形で標高10～20mの台地が形成される。

月津台地と呼ばれるこの台地は加越山地の西縁をなす江沼丘陵から派生した台地で、柴山潟西接部の台地や加賀市横立丘陵と同様の中位海成段丘として更新世堆積物をのせているが、横立丘陵に比べれば平坦な地形をしている。そして、今江潟・柴山潟と海岸線の間は、北を梯川、南を横立丘陵が区切る、完新世の大規模な海岸砂丘が形成されている。

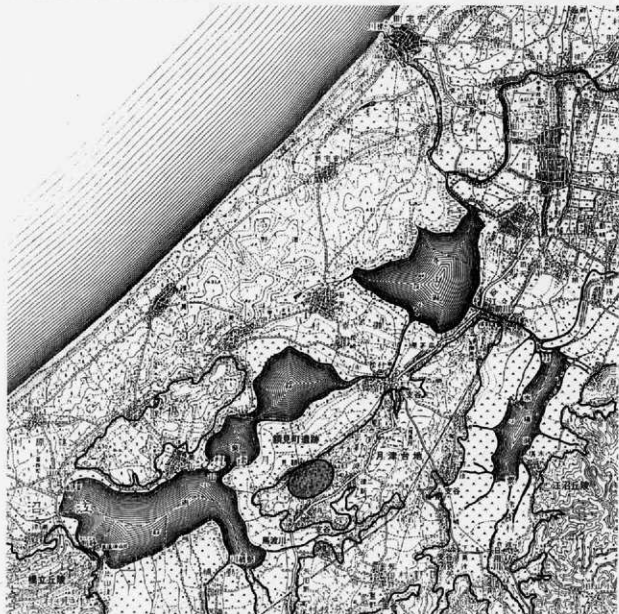


第8図 小松市周辺の地形（櫻田1992より転載）

## 第2項 月津台地と周辺の地形

額見町遺跡の立地する月津台地は、周辺が潟や湿地帯であったために、宅地や農地確保のための土地開発が早くから進んだ。谷が複雑に入り込む地形であったとは言え、台地上は大きな高低差が左程なく、比較的平坦地を形成しやすい土地であったために、台地上は頂部が削られ、谷部へ埋めるといった農地確保のための平地化工事が大規模に行われた。加えて、上層の粘土層下には良好な山砂層が厚く堆積し、潟湖の干拓用土砂に適していたために、串町から額見町境にかけての柴山潟に面する台地は、低湿部の高さまで大規模に削り取られてしまっていた。この工事において、多くの遺跡が消滅したものと予想され、かろうじて遺存している遺跡であっても、遺構上層が消滅していたり、遺跡の半分の区域が削り取られてしまっているなど、全域が残っているものは極めて稀な状況にある。

このため、遺跡の所在したであろう往時の地形を復元することは極めて困難である。ただ、明治42年に測量された地形図からおおまかではあるが、地形復元が可能である。月津台地は先にも述べたように、江沼丘陵から北側に高さを段階的に減じてゆく、丘陵部の突端的様相を呈するもので、北側は今江潟と木場潟を結ぶ前川に区切られている。東側の境は木場潟とその低湿地、そして日用川、西側の境は今江潟と柴山潟で、柴山潟側から谷が深く入り込んでいる。特に、柴山潟の南端に突出した部分からさらに南へと伸びる小河川から続く主谷が、加



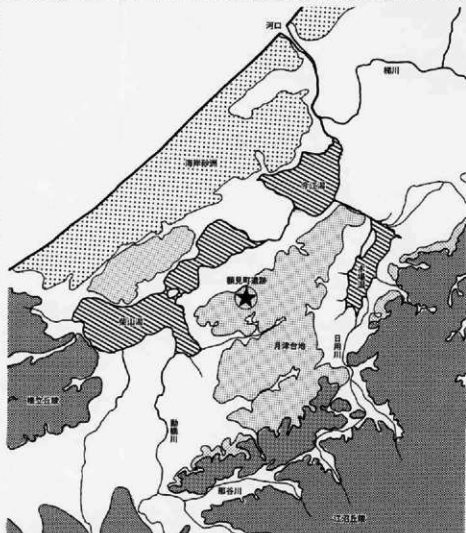
第9図 明治42年測量の月津台地周辺の地形図 (1/40,000)

賀市打越町から下栗津町へ深く切り込み、台地地形を丘陵から断絶させる間をもつ。地形としては続いてはいるが、この谷を境に遺跡分布も途切れており、ここまでが月津台地と理解することも可能である。月津台地には各湯から伸びる小河川によって開析谷が入ることは述べたとおりだが、入り江状に入り込む支谷は、これ以外にも今江湯と柴山湯とが繋がる部分の申町周辺で一箇所、柴山湯の南東端が伸びて馬渡川沿いに矢田野町周辺へ伸びる部分で一箇所確認される。また、木場湯側からも箕輪町や下栗津町で小支谷が各一箇所入るなど、入り江状の支谷が複数箇所あり、当時は湯や河川から船で支谷へ入り込むことが可能であったと予想される。このような入り江状の箇所には、月津や符津、栗津、戸津等の「津」を付した地名が付されており、湯と河川を使用した水上交通が重要な役割を担っていたものと予想されよう。

### 第3項 額見町遺跡の立地

額見町遺跡は、月津台地の中では、今江湯・柴山湯に面する部分、馬渡川によって東西に深く開析された支谷より北側に位置する北西側台地部分に立地する。一見、申町付近から柴山湯側に突出した舌状台地状でもあり、柴山湯と馬渡川に取り囲まれた独立台地状でもある。当舌状台地は、額見町遺跡の北東側が大規模な土砂採取によって台地自体を消失しているため、遺跡の北側への展開が不明であるが、台地西側には額見町西遺跡や茶臼山遺跡など、古代集落遺跡が存在しており、額見町遺跡を含め、古代集落遺跡が広く分布する台地であったと理解する。額見町西遺跡と額見町遺跡との間の周知の遺跡未確認区域においても、未発見遺跡の存在する可能性は高いと考えており、当舌状台地全域が古代集落遺跡群（額見町古代集落遺跡群）と位置づけられるものと考えている。額見町遺跡は遺跡範囲がかなり広く設定されているが、今回の調査で起伏に富んだ地形の制約から、比較的にコンパクトに建物が密集する分布のあり方が確認され、当遺跡は複数の集落の集合体的様相をもつものと考えられた。面的に広範囲な集落が広がる様相はなく、地形単位で形成された集落が密に分布する集落群であったと理解される。

湯や低湿地と台地の比高差が10m前後あるため、基本的に遺跡立地は台地上であるが、移動手段や生活の糧を湯や湿地帯に求めた可能性は高く、湯へ出る舟着き場的な施設が存在したものと予想される。昭和初期までは海縁に舟着き場があったと聞いており、舟着き場施設は必要不可欠であったろう。ただ、海縁で古代の遺跡を確認した事例はなく、弥生時代終末期から古墳時代前期に限られる。



第10図 月津台地と周辺の地形模式図

## 第2節 歴史的環境

### 第1項 古墳時代以前の遺跡様相

月津台地上に遺跡が出現するのは、旧石器時代終末期から縄文時代草創期と古く、以後断絶時期を挟みながら、縄文時代中期～後晩期、弥生時代後期～古墳時代中期、古墳時代後期（この時期のみ墓域化）、飛鳥時代～平安時代と続いている。中世以降の集落展開はほとんどなく、集落域は台地上から柴山沼の湖縁や動橋川流域へと移動していったものと理解される。以下に、古墳時代までの各時代の遺跡分布様相について述べる。

#### 1. 縄文時代以前

集落遺跡として確認されるのは縄文時代中期以後であるが、旧石器時代終末期～縄文時代草創期の石器が台地上から出土している。額見町遺跡<sup>1</sup>を始め、念仏林南A遺跡<sup>6</sup>、念仏林遺跡<sup>7</sup>などいずれも縄文時代中期集落遺跡の発掘調査で確認されたものであり、各遺跡で1～2点程度石器が出土するのみである。遺跡としての実態は不明といわざるを得ない。縄文時代前期も明確な集落遺跡の展開を見ないが、本場湖縁部の丘陵部で集落が確認される（大谷山貝塚<sup>11</sup>）。柴山沼の北西側湖縁に位置する柴山水底貝塚でも早期末からの遺跡を確認しており、小規模の遺跡が点在する様相であったと言える。縄文期集落の展開が明確に認められるのは、中期前葉以後で、月津台地に広く遺跡が展開する。本場湖沿いには台地北東端の今江町周辺に五郎座貝塚<sup>12</sup>や今江五丁目遺跡<sup>13</sup>、土百遺跡<sup>14</sup>、符津町周辺に符津A・B遺跡<sup>10</sup>が点在する。遺物は今江町と符津町の間に位置する矢崎町でも散布が確認されており、当期の集落遺跡が本場湖縁に点在する様相であったと見られる。一方、柴山沼の縁部には、額見神社前A遺跡<sup>3</sup>、茶白山A遺跡<sup>4</sup>、額見町遺跡<sup>1</sup>そして柴山沼の対岸に位置する柴山台地上にも柴山貝塚<sup>17</sup>や柴山出村遺跡<sup>16</sup>、山の上遺跡<sup>15</sup>が存在する。また、馬渡川に開析された支谷深く入り込む地点においても、念仏林遺跡<sup>7</sup>や念仏林南B遺跡<sup>8</sup>、念仏林南A遺跡<sup>6</sup>、矢田A遺跡<sup>9</sup>、月津新遺跡<sup>5</sup>があり、念仏林遺跡や念仏林南B遺跡では竪穴建物群を検出している。念仏林南A遺跡では落とし穴土坑群の確認もあり、当台地の中心的な位置づけがなされる。後期以降は月津台地での集落分布は疎らとなり、念仏林遺跡や額見町遺跡、串町遺跡<sup>2</sup>で遺物を確認するにとどまる。弥生時代中期まで、台地上では空白期を迎えており、弥生時代中期に位置づけられる柴山出村遺跡<sup>16</sup>の位置などから考えて、湖縁や動橋川流域の低地部へ集落移動したものと予想される。

#### 2. 弥生時代後期～古墳時代中期

弥生時代後期になると、再び台地上に集落遺跡が出現する。念仏林南A遺跡<sup>6</sup>、念仏林南B遺跡<sup>8</sup>、額見町西遺跡<sup>3</sup>、額見町神社前B遺跡<sup>2</sup>、鳥遺跡<sup>8</sup>など縄文期集落と重複ないしは近接して営まれる遺跡が多く、古墳時代中期までやや断続的ではあるが、営まれる傾向にある。小規模な単位ではあるが、竪穴建物群を構成して集落経



第11図 月津台地の古墳時代以前の遺跡分布 (1/75,000)

営される。古墳時代中期の須恵器出現前、突如として当地地から集落遺跡は姿を消し、後述するように古墳群の形成される、当地地は墓域としての位置づけがなされる時代へ向かう。

### 3. 古墳時代後期

月津台地での古墳築造は、白のはぞ古墳が埴輪祭祀を伴わないなどの理由から4世紀末に遡る可能性がある点や、木場潟沿いの新発見遺跡から5世紀中頃に遡る可能性を持つ古墳周溝状遺構が検出された点（符津C遺跡で当期の古墳周溝と思われる溝状遺構を検出している）などから、当地地に古墳が築造される年代を中期に遡って考える見方も提示されるようになってきているが、5世紀末を遡って築造される古墳が複数存在する様相が今後確認されるとは思い難く、月津台地上に古墳群が展開するのは5世紀末以降であるとするのはほぼ確実と言ってよいだろう。当地地に分布する古墳群は三湖台古墳群と呼称され、江沼因造である江沼臣族の墓域が、当期になって、江沼盆地周辺の丘陵上に分布する江沼古墳群から移動してきたものと見解が出されている。埴輪祭祀を伴い、木芯粘土室という特徴的な主体部をもつ古墳群であり、5世紀末から6世紀後葉のほぼ100年間に営まれる典型的な後期古墳群と見ている。追葬で、7世紀前葉まで下る可能性もあるが、当地の古墳が7世紀の集落域と重複している場合が多く、周溝遺物からみでは7世紀まで下ると判断することはできない。集落の遺物が古墳と全く重複する事例はないのだが、同時期の集落が隣接して営まれる様相は6世紀集落が当地に営まれていない状況から見ても、考え難い。次に述べる古代集落の成立をもって三湖台古墳群は終焉したものと見ておきたい。

当古墳群分布は、主に台地北東端の三湖台と呼称される台地突端部付近に位置する御幸塚古墳<sup>19</sup>、土百古墳<sup>17</sup>、狐山古墳<sup>18</sup>、矢崎B古墳<sup>16</sup>の三湖台グループ、台地の柴山潟沿いに位置する白のはぞ古墳<sup>1</sup>、左衛門殿古墳<sup>2</sup>、茶白山古墳<sup>3</sup>の柴山潟グループ、馬渡川からの開析谷沿いに立地する矢田新丸山古墳<sup>4</sup>、狐森古墳<sup>5</sup>、無名古墳<sup>6</sup>、借屋古墳群<sup>7</sup>、矢田野古墳群<sup>10</sup>、百人塚古墳<sup>11</sup>、念仏塚古墳<sup>8</sup>、念仏林古墳<sup>9</sup>、中村古墳<sup>12</sup>、矢田野エジリ古墳<sup>13</sup>、養輪塚古墳<sup>14</sup>、符津石山古墳<sup>15</sup>の馬渡川グループの3つに分けられる。大半の古墳が馬渡川グループに属し、時期も6世紀初頭から6世紀後葉の中で営まれる。豊富な埴輪群を伴う前方後円墳の矢田野エジリ古墳を始め、横穴石室内に家形石棺をもつ矢田新丸山古墳、家形石棺をもつ狐森古墳、切石積み横穴式石室をもつ符津石山古墳などが確認されており、矢田借屋古墳群から矢田野古墳群にかけては、前方後円墳を首長墳として周辺に小円墳を配置するような群集墳が約20基確認されている。当古墳群では埴輪樹立による周溝祭祀を行う古墳と須恵器供献による周溝祭祀を行う古墳と並存して築かれており、木芯粘土室を主体部とするものとそうでないものとの関係も含め、注目される。なお、木場潟の対岸に位置する丘陵部にも複数基の古墳が群在する木場古墳群<sup>20</sup>があり、さらなる古墳群展開の可能性も残されている。

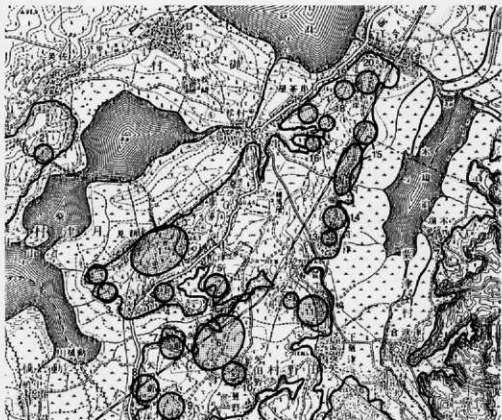
## 第2項 額見町遺跡と周辺の古代遺跡

### 1. 月津台地の古代集落遺跡分布

6世紀末から7世紀初頭の段階になって、古墳群が終焉を迎える時期、突如として月津台地上に集落遺跡が出現する。第12図の旧地形図に示したとおり、潟や支谷に面する部分に広く分布する。台地中央部分に遺跡の空白部があるが、これは当地が早い段階での土砂採取や運動公園、工場用地等の大規模開発を受けていたため、当地にも古代集落は存在していた可能性が大きい。最近の分布調査や試掘調査により、既に宅地化された地域などで新たな遺跡を確認する事例が増えており、台地上だけでも古代集落遺跡は20を数えるにいたった。詳細な時期を確認していない遺跡は半数近くあるが、確認できた遺跡のいずれもが、7世紀の中で出現しているのが特徴といえる。念仏林南A遺跡<sup>2</sup>のように、7世紀初頭に出現し、中葉には終焉する短期集落が額見町西遺跡<sup>2</sup>でも確認されるが、これは一般的ではなく、額見町遺跡<sup>1</sup>のように7世紀初頭の出現以降、7世紀後葉から8世紀前半に盛期を迎える遺跡（矢田野遺跡<sup>10</sup>）や7世紀中頃に出現し、8世紀前半から後半へと盛期を迎える遺跡（矢田新遺跡<sup>4</sup>、島遺跡<sup>11</sup>、栗師遺跡<sup>10</sup>）、7世紀後半の比較的短期に営まれる遺跡（符津C遺跡<sup>15</sup>、狐山遺跡<sup>18</sup>、今江五丁目遺跡<sup>20</sup>）など当地の集落群の全盛期は7世紀後半であったと言える。長期継続の集落遺跡は、比較的広域に展開する遺跡であることから考えると、集落単位が時期ごとに台地上を移動しながら営まれる大規模な集落群であったと理解される。現段階での地形と立地からのまとまりで見れば、額見町遺跡、額見町西遺跡、茶白山祭祀遺跡<sup>3</sup>の額見町古代集落遺跡群と名称付けた遺跡群のまとまり、月津A遺跡<sup>1</sup>、念仏林南A遺跡<sup>2</sup>、矢田野遺跡<sup>10</sup>、矢田B遺跡<sup>7</sup>、矢田新遺跡<sup>4</sup>、刀何理遺跡<sup>5</sup>、矢田野神社前遺跡<sup>16</sup>等の馬渡川の開析谷に分布する古代集落



群のまとまり、鳥遺跡、鳥B遺跡13、矢崎宮の下遺跡14、符津C遺跡、栗師遺跡、今江五丁目遺跡の木場潟沿岸部に立地する古代集落群のまとまり、狐山遺跡、串カンノヤマA遺跡17、串カンノヤマB遺跡18、串カンノヤマC遺跡16等の柴山潟と今江潟の連絡部から入り江状に入り込む支谷に分布する古代集落群のまとまりというように、大きくは4つのグループに括ることが可能である。



第12図 月津台地の古代集落遺跡分布 (1/50,000)

それら集落群の中でどのような集落の動向や展開を見せるのが今後の課題ではあるが、額見町古代集落遺跡群を検討することでその様相は概観できるものとする。

以上、集落の成立期等の共通要素に加えて、当集落遺跡群には鍛冶関連遺物や遺構または須恵器関連の窯道具や土器器地成遺構を伴うという共通要素がある。一つの遺跡で大量に検出されるということはないが、一定程度の生産を各集落で行っていたようで、特に木場潟沿岸部集落群では精錬滓の大量廃棄土坑が見られる等、大規模に精錬鍛冶を行った可能性を持つ。木場潟の対岸に存在する丘陵部の製鉄遺跡から舟で潟を渡り、次の工程の精錬を月津台地集落で行っていたものであろう。土器生産関連遺物や遺構の存在もあわせ、当地の集落遺跡群は、丘陵部生産遺跡群に関連する手工業生産関連集落群として、その多くが性格づけられるものと予想したい。また、額見町遺跡で検出されたオンドル状遺構付堅穴建物は、現在のところ、北陸では当台地でのみ検出されており、当遺跡以外にも額見町西遺跡や矢田野遺跡で確認している。月津台地上に展開する古代集落群は移民集落の性格が強かったと理解しているが、これら朝鮮系移民による集落以外にも、隣接地や越前等からの移民、在地の集落民の再編成という形もあつたと予想している。そのような移民主体に計画的に配置構成される集落という性格も当台地の集落遺跡群の重要な共通要素であると理解する。

これら古代集落は、遺跡によって終焉時期が異なるものの、概ね9世紀後半に衰退の様相を見せ、10世紀には終焉する。ただし、額見町遺跡では10世紀から11世紀前半も集落は存続し、11世紀後半から12世紀に大型建物群を伴った新たな集落展開を見せる。7世紀集落のような広範囲な分布を示すわけではないが、念仏林南A遺跡や刀何理遺跡、栗師遺跡など、月津台地に広く当期の遺跡が再度出現しており、新たな経営母体による集落再興が図られた時期と予想される。

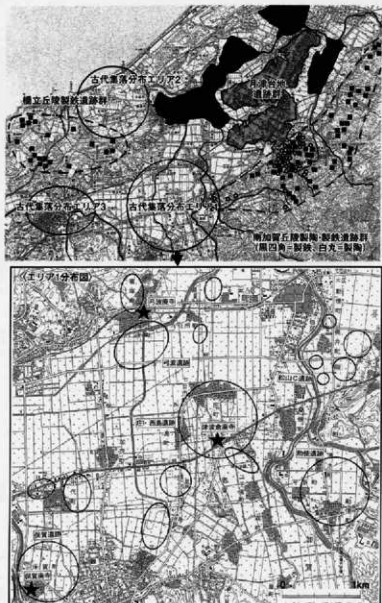
## 2. 月津台地周辺の古代生産遺跡群の動向

月津台地周辺には、北陸最大規模をもつ南加賀丘陵製陶・製鉄遺跡群と橋立丘陵製鉄遺跡群が存在する。前者は当台地の木場潟を挟んだ東側から南側にかけて伸びる江沼丘陵の平野部個低丘陵上に立地し、後者は柴山潟のさらに西方の橋立丘陵上に立地する。前者は当台地の南方に隣接する位置にあり、2~3km程度の距離に存在するのに対し、後者は月津台地西端からでも4km程度の距離があり、当台地集落群と直接的な関連性を見出せるの

は前者の南加賀丘陵製鉄・製陶遺跡群と考える。後者の橋立丘陵製鉄遺跡群は生産時期の主体を古代に置くことは間違いないとされているが、調査事例が少なく、分布様相も不明な部分が多いため、様相を述べるにはいたらぬ。南加賀製鉄・製陶遺跡群については、製陶遺跡群（南加賀窯跡群）が5世紀末に成立する。三洲台古墳群成立期に一致し、出現期は埴輪生産と須恵器生産を兼業しているのが特徴といえる。当遺跡群は古墳群供養のために、生産を開始した様相が強く、江沼国造層を经营主体としたお抱え窯的な存在であったと見ている。6世紀代も一定量の生産を継続し、能登地域も含め、比較的広域に須恵器供給する北陸の拠点窯の性格を有していた。それが7世紀初頭に、それまでの二ツ梨オオダニ地区から移動し、製陶遺跡群の北端部と南端部に分岐させる。生産量は倍増し、新たな生産技術を取り入れた生産形態を志向してゆく。生産には新たな工人集団を導入したものと理解され、大規模な生産組織再編が行われたと理解している。それまでの国造層を経営母体とするものから、律令制前段の地域支配政策の一翼を担う新興勢力が介入してきたものと理解する。この時期、丘陵上に製鉄遺跡群が成立してくる。生産の軌道が乗るのは7世紀後半であるが、集落遺跡出土の製鉄遺物の時期から考えても、前業には製鉄遺跡群が成立していたと見られる。製陶遺跡群の分布する地域よりも北側に主体を置いて、広い範囲に点在するような分布のあり方を示し、8世紀代には生産のピークを迎えるようである。製陶遺跡群は8世紀初頭に再び生産の場を二ツ梨オオダニ地区と戸津オオダニ地区へと移動し、生産体制に再度変化を見せる。8世紀前半代に生産の全盛期を迎え、後半には停滞気味となる点など、月津台地の集落群の動向に似る。ただ、製陶遺跡群は9世紀中頃から後半代に加賀立国に伴う国府・国分寺整備に関連して、生産の再興が図られており、10世紀中頃にかけて生産の最盛期を迎える。この時期の生産遺跡の動向は月津台地集落遺跡群との関連性が乏しく、生産再興が国衙権力のもとで行われたことを物語る。製陶遺跡群は10世紀後半に終焉するが、製鉄遺跡群は12世紀まで生産を継続する。中世への展開は現在のところ確認されておらず、9世紀以降の生産の動向も含め、依然として実態がよくわからない。

### 3. 月津台地周辺の古代集落遺跡分布と古代の行政単位

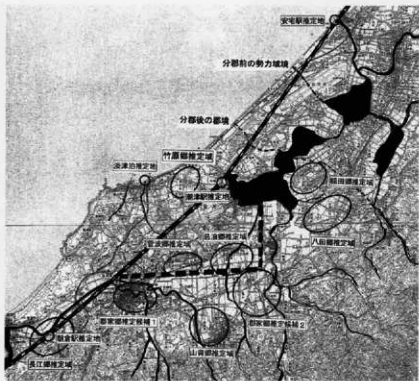
月津台地の北側は、梯川流域の古代集落遺跡群分布域まで古代遺跡分布が希薄で、集落のまとまりとしては当台地をもって区切られていたと言える。第14図に示したように弘仁14年(823)の江沼、能美の分郡時の郡境はその後の両郡の郡境から見て、額見町と野立町、島町と符津町のあたりで台地上を分断するように設定されていたと見られるが、分郡以前は台地北端までが一つの勢力圏内にあったと理解される。つまり、台地北端まで江沼勢力の地域であり、これら古代集落群は古代江沼郡



第13図 月津台地周辺の古代遺跡分布

内の郷に比定できるものと考えられる。現在に残る地名から額見町古代集落遺跡群は古代江沼郡の額田郷に、矢田町周辺の馬渡川開所谷集落群は八田郷に関連する集落と見る。古代集落遺跡の展開は当台地から南西部の江沼盆地周辺に広く展開しており、江沼郡の郷の大半は当盆地を中心に分布している。特に古代集落エリア1とした動橋川流域から八日市川、尾伏川、大聖寺川中流域の江沼盆地の広い平野部には、津波倉庵寺や弓波庵寺、保賀庵寺の白鳳期寺院が乱立し、江沼郡衙(西島・庄遺跡が推定遺跡)も当地に置かれていたと予想される。

掘立柱建物を主体とした集落群が数多く、面的に広がるように分布しており、西島町周辺の



第14図 古代江沼郡所在の郷・駅屋の位置(望月2005より転載)

集落が郡家郷、山代町から保賀町周辺の集落が山背郷、菅波町周辺の集落が菅波郷、弓波町周辺の集落が忌浪郷にそれぞれ関連する遺跡であると理解する。古墳時代に江沼国造であった江沼臣の本貫地であった地域であり、古代江沼郡の中核的地域であったことは間違いない。大聖寺川河口近くには朝倉駅、柴山湯の東端には漕津駅が存在し、それぞれ駅を包括しないし隣接する形で長江郷、竹原郷が営まれていたものと理解されている。竹原郷の中核的集落と位置付けられる篠原遺跡の西方には白鳳期寺院の宮地庵寺が存在し、ここにも在地勢力のまとまりがあった可能性を示す。江沼盆地内に存在する各郷の関係、在地勢力層、そして月津台地に展開する手工業生産関連の集落遺跡群、丘陵部生産遺跡群との関連性など、古代律令支配の中で複雑な在り方を示していたものだろう。当地の遺跡動向について、拙稿(望月2005)でまとめたことがあるので、詳細はそれを参照いただきたい。

### 第3項 額見町遺跡終焉後の様相

額見町遺跡や刀何理遺跡などで見られる11世紀後半から12世紀の集落再興は、大治2年(1127)を初見とする「鳥羽院領額田荘」の成立に関連すると見られる。しかしながら、額見町遺跡を始め、それらの遺跡は下っても12世紀末には終焉しており、それ以降月津台地上で営まれる遺跡は、額見町遺跡での14世紀代塚状遺構と、室町時代の御幸塚城跡の2例のみで、一般的な集落遺跡は見られなくなる。額田荘自体は15世紀まで存続するが、院領としては承久の乱(1221)頃までとの見方がなされている。また、実質的な支配権は12世紀末には既に領家-預所へ移行していたとの見方がなされており、荘園の経営権移譲が月津台地に営まれた集落群の衰退と移動をもたらした要因とも考えることが可能である。13世紀以降の集落遺跡は動橋川流域に点在する様子があり、荘園経営の中心は農業生産に適さない台地上から動橋川流域の平野部へ移動したものと考えられよう。

#### 参考文献

- 浅香山本 1978『江沼の庄と郷』[加賀市史 通史]上巻 加賀市  
 樫田 誠 1992『遺跡の環境』[矢田野エジリ古墳]小松市教育委員会  
 角川書店 1981『角川日本地名大辞典 17 石川』  
 望月精司 2005『古代の江沼を考える—集落遺跡の動向と生産遺跡、白鳳期寺院から—』[石川考古学会会誌]第48号  
 石川考古学会

### 第 Ⅲ 章 発掘調査の概要と調査・整理方法

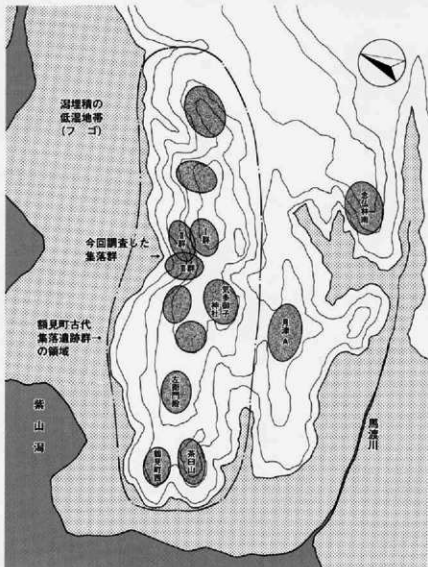
#### 第1節 額見町遺跡と発掘調査概要

##### 第1項 額見町遺跡と額見町古代集落遺跡群

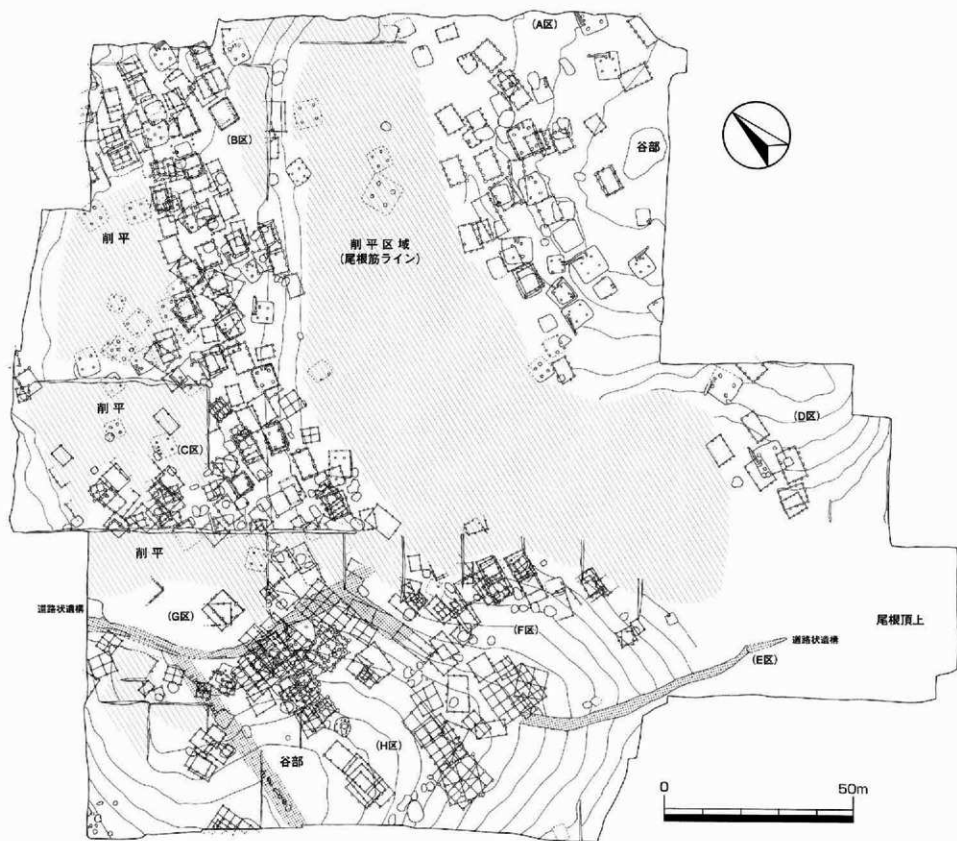
額見町遺跡は、長軸800m、短軸550mの北東方に長い遺跡分布を示す440,000㎡の広大な集落遺跡である。前章でも述べたが、当遺跡は幾つかの集落単位の集合体と位置づけられるものであり、大きくは額見町古代集落遺跡群と称したエリアが広義の額見町遺跡であると評価する。当地は昭和20年代の耕地整理により起伏に富んだ台地地形が階段状に整備され、その際に台地南西端の茶白山周辺が大きく削平、これが結果的に茶白山古墳や茶白山祭祀遺跡、茶白山遺跡などを発見する契機となった。昭和30年以降、加賀三湖干拓工事に伴い、額見町遺跡から北東部へ伸びる台地が大きく土砂採取により削平を受けたが、その際に、埋蔵文化財調査を行った形跡はなく、存在したであろう額見町遺跡の北側への統きは消滅することとなった。その後、大規模な開発等が行われなかったこともあり、当地は遺跡の発見が遅れ、昭和56年の石川県立埋蔵文化財センターが行った詳細分布調査まで、確認されずにあった。石川県立埋蔵文化財センターが平成8・9年度に発掘調査を行った額見町西遺跡にしても、平成7年に小松市埋蔵文化財調査室が地主の依頼によって行った試掘調査で新規発見した遺跡であり、当地地上にはほぼ同一時期の集落遺跡が点在していたものと予想される。明治42年及び昭和37年に行われた地形測量図をもとに、これまで近隣で調査してきた成果、遺存する地形等から額見町古代集落遺跡群の台地地形を復元したものが第15図である。当台地は柴山崗に面して北東方に細長く伸びる台地領域で（長軸2400m、短軸750m、約150haにも及ぶ極めて広大なもの）、馬渡川の開析谷に面する台地よりも若干小高い独立台地状の地形をなす。図に示した集落分布の予想図は、旧地形をもとに復元したもののだが、今回の調査所見で得たように、台地には複雑に小支谷や鞍部が入り込むため、さらに集落単位は分断されていた可能性が高い。今後の詳細な地形把握と分布調査により、遺跡分布の検討はなされなければならないが、既に削平を受けた地域は多く、これから検証することは困難を極めるだろう。

##### 第2項 平成7年度～12年度発掘調査概要

今回報告の額見町遺跡は、平成7年度から12年度までの6年間の発掘調査事業で、石川県立埋蔵文化財センター調査分も含め、38,500㎡を発掘調査した。当調査で検出した遺構は、堅穴建物119軒、掘立柱建物330棟、



第15図 額見町古代集落遺跡群の復元地形と集落分布予想 (1/20,000)



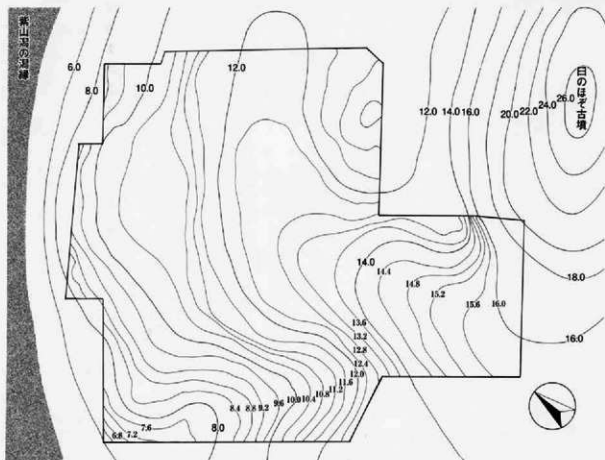
第16図 額見町道跡主要遺構配置図 (1/1,000)



土坑424基（うち土師器焼成土坑10基、製炭土坑7基、墓坑15基以上）、炉状遺構58基（うち鍛冶炉跡12基）、井戸3基、溝状遺構53条（うち道路状遺構5本）、集石遺構2基で、他に土器溜まり遺構を20箇所以上確認している。後述するように調査面積のかなりの部分が削平を受けているため、相当数の遺構がすでに消失した状態であり、その遺構密集度は極めて高かったものと判断される。14世紀頃に位置づけられる集石遺構2基と縄文時代に遡る可能性を持つ溝とし穴土坑1基以外は全て、7世紀前半から12世紀に位置づけられる古代遺構であり、多くの遺構が密集、重複する状況であった。

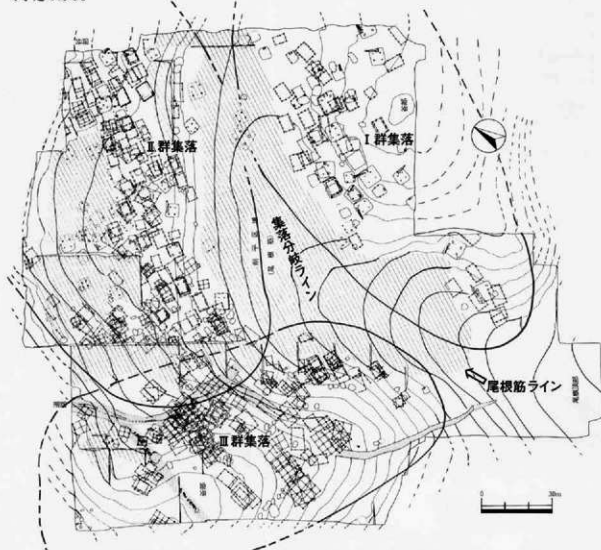
当地の旧地形を調査所見に基づいて作成したのが以下の図だが、調査区の東側に存在する標高26mの尾根頂上部（白のはぞ古墳立地）から南西側に張り出すようにして尾根筋が伸び、そこから北側へと緩く標高を減じる形で、馬の背状に尾根筋が伸びてゆく。白のはぞ古墳部分から馬の背状に北側へ伸びる尾根筋の間には谷部が入り込み、尾根頂部との比高差は15mにも及ぶ。谷部から見て、白のはぞ古墳の立地する尾根頂上は、見上げるような高さの丘の上に選地しており、集落立地に際して古墳を意識していたことは間違いない。また、北側へ馬の背状に伸びた尾根筋から北西方へは緩く張り出してテラス状の部分（テラス状部分の中央は鞍部が入ったように若干下がり気味となる）を形成しており、そこから柴山湯の湯縁へは比高差7m以上の急傾斜となる。この張り出し部の南西側では、柴山湯から南東側へと伸びてくる支谷から緩く谷部が入り込み、楕円形に広がる傾斜地を形成している。比高差6m程度を測る傾斜面で、南西側へ谷が広がっている。

極めて起伏に富んだ複雑な地形を呈していることが復元地形コンタから見て取れると思うのが、耕地整理においては尾根筋部分を削り取り、鞍部や谷部へ土砂を埋めるといった造成を行っており、約14,000㎡、調査面積の36%が削平による破壊を受けてしまっていた。一部深い遺構に関しては遺構下底部を残存させていたが、大半は遺構痕跡も残さない状態であり、特に尾根筋部分は遺構がどのような分布をしていたのか不明である。ただ、尾根筋でも削平を受けていない部分があり、その箇所での遺構分布の確認がないことや鞍部から尾根部へと徐々にではあるが、遺構密度が希薄となる傾向などから考えて、尾根筋上での遺構分布は低く、尾根筋が集落の分岐線で



第17図 額見町遺跡発掘調査区域内の復元地形 (1/2,000)

あった可能性が高い。当地は梁山湖から吹き込む風が強く、風当たりの強い尾根部分を選んで建物遺地していたことが予想され、建物立地は緩傾斜地を形成する谷部や鞍部を中心になされていたようである。鞍部や谷部は、黒色土堆積が厚く、粘土質の黄褐色土山が露出する尾根筋部分よりも比較的水捌けがよいという点も、建物遺地の要因であった可能性を持つ。尾根筋が倒平されているため、不確定要素ではあるが、以上を前提として集落分布を考えると、第18図に示した集落群構成となる。Ⅰ群集落はA地区とD地区で検出された建物群、Ⅱ群集落はB地区からC地区そしてF地区北端一部へと延びてゆく建物群、Ⅲ群集落はF地区、G地区、H地区に分布する谷部に展開する建物群である。Ⅰ群集落は7世紀前半の竪穴建物を中心として、7世紀代の建物が多く確認できる傾向が強く、7世紀主体に構成される集落と言える。Ⅱ群集落は7世紀前半から8世紀代までの長期にわたる集落と言えるが、主体は7世紀後半から8世紀前半に置くようである。Ⅲ群集落は7世紀前半からの建物もあるが、それはⅡ群集落からの延長で捉えられるもので、総じて8世紀以降に主体を置き、12世紀まで存続する集落と言える。特に11世紀後半から12世紀の建物群が明確に確認され、Ⅰ群、Ⅱ群集落では確認されていない井戸や道路状遺構、大量の土器廃棄遺構などを検出する。全ての遺構を検証したわけではないため、今後、報告する中で、細部を訂正してゆく可能性はあるが、大きくはこのような集落構成であったと理解している。これに基づいて、報告書刊行順も、調査年度順に補われずに、Ⅰ群集落であるA地区とD地区の報告を報告書Ⅰとした。次年度以降は、Ⅱ群集落であるB地区の報告を報告書Ⅱとして、C地区とF地区の報告を報告書Ⅲとして、G地区とH地区の報告を報告書Ⅳとして、鉄関連遺物報告と化学分析報告、考察を報告書Ⅴとして、順次刊行してゆく予定である。



第18図 額見町遺跡の集落のまとめり概念図



## 第2節 発掘調査方法と出土品整理方法

### 第1項 発掘調査方法

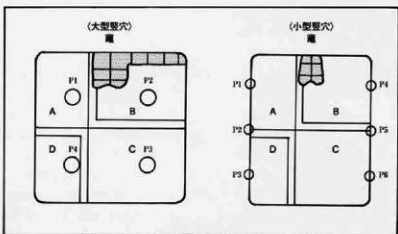
**調査区の設定** 平成7年に行った試掘調査結果をもとに、工事区域全域を調査対象として、調査に着手した。調査は現場事務所に近い箇所から順次奥へと進めていったもので、調査年度の古い順に初年度着手区をA地区、次年度地区をB地区、3年目から調査担当者が複数となったためC地区とD地区に分け、その年に調査を行った石川県調査分をE地区、翌年をF地区とG地区、最終年度をH地区とした。各年次の調査区画は耕地整理された田地区画に基づいて約5,000㎡程度を目安として設定したが、調査区域中央を走る県道敷設工事を先行してほしいという要望があったため、一部不規則な形状となった。

**表土除去とグリッド設定** 表土除去は、試掘調査の遺物包含層深度を参考に、パワーショベル等の重機械による掘削とした。耕地整理時に削平を受けていた部分と厚く盛り土工されていた部分とがあり、初年度のA地区では、削平部分では耕作土直下で、盛り土工部では盛り土直下で機械掘削を止めた。盛り土直下の旧表土上面から遺構確認作業を行い、遺構の掘削調査を行ったが、旧表土上面で確認される遺構は明治から昭和初期の近現代遺構のみで、古代遺構の確認はこの旧表土下であることが判明した。このため、B地区調査からは、旧表土（やや褐色味の強い黒褐色土）も重機械掘削で除去し、遺物包含層（黒褐色）の上面で止めることとした。表土除去後、グリッド杭の打設を行ったが、グリッド設定は座標軸に基づかず、調査区画の主軸にあわせて任意設定する形をとった。A区の南隅を基点として5mメッシュの格子区画を設定し、区画割は全調査区域の東隅を基点として、南西方向へ、ひらがなの「あ・い・う・え……」とし、北西方向へは、算用数字の「1・2・3・4……」とした。グリッド表記は、あ1Grなどとして、Gr内の細分は基本的にしなかった。A区グリッドは「あ」から「て」、14から29までで、D地区は「て」から「は」、4から22までとなる。B地区以降のグリッド打設にあたっては、A地区グリッドの基点となった南隅の格子杭を基準として、同じ軸の延長という形で設定していったものであり、全調査区域のグリッドは、全てA地区グリッドの延長で設定している。石川県立埋蔵文化財センターのグリッド杭についても、同様の設定とした。当グリッド杭は航空写真測量の際に、国家座標に基づく全体測量図に入れ、座標での位置づけが可能としてある。また、水準については、工事用の打設した水準点から調査区域内に標高移動して使用した。

**遺構確認と包含層の掘り下げ** 遺構上面を削平している部分を除いては、黄褐色土の粘質土地山の直上に褐色を呈する漸移層があり、そのさらに上層に黒色土地山が存在する。遺構の掘り込みは黒色土地山からが大半だが、当遺跡は遺構の重複が多く、先に存在した遺構の覆土から掘り込まれるものも多い。遺構掘り込みが極めて浅いが状態遺構の場合、遺物包含層の上面で確認できており、遺物包含層とここで呼称するものは基本的に遺構として把握できていないだけで、実際は土器溜まり遺構や土坑等内覆土遺物であると判断した。このため、遺構のプラン確認は遺物包含層上面から行っており（半月クワまたは移植ゴテ）、その段階で遺物出土が希薄であれば、明瞭な黒色地山の面まで掘り下げて（半月クワまたは一部剣先スコップ）、遺構プラン確認する形をとった。遺物出土が定見見られる場合、遺物は出土地点に残し、遺物出土のままとまりと覆土の状況により遺構プランを把握。随時、サブトレンチによる掘削調査により、覆土土層断面や遺物出土状況を把握し、遺構プランの立ち上がりと遺構覆土重複の具合を確認した。遺構と判断される部分の覆土を残した状態で、遺構の確認がなされなかった部分は明確な黒色地山面まで掘り下げてプラン確認する方法をとった。遺物包含層として、グリッドに帰属させて取り上げた遺物は、このような遺構覆土として把握できなかったものであり、下面に遺構覆土としての地山以外の土層が確認されなかった場合は、グリッド名に土器溜まりを付して、単なるグリッドとは別の扱いをしたものである。ただ、広範囲にこのような単に遺物を包含する層もあり、どこで土器溜まりと区別するか、判断に困ったため、広範囲にわたる土器溜まりというものも結果的には設定することとなった。

**竈穴建物の調査方法** 明瞭な竈穴遺構のプランが確認できずとも、広範囲に分布する遺物の状態から竈穴建物を想定し、優先的に調査した。当遺跡検出の竈穴建物のそのほとんどが作り付け竈を壁際に付設するものであったため、以下の手順で調査した。なお、遺構ナンバーはS101から検出順に付すこととし、遺跡全体での通し番号としている。①プラン確認段階で竈が位置する箇所を事前確認し、竈を避けて覆土断面ラインを極力建物主軸に沿うように十字に設定する。②覆土の掘り下げは竈の確認される箇所を除き、断面の十字ラインアゼに沿って竈内覆土を4分掘削。覆土の厚さと床面状況、覆土土層状況を事前確認するため、サブトレンチでの調査

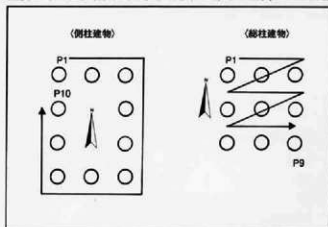
も併用する。その際、覆土の堆積状況と遺物取り上げの分層を行う。③覆土出土遺物の取り上げは500円硬貨大未満を覆土掘削段階で層位、地区割で取り上げ、それ以上の遺物は現位置に残し、床面まで掘削。遺物出土状況を日誌に所見や概略図を記録、スナップ写真併用、その後、層位と地区割で取り上げる。なお、遺物の中で下層から床面に残り残されているものや、覆土中層以上であっても、完形品や堅穴への投げ込み等が把握できるものは、遺物出土状況を



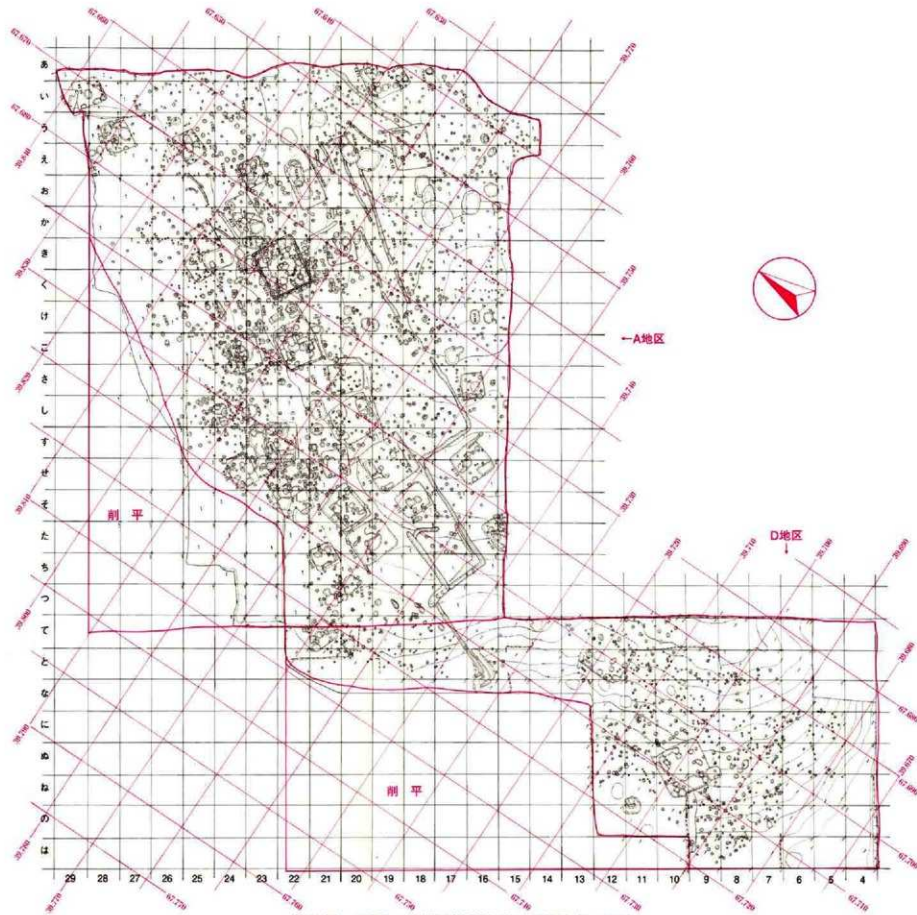
第19図 堅穴建物の土層断面ラインと区割

を平面図と必要であれば断面図(1/10、1/20)そして写真で記録し、層位で取り上げ。④覆土土層断面図作成、写真記録後、断面アゼをはずし、床面と壁立ち上がりを精査、検出。その後、竈の所在確認、堅穴内の柱穴、壁周溝、付属土坑等のプラン確認をする。柱穴のプラン確認については、堅穴内4本主柱から、壁際柱穴、壁外柱穴など様々あり、堅穴主軸上に平行して並ぶ柱穴列の検出に特に注意を払った。⑤堅穴内施設の遺構を柱穴等は半截掘り下げ、必要に応じて土層断面図を作成して、完掘する。⑥竈は竈主軸に沿い「キ」字断面ラインを設定。土層断面図録を行いながら、手前から順に覆土除去し、竈廃棄状態まで掘り上げる。出土遺物や竈部材は現位置に残し、出土状態を平面図と写真に記録。遺物取り上げ後に床面を精査し、竈内被熱状態を記録する。⑦堅穴建物の完掘状態を高所から全景写真撮影し、堅穴建物の竈等細部についても記録写真撮影する。⑧近隣のグリッド杭を基点として測量用メッシュ(1m)を設定し、平面図と断面図は1/20、竈平面図は1/10で作成。図には貼床の土質、床面の硬化範囲、竈の被熱や形状など記録する。⑨貼床の下層遺構検出のため、堅穴の覆土断面ラインと竈断面ライン、柱穴断面ラインに沿って、堅穴建物掘り方まで掘り下げる。出土遺物は掘り方土坑に帰属させて取り上げ、必要に応じて出土状況図を作成する。各土層断面図に掘り方土層を加筆して、床下遺構の状況を記録し、掘り方完掘後、全景写真を高所から撮影する。⑩航空写真測量にて、掘り方平面図を全体図とともに作成する。なお、必要に応じて、掘り方平面図を土器出土状況図とともに手実測で作成する場合もある。以上が堅穴建物の調査の流れであるが、堅穴建物に他の遺構が重複する場合は、重複箇所に土層断面観察用のラインを設定し、遺構の切り合い関係を把握する。また、堅穴建物内の覆土中に土坑等の掘り込みがある場合は、それが判明した段階で、遺物帰属を変更したが、堅穴覆土内に全く重複してしまっている遺構の大半は確認が困難で、堅穴建物覆土に帰属させて取り上げている場合が多い。

**掘立柱建物の調査方法** 当遺跡は遺構の重複が多く、掘立柱建物が他の遺構と全く重複せずに存在することは稀であり、1棟の柱穴の並びを把握することが重要であった。柱穴の大きさや形状、深さ、土質、出土土器の時期、並びなどの総合的判断から、全て現地にて建物の括りを行ったものであり、黒色土地山で検出できない場合は、黄褐色土地山まで下げて確認した。調査初年度であったA地区の調査段階では、どれだけ掘立柱建物を確認できたのか不安な部分も多い。掘立柱建物の調査においては、①掘立柱建物の柱穴並びを確認したうえで、北を向き、左奥の柱穴を起点として時計回りで柱穴番号をふる。遺構ナンバーはSB01から検出順に遺跡全体で通し番号を付すこととし、柱穴番号はSB01P1というようにする。②確認した柱穴の覆土を半截する。確認した段階また



第20図 掘立柱建物の柱穴番号



第21図 A地区・D地区の座標軸とグリッド配置 (1/600)



は掘り下げ過程で、明瞭に柱痕と掘り方に分かれる場合は柱痕のみ土層確認しながら完掘し、その状態を写真や図で記録する。その後、掘り方を半載する。③柱穴の土層堆積状態を略図と土層観察メモで記録し(必要に応じて土層断面図作成)、柱穴を完掘する。④柱穴の出土遺物は柱痕内か掘り方内か、掘り直し土中かなど出土位置を確認して、柱番号で随時取り上げるが、意識的に埋納したようなものは平面図と写真で記録する。⑤柱穴並びの形状を略図で記録し、断面図を作成する(1/20)。⑥航空写真測量で平面図を全体図とともに作成する。なお必要に応じて、平面図を手実測、高所からの全景写真撮影を行う場合もある。以上が掘立柱建物の調査の流れだが、柱穴が他の掘立柱建物の柱穴または他の遺構と重複する場合は、切り合い関係を把握しながら、掘り下げにあたることとなる。

**土坑の調査方法** 土坑には遺物を廃棄する土坑(特に遺物を大量廃棄する大型土坑は大型廃棄土坑と呼称する)、建物や何かの施設に付随する小型堅穴状の土坑、何かの遺体を埋葬した墓坑、土師器焼成土坑や製炭土坑などの被熱痕跡をもつ生産遺構、風倒木痕、遺物の出土が僅少な性格不明な土坑など様々であり、その調査方法や記録方法、出土遺物の取り上げも異なる。通常の遺物廃棄土坑の場合は、①長軸に沿って土層断面アゼを十字ないしは一文字に設定し、北を向いて堅穴建物同様の区割りをする。下底面までの深さをサブレンチで確認しながら、掘り下げる。②土層断面(1/10)を図と写真で記録した後、全体を完掘する。③出土遺物の随時取り上げ基準は堅穴建物同様だが、土坑の場合は現位置で残したものは、遺物量が一定程度ある場合、略図とスナップ写真とはせず、グリッド杭を起点とした1mメッシュ上に土坑平面図を兼ねた出土状況図(1/10)と写真で記録する。遺物取り上げは層位を記録。小型堅穴状の土坑も同様の方法。墓坑については、ほぼ同様の方法だが、土層断面図に加えて、完掘後の断面図を作成する場合があります。出土遺物によっては少量でも実面図を作成する。リン含有確認のため、土壌分析を行う場合もある。生産遺構は壁面被熱などのある場合、覆土掘削前の記録写真を撮影。被熱面の掘り過ぎに厳重注意しながら、堆積土と区別して掘り下げる。出土遺物は出土状況図と記録写真撮影。平面図と断面図には床面と壁面の被熱酸化、被熱炭化部位と被熱状態を記入し、被熱層の厚さも断ち割り調査で確認する。出土した炭化材の樹種同定や灰層のプラントオパール分析など、燃料材の分析を行う場合もある。風倒木痕や出土遺物の僅少な性格不明土坑については土層観察アゼを残して掘削調査するが、特に必要でない場合土層断面図作成は省略し、航空写真測量の平面図でのみ記録するにとどめる。なお、井戸についてもプラン確認当初は土坑として扱う場合が多く、土坑として掘り下げてゆく段階で井戸として調査方法を変更する場合がある。井戸は台地上から掘削が行われているため極めて深く、深度が3m以上を超えるものであったため、人力の掘削可能深度まで一度平面図と断面図を作成し、重機械で周辺を広く拡張して掘り下げながら、井戸底付近のみの調査を行うという方法をとった。井戸側材が検出された段階で、井戸側の側面と平面図、断面図を作成し、井戸底で最終的な断面図での底面記録と平面図作成を行うという方法を取った。井戸底調査は航空写真測量等全ての発掘調査作業完了後に実施した。遺構ナンバーは井戸のみSEとしたが、他は全てSKとし、検出順に遺跡全体の通し番号とした。

**炉状遺構の調査方法** 炉状遺構は特別な施設を伴わない小型の被熱遺構であり、高火度還元被熱した鍛冶炉と酸化被熱面を形成するだけのものがある。両者とも、遺構検出した時点で被熱炉床面が露出している場合が多く、遺構としての情報が乏しい。鍛冶炉は十字ないしは一文字に土層断面ラインを設定し、被熱炉床まで掘り下げる。土層断面図(1/10)、写真を記録し、完掘。その際の土砂は持ち帰り、水箪洗浄して、鍛造剥片や粒状滓の採集を図る。完掘状態を写真記録し、平面図と断面図(1/10)で記録する。その後、床面を断ち割りし、炉床の状況と下部施設(除湿施設)の調査を行う。酸化被熱炉床遺構は屋外炉や土器焼成遺構の可能性があるので、電線設状の構築部材(被熱石材や支脚など)の検出、周辺出土遺物の状態や廃棄された遺物状況を写真と平面図等で記録する。鍛冶炉同様、被熱床面の断ち割りも行う。遺構ナンバーはSJの通し番号とする。

**溝状遺構の調査方法** 当遺跡で確認された溝状遺構は、大溝と呼べるような大規模なものではなく、小規模な区画溝状のものが大半で、任意に横断面ラインを設定し、土層断面を記録しただけで、平面図は航空写真測量とした。横断面ごとに地区割を設定し、出土遺物は地区で取り上げた。溝状遺構のうち、下底面に土器碎片等が敷かれ硬化しているものや液板状遺構という連続土坑状の下底面を呈するものがあり、これに関しては道路状遺構とした。道路状遺構は硬化面と土器碎片等の底面状態、液板状遺構の痕跡などを写真と平面図で記録した。遺構ナンバーについては道路状遺構、溝状遺構の区別なく、全てSDの通し番号とした。

**土器溜まり遺構の調査方法** 土器溜まり遺構は、土坑という単位よりも広く土器集中が認められたものであり、特に地山等への明確な掘り込みを確認できなかったものである。大型の浅い土坑を遺構掘り込みとして確認できなかったものもあると思うが、多くは1G程度ないしはそれ以上の途切れ目のない広い範囲での土器集中であり、浅い凹みへの土器廃棄遺構と理解しておきたい。広範囲なものでは3Grにも及ぶものがあり、比較的時間のまとまった時期の遺物が廃棄されている。明確な遺構プランを特定できたものではなく、遺物出土状況を平面図（1/20、1/10）と写真で記録し、場合によっては土層断面図も記録した。なお、G地区の谷部深い部分で、全体的に遺物の出土が多い部分があり、遺構検出の少ない箇所があったが、これについては土器溜まりとして記録したものの、遺物集中にまともな欠き、時期幅がある点などから、包含層的な谷部への土器溜まりという位置付けが妥当と言える。同様のものはA地区の谷部でも確認されており、ここでは包含層としてグリッドで遺物取り上げをした。A地区の上記のもの以外は土器溜まり遺構としての位置付けを行っているが、特に遺構性の高いものに関しては、土器溜まり番号を付した（1号から5号まで）。ただ、大半はグリッドナンバーに土器溜まりを併記し、グリッドに帰属させる方法をとった。

**その他の遺構の調査方法** 当遺跡で検出したその他の遺構としては、他に集石遺構や独立柱建物の認定ができなかった小穴等がある。集石遺構は出土状況平面図と写真記録、石を取り外しての下部遺構の調査等を行った。遺構ナンバーはSXとした。小穴については、意識的な土器埋納や貝の廃棄を行うもののみ、写真や平面図記録を行ったが、他のものは出土遺物を取り上げただけで、航空写真測量での平面図記録にとどめた。遺構ナンバーはPとし、各地区別の通し番号とした。

## 第2項 出土遺物整理方法

額見町遺跡で出土した遺物は、室町時代頃の土師器皿数点と縄文時代以前に位置づけられる数十点の土器、石器がある以外は、全て7世紀から12世紀までの遺物である。出土量は遺物箱（内寸640×380×145mm）換算で約1,100箱あり、そのうち鉄器や鉄関連遺物40箱、砥石や台石、電石などの石製品15箱程度が存在する以外は、全て土器である。土器は須恵器と土師器及びその他の陶磁器類で、土師器が過半数を占める。

**1次整理作業** 当整理作業は、遺跡から取り上げた袋ごとに行う作業である。①洗浄（手洗い）。基本的に全ての遺物を洗浄。②注記（出土遺構等の地点をボスターカラーで記名、ニス塗布。この時点で袋ごとに接合可能な破片は接着剤で接合する。特殊な遺物や器種、口縁部破片はどのような細片でも注記するが、他のもので、接合に供しない細片については注記対象から除外し、袋ごと一括して出土地点と破片数記入したラベルを付す。③1次分類（材質、種別、機能により分類）。④鉄製品整理（錆化の進行する鉄製品について行う保存処理及び応急処置作業で、土の除去を行い、シリカゲルを入れたタッパーに密閉保管する。重要と判断される遺物から順に、脱塩+PEG樹脂含浸の保存処理を専門業者に委託して実施する）の順で作業を行う。2次整理作業の手順の都合上、遺物は種別に分けた上で、遺構順に遺物箱に収納し、2次整理作業へ移行する。

**2次整理作業** 遺跡全体での構成を見ながら行う出土品整理作業であるが、調査面積が広域であるため、調査地区を単位とした作業にとどめた。作業内容は接合から実測遺物抽出までの作業。土器等土製品と石器等石製品、鉄製品や鉄関連遺物の3種の材質があり、各種別で整理方法が異なる。

**《土器等土製品の整理》** ①全体接合（地区全体での接合作業であり、同一個体であるのかを確認のうえ、接着可能なものは接着剤で、接着困難なものは樹脂材による補強を行う）。当接合作業は1次分類後のものを須恵器食膳具（文房具類含む）、須恵器貯蔵具（調理具含む）、土師器食膳具、土師器煮炊具の順で接合するものである。遺構内接合に重点を置くが、遺構間接合の目立つ須恵器については、地区全体での接合を特に心がける。遺構間接合や遺構とグリッドとの接合のあったものは、遺構間接合の場合は破片の大きな方に帰属させ、グリッドや土器溜まり遺構との接合の場合は遺構に帰属させる。接合台帳を作成し、同一個体と認識したのものについても記録しておく。なお、通常の手順では、次に遺物復元に入るが、当遺跡では同一個体の破片同士に固定に樹脂材による復元を行う程度で、この段階での完全復元は行わない。②2次分類（各器種に分けた上で、類型分類、時期分類、部位分類を行うもの）。類型分類は器形分類や法量分類等、時期分類は可能な限りの時期分類、部位は口縁部、頸部、胴部、底部、脚部等の分類を行い、再度接合関係を確認しておく。③数量計測（2次分類に基づいて、分類項目ごとに口縁部計測法による残存率計測と底部片数、全破片数等を計測し、それを地区で集計

した表を作成する)。当作業は遺跡や地区または遺構での器種構成や時期のまとめ、遺構の時期帰属に不可欠の作業であり、整理作業の中で2次分類とともに重要な作業であると位置づける。④実測遺物抽出（数量計測したのち実測図作成用遺物を抽出）。遺物の残存度合いから均質に選択するのはなく、器種の偏りや特殊遺物、遺構帰属のために不可欠など諸処の要因により、小破片であっても必要であれば、実測遺物に選択する。

**（石器等石製品の整理）** 基本的には土製品と同様に、①全体接合、②2次分類、③数量計測、④実測遺物抽出の作業手順で行うが、②は種別分類程度、③は破片数計測のみを行う。

**（鉄製品及び鉄関連遺物）** 当遺跡は鍛冶関連遺構を伴うなど、鉄生産関連遺物が多数出土しており、その整理にあたっては、指導講師を穴澤義功氏に依頼し、直接的指示を受けて行った。鉄生産関連遺物を出土しない遺構から出土した鉄製品に関しては、実測遺物を整理担当者が抽出しただけであるが、鉄生産関連遺物を伴う鉄製品は、穴澤氏の指示に従っている。同氏の整理指導は5日間を1セットとして計3回受けており、その他にも担当者が個人的に指導を受けている。穴澤氏の鉄関連遺物の整理作業は、地区ごとに全資料を対象に鉄製品以外の資料を以下の手順で整理している。①含鉄品抽出（専用の金属探知機にてメタル反応のあった鉄塊系遺物、含鉄陶器、含鉄鉄滓、含鉄鉄滓を抽出）。②含鉄品計測（含鉄品を種別に細分類し、メタル反応度数計測、磁着度計測、重量計測を行い、整理カードに記入して遺物に添付する）。③銹化遺物整理（メタル反応のないものでも表面の銹吹き出しの強いものを銹化遺物として②同様のカード記入を行う）。④遺構ごとの種別分類（SI、SK、SJ、SE、SB、SD、土器溜まり、グリッドの順で鉄関連遺物を種別分類）。⑤鉄関連遺物構成配列（地区ごとに鉄関連遺物構成概要を示すため、構成図作成のための遺物抽出と配列作業を行う。この際に当構成図に鉄製品を加え、構成番号を通してふり、遺物に形成状態の方向を矢印で貼付する）。⑥鉄関連遺物の計測（構成番号順にメタル反応度数計測、磁着度計測、重量計測、規模計測を行い、整理カードに記入して遺物に添付する）。⑦金属分析用資料の抽出（鉄関連遺物の全体構成を見た上で分析調査用遺物を抽出し、分析項目を指定、分析資料番号を付す）。⑧構成図作成と観察表作成（鉄関連遺物構成図の略図を作成し、それに基づいた観察表を作成。その後、構成番号順に遺物箱に収納する。なお、当遺物は全て実測図作成対象となる）。⑨構成遺物以外の資料整理（鉄関連遺物構成用遺物以外のものは種別分類後重量計測し、各遺構及びグリッドの全体構成を集計する）。

以上、各種別の2次整理作業を記したが、出土品整理の中で最も重要な作業であり、整理担当者の整理方針によって、その作業内容は大きく異なるを理解している。当整理作業では何をもって遺跡の性格と位置付けを行うかを念頭に、単なる接合、復元、実測遺物抽出ではなく、遺跡の全体像の復元を心がけた。

**3次整理作業** 実測用に選別した遺物を報告書掲載するまでの整理作業であり、数量集計したものの整理作業も含む。

まずは、土器等土製品及び石製品についてだが①実測図作成、②観察表作成、③トレース、④図版作成、⑤写真用遺物復元という作業手順となる。①は考古学的手法による実測図の作成で、製作痕跡は実測図に反映し、使用痕跡は略図で付記する。なお、使用痕跡のうち、明確にその痕跡を残すものは、デジタルカメラにて記録写真を随時撮影しておく。実測図には土製品、石製品とも、器種（種別）、細分類名称、出土地点、法量（重量や容量の必要なものはそれぞれ付記）、焼成、色調、胎土（石材）、使用痕跡、特記事項を記入し、それをまとめたものが②の観察表である。実測図トレース、遺構ごとの出土遺物図版作成の後、写真掲載用遺物の抽出を行い、樹脂材等による完全復元作業を行う。最後に、2次整理作業段階で、数量計測した数値の整理、集計を行い、出土遺物構成表の作成を行って、当作業は完了する。なお、鉄生産関連遺物に含めない鉄製品について、実測図作成を行い、上記と同様の方法で報告書掲載への作業を行う。

次に、鉄生産関連遺物についてだが、分析資料については穴澤氏の直接指導に基づき、①実測図作成、②詳細観察表作成、③分析一覧表作成、④分析資料カード作成（実測図、詳細観察表、分析資料の3方からのカラー写真をカード化したもの）を行い、⑤分析調査業務を専門業者に委託する。分析資料以外の実測用の鉄関連構成遺物に関しては整理担当者の判断で⑥実測図作成、⑦観察表作成（資料観察所見と整理カードに基づき作成）、⑧トレース作業、⑨図版作成（鉄関連遺物のみで構成番号順に図版作成）、⑩鉄関連遺物構成図作成（構成略図に基づき図版作成）を行い、最後に⑪構成表と分布図作成（数量計測データをもとに構成表を作成し、遺跡内での種別分布図を作成する）を行って、作業完了となる。鉄生産関連遺物報告は、上述の遺物資料とは別に扱い、鉄生産関連遺物報告編として、金属分析調査報告とともに、報告書Vにおいて掲載する予定である。

## 第IV章 A地区とD地区で検出された古代遺構

### 第1節 A地区とD地区の遺構分布と層序

#### 第1項 遺構構成と分布の概要

遺跡概要でも述べたが、当遺跡は尾根筋部分が削平を受けており、A地区の調査区5,800㎡（文書上は5,500㎡だが、調査区実面積は当数値となる）のうち、875㎡が削平を受けて消失。D地区も同様に、削平は著しく、調査面積3,800㎡（文書上は4,700㎡だが、調査実面積は当数値となる）のうち、2,000㎡が削平で消失してしまっている。遺構の下層、基部は残存するものの、遺構上層が削り取られている区域はさらに広く、A地区では消失区域を含めると2,000㎡弱。D地区では2,800㎡が何らかの削平を受けている。削平箇所は遺構分布の比較的薄い区域であると予想しているものの、少なからず消失してしまった遺構があることは間違いない。以上のような保存状態の良好とは言い難い状況の中で、多数の遺構が検出されており、当遺跡の遺構密集度の高さを伺わせる。以下に、A地区、D地区の概要について述べる。

#### 1. A地区の遺構概要と建物分布

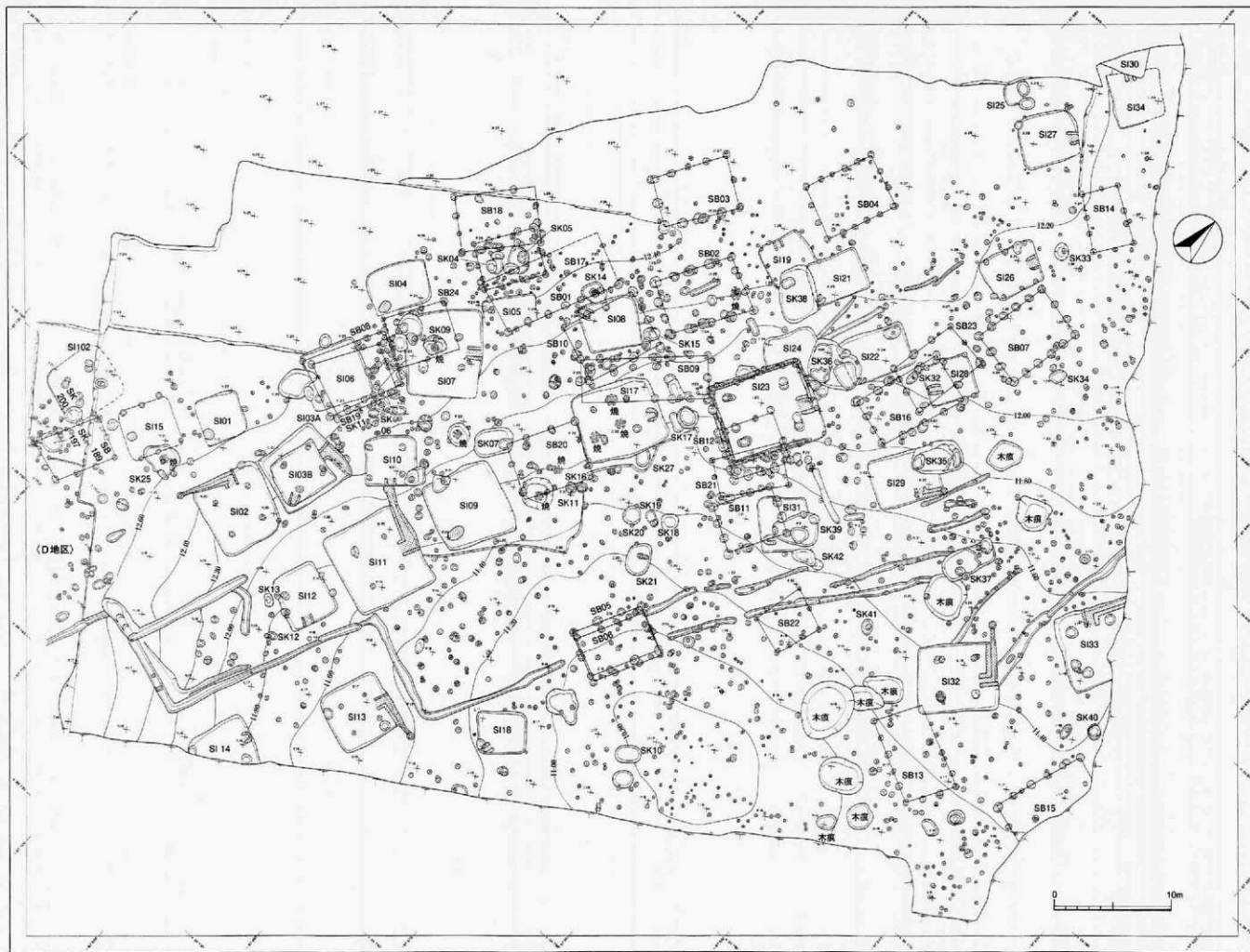
A地区で検出した遺構は、堅穴建物32軒（SI01からSI34まで遺構番号が付されているが、SI16は土坑SK11とSK16に、SI20は土坑SK38に変更となったため、2軒の堅穴建物は欠番となった。ただし、SI03は2軒の堅穴建物が重複しているため、堅穴建物は総計33軒となる）、掘立柱建物24棟、土坑42基（うち土器廃棄土坑は13基）、炉状遺構14箇所（被熱焼土面のみの確認であり、SJ番号は付しておらず、焼土遺構としたのみである）、溝状遺構20条、小規模な土器溜まり遺構6箇所、ほか小穴多数である。

堅穴建物は7世紀初頭から8世紀初頭までのものが大半で、8世紀中頃までのものは4軒程度と少ない。掘立柱建物は遺物をほとんど出土しない遺構が半数を占めるため、実態は不明だが、時期比定可能なものについては、7世紀から8世紀前半に主体がある。ただ、確実に8世紀後半以降、9世紀後葉に下る資料も確認されており、堅穴建物の消失後も掘立柱建物は存続するものと見られる。土坑は42基のうち、17基が遺物出土10点未満であるが、土器出土量100点以上を数える土坑は13基と多い。時期は7世紀代に収まるものが少なく、7世紀後葉から8世紀中頃にかけてのものが主体的である。8世紀後半以降のものは他の遺構同様少なく、特に土器を大量廃棄する大型土坑は8世紀前半代までのものである。掘立柱建物の動向と類似性をもつ。

以上のように、A地区遺構は、7世紀初頭から8世紀前半までのものが主体的で、8世紀後半以降、遺構数は激減するが、これは包含層遺物の時期別出土量の状況からも裏付けられる。時期帰属可能な須恵器食器類と土器の破片数からの割合換算だが、7世紀初頭から中頃までが12%、7世紀後半から8世紀前半までが71%、8世紀後半代が10%、9・10世紀が7%であり、特に10世紀に帰属できる遺物は少ない。建物が完全に移動してしまっただけとはいえないが、8世紀までが主要時期であろう。しかしながら、11～12世紀になると土器食器類を埋納するような小型ピットが複数存在し、包含層からの遺物出土も9・10世紀を確実に凌いでいる。当遺跡のH地区を中心に新たな展開を見せる古代末期の大型掘立柱建物群と連動した動きと捉えられよう。

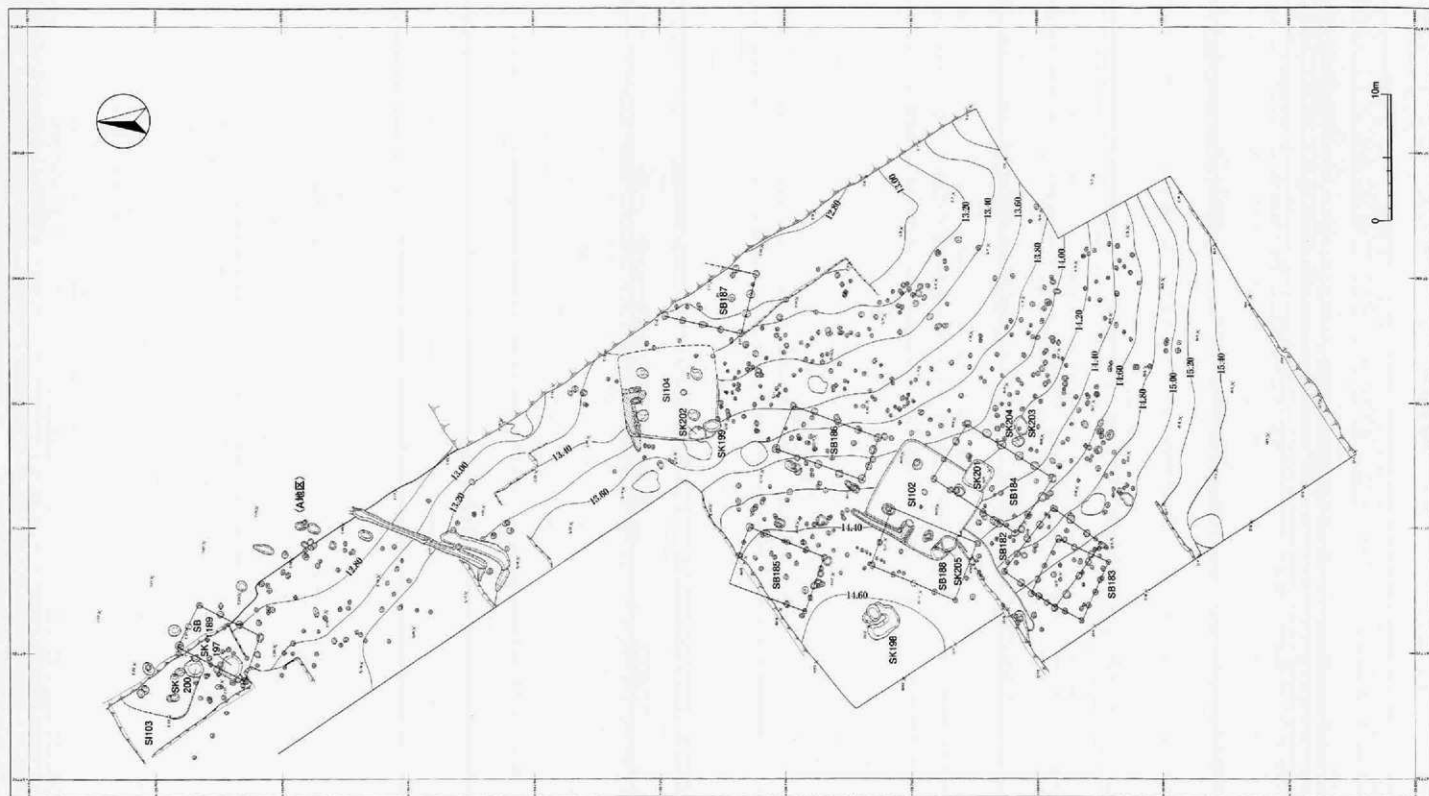
次に、堅穴建物、掘立柱建物の立地と建物分布の様相について概観する。建物の時期が7世紀初頭から8世紀中頃までと幅を持つものの、建物遺構の主軸は比較相とまどっており、主軸を北から東へ20度～30度の範囲で振っている。7世紀前半と7世紀後葉～8世紀前半とで主軸が東へとずらしてゆく傾向があり、9世紀以降の建物はさらに東へ振る傾向をもつ。建物の主軸はほぼ地形コンタラインにのった形であり、相関関係があると見えるが、コンタラインが方向を変えている部分でも建物主軸は他の建物と同様の軸を維持していることから（例えばSI12、SI14、SI32、SI33）、建物主軸を変えるほどの主要因とはならなかったと見る。建物遺構の重複に関しては、堅穴建物同士の重複が目立らず、完全に堅穴が重複する事例は、SI03で大型のオンドル状遺構併設堅穴建物Aから主軸をやや東へ振って小型堅穴建物Bが掘られる事例があるのみである。他は大型土坑を挟んで小型堅穴建物2軒が重なる事例と大型堅穴建物と小型堅穴、大型土坑とが重複する事例があるのみで、堅穴建物は意識的に重複を避けて建てられていたものと見られる。これに対し、掘立柱建物は堅穴建物の密集箇所や掘立柱建物同士で重複する事例が目立つ。実際には柱筋が把握できていないため、掘立柱建物としていないが、建物遺構の柱穴と思われるしっかりとした柱穴が、堅穴建物の密集する箇所にも多く存在する傾向がある。堅穴建物が終焉した時期以降に、堅穴建物と場所を重ねるようにして、掘立柱建物が建てられていた可能性を考えておきたい。





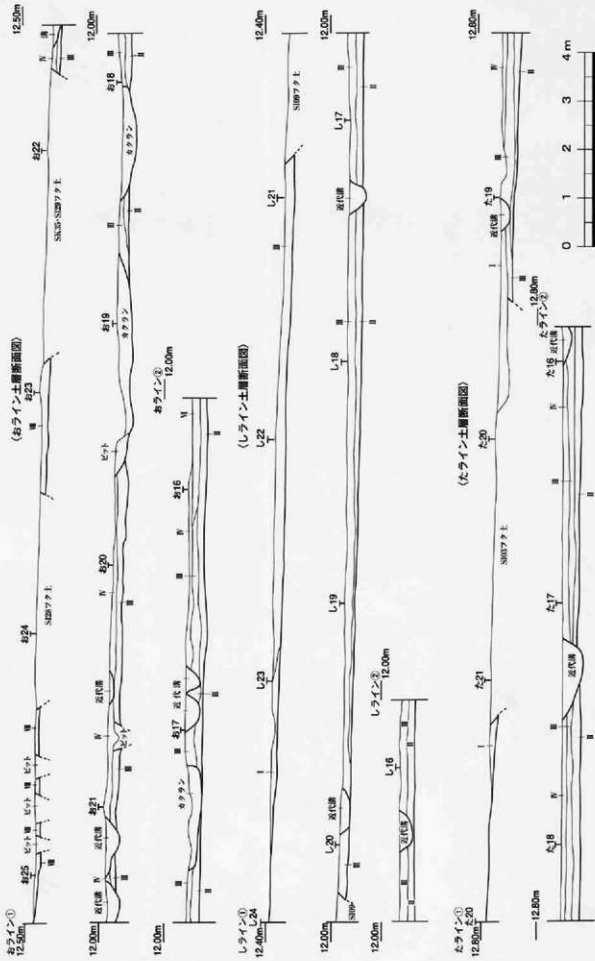
第22図 願見町遺跡A地区全体図(1/300)



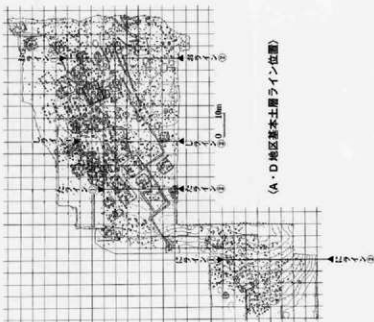


第23図 願見町遺跡D地区全体図(1/300)





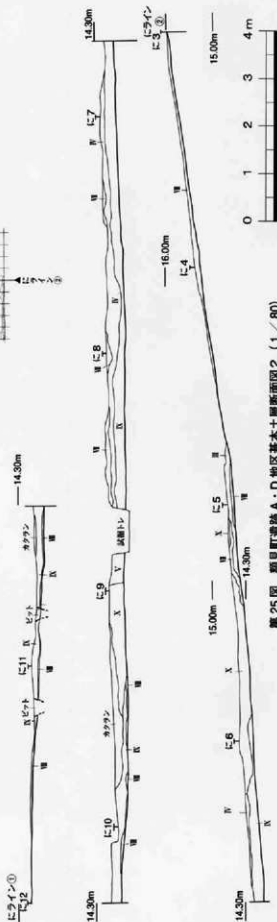
第24図 額見町遺跡A・D地区基本土層断面図1 (1/80)



**朝見町遺跡基本土層註**

- I層 黒褐色土 (10YR3.2/2) : 粘土小塊・黄褐色土粒少量含有。
- II層 黒色土 (10YR1.7/1) : 黄褐色土粒少量、粘土小塊・炭化物質含有。
- III層 黒色土 (10YR2/1) : 粘土塊・土層片を少量含む。礫山に墾する土。
- IV層 黒褐色土 (10YR3/2) : 粘土小塊・黄褐色土粒・炭化粒少量含有。
- IV'層 黒褐色土 (10YR3/2) : 粘土粒・炭化粒少量、黄土粒多量含有。
- V層 黒褐色土 (10YR3/2) : 黄褐色土粒・粘土小塊・炭化粒・土層片を多量に含有。礫山遺構物の埋土層の上。
- VI層 黒色土 (10YR2/1) : 黄褐色土粒・炭化粒・粘土小塊少量含有。
- VII層 暗褐色土 (7.5YR3/4) : 暗褐色土 (7.5YR2/3) を多量含む。砂質。
- VIII層 黒褐色土 (10YR2.2~2/1) : 黄褐色土粒多量、炭化粒少量含有。
- IX層 黒色土 (10YR1.7/1) : 土層の底点もなく、礫山土の可能性大い。
- X層 暗褐色土 (7.5YR1.7/2) : 土層の礫化土層。暗褐色土 (7.5YR2/3) と同圧。

(にライントラス断面図)



第25図 朝見町遺跡A・D地区基本土層断面図2 (1/80)

## 2. D地区の遺構概要と建物分布

D地区は相対的に建物遺構が少なく、竪穴建物3軒、掘立柱建物8棟に止まる。他の遺構は土坑7基、溝状遺構2条、ほか小穴多数あるが、A地区と異なり、この小穴に建物遺構の柱穴的なものは存在しない。竪穴建物は全て7世紀初頭から中頃までのもので、掘立柱建物はやや後出するものが多いが、それでも7世紀代にほぼおさまるものとみられる。土坑も遺物の確実なものは7世紀前半代にほぼ限られ、包含層遺物も7世紀初頭から中頃に位置づけられるものが90%を超える。当地区の遺構分布は竪穴建物の時期を中心とする7世紀初頭から中頃に主体を置き、8世紀以降は激減する状況であったと判断される。ただ、8世紀中頃に下る土器も少ないながらも確認できており、全く建物の分布が当地区からなくなったとは言えない。基本的にはA地区との関連の中で、一体的に建物分布を捉えるべき地区と考えている。当地区の東西両側の側平区域に分布したであろう建物の存在も含め、集落単位を大きく捉えてゆくことが必要であろう。

建物の分布や建物主軸については、A地区では確認できなかったような、ほぼ北に主軸を向けるSI104が確認される以外、A地区同様の、北から東へ20～30度振る建物主軸をもつ。地形コンタラインとはあまり関連性が見出せず、建物主軸を決定する主要因が地形とは別のところに存在することを、当地区でも裏付ける。

### 第2項 基本層序

A・D地区包含層の土層断面図は、地形傾斜の捉えられる平仮名ラインを中心に作成している。A地区では、北東側から「お」ライン、「く」ライン、「し」ライン、「た」ライン、「て」ラインの5本、D地区でも「と」ライン、「に」ライン、「ぬ」ラインなど主に平仮名ラインで作成しているが、一部直交する「9」ラインでも作成している。この中で、特に基本的な土層堆積が把握可能な「お」ライン、「し」ライン、「た」ライン、「に」ラインを抽出し、図示した。地山層以下の遺構構築基盤層までは記載していないが、尾根頂部では、粘質性のしまりの強い黄褐色土を地山とし、鞍部では比較的軟質の黒色土を地山とする。鞍部の黒色土地山は厚い部分で40cm程度あり、その下に5cm程度の暗灰黄色漸移土層、そのさらに下層に灰黄色から灰白色を呈する粘土質土層がある。黄色系の粘土質土地山層は厚く、場所によって土壌形成は異なるが、鞍部では1m程度下で白色系粘土層。尾根部はその間に厚く、淡黄色のきめ細かな山砂層が入り込む。

尾根頂上部が側平化されており、包含層土層断面図は包含層が遺存している部分から図化しているが、尾根筋に近い部分では黄褐色土地山の上に暗褐色漸移層が極薄く存在する程度で、黒色土地山は見られない。黒色土地山が明瞭に見られるのは、標高120～122mのコンタラインからであり、その境に存在するSI02の壁の立ち上がり具合（竪穴建物の西側壁は黄褐色土地山で高く立つのに対し、東側壁は黒色土地山でしか壁が立たない）からも黒色土地山への転換の様相が伺われる。遺構掘削は遺物を包含していない黒色または黄褐色の地山層から掘り込まれるものと言えるが、包含層土層の状況から見ると、包含層として位置づけた土層をきって掘り込まれるものがある。遺構の重複による場合は当然であるが、そのような土層ではない基盤となる包含層から掘り込みが確認されており、鞍部包含層下層と位置づけている黒色味の強い(10YR1.7/1)Ⅱ層やⅢ層は、黒色土地山に包括されるその上層土として位置づけられる可能性を持つ。尾根側に存在する黄褐色土粒を多く含有する黒褐色系のⅣ層も、黄褐色土地山に包括されるその上層土と位置づけ可能で、また、Ⅱ層の上に存在するⅢ層についても、SI03やSI09に切られる状況と土層の色調などからⅢ層同様の位置づけが可能であったものと見られる。建物遺構外で確認される炭化被熱の炉状遺構についても、Ⅲ層ないしはⅡ層の上面で確認されている点から、何らかの要因で遺物や焼土等を包含するものの、包含層Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅳ層の上位面が古代遺構の掘削面、つまりは往時の生活面とするのが妥当と判断される。

このように理解すると、全体図で記した黄褐色土地山での地形コンタは実際には緩やかであったものと言え、地山での傾斜角度3度から生活面復元値での地形傾斜角度0.5度程度に補正されるものと言える。建物遺構分布は尾根筋部よりも比較的傾斜の安定する鞍部を中心に建物建設の場として選択した可能性があり、鞍部に堆積するⅡ・Ⅲ・Ⅳ層は傾斜地を補正するために、意識的に盛り土整地された可能性も考えておく必要性を感じる。以上のように考えると、往時の生活面上に堆積する土層は、Ⅱ層の上に存在するⅣ層のみとなり、当地区では時代経過と伴うような明瞭な包含層堆積は存在しなかったということになる。

## 第2節 A地区で検出された遺構

### 第1項 竪穴建物

竪穴建物は土坑に認定されて欠番となったSI16、SI20を除く、SI01からSI34までの33軒全てを以下に記述する。なお、竪穴建物の位置関係や規模の記載にあたっては、カマドが壁面に直交して付設される場合、カマド笑口が向く方向を手前、カマド付設壁面を奥に位置づけた主軸ラインとし、主軸に沿う側を縦軸、直交する側を横軸とする。竪穴規模は縦軸×横軸で記載する。なお、カマドが竪穴コーナーに斜めに付設される場合は、カマドを奥の左右どちらかのコーナーに位置付け、竪穴の長軸を縦軸、短軸を横軸とする。主軸ラインはカマドを奥に向けた縦軸に沿う形で位置付ける。カマド以外の床面被熱部を炉、カマド付近の土坑を貯蔵穴、柱穴は主柱穴と支柱を区別する。竪穴の時期は田嶋明人氏の北陸古代土器編年で表記する。

#### 1. SI01

**(立地・規模・形態)** A地区の南西側に位置する小型竪穴建物で、床面近くまで削平を受けた竪穴建物であり、かつ試掘トレンチによっても一部破壊を受けている。主軸はS-29°-W。図に示した規模は355×390cmだが、縦軸のカマド側がさらに奥へ伸びる可能性があり、一辺390cm四方の方形竪穴と予想される。

**(柱穴とカマド)** 柱穴は竪穴内に確認されず、竪穴外に存在したものと見られるが、削平が著しいために、既に消失してしまったものと理解する。カマドも壁際での被熱床面のみ確認できただけで、カマドを構築する粘土分布なども確認されなかった。被熱面は硬質に焼き締まっており、カマド笑口の被熱面とすれば、奥壁はさらに奥に存在していた可能性を持つ。

**(覆土堆積と遺物出土)** 覆土堆積は浅く、通有の特徴。出土遺物は須恵器食膳具8点、土師器食膳具6点、土師器煮炊具136点、須恵器貯蔵具5点が出土する。時期はⅡ1期に位置付け可能。

**(床面と掘り方)** 竪穴の中央付近に掘り方をもち、浅い土坑が3箇所掘られ、その部分で貼床が見られる。カマド前方面に竪穴中央付近が特に硬化した貼床で、眉線は地山のままである。

#### 2. SI02

**(立地・規模・形態)** A地区の南側に位置する中型規模の竪穴建物で、試掘トレンチによりカマド煙道が一部破壊されているが、他はほぼ完存する竪穴建物である。竪穴の南東壁立ち上がりが明瞭には確認できておらず、推定規模で652×600cmを測る。縦軸に長い略方形の平面形を呈するが、これはカマドがL字型カマド形態をなすため、煙道部の分だけ縦に長くなっている。主軸はN-65°-Wで、近隣の竪穴建物の中では異なる方向を向くが、竪穴の軸を90度振っているだけで、これはカマド煙道の向きに関連するのだろう。

**(柱穴と他のビット)** 四本主柱穴を竪穴内に均等に配置するもので、柱間規模は300×300cmを測る。各主柱穴とも径40～50cm程度の円形プランで、床面から深さ55～70cmとしっかりと掘り込まれている。柱底は確認されず、いずれも柱を抜き取った後に、黄褐色土小塊を混在させた黒褐色土で埋め戻されている。他のビットとしては奥壁右側に径60cmの略円形ビットが掘られ、土師器を中心に半完形品が複数個体埋められているが、当竪穴建物に伴うものかは定かではない。ただ、遺物時期は同様であり、伴う可能性はある。

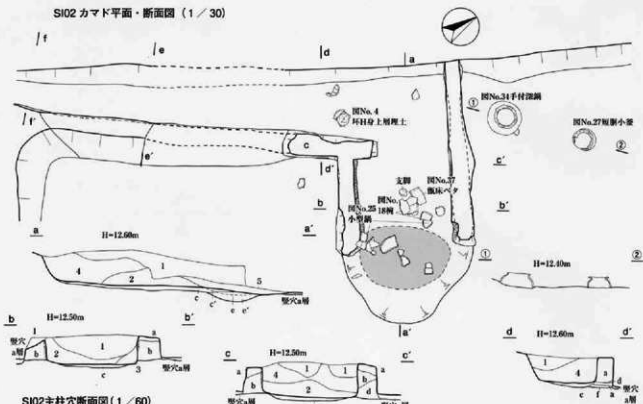
**(カマド)** 西側壁の中央に造り付けられるL字型カマドである。煙道一部を欠損するが、ほぼ完存状態で確認できている。奥壁から重厚なカマドソデがまっすぐと伸び、L字に曲がる煙道部境が障壁状に狭まるタイプで、全て粘土造り。笑口のソデ石等設置は確認されていない。規模は奥壁からカマドソデ端まで143cm、笑口被熱面までは178cm、笑口での内寸幅73cm、外寸幅104cmを測る。煙道はL字屈曲の障壁部分から末端まで410cmを測り、煙道幅は屈曲部付近で内寸50cm、外寸70cm。先端部へむけて徐々に幅を減じ、竪穴外へ出た後は内寸幅30cmと細くなる。先端部には径55cm、深さ20cmのすり鉢状の円形ビットが掘られており、煙突設置に関連する掘り込みの可能性を考える。笑口床面が強く被熱する以外は、床面の被熱は極めて弱いが、ソデ内縁に関しては、障壁の設けられる部分までの範囲で酸化被熱している。ただ、被熱面は煙道へは伸びず、煤けた様子も見られない。カマド構築粘土は黒色土塊と黄褐色土塊とを混在させる極めてしまりの強いもので、数段に分けて版築状に叩き締めて作られている。床土も黄褐色土塊と焼土塊など混在させる粘土で、煙道部床は煙道先端へ向けて傾斜してゆき、竪穴外へと出ている。カマド支脚は、笑口被熱面のやや奥に中央に立つようにして、棒状の石製支脚が出土しているが、設置痕はなく、使用時の原位置を移動している可能性が高い。

**(覆土堆積と遺物出土)** 壁際で地山の崩れたような黄褐色土小塊を多量に含む黒褐色土が存在するもの、ほぼ

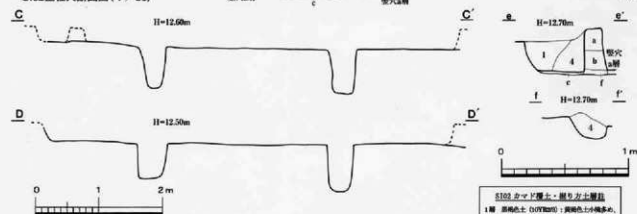




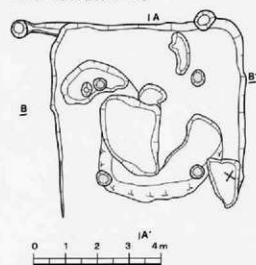
SI02 カマド平面・断面図 (1/30)



SI02主柱穴断面図 (1/60)



SI02掘り方平面図 (1/120)



SI02 竈土・掘り方土層誌

- 1層 赤褐色土 (OY7820) : 焼土小塊・黄褐色土粒・炭化樹皮遺存物含有。
- 2層 赤褐色土 (OY7820) : 黄褐色土粒遺存物、焼土小塊・炭化樹皮遺存物。
- 3層 赤褐色土 (OY7820) : 黄褐色土大塊多量、焼褐色土大塊少量含有。
- 4層 赤褐色土 (OY7820) : 含有物なし、焼土よりやや中細い。
- 5層 赤褐色土 (OY7820) : 黄褐色土小塊多量、焼土小塊少量、炭化樹皮遺存物。
- 6層 赤褐色土 (OY7820) : 黄褐色土小塊多量、焼土小塊少量、炭化樹皮遺存物。
- 7層 赤褐色土 (OY7820) : 黄褐色土小塊・焼土小塊・炭化樹皮多量含有。
- 8層 赤褐色土 (OY7820) : 黄褐色土粒化した塊状土、赤褐色土塊状、硬化した面状土。
- 9層 赤褐色土 (OY7820) : 赤褐色土 (OY7820) と黄褐色土 (OY7820) が 2 : 1 で混在、腐りある面状土。
- 10層 赤褐色土 (OY7820) : 褐色土 (OY7840)、赤褐色土塊状含有。つまりあり、炭化樹皮。
- 11層 褐色土 (OY7840) : 黄褐色土 (OY7820) を含む中に混在する。焼土より細い。
- 12層 赤褐色土 (OY7820) : 焼土 (OY7840) 塊状、焼土小塊、褐色土塊少量含有。炭化樹皮。
- 13層 赤褐色土 (OY7820) : 褐色土を層状に混在、焼土を層状に混在するように感じている。

SI02 カマド竈土・掘り方土層誌

- 1層 赤褐色土 (OY7820) : 黄褐色土小塊多量、焼土小塊・焼土小塊、褐色土小塊少量含有。
- 2層 赤褐色土 (OY7820) と黄褐色土 (OY7820) の混在土。黄褐色土粒大塊状、焼土小塊少量含有。ホムド土粒混在し少く。
- 3層 赤褐色土 (OY7820) : 焼土及焼土小塊多量含有する。黄褐色土塊多量含有。
- 4層 赤褐色土 (OY7820) : 黄褐色土塊多量、焼土小塊、炭化樹皮、褐色土小塊少量含有。
- 5層 赤褐色土 (OY7820) : 褐色土小塊・焼土小塊多量、炭化樹皮少量含有。
- 6層 赤褐色土 (OY7820) : 黄褐色土小塊多量、焼土小塊少量、炭化樹皮含有。
- 7層 黄褐色土 (OY7820) : 焼土・黄褐色土粒と混在して、硬質、ホムド土。
- 8層 赤褐色土 (OY7820) : 黄褐色土小塊多量、褐色土小塊少量含有する。焼土小塊少量混在するが、炭化樹皮は少ない。ホムド土混在し少。
- 9層 焼土・硬質面状で、赤褐色土、焼土小塊混在してはいない。ホムド土混在し少。
- 10層 赤褐色土 (OY7820) と黄褐色土 (OY7820) との混在土。ホムド土、焼土小塊・焼土小塊、炭化樹皮、硬質、ホムド土。
- 11層 赤褐色土 (OY7820) : 黄褐色土小塊多量、褐色土小塊少量含有する。焼土小塊少量混在するが、炭化樹皮は少ない。ホムド土混在し少。
- 12層 赤褐色土 (OY7820) : 焼土の塊状土。
- 13層 赤褐色土 (OY7820) : 焼土より粗粒状の塊状土。
- 14層 赤褐色土 (OY7820) : 黄褐色土を層状に混在するホムド土の塊状土。

第27図 A地区竃穴建物遺構図2 (SI02-2)

単一層と言えるような覆土が堆積しており、短期間の間に意識的に埋め戻されたものと理解する。覆土内には多くの遺物が混在しており、床面や掘り方出土のものを含めると、全体では須恵器食器具55点、土師器食器具102点、土師器煮炊具895点、須恵器貯蔵具89点となる。上層の一部、図に掲載したⅡ3期頃の須恵器が混在するが、ほとんどはⅠ1期の単一時期の遺物で占められる。上層から中層に多く混在し、下層は少ないが、主柱穴間の床面直上または床に貼りついて、土師器碗の完形や半完形品が数個体出土する。カマド焚口付近にも瓶や小型鍋などの煮炊具が出土し、カマド右の奥壁際にも、煮炊具が出土する。手付き深鍋と短胴小釜で、いずれも胴部中位以下を欠き揃えた状態の上半部完形品が、並ぶように設置される。床面に一部食い込むように設置された両個体は、口縁部高がほぼ揃った状態に合わせてあり、何らかの目的で設置されていたものと予想する。カマド廃絶に伴う煮炊具の廃棄形態とも考えられるが、丸底の容器類を置くための器台として、建物使用時に設置されていた可能性もある。

(床面と掘り方) 床面は全体がフラットで、カマドの両側と主柱穴間、右側壁までの部分が貼床されている。それ以外の部分は地山土のままで、特に主柱穴間に掘り方土坑が掘り込まれている。幅200×長さ260cm、深さ30cm程度の略長方形土坑を中心として、複数の不整形土坑が存在する。貼床はカマド焚口前面から主柱穴間の空間が最も顕著に硬化し、その硬化面は右側壁へと伸びている。入り口部の可能性がある。

### 3. SI03

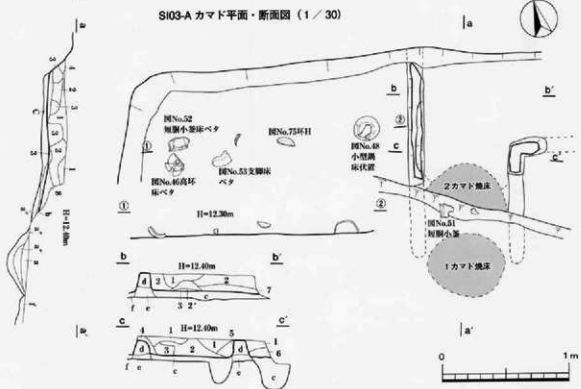
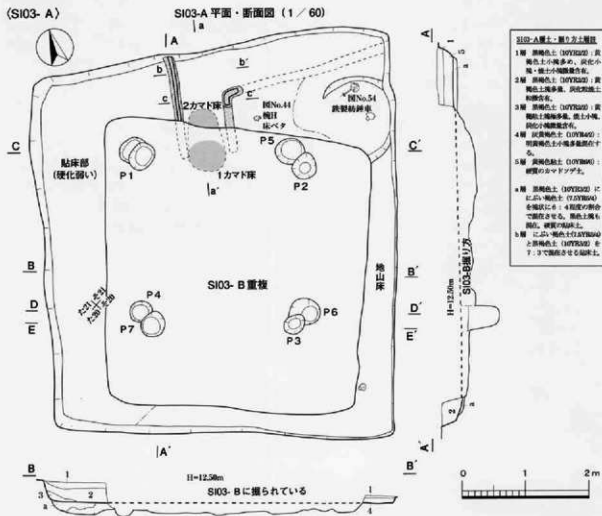
SI03はSI02の北側に隣接して存在する堅穴建物で、形態の異なる2軒の堅穴建物が全く重複している。2軒は四本主柱をもつ中型の堅穴建物がまず建てられ、それが廃絶した後に、ひとまわり小型化した堅穴建物が掘り込まれており、四本主柱のものをSI03A、小型堅穴建物をSI03Bとする。出土遺物は、SI03の中で区別なく取り上げたものもあるため、出土量としては2軒の堅穴建物全体で、須恵器食器具28点、土師器食器具121点、土師器煮炊具1,021点、須恵器貯蔵具63点として提示しておく。

#### a. SI03A

(立地・規模・形態) 堅穴建物中央が深く掘り込まれたSI03Bによって削られており、中央部分が主柱穴を除いて消失している。堅穴の平面プランが歪んでおり、主柱穴がずれて計8本存在することから、同じ場所での建て替えが行われたものと予想される。建て替えの際に主軸を若干北に振っており、その時に堅穴の掘り込み、カマドの造り替えが行われているようである。主柱穴P1からP4までの初期の建物を1次建物(SI03A-1)、主柱穴P1はそのままで、P5・P6・P7に建て替えた後の建物を2次建物(SI03A-2)とする。1次の堅穴は後に掘り直されているため、復元は困難だが、規模は560×560cm程度、略方形の平面プランを呈するものであったと予想する。主軸はN-19°-Eで、建て替えた後の2次建物は、そこから11°北に主軸を振り、N-8°-Eとしている。2次の堅穴規模は横軸が560cmだが、縦軸が山側で560cm、谷側で646cmと台形の平面プランを呈しており、それに伴ってカマドも軸を北に振って、造り替えられている。

(柱穴と他のピット) 新旧いずれも四本主柱穴を堅穴内に均等に配置するもので、柱間規模は1次で250×260cmだったものが、2次では270×240cmと縦に長くなっている。主柱穴の平面形はどちらも円形だが、1次の主柱穴は径35cm程度と細めのに対し、2次は径40～50cmと大きくなっており、床面からの深さも1次が50～70cmに対し、2次は50cmとなる。いずれも柱痕は確認されず、柱を抜き取った後に黄褐色土小塊を混在させた黒褐色土で埋め戻された状況である。他のピットとしてはカマドの右側に130×120cmの楕円形の浅い貯蔵穴が掘られており、土師器片と鉄製紡錘車の完形品が遺存していた。

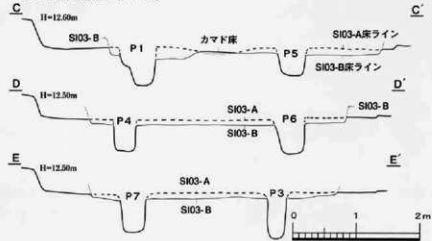
(カマド) 遺存するカマドは2次のカマドで、北側壁の中央に造り付けられる。焚口付近をSI03Bに壊され、煙道部の大半を意識的に破壊しているが、煙道の屈曲部が遺存しており、L字型カマドであることが理解される。奥壁からカマドソデがまっすぐと伸びるが、カマドソデ粘土の厚みは薄く、全体的に重厚さに欠ける。粘土造りのもので、規模は奥壁からカマドソデ端まで推定140cm程度、焚口被熱面までは150cm程度、焚口の寸幅は67cm、外寸幅は85cmを測る。煙道は屈曲部を残して大半が意識的に破壊されており、煙道があったであろう箇所では大量のカマドソデ構築粘土塊と焼土塊、土師器片が廃棄されていた。SI02で見られたような堅穴外に伸びる煙道の延長は確認されないが、未確認だったのは、谷部へと傾斜してゆく部位であったために調査時に確認し切れなかったことが要因であろうと考える。煙道幅は屈曲部付近で内寸70cm、外寸80cmを測る。カマド支脚は遺存していないが、カマド左奥壁際に廃棄された土器の中に顔見町西遺跡で出土している先端部を曲げた土製支脚が出



第28図 A地区竪穴建物遺構図3 (SI03 A-1)

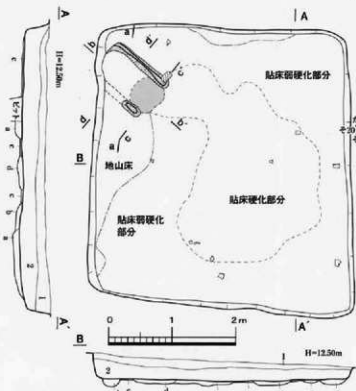
- SI03-A カマド跡土・覆り方土層柱**
- 1層 黒褐色土 (OY7320)・黄褐色土 (Y7316) 小塊多量、赤土塊多量を含む。
  - 2層 黄褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量、赤土塊少量を含む。
  - 3層 黄褐色土 (OY7320)・赤土小塊多量を含む。灰床跡の上。
  - 4層 黄褐色土 (OY7320) と黄褐色土 (Y7316) の混合土。
  - 5層 黄褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量を含む。やや小ぶりな。
  - 6層 黄褐色土 (OY7320)・黒色土小塊多量、黄褐色土小塊多量、赤土小塊多量を含む。
  - 7層 黄褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量を含む。
  - 8層 黄褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量、赤土小塊多量を含む。
  - 9層 黄褐色土 (OY7320)・黒色土小塊多量、赤土小塊多量を含む。
  - 10層 黄褐色土 (OY7320)・黒色土小塊多量、赤土小塊多量を含む。
  - 11層 黄褐色土 (OY7320)・黒色土小塊多量、赤土小塊多量を含む。
  - 12層 黄褐色土 (OY7320)・黒色土小塊多量、赤土小塊多量を含む。
  - 13層 黄褐色土 (OY7320)・黒色土小塊多量、赤土小塊多量を含む。
  - 14層 黄褐色土 (OY7320)・黒色土小塊多量、赤土小塊多量を含む。
  - 15層 黄褐色土 (OY7320)・黒色土小塊多量、赤土小塊多量を含む。
  - 16層 黄褐色土 (OY7320)・黒色土小塊多量、赤土小塊多量を含む。
  - 17層 黄褐色土 (OY7320)・黒色土小塊多量、赤土小塊多量を含む。
  - 18層 黄褐色土 (OY7320)・黒色土小塊多量、赤土小塊多量を含む。
  - 19層 黄褐色土 (OY7320)・黒色土小塊多量、赤土小塊多量を含む。
  - 20層 黄褐色土 (OY7320)・黒色土小塊多量、赤土小塊多量を含む。

SI03-A 柱穴断面図 (1/60)

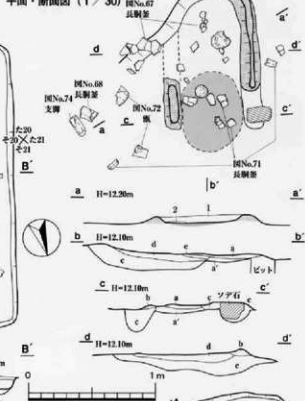


(SI03-B)

SI03-B 平面・断面図 (1/60)



SI03-B カマド 平面・断面図 (1/30)



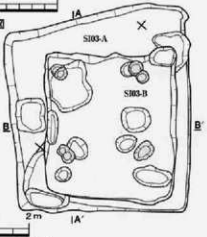
**SI03-B 黒土・覆り方土層柱**

- 1層 黒褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量、赤土塊多量を含む。
- 2層 黄褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量、赤土塊少量を含む。ほぼ1層と同様の土層。
- 3層 黄褐色土 (OY7320) とほぼ同色土 (Y7316) の混合土。赤土塊少量を含む。硬質土。
- 4層 黄褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量、赤土塊少量を含む。石灰土。
- 5層 赤褐色土 (Y7316) と黄褐色土 (OY7320) の混合土。赤土塊少量を含む。石灰土。
- 6層 黄褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量、赤土塊少量を含む。石灰土。
- 7層 黄褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量、赤土塊少量を含む。石灰土。
- 8層 黄褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量、赤土塊少量を含む。石灰土。
- 9層 黄褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量、赤土塊少量を含む。石灰土。
- 10層 黄褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量、赤土塊少量を含む。石灰土。
- 11層 黄褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量、赤土塊少量を含む。石灰土。
- 12層 黄褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量、赤土塊少量を含む。石灰土。
- 13層 黄褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量、赤土塊少量を含む。石灰土。
- 14層 黄褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量、赤土塊少量を含む。石灰土。
- 15層 黄褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量、赤土塊少量を含む。石灰土。
- 16層 黄褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量、赤土塊少量を含む。石灰土。
- 17層 黄褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量、赤土塊少量を含む。石灰土。
- 18層 黄褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量、赤土塊少量を含む。石灰土。
- 19層 黄褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量、赤土塊少量を含む。石灰土。
- 20層 黄褐色土 (OY7320)・黄褐色土小塊多量、赤土塊少量を含む。石灰土。

**SI03-B カマド跡土・覆り方土層柱**

- 1層 黄褐色土 (OY7320)・赤土小塊多量、黄褐色土小塊多量を含む。
- 2層 黄褐色土 (OY7320)・赤土小塊多量、黄褐色土小塊多量を含む。カマド跡土。
- 3層 黄褐色土 (OY7320)・赤土小塊多量、黄褐色土小塊多量を含む。カマド跡土。
- 4層 黄褐色土 (OY7320)・赤土小塊多量、黄褐色土小塊多量を含む。カマド跡土。
- 5層 黄褐色土 (OY7320)・赤土小塊多量、黄褐色土小塊多量を含む。カマド跡土。
- 6層 黄褐色土 (OY7320)・赤土小塊多量、黄褐色土小塊多量を含む。カマド跡土。
- 7層 黄褐色土 (OY7320)・赤土小塊多量、黄褐色土小塊多量を含む。カマド跡土。
- 8層 黄褐色土 (OY7320)・赤土小塊多量、黄褐色土小塊多量を含む。カマド跡土。
- 9層 黄褐色土 (OY7320)・赤土小塊多量、黄褐色土小塊多量を含む。カマド跡土。
- 10層 黄褐色土 (OY7320)・赤土小塊多量、黄褐色土小塊多量を含む。カマド跡土。
- 11層 黄褐色土 (OY7320)・赤土小塊多量、黄褐色土小塊多量を含む。カマド跡土。
- 12層 黄褐色土 (OY7320)・赤土小塊多量、黄褐色土小塊多量を含む。カマド跡土。
- 13層 黄褐色土 (OY7320)・赤土小塊多量、黄褐色土小塊多量を含む。カマド跡土。
- 14層 黄褐色土 (OY7320)・赤土小塊多量、黄褐色土小塊多量を含む。カマド跡土。
- 15層 黄褐色土 (OY7320)・赤土小塊多量、黄褐色土小塊多量を含む。カマド跡土。
- 16層 黄褐色土 (OY7320)・赤土小塊多量、黄褐色土小塊多量を含む。カマド跡土。
- 17層 黄褐色土 (OY7320)・赤土小塊多量、黄褐色土小塊多量を含む。カマド跡土。
- 18層 黄褐色土 (OY7320)・赤土小塊多量、黄褐色土小塊多量を含む。カマド跡土。
- 19層 黄褐色土 (OY7320)・赤土小塊多量、黄褐色土小塊多量を含む。カマド跡土。
- 20層 黄褐色土 (OY7320)・赤土小塊多量、黄褐色土小塊多量を含む。カマド跡土。

覆り方平面図 (1/120)



第29図 A地区壁穴建物遺構図4 (SI03 A-2、SI03 B)

土しており、使用痕跡などから、当カマドで使用されたものと予想される。焚口床面は酸化被熱層を形成するが、奥へは被熱が緩く、焼土化していない。ソデア内壁も被熱痕跡はなく、2次カマドは長期にわたり使われた痕跡に乏しい。これに対し、SI03Bに削り取られた部分で確認される1次カマドの焚口被熱面は、しっかりと被熱焼結しており、被熱層も厚く、長期にわたる使用が予想される。

**(覆土堆積と遺物出土)** 堅穴の中央部をSI03Bの掘削の際に掘り直されているため、壁際付近のみの状況しか確認できないが、概ねSI02同様の覆土堆積であったろうと考える。遺存する覆土内には、少なからず遺物が混在しており、床面付近から出土した遺物を見ると、ほとんどがI期の単一時期のもので占められる。カマド内の遺物は少ないが、煙道を壊した部分と、カマド左の奥壁際に土師器を中心として土器廃棄されている。特に、カマド左には先述した土製支脚や短胴小釜、高坏脚部、小型鍋が並べられるように床面に置かれていた。SI02で見られるカマド脇の器台状の釜蓋設置との共通性を考える必要があるが、当資料では何かに転用された痕跡がないことやカマド使用済み支脚の廃棄、煙道破壊行為など、堅穴建物廃絶時に伴うカマド祭祀的な破壊行為、廃棄行為ではなかったかと予想する。

**(床面と掘り方)** SI03Bに堅穴中央が削平されているため、硬化面分布などは分からないが、床下の掘り方土坑は主柱穴の外側、左手前隅と左側に、楕円形、不整形の浅い土坑が掘り込まれている。

#### b. SI03B

**(立地・規模・形態)** SI03Aの廃絶後、A堅穴のほぼ中央付近に掘り込まれる小型の堅穴建物である。堅穴の南側隅にコーナーカマドを付設し、堅穴内には主柱穴をもたない。壁外柱穴のタイプとは思われるが、SI03Aの覆土内のため、確認しきれていない。堅穴規模は410×390cmの正方形に近いものだが、堅穴北隅のがびる歪んだ形となっている。SI03Aの床面を10cm下げて掘られており、壁高は40cm程度を測る。主軸はS-17°-Wで、SI01の主軸方向に近い。

**(カマド)** 南側隅に造り付けられる無煙道型の小型カマドである。ソデアの一部を欠損するが、ソデア基部の遺存状態から凡その形態は復元可能で、カマド奥から焚口まで逆「U」字形を呈するものと予想される。焚口の右ソデアには凝灰岩質の切石が埋め込まれ、カマド脇に廃棄されているが、出土した凝灰岩質の棒状石製支脚が使用されていたものと予想する。規模は、カマド奥からカマドソデア端まで105cm、焚口被熱面までは127cm、焚口での内寸幅55cm、外寸幅72cmを測る。焚口床面が強く被熱する以外は、床面の被熱による焼土化は認められず、ソデア内壁も焼土化は確認されない。

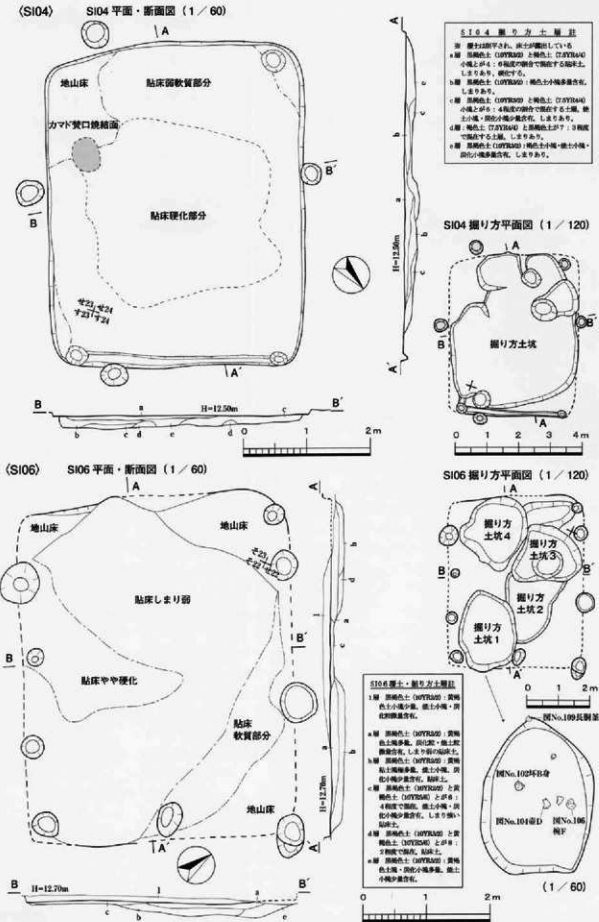
**(覆土堆積と遺物出土)** 覆土は黄褐色土小塊を多く含む黒褐色土のほぼ単一層で、短期間の間に意識的に埋め戻されたものと理解される。覆土内には多くの遺物が混在しており、特に床面から10cm程度上では(2層中)、小型鍋や長胴釜、短胴小釜の土師器煮炊具が数個体まとめて廃棄されている。床面に捨てられたり、置かれたりという遺物はないが、カマド内またはその周辺の床面からは長胴釜と飯の土師器煮炊具がまとまって出土しており、カマド支脚も含め、当カマドの廃絶に伴うカマド破壊廃棄品と予想される。土器の時期はSI03Aに後出する様相を持つものの、ほとんどはI期の範疇で捉えられるものであり、短期間で3軒が建て替えられたことを物語る。

**(床面と掘り方)** 床面は全体がフラットで、堅穴南東側の一部が地山床のままだが、堅穴に広く貼床がなされる。そのうち、硬化面はカマド焚口前面から堅穴中央付近にかけてで、かなり硬く叩き締められている。床下に明瞭な掘り方土坑を伴うことはなく、SI03Aの掘り方土坑が十分に機能を発揮している。

#### 4. SI04

**(立地・規模・形態)** A地区の西側に位置する小型堅穴建物で、削平によりほとんど床面が露出した状態で検出されたものである。カマド焚口被熱面の位置から堅穴の南側隅にコーナーカマドを付設するタイプと予想する。堅穴規模は510×405cmで、平面プランは隅丸長方形を呈す。主軸はS-32°-Wで、SI01と同様の主軸をもつ。

**(柱穴とカマド)** 堅穴内に主柱穴はなく、壁支柱穴と思われる径30cm、深さ25~30cmのしっかりした細い柱穴が南隅を除いた三方の堅穴コーナーに掘られている。さらに、北西側の壁にはこの壁支柱間を繋ぐ形で、幅10~20cm、深さ10cm弱の壁周溝が巡り、壁建ち建物的な形態をとる。また、壁外や壁際の主軸上、東西軸上には径40cm、深さ20cm程度の柱穴が4本配置され、関連性が予想される。カマドは焚口焼結床面を残すのみで、構架粘土の痕跡はなく、どのような形態をとっていたかは不明であるが、焚口焼結面の位置から考えて、小型化した1字



第30図 A地区竪穴建物遺構図5 (SI04、SI06)

型カマドの可能性もある（SI29のようなもの）。このカマド付設箇所には煙道がコーナーに向けて伸びる関係から壁支柱穴ではなく、これが支柱とは別に主柱穴を持つと予想する要因である。

〔床面と掘り方〕床面はほぼフラットで、カマドの付設される南隅以外は20cm程度の深さを持つ底面のフラットな不整形の掘り方土坑が掘り込まれる。カマド焚口前面から堅穴の中央付近が黄褐色土塊を混在させる硬化した状態となるが、他は軟質の貼床土である。掘り方土坑内には比較的遺物が混在しており、須恵器食器具37点、土師器食器具15点、土師器煮炊具455点、須恵器貯蔵具23点が出土する。ほぼⅡ3期を前後するものである。

### 5. SI05

〔立地・規模・形態〕A地区のほぼ中ほど、西側に位置する小型堅穴建物である。堅穴の東側半分以上が削平されて消失しており、規模は西側の一辺380cmを測るのみである。周辺の類似する小型堅穴建物の主軸方向から、S-40°-Wと予想される。

〔柱穴とカマド〕柱穴は堅穴内、堅穴外ともに確認されず、不明。カマドも被熱痕跡すら確認されず、削平箇所が存在した可能性もあるが、カマドを有さなかった可能性もある。

〔床面と掘り方、遺物出土〕堅穴の広い範囲に掘り方土坑をもつ。深さ25cmの底面フラットな不整形土坑で、貼床は顕著な硬化が認められないが、通常の貼床土的な土が上面に貼られている。出土遺物は覆土と掘り方から少量出土しているが（須恵器食器具14点、土師器食器具3点、土師器煮炊具71点、須恵器貯蔵具8点）、時期を確定できるものや図示できるものはなく、堅穴の時期比定は困難である。

### 6. SI06

〔立地・規模・形態〕A地区の南西側に位置する小型の堅穴状遺構で、土器の出土がまとまっていたことと、一部硬化した床面が確認できたこと、黄褐色土塊を多く混在させる覆土を持つ底の平坦な連続する不整形土坑が掘り方土坑的であったことから、当遺構を堅穴建物と認定しているが、カマド焼結被熱面は確認されておらず、明瞭に堅穴プランを把握していない。ただ、掘り方土坑と貼床の分布状況、一部の壁の立ち上がりから540×430cmの略長方形プランを想定している。主軸は他の堅穴建物の向きから考えて、E-28°-Sと見るが、不確定要素が多い。

〔柱穴〕堅穴の主軸方向の壁際には柱穴状のビットが検出されている。径30～50cm、深さ20～30cmの柱穴で、やや並び方が不規則だが、側主柱穴となる可能性を持つ。

〔床面と掘り方、出土遺物〕床面はほぼフラットで、堅穴の広い範囲で掘り方土坑を持つ。軟質の貼床が貼られ、硬化した部分は一部分に限られる。遺物は覆土中からも出土するが、掘り方土坑からの出土が目立つ。出土量は須恵器食器具116点、土師器食器具20点、土師器煮炊具744点、須恵器貯蔵具6点で、ほぼⅡ2期頃に時期がまとまる。

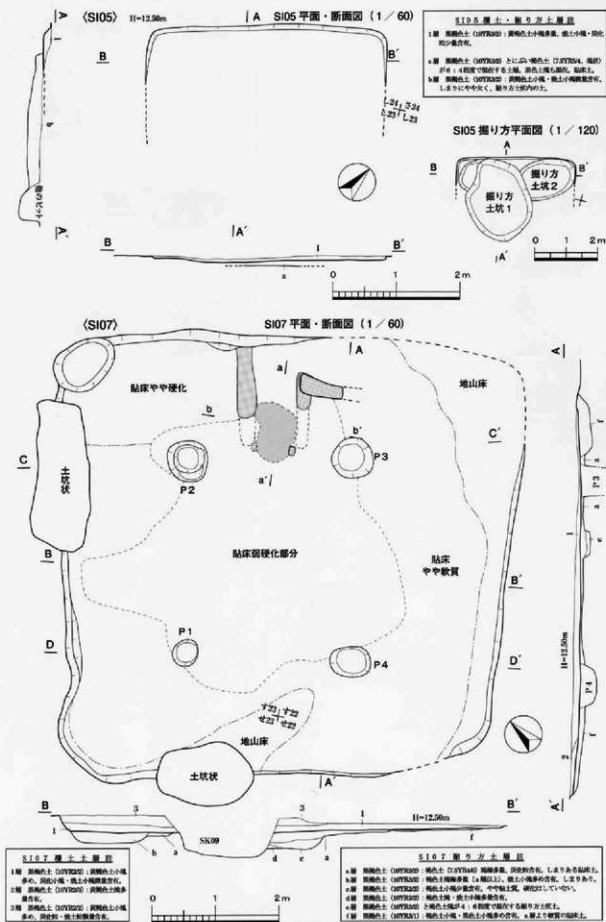
### 7. SI07

〔立地・規模・形態〕A地区中程の西側に位置する若干大型の四本主柱堅穴建物で、堅穴の中央に深い長方形土坑（SK09）が掘り込まれている。堅穴の北西側は壁の立ち上がりが25cmほどあるが、南東側へは削り取られており、明瞭な壁の立ち上がりを確認できていない。このため、東隅がやや歪んだ形となるが、710×690cmを測る隅丸方形プランを呈するものと理解される。主軸はN-50°-Eである。

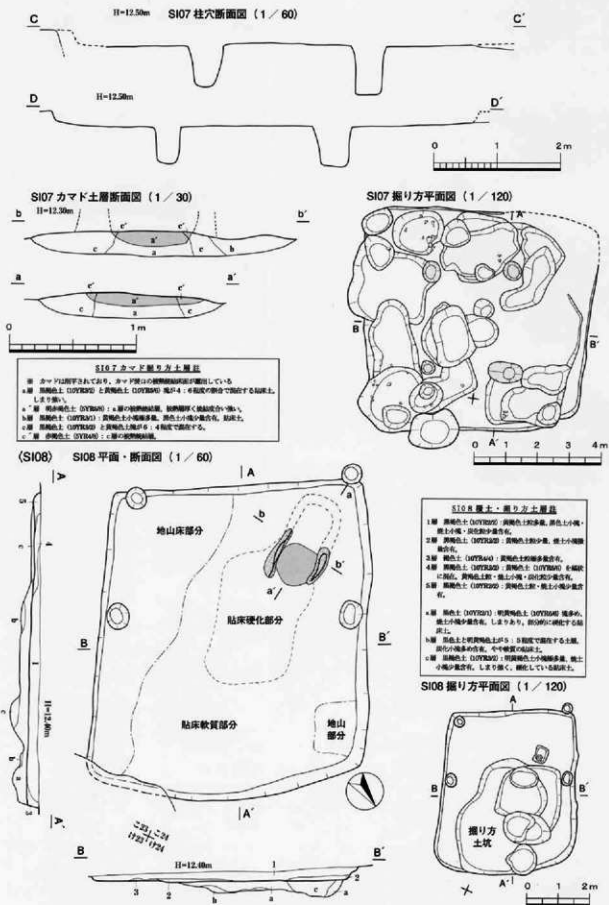
〔柱穴と他のビット〕四本主柱穴を堅穴内に均等に配置するもので、柱間規模は310×260cmと、堅穴規模の割に横軸の主柱穴間が狭い特徴を持つ。主柱穴はやや方形に近い平面プランで、径40～65cmとややばらつき、深さもP3が80cmを測る以外は、60～65cm程度である。柱痕は確認されず、いずれも柱を抜き取った後に、黄褐色土小塊を混在させた黒褐色土で埋め戻されている。当堅穴の壁際に土坑状のものが重なっており、何らかの施設として掘られたビットか、他の遺構が重複したものか、判断がつきにくい。または、掘り方に伴うものである可能性もある。

〔カマド〕北東側の壁中央付近に造り付けられるカマドで、削平によりカマドソデ粘土がほとんど削り取られた状態で検出されたものである。ソデ構築粘土基部の痕跡などからL字型カマドである可能性が高く、焚口被熱焼結面の両側にはカマドソデ石として設置された凝灰岩の切石基部が遺存していた。焚口を凝灰岩で構築するタイプと予想する。カマド構築粘土基部痕跡などから推察して、カマドは焚口ソデ端から奥壁まで180cm、被熱面端まで200cmと大きい、焚口の幅はソデ石遺存箇所内で内寸55cmと狭い形状をしている。煙道幅は屈曲部付近





第31図 A地区竪穴建物遺構図6 (SI05、SI07-1)



第32図 A地区竪穴建物遺構7 (SI07-2、SI08-1)

で、内寸70cm、外寸90cmを測る。カマド覆土が削平されていたこともあり、遺物出土はほとんどなく、支脚痕跡も確認していない。

(覆土堆積と遺物出土) 谷側へ向かって削平されているが、確認できる覆土堆積層は類似層であり、ほぼ単一層と言えるものである。覆土内には多くの遺物が混在しており、掘り方出土のものなどを含めると、全体では須恵器食膳具120点、土師器食膳具59点、土師器煮炊具1611点、須恵器貯蔵具85点となる。床面出土の遺物は少なく、中層から下層付近に点在するが、まとまった廃棄や据え置いたような出土の状態を示すものはない。ほぼⅡ1期の遺物で占められる。

(床面と掘り方) 床面は全体がフラットで、床面のほぼ全面が貼床されている。床下には複数の掘り方土坑が掘り込まれており、特に主柱間の外側に楕円形土坑が連続して掘られている。貼床は強く硬化した部分はなく、カマド焚口前面から主柱間に比較的硬化した部分がある。掘り方土坑が掘られる主柱間外周部は比較的軟質な床の状態だが、一部硬化した部分があり、入り口部にあたる可能性を持つ。

## 8. S108

(立地・規模・形態) A地区中程の西側に位置する小型竪穴建物で、竪穴の西隅にコーナーカマドを付設するタイプである。山側にあたる西隅から両側の壁は立ち上がり明瞭だが、谷側の壁の立ち上がりは低く、そのためか、東隅にむかって竪穴が歪んでいる。この歪みを考慮しなければ、竪穴規模は460×400cmで、平面プランは隅丸方形を呈す。主軸はS-345°-Wで、他の同タイプの竪穴建物と類似した主軸をもつ。

(柱穴とカマド) 柱穴は竪穴の西隅と南隅、そしてそこから北東へ220cmのところにも存在しており、主軸沿いの壁際に主柱穴をもつ個主柱タイプと予想する。図では4本のみとしているが、竪穴の北隅と東隅には他の独立柱建物の柱穴が重複しており、ここにも当竪穴に伴う柱穴が存在していた可能性は高く、6本の個主柱の並ぶタイプと考えている。柱穴は深さ10~25cmと浅めだが、径は30~40cmを測るものである。カマドは奥壁部分が削平されているが、ソデ粘土基部痕跡や焚口付近のソデの遺存状態などから、カマドソデが逆「U」字形呈す小型無煙道型カマドと予想される。奥から焚口ソデまで130cm程度、焚口幅は内寸で55cmを測り、支脚設置穴と思われる径15cmの小穴が焚口の奥、中央に掘られている。焚口被熱面は主に支脚穴の手前で強く、それより奥では弱くなり、徐々に焼土面は薄れてゆく。

(覆土堆積と遺物出土) 覆土堆積層はいずれも類似層であり、ほぼ単一層と言えるものである。覆土内の遺物混在は少なく、カマドや掘り方出土のものを含めても、須恵器食膳具32点、土師器食膳具10点、土師器煮炊具428点、須恵器貯蔵具53点を出土するのみである。カマドの左奥に土師器煮炊具を中心に土器廃棄されており、これはカマド廃絶に伴うものと理解される。掘り方土坑出土のものはⅡ1期のものだが、カマド出土のものはⅡ3期からⅢ期のものであり、竪穴時期は後者である可能性が高い。

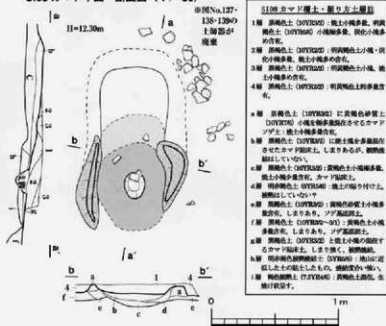
(床面と掘り方) 床面はほぼフラットで、山側のみ掘り方を持つ。山側が粘土質の地山であるのに対し、谷側は小礫の混在する地山となっており、水捌けの関係で床下構造が異なっていたものと理解される。カマド焚口前面から竪穴中央付近の狭い区域のみ床面はやや硬化するが、その外周は軟質の貼床状態となっている。掘り方土坑は、底の平坦な不整形土坑で、深さは20cm程度を測る。

## 9. S109

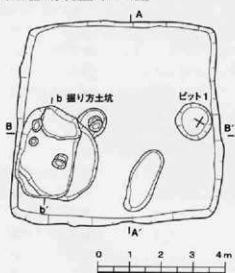
(立地・規模・形態) A地区の中程、地山が黒色土山地山となつてゆく区域に存在する竪穴建物で、土器の出土とカマドと思われる被熱面の確認、貼床状を呈すやや硬化した面の把握から、当遺構を竪穴建物と認定している。竪穴の壁立ち上がりは不明瞭だが、規模620×590cmの隅丸方形プランを抽出した。竪穴の南側隅にコーナーカマドを付設し、竪穴内には主柱穴をもたない。壁外柱穴のタイプとは思われるが、柱穴は全く確認できていない。このため、主軸の把握が困難であるが、竪穴の長軸の向きから、主軸はS-24°-Wと推察する。

(カマドと竪穴内施設) 竪穴の中央南側床面にカマド焚口状の酸化被熱面があり、そこから竪穴南隅にむけて、カマド構築粘土の分布や焼土分布、土師器煮炊具の分布があることから、南隅にかけてコーナーカマドが付設されていたものと理解する。ただ、全形を把握し切れておらず、通常の粘土構築された造り付けカマドが存在していたかは断定できない。竪穴内にはこの他、西隅に地山粘土(地山掘り残しではない)の盛り上がりと、北西側の壁際に円形土坑がある。地山粘土盛り上がりは、80×100cm、20cm高のもので、入り口状のステップの可能性がある。円形土坑は深さ25cm、径120cmのもので、底が平坦なものである。

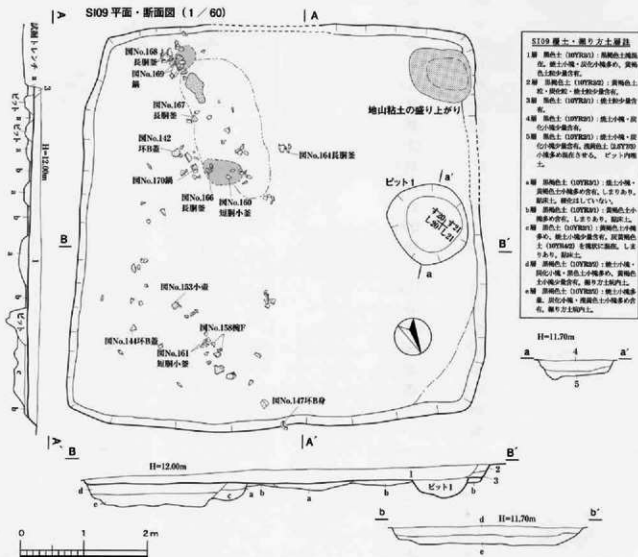
SI08 カマド平面・断面図 (1/30)



(SI09)  
SI09 掘り方土平面図 (1/120)



SI09 平面・断面図 (1/60)



第33図 A地区壁穴建物遺構図B (SI08-2、SI09)

**〔覆土堆積と遺物出土〕** 覆土は黄褐色土小塊を含む黒褐色土のほぼ単一層で、短期間の間に意識的に埋め戻されたものと理解される。覆土内には多くの遺物が混在し、カマド周辺から竪穴の南東部に多く分布する。全体の出土量は、須恵器食膳具214点、土師器食膳具85点、土師器煮炊具1,495点、須恵器貯蔵具74点と比較的多く、須恵器でⅣ期やⅤ期のものを含むが、土師器煮炊具を中心に概ねⅢ期からⅣⅠ期の土器を主体的に出土する。

**〔床面と掘り方〕** 床面は全体がフラットで、貼床を施す。顕著に硬化した面はなく、カマド焚口前面付近から竪穴中央付近が黄褐色土塊を混在させるやや硬化した貼床となっている。それ以外では、黒褐色土の軟質な貼床が貼られており、黒色土山との識別が困難な部分もある。掘り方土坑は、東側に290×260cm規模の楕円形土坑が掘られている。底面の平坦な土坑で、深さは30cm程度を測る。

## 10. S110

**〔立地・規模・形態〕** A地区の中程やや南西側に位置する小型の四本主柱竪穴建物で、S111のカマド煙道端を切って当竪穴建物のカマドが囲われている。竪穴の奥壁中央に小型カマドが付設されるタイプで、430×410cmを測る隅丸正方形プランを呈する。主軸はS-40.5°-Eである。

**〔柱穴〕** 四本主柱穴は柱間規模が右側に偏って配置されており、右の柱列は竪穴壁際に位置する。柱間規模は250×290cmと横に長く、P 2の位置がやや歪んでいる。主柱穴はやや方形に近い平面プランで、径50～65cm、深さは60～70cmを測る。柱痕は確認されず、いずれも柱を抜き取った後に、黄褐色土小塊を混在させた黒褐色土で埋め戻されている。特に、P 2内覆土はしまりが強く、掘り方はかなり大きく掘られている。

**〔カマド〕** 南東側の壁中央付近に造り付けられる小型の無煙道型カマドである。奥壁にまっすぐのびるカマドソテを取りつけるタイプのカマドで、焚口の両ソデには凝灰岩質の切石が埋め込まれ、その上部には同じ石材の天井石が折れた状態で遺存していた。焚口のみを切石で構築する石組み構造で、他は粘土造り（ソテ粘土は薄く、粘土の叩き締めも弱い貧弱な造り）であるが、周辺に同様の石材の切石が数個散乱しており、焚口に2段以上の切石が使われていた可能性もある。焚口両ソデ石と天井石は接合可能なもので、一つの石材として持ち込み、当カマド構築の際に3つに分割したものと見える。カマドの規模は、奥からカマドソテ端まで72cm、焚口被熱面までは93cm、焚口での内寸幅60cm、外寸幅80cmを測る。床面は奥へ向けて緩く傾斜する形態で、焚口が被熱焼土化する以外は、焼土化は認められず、ソテ内壁についてもソテ石のみ酸化被熱するだけである。焚口床については、同層を挟み、さらに下に焼結の顕著な焚口床が存在しており、当カマドでは床面を貼り直した事が確認できる。焚口の焼土化した部分の奥、中央には凝灰岩質の石製支脚が1本、手前側にやや倒れるようにして遺存していた。焚口側が強く酸化被熱しており、使用状態で残っていたことが伺われる。覆土下層には土師器煮炊具が5個体以上、半完形品で残されているが、いずれも長胴釜であり、当カマドで使用したのとは言い難い。カマドを意識的に破壊した際に投げ込んだものと位置づけられようか。

**〔覆土堆積と遺物出土〕** 覆土堆積層はいずれも類似層であり、ほぼ単一層と言えるものである。覆土内の遺物混在は少なく、カマド内廃棄品を除くと、床面からの出土はほとんどない。カマドや掘り方出土のものを含めても、須恵器食膳具72点、土師器食膳具31点、土師器煮炊具646点、須恵器貯蔵具73点を出土するのみである。出土遺物は掘り方出土のものでⅡ期からⅡⅠ期古段階と古いのが、覆土やカマド出土のものはⅡⅠ期新からⅡⅡ期のものもあり、竪穴時期は後でⅡ期である可能性が高い。

**〔床面と掘り方〕** 床面は全体的にフラットであるが、カマド焚口前面付近のみ若干窪むように作られている。床面のほぼ全面が貼床され、床下には主柱穴間に170×210cmの不整楕円形の掘り方土坑が掘り込まれている。貼床は主柱穴間が硬化するが、カマド焚口前面から中央付近が特に強く硬化し、竪穴手前側に伸びている。入り口部にあたる可能性を持つ。

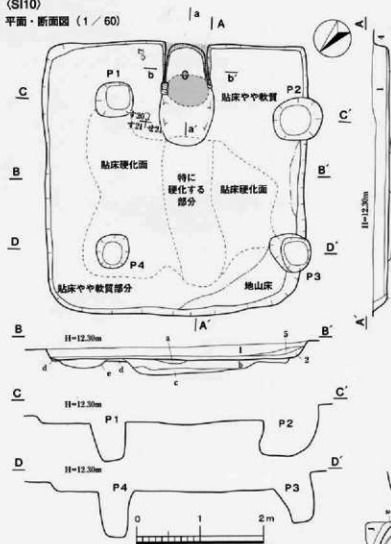
## 11. S111

**〔立地・規模・形態〕** A地区の中程やや南西側に位置する大型の四本主柱竪穴建物である。竪穴の奥壁中央に大型のL字型カマドが付設されており、カマド煙道の端部がS110に切られている。竪穴規模は720×748cmを測る正方形プランを呈する。L字型カマド付設竪穴の場合、通常は煙道部の分だけ縦に長くなる傾向が強いが、この竪穴建物は主柱穴の外周部が広く、逆に横に広いという特徴を持つ。主軸はN-20.5°-Eで、S102からほぼ90度北に主軸を振る。

**〔柱穴と他のピット〕** 四本主柱穴を竪穴内に均等に配置するもので、柱間規模はほぼ300×300cmだが、P 3のみ

(S110)

平面・断面図 (1/60)



**S110 壁土・掘り方土層目録**

- 1層 赤褐色土 (OY780) : 土質均質土。OY780a 対多量、黄色土層・同色土層・黄色土小塊少量含有。
- 2層 赤褐色土 (OY780) : 土質均質土。土質均質土小塊・黄土小塊少量含有。
- 3層 赤褐色土 (OY780) : 土質均質土。土質均質土小塊少量含有。
- 4層 赤褐色土 (OY780) : 土質均質土。土質均質土小塊・黄土小塊少量含有。
- 5層 赤褐色土 (OY780) : 土質均質土。土質均質土小塊・黄土小塊少量含有。

●層 赤褐色土 (OY780) : 同層土。OY780a 対多量。土質均質土。土質均質土小塊・黄土小塊少量含有。

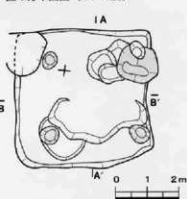
▲層 赤褐色土 (OY780) : 土質均質土。土質均質土小塊・黄土小塊少量含有。

○層 赤褐色土 (OY780) : 土質均質土。土質均質土小塊・黄土小塊少量含有。

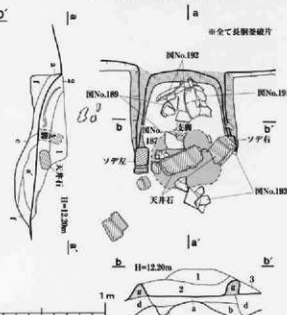
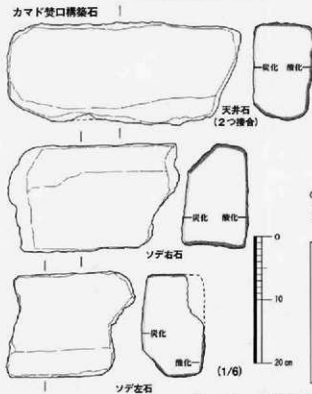
△層 赤褐色土 (OY780) : 土質均質土。土質均質土小塊・黄土小塊少量含有。

▽層 赤褐色土 (OY780) : 土質均質土。土質均質土小塊・黄土小塊少量含有。

掘り方平面図 (1/120)



カマド平面・断面図 (1/30)



**S110 カマド 壁土・掘り方土層目録**

- 1層 赤褐色土 (OY780) : 同層土。土質均質土。土質均質土小塊・黄土小塊少量含有。
- 2層 赤褐色土 (OY780) : 土質均質土。土質均質土小塊・黄土小塊少量含有。
- 3層 赤褐色土 (OY780) : 土質均質土。土質均質土小塊・黄土小塊少量含有。

●層 赤褐色土 (OY780) : 土質均質土。土質均質土小塊・黄土小塊少量含有。

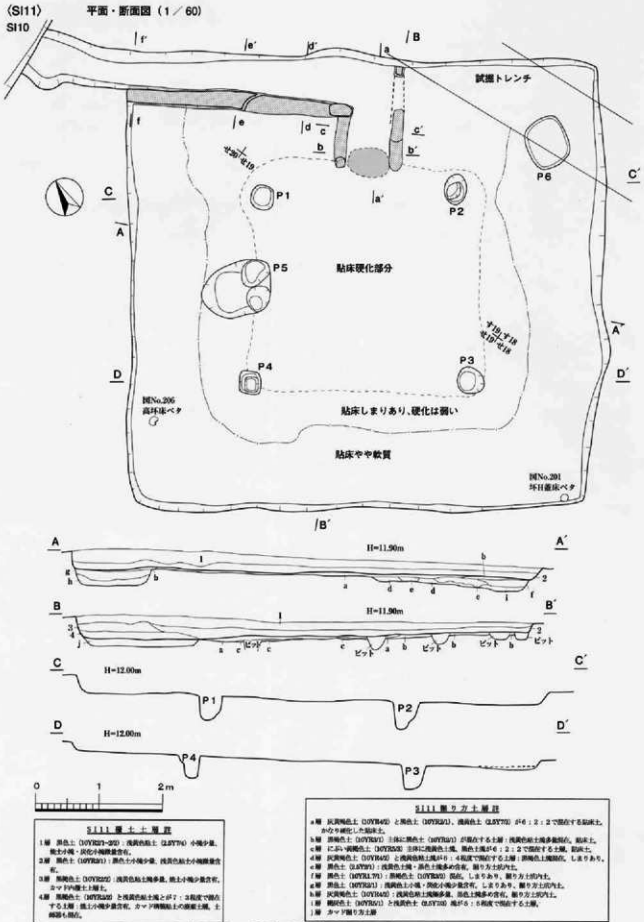
▲層 赤褐色土 (OY780) : 土質均質土。土質均質土小塊・黄土小塊少量含有。

○層 赤褐色土 (OY780) : 土質均質土。土質均質土小塊・黄土小塊少量含有。

△層 赤褐色土 (OY780) : 土質均質土。土質均質土小塊・黄土小塊少量含有。

▽層 赤褐色土 (OY780) : 土質均質土。土質均質土小塊・黄土小塊少量含有。

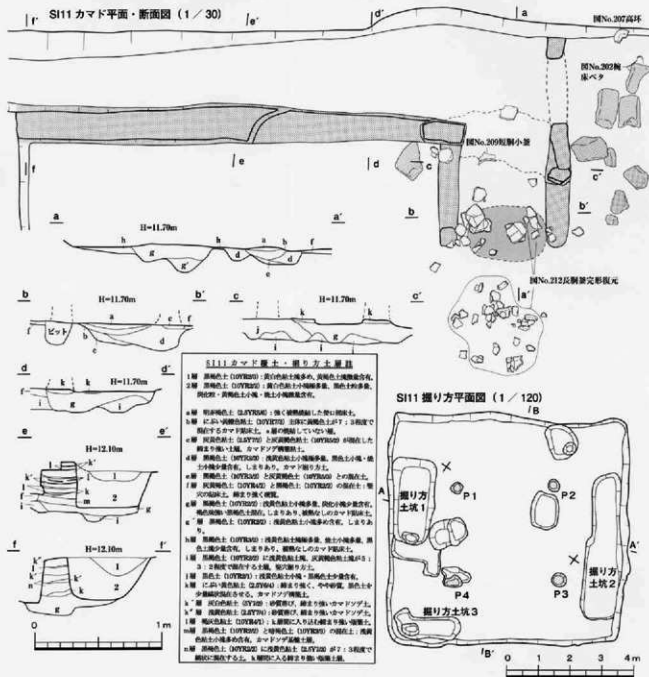
第34図 A地区竪穴建物遺構図9 (S110)



第35図 A地区竪穴建物遺構図10 (SI11-1)

若干東側に広がっている。先述したように、主柱穴外周が広いだけで、柱間規模は中型の竪穴建物とほぼ同規模を呈す。各主柱穴とも径35cm程度と細く、柱痕状に段掘りされた部分の径は20cm程度を測る。P4を始めとして、方形に近い平面プランを呈し、床面からの深さは40cm程度とやや浅めである。柱穴覆土は柱痕状の堆積がなく、いずれも柱を抜き取った後に、黄褐色土小塊を混在させた黒褐色土で埋め戻されている。他のピットとしては奥壁右側に80×65cmの隅丸方形土坑（P6）が、P1とP4の間に85×110cmの楕円形土坑（P5）が掘られる。いずれも浅い土坑で、土器出土も少なく、竪穴覆土と同様の土質が埋められている。貯蔵穴状のものだろう。

（カマド）北東側壁の中央に造り付けられるL字型カマドである。煙道部以外、ソデ構築粘土は大半が破壊されており、ソデの基底部分がかろうじて残るのみである。形状は奥壁からカマドソデがまっすぐと伸び、L字に曲がるタイプで、煙道部に遺存したカマドソデの状況から、砂質帯びた灰白色粘土と黒褐色系の粘土を互層に叩き締



第36図 A地区竪穴建物構図 11 (SI11-2)



め、幾重にもそれを重ねてゆく、重厚かつ丁寧な作りをしたカマドであることが推察される。基本的に粘土造りであるが、焚口の右ソデ部分に凝灰岩質の切石基底部が遺存しており、焚口の石組みで構築する構造であったと予想される。規模は奥壁からカマドソデ端まで175cm、焚口被熱面までは190cm、焚口での内寸幅72cm、外寸幅100cmを測る。煙道はL字屈曲部分から竪穴内末端まで355cmを測り、さらに竪穴外へ伸びる。煙道幅は屈曲部付近で内寸72cm、外寸90cmと極めて太く、先端部へむけて徐々に幅を減じ、竪穴内末端で内寸65cm、外寸85cm、竪穴外では内寸幅63cmとなる。焚口床面が酸化焼結する以外は、床面の焼土化はほとんど確認されず、焚口床についても、焼土層は3cm程度と薄いなどカマドの長期使用は考えにくい。カマドは煙道の途中からカマド本体部分にかけて、ソデ構築粘土を破壊し捨てており、それをカマドの右側に意識的に廃棄している。カマド内出土土器についても、焚口前面に1個体の長胴釜を細かく破壊し捨てており、建物廃絶に伴う意識的なカマド破壊行為によるものと理解される。

(覆土堆積と遺物出土) ほぼ単一層と言えよう覆土が堆積しており、短期間の間に意識的に埋め戻されたものと理解する。覆土内には多くの遺物が混在しているが、半数が上層出土のものであり、下層から床面に遺存する土器は少ない。ただ、南側コーナーで須恵器坏耳蓋の半完形品が、西側コーナー付近から土器高坏の坏部完形品が床面からそれぞれ出土しており、カマド周辺においても床面に伴う形でⅠ期の土器が出土している。上層遺物はⅡ期の時期にまとまっており、埋め戻された後の土坑状の切り合いかもしれない。遺物総量は、上層も含め須恵器食器具93点、土師器食器具93点、土師器煮炊具1152点、須恵器貯蔵具122点だが、須恵器の多くは上層に伴うものであり、食器具は土師器主体であったと理解される。

(床面と掘り方) 床面は全体がフラットだが、谷部へと緩く下がっており、2～2.5度の傾斜角度を測る。床面全体にはほぼ貼床が施され、主柱穴間が硬化する。主柱穴の外周は比較的軟質の床で、その部分で掘り方土坑が掘り込まれている。掘り方土坑は幅50～70cm、深さ20～30cm程度の底面の平坦な略長方形土坑で、特に左右に配置される。

## 12. S112

(立地・規模・形態) S111の南側に隣接して建てられる小型の竪穴建物で、四本主柱だが、壁際に主柱の建つタイプである。竪穴の奥壁やや右に寄った位置に小型カマドが付設されており、竪穴規模は495×440cmのやや縦長の方形プランを呈する。主軸はS-70°Eである。

(柱穴と他のピット) 四本主柱穴は左右の側壁際に配置されており、内側に傾斜して掘られている。右列で15～20度、左列で30度程度傾くもので、この時期の竪穴建物としては、他に例を見ない柱建ち構造をもつ。柱間規模は横が470cm、縦が190cmで、主柱穴は円形プラン、径40～50cm、床から打ち込まれる深さは50～60cmを測る。その他のピットとしては、カマド右側から右壁沿いに連続する土坑状の落ち込みと、P3の内側に径65cm、深さ15cmの円形土坑(P5)が掘り込まれている。いずれも中に土器が多く捨てられており、特にP5内覆土にはカマド粘土土塊が多く混在している。他の竪穴にも見られるカマド粘土廃棄土塊と位置付けできる。

(カマド) 南側壁の壁やや右に寄った位置に造り付けられる小型の無煙道型カマドである。形状は奥壁からカマドソデがまっすぐと伸びるタイプで、小型カマドの中ではソデ構築粘土が厚くしっかりと作られているのが特徴と言える。焚口の石組みはなく、全て粘土造り。カマドの規模は、奥壁からカマドソデ端まで35cm、焚口被熱面までは75cmと短いが、幅は焚口での内寸65cm、外寸85cmを測る。床面は奥へ向けほとんど傾斜しない形態で、焚口が被熱焼土化する以外にもソデ内壁に被熱面を形成する。カマド内下層には土師器煮炊具を中心に半完形品を多量混在する焼土塊の層があり、カマド破壊に伴い、一緒に投げ込まれたものと見られる。また、カマドの前面や左側には土師器煮炊具の完形品が数個体廃棄されており、同様の破壊行為に伴うものと見る。当カマド焚口床の被熱状態はさほど強くないが、この被熱面から手前1mの箇所に強く酸化焼結面が確認できる。これに伴うようなカマドソデ構築粘土等は全く遺存していないが、この焼結面までカマド貼床が続いていることから、この焼結面を1次カマドの焚口面と位置付けできる。竪穴建物の奥壁右側に残る2段の掘り方直路や1次焚口面の位置などから考えると、1次カマド段階の竪穴から奥壁を拡張したためのカマド造り替えであったものと見たい。

(覆土堆積と遺物出土) 覆土堆積層はいずれも類似層であり、ほぼ単一層と言えようものである。覆土内上層の遺物混在は少なく、当竪穴出土遺物の大半は、カマド内及びその周辺への廃棄品と、右側の土坑への廃棄である。カマドや掘り方出土のものを含めても、須恵器食器具46点、土師器食器具32点、土師器煮炊具447点、須恵



器貯蔵具91点と少ない。出土遺物は上層にI1期のものが混在するが、カマド周辺や土坑への廃棄品はII2期に様相がまとまっており、竪穴時期を示すものと考えられる。

(床面と掘り方) 床面は平坦だが、竪穴中央の掘り方土坑をもつ部分から若干下がり、カマド竪穴前面でもさらに若干窪んでいる。床面全体が貼床され、床下には竪穴のほぼ中央に円形土坑の連続する掘り方土坑が掘り込まれている。貼床はカマド前面から竪穴中央に広く硬化面をもつが、特にその中央付近、掘り方土坑を持つ付近で顕著な硬化が認められる。

### 13. S113

(立地・規模・形態) A地区の南側に位置する中型規模の四本柱竪穴建物である。竪穴規模は535×535cmの正方形の平面プランで、北側壁中央にL字型カマドが付設される。L字型カマドの煙道部は竪穴の壁よりも奥へ40cm程度広がっており、これも含めれば、横幅は575cmとなる。主軸はN-19°-Wで、S111とほぼ同じ主軸を向く。竪穴の間隔から見ても同時併存の竪穴建物と位置づけられよう。

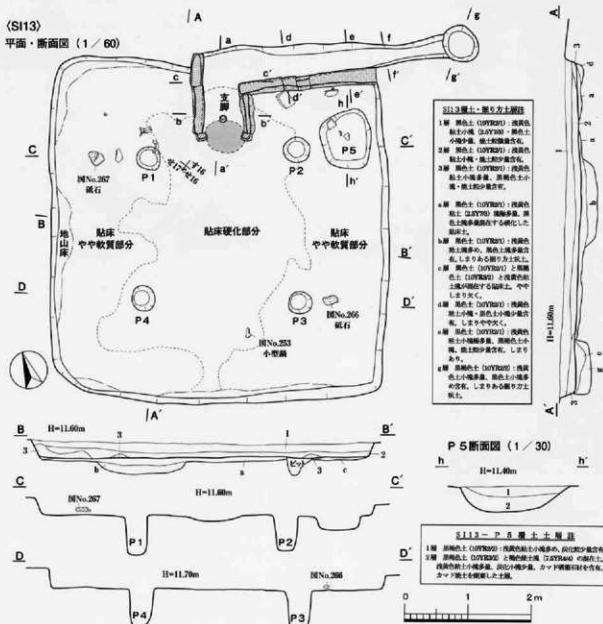
(柱穴と他のピット) 四本柱穴を竪穴内に均等に配置するもので、柱間規模は220×250cmを測るが、P2のみ北東側へややずれて存在している。当地形が谷側へ傾斜してゆくことに関連性を持つものかもしれない。各柱穴とも径35~40cm程度の円形プランで、床面から深さ60cm程度にしっかりと掘り込まれている。柱底は確認されず、いずれも柱を抜き取った後の埋め戻し土と思われる。他のピットとしてはP2の右側に規模90×80cm、深さ20cmの隅丸長方形土坑が掘られており、カマド粘土塊や焼土塊が廃棄されている。

(カマド) 北側壁の中央に造り付けられるL字型カマドである。ほぼ完存状態で検出されている数少ない事例である。カマド煙道が竪穴の奥壁よりもやや突出して掘られ、右側上がりで煙道が伸びる。形態は、奥壁から重厚なカマドソデがまっすぐと伸び、煙道部がL字に曲がるタイプで、全体に粘土造りだが、竪穴の両ソデには凝灰岩質の切石が埋設されている。両ソデ石とも粘土造りのカマドソデ内側壁面よりも若干内側に入り込んでおり、竪穴を絞り込んでいる。天井石は遺存していないが、カマドの右側に天井石と思われる同様の石材の半欠け品が出土しており、竪穴を石で囲む石組み構造であったものと理解される。カマドソデ壁粘土は砂質帯びた灰白色粘土と黒褐色系の粘土を互層に叩き締め、幾重にもそれを重ねてゆく、重厚かつ丁寧な作りをしており、かなり硬質に仕上がっている。ソデ粘土の継ぎ目が所々確認できており、ここで粘土を版築してソデ立ちさせたものではなく、あらかじめ作っていたソデ粘土の塊を組み立てたという理解が正しいのかも知れない。規模は奥壁からカマドソデ端まで137cm、竪穴被熱面までは163cm、竪穴石組みでの内寸幅57cm、ソデ粘土では内寸幅66cm、外寸幅90cmを測る。煙道はL字屈曲部分から竪穴端まで215cm、竪穴外に出てからも170cm伸び、煙道長は全体で385cmを測る。煙道幅は屈曲部付近で内寸55cm、外寸70cm、先端部へむけて徐々に幅を減じ、竪穴外へ出た後は内寸幅30cmと細くなる。先端部には径55cm、深さ30cmの円形ピットが掘られており、煙突設置に関連する掘り込みの可能性を考えている。カマド内床面は奥へとほとんど傾斜しないが、煙道部床では煙道先端へ向けて徐々に傾斜してゆき、竪穴外へ出てからは溝の深さは15cmを測る程度となる。カマドの被熱状態は、竪穴床面で強く酸化焼結する以外、被熱は極めて弱く、焼土化は認められない。ソデ内壁についても煙道屈曲付近まで酸化焼結面が及ぶ程度である。カマドの奥壁や煙道部には被熱面およびふところはなく、焼けた様子も見られない。カマド支脚は、竪穴被熱面のやや奥中央に埋設された状態で、断面八角形の凝灰岩質の棒状支脚が検出されている。上端部を欠損し、高さは不明。カマド内には土師器が廃棄されているが、カマド使用のものは認められず、竪穴天井石の除去も含め、竪穴建物廃絶に伴う何らかの破壊行為が行われていたと見てよい。

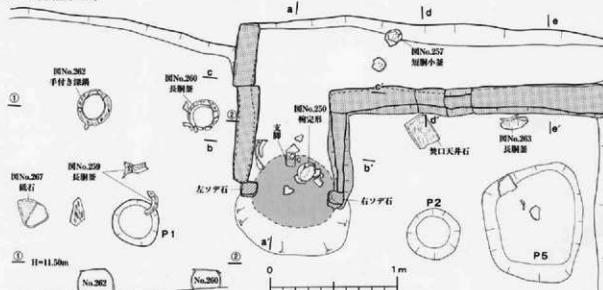
(覆土堆積と遺物出土) 覆土は黒色系の混在物少ない軟質の土で、ほぼ単一層と言えるような埋め戻しの土層堆積である。カマド周辺に土師器煮炊具の廃棄が確認されるが、覆土内の遺物は少なく、全体で須恵器食器具46点、土師器食器具36点、土師器煮炊具439点、須恵器貯蔵具66点程度である。須恵器食器具はほとんどが上層の混入品で、当建物に伴うものは極めて少なく、土師器などからI1期の竪穴建物と見る。カマド左側に土師器がまとめて捨てられている部分があり、特に奥壁際には手付き深鍋と長胴釜が置かれた状態で出土している。いずれも胴部中位以下を欠き揃えた状態の上半部完成品で、床面に一部食い込むようにして並べるように設置されている。両個体は、口縁部高がほぼ揃った状態に合わせてあり、カマド祭祀という側面と器台などの目的で設置された可能性の2点から検討する必要がある。なお、主柱穴外周部、主柱に近い部分の床面直上で、砥石として使われた平坦面を持つ大型の石が2個出土している。床から2~3cm厚くたみ、使用状態での出土とは言い難い

(SI13)

平面・断面図 (1/60)



カマド平面図 (1/30)



第38図 A地区竪穴建物遺構図13 (SI13-1)



が、当堅穴建物に伴うものであることはほぼ間違いなく、鉄器加工との関連性を予感させる。

**(床面と掘り方)** 床面は全体がフラットで、床のほぼ全面に貼床される。掘り方土坑は主柱穴間からやや左側壁際へ伸びる位置と主柱外周の手前側の位置にあり、いずれも深さ30cm程度で底面平坦な形状を持つ。四本主柱間が硬化し、その硬化面は手前側へと伸びている。入り口部の可能性がある。

#### 14. SI14

**(立地・規模・形態)** A地区の南端に位置する小型の堅穴建物である。南東側のほぼ半分が深く削り取られ、既に消失しているため、全形は不明だが、堅穴の奥壁中央に小型カマドが付設されるタイプと予想される。堅穴内に確認されるしっかりとした掘り込みを持つピットが主柱とすれば、四本主柱の可能性が高く、そこから堅穴規模を復元すると、550×430cmの隅丸長方形プランとなる。ただ、堅穴プランの北側壁から北東コーナー付近の形状が歪んでおり、不確定要素は多い。主軸はN-21°-Eで、SI12の軸からほぼ90度振る。

**(柱穴と他のピット)** 当タイプの小型堅穴建物に四本主柱が均等配置される事例はほとんどなく、P1～P3を主柱穴とすることに戸惑いはあるが、壁外柱穴も不明のため、ここでは仮に主柱穴と判断しておく。P1～P3から柱間規模を復元すれば210×195cm。柱穴は円形プランで、径40cm、深さは30～60cmとややばらつく。柱痕は確認されず、いずれも柱を抜き取った後に、黄褐色土小塊を混在させた黒色系の軟質土で埋め戻されている。他のピットとしては、カマド左側に径100cm、深さ30cm程度の円形土坑が、南西側コーナーに径70cm、深さ30cm程度の円形土坑がそれぞれ掘られている。ピット内覆土は堅穴覆土と同様のもので、多くの土器が廃棄されている。貯蔵穴的なものか。

**(カマド)** 北側壁に造り付けられる小型カマドで、ソデ粘土が基底部付近しか遺存しておらず、全容は不明だが、構築粘土分布から判断すれば、カマド奥から焚口まで逆「U」字形を呈す無煙道型と推察される。カマドの規模は、奥から焚口被熱面まで90cm、焚口での内寸幅は60cm程度を測る。床面は奥へ向けて緩く傾斜する形態で、焚口が被熱焼土化する以外は、焼土化は認められない。カマド内には土師器長胴釜の半完成品と、焚口前面には須恵器環B蓋・身の半完成品が廃棄され、カマド右奥にも土器廃棄が認められる。

**(覆土堆積と遺物出土)** 覆土堆積層は主柱穴間のみ分層できるのが気になるが、いずれも類似層であり、他の堅穴建物と同様の堆積状態と理解する。覆土内の遺物混在は多くはなく、カマドや掘り方出土のものを含めても、須恵器食膳具34点、土師器食膳具29点、土師器煮炊具463点、須恵器貯蔵具40点程度である。カマド付近の床面遺物を含め、Ⅱ2期からⅡ3期に包括されるもので、堅穴廃絶時期を示すものと判断される。

**(床面と掘り方)** 床面は西側の壁際が一部地山のままで、それ以外は貼床される。掘り方土坑は特に主柱穴間内に多く、複数の円形土坑が重なり合うように掘り込まれている。貼床はカマド焚口前面付近と主柱穴間の一部が硬化するが、大半は軟質の貼床で、黒色土をベースとしている。

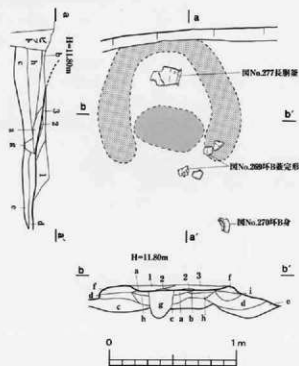
#### 15. SI15

**(立地・規模・形態)** A地区の南西側、SI01の南側に隣接する小型堅穴建物で、一部SK25と重複する。削平により、床面まで削り取られており、掘り方土坑が露出した状態で検出されたため、本来の堅穴規模は不明である。ただ、カマド焚口焼結面の位置や掘り方土坑の位置関係、その両側で検出できた柱列の位置から復元すれば、縦軸600cm程度、横軸400cm弱の縦に長い堅穴建物と推察可能である。堅穴の縦軸壁際に八本の側主柱をもち、堅穴コーナーにカマドが付設されるタイプと考えられる。主軸はS-24°-Wで、SI01の主軸方位に近い。

**(柱穴とカマド)** 八本の柱間規模は480×420cmで、柱穴は径30～40cmの円形プラン。深さは深いもので45cmを測るが、P7・8は10cm程度と浅い。削平の状況を考慮する必要がある。柱穴覆土に柱痕は確認されず、いずれも柱を抜き取った後に埋め戻されたものである。カマドは壁際での被熱床面のみ確認できただけで、カマドを構築する粘土分布なども確認できていない。

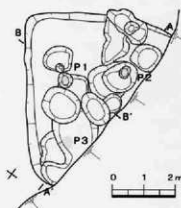
**(掘り方と遺物出土)** 掘り方土坑は、カマド焚口前面部分から堅穴の中央付近まで存在する。いずれも黄褐色土を多量混在するしまり強い黒褐色系の土が埋められており、他の掘り方土坑内覆土と共通する。深さ20cm程度で、底面が平坦であるということも共通要素で、掘り方土坑4の180×210cmの長方形土坑以外は、径100cm程度の円形土坑が主体的である。掘り方土坑内及びその周辺から須恵器食膳具93点、土師器食膳具20点、土師器煮炊具179点、須恵器貯蔵具46点が出土する。時期は掘り方土坑内出土土器を中心に、Ⅱ2期からⅡ3期にかけて位置付けられる。

SI14 カマド平面・断面図 (1/30)

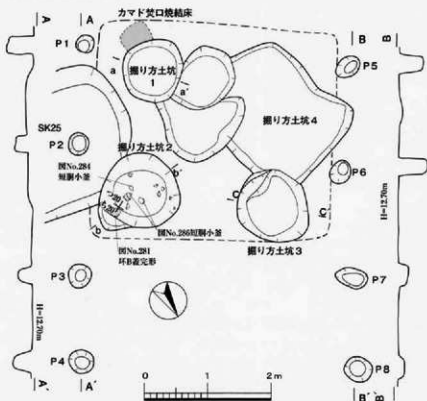


- SI14 カマド掘土・掘り方土層記**
- 1層 黒色土 (01YR5.2/7) : 炭灰色土 (2.5YR5) 小塊・塊土小塊少量含有。
  - 2層 黒褐色土 (01YR3/2) : 黒土多量混入する土砂少量含有。塊土小塊少量含有。
  - 3層 黒褐色土 (01YR3/2) : 炭灰色土の塊多量。塊土小塊少量含有。
  - 4層 灰褐色土 (01YR4/2) 褐色土 (2.5YR3/2) 小塊多量混入。炭灰色土の塊少量土。塊土小塊少量含有。
  - 5層 黒褐色土 (01YR3/2) : 炭灰色土の塊多量。黒色土の塊多量混入したカマド掘土。塊土小塊少量含有。塊土小塊少量含有。
  - 6層 灰褐色土 (01YR4/2) 炭灰色少量含有。カマド掘り方土。
  - 7層 黒褐色土 (01YR3/2) : 炭灰色土の塊多量混入。炭灰色土の塊少量含有。
  - 8層 黒褐色土 (01YR3/2) : 炭灰色土の塊多量混入。炭灰色土の塊少量含有。
  - 9層 灰褐色土 (01YR4/2) と黒褐色土 (2.5YR3/2) が4~5層程度で混入したカマド掘り方土層。しまりあり。中砂の混入あり。
  - 10層 同上(9層)土 (01YR4/2) 塊土小塊・炭灰色土の塊少量。炭灰色少量含有。
  - 11層 黒褐色土 (01YR3/2) : 炭灰色土の塊少量混入あり。
  - 12層 黒褐色土 (01YR3/2) : 炭灰色土の塊少量混入あり。

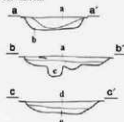
掘り方土断面図 (1/120)



(SI15)  
平面・断面図 (1/60)



掘り方土坑1~3断面図 (1/60)  
全てH=12.70m



- SI15 掘り方土坑土層記**
- 4層 黒褐色土 (01YR3/2) : 炭灰色土の塊多量混入のしまりあり。炭灰少量多量。塊土小塊少量含有。
  - 5層 黒褐色土 (01YR3/2) と黒褐色土 (01YR3/2) が5~7層程度で混入する土層。炭灰少量多量。塊土小塊少量含有。
  - 6層 黒褐色土 (01YR3/2) : 炭灰色土の塊多量混入のしまりあり。炭灰少量多量。塊土小塊少量含有。
  - 7層 黒褐色土 (01YR3/2) : 炭灰色土の塊多量混入のしまりあり。炭灰少量多量。塊土小塊少量含有。
  - 8層 黒褐色土 (01YR3/2) : 炭灰色土の塊多量混入のしまりあり。炭灰少量多量。塊土小塊少量含有。
  - 9層 黒褐色土 (01YR3/2) : 炭灰色土の塊多量混入のしまりあり。炭灰少量多量。塊土小塊少量含有。
  - 10層 黒褐色土 (01YR3/2) : 炭灰色土の塊多量混入のしまりあり。炭灰少量多量。塊土小塊少量含有。

第40図 A地区竪穴建物遺構図15 (SI14-2、SI15)

## 16. SI17

**(立地・規模・形態)** A地区のほぼ中央に位置する若干大型の四本支柱竪穴建物で、竪穴のカマドから東隣付近が試掘トレンチにより、床面付近まで削り取られてしまっている。竪穴の壁立ち上がり不明瞭な部分があり、やや歪んだ形状をなすが、南西側から北西側にかけては壁周溝を伴い、しっかりとした方形プランを呈する。壁周溝は幅15cm、深さ10cm程度の断面U字形で、覆土を明瞭には把握していないが、建物の壁建ちに関連する板敷状施設の掘り方にあたるかと推察する。竪穴の規模は696×620cmの縦長方形プランで、主軸はN-31.5°-Eである。

**(柱穴と他のピット)** 四本支柱穴は柱間規模310×300cmのほぼ正方形で、カマド付設の分だけ、若干手前側に寄るものの、ほぼ竪穴内に均等に配置される。支柱穴は柱の抜き取り時にやや径が太くなった可能性を持つが、径30~40cmの深く掘り込まれた部分が柱痕で、径60~70cmの上段掘り込みは柱抜き取り時の掘り方掘削部分と思われる。深さはP3のみ60cmと浅いが、他は80~90cmと深く、埋土は柱裏部分がしまりなく軟質の黒色土(10YR2/1)、上段掘り直し部分は黄褐色土小塊を多量混在させたしまりある黒褐色土(10YR2/2)で埋められている。支柱穴以外のものとしては、当竪穴の南西側壁沿い掘られた長楕円形土坑がある。180×80cmの規模を持つ深い土坑で、カマドソデ粘土のような焼けた粘土塊が多量に廃棄されている。遺物の混在は多くはなく、カマド破壊時に掘られ、焼土を廃棄したものであろうか。

**(カマド)** 北東側の壁中央付近に造り付けられるカマドで、竪穴廃絶時のカマド破壊と試掘トレンチにより、焚口付近のカマドソデしか残存していないため、カマドの全体形状を把握することは困難である。しかし、竪穴掘り方を見ると、カマド左側の奥壁60cm手前側に段が伸びており、カマド煙道ソデ構築基部の地山掘り残り痕跡の可能性もある。竪穴規模を北東側へ拡張した可能性もあるが、カマドの左側のみであることと、竪穴拡張に伴うカマドの造り替え状の痕跡が認められないことなどから、L字型カマドの竪道痕跡であると理解したい。カマドは焚口ソデ端から奥壁まで160cm、被熱面端まで195cmと大きいが、焚口の幅は内寸50cm程度と狭い形状をしている。焚口被熱面の焼結層はさほど厚くはなく、カマドに伴う遺物や支脚の遺存も確認できていない。

**(覆土堆積と覆土内遺構、遺物出土)** 覆土は床面から10cm程度の厚さで、4層の浅黄色粘土塊を多量混在させるしまり強い黒褐色系の土層があり、その上に1・2層の遺物を多く混在する通常の竪穴埋土がある。4層は踏み固めたような土層で、その上面に焼土遺構とした被熱焼結面をもつ遺構がある。竪穴建物に伴うような遺物群よりもやや新しい土器が焼土遺構上面に廃棄されており、当竪穴に関しては、埋め戻ししないまましばらくの間、他の目的、例えば煮炊きの場として使用されていた可能性がある。1・2層は焼土遺構廃絶後に埋められたことになろう。当竪穴出土土器は、須臾器食器具374点、土師器食器具109点、土師器煮炊具2,088点、須臾器貯蔵具290点となる。床面出土の遺物は竪穴壁際とカマド付近で出土する程度で、掘り方土内からは一定量。上層から中層にかけてが多い。時期は床面付近でⅡ1新~Ⅱ2期、掘り方でもこの時期が主体で、焼土遺構ではⅡ3期からⅢ期のものとなる。

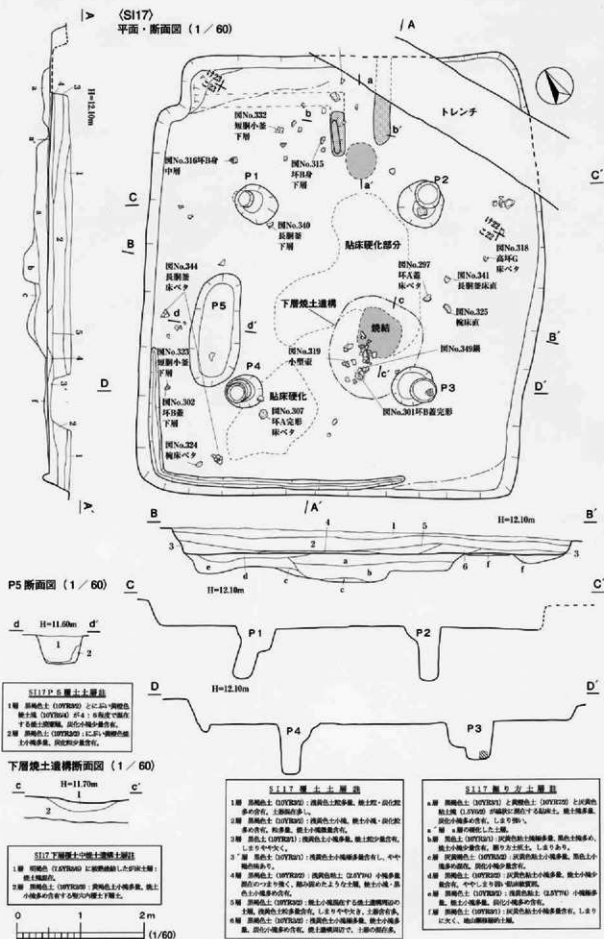
**(床面と掘り方)** 床面は全体がフラットで、床面のほぼ全面が貼床されている。床下には複数の掘り方土坑が掘り込まれており、特に支柱間の内側に複数の楕円形土坑が連続して掘られる。竪穴の北西側と南側壁沿いにも長方形土坑が掘られている。貼床は支柱穴間が比較的硬化した部分をもつが、概して、顕著な硬化部分はなく、黒褐色系の貼床が占められる。

## 17. SI18

**(立地・規模・形態)** A地区の南東側に位置する小型竪穴建物で、黒色地山上に掘られている。竪穴の南側隅にコーナーカマドを付設するタイプで、竪穴規模は420×358cmを測る。平面プランは若干縦に長い隅丸方形で、主軸はS-50.5°-Wと、このタイプの竪穴の中では最も西へ主軸を振る。竪穴内に支柱穴はなく、竪穴外にも柱穴の確認はなされていない。ただ、竪穴外の地山は黒色土であるため、柱穴覆土識別が困難で、確認ができなかっただけの可能性は高い。

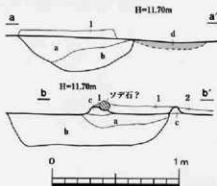
**(カマド)** 南隅に造り付けられる無煙道型の小型カマドである。ソデの一部を欠損するが、凡その形態は復元可能で、カマド奥から焚口に向かって開く逆「V」字形を呈するものと予想される。カマドソデは淡黄色系粘土と黒褐色土を混在させた粘土で作られ、支脚は土製の棒状のものが使われていたようである。規模は、カマド奥からカマドソデ端まで90cm、焚口被熱面はソデ端よりも奥にあり、手前側の被熱は弱い。焚口ソデ端での内寸幅は82cmと広く、頂部へむかひ直線的に窄まる。焚口手前側の被熱は弱く、中に入った部分で焼結面を形成するのが





第41図 A地区竪穴建物遺構図16 (SI17-1)

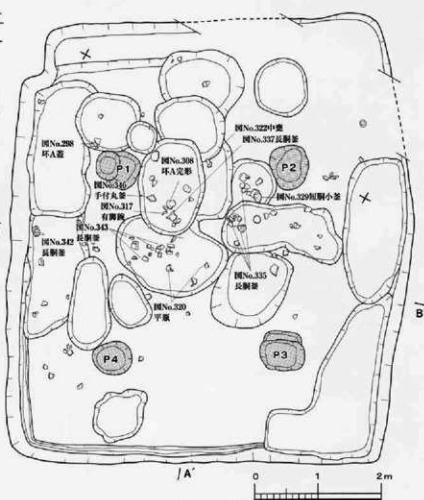
SI17 カマド断面図 (1/30)



SI17 カマド壁土・製土方土層図

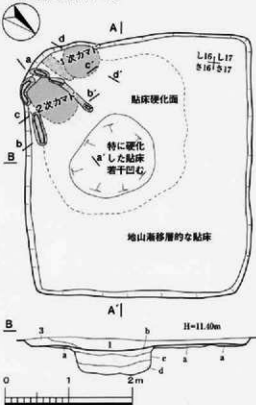
- 1層 製土土 (GY302)：焼成粘土小塊 (GY204・GY205) の塊状の塊多量混入。焼土小塊・焼化塊多量混入。焼土より石灰土塊や粘土小塊含有率が多い。
- 2層 製土土 (GY302)：焼土小塊多量。焼成粘土土塊多量混入。
- 3層 製土土 (GY302)：焼成粘土土塊・焼土小塊多量混入。焼土小塊多量。石灰土塊多量。石灰土塊多量混入。石灰土塊多量混入。
- 4層 製土土 (GY302)：焼成粘土土塊・焼土小塊多量混入。焼土小塊多量。石灰土塊多量。石灰土塊多量混入。
- 5層 石灰質土 (GY302)：石灰質土塊・焼成粘土土塊・焼土小塊多量混入。石灰土塊多量。石灰土塊多量混入。
- 6層 石灰質土 (GY302)：石灰質土塊・焼成粘土土塊・焼土小塊多量混入。石灰土塊多量。石灰土塊多量混入。
- 7層 焼成粘土土塊・焼土小塊多量混入。石灰土塊多量。石灰土塊多量混入。

SI17 掘り方平面図 (1/60)

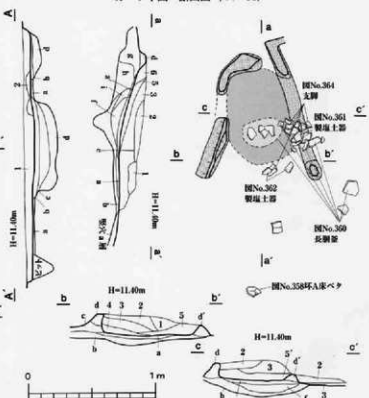


(SI18)

平面・断面図 (1/60)



カマド平面・断面図 (1/30)



第42図 A地区竪穴建物遺構図17 (SI17-2、SI18-1)

特徴と言える。なお、当カマドの右側にもカマド焚口らしき被熱焼結面があり、当初のカマド（1次カマド）の焚口であった可能性を持つ。仮に、当初のカマドとすれば、堅穴を南東側に拡張したことに伴うカマドの造り替えということも考えられる。

**（覆土堆積と遺物出土）** 覆土は黒色系の混在物少ない軟質の土で、ほぼ単一層と言えるような埋め戻しの土層堆積である。カマド周辺に土師器中心とした廃棄が確認されるが、覆土内の遺物は少なく、全体では須恵器食膳具4点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具110点、須恵器貯蔵具14点程度である。カマド前面の床付近から須恵器食膳具が出土しており、Ⅱ2～Ⅲ3期頃の堅穴建物と見る。なお、当堅穴のカマド周辺からは、完形に近い製塩土器が3点出土している。当遺跡からは破片が主ではあるが、製塩土器が各堅穴から定量出土しており、当遺跡の性格を考える上でも注目される遺物と言える。ただ、堅穴廃絶時に意図的にカマドへ複数個体を廃棄した事例は当堅穴だけであり、全て、焼塩容器であるのか検討の余地がある。

**（床面と掘り方）** 床面はほぼフラットであるが、カマド焚口の前面部分のみ、径130cmの範囲で若干窪みを形成している。この部分は最も床面が硬化している部分で、深い掘り方土坑が掘り込まれる部分にもあたる。掘り方土坑はここから南西側に複数掘られ、その部分を中心に明確な貼床をもつ。それ以外では、地山を踏んだような漸移の土層となり、あまり硬化はしていない。

#### 18. SI19

**（立地・規模・形態）** A地区の中期からやや北西寄りに位置する小型の堅穴建物で、堅穴上部が削平により消失した状態で検出されたものである。堅穴の東側1/4程度がSI21及びSK38と重複しており、土層断面観察により、両者の遺構に切られていることを確認している。カマドは奥壁のやや手前の位置、中央より若干左寄りに構築されており、被熱面の範囲や規模から考えて、壁に造り付けられるカマドより小型を呈するものと予想する。堅穴規模は縦軸の長さが不確かだが、側柱穴の配列の仕方から、重複遺構部分にも1本分の柱が存在すると仮定し、460×410cmの隅丸長方形プランになるものと予想する。主軸はN-65.5°-Wで、やや離れているが、SI02の軸に最も近い。

**（柱穴とカマド）** 前述のとおり、堅穴の主軸沿い壁際にやや小型の柱穴が4本ずつ並ぶ、側柱穴タイプと予想する。左側壁沿いは堅穴の中に、右側壁沿いは堅穴の外に位置しており、柱筋もやや歪む傾向はあるが、柱穴は径30cm程度と規模は一定である。深さ10～25cmと浅めだが、当堅穴に伴う柱穴と見てほぼ間違いなさだろう。

カマドは奥壁の手前120cmの所に焚口焼結面とソデ石が確認されており、奥がどこまで伸びるかは不確かだが、奥壁に造り付けられるタイプとは異なる小型カマドであると判断される。カマド焚口部には凝灰岩切石による左右ソデ石と天井石が遺存しており、焚口のみ石組みで構築するタイプと言える。削平のため、粘土作り部分は不明確だが、焚口幅は内寸で33cmと狭く、カマド内の土器の出土状態から見て、奥行きは1mを超えない規模のカマドソデが逆「U」字形呈す小型カマドと予想される。「へっつい」状のものと言えるかもしれない。焚口焼結面の奥、中央に凝灰岩質の支脚が埋設された状態で検出されており、そこで使用されたかのように、土師器煎茶釜が支脚の上に立ったような状態で潰れて出土している。その奥には長胴釜の完形に近い個体が出土しており、カマド廃絶の様子を知らせる。

**（覆土堆積と遺物出土）** 覆土堆積は薄く、明確な分層は壁際程度であり、他の堅穴建物と大きな差はない。覆土内の遺物混在は少なく、カマドや掘り方出土のものを含め、須恵器食膳具25点、土師器食膳具4点、土師器煮炊具387点、須恵器貯蔵具22点程度である。カマド内に廃棄された土師器煮炊具から、ほぼⅠ1期に位置づけられるものと予想するが、堅穴内出土の須恵器はⅡ2期頃のものであり、一致しない。ただ、カマドの位置や出土土器層の信憑性、堅穴の主軸などから見て、Ⅰ1期に位置づけられるのが妥当だろう。

**（床面と掘り方）** 床面は平坦で、全体に薄く貼床されるが、掘り方を持つのはカマド付近から北西側のみである。カマド焚口前面から堅穴の主軸上中央付近に若干床面の硬化した部分がある。側壁際付近は、明確な貼床ではなく、やや軟質の黒褐色系の貼土がなされる。

#### 19. SI21

**（立地・規模・形態）** A地区の中期からやや北西寄りに位置する小型堅穴建物である。堅穴の南側隅にコーナーカマドを付設するタイプで、堅穴の南西側の一部がSI19、SK38と重複し、土層断面からSK38、SI19を切って存在していることが確認できる。SI19同様、堅穴上部が削平により消失した状態であり、堅穴遺存状態は不良と言

SI18 掘り方平面図 (1/120)



- SI18 掘り方土層目録**
- 1層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊・磁土片・粘土塊多量含有。
  - 2層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊多量・褐色土小塊多量・磁土小塊多量含有。
  - 3層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊多量・褐色土小塊多量・磁土小塊多量含有。
  - 4層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊・磁土小塊多量含有。磁土小塊多量含有。磁土小塊多量含有。
  - 5層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊・磁土小塊多量含有。磁土小塊多量含有。
  - 6層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊・磁土小塊多量含有。磁土小塊多量含有。

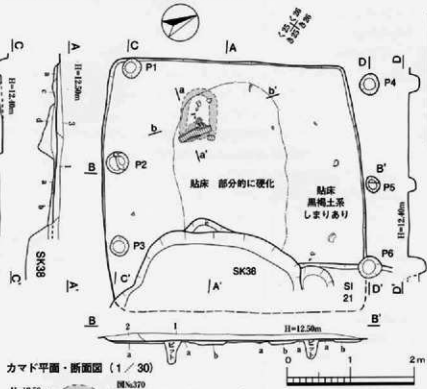
- SI18 カマド壁土・掘り方土層目録**
- 1層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊・磁土小塊多量含有。
  - 2層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊・磁土小塊多量含有。
  - 3層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊・磁土小塊多量含有。磁土小塊多量含有。
  - 4層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊・磁土小塊多量含有。磁土小塊多量含有。
  - 5層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊・磁土小塊多量含有。磁土小塊多量含有。
  - 6層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊・磁土小塊多量含有。磁土小塊多量含有。

1次カマド壁口断面図 (1/60)



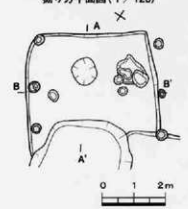
- SI18 1次カマド壁口断面土層目録**
- a層 明赤褐色土 (G197R0) : 赤褐色土 (G197R0) 粘土。カマド壁の断面図。
  - b層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊多量・磁土小塊多量含有。壁の断面図と上の磁土小塊多量含有。

(SI19) 平面・断面図 (1/60)

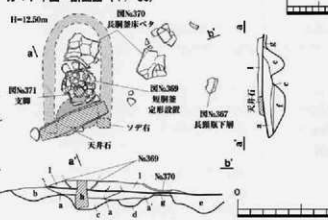


- SI19 掘り方土層目録**
- 1層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊多量含有。
  - 2層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊多量含有。
  - 3層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊多量・褐色土小塊多量・磁土小塊多量含有。磁土小塊多量含有。
- a層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊・磁土小塊多量含有。磁土小塊多量含有。
- b層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊・磁土小塊多量含有。磁土小塊多量含有。
- c層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊・磁土小塊多量含有。磁土小塊多量含有。
- d層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊・磁土小塊多量含有。磁土小塊多量含有。

掘り方平面図 (1/120)



カマド平面・断面図 (1/30)



- SI19 カマド壁土・掘り方土層目録**
- 1層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊多量含有。磁土小塊多量含有。
  - 2層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊・磁土小塊多量含有。磁土小塊多量含有。
  - 3層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊・磁土小塊多量含有。磁土小塊多量含有。
  - 4層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊・磁土小塊多量含有。磁土小塊多量含有。
  - 5層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊・磁土小塊多量含有。磁土小塊多量含有。
  - 6層 褐色土 (G197R0) : 褐色粘土小塊・磁土小塊多量含有。磁土小塊多量含有。

第43図 A地区竪穴建物遺構図 18 (SI18-2、SI19)

え、南側壁立ち上がりはSK38との重複のため、明瞭には捉え切れていない。が、堅穴規模は概ね460×370cmを測る縦長隅丸長方形プランと思われる。主軸はS-27'-Wとこのタイプの堅穴では最も主体的な方を向く。

(柱穴とカマド) 堅穴内に主柱穴はなく、堅穴壁外の主軸沿いにやや小型の柱穴が4本ずつ並ぶ個柱穴タイプである。手前短軸側の壁沿い中央にも柱穴が掘られており、SK38との重複で奥側壁は確認できていないが、梁間側にも柱が立つ可能性をもつ。柱筋がきれいに通らないものもあるが、左右とも比較的等間隔で柱が配置しており、径は細いが、20cm以上の深い柱穴が多い。

カマドは南側に造り付けられる小型無煙道型である。ソデの基部粘土が遺存するだけで、全体的に残りは悪いが、カマド奥から焚口に向かって逆「U」字形を呈するものと予想される。カマドソデは淡黄色系粘土と黒褐色土を混在させた粘土で作られ、規模はカマド奥からカマドソデ端まで90cm、焚口被熱面までは120cm、焚口ソデ端までの内寸幅は50cm程度を測る。焚口付近の被熱焼結は強く、奥では削平もあって被熱度合いは不明である。

(覆土堆積と遺物出土) 覆土堆積は薄く、明確な分層は壁際程度であり、他の堅穴建物と大きな差はない。覆土内の遺物混在は少なく、カマドや掘り方出土を含め、須恵器食膳具22点、土師器食膳具6点、土師器煮炊具172点、須恵器貯蔵具40点程度である。カマド周辺に廃棄された土器等から、Ⅱ2～Ⅱ3期に位置づけられるものもあるが、確実にⅣ1期頃に位置づけられるものもあり、後者である可能性が高い。なお、堅穴覆土から出土した375の須恵器小型鉢は、SI22出土の小型鉢と同一個体で、これについてもⅣ1期に位置付け可能と言える。

(床面と掘り方) 床面は高低差もなく、平坦で、床下に明瞭な掘り方などもない。全体的に貼床はしているが、カマド焚口前面から堅穴中央付近の硬化した部分のみ、黄褐色土粘土塊を混在させる。ただ、その周辺は地山と黒褐色土の混在するようなやや軟質の床となっている。

## 20. SI22

(立地・規模・形態) A地区の中心からやや北寄りに位置する、主軸方位S-28'-Wの小型堅穴建物である。堅穴の南側隅にコーナーカマドを付設するタイプで、堅穴の南西側の一部がSK36と重複する。土層断面からSK36埋没後に掘り込まれていることが確認でき、堅穴規模は472×380cmを測る縦長隅丸長方形プランとなる。堅穴規模、主軸方位、カマド位置など、SI21と極めて類似しており、建物の位置関係、同一個体の須恵器が両方の堅穴覆土から出土していることなどから見て、同時期に併存した建物である可能性が高い。

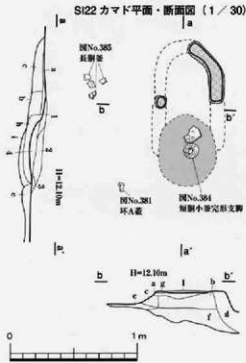
(柱穴とその他のピット) 堅穴の壁際に数箇所柱穴が確認されたが、長軸側壁沿いに柱穴が並ぶような傾向はなく、四隅の柱穴も全て確認できなかったり、不明確であったため、平面図には示していないが、掘り方平面図にあるように、短軸側中央付近と長軸側の中央付近に柱穴が確認される。このような柱穴配置が建物として可能なかどうか、検討の余地はあるが、現状ではこのような柱穴配置になるとは判断しにくい。なお、堅穴の北側に140×95cmの長楕円形プランを呈し、深さ20cmを測るピットが掘られている。覆土は、堅穴覆土と類似するものであり、貯蔵穴状のものであろうか。

(カマド) カマドは堅穴の南側に造り付けられる無煙道型の小型カマドである。ソデの基部粘土の一部が遺存するだけのもので、全体的に残りは悪いが、カマド奥から焚口に向かって逆「U」字形を呈するものと予想される。焚口の被熱焼結部が若干掘り込まれており、奥へ向かって緩い段を作る。標高への段の可能性もある。規模は、焚口幅内寸45cm、カマド奥からカマドソデ端まで90cm程度のものと予想する。焚口の焼結面中央には384の土師器短胴小釜が完形に近い状態で、伏せて置かれており、支脚として使用されていた可能性がある。ただ、使用痕跡は支脚として使用した被熱痕跡を見出しにくく、内面のコゲ状着や外面のスズなど煮炊具として使用した痕跡が残る。支脚を現位置に残したというよりも、カマド廃絶に伴う祭祀的行為の可能性もある。

(覆土堆積と遺物出土) ほぼ単一層と言えるような覆土が堆積しており、短期間の間に意識的に埋め戻されたものと理解する。覆土内の遺物混在は少なく、カマドや掘り方出土のものを含め、須恵器食膳具20点、土師器食膳具5点、土師器煮炊具146点、須恵器貯蔵具69点程度である。カマド焚口床面に置かれた土師器短胴小釜から当遺構をⅣ1期頃と想定するが、覆土内の須恵器などにはⅡ2～Ⅱ3期に位置づけられるものが定量的あり、SI21と類似した様相が見られる。

(床面と掘り方) 床面は平坦で、ほぼ堅穴の前面に貼床が確認される。ただ、ある程度の深さを持つ掘り方土坑は堅穴の南西側にあるだけで、堅穴の中央付近には明瞭な掘り方を持たない。床面の硬化は堅穴の中央付近に広く確認され、比較的顕著に硬化している。





**SI22 カマド層土・掘り方土層位**

- 1層 黄褐色土 (0YR7/3)：粘土小塊・黄褐色土小塊多量、灰色小塊多量を含む。
- 2層 黄褐色土 (0YR7/3)：黄褐色土小塊・粘土小塊少量含む。
- 3層 黄褐色土 (0YR7/3)：黄褐色土小塊、粘土小塊多量含む。
- 4層 黄褐色土 (0YR7/3)：粘土小塊多量、黄褐色土小塊多量を含む。硬く硬質な層。

a層 黄褐色土 (0YR7/3)：(c-f)黄褐色土 (0YR7/3) 小塊多量、灰色小塊・粘土小塊少量含む。しりりあるマッド泥状土。硬質硬結している。

b層 (c-f)黄褐色土 (0YR7/3)：黄褐色土小塊、灰色小塊・粘土小塊少量含む。

c層 黄褐色土 (0YR7/3)：黄褐色土小塊多量を含む。しりりとした。

d層 黄褐色土 (0YR7/3)：黄褐色土小塊・灰色土小塊・粘土小塊多量を含む。硬く硬質。カマド構造上部に相当する。

e層 黄褐色土 (0YR7/3)：黄褐色土小塊多量、粘土小塊・灰色土小塊多量を含む。しりりある粘り強い土。

f層 黄褐色土 (0YR7/3)：粘土小塊・黄褐色土小塊多量を含む。硬く硬質。SK36層上。カマド構造上部に相当する。

g層 黄褐色土 (0YR7/3)：黄褐色土小塊多量、粘土小塊・灰色土小塊少量含む。硬く硬質。SK36層上。カマド構造上部に相当する。

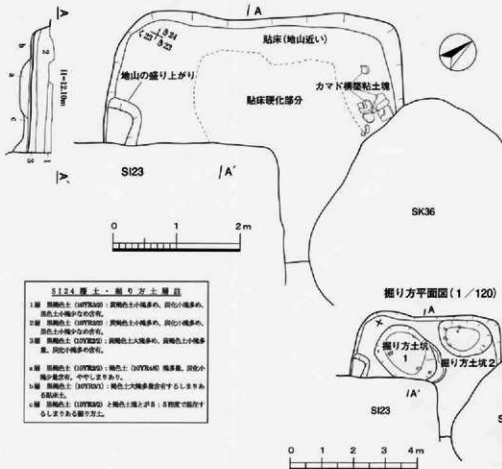
h層 黄褐色土 (0YR7/3)：粘土小塊多量、灰色土小塊少量含む。カマド開口部粘土の硬質硬結層。

i層 黄褐色土 (0YR7/3)：粘土小塊多量を含む。黄褐色土の硬質硬結層。



(SI24)

平面・断面図 (1/60)



第45図 A地区竪穴建物遺構図20 (SI22-2、SI24)

## 21. SI23

(立地・規模・形態) A地区の中央からやや北側に位置し、SI17の北側に並ぶようにして、主軸方位N-29° - Eで建てられるA地区最大規模の四本主柱型竪穴建物である。竪穴建物の北西側にSI24と、南東側にSB12・SB21と重複するが、竪穴が深く掘り込まれているのと、壁周溝が伴うため、竪穴プランはゆがみなく、直線的なしっかりとした正長方形を呈する。当竪穴建物は、壁周溝とそれに伴う壁支柱の重複から、建替えが行われたものと理解され、平面図に示した最終的な2次建物の前に少なくとも1次とした僅かに小さな建物が、または壁支柱の本数などから見て、さらにその前にも建物が存在していた可能性がある。壁支柱で最も内側に配置されるものは周溝を伴っておらず、周溝があったとしても浅いものか、支柱のみのものであった可能性がある。最も内側に位置する支柱については、建物の規模や形態など不明確な部分があり、一応ここでは建物存在の可能性を示すのみとしておきたい。2次建物の竪穴規模は876×716cmの縦に長い、しっかりとした方形プラン、1次建物では4面全てひたまり内側に入るようにして、竪穴規模830×700cmとなる。建物の全ての面で拡張するという建替えは珍しいが、それは後述するように、四本主柱をそのまま使用したためのものであろう。

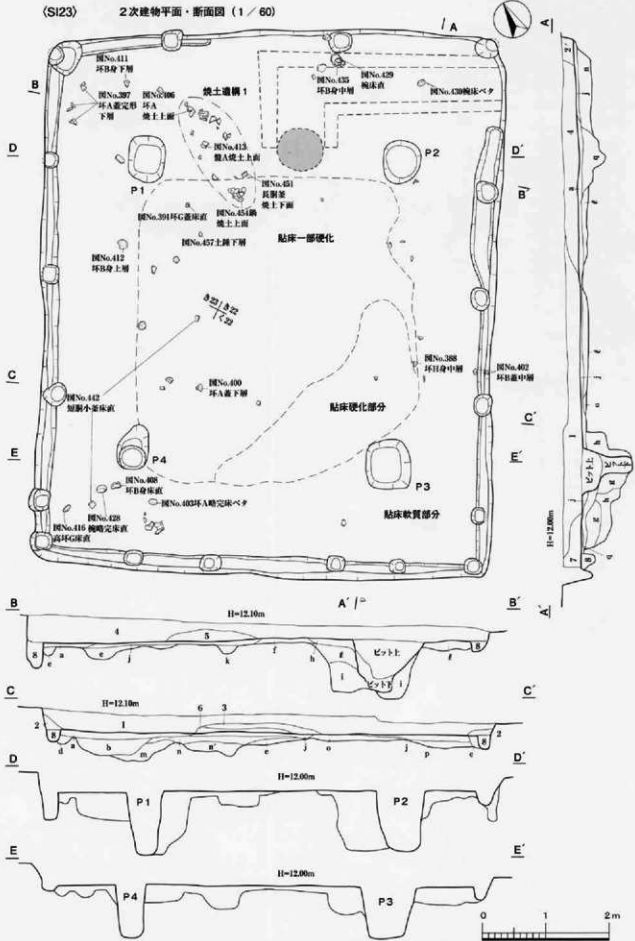
(主柱穴・壁周溝・壁支柱) 壁際に周溝と壁支柱が存在し、かつ四本主柱が竪穴の均等な位置に配置される構築を持つ。主柱の柱間規模は2次建物で480×400cmと、他の四本主柱型竪穴の中では、最も広く、特に縦の柱間を広く設定してある。1次については、P1・P2の内側に柱状の掘り込みがあり、主柱も建替えられていた可能性はあるが、P3・P4に対応する建替え柱穴は確認されず、主柱はそのまま、建物の側だけを若干広めに造り替えられた可能性が高い。主柱穴は全て方形基調の掘り方で、径60～70cm程度、深さ90～100cmのしっかりとしたものとなる。柱痕を残すものではなく、柱の抜き取りに伴う柱穴の掘り直し状の土層堆積が認められる。

竪穴内には壁周溝と壁支柱穴が巡るが、壁支柱穴は隅柱を基本とし、2次建物では、長軸側で中に4本の計6本、短軸側では奥壁で中2本の計4本、手前側で中4本の計6本となる。長軸側の支柱穴配置は左右対称で、短軸側は奥の1本に対し、2本の計4つ設置されている。周溝は幅20～30cm、深さ20cm程度のしっかりとしたもので、支柱穴は周溝のほぼ中央に、周溝下底からさらに20～30cmの深さを持つ。柱穴は方形状の平面形が主体で、径は20～30cm程度。隅柱はやや径が大きく、深く掘られる。当建物では未確認であるが、同構造を持つ壁周溝の覆土堆積状態から、周溝のほぼ中央付近に板状の痕跡を確認できるものがあり(B地区SI69)、支柱間は板敷で繋がるような壁構造のものであったと予想される。支柱穴は竪穴全体に配置されるが、周溝のみは東側の壁部分において、途切れている。丁度、カマドが存在したような位置で途切れており、カマド煙道の付設と関連性があるものと見ている。なお、1次建物についても、2次建物同様、長軸側で中に左右対称の位置に4本、短軸側では奥壁で中央に1本と左寄りに1本、手前側では4本の配置となる。壁周溝もカマド付近で途切れており、2次建物と同じ理由によるものだろう。

(カマド) 北東側の奥壁中央付近から手前側2mのところより顕著に被熱焼結した床面があり、そこから奥壁にかけてカマド床面を構築するような黄褐色系粘土分布が確認される。カマドソデの遺存は全く確認できず、どのような構造のものであったのか判断材料に欠くが、焚口焼結面の位置と広さから、焚口幅80cm程度、奥行き180cm程度の大型のカマドであると予想する。また、通常の無煙道型カマドが構築されていた場合、ちょうど排煙口の位置するような箇所に壁支柱が存在しており、この場所から右側に付けて周溝が途切れていることを考え合わせると、煙道が右側に曲がるL字型カマドである可能性が高い。当壁周溝・壁支柱建物構造に初期の段階はL字型カマドが付設されていた事例があり(C地区SI90)、その場合の壁際を走るカマド煙道のソデは、壁周溝の内側に粘土構築されている。カマドに伴う焚口焼結面は1箇所しか確認されておらず、焚口位置は変わっていないと思われるが、竪穴の奥壁は若干1次から2次へと拡張しており、造り替えがあった可能性はある。

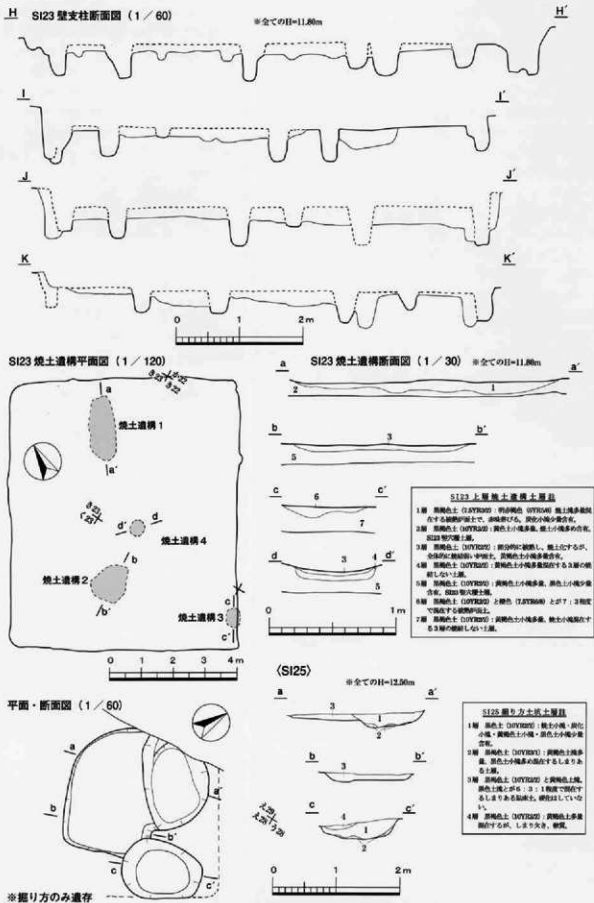
(覆土堆積と覆土内遺構・遺物出土) 覆土中には床面より15cm上の部分で、焼土遺構とした被熱焼結面が4箇所確認されており、竪穴建物の廃絶後の竪穴の底を煮炊き場として使用した可能性がある。特に焼土分布の広い焼土遺構1の焼結面上には土器が廃棄されており、竪穴建物に伴うと思われる土器よりもやや新しい様相をもつ。ただ、413の盤B以外は大きな時間差はなく、比較的早い段階で埋め戻されたものと見ている。なお、竪穴内覆土については、北東側のカマド周辺の広い区域に渡って、カマド構築粘土を多量に混在させたような4層が堆積する。当建物のカマドがソデ粘土をことごとく残していないため、これらの土砂はカマド破壊に伴うものである可能性はあるが、堆積は焼土遺構として使用された後であり、その時間差が疑問とされる。





第46図 A地区竪穴建物遺構図 21 (S123-1)





第48図 A地区竪穴遺構遺構図 23 (SI23-3、SI25)

出土土器は、カマドに廃絶されたような良好な資料には恵まれていないが、下層から床面付近に多く、掘り方土坑の出土についても比較的多く確認される。堅穴の覆土中層から上層での出土も含め、須恵器食器具261点、土師器食器具146点、土師器煮炊具2268点、須恵器貯蔵具488点が出土している。床面に廃絶された状態で出土するものは多くはないが、西側コーナー付近とカマド周辺付近に土師器碗の略定形(428~430)や須恵器食器具類(403・408・416)があり、堅穴の時期を示す資料となりえる。また、掘り方土坑内からも須恵器食器具類や鍋等の土師器煮炊具が破片で一括廃棄されている資料があり、建物の時間幅を見る上での資料も得られている。堅穴建物廃絶の資料としては、Ⅱ2期にはほぼ包括される資料で、どちらかと言えば、やや新段階的な資料を主体としているが、掘り方土坑資料についてはⅡ2期でもやや古手の様相と見ている。焼土遺構から上層にはⅡ2期からⅢ期の資料が見られ、堅穴埋戻し後に掘られる焼土遺構としての廃絶は遅くともⅢ期頃ではなかったかと考えている。

(床面と掘り方) 床面は凡そ平坦であるが、全体的に北東側から南西側に若干傾斜しており、主柱穴間が高く盛り上がっている。床面の全面が貼床され、床下にはほぼ全域にわたって多くの楕円形掘り方土坑が掘り込まれている。掘り方土坑内の遺物出土は多く、鍋など的大型煮炊具一個体を小破片で複数の掘り方土坑内に入れる事例もある。須恵器窯の舟底状ピットに湿気抜きのため、炭化材や須恵器片を混入されることと同様の意味があるのかもしれない。貼床は主柱穴間が比較的硬化した部分をもつが、概して、顕著な硬化部分はなく、特に主柱穴縁部は黒褐色系の軟質な貼床の状態となる。

## 22. SI24

(立地・規模・形態) A地区の中期からやや北寄り位置する小型の堅穴建物で、堅穴の東側半分程度がSI23とSK36に切られて、消失している。堅穴内に柱穴、カマドは確認できず、主軸方位も確定できていない。ただ、下記のとおり、北側に向けてカマドが付設された可能性はあり、その場合の堅穴主軸はN-31°-Eとなる。堅穴規模は476×390cm(南東側の壁立ち上がりは不明確)で、平面形は隅丸形プランになるものと予想する。

(カマド) 堅穴内にカマドの焚口焼結面は確認されておらず、他の遺構に切られた部分に存在していたものと予想されるが、北側の床面上にカマドソダ構築に使われたような黄褐色系粘土塊が廃棄されており、北側にカマドが造り付けられていたものと予想する。類似する堅穴の規模や時期などから見て、SI26やSI28のような奥壁中央付近に造り付けられるタイプと見ている。

(覆土堆積と遺物出土) 覆土は3層に分けているが、いずれも黄褐色土塊を多く含む黒褐色土であり、ほぼ単一層と見られるものである。覆土内の遺物混在は少なく、掘り方出土のものを含めても、須恵器食器具33点、土師器食器具24点、土師器煮炊具395点、須恵器貯蔵具26点である。時期のわかる遺物はほとんど掘り方出土のもので、Ⅱ2期頃からⅡ2古期頃のもの位置づけられる。

(床面と掘り方) 床面は平坦で、全体に薄く貼床される。一部南側の壁際に地山掘り残し部分があり、入り口状のステップの可能性もある。堅穴の中央付近と北側に楕円形の深い掘り方土坑をもち、その部分で比較的硬化した貼床が見られる。掘り方土坑からの遺物出土は比較的多く、しまりある土が埋められている。

## 23. SI25

(立地・規模・形態) A地区の北西隅、尾根部の頂上付近に位置する堅穴建物である。削平が著しく、床面はなく、掘り方土坑の下底付近のみがかるうじて遺存している。また、堅穴の北西側に関しては完全に削り取られ、掘り方土坑すら遺存していない。カマドの焚口焼結面の確認もなく、遺構として確認できたものは掘り方土坑のみとなる。堅穴の主軸、規模ともに不明である。

(柱穴) 柱穴の確認はなく、掘り方土坑の深さ程の主柱穴を持たないタイプ、つまり、堅穴内に4本の主柱穴が均等配置されるような堅穴建物ではないと判断される。壁際ないしは壁外主柱穴の掘られる小型堅穴のタイプだろう。

(掘り方土坑と遺物出土) 堅穴規模は不明だが、掘り方土坑の大きさから見て、堅穴の広い範囲に掘り方土坑の掘られるタイプと判断される。掘り方土坑は底面フラットな不整形土坑で、黒褐色土と黄褐色土塊を混在させている。通常の掘り方土坑に見られるような土層が堆積している。出土遺物は掘り方から少量出土しているが、須恵器食器具2点、土師器食器具1点、土師器煮炊具1点、須恵器貯蔵具1点程度と極めて少なく、時期を確定できるものや図示できるものもなく、堅穴の時期比定は困難である。

## 24. SI26

(立地・規模・形態) A地区の北側に位置する小型竪穴建物で、竪穴の北側奥壁のほぼ中央に小型カマドを付設するタイプである。竪穴上部が倒平を受け、竪穴の掘り込みは深くはないが、壁の立ち上がりは概ね捉えられている。竪穴は460×370cmの縦長隅丸長方形プランであるが、山側で480cm、谷側で410cmと、台形状に歪んだ形状を呈する。主軸はN-23°-Eと、北側を向くSI23などよりも北側に主軸が向く。

(柱穴とカマド) 竪穴の側壁沿いに3本ずつ、計6本の主柱穴をもつ側主柱穴タイプである。主柱穴は全て竪穴内に存在しており、比較的柱筋は通っている。山側の柱列は柱間隔180~200cmで、柱穴径40cmの方形掘り方を呈するのに対し、谷側の柱列は柱間隔140~170cmとやや狭く、柱穴径も30cm程度の円形掘り方とやや小型で、深さも山側よりも浅い。

カマドは北側奥壁のほぼ中央に造り付けられるソデ構築粘土の薄い、小型無煙道型である。ソデの基部粘土が遺存するだけで、全体的に残りは悪いが、奥壁から焚口へまっすぐにカマドソデが伸びるタイプと思われる。ただ、カマド中央の内寸幅85cmから、焚口ソデ端での内寸幅55cmへと狭める形状を呈するのは特徴的である。奥壁からカマドソデ端までは125cm、焚口被熱面までは145cmを測る。カマドソデは明黄褐色系砂質粘土と暗褐色土を混在させた粘土で作られ、床には全面貼床される。焚口から奥へ80cmのところ、段をもつのが特徴で、被熱は焚口付近で最も強く焼結するが、段の手前までは床面全体に被熱が見られる。

(覆土堆積と遺物出土) 覆土堆積は薄く、最上層の1層は竪穴建物の埋土というよりも、後世の土砂堆積という印象のもので、2層は他の竪穴建物に通常見られる埋土特徴を持つ。覆土内の遺物混在は少ないが、竪穴に伴う須恵器が床面直上から数点出土しており、カマド床面周辺に廃棄された土師器も含め、I 2期からII 1期古段階墳のものとする。出土遺物総量は、掘り方出土を含めても、須恵器食器具6点、土師器食器具8点、土師器煮炊具195点、須恵器貯蔵具10点と少ない。

(床面と掘り方) 床面は概ね平坦で、一部地山のままの床となるが、ほぼ全体に貼床が施される。カマド焚口前面から竪穴中央付近、そして竪穴の手前側へと竪穴主軸上に硬化部分が伸びており、手前側での入り口部を予想させる。床下の中央付近からカマド付設付近にかけて、連続する楕円形の掘り方土坑をもち、この部分での床面硬化は特に強い。また、竪穴中央からやや右側に径110cmの円形土坑が存在しており、その下底面が酸化被熱する。特に遺物出土に特徴があるわけではないが、覆土は掘り方土坑的ではなく、重複する他遺構の可能性が高い。

## 25. SI27

(立地・規模・形態) A地区の北側に位置する小型竪穴建物で、床面直上に炭化した木材片と焼けた粘土塊が散乱しており、焼失した竪穴建物と理解される。竪穴の北側壁中程に小型カマドを付設するタイプで、竪穴規模は510×440cmを測る。平面プランは若干縦に長い隅丸方形で、主軸はS-35.5°-Eと類似する竪穴タイプをもつSI26に近い主軸をもつ。竪穴内に主柱穴はなく、竪穴外にも明確な柱穴の確認はないが、北側奥壁の両側に位置する小型柱穴は関連するものかもしれない。

(カマド及びピット) カマドは破壊を受けた状態で検出されている。覆土内に多くの焼けた粘土分布があり、床が被熱焼結し、複数の焼床面が確認されることから、北側壁のほぼ中央に存在するカマドソデ構築粘土の基底部分と思われる地山掘り残りの高まりとその手前の被熱焼結した床面が造り付けカマドと判断した。カマド構造を明確に把握できていないが、奥壁から焚口へまっすぐにカマドソデが伸びるタイプと思われ、カマド焚口ソデ内寸幅65cm、奥壁からカマドソデ端までは90cm程度を測るものと予想する。

竪穴内には柱穴状のピットは確認していないが、浅いピットが3箇所確認されており、特にP3に関しては、径80cmで円形を呈すということもカマド右側に位置する点から貯蔵穴の可能性もある。周辺及び埋土内に土師器が多く捨てられており、この点も貯蔵穴の要素である。他の2つのピットは竪穴建物が焼失した時のものである可能性が高く、特にP1については埋土上半が被熱焼結し、覆土には多くの焼土塊や炭化木材が混入する。

(覆土堆積と遺物出土) 焼失家屋であるため、覆土中及び床面には炭化木材が散乱し、焼けた粘土塊が分布するなど、特殊な覆土堆積状況を示す。近隣に同様の覆土特徴を持つものではなく、近隣へ延焼した様子はない。焼結粘土分布は、竪穴中央付近で少なく、竪穴の壁際とくに右側壁と奥壁付近に連なるように分布しており、それに付随するかのようには炭化木材片が混在する。焼土に縦に食い込むように存在する材もあり、焼失に伴う屋根の崩落を物語るかのようである。炭化木材で大きいものはほとんどが板材か断面長方形の角材で、最大のものは幅30





cmほどのものがあるが、ほとんどは5～10cm程度で、かなりの厚さのものや薄いものなど様々である。加工材がほとんどで、丸材は少なく、太いもので5cm程度、径2～3cmの細い材が主体的であるなど、主柱材や梁材のようなものは見られない。焼結粘土層の直下に炭化木材の存在する傾向が強く、板材や角材を中心とした炭化木材は屋根材であり、その上に存在する焼結土は屋根を被覆する土、つまりは土屋根構造であった可能性がある。ただ、焼結土分布や木材分布は堅穴全体を覆っておらず、床面被熱などからこれらは当堅穴内で焼かれたものであろうが、屋根が焼けた痕跡と判断することにはやや躊躇する部分もある。なお、この焼結粘土層と床面の間には薄いながらも黒褐色系の層があり、その層の中で比較的土器の混在が目立った。間層の存在は、屋根の焼失崩落と堅穴建物の廃絶とに若干のタイムラグがあった可能性を示すものであり、堅穴中央付近の床面に掘られた壁の焼けたピットの存在もあわせ、火災にあった堅穴建物というよりも、建物廃絶後に何らかの目的で使われていたこの堅穴空間の屋根を故意に焼いた可能性もあるだろう。なお、出土遺物だがその量は多くはないもの、覆土下層に集中し、須恵器食膳具11点、土師器食膳具17点、土師器煮炊具207点、須恵器貯蔵具49点が出土する。出土土器の時期にばらつきは少なく、カマド右側の床付近から出土する須恵器坏A蓋と土師器短胴小釜、椀日などから、ほぼⅡ1～Ⅱ2期頃のものとする。

**(床面と掘り方)** 床面はほぼフラットで、堅穴の広い範囲で薄く貼床されている。堅穴の中央付近に硬化部分があり、その付近でカマド焚口以外に被熱焼結した面がある。比較的焼結は強く、如として使用した可能性もあるが、当堅穴建物の焼失痕跡からその際の被熱痕跡である可能性が高い。なお、床面下の掘り方土坑については、複雑に不整形土坑が連続して掘られ、遺物混在は比較的少ない傾向にあった。

## 26. SI28

**(立地・規模・形態)** A地区の北側に位置する小型堅穴建物で、直接的な切りあい関係は把握し切れていないが、SB23とSB26とが重複する。堅穴奥壁のややコーナーに偏った位置に造り付けカマドをもつもので、カマドがやや奥壁中央付近にある点で、SI26に似るが、主軸はS-32°-Wと反対側を向き、本来はSI21・22と同系統の構造の堅穴建物と理解する。堅穴は平面プランがしっかりとした角を持つ方形で、420×350cmの規模を持つ。

**(柱穴とその他のピット)** 堅穴の側壁沿いに3本ずつ、計6本の柱穴をもつ側柱穴タイプであるが、堅穴の短軸の壁際中央付近にも同様の柱穴があり、深さなどから見て、これについても建物に関連する柱穴と理解する。柱穴は全て堅穴壁上に存在しており、比較的柱筋は通っている。SI21と同様の柱配置であり、支柱立ちの壁立ち構造建物の可能性がある。左側の柱列は柱間隔200cmと160cmに長型があるのに対し、右側柱列は180cmと一定している。いずれも柱穴径20～30cmの小型円形だが、深さ50cmとしっかり掘られている。柱穴覆土は上層で抜き取りに伴う掘り直し土層が見られるが、下層は柱痕を残すものが多く、柱径は掘り方より若干狭い15～20cm程度を測る。支柱穴以外ではカマドの右側に掘られる140×100cmの楕円形土坑がある。位置的に貯蔵穴ではあるが、性格は不明である。

**(カマドと被熱炉床面)** カマドは南側奥壁の南東寄り、カマド主軸が若干南へ振るコーナーカマドに近いものと理解する。ソデ構築粘土の薄い、小型無煙道型カマドであり、焚口付近のソデが遺存するだけで、全形を知ることができない。ただ、SI26のような奥壁から焚口へまっすぐにカマドソデが伸びるタイプではなく、逆「U」字形を呈すタイプと思われる。カマド焚口幅はソデ内寸で65cm、長さは不明だが、カマドソデ端から奥まで100cm程度のものであったと予想する。カマドソデはにぶい黄褐色系砂質土と黄褐色系粘土とを混在させた硬質粘土で作られ、床には全面貼床される。なお、カマドのやや南側と堅穴建物の中央付近に被熱による焼結面があり、前者はカマドの造り替えの可能性、後者は如として併設されたものだろう。

**(覆土堆積と遺物出土)** 覆土堆積はほぼ単一層であり、通常の堅穴建物覆土に類する埋め戻し土層的なものである。比較的層上に遺物混在が多いが、下層でもカマド周辺に土器分布が確認される。掘り方出土も含め、出土遺物量は須恵器食膳具41点、土師器食膳具28点、土師器煮炊具486点、須恵器貯蔵具408点と多く、特に貯蔵具出土が目につく。ただ、ほとんどが壺の破片で、上層に多くが投げ込まれており、カマド周辺で出土する土師器や須恵器のⅢ期からⅣ1期という年代観よりも古く位置づけられる。

**(床面と掘り方)** 床面はやや凹凸があり、全体的に北東側に下がっている。一部地山のままの床となるが、ほぼ全体に貼床が施され、カマド焚口前面から堅穴中央付近に硬化面をもつ。掘り方土坑はその硬化面の確認される部分で多く掘り込まれ、底面の比較的平坦な楕円形や不整形を呈す。





## 27. SI29

**(立地・規模・形態)** A地区の中心からやや北東寄りに位置する小型堅穴建物で、堅穴の北側一部がSK35に切られ、西側の一部が試掘トレンチにより破壊されている。堅穴の南東側の壁面から北東隅にかけて小型のL字型カマドを付設するタイプで、堅穴規模は570×435cm、重みの少ない長方形プランを呈する。主軸はカマド煙道の取り付く側を奥と捉え、縦長の主軸を取る建物との位置付けから、N-32.5°-Eと、SI23に近い主軸をとる。

**(柱穴とカマド)** 堅穴内に主柱穴はなく、堅穴壁外でも明確な柱穴を確認できていない。ただ、北側隅と南側隅に径30cm程度、深さ15cm程度の円形柱穴があり、御壁際に柱穴の並ぶ構造であった可能性はあるが、そうなること、カマド煙道部分に支柱があることとなる。壁外のやや離れた位置に柱穴が並ぶような構造であった可能性が高いであろう。

カマドは南東側の壁面のやや北東寄りに造り付けられるL字型カマドである。壁からカマドソデがまっすぐと伸び、L字に曲がる煙道部が障壁状に狭まるタイプで、粘土造りだが、焚口のソデ石が存在したであろう箇所に窪みがあり、焚口に関しては石組構造であった可能性がある。規模は奥壁からカマドソデ端まで120cm、焚口被熱面までは130cm、焚口での内寸幅67cm、外寸幅95cmを測るもので、通常の四本主柱のタイプに付設されるものよりは小型であるが、このような小型堅穴建物の中では極めて大型のカマド規模を持つ。煙道はL字屈曲の障壁部分から堅穴壁まで170cmを測り、煙道幅は屈曲部付近で内寸60cm、外寸70cm。先端部へむけてさほど幅を減じず、堅穴壁際付近でも内寸幅50cmを測る。カマドの床の傾斜はほとんどなく、焚口から奥壁、煙道の端部まで1度に満たない傾斜である。煙道の堅穴壁際にちょうど径45cm、深さ25cmの円形ピットがあるが、煙突を立てた穴である可能性は低いだろう。焚口床面が強く被熱する以外は、床面の被熱はほとんど確認できず、ソデ内壁に関しても焼けていない。カマド構築粘土は浅黄色粘土と黒褐色土を混在させる極めてしりの強いもので、重厚な作りをする。

**(覆土堆積と遺物出土)** 覆土堆積は上下の2層に分かれており、上層は黒褐色土系の通常の埋土層、下層は焼土塊を極少量混在させる黒褐色土層が存在する。下層の土には目立った炭化材などは混在しておらず、当建物の焼失を示す痕跡ではないが、時期的にSI27と廃絶時期が近く、SI27の焼けた粘土塊などを当堅穴へ捨てた可能性もある。床面には坏G壺身の完形品が捨てられており、堅穴廃絶時期は12期に位置づけられる。堅穴に伴う土器は図に示した2点だけで、カマド周辺や下層にも復元できるような遺物はなく、当堅穴出土遺物の大半は上層の埋土中に含まれる。須恵器食器具24点、土師器食器具26点、土師器煮炊具25点、須恵器貯蔵具50点と遺物混在は多いほうで、上層では1期の遺物が目立つ。

**(床面と掘り方)** 床面は高低差もなく平坦で、堅穴中央付近に貼床をもつ。硬化面は、カマド焚口前面から堅穴中央付近そして北西側へと伸びており、左側壁中央付近に入り口が存在した可能性を持つ。反対側にはカマドがあるため、当然の位置関係なのであろう。なお、床下には堅穴の中央から北西寄りに300×200cmの楕円形呈す掘り方土坑が1箇所掘られており、深さ30cm、底面は平坦に掘られている。

## 28. SI30

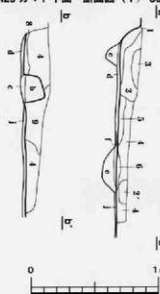
A地区の北西端に位置する堅穴遺構で、削平のため堅穴の南東隅付近のみを検出できたものである。SI34のカマド付近を一部切るように存在するが、ほとんど覆土がなく、掘り方下底付近の土がかりうじて残っているだけである。出土遺物は土師器壺片が数点出土しただけで、時期も不明であり、SI34との新旧関係についても把握できていない。一応、堅穴建物としているが、その根拠についても希薄といわざるを得ない。

## 29. SI31

**(立地・規模・形態)** A地区の中央付近に位置する小型堅穴建物で、SK39、SB11と重複する。SK39の埋没後に掘られる堅穴建物で、SI31廃絶後にSB11が掘られている。堅穴の南側コーナーに小型カマドを付設するタイプで、堅穴規模は450×440cmとするが、黒色土地上に掘られた堅穴建物であるため、壁の立ち上がりが不明瞭な部分があり、特に北東側への広がりについては、不確定要素が強い。図示した正方形よりも縦に長い方形を呈す可能性がある。主軸はS-43°-WでSI18に近い主軸をもつ。堅穴内に主柱穴はなく、堅穴外にも明確な柱穴の確認はない。壁外柱穴の建物と予想している。

**(カマド、覆土堆積、遺物出土)** カマドは焚口部の被熱床面とカマド構築粘土の分布を確認しただけで、カマド構造や向きを確認するには至っていない。この部分での土師器煮炊具分布も目立たず、判断材料に欠く。

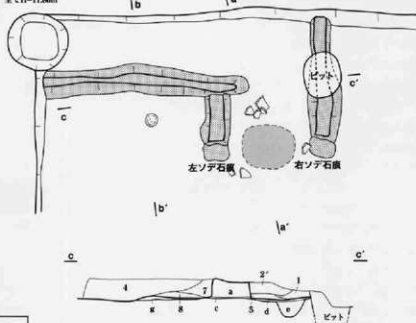
SI29 カマド平面・断面図 (1/30)



## SI29 層土・掘り方土層説

- 1層 黒褐色土 (GUY20) に赤い黄褐色土 (GUY26) 小塊・粒土小塊多量、炭化小塊少量を含む。
- 2層 黒色土 (GUY23) に赤い黄褐色土・粒土小塊・炭化小塊少量含む。
- 3層 灰黄色褐色土 (GUY28) 中層黒褐色土 (GUY20) が埋め込まれた土層、炭化小塊少量。つまり深く、今や硬化した地層の土。
- 4層 灰褐色土 (GUY24) 浅褐色砂質土層 (GUY25) 雑多量混入する塊状の土質土層。炭化小塊少量。
- 5層 灰褐色土 (GUY24) と灰褐色土層2が4 : 6程度で混入する均質土。つまり、均質土層混入する。
- 6層 黒色土 (GUY20) 浅褐色土層 (GUY25) に赤い黄褐色土層少量を含む。つまり赤い土、やや硬化の層り方土。
- 7層 灰褐色土 (GUY24) と黒褐色土層2が6 : 2 : 2で混入する。つまり、硬質土層。
- 8層 均質土 (GUY20) 浅褐色土層少量。黒色土小塊多量を含むやや中硬化の層り方土。

全てH=11.80m



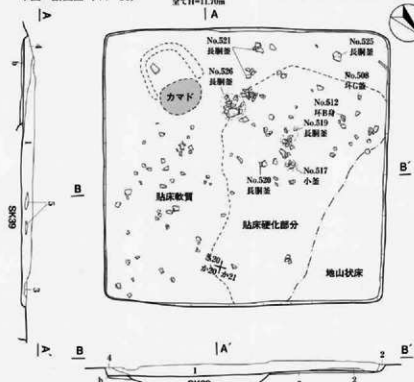
## SI29 カマド層土層説

- 1層 黒褐色土 (GUY20) 浅褐色土 (GUY25) 雑多量。粒土小塊多量を含む。
- 2層 灰黄色土 (GUY28) カマドノツマまたは天井の崩壊層。下へ向けて硬質化が進んでいる。
- 3層 黒褐色土 (GUY20) 浅褐色土層多量を含む。つまり赤い。
- 4層 黒褐色土 (GUY20) 浅褐色土層少量。炭化小塊多量を含む。つまり赤い土層。
- 5層 黒褐色土 (GUY20) に赤い黄褐色土層混入のため、多量混入。炭化小塊多量を含む。
- 6層 黒褐色土 (GUY20) 粒土層のため、多量混入。炭化小塊多量を含む。
- 7層 赤い黄褐色土 (GUY26) 浅褐色のカマドノツマ粒土小塊多量混入するアツタ。粒土小塊少量含む。
- 8層 黒褐色土 (GUY20) 灰黄色土小塊 (GUY25) 粒土小塊・炭化小塊多量を含む。
- 9層 黒褐色土 (GUY20) 浅褐色土小塊多量を含む。つまり赤い。

## SI29 カマド掘り方土層説

- a層 浅褐色土 (GUY28) 黒褐色土 (GUY20) 少量混入させるカマドノツマ層混入土。つまり、硬い。
- b層 灰黄色土 (GUY28) 黒色土小塊多量を含むカマドノツマ層混入土。つまり、硬い。
- c層 灰黄色土 (GUY28) と灰黄色土 (GUY20) が7 : 3で混入する土。炭化小塊少量含む。カマドノツマ層混入土。
- d層 灰黄色砂質土 (GUY24) 灰黄色土 (GUY20) 混入。つまり赤い。つまり、硬い。つまり、硬い。つまり、硬い。
- e層 黒褐色土 (GUY20) 浅褐色土小塊少量含む。つまり、硬い。つまり、硬い。つまり、硬い。
- f層 赤い黄褐色土 (GUY26) 粒土小塊少量含む。硬質化が強く粒土小塊多量混入したカマドノツマ層混入土。
- g層 穴穴・層と均質土層。

(SI31) 平面・断面図 (1/60)



## SI31 層土・掘り方土層説

- 1層 黒色土 (GUY20) 粒土小塊・炭化小塊多量。炭化小塊少量含む。つまり赤く、硬い。
- 2層 灰黄色土 (GUY28) と黒色土 (GUY20) とが6 : 4程度で混入する土層。炭化小塊少量含む。硬質化の土層。
- 3層 黒色土 (GUY20) 黒褐色土層 (GUY20) と浅褐色土層 (GUY25) 多量含む。
- 4層 黒色土 (GUY20) 黒土・黄褐色土少量含む。
- 5層 浅褐色土 (GUY28) と黒褐色土 (GUY20) との均質土。
- 6層 黒褐色土 (GUY20) と灰褐色土 (GUY24) とが混入する均質土。炭化小塊・炭化小塊少量含む。つまり赤く、硬い。
- 7層 黒褐色土 (GUY20) と黒褐色土 (GUY20) とが混入する均質土。炭化小塊少量含む。つまり赤く、硬い。

第52図 A地区竪穴建物遺構図27 (SI29-2、SI31)

覆土はほぼ黒褐色土系の単一層で、比較的遺物混在は多い。床面直上から下層にかけて多くの土器が廃棄されており、特に焼成が極めて良好な作りの同じ土師器長胴釜が複数個確認される。出土量全体では、須恵器食器具37点、土師器食器具22点、土師器煮炊具676点、須恵器貯蔵具71点で、比較的時期のまとまりがあり、須恵器食器具や土師器煮炊具からⅡ1期前からⅡ2期古手頃のものとする。

〔床面と掘り方〕床面はほぼフラットで、竈穴の広い範囲で薄く貼床がなされている。黒褐色土系の貼床で、竈穴の中央付近から北西側にかけて硬化部分がある。

### 30. SI32

〔立地・規模・形態〕A地区の東側に位置するやや大型の四本主柱竈穴建物である。竈穴規模は670×580cmの若干縦長の方形プランで、北東側の壁中央にL字型カマドが付設される。L字型カマドの煙道部は竈穴壁際からさらに溝として180cm伸び、横軸740cmとなる。主軸はN-46°Eで近隣の竈穴建物の中ではかなり東に主軸を振る。

〔柱穴〕四本主柱穴を竈穴内に均等配置するもので、柱間規模は300×300cmの正方形を呈する。各主柱穴とも上半は柱抜き取り時の掘り直し痕をもつが、下半部は径25cm程度の柱痕を明瞭に持ち、深さ60～70cmを測る。掘り方は径50～60cm程の円形プランで、掘り方土は黄褐色土と黒褐色土を混在させたしまり強い土が使われている。

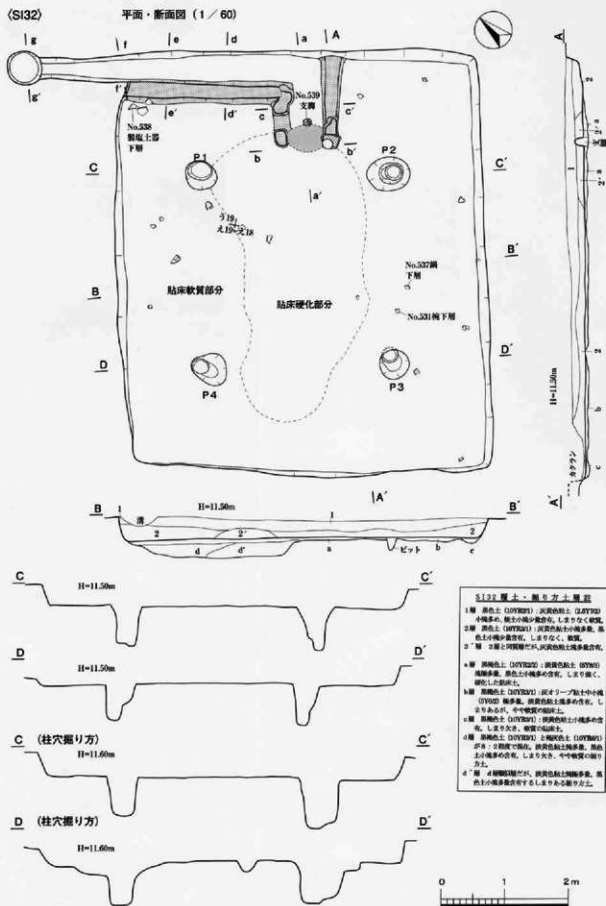
〔カマド〕北東側の奥壁中央に造り付けられるL字型カマドである。カマド本体部分のソデ粘土は一部欠損するものの、煙道部の残りはよく、煙道末端に位置するピットも確認されている。カマド形態は、奥壁から厚重なカマドソデがまっすぐと伸び、煙道部がLにL字形に曲がるタイプで、カマド全体は粘土造りだが、検出の右ソデには凝灰岩質の切石が埋設されている。左側のソデは末端まで粘土造りで、天井石と思われる切石の出土も確認していない。カマドソデは厚く作られており、構築粘土は砂質を帯びた褐灰色土と灰黄色粘土、黒褐色土を互層に叩き締めたもので、硬質に作られている。これに対し、煙道部のソデは灰黄褐色砂質土に黒褐色土塊を混在させた叩き締めの弱いもので、煙道部ソデ基底部は地山を掘り残してある。規模は奥壁からカマドソデ端まで150cm、焚口被熱面までは160cm、焚口末端の内寸幅は60cm、外寸幅は100cmを測る。煙道はL字屈曲部分から竈穴端まで260cm、竈穴外に出てから140cm伸び、煙道長は全体で410cmを測る。煙道幅は屈曲部付近で内寸60cm、外寸78cm、先端部へむけて徐々に幅を減じ、竈穴端では内寸幅45cm。竈穴外へ出てから溝の末端は幅35cmと細くなる。先端部には径50cm、深さ20cmの円形ピットが掘られており、煙突設置に関連する掘り込みの可能性を考えている。カマド内床面は奥へほとんど傾斜しないが、煙道部床では煙道先端へ向けて5.5度程度で傾斜してゆき、竈穴外へ出てからは溝の深さを急激に減じる。カマドの被熱状態は、焚口床面で強く焼結する以外、全体的には弱く、床や壁の焼土化は認められない。カマド支脚は焚口被熱面の奥寄り中央に埋設された状態で検出されており、断面多面体の円錐形呈す凝灰岩質の石製支脚である。上端の一部欠損するが、床面からの高さは15cm程度を測る。カマド焚口床に土師器椀2個体、短胴小釜1個体、長胴釜2個体が廃棄されており、特に長胴釜については完形品に近いものが意識的に捨てられている。支脚の位置から当カマドに据えられる長胴釜は1個であり、カマド使用のままのものではなく、竈穴建物廃絶に伴うカマド破壊行為に伴うものだろう。

〔覆土堆積と遺物出土〕覆土は黒色土の混入物少ない軟質の土で、2層に分けているが、ほぼ単一層と言えるような理め戻しの土層堆積である。カマド焚口に土師器煮炊具の廃棄が確認されるが、覆土内遺物は少なく、全体で須恵器食器具13点、土師器食器具20点、土師器煮炊具171点、須恵器貯蔵具37点程度である。須恵器はほとんどが上層出土で、当建物に伴うものは極めて少なく、カマド周辺の土師器などからⅠ2期の竈穴建物と見る。

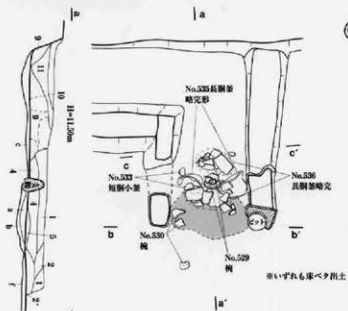
〔床面と掘り方〕床面は全体がフラットで、床のほぼ全面に貼床される。掘り方土は主柱穴間からやや左側壁際へ伸びる位置に、不整形土坑が掘られる。深さ30cm程度の底面平坦な土坑で、径240cmの規模を持つ。この時期の四本主柱タイプの竈穴建物一般的な掘り方土坑と言える。床の硬化面は、焚口前面から四本主柱間と、そこから若干手前側へと伸びる範囲で見られる。カマドの対面位置に入り口が設けられた可能性は高く、床の硬化はそのためのものであろう。

### 31. SI33

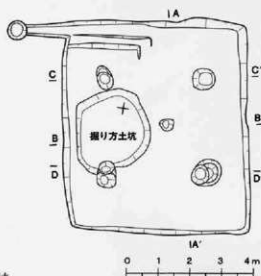
〔立地・規模・形態〕A地区の北東端に位置するやや大型の四本主柱竈穴建物である。北東側1/3程が崖面にかかっており、既に消失しているため、全形は不明だが、西側の壁中央にL字型カマドをもつタイプと考えられる。南東側にやや台形状に広がる形状をしているが、竈穴規模は復元値で概ね670×670～650cmの隅丸方形を呈す。主軸はS-59°Eで、隣接するSI32の主軸から75度軸を振る。



SI32 カマド平面・断面図 (1/30)



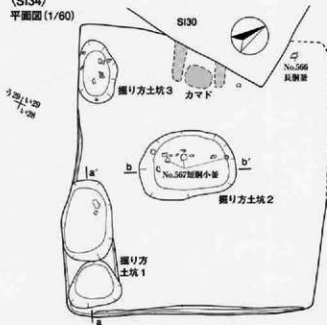
SI32 掘り方平面図 (1/120)



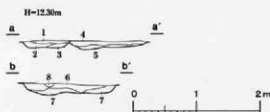
SI32 カマド竈土・掘り方土層図

- 1層 赤褐色土 (DVT930) : 灰褐色土に砂多量、黒土小塊少量含有。
  - 2層 赤褐色土 (DVT931) : 灰褐色土に砂多量、赤土小塊多量含有。
  - 3層 2層と同層構造、2層よりも灰褐色土層の厚み減少、最も多量。
  - 3層 赤土 (DVT932) : 灰褐色土に砂少量含有、厚み減少する。灰褐色土に砂。
  - 4層 赤土 (DVT933) : 灰褐色土に砂多量、黒土小塊少量含有。しまりあり。
  - 5層 赤褐色土 (DVT934) : 灰土多量含有。赤褐色土、黒土小塊少量含有。
  - 6層 灰褐色土に砂 (DVT935) と赤褐色土 (DVT936) が互に層状する層、黒土小塊多量含有。
  - 7層 灰褐色土に砂と赤褐色土 (DVT937) : 6層で層状する層、黒土小塊多量含有。
  - 8層 赤褐色土 (DVT938) : 灰土多量、灰褐色土に砂少量含有。
  - 9層 灰褐色土に砂と赤褐色土 (DVT939) : 5層で層状する層の赤褐色土層、黒土小塊少量含有、赤褐色土層の厚み減少する。赤土層に砂と赤褐色土の境で構成される土層。
  - 10層 赤褐色土 (DVT940) : 灰褐色土に砂少量含有。軟質土。
  - 11層 赤褐色土 (DVT941) : 灰褐色土に砂少量含有。
  - 12層 赤褐色土 (DVT942) : 灰褐色土に砂少量含有。
  - 13層 赤褐色土 (DVT943) : 灰褐色土に砂少量含有、黒土小塊少量含有。
  - 14層 赤土と赤褐色土 (DVT944) : 灰褐色土に砂少量含有、赤褐色土に砂少量含有。
  - 15層 赤土 (DVT945) : 灰褐色土に砂少量含有、黒土小塊少量含有。
- ※ 砂層を穿るカマド穴の開口部は灰褐色土層、黒褐色土層 (DVT946) 以下に、それ以下の層構造 (DVT947) 以下。
- ※ 土の1層 (DVT948) 以下にカマド穴の開口部は灰褐色土層、黒土小塊少量含有。
- ※ 掘り方土 (DVT949) : 灰褐色土に砂少量含有、赤褐色土に砂少量含有、黒土小塊少量含有。しまりありカマド穴の開口部は灰褐色土層、軟質土層を穿る層構造の土より下部層に存在する。
- ※ 灰褐色土 (DVT950) : 赤褐色土層、黒土小塊少量含有カマド穴の開口部、今中層を穿り、赤褐色土層。
- ※ 掘り方土層と灰褐色土層。

(SI34) 平面図 (1/60)



掘り方土坑断面図 (1/60)



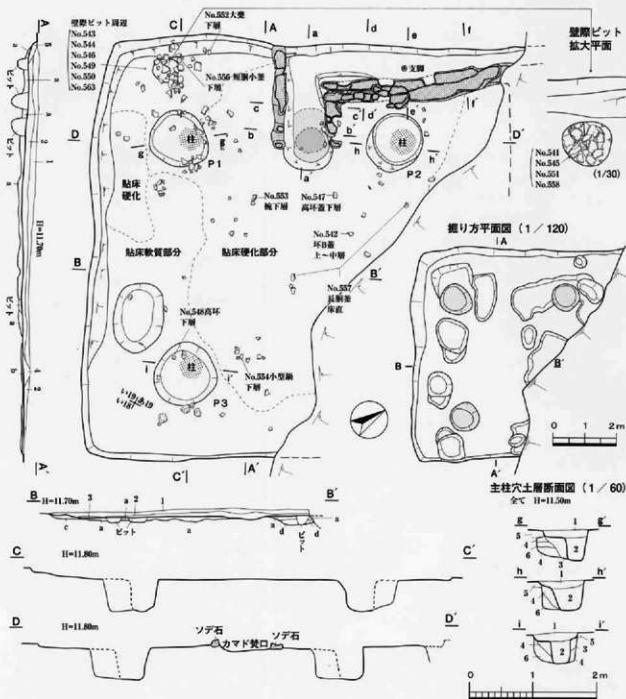
SI34 掘り方土坑土層図

- 1層 赤褐色土 (DVT951) : 黒土小塊多量、黄褐色土 (DVT952) 小塊、同じ材料作りの含有。
- 2層 赤褐色土 (DVT953) : 黄褐色土に砂、黒土小塊多量、黒土小塊少量含有。
- 3層 赤褐色土 (DVT954) : 黒土多量含有。
- 4層 赤褐色土 (DVT955) : 黄褐色土多量、黒土小塊、黒土小塊少量含有。しまりあり土層。
- 5層 赤褐色土 (DVT956) : 黄褐色土に砂少量含有、黒土小塊少量含有。しまりあり。
- 6層 赤褐色土 (DVT957) : 黄褐色土多量、黒土小塊少量含有。しまりあり。
- 7層 赤褐色土 (DVT958) と赤褐色土 (DVT959) の境界土 : 黄褐色土多量、黒土小塊多量、黒土小塊少量含有。
- 8層 赤褐色土 (DVT960) : 同じ材料作りの土。

第54図 A地区堅穴建物遺構図29 (SI32-2、SI34)

(SI33)

平面・断面図 (1/60)



SI33 埋土・掘り方土層表

- 1層 黒色土 (OY7321) : 灰白色土 (OY731) 小塊多の含有, しまりなく軟質。
- 2層 黒色土 (OY7321) : 灰白色土上塊多の, 灰白色土大塊・黒色土小塊・黄土小塊少量含有。
- 3層 黒色土 (OY7321) : 灰白色土小塊多の含有。
- 4層 黒色土 (OY7321) : 灰白色土小塊多量, 灰土小塊・黄土小塊少量含有。
- 5層 黒色土 (OY7321) : 灰白色土少量含有。

● 1層 灰白色土 (OY730) と黒色土 (OY731), 灰白色土 (OY730) とが4 : 3の割合で混合する硬質土上, 硬質層の厚く、硬結している。

● 2層 掘り土中の硬質土 : OY730 と黒色土 (OY732) とが7 : 3の割合で混合する硬質土層の上, 灰白色土小塊多の含有, 中層にまみりあり。

● 3層 黒色土 (OY732) : 灰白色土塊多量, 黒色土小塊多の含有, しまりあるが, 中層硬質土の硬結上。
- 4層 硬質土層 (OY740) : 黒色土塊多の, 灰白色土塊多量含有, しまりある掘り方土上。

SI33 主柱穴土層断面表

- 1層 黒色土 (OY731) : 黄褐色土 (OY730) 小塊・黄土小塊・灰白色土 (OY730) 少量含有, 柱穴土層の上。
- 2層 黒色土 (OY731) : 黄褐色土小塊少量含有, しまりなく軟質土上, 柱脚の上層。
- 3層 黒色土 (OY731) : 黄褐色土 (OY730) 多量, 黄褐色土少量含有, しまりある掘り方土上層。
- 4層 黒色土 (OY731) : 黄褐色土多量, 黄褐色土少量含有, 在り下りまみりあり層上。
- 5層 黒色土 (OY731) : 黄褐色土塊多量, 黒色土小塊多の含有する, 中層まで硬結した掘り方土層の上。
- 6層 黒色土 (OY731) : 黄褐色土小塊少量含有, しまりある掘り方土上。

第55図 A地区壁穴建物遺構図 30 (SI33-1)

(柱穴とその他のピット) 四本主柱穴を堅穴内に均等に配置するもので、柱間規模は360×340cmを測る。各主柱穴とも90～100cmの円形の大型掘り方を持ち、柱痕状土層堆積を示す。柱痕は径30～40cm、深さ50cm程度で、軟質の黒褐色土が埋められている。掘り方土は黄褐色土と黒褐色土を混在させたしまり強い土が何層かに分かれて入れられており、その上に貼床がなされている。その他のピットとしては、P3の左側壁側に80×50cmの楕円形土坑があるが、土器出土はさほど多くなく、性格不明である。

(カマド) 北西側の壁の中央付近に造り付けられるL字型カマドである。堅穴外の煙道部が消失しているため、全体的な構造は不明であるが、堅穴内でのカマドの遺存状態はよい。カマド形態は、奥壁から重厚なカマドソデがまっすぐと伸び、煙道部が右にL字形に曲がるタイプで、カマド全体は粘土造りだが、焚口部の両ソデには断面がやや蒲葎形を呈する凝灰岩質の切石が埋設され、焚口部のみ石で囲む構造のものであったと見る。カマドソデはふ厚く作られており、構築粘土は灰白色硬質粘土と灰色粘土を互層に叩き締めた版装状のものをブロック状に繋いだような形態で、SI13の構造に似る。煙道部も同様の粘土構築を示すが、粘土ブロックを2重に積んだような痕跡があり、一部2重になった重なり部分の内側壁面で被熱焼結痕跡を確認している。仮に造り替えがあったとすれば、初期の煙道の幅が広がったために内側から重ねて壁を貼り、煙道幅を狭めた可能性もある。ただ、ブロック状に積んだ痕跡や一部2重になっていない箇所があることから考えて、一度使用したカマドソデ粘土ブロックを再利用した可能性もあるだろう。カマドの規模は通常の同タイプよりも大きく、奥壁からカマドソデ端まで180cm、焚口の緩い落ち込み箇所までは180cm、焚口内寸幅75cm、外寸幅105cmを測る。煙道幅は屈曲部付近で内寸60cm、外寸90cm、先端部へむけて徐々に幅を減じ、堅穴端では内寸幅30cmとなる。カマド内床面は焚口付近を中心に全体的に窪みを持ち、そこから奥へほとんど傾斜しないが、煙道部床では煙道先端部へ向けては3.5度程度で傾斜する。カマドの被熱状態は焚口床面で最も焼結するが、被熱面はカマド床面全体に及び、ソデ壁面でも奥壁まで全体的に被熱が及ぶ。煙道部も屈曲部付近は焼結する部分があり、強い加熱の結果か、それとも使用年数による蓄積か、本遺跡の中では最もカマドの被熱痕跡が顕著である。カマド支脚は本来の焚口部ではなく、煙道の中程に移されて立った状態で出土している。ただ、支脚埋設痕やその部分での床・壁等被熱痕はなく、煙道で使用されたものとは考えられない。カマドで使用したはずの土器器煮炊具の廃棄もほとんどカマド内では確認できず、カマドの破壊行為により原位置を動かしたものであろう。

(覆土堆積と遺物出土) 覆土は薄い、遺物から見ても、上層出土のものは時期的に新しく、堅穴埋め戻し後に廃棄されたものと理解される。堅穴の西側隅付近に掘られたピット(壁際ピット)内に多量の土器廃棄があるが、これについてもⅡ2期と当堅穴建物よりも確実に新しい。当堅穴建物に伴うと予想される土器はカマド焚口前面から主柱穴間の下層において出土する土器で、量は多くないがほぼⅠ1期におさまる土器器が出土している。当堅穴建物出土遺物の大半は覆土上層に含まれるもので、全体では須恵器食器具47点、土器器食器具24点、土器器煮炊具364点、須恵器貯蔵具217点。特に須恵器はほとんどが上層の混入品である。

(床面と掘り方) 床面は全体がフラットで、床のほぼ全面に貼床される。掘り方土坑は主柱穴間の外側に複数の小規模な土坑が掘られる。床の硬化面は、焚口前面から四本主柱間にあり、その外縁部は軟質である。

### 32. SI34

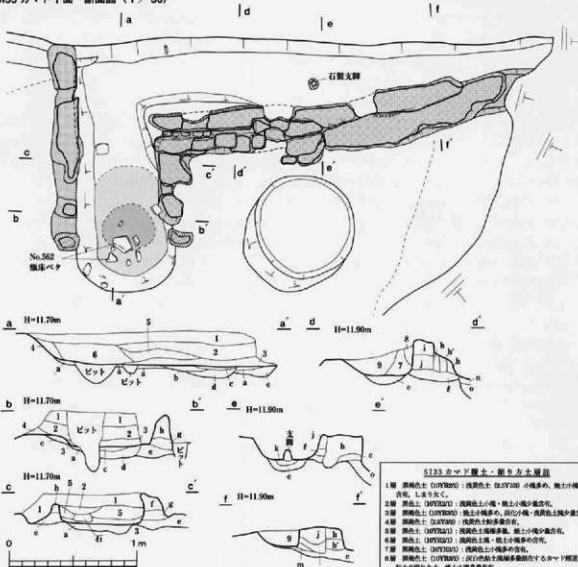
(立地・規模・形態) A地区の北西端、SI27の北側に隣接する小型堅穴建物で、西側がSI30と重複する。台地尾根部の削平により、覆土及び床面土まで削り取られており、掘り方土坑が露出した状態で検出されたため、本来の堅穴規模は不明である。ただ、カマド焚口焼結面の位置や掘り方土坑の位置関係、南東面、南西面に細く掘られた壁周溝らしきものの位置などから、縦軸450cm、横軸400cm程度の縦に長い堅穴建物と推察可能である。堅穴内に主柱穴の確認はなく、壁際が壁外に側柱穴の並ぶ構造のものであろう。主軸はS-56°-Eで、SI27の主軸方向からほぼ90度西へ振る。

(カマドと掘り方) カマドは焚口の焼結面とカマドソデ基部と思われる地山土の盛り上がりを確認しただけで、規模、構造などは不明である。位置的に奥壁中央に位置するものと予想され、比較的小型の構造のものであろう。

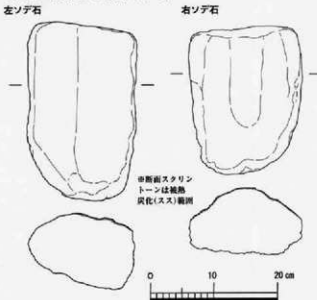
掘り方土坑は、堅穴の中央付近に160×110cmの楕円形土坑と南西側の壁際に小型の楕円形土坑が複数並んで掘られており、通常の掘り方土坑に見られる黄褐色土と黒褐色土を混在させたような土が埋められている。出土土器はこの掘り方土坑を中心に、須恵器食器具2点、土器器煮炊具50点が出土する。土器は少なく、時期判断は難しいが、Ⅱ2期からⅡ3期にかけてのものと予想される。



S133 カマド平面・断面図 (1/30)



S133 カマド焚ロソデ石図 (1/6)



- S133 カマド竈土・層別方土層別**
- 1層 黒褐色土 (G17540)；浅褐色土 (G17541) 小塊多、焼土小塊少量含む。土層欠。
  - 2層 黒色土 (G17542)；浅褐色土小塊、焼土小塊少量含む。
  - 3層 黒褐色土 (G17543)；焼土小塊多、灰土小塊、浅褐色土塊少量含む。
  - 4層 黒褐色土 (G17544)；浅褐色土塊少量含む。
  - 5層 黒色土 (G17545)；灰褐色土層部多、焼土小塊少量含む。
  - 6層 黒色土 (G17546)；浅褐色土塊、焼土小塊少量含む。
  - 7層 黒褐色土 (G17547)；浅褐色土小塊少量含む。
  - 8層 黒褐色土 (G17548)；灰褐色土塊少量多量含むカマド煙室ツブ板の埋入土。焼土小塊多量含む。
  - 9層 黒色土 (G17549)；褐色土小塊多、浅褐色土小塊、焼土小塊少量含む。
  - 10層 黒褐色土 (G17550)；灰褐色土 (G17551) 焼土小塊多量、黒色土塊少量含む。甲斐層、しまりあるカマド煙室土。焼土、焼土塊少量含む。
  - 11層 黒褐色土 (G17552)；焼土塊、甲斐層、しまりあるカマド煙室土。焼土、焼土塊少量含む。
  - 12層 灰褐色土 (G17553)；黒褐色土 (G17554) 2層に4層位下がるカマド煙室土。焼土、焼土塊少量含む。
  - 13層 灰褐色土 (G17555)；黒褐色土 (G17556) 2層に4層位下がるカマド煙室土。焼土、焼土塊少量含む。
  - 14層 灰褐色土 (G17557)；黒褐色土 (G17558) 2層に4層位下がるカマド煙室土。焼土、焼土塊少量含む。
  - 15層 黒褐色土 (G17559)；灰褐色土 (G17560) 2層に4層位下がるカマド煙室土。焼土、焼土塊少量含む。
  - 16層 黒褐色土 (G17561)；灰褐色土 (G17562) 2層に4層位下がるカマド煙室土。焼土、焼土塊少量含む。
  - 17層 黒褐色土 (G17563)；灰褐色土 (G17564) 2層に4層位下がるカマド煙室土。焼土、焼土塊少量含む。
  - 18層 黒褐色土 (G17565)；灰褐色土 (G17566) 2層に4層位下がるカマド煙室土。焼土、焼土塊少量含む。
  - 19層 黒褐色土 (G17567)；灰褐色土 (G17568) 2層に4層位下がるカマド煙室土。焼土、焼土塊少量含む。
  - 20層 黒褐色土 (G17569)；灰褐色土 (G17570) 2層に4層位下がるカマド煙室土。焼土、焼土塊少量含む。
  - 21層 黒褐色土 (G17571)；灰褐色土 (G17572) 2層に4層位下がるカマド煙室土。焼土、焼土塊少量含む。
  - 22層 黒褐色土 (G17573)；灰褐色土 (G17574) 2層に4層位下がるカマド煙室土。焼土、焼土塊少量含む。
  - 23層 黒褐色土 (G17575)；灰褐色土 (G17576) 2層に4層位下がるカマド煙室土。焼土、焼土塊少量含む。
  - 24層 黒褐色土 (G17577)；灰褐色土 (G17578) 2層に4層位下がるカマド煙室土。焼土、焼土塊少量含む。
  - 25層 黒褐色土 (G17579)；灰褐色土 (G17580) 2層に4層位下がるカマド煙室土。焼土、焼土塊少量含む。
  - 26層 黒褐色土 (G17581)；灰褐色土 (G17582) 2層に4層位下がるカマド煙室土。焼土、焼土塊少量含む。
  - 27層 黒褐色土 (G17583)；灰褐色土 (G17584) 2層に4層位下がるカマド煙室土。焼土、焼土塊少量含む。
  - 28層 黒褐色土 (G17585)；灰褐色土 (G17586) 2層に4層位下がるカマド煙室土。焼土、焼土塊少量含む。
  - 29層 黒褐色土 (G17587)；灰褐色土 (G17588) 2層に4層位下がるカマド煙室土。焼土、焼土塊少量含む。
  - 30層 黒褐色土 (G17589)；灰褐色土 (G17590) 2層に4層位下がるカマド煙室土。焼土、焼土塊少量含む。

第56図 A地区竈穴建物遺構図31 (S133-2)

## 第2項 掘立柱建物

当地区では掘立柱建物が24棟確認されるが、総柱建物ではなく、いずれも側柱建物である。また、底付のものも確認できず、一部桁行に長い建物も確認される以外は、中規模クラスの掘立柱建物で構成される。掘立柱建物の各別名称や寸法については、模式図（川畑誠「石川県内の古代建物に関する基礎的考察—掘立柱建物の平面プランを中心として—」『社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会年報6』1995年の第1図を一部改変したもの）で示したとおりであるが、柱間の多い方を桁行、少ない方を梁行とし、桁行が縦に、北を上に向けて配置されるように図掲載してある。主軸は北を軸に桁行方向で東西へ振る角度を記したが、山側と谷側で軸が異なる重む建物が多く、その場合は山側のしっかりとした柱列で計測している。ただ、削平や重複などで山側の柱列が不確定なものについては、谷側の明確に並ぶ柱列で計測した。建物規模は柱間表記で桁間×梁間の間数、寸法表記では桁行寸法×梁行寸法のメートルで記載する。柱間寸法は柱芯間の寸法で、特に平均柱間寸法については、梁間は梁行長/梁間、桁間は桁行長/桁間を示す。また、遺構の位置関係を説明する上で、柱筋の位置関係を示す場合は、地形上の台地頂部側と傾斜してゆく鞍部側とで、山側、谷側と表記する方法を使用するが、それで位置関係を示すことが困難な場合は、東西南北の方位で示す他、図上で示す梁行の上側を上手側、下側を下手側、左側を左側、右側を右側と表記する場合もある。また、掘立柱建物の出土遺物については出土量を破片数換算での数量とし、時期については壑穴建物同様に出嶋明人氏の北陸古代土器編年で表記する。以下にSB01からSB24までを順に個別遺構の説明を行う。

### 1. SB01

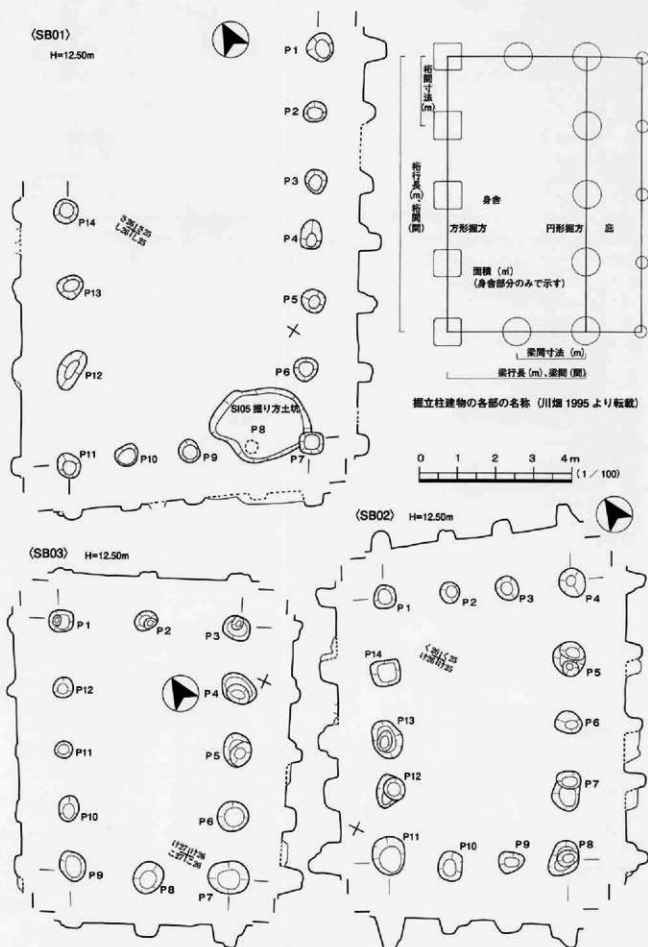
A地区の中程、西側に位置する6間×4間と思われる大型の建物で、N-25°-Eの主軸（谷側柱列）を持つ南北に長い建物である。台地頂部削平で北側が消失しており、SI05と南東側柱列が重複するなど柱列の全容は不明だが、谷側の柱列はしっかりとしている。規模は10.4×6.4m、平面積は66.56㎡程度と推察する。桁間寸法は1.6～1.8m、平均1.73mと広めで、梁間寸法は1.5～1.7m、平均1.6mとやや狭くなっている。柱穴は円形プラン主体だが、隅柱のP7とP11は方形基調で、谷側柱筋は径50～70cm、深さ50～60cmとしっかり掘られている。柱穴覆土に柱痕状堆積は認め難いが、底面に柱部分のみ低くなった箇所が目立つ。出土遺物は柱穴から須恵器17点、土師器97点と比較的多く出土しており、やや時期はばらつくものの、Ⅱ2期～Ⅱ3期頃に主体があるものと推察される。

### 2. SB02

A地区の中程、やや西側に位置する4間×3間の建物で、N-30°-Eの主軸（山側柱列）を持つ。台地頂部削平で山側の柱穴上部が一部削平されるが、もともと柱穴は深く、遺存状態はよい方である。主だった遺構重複はないが、北東側のP3付近、掘立柱建物内に炉状遺構とする被熱焼土化した箇所がある。このような炉状遺構は他にもあるが、掘立柱建物内で検出される事例は少なく、建物に伴うカマド状遺構の狭口焼土と判断することには問題がある。可能性がないとは言えないが、柱穴に近接しており、当掘立柱建物に伴うものであるかは保留としておく。規模は7.0×4.75mだが、谷側の東隅柱穴がやや東へ歪んでおり、桁行7.2mとなって、平面積は33.72㎡となる。桁間寸法は1.2～2.0m、平均1.8mと広めで、梁間寸法は1.5～1.75m、平均1.6mとやや狭くなっている。柱穴は円形プラン主体で、径60～100cm、深さ50～60cm程度に全体的に深くしっかりと掘られている。特に隅柱は大きく深い柱穴で、方形気味の掘り方をもつ。柱穴覆土には柱痕状の覆土堆積はなく、柱を抜き取った後に埋め戻したような痕跡を残す。ただ、柱穴底面には柱部分のみ下がった段掘り状を呈するものが多く、柱径は20～30cm程度であったことが推察される。出土遺物は柱穴から須恵器11点、土師器60点が出土しており、Ⅰ期～Ⅱ1期頃が中心である。

### 3. SB03

A地区の中程、最も西寄りに位置する4間×2間の建物で、SB02の西側に並ぶようにN-31.5°-Eの主軸（山側柱列）で建てられる。台地頂部近くに位置するため、削平が著しいが、かろうじて各柱穴の下底部付近が遺存しており、もともと柱穴が深かったことを物語る。規模は6.7×4.7mだが、東隅柱穴がやや西側へ入るように台形に歪んでおり、桁行6.5mとなって、平面積は31.02㎡となる。桁間寸法は1.5～1.8m、平均1.65mで、梁間寸法は2.0～2.5m、平均2.1、2.3m。柱穴は円形プラン主体だが、隅柱は方形基調をなす。隅柱は深く掘られる傾向があるが、概ね径60～100cm、深さは削平を受けているものが多いため、20～60cm程度とばらつく。SB02同様



第 57 図 A地区掘立柱建物遺構図1 (SB01・SB02・SB03)

全体的に深くしっかりと掘られており、柱穴底面には柱部分のみ下がった段掘り状を呈するものが多い。柱状掘り込みから、柱径は20~30cm程度であったことが推察される。削平のため出土遺物はなく、時期判定するものはないが、SB02との主軸や位置関係、建物規模や柱穴の形状などから、類似した建物と位置づけ可能であり、併存せずともほぼ同時期のものと見てよい。

#### 4. SB04

A地区の北西側に位置する5間×3間の建物で、N-22.5°-Eの主軸（山側柱列）を持つ。台地頂部削平で柱穴上部が削られ、下底のみの遺存だが、全ての柱穴が残っている。建物が全体的に若干歪み、梁行寸法はどちらも4.8mだが、桁行寸法は山側で6.2m、谷側で6.4mと広がる。平面積は30.24㎡。桁間寸法は全体的に狭い多柱形態で1.1~1.3mとややばらつきが、平均値は1.26m前後。梁間寸法は各柱間とも1.6mと均質で、平均でも1.6mを測る。柱穴は径50cm前後の円形プラン主体で、深さが10~20cmと浅いのは削平のためである。柱穴覆土には柱状の覆土堆積はなく、黄褐色土塊を多めに混在させる黒色土（10YR2/1~10YR2/2）で、柱を抜き取った後に埋め戻したような堆積を示す。ただ、柱穴底面には柱部分のみ下がった段掘り状を呈するものが一部確認できる。柱穴からの出土遺物はなく、時期の特定は困難だが、柱穴配置等から見てI期からII期頃のものとして予想される。

#### 5. SB05・SB06

A地区の中心、最も東寄りの鞍部中央付近平坦地に位置する掘立柱建物で、3間×2間のほぼ同規模、同主軸の2棟の建物が重複して存在する。柱穴同士の重複は何箇所かで確認されるが、両者とも柱穴覆土が含有物少ない黒色土かつほぼ同じ単一土層であったため、切り合い関係を把握しきれてない。ただ、柱穴の掘り込み位置や深さなどから見て、SB06からSB05へ建て替えられた可能性が高いと考えている。

SB06は規模6.3×4.2m、N-28°-Eの主軸（山側柱列）で、平面積は26.46㎡を測る。桁間寸法は1.7~2.2m、平均では2.1m、梁間寸法は西側で2.0m、東側で2.2m、平均では2.1mを測る。柱筋の通った歪み少ない建物で、柱穴は円形基調だが、隅柱は方形基調であり、径60~80cmと大きく、深さは30~35cmとしっかりと掘り込まれている。柱穴底面には柱部分のみ下がった段掘り状を呈するものが多い。柱穴からは須恵器3点、土師器24点が出土しており、土師器煮炊具からI期からII期のものと予想される。

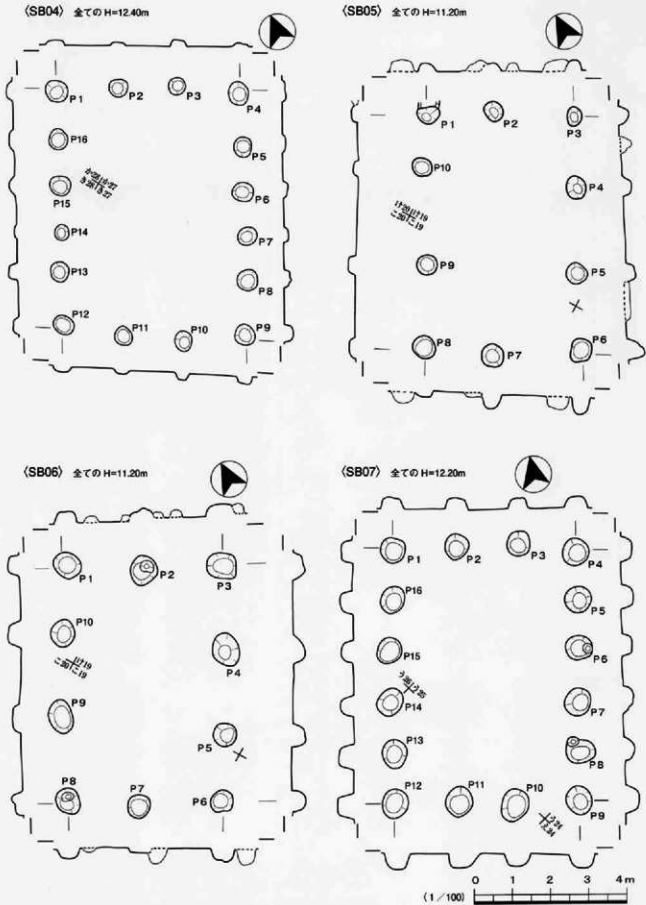
SB05はやや山側の柱並びが悪く、規模6.1×4.1mだが、北隅柱穴が歪む。主軸はN-27.5°-E（山側柱列）で、平面積は24.7㎡を測る。桁間寸法は1.9~2.1m、平均では2.0m、梁間寸法は1.5~2.3mとばらつき、平均では2.0mを測る。柱穴は円形基調の平面形で径50cm前後と小さく、深さも20~40cmと浅い。全体的にSB06よりも小規模な柱穴であり、歪みがあるなど構造上劣る建物と言える。柱穴からの出土遺物は須恵器3点、土師器2点と少ないが、須恵器からII期に位置付け可能と判断される。

#### 6. SB07

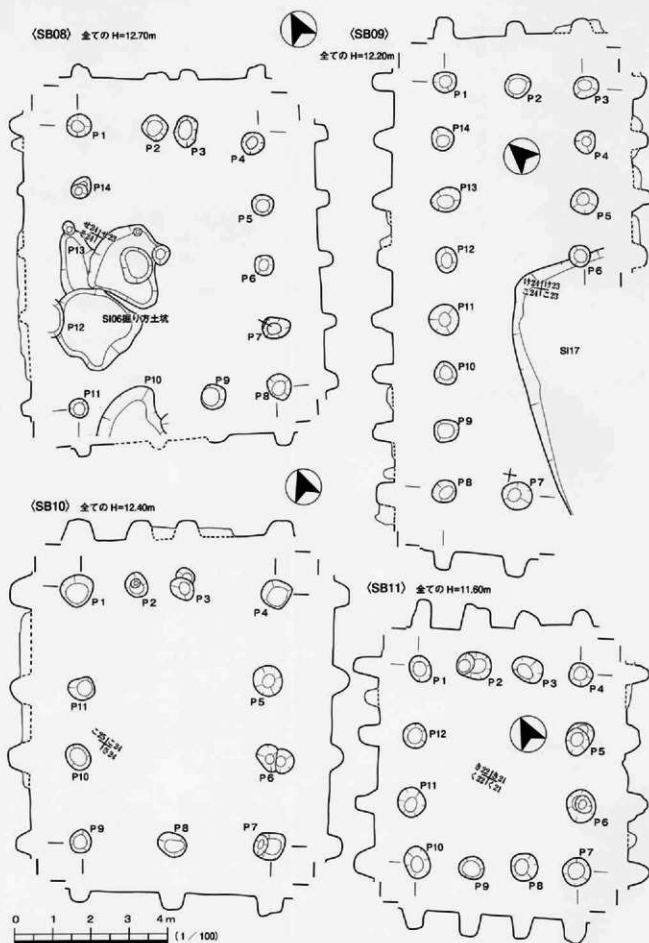
A地区の北側に位置する5間×3間の建物で、N-11.5°-Eの主軸（山側柱列）を測る。規模は6.7×4.9mで、歪みのほとんどない平面形態を持つ。平面積は32.83㎡。桁間寸法は全体的に柱間間隔の狭い多柱形態で、1.2~1.4mとややばらつきが、平均値は1.34m。梁間寸法は1.5~1.7m。平均値は1.63mを測る。柱穴は円形プラン主体で、概ね径は60~70cmと揃い、深さは25~35cmを測る。柱穴覆土には柱状の覆土堆積を示すものが多く、柱状部分は20cm径で黄褐色土粒を少量含有する軟質の黒色土（10YR2/1）、掘り方部分は黄褐色土塊を多量混在させるしまりのある黒褐色土（10YR2/2）となり、柱状部分は柱穴底面に若干の窪みを形成する。柱の抜き取り時に柱穴を掘り直して埋めた堆積状態を示すものもあり、柱状堆積を呈しても、柱は抜き取ったものであることを示唆する。出土遺物は須恵器12点、土師器36点があり、I~III期と遺物の時期に幅があるが、主体はII期のものと判断される。

#### 7. SB08

A地区の南西側に位置する4間×3間の建物で、N-24.5°-Eの主軸（谷側柱列）方位をもつ。SB19とはほぼ同じ主軸方位であり、その西側に重複して存在している。両者の前後関係は不明だが、建て替え建物の可能性は高い。谷側の柱列は明確であるが、山側はSI06と重複しており、P12・P13にあたる部分が不明瞭である。東隅の柱がやや内に入るため、全体的に柱筋が歪んでおり、本来の規模は7.5×5.2mだったものが、桁行左で6.5m、梁行上で4.6mに歪み、平面積は35.7㎡となる。桁間寸法は右側柱列で1.5~1.7m、平均値では1.65m。梁間寸法は下



第58図 A地区掘立柱建物遺構図2 (SB04・SB05・SB06・SB07)



第59図 A地区掘立柱建物遺構図3 (SB08・SB09・SB10・SB11)

手側の柱列で1.7~1.8m。平均値は1.76mを測る。柱穴は円形プラン主体で、概ね径は50~60cm、深さは隅柱が深く30cmを測る。柱穴からの出土遺物には須恵器5点、土師器38点があり、Ⅳ期に位置づけられるものとⅦ期のものが混在している。主体はⅦ期のものと言えるが、当地区から出土する遺物にこの時期に位置づけられるものは少なく、建物の時期帰属には消極的である。

## 8. SB09

A地区のほぼ中央付近に位置し、主軸N-47°-E（山側柱列）と、南北に軸をとる掘立柱建物の中では最も東へ軸を振る建物である。梁間2間に対し、桁間7間と、長大な建物で、規模は10.9×3.7m、平面積は40.33㎡を測る。全体的に柱筋はしっかりとしているが、南側の柱から谷側4本分の柱列はSI17と重複しているため、柱穴は確認できていない。柱間寸法は桁間、梁間ともに、それぞれほぼ均等な柱間隔を持ち、桁間の平均寸法で1.55m、梁間の平均寸法で1.85mを測る。柱穴は円形プランで、概ね径は60~80cm、深さ50cm前後と深くしっかりとした柱穴ばかりである。柱穴覆土は黒色系の軟質土が堆積するが、柱痕状の堆積を確認した部分はない。ただ、柱穴底面に柱痕状の窪みを形成するものが一部確認される。なお、建物内の南側、桁行柱列上に被熱焼結した灰状遺構が確認されるが、建物に帰属するかは、不明である。柱穴からの出土遺物は須恵器3点、土師器14点があり、Ⅰ~Ⅱ期の時期と判断される。

## 9. SB10

A地区中程、やや西側に位置し、山側の柱穴列が一部SI08と重複する建物である。主軸はN-20°-E（山側柱列）で、SB04の主軸方位に近い。桁間3間、梁間2間の建物だが、上手側梁行の柱は4本確認され、梁間3間になる可能性がある。規模は6.7×5.1mで、平面積は34.17㎡を測る。桁間寸法は2.1~2.3m、平均値2.2m。梁間寸法は下手側の列で2.5mだが、上手側は3間となるため、ややばらついて配置される。柱穴は隅柱が方形プランで、径60~80cm、深さ50cmと大きくしっかりと掘られるが、他は円形プランで、径60cm程度、深さ40cm程度となる。柱穴からの出土遺物には須恵器15点、土師器14点があり、Ⅶ期から中世1-Ⅱ期のものが出土している。遺物の主体は中世1-Ⅱ期のものだが、当遺跡で確認されるこの時期の掘立柱建物は総柱建物となっている。この点から考えて、Ⅶ期の可能性は高いが、Ⅶ期に帰属させることについても、当地区での当期の遺物出土量の少なさから、やや消極的ではある。

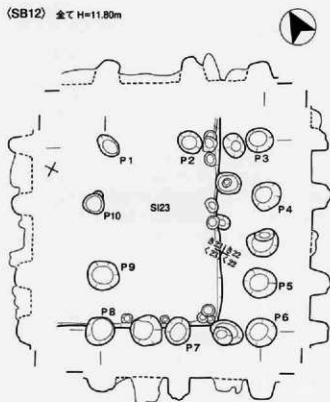
## 10. SB11

A地区のほぼ中央付近、SB05・SB06の北側に位置する建物で、主軸についてもN-29°-E（山側柱列）と、両建物に類似する方位を向く。北東側の柱穴がSI31とSK39に重複し、柱穴同士の重複はないがSB21とも建物が重なる。規模は5.2×4.25mの3間×3間の建物で、平面プランに重みは認められない。平面積22.1㎡程度の比較的小型の建物である。梁間、桁間ともに柱間寸法はほぼ等間隔で、平均値は梁間寸法で1.42m程度、桁間寸法で1.73m程度を測る。柱穴はいずれも円形基調であり、概ね径は60~75cmと大きく、深さ50~70cmとかなり深く掘られる。柱穴覆土には一部柱痕部分や掘り方部分の特徴を残すものがあるが、大半は柱抜き取りの際の掘り直し、埋め戻しを示す土層堆積である。掘立柱建物の平面形が正方形気味かつ小型を呈する点や、桁間、梁間ともに柱間隔が狭い点、柱穴が太く深く掘られている点など、建物構造としては厚重であり、倉庫棟建物と位置付けるのが妥当である。柱穴からの出土遺物は須恵器11点、土師器60点と多く、ほぼⅡ期からⅢ期に位置付けできる。

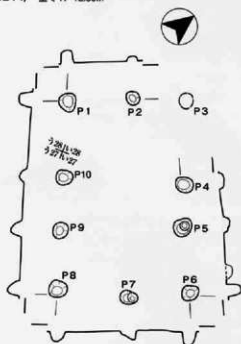
## 11. SB12

A地区のほぼ中央付近、SB11の西側に並列する建物で、主軸についてもN-29°-E（山側柱列）と同一方位を向く。規模5.0×4.0m、平面積20㎡を測る3間×2間の建物だが、柱筋には浅い柱穴が並んでおり、それらを含めれば、梁間4間、桁間4間の多柱建物となる。ただ、建物の北西部分はSI23と重複するため、深く掘られた柱穴のみ確認しており、このような構造をもつかは確認を得られなかった。しかしながら、柱穴の径が60~80cmと大きく、50cm程度の深さを持つ点や建物の平面形が正方形気味かつ小型を呈する点は並列するSB11と共通するものであり、同様の倉庫棟建物である可能性が高い。その視点に立てば、多柱建物である可能性は高いといえよう。柱穴覆土には柱痕状の堆積を残すものはほとんどなく、柱抜き取りの際の掘り直し、埋め戻しを示す土層堆積であるが、柱穴底面には柱痕状の窪みを残すものが多い。柱穴からの出土遺物は須恵器8点、土師器70点と多く、Ⅱ1~Ⅱ2期頃の須恵器が確認される。

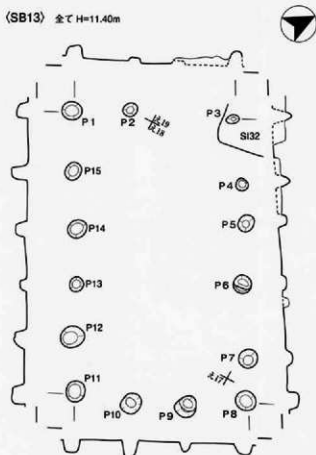
(SB12) 全てH=11.80m



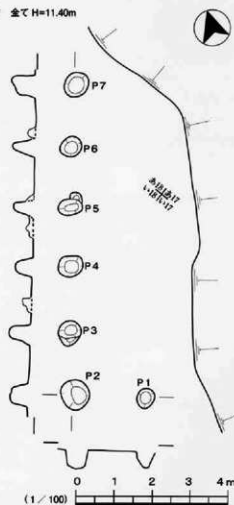
(SB14) 全てH=12.30m



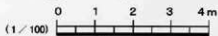
(SB13) 全てH=11.40m



(SB15) 全てH=11.40m



第60図 A地区掘立柱建物遺構図4 (SB12・SB13・SB14・SB15)





## 12. SB13

A地区の北東側に位置し、SI32と北西隅柱が重複する。主軸がN-62.5°-W（谷側柱列）を向く東西に長い5間×3間の建物である。規模は7.5×4.5mを測り、平面積は33.75㎡である。桁間寸法は1.4~1.6mで、平均値は1.5m。梁間寸法も1.5mである。柱穴は円形プランの径40cm程度、深さ30cm未満程度のもが主体的で、規模の割にはやや貧弱な感じを受ける。また、柱筋についても南側と東側が整っているが、北側、西側は並びが悪く、若干歪んで、台形状の平面形となるなど、大型建物の様子を持たない。出土遺物は土師器小片3点のみであり、時期比定不可能である。

## 13. SB14

A地区の最も北側に位置する掘立柱建物で、尾根部削平によって北側の隅柱が確認できていない。主軸がN-51°-W（南側柱列）を向く東西に長い、柱間規模3間×2間の建物である。規模は桁行5.0m、梁行3.2mを測り、平面積は16.0㎡である。桁間の柱配置は均等ではなく、やや谷側につまるような配置をしており、柱筋もやや歪んでいる。桁間寸法は平均値で1.67m、梁間寸法は平均値で1.6mある。柱穴は径40~50cm、深さ20~30cm程度の円形基調のもが主体的である。出土遺物はなく、類似する主軸の建物もないなど、時期比定する材料に欠ける。

## 14. SB15

A地区の北東隅、東側が深く削り取られて、消失してしまっている区域に位置する建物である。南側と西側の柱列しか遺存しておらず、全体規模は不明であるが、桁間は5間以上伸びず、桁行長は8.25mであることはほぼ確実である。梁間は2間以上であるが、どれだけ伸びるかは不明。柱間寸法は桁間でほぼ均等な配置を示し、平均値は1.65m。確認できる梁間での柱間寸法は1.8m程度である。柱穴は隅柱が径70cm、深さ50~60cmとしっかり掘られるが、他の柱穴は径60cm、深さ50cm程度と通常の規模で、特に大型の建物という印象ではない。出土遺物は土師器4点のみだが、時期比定可能な遺物が数点あり、Ⅱ3期とⅣ1期に位置づけられる。どちらにも帰属するかは判断しにくい。後者である可能性が高い。

## 15. SB16

A地区の中間、やや北側に位置する建物で、北側の柱穴の一部がSI28と重複する。柱穴の重複はないが、SB23とも建物位置が重複している。主軸方位N-18°-E（山側柱列）の4間×3間の建物で、規模は7.8×4.45m、平面積は34.71㎡を測る。桁間寸法は1.85~2.0m、平均値では1.95m。梁間寸法は1.4~1.6m、平均値では1.48mを測る。柱穴は円形プラン主体で、概ね径は50~65cm、深さは20~40cmを測る。柱穴底面に柱痕状の若干の窪みを形成するものが多く、柱径はおよそ20cm程度を測る。出土遺物は須恵器23点、土師器2点で、Ⅱ1期頃のものだと判断される。

## 16. SB17

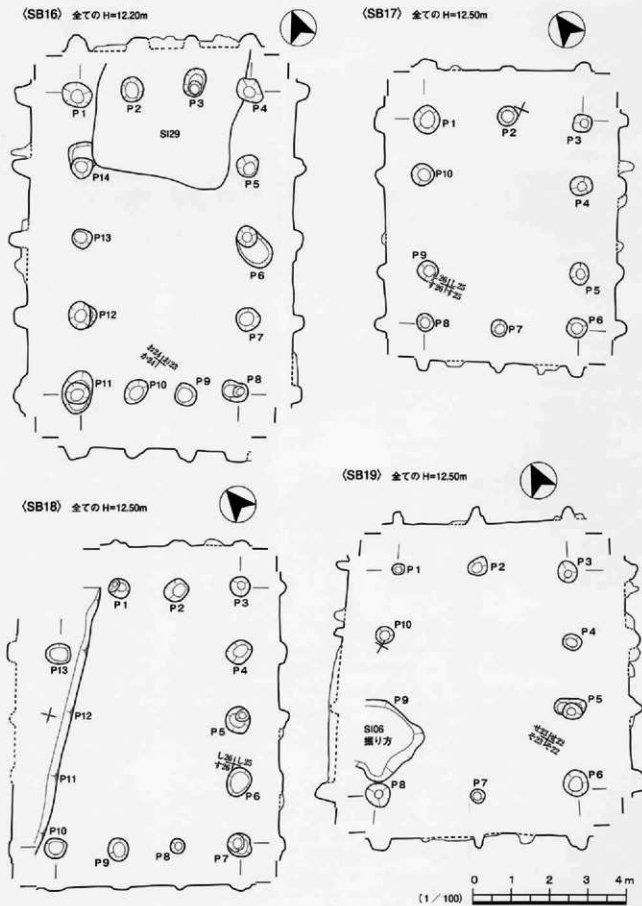
A地区の中間、西側に位置する建物で、主軸はN-34°-E（谷側柱列）を向く。SB01とSB18の中間に位置し、建物が重複する。SB03とは近似した主軸方位を持ち、位置関係からしても、同時期に併存した建物である可能性をもつ。3間×2間の建物で、規模は5.2×4.0m、平面積は20.8㎡を測る。梁間寸法は2m程度に柱穴が均等配置されるが、桁間寸法は中間の柱間が2.2mと広いのに対し、上下の柱間は1.5mとつまった間隔であり、不均等に配置される。柱穴は上部削平されているためか、浅いものも多く、径も50cm以下と小型のものが多い。柱穴からの出土遺物はなく、時期比定する材料に欠けるが、先に述べたように、主軸方位からSB03に近い時期のものである可能性がある。

## 17. SB18

A地区の中間、最も西側に位置する建物で、尾根頂部削平により、山側の柱穴がところどころ確認できていないが、4間×3間、規模6.75×4.85m、平面積32.7㎡の建物であると推察する。SB17と重複する建物で、主軸はN-42°-E（谷側柱列）を測る。梁間寸法はほぼ1.6m、桁間寸法も1.65m前後に柱穴がほぼ均等配置される。柱穴は上部削平されているためか、深さ20cm程度と浅いものが多いが、径は50~70cmと大きな規模を持つ。柱穴底面には柱痕状の窪みを持つものが多く確認される。出土遺物はなく、時期比定できる材料に欠ける。

## 18. SB19

A地区の南西側に位置し、SB08と主軸をほぼあわせて、建て替えられるように重複する建物である。主軸は



第61図 A地区掘立柱建物遺構図5 (SB16・SB17・SB18・SB19)

N-25°-E (谷側柱列) に向き、SI06とも南西側柱列が一部重複する。桁間3間、梁間2間、平面積は27.44㎡を測る建物で、桁行は5.6mだが、梁行は上手側が4.6m、下手側は5.2mと歪んで建てられる。梁間寸法は上手側が2.3m、下手側は2.6m、桁間寸法は1.8~1.9m、平均値1.86mを測る。柱穴は径50cm以下のものが多く、建物としては貧弱である。出土遺物はなく、時期比定できないが、建て替えの可能性が高いSB08とはほぼ同時期の建物と判断される。

#### 19. SB20

A地区のほぼ中央に位置し、N-29.5°-E (山側柱列) の主軸方位をもつ。北西側柱列がしっかりと並んでいるため、掘立柱建物と認定したが、北東側柱列はSI17と、南東側柱列もSK11との重複で柱穴が確認できておらず、不確実性を残す。遺構図では3間×3間としたが、SI17の東側に桁行の延長線上に並ぶ柱穴があり、桁間4間の可能性もある。3間×3間の建物なら、規模6.4×5.3m、平面積33.92㎡となるが、桁間4間の建物なら、規模8.4×5.3m、平面積44.52㎡となる。北西側柱列は、桁間寸法が1.6~1.8mで並び、柱穴は径50cm前後、深さ40cm程度と比較的しっかりとしている。出土遺物は土師器片2点のみで、類似するSB05、SB06、SB11、SB12などの建物主軸から考えて、同時期のⅡ期頃に位置づけられるものと予想する。なお、掘立柱建物内の中央付近、やや谷寄りに炉状遺構とする被熱土化した箇所が確認される。位置的に建物に伴うカマド状遺構の灰口焼土と判断することも可能性としてはあるが、判断材料に欠ける。

#### 20. SB21

A地区の中央付近、やや北寄りに並列して存在するSB11とSB12の間に位置し、柱穴同士の重複はないが、建物は重複して存在している。主軸方位N-37.5°-E (谷側柱列) を測る建物で、SB11・SB12よりも東へ振る。北側柱列がSI23と重複するため、隔柱を含め、確認できていないが、桁間3間、梁間2間で、規模5.95×3.5m、平面積20.83㎡を測る建物と思われる。柱筋が通らず、柱間間隔も一定性を欠くなど、しっかりとした建物構造とは言い難い。確認される柱穴も径40cm前後と小さく、深さも20~40cmと浅いなど、簡易な建物を予感させる。出土遺物はなく、時期比定できる材料に欠ける。

#### 21. SB22

A地区の中央付近、やや東寄りに位置し、主軸方位N-19°-E (谷側柱列) を測る建物である。遺構図を示していないが、SB15に近似した主軸方位を持つ、柱間規模3間×2間と予想した。谷側の柱筋は並ぶものの、山側の柱筋は通っておらず、建物全体としても歪みが大きい。柱穴も径30cm程度と小さく、深さも20~30cmと、掘立柱建物として認定するには躊躇するが、仮に、簡易な構造の建物と位置付け、提示しておく。ちなみに、規模は梁行で下手側3.5m、上手側3.9m、桁行左側4.4m、右側4.2mを測り、平面積は15.91㎡となる。柱穴からの出土遺物はなく、古代に位置付けられるのかも不明である。

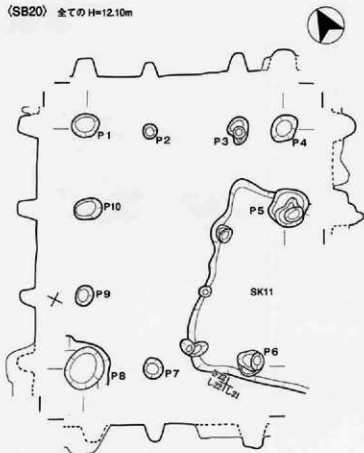
#### 22. SB23

A地区のやや北側に位置し、SB07のやや南側に隣接して、類似する主軸方位N-125°-E (山側柱列) で建てられる。南西側柱穴がSI22と東側柱穴がSI28と重複しており、柱穴の一部確認できていない部分もある。また、柱穴同士の重複はないが、SB16とも建物は重複している。3間×2間の建物で、梁行は4.3mだが、桁行は山側で6.1mに対し、谷側では6.8mとやや広がり、台形状に歪んでいる。平面積は27.7㎡。柱間寸法は、桁行の山側で2.0mとほぼ等間隔だが、谷側は北側の柱間のみ2.7mと広く、梁間間隔も片側が2.3mに対し、もう片側は2.0mと一定ではない。ただ、柱筋自体はよく通っており、柱穴も径50~70cm、深さ40cm程度としっかりと掘り込まれているなど、通常の掘立柱建物と言える構造のものである。柱穴からの出土遺物は土師器片2点のみで、時期比定することは困難である。

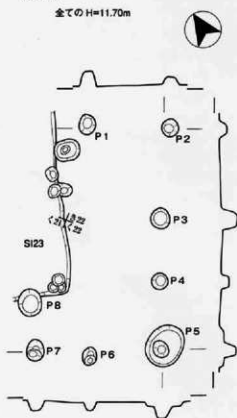
#### 23. SB24

A地区の南西側に位置し、N-29.5°-E (山側柱列) の主軸方位をもつ。SB08の梁行北側柱列と接するように、その北側に近似した主軸方位で建てられる。SI07と重複しているため、東側の柱列は把握できていないが、3間×2間の柱間規模を持つ、規模5.5×4.25m、平面積23.37㎡の建物と判断される。柱間寸法は桁間で1.7~2.0m、梁間で2.0~2.2mを測る。柱穴は径40cm前後の円形基調が主で、深さは谷側の柱穴で40cm程度を測るものがあるが、山側の柱穴は尾根頂部倒平のために上部が削り取られ、柱穴基部しか遺存していない。柱穴からの出土遺物はなく、時期比定できる材料に欠ける。

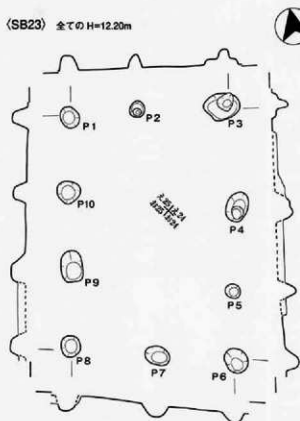
(SB20) 全てのH=12.10m



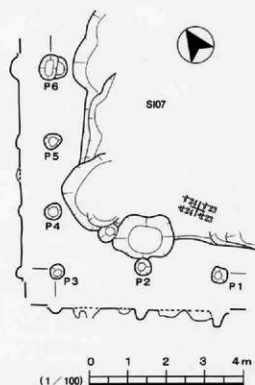
(SB21) 全てのH=11.70m



(SB23) 全てのH=12.20m



(SB24) 全てのH=12.50m



第62図 A地区掘立柱建物遺構図6 (SB20・SB21・SB23・SB24)

0 1 2 3 4 m  
(1/100)

### 第3項 土坑

A地区で確認される土坑の穴は50基以上あるが、この中で風倒木痕状の堆積をもつものは除外し、38基に土坑としての遺構番号を付してある（SKナンバーはSK01からSK41までを付すが、SK01、SK02、SK03についてはSI15の掘り方土坑としたため欠番となった）。なお、38基のうち、土坑として小規模かつ特徴がないもので、遺物がほとんど出土していない12基の土坑（SK13・SK15・SK19・SK20・SK22～24・SK28～31・SK34）に関しては、以下の報告では除外することとする。これ以外の26基が古代の土坑として報告対象となるが、この中に特殊な意図で掘られた土坑、例えば、土師器焼成土坑（土師器焼成坑）や木炭焼成土坑（製炭土坑）、墓塚、井戸などは確認できず、特別な性格をもつ土坑は存在しない。ただ、土坑底面の一部が被熱するものや土坑上面に被熱焼結した面をもつものがあり、土坑内で何かを焼成した土坑または屋外炉の下部遺構的な土坑の可能性をもつ。他の土坑については、大量に土器を廃棄した大型の土坑から、小型の土坑まで様々であり、以下に個別に説明を加える。なお、遺構所属時期については、堅穴建物同様、田嶋明人氏の北陸古代土器編年で表記し、規模は長軸×短軸で、深さは壁上端から土坑中央付近下底面までの比高差で示す。

#### 1. SK04・SK05

A地区の中程の西側、L24・25Grに位置する2基の土坑である。土坑の所在する箇所が根根頂上付近に位置し、上部は削平を受けているため、遺構の実態を復元する資料に欠くが、底面の比較的平坦な、さほど深くない不整形の複数の掘り込みがあることから、堅穴建物の床下掘り方土坑の可能性を持つ。ただ、当掘り方土坑に通常見られる黒褐色土と黄褐色土を混在させた締まりある覆土は確認されておらず、一応、ここでは土坑として扱っておく。なお、土坑類型を設定とすれば、堅穴建物の掘り方土坑状を呈するというので、D類土坑としておく。図示した破線は、堅穴建物と想定されるとすれば、この程度のラインという目安を示しただけで、さしたる根拠はない。SK04は規模220×180cm、深さ10～15cmの不整形。SK05は規模190×140cm、深さ20cmの不整形円形を呈す。出土遺物はSK04が須恵器食膳具1点、土師器煮炊具42点、須恵器貯蔵具7点、SK05が須恵器食膳具16点、土師器食膳具4点、土師器煮炊具129点、須恵器貯蔵具25点を数える。SK04の土器は破片ばかりで、図示できるようなものはないが、SK05は600の瓶を始め、時期の分かる資料があり、Ⅲ期頃のものと考えられる。

#### 2. SK06

A地区の中程、やや南寄り、せ22Grに位置する略円形呈す土坑である。規模150×135cm、深さ20cmを測る。出土遺物は、須恵器食膳具5点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具14点と少ないが、時期比定可能な土器があり、Ⅳ2期のもと考えられる。土坑類型としては、通常の土坑という位置付けで、A類土坑としておく。

#### 3. SK07・SK08

A地区の中程、やや南寄り、す21・L22Grに位置する2基の土坑である。いずれも大型で深い土坑であり、近接して存在するが、2基を関連付ける資料はなく、時期についてもSK08の土器が破片のため、同時期であるかも不明である。

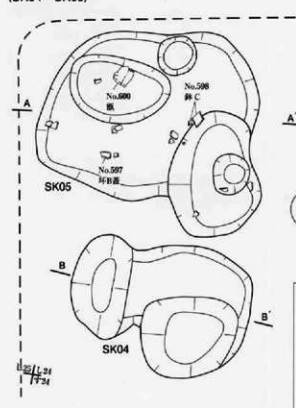
SK07は規模330×240cm、深さ70cmの隅丸長方形呈すもので、上層に黄褐色土を多く混在する覆土をもつ。出土遺物は須恵器食膳具34点、土師器食膳具29点、土師器煮炊具370点、須恵器貯蔵具28点で、図示可能な須恵器食膳具よりⅢ期からⅣ1期のもと思われる。土器出土の多い大型土坑という類型に該当するものであり、これをB類土坑としておく。

SK08は径200cm程度の円形に近い土坑で、深さ55cmを測る。最上層に被熱焼結した炉床を薄く形成する。被熱は土坑覆土上面のみであり、覆土内には土器の混在が少ない（須恵器食膳具12点、土師器煮炊具18点、須恵器貯蔵具4点）。土坑の中央付近がよく焼けている点と、土坑覆土内に土器混在が少なく、土坑掘削後早期に埋められている可能性があることなどから考えて、土坑は被熱焼結した小型炉の床下土坑と位置づけ、土坑類型をE類土坑としておく。

#### 4. SK09

A地区の中程からやや南西寄り、す23Grに位置し、SI07の堅穴建物が完全に埋没した後にその中央付近に掘削された土坑である。径180cm程度の略円形を呈し、深さ40cmを測る。底面の平坦な土坑で、土坑最上面には被熱焼結した炉床を薄く形成する。土坑中央付近、50cm程度の範囲で黒褐色土と黄褐色土を混在させた炉床土を薄く貼り、その上面のみが強く焼結している。炉床土下は黒褐色土の単一層で、堅穴建物の土器も混在していると

(SK04・SK05)



**SK05土層註**

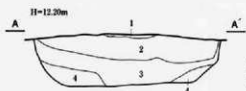
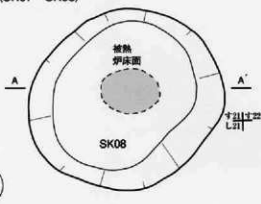
- 1層 黒褐色土 (DIVERG2) : 焼土小塊・炭灰の少量含有。
- 2層 黒褐色土 (DIVERG2) : 炭灰の少量、焼土小塊少量含有。
- 3層 黒褐色土 (DIVERG2) : 焼土小塊多め、炭化灰・黒褐色土小塊少量含有。



**SK04土層註**

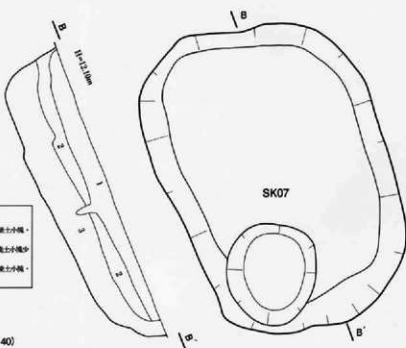
- 1層 黒褐色土 (DIVERG2) : 焼土小塊・炭灰、黒褐色土小塊少量含有。
- 2層 黒褐色土 (DIVERG2) : 焼土小塊・炭灰の多め、黒褐色土小塊少量含有。
- 3層 黒褐色土 (DIVERG2) : 黒褐色土 (DIVERG4) 上が7 : 3程度で存在する土。焼土小塊・炭灰少量含有。

(SK07・SK08)



**SK08土層註**

- 1層 褐色油煎り土塊 (DIVERG7) と黒褐色土 (DIVERG2) 上が7 : 3程度で存在する油煎り土塊の混在。
- 2層 黒褐色土 (DIVERG2) : 焼土小塊多量、炭褐色土小塊・炭灰小塊多量の含有。
- 3層 黒褐色土 (DIVERG2) : 焼土小塊多量、にがい黒褐色土小塊・炭灰の多め含有。
- 4層 黒褐色土 (DIVERG2) : 明褐色土 (DIVERG6) が多く存在する土層。焼土小塊多め、炭灰・黒褐色土小塊少量含有。

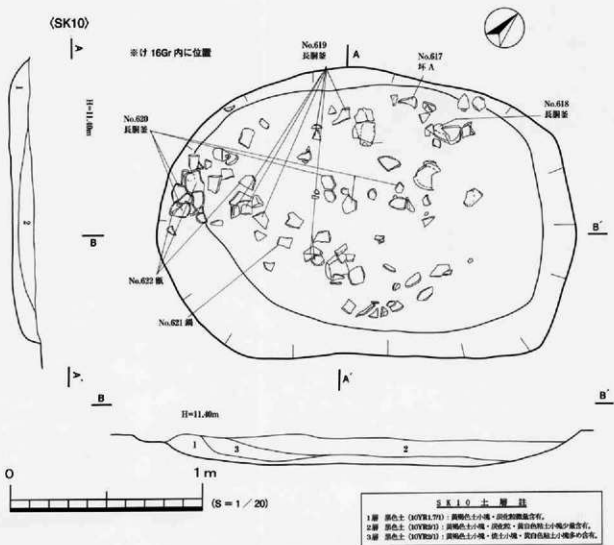
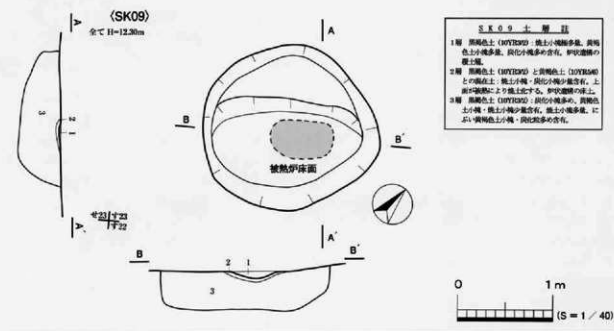


**SK07土層註**

- 1層 黒褐色土 (DIVERG2) : 明褐色土の多量、焼土小塊・炭灰の少量含有。
- 2層 黒褐色土 (DIVERG2) : 明褐色土の多め、焼土小塊少量、炭灰少量含有。
- 3層 黒褐色土 (DIVERG2) : 明褐色土の少量、焼土小塊・炭灰少量含有。



第63図 A地区土坑遺構図1 (SK04・SK05・SK07・SK08)



第 64 図 A地区土坑遺構図 2 (SK09・SK10)

考えられるが、須恵器食膳具67点、土師器食膳具10点、土師器煮炊具440点、須恵器貯蔵具35点と多い。時期比定可能な土器が多く、いずれもⅣ2期頃のものと判断される。土坑覆土に遺物混在は多いが、炉床と土坑の関連性は高く、土坑類型E類に該当させておく。

#### 5. SK10

A地区の南西際、け16Grに位置する規模220×150cmの楕円形呈す大型土坑である。深さ15cmと浅いが、当地区は黒色土山地のため、遺構立ち上がりの把握が上層では困難であり、下げたためのもので、本来は深い土坑であったと理解している。底面は平坦で、とくに覆土に特徴は見出せない。出土遺物は全重量が1つて多いとは言えないものの、須恵器食膳具7点、土師器煮炊具160点、須恵器貯蔵具2点と、煮炊具にまとまりがあり、長胴釜を中心に復元可能な個体が多い。時期はⅢ期からⅣ1期のものと思われる。規模や土器出土量に突出した様相はないが、一応B類土坑に属するものと位置づけておく。

#### 6. SK11

A地区の中央付近からやや南寄り、さ20・21Grに位置する規模270×260cmの隅丸方形呈す大型土坑である。深さ35cm前後で、下底面の平坦となるしっかりとした土坑で、須恵器食膳具165点、土師器食膳具30点、土師器煮炊具750点、須恵器貯蔵具198点と、極めて多量の土器が出土する。浅黄白色粘土塊を多量混在させる層が中層であり、砥石や多くの土製支脚を混在させるなど、意識的に廃棄した感がある。なお、当土坑の最上面には黒褐色土と焼土塊を混在させた土で、径50cm程度の炉床を形成し、上面が焼結するなど、炉状遺構としても使われている。ただ、炉の位置が土坑中央になく、大型土坑を呈する点から、土坑としては土器大量廃棄を行う廃棄土坑の性格が強く、B類土坑と類型付けておく。出土遺物の時期はⅡ1期古段階からⅡ3期頃までと若干幅があるが、Ⅱ1期からⅡ2期を中心を持つものと考えられる。

#### 7. SK12

A地区の南側、た17Grに位置する規模95×60cmの楕円形小型土坑である。規模、土層堆積から大型の柱穴という位置付けのほうが妥当なもので、土坑中央付近に径20cm程度の貝殻層柱がある。柱の抜き取り後に貝殻を廃棄したもので、貝殻は二枚貝が押し込まれるようにして大量に捨てられている。その周りの土層は掘り方土であったものだろう。貝殻はヤマトシジミを大半に、僅かのカワシジメが混在している。土器の出土はなく、時期不明。土坑類型は柱穴状の小型土坑としてC類土坑としておく。

#### 8. SK14

A地区の中心、やや西側寄り、こ・さ24Grに位置する規模170×180cmの不整形土坑である。土坑の所在する箇所が根柢側に位置し、上部は削平を受けているため、遺構の実態を復元する資料に欠くが、底面の比較的平坦な、さほど深くない土坑である点と黄褐色土塊を混在させる土層である点から、堅穴建物の床下掘り方土坑の可能性を持つ。ただ、堅穴建物である根柢にかけ、D類土坑と位置づけておく。出土遺物は図示した赤彩土師器椀Aと土製支脚のみで、Ⅳ2期頃のものと思われる。

#### 9. SK16

A地区の中心、やや南寄り、SK11に近接して存在する土坑で、径95cm程度の小型円形を呈する。さほど深さはないが、中からは須恵器食膳具12点、土師器食膳具8点、土師器煮炊具108点、須恵器貯蔵具35点と、多くの土器が出土しており、同様の土器出土の多いSK11と関連性を持つ可能性がある。ただ、土器の時期はⅠ期頃とやや古く位置づけられる。土坑類型は土器の出土が多いが、A類としておきたい。

#### 10. SK17

A地区のほぼ中央付近、け23Grに位置する土坑である。規模185×160cmの隅丸方形を呈し、深さ35cmで底面は平坦に掘られている。覆土は黄白色粘土塊を多く含む土層で、須恵器食膳具8点、土師器食膳具4点、土師器煮炊具71点、須恵器貯蔵具19点と、比較的多くの土器が出土する。土器の時期は赤彩土師器椀AからⅣ2期頃と思われる。なお、遺物に須恵器密壇片があり、注目される。土坑類型はA類土坑としておきたい。

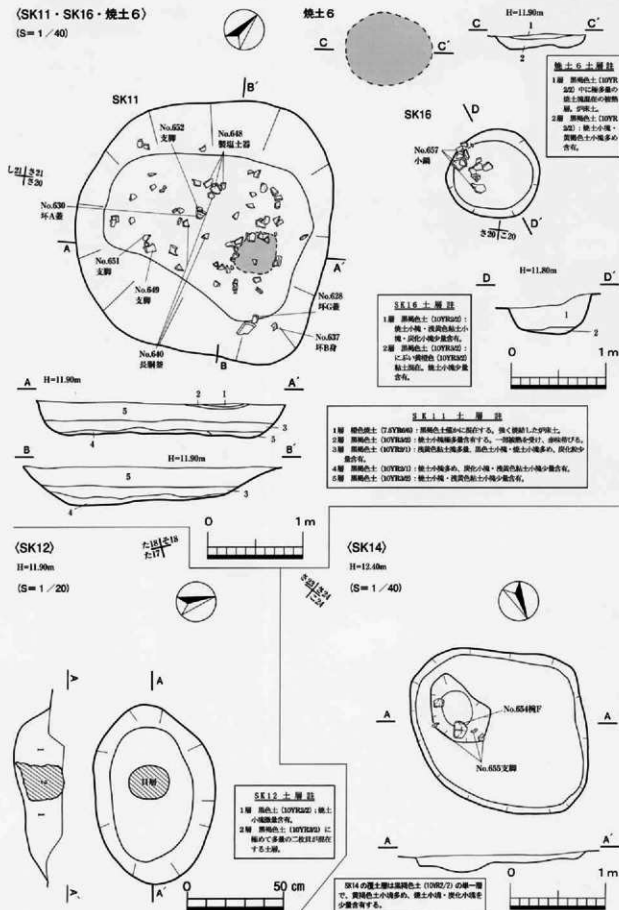
#### 11. SK18・SK21

A地区の中心、やや東寄り、け19・20Grに位置する2基の土坑である。両者は近接するが、関連性は薄い。SK18は規模150×130cm、深さ50cmの小型土坑で、須恵器食膳具13点、土師器煮炊具97点、須恵器貯蔵具16点と比較的多くの土器が出土する。覆土に特徴はなく、A類土坑と類型付けておく。



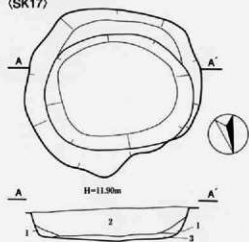
(SK11・SK16・焼土6)

(S=1/40)



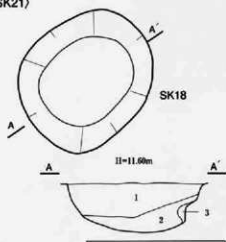
第65図 A地区土坑遺構図3 (SK11・SK12・SK14・SK16・焼土6)

(SK17)



- SK17 土層図**
- 1層 黒色土 (GYR622)；黒白色粘土塊多量含有。
  - 2層 黒色土 (GYR621)；黒白色粘土塊・黄褐色石礫・炭化灰・焼土小塊少量含有。
  - 3層 黒色土 (GYR621)；黒白色粘土塊少量含有。

(SK18・SK21)

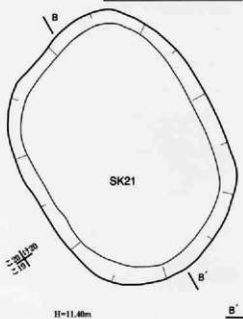


- SK18 土層図**
- 1層 黒色土 (GYR622)；焼土小塊少量、黄白色粘土塊・炭化灰少量含有。
  - 2層 黒色土 (GYR621)；黄褐色小塊少量、焼土小塊少量含有。
  - 3層 黒色土 (GYR621)；黒白色粘土塊少量、黄褐色小塊少量含有。

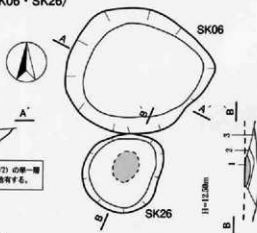
(SK25)



- SK25 土層図**
- 1層 黄褐色粘粘土 (GYR640)；焼く程度弱した少焼土。
  - 2層 黄褐色土 (GYR640)；黄褐色土 (GYR640) 多量含有。
  - 3層 黄褐色土 (GYR640) と黄褐色土 (GYR640) とが8:2で混在する土層。
  - 4層 黄褐色土 (GYR640)；黄褐色土小塊多量含有。
  - 5層 黄褐色土 (GYR640)；黄褐色土小塊多量含有。



(SK06・SK26)



SK06の土坑層土は黄褐色土 (GYR672) の第一層で、黄褐色土小塊多量、焼土小塊少量含有する。

- SK26 土層図**
- 1層 黄褐色粘粘土 (GYR640)；焼土小塊少量、焼く程度弱した少焼土。
  - 2層 黄褐色土 (GYR640) と黄褐色土 (GYR640) との混在土、焼土小塊多量含有。一部膠膜を受け、炭化灰も認められる。
  - 3層 黄褐色土 (GYR640) と近い黄褐色土 (GYR640) とが6:4程度で混在した土層。



(スケールは全てS=1/40)

第66図 A地区土坑遺構4 (SK06・SK17・SK21・SK25・SK26)

SK21は、規模270×210cmの隅丸長方形を呈す大型土坑であるが、深さ15cmと浅いものである。ただ、当土坑の掘られる箇所が黒色地山であるため、土器の出土が少なかつたために上層を削平してしまったものである。底面は平坦に掘られており、大型土坑のB類土坑に位置づけられる。出土遺物は、須恵器食膳具5点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具27点、須恵器貯蔵具5点がある。

両土坑とも、図示できる遺物は少なく、SK21のⅣ期に位置づけられる須恵器坏蓋があるのみである。

#### 12. SK25

A地区の南階付近、ち・つ20Grに位置する不整形円形を呈す土坑である。規模290×210cm、深さ15～30cmを測る土坑で、底面に凹凸があり、大型土坑B類とは様相が異なる。覆土に黄褐色土を多く混在させる土が複雑に入り込んでおり、調査所見では木痕状を呈すとされている。ただ、尾根付近の削平された区域にあるため、堅穴建物の掘り方の可能性もある。土器の出土はなく、土坑上面には被熱焼結した面があるが、土坑はその下部遺構という性格のものではなく、土坑類型としては掘り方土坑的なD類土坑としておく。

#### 13. SK26

A地区の中程、やや西寄り、せ21Grに位置する略円形呈す小型土坑である。規模90×80cm、深さ15cmを測り、土坑のほぼ中央付近、上面に径25cm程度の範囲で褐色土と黒褐色土とを混在させた炉床土が貼られている。炉床上面が焼結しており、周辺から図示したⅤ期に位置づけられる土師器長頸蓋が出土する。炉状遺構の掘り方のなものであり、E類土坑と類型付けられる。なお、当土坑からは須恵器食膳具1点、土師器煮炊具32点、須恵器貯蔵具2点が出土している。

#### 14. SK27

A地区の中央付近、け21Grに位置し、SI17と一部重複する土坑である。規模160×120cm、深さ25cmの楕円形土坑で、土坑のほぼ中央付近、最上面に径40～50cm程度の範囲で焼土塊と黒褐色土とを混在させた炉床土が貼られている。炉床上面が焼けており、炉の下部土坑という位置付けで、E類土坑と類型付けられる。出土遺物には、須恵器食膳具7点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具16点、須恵器貯蔵具1点があり、3個体ほど図示しているが、時期幅があり、Ⅱ期からⅣ期に位置づけられる。

#### 15. SK32

A地区の中程からやや北寄り、お23Grに位置する土坑である。規模120×70cm、深さ15cmの長楕円形呈す浅い土坑で、土坑のほぼ中央付近の底面から一部壁面にかけて薄く酸化被熱した痕跡を確認している。黄褐色土地山が被熱し、薄く焼土化しているもので、炭化材の小片がところどころ食い込んでいる。炭化材を食い込ませるが、木炭焼成の土坑のような吸炭の痕跡はなく、木材を燃料に何かを焼いた土坑であると理解する。覆土は炭化小塊を含む黒褐色土の1層で、土器の出土はなく、土師器を焼成した土坑という印象もない。焼成土坑という位置付けで、土坑類型はF類としておく。

#### 16. SK33

A地区の北側寄り、う26Grに位置する。規模140×115cm、深さ45cmの略円形呈す、土坑底面がやや凹凸持つ深い小型土坑である。出土遺物には、須恵器食膳具2点、土師器煮炊具11点、須恵器貯蔵具12点があり、A類土坑と類型付ける。

#### 17. SK35

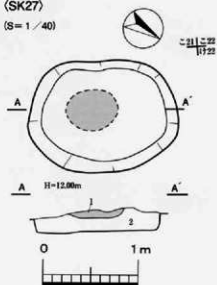
A地区のやや北東側寄り、え・お22Grに位置し、SI29と重複する。土層堆積の切りあい関係から、新旧を確認しており、SI29の堅穴建物が埋め戻された後に当土坑が掘り込まれていることが確認できている。規模は440×280cmの長楕円形で、深さ80cmを測り、底面にはやや凹凸が見られる。覆土は上半層が黒褐色土、下半層が黒色土で、遺物の包含量は上下とも大差ない。須恵器食膳具108点、土師器食膳具63点、土師器煮炊具752点、須恵器貯蔵具518点が出土しており、須恵器壺など貯蔵具の量が目に付く。他に鉄製品や造り付けカマドに使われる軽石状の大型凝灰岩切石が数点、土製支脚も数点出土している。典型的なB類土坑であり、時期は僅かにⅣ期頃のものやⅡ1期のものを含むが、概ねⅡ3期を中心に持つ。

#### 18. SK36

A地区の中程からやや北寄り、か・き23・24Grに位置し、SI22、SI24と重複する。土層堆積の切りあい関係から、新旧を確認しており、SI24の埋め戻し後、SK36が掘られ、その埋め戻し後にSI22が建てられている。

(SK27)

(S=1/40)

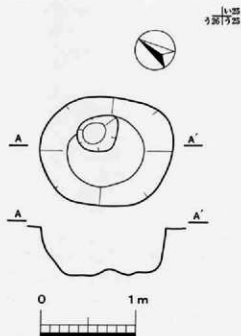


**SK27土層表**  
 1層 黒褐色土 (N7YR2.0)：焼土小塊多数、炭化小塊少量含有、炭質砂状土層。  
 2層 黒色土 (10YR2.0)：焼土小塊・炭褐色土小塊・炭化小塊少量含有。

(SK33)

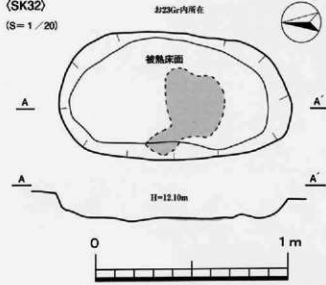
(S=1/40)

H=12.30m

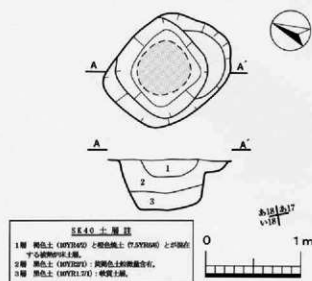


(SK32)

(S=1/20)



(SK40) (S=1/40) H=11.50m

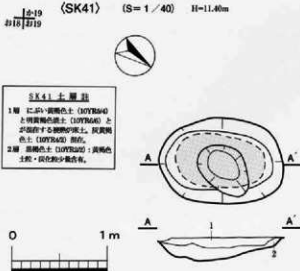


**SK40土層表**  
 1層 褐色土 (10YR2.0) と褐色焼土 (7.5YR6.0) とが中心部を中心とした層。  
 2層 黒色土 (10YR2.0)：炭褐色土と炭質土含有。  
 3層 黒色土 (10YR2.0)：硬質土層。

(SK41)

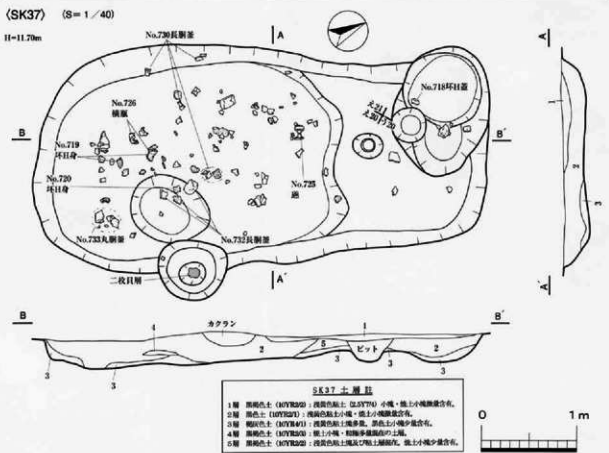
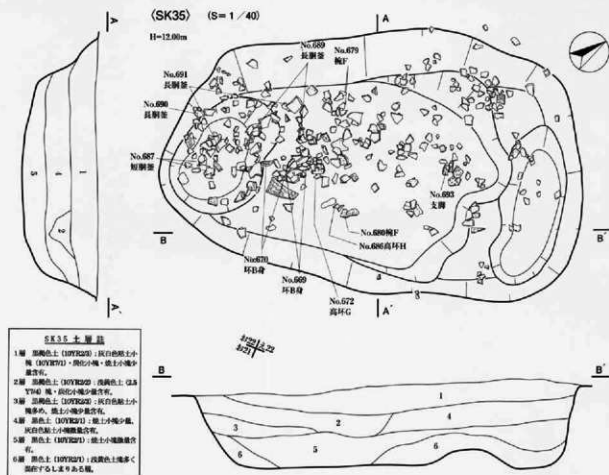
(S=1/40)

H=11.40m



**SK41土層表**  
 1層 土色・炭褐色土 (10YR2.0) 土質炭質土層土 (10YR6.0) と中心部を中心とした層。炭褐色土・炭褐色土 (10YR2.0) 混在。  
 2層 黒褐色土 (10YR2.0)：炭褐色土小塊・炭化小塊少量含有。

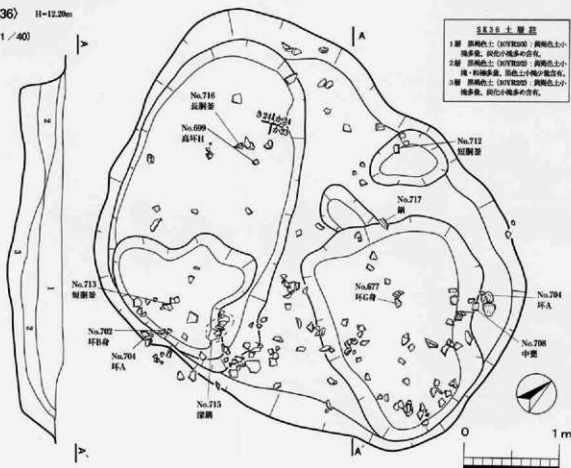
第67図 A地区土坑遺構図5 (SK27・SK32・SK33・SK40・SK41)



第 68 図 A地区土坑遺構図6 (SK35・SK37)

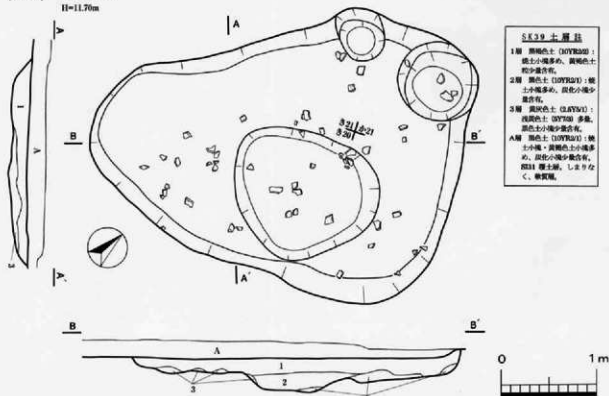
(SK36) H=12.20m

(S=1/40)



(SK39) (S=1/40)

H=11.70m



第69図 A地区土坑構図7 (SK36・SK39)

SI22の造り付けカマドはSK36埋土の上に構築されている。土坑規模は長軸450cm、短軸は西側で330cm、東側で280cmを測り、不整形な楕円形を呈す。深さは40~55cmで、底面には複数の掘り込みが重複したような凹凸が見られる。覆土には全体的に黄褐色土塊が多く混在し、遺物の包含は層の上下に関係ないが、南東側に偏って出土する。出土土器は、須恵器食膳具109点、土師器食膳具48点、土師器煮炊具627点、須恵器貯蔵具231点があり、ここでも須恵器類など貯蔵具の量が目に付く。典型的なB類土坑と言えるものであり、時期はI期のものを少量含むが、概ねⅡ2~Ⅱ3期に中心を持つ。土器の偏りや時期などから見て、南側に隣接するSI23との関連性が考えられる。

#### 19. SK37

A地区の北東側寄り、う・え20・21Grに位置する大型の長楕円形土坑である。SK35の東側8mの所にほぼ同様の主軸で存在しており、規模も470×240cmと近い数値を示す。深さは40cmとやや浅いが、掘削された場所が黒色地山であることと関連しよう。底面にはやや凹凸があり、これについても同様の特徴と言える。遺物は須恵器食膳具27点、土師器食膳具11点、土師器煮炊具239点、須恵器貯蔵具21点が出土しており、ここからも鉄製品やカマド石が少量確認される。遺物の時期はほぼI1期にまとまっており、当集落形成期の典型的なB類土坑と言える。なお、当土坑の南東側壁際に重複して、小ピットが確認されるが、当ピットからはSK12と同様の貝殻(ヤマトシジミ)層が柱状に検出されており、抜き取り後の廃棄と考えられる。

#### 20. SK38

A地区中程からやや北西寄り、き24・25Grに位置し、SI19、SI21と重複する。土層堆積の切りあい関係から、SI19の埋め戻し後に当土坑が掘削され、さらに当土坑が埋め戻された後にSI21が建てられていることを確認できている。規模は480×300cmの隅丸長方形で、深さ40~50cmを測り、底面は凹凸なく平坦に掘られている。覆土は全体的に焼土塊と炭化塊を多めに含む黒褐色土層で、特に南西側下層には焼土塊やカマド構築粘土塊、カマド軸石使用の凝灰岩切石など、堅穴建物の造り付けカマドを破壊した際の残滓が多量に廃棄されている。土器の包含は覆土のほぼ全般にわたって顕著にあり、総量としては須恵器食膳具176点、土師器食膳具65点、土師器煮炊具1,774点、須恵器貯蔵具144点とB類土坑の中で最多となる。特に土師器煮炊具の量が突出しており、上記のカマド破壊土砂廃棄とともに廃棄されたものと評価できる。典型的なB類土坑と言えるものであり、時期は概ねⅡ2期にまとまる。南東側に隣接するSI23の堅穴廃絶時期と同じであり、SK36同様、その関連性が注目される。

#### 21. SK39

A地区中程からやや東寄り、か・き20・21Grに位置し、SI31と重複する。土層堆積の切りあい関係から、SK39が埋め戻された後に、SI31の堅穴建物が建てられていることが確認できている。規模は長軸390cm、短軸210~300cmの無花果形で、深さは35~55cmを測り、底面中央に一段深くなった部分がある。覆土は一段下がった部分で焼土塊を多めに含むが、一般的な覆土と言えるもので、須恵器食膳具23点、土師器食膳具16点、土師器煮炊具282点、須恵器貯蔵具82点が出土している。時期の分かる遺物が少ないが、概ねⅡ期頃のものとして理解する。B類土坑に位置づけられる。

#### 22. SK40

A地区の北東際、あ18Grに位置する隅丸方形呈す小型土坑である。規模105×100cm、深さ55cmを測り、土坑のほぼ中央、上面に径60cm程の範囲で褐色土と橙褐色焼土とを混在させた炉床土が存在する。炉床上面が被熱しており、弁状遺構の地下遺構と推察し、E類土坑と位置づけておく。遺物の出土はなく、土坑下層は含有物のほとんどない黒色土が存在する。

#### 23. SK41

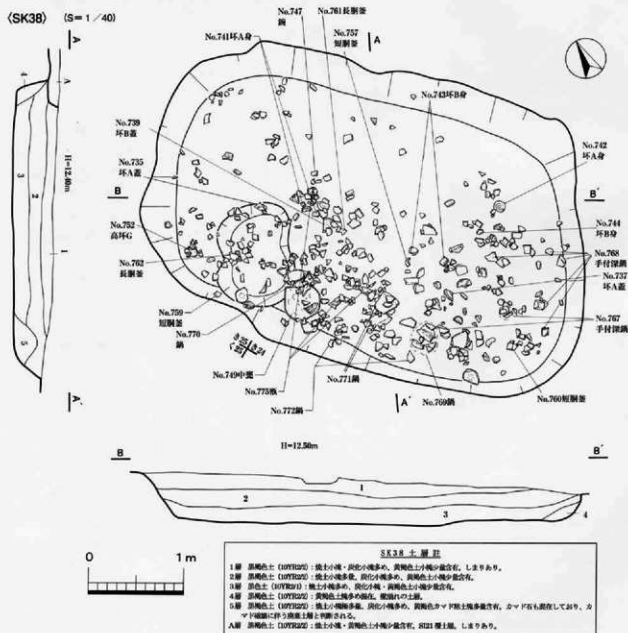
A地区の中程からやや東寄り、お19Grに位置する楕円形呈す小型土坑である。規模は130×90cm、深さは25cmを測る。土坑のほぼ全体にわたって、上面にぶい黄褐色土と明黄褐色焼土とを混在させた炉床土が貼られている。炉床上面が被熱焼結しており、弁状遺構の掘り方土坑的なもの、つまり、E類土坑と類型付けられものである。当土坑からの遺物出土は、土坑下層からもなく、時期不明である。

#### 〔土坑の類型整理と炉状遺構〕

以上述べた26基の土坑を整理すると、A類土坑5基、B類土坑9基、C類土坑1基、D類土坑4基、E類土坑

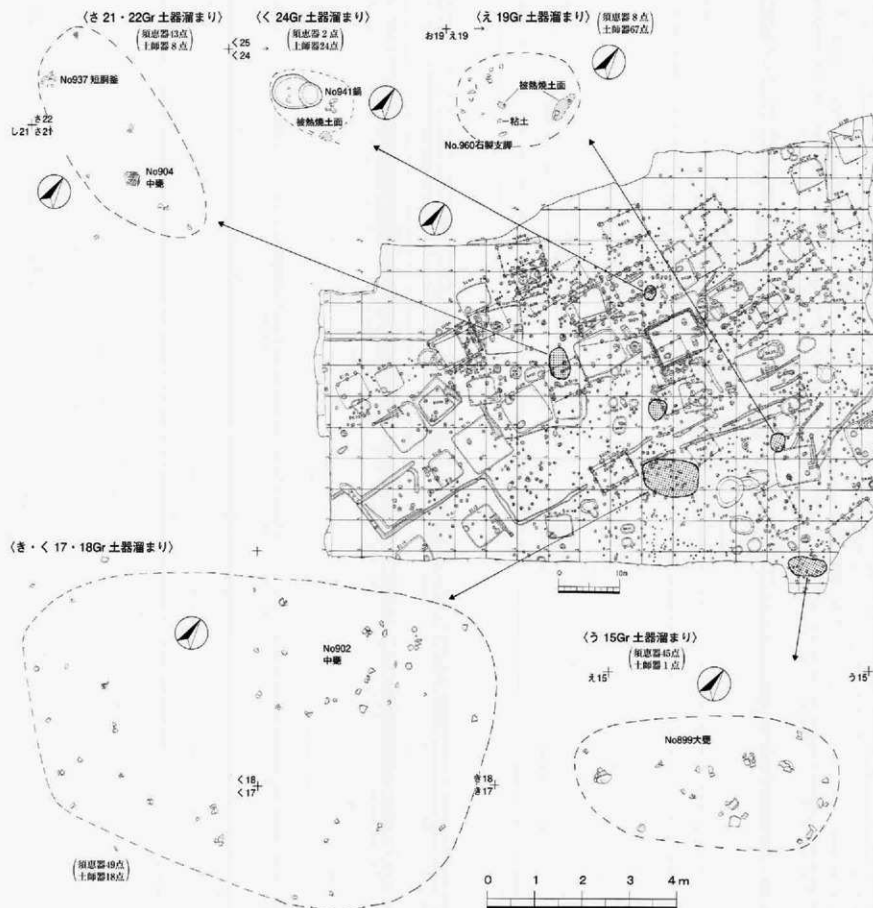
6基、F類土坑1基の構成となる。報告の中ではB類土坑が最も多いが、ただ、遺物出土が少ない等から報告から外した通常タイプのA類土坑や柱穴状のC類土坑を加えると、土坑やピットなどの構成としてはA類土坑とC類土坑が主体的な存在となる。次いで多い、B類土坑については、概ね形状や規模、遺物出土状況が類似しており、特徴的な土坑と位置づけられる。時期もI期からIV期まで、各時期に存在し、土坑掘削箇所が調査区の中程からやや北寄りの区域に比較的にまとまる傾向を持つ。土坑掘削の意図について、廃棄物処理がもともとのものとは考え難く、土の掘削、つまりはその場所の土砂採取（粘土採取）が目的ではなかったかと考える。建物の壁や屋根、土器製作など、粘土や黄土は様々な場面で使われているものであり、集落における土砂採取の意味を検討してゆくことが必要となる。また、炉状遺構の地下遺構的なE類土坑について、土坑として扱ったが、本来は炉状遺構であり、別の目的に掘られた場所、例えば堅穴建物の埋没箇所上や他目的掘削の土坑などに構築された炉床などを含めると、類似遺構は8基を加え、計14基となる。屋外炉（一部は掘立柱建物内になるかもしれない）として、煮炊き施設の炉床が遺存したものと予想しており、土製支脚や被熱した大型の石、土師器煮炊具が周辺から出土するものもある。ただ、通常はそのような痕跡が残らないものであり、今後、当遺構の使用状態を復元するために、新たな調査方法の開発が必要となる。

(SK38) (S=1/40)



第70図 A地区土坑遺構図8 (SK38)

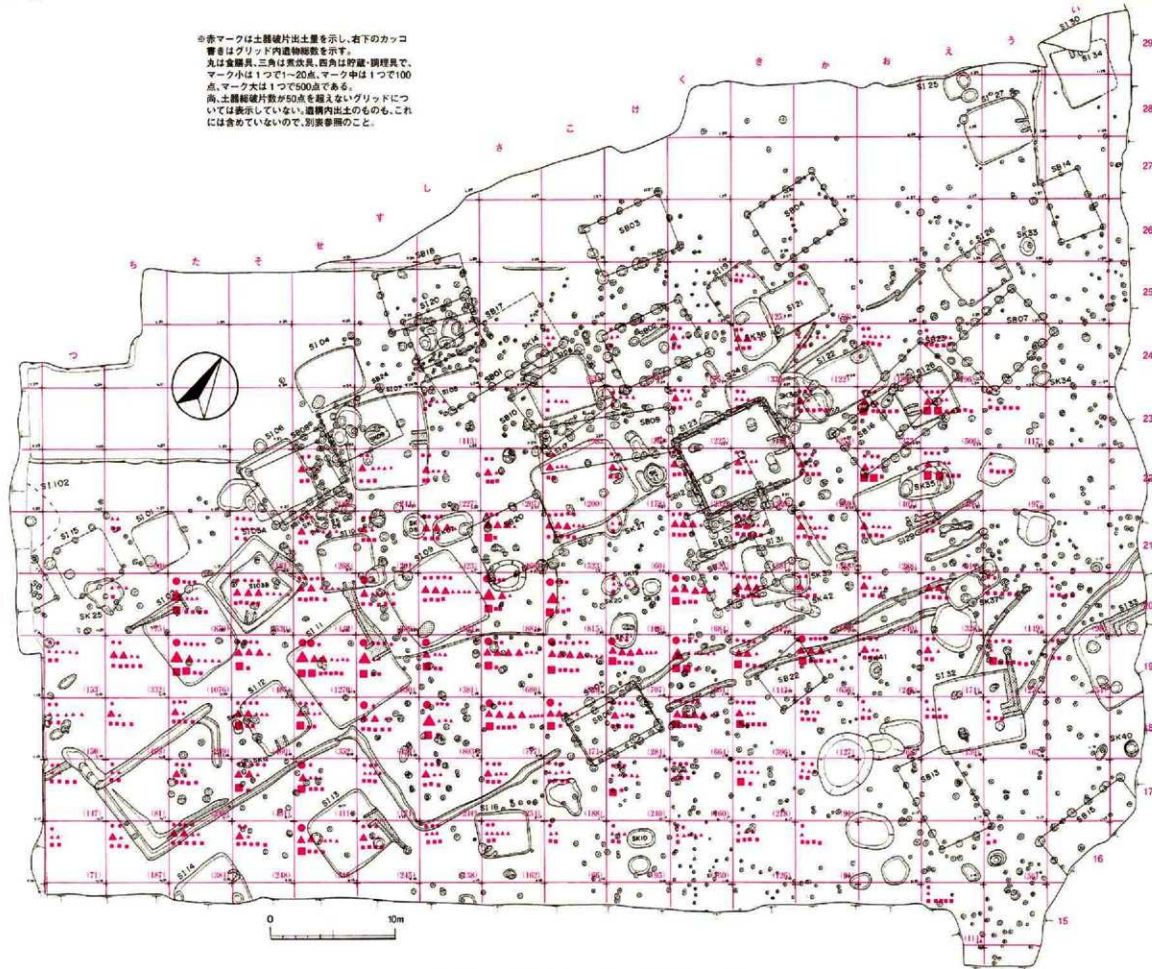




第71図 A地区土器溜まり遺構平面図 (S = 1/80) と分布図 (S = 1/600)



●赤マークは土器破片出土量を示し、右下のカッコ書きはグリッド内遺物総数を示す。  
丸は銅鏃、三角は瓦次瓦、四角は貯蔵・調理具で、マークは1つで1~20点、マーク中は1つで100点、マーク大は1つで500点である。  
尚、土器破片数が50点を超えないグリッドについては表示していない。遺構内出土のもの、これには含めていないので、別表参照のこと。



第72図 A地区7~10世紀土器出土量分布図(1/300)



#### 第4項 その他の遺構と包含層

A地区で確認される上記以外の遺構としては、溝状遺構とピット、土器溜まり遺構がある。

溝状遺構は20条確認されるが、全て浅く細い溝であり、畝状を呈す。遺物の出土が少なく、遺構覆土が古代建物遺構を切って存在しているところから見て、古代末期以降のものである可能性が高い。

ピットは土坑ほど規模の大きくない小穴であるが、柱状のしっかりとした掘り込みをもつものが一定量あり、建物跡としては確認できなかったが、本来は掘立柱建物跡の柱穴になる可能性のあるものがある。遺物の多量混在が確認されたピットはなく、いずれも少ない出土量だが、固化するものは遺物掲載されたP41・P87出土土器は半完形のものだが、意識的なピット埋納という印象ではない。ただ、古代末期のピットについては、土器器軸皿類の半完形品が出土しており、意識的なピット埋納の可能性が高い (P10・P92・P94・P115)。

土器溜まり遺構については、土器出土は多いものの、土坑状の掘り込みがないものと位置づけたが、土坑的な狭い範囲に分布するA類と広範囲に分布するB類とがある。A類(く24Gr土器溜まり・え19Gr土器溜まり)は、いずれも土器器を中心分布し、その一部に炭痕跡をもつのが特徴である。特に、え19Gr土器溜まりについては、カマド状の粘土分布も確認され、煮炊き機能を有した屋外炉的なものであった可能性を持つ。これに対し、B類(さ21・22Gr土器溜まり、き・く17・18Gr土器溜まり、う15Gr土器溜まり)は、須恵器中心に分布が確認され、特に壺や甕などの貯蔵具類が目立つ。分布は広範囲なためにやや散漫だが、接合するものが多く、特に、う15Gr土器溜まりについては、ほぼ1個体の大壺が廃棄されている。遺構分布が香薄な鞍部中央付近に存在しており、この範囲全体において、須恵器貯蔵具分布の多い傾向がある。須恵器貯蔵具は大壺をはじめとして、祭祀性の高い遺物であり、建物の存在しない空地が当集落単位共同の祭祀場的な位置付けがなされるものかもしれない。ただ、総体的に遺物出土量に突出した感はなく、土器廃棄場の位置づけができるものではない。

包含層として提示したものは、遺構として認定しえなかったもの全てを含んでおり、つまりは、遺構層属のできなかった遺物群ということとなる。堅穴建物や土坑等の遺構落ち込みに伴う階段土砂の流れ込み層は、基本的に遺構上層として上げているため、包含層は掘立柱建物跡の上層や各遺構間埋積のもの、そして、調査区南東側の鞍部へと堆積した土器溜まり層となる。当遺跡の場合、台地上にあるため、純粋な意味での包含層は、土器溜まり的な廃棄土層となるものであり、おーしー16-20Gr部分のみということとなる。遺物出土量分布図を見ると、やはりこの区域に遺物がまるとっており、意識的に鞍部へ土器廃棄が行われていたものと予想する。遺物種別構成では、堅穴建物や土坑などに比較すれば土器器煮炊具量が明らかに少ないが、それでも半数以上を占めている。ただ、それは土器器片の小ささに起因するものであり、重量的には須恵器が勝っている。須恵器貯蔵具の量がこの鞍部区域を中心とまると分布している。土器溜まりB類の位置とも関連するが、祭祀的な広場空間として位置づけられていた可能性を持つ。

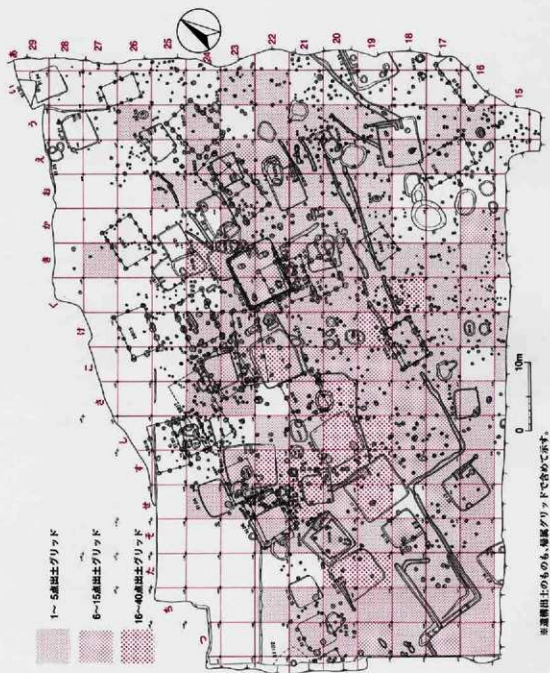
A地区出土地別須恵器・土器器比率対比表

種別	堅穴建物	土坑	包含層	種別計
須恵器破片	4,561	2,218	16,593	23,372
比率	19.2%	25.7%	42.9%	
土器器破片	19,161	6,422	22,054	47,637
比率	80.8%	74.3%	57.1%	
破片総量	23,722	8,640	38,647	

A地区出土遺構別器種破片数構成表

出土遺構名	食器類			貯蔵具	破片総量
	須恵器	土器器	土器器		
堅穴建物破片	1,924	1,094	18,066	2,635	23,719
構成比率	8.1%	4.6%	76.2%	11.1%	
土坑破片	819	301	6,121	1,399	8,640
構成比率	9.5%	3.5%	70.8%	16.2%	
包含層破片	5,986	817	21,237	10,607	38,647
構成比率	15.5%	2.1%	55.0%	27.4%	

なお、第73図には11世紀から12世紀の土器分布を示したが、特に密に分布する箇所はなく、意識的な廃棄箇所も確認されていない。額見町遺跡では、この時期の土器器食器類の完形品を意識的に埋納する土坑や土器溜まり層が複数箇所確認されるが、主に遺跡の西側で確認されており、A地区では掘立柱建物も含め、当時期の遺構と判断できるものは、僅かなピットのみである。遺物散布程度と理解している。



※遺構出土のものも、緯線グリッドで含めて示す。

第73図 A地区 11～12世紀土層出土遺構分布図

### 第3節 D地区で検出された遺構

#### 第1項 竪穴建物

D地区検出の竪穴建物は3軒のみで、A地区に比べて遺構密度は低く、いずれもほぼ同時期の竪穴建物と言える。遺構番号は調査年度順に通し番号としたため、C地区からの継続番号であり、SI102からSI104までとしている。以下に各竪穴建物について記述するが、竪穴建物の位置関係や規模の記載にあたっては、A地区に準じている。竪穴の時期は田嶋明人氏の北陸古代土器編年で表記する。

##### 1. SI102

(立地・規模・形態) D地区の南側に位置する大型の四本主柱竪穴建物である。竪穴規模は770×760cmの若干縦長の方形プランで、北西側の壁中央にL字型カマドが付設される。L字型カマドの煙道部は右に屈曲した後、竪穴壁際からさらに溝として150cm伸び、横軸は860cmとなる。主軸はN-56.5°-Wで、近隣の竪穴建物と主軸方位が異なる。

(柱穴) 四本主柱穴を竪穴内に均等配置するもので、柱間規模は440×400cmのやや縦長の正方形を呈する。各主柱穴とも上半は柱抜き取り時の掘り直し痕をもつが、下半部は径30cm程の柱痕状を呈し、深さ60～80cmを測る。掘り方は径65～80cm程の隅丸方形プランで、掘り方は土にぶい黄褐色土と黒褐色土を混在させたしまり強い土が使われ、上面は貼床される。P4の柱抜き取り穴へは当カマドで使用されたとと思われる石製支脚が廃棄されており、竪穴建物廃絶に伴うカマド破壊祭祀が行われた様子を伺うことができる。

(カマド) 北西側の奥壁中央に造り付けられるL字型カマドである。カマド本体部分のソデ粘土は右側で欠損するものの、煙道部の残りはよく、煙道末端に位置するビットも確認されている。カマド形態は、奥壁から重厚なカマドソデがまっすぐと伸び、煙道部が右にL字に曲がるタイプで、L字に曲がる煙道部境が障壁状に挟まるタイプである。カマド全体は粘土造りだが、焚口の左ソデ末端には凝灰岩質の切石が埋設されている。右側のソデは欠損するため不明だが、同様の構造であった可能性を持つ。天井石と思われる切石の出土は確認できず、天井構造は不明。カマドソデから煙道部まで、厚く作られており、特に煙道部では構築粘土に、ぶい黄褐色砂質硬化粘土と褐色粘土、黒褐色土を互層に叩き締めたものを使っている。規模は奥壁からカマドソデ端まで170cm、焚口被熱面までは190cm、焚口末端の内寸幅は60cm、外寸幅は95cmを測る。煙道はL字屈曲の障壁部分から末端まで480cmを測り、煙道幅は屈曲部付近で内寸67cm、外寸84cm。先端部へむけて徐々に幅を減じ、竪穴外へ出た後は内寸溝幅40cmと細くなる。先端部には径40～50cm、深さ50cmの楕円形ビットが掘られており、煙突設置に関連する掘り込みの可能性がある。カマド内床面は奥へほど傾斜しないが、煙道部床面では中程から煙道先端へ向けて急に傾斜を増して、竪穴外へ出てゆく。カマドの被熱状態は、焚口床面で強く焼結する以外、全体的に弱く、焚口付近の壁で酸化被熱する以外は、床や壁の焼土化は認められない。カマド支脚は抜き取られた跡のみで、焚口被熱面の奥寄り中央に確認される。径25cmの円形ビットで、深さは20cmを測る。カマドからの遺物は少なく、焚口床付近に土師器煮炊具数点が出土するのみである。さて、当カマドにおいては、焚口手前付近の中層(床土10cmの層)で、カマド天井を破壊して廃棄したと見られるカマド構築粘土塊の集積が確認される。粘土塊の量はカマドソデが欠損した箇所を越えるかに超えたもので、意識的にまとめて廃棄している所を見ると、建物廃絶に伴うカマド破壊行為に伴うものと予想する。この粘土塊が当竪穴のカマドに伴うものと断定できるものではないが、隣接する竪穴のカマドを完全に破壊した事例もなく、当竪穴のカマド、それもカマド天井部の破壊に伴う粘土塊である可能性は高い。これは焚口以外のカマド天井はやはり粘土作りであった可能性を示唆する傍証資料となろう。

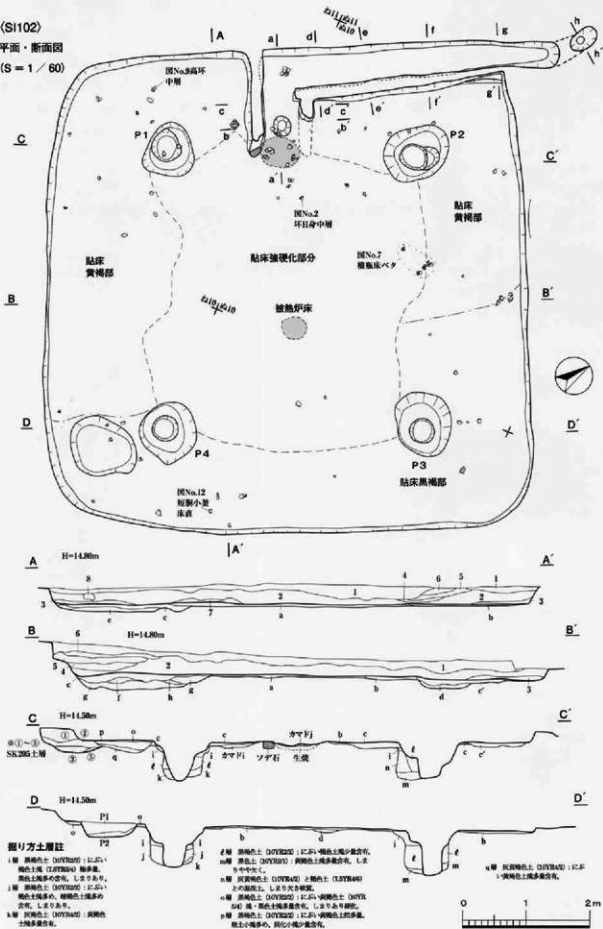
(覆土堆積と遺物出土) 竪穴覆土には後世の流れ込みと思われる褐色砂質土を多く含む黒褐色土(1層)が上層に堆積しており、竪穴陥没の窪みが当地区では残っていた可能性がある。中層以下では黄褐色土塊を多く含む黒褐色土が堆積し、この層に関しては単一層と言えるような理め戻しの土層堆積と言える。遺物はカマド周辺を含め、床面から下層出土のものが乏しく、主に上層の流れ込み土から出土している。このため、遺物出土図で示した遺物量の割に、全体出土量は、須臾器食膳具25点、土師器食膳具85点、土師器煮炊具530点、須臾器貯蔵具95点と多い。ただ、上層出土も下層の土器と近いものが多く、概ねI1期の範囲に収まる竪穴建物と見る。

(床面と掘り方) 床面は全体がフラットで、床のほぼ全面に貼床される。掘り方土坑は主柱穴間にはなく、その周縁、左側壁際部分に長方形の大型土坑、右側壁際にも長楕円形土坑が掘られる。深さ20cm程度の底面平坦な土

(SI102)

平面・断面図

(S = 1 / 60)



第74図 D地区竪穴建物遺構図1 (SI102-1)





坑で、黒褐色土と黄褐色土を混在させる土を埋め、上面に貼床する。床の硬化面は、焚口前から四本主柱間にあり、主柱穴間のほぼ中央に、径40cm程度の被熱焼結面が確認される。カマドに併設して、炉が設けられたものだろう。

## 2. SI103

**(立地・規模・形態)** D地区の北西に伸びたC地区側の区域、A地区にも一部調査区がかかるようにして存在する中型の堅穴建物である。床面近くまで削平を受けた堅穴建物であり、かつ東側の1/4程度が削平されている。深くしっかりと掘り込みを持つ四本主柱穴が確認できたため、堅穴建物と理解したが、カマドは確認できておらず、主軸方位は判断しにくい。堅穴西側のP1・P2間に焼土分布があり、カマド破壊に伴うものと判断されるが、焚口焼結面の確認はなく、削平を受けた箇所にかマドが存在した可能性が高いと見る。主柱穴は建替え重複により、計8本存在しており、柱穴の切りあい関係から、P5→P8→P1→P4へと建替えられたものと予想できる。それに基づいた主軸方位はN-20.5°-EからN-6.5°-Eへと、北へ主軸を振ったこととなる。堅穴規模は凡そ600×520cmで、隅丸方形を呈する。

**(柱穴)** 柱穴は堅穴内に均等配置されるもので、いずれも大きめの掘り方をもつ。建替え前の柱群(P5~8)は、径60cm程度、深さ60~70cmで、柱痕を残すものも一部見られる。建替え後の柱群は(P1~4)、ほぼ同規模ながらもやや深く掘り込まれる傾向がある。

**(覆土堆積と遺物出土)** 覆土堆積は極めて浅く、ほぼ通有の特徴。出土遺物は須恵器食器具2点、土師器食器具2点、土師器煮炊具99点、須恵器貯蔵具3点と少ない。時期判断できるような資料に乏しいが、図示した土師器煮炊具は7世紀前半から中頃にかけてのものであり、他の堅穴建物とほぼ同時期のものと理解する。

**(床面と掘り方)** 明確に床の硬化は認められないが、堅穴のほぼ全面において貼床が確認される。堅穴の主柱間外の床下には楕円形呈す浅い土坑が3箇所、堅穴コーナー付近に掘られ、主柱間には小型の窪みが連続して掘られる。南東隅に掘られる床下土坑はSK200としたが、これについても掘り方土坑の可能性は高い。

## 3. SI104

**(立地・規模・形態)** D地区の中心、北東側に位置し、SI102の北東側に隣接する。大型の四本主柱堅穴建物で、北面壁中央に大型のL字型カマドを付設する。堅穴の中央付近とカマド付近、東側壁付近に、田地造成のときの開墾による掘乱坑が大きく入り込んでおり、床下まで削平を受けた箇所もある。ただ、構造や規模などを想定するにおいて、大きな支障はなく、堅穴規模は凡そ760×720cmの若干縦長の方形プラン。L字型カマドの煙道部は左に屈曲した後、堅穴壁際からさらに溝として110cm伸び、そのまま立ち上がる。この区域は地山削平されており、煙道端まで遺存していなかったもので、その先端部には浅い煙突立ちのピットが存在していた可能性は高いと見る。主軸はN-1.5°-Wで、ほぼ北に主軸を持つ。

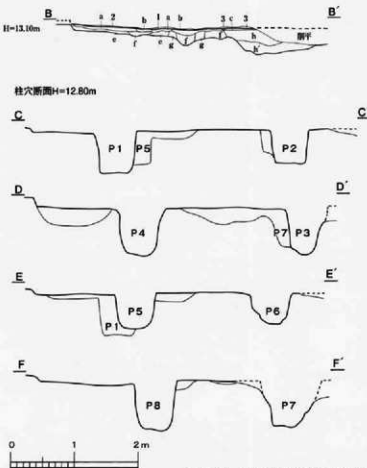
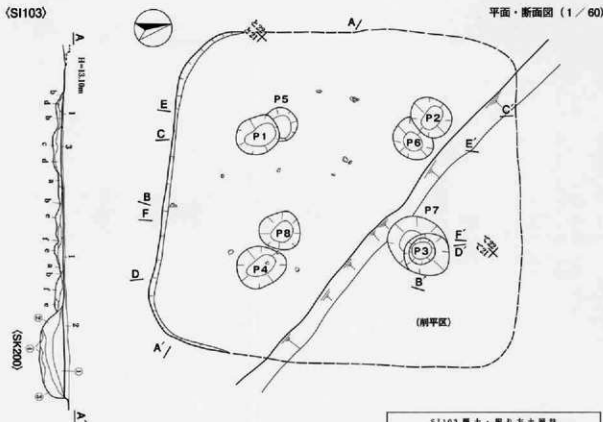
**(柱穴)** 四本主柱穴を堅穴内に均等配置するもので、柱間規模は430×350cmの縦長方形を呈する。各主柱穴とも柱抜き取り時の掘り直し痕をもつため、明瞭な柱痕をもつものではないが、柱に裏込めした掘り方土の遺存が確認され、柱穴掘り方は径40~60cmの略円形プランとなる。なお、2号掘り方土坑と図示したが、堅穴施設に伴う可能性のある1m弱の浅い土坑がある。主柱間の中央、南壁際に位置し、石製支脚が出土しているところから、掘り方でなく、入り口施設の可能性もある。

**(カマド)** 北壁中央に造り付けられるL字型カマドで、焚口付近のソデは残るが、煙道部の大半を欠損するなど遺存状態は悪い。カマド形態は、奥壁からカマドソデがやや開いて伸び、煙道部が左にL字形に曲がるタイプで、比較的ソデの粘土は薄く作られている。カマド全体は粘土造りで、焚口石組痕跡はない。カマドソデ構築土は通常の硬質に突き固められたもので、規模は推定で奥壁からカマドソデ端まで145cm、焚口被熱面まで170cm、焚口末端の内寸幅は90cm、外寸幅は120cmを測る。煙道はL字屈曲部分から堅穴境まで290cm、堅穴外に出てからは削平されているため、本来どこまで伸びていたかは不明である。煙道幅は遺存する部分で内寸80cm、外寸1m。カマド内床面は奥へ比較的傾斜してゆくタイプで、煙道部床も先端へ向けて明瞭に傾斜してゆく。カマドの被熱状態は、焚口床面で強く焼結する以外、全体的に弱く、床や壁の焼土化は認められない。カマド支脚は、抜き取り後の小穴が焚口被熱面の奥寄り中央に開く。カマド焚口床面には土師器煮炊具がまともな状態で廃棄されている。

**(覆土堆積と遺物出土)** 堅穴覆土は掘乱土砂がある以外は、黒褐色系のほぼ単層で、埋め戻しの土層堆積と言える。遺物はカマド周辺を含め、床面から下層に広く廃棄されており、堅穴左側の部分で特に顕著である。床面か

(SI103)

平面・断面図 (1/60)



SI103 層土・掘り方土層柱

- 1層 黄褐色土 (SIY2340) 黄褐色土塊多量含有。
- 2層 黄褐色土 (SIY2340) 黄褐色土塊・褐色土塊多量含有。
- 3層 黄褐色土 (SIY2340) 黄褐色土塊多量含有。

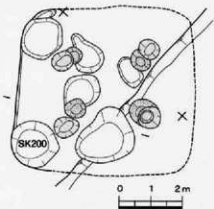
(掘り方)

- a層 褐色土 (SIY2340) と少量黄褐色土 (SIY2340) が6:2で混在する土層。しまりあり。
- b層 黄褐色土 (SIY2340) 褐色土塊多量。褐色土塊・褐色土塊少量含有。
- c層 黄褐色土 (SIY2340) と褐色土 (SIY2340) が8:2で混在する土層。褐色土塊・褐色土塊少量含有。
- d層 黄褐色土 (SIY2340) 褐色土塊少量含有。
- e層 褐色土 (SIY2340) と少量黄褐色土 (SIY2340) が9:1で混在。しまりあり(掘り方層)の土層。
- f層 黄褐色土 (SIY2340) と褐色土 (SIY2340) が6:4で混在する土層。褐色土塊多量含有。しまりあり。
- g層 褐色土大塊 (SIY2340) と黄褐色土 (SIY2340) が8:2で混在する土層。褐色土塊・褐色土塊少量含有。
- h層 褐色土大塊・褐色土塊少量。褐色土が5:4:1で混在する土層。褐色土塊・褐色土塊少量含有。
- i層 h層に比較して褐色土塊の混在が多い。

(SK200) 層土

- ①層 黄褐色土 (SIY2340) 黄褐色土塊多量。褐色土塊少量含有。
- ②層 黄褐色土 (SIY2340) 黄褐色土塊多量。褐色土少量含有。
- ③層 黄褐色土 (SIY2340) と褐色土 (SIY2340) が5:4で混在。黄褐色土塊少量含有。
- ④層 黄褐色土 (SIY2340) 黄褐色土少量含有。

掘り方平面図 (1/120)



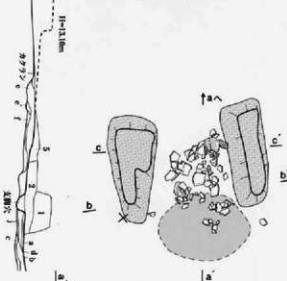
第76図 D地区竪穴建物遺構図3 (SI103)



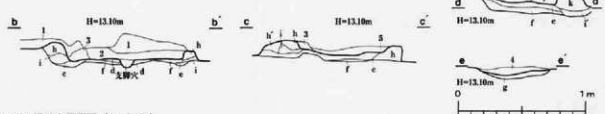
ら下層にかけて、古代Ⅰ1期の古段階と位置付け可能な土器群が出土しており、当期の良好な一括資料と言える。全体出土量は、須恵器食膳具41点、土師器食膳具40点、土師器煮炊具483点、須恵器貯蔵具94点と多い。

(床面と掘り方) 床面は全体がフラットで、床のほぼ全面に貼られる。掘り方土坑は主柱穴間にはなく、その周縁、特に左側壁部分に複数の不整形土坑が掘られる。深さ20cm程度の底面平坦な土坑で、土器の混在が目立つ。床の硬化面は、焚口前面から四本主柱間、そしてそこから手前壁際と左壁際へと延びており、入口の位置を示す可能性を持つ。手前壁中央に掘られた浅い小土坑の存在も含め、検討が必要である。なお、SI102同様、当竈穴でも、主柱穴間の中央から手前側に、被熱焼結面が確認される。炉の可能性を持つ。

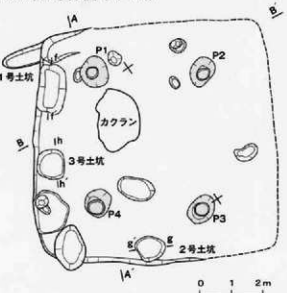
SI104 カマド平面・断面図 (1/30)



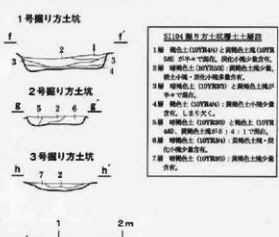
- SI104カマド層土・掘り方土層註
- 1層 暗褐色土 (OY7830) : 黄褐色土塊多量混在。炭化土塊少量混在。
  - 2層 暗褐色土 (OY7830) と暗褐色土塊 (OY7840) が6 : 4で混在。炭化土塊少量混在。
  - 3層 暗褐色土 (OY7830) : 黄褐色土塊少量混在。
  - 4層 暗褐色土 (OY7830) : 黄褐色土塊少量混在。
  - 5層 暗褐色土 (OY7830) と黄褐色土塊 (OY7840) が6 : 4で混在。炭化土塊少量混在。ヒトキヤク。
  - 7層 暗褐色土 (OY7830) と黄褐色土塊 (OY7840) が6 : 4で混在するマッドゾンプラット。
- 4層 赤褐色焼結土 (OY7840) : 暗褐色土塊中に混在。しまり強く、硬化した炭化土塊。
  - 5層 黄褐色土 (OY7830) と暗褐色土塊 (OY7840) が6 : 4で混在。
  - 6層 明黄褐色土 (OY7840) と暗褐色土塊 (OY7840) が6 : 4で混在。
  - 4層 少量赤褐色土 (OY7840) と暗褐色土塊 (OY7840) の混在。
  - 4層 暗褐色土 (OY7830) と暗褐色土塊 (OY7840) が6 : 4で混在。黄褐色土塊・炭化土塊少量混在。しまりあり。マッドゾンプラットの観察していない層。
  - 6層 \*層不明。焼結土塊にみられる。
  - 1層 暗褐色土 (OY7830) と黄褐色土塊 (OY7840) 多量混在。しまりあり。
  - 2層 暗褐色土 (OY7830) : 暗褐色土塊少量混在。炭化土塊少量混在。しまりあり。
  - 3層 黄褐色土 (OY7840) 及び暗褐色土塊 (OY7840) 混在。しまり強く、硬化したマッドゾンプラット。
  - 4層 \*層不明。同層土塊にみられる。
  - 1層 暗褐色土 (OY7830) : 暗褐色土塊と黄褐色土塊少量混在。しまりあり。ソグザン層。
  - 1層 \*層と同層土塊。暗褐色土塊の混在。
  - 2層 暗褐色土 (OY7830) : 黄褐色土塊少量混在。
  - 3層 暗褐色土 (OY7830) と黄褐色土塊 (OY7840) が6 : 4で混在するマッドゾンプラット。しまり強く、硬化。



SI104 掘り方断面図 (1/120)



SI104掘り方土坑断面図 (1/60) 全てH=13.10m



第78図 D地区竈穴建物遺構図5 (SI104-2)

## 第2項 掘立柱建物

当地区で検出される掘立柱建物は、総柱建物や庇付の建物ではなく、全て通常規模をもつ掘立柱建物である。8棟確認されており、しっかりとした柱列は掘立柱建物とは認定済みである。掘立柱建物は梁間3間の建物が主体で、規模もほぼ中規模クラスのものである。掘立柱建物の表記については、A地区の記述に準じて行うこととし、時期についても、壱穴建物同様、田嶋明人氏の北陸古代土器編年で表記する。なお、当地区については、本来南東側から北西側へ長い長方形の区域であるが、西側区域と南側区域を昭和初期の開墾により、大きく削平されているため、北西側の区域は農道があった5～10mの幅のみ残るだけである。北西側はC地区へと繋がる区域であり、また、北東側はA地区に隣接する。北西端に遺構分布がある以外は、南東側の遺構分布区域との間に空白地帯があり、遺構分布としては空白地帯を挟んで明瞭に分かれる傾向がある。

### 1. SB182

D地区南東地区の中で西南側に位置する4間×3間の建物である。N-52°-Wに主軸（山側柱列）を持つ東西に長い建物で、長軸を等高線に沿って建てられる。柱穴同士の重複はないが、SB183と建物範囲が重複している。規模は長軸6.4m×短軸5.0mで、平面積は32㎡を測る。桁間寸法は平均で1.6mだが、均等な柱配置をせず、中の柱間が1.5mと狭いのに対し、両端の柱間は1.7mと広くとられている。これに対し梁間寸法は平均で1.67m、ここでも中の柱間が1.7mに対し、両端の柱間は1.5mと逆に狭くなっている。柱穴は方形基調が主体で、径50cm前後、深さ40cm前後としっかりと掘られている。柱穴覆土に柱痕状堆積は認め難く、いずれも柱抜き取りの際の掘り直しが行われた堆積状態を示す。出土遺物は柱穴から須恵器が16点、土師器が48点と多く、図示した須恵器鉢b蓋からI1期新段階に位置づけられる。

### 2. SB183

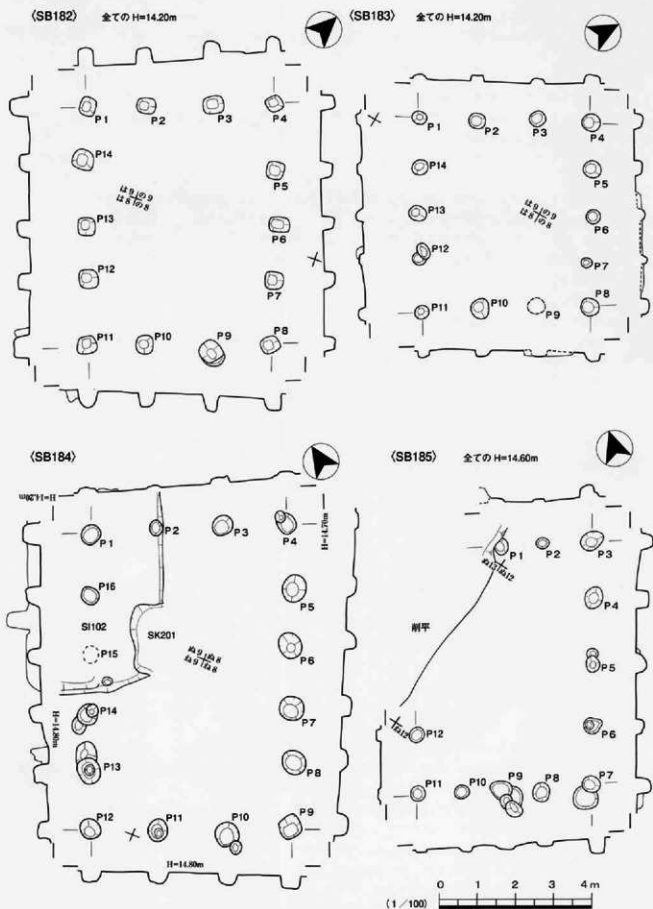
D地区南東地区の最も西南側に位置する建物である。SB182同様、東西に長い建物配置をしており、重複しながら、N-64°-Wの主軸（山側柱列）を持つ。建物の柱配置は4間×3間（一部複乱があり、P9は欠損）、規模は5.1×4.5mで、平面積22.95㎡を測る。柱間寸法は、概ね均等に配置されており、桁間寸法で平均1.27m、梁間寸法で平均1.5mと、他の掘立柱建物に比べて柱間間隔が狭い傾向を持つ。柱穴は円形基調で、径は40～50cm、深さは20～30cmを測る。柱穴覆土に柱痕状堆積は認め難く、いずれも柱抜き取りの際の掘り直しが行われた堆積状態を示す。出土遺物は柱穴から土師器3点が出土しており、図示した土師器短胴小釜の器形からI1期のもつと判断される。

### 3. SB184

D地区南東地区の中心からやや西南寄り、SB182の北東側に隣接する4間×3間の建物で、北西側をSI102と重複する。N-33°-Eの主軸を持つ南北に長い建物で、斜面等高線に桁柱列が沿う他の建物と違い、直交する形で建物が建つ。規模は8.0×5.3mで、平面積は42.4㎡を測る。柱間の寸法は桁間の平均で1.6mだが、均等な柱配置をせず、中の柱間が1.5～1.6mと狭いのに対し、両端の柱間は1.7～1.8mと若干広くとられている。これに対し梁間寸法は平均1.77m間隔で、概ね均等に柱配置される。柱穴は円形プランで、径50～70cm、深さ25～30cmと大きくしっかりと掘られているが、やや谷間に位置する柱穴は若干浅めとなる。出土遺物は柱穴から須恵器が5点、土師器が26点と、比較的多く出土しており、図示した須恵器環H身器形からI1期、その中でも比較的古手に位置づけられる。柱穴の重複関係では、SI102との前後関係を捉えきれないが、須恵器の年代観から見ても、当掘立柱建物が先行する可能性もある。

### 4. SB185

D地区南東地区、その北西側に位置する建物で、北側の柱穴が削平により消失している。4間×4間の柱配置を持つ建物であるが、梁間間隔は狭く、規模は6.5×4.6mの長方形を呈す。平面積は29.9㎡を測る。隣接する建物と同様、N-23°-Eの主軸（山側柱列）を持つ。柱間寸法は、桁間、梁間とも概ね均等に配置されており、桁間寸法で平均1.15m、梁間寸法で平均1.62mと、他の掘立柱建物に比べて梁間の柱間間隔がかなり狭い。柱穴は概ね円形基調を呈しており、柱列のしっかりと残る谷側柱列で、径40cm前後、深さ25～35cmとしっかりとしているが、削平の著しい山側柱列では柱穴の基底部のみを残す。柱穴覆土に明瞭な柱痕状堆積は認め難いが、柱穴底面には柱部分のみ下がった段掘り状を呈するものがあり、そこから推察するに柱径は25cm程度であったことが推察される。出土遺物は柱穴から須恵器1点、土師器5点が出土している。図示した須恵器環H身はその



第79図 D地区掘立柱建物遺構図1 (SB182・SB183・SB184・SB185)

器形からⅡ3期を前後する時期と判断されるが、他のピットから出土する土師器片はⅠ期からⅡ期のものであり、梁間に見られる狭い柱間隔などを考慮しても、8世紀代には下らず、概ね7世紀代に取まるものと予測する。

#### 5. SB186

D地区南東地区のほぼ中程、SB185の南東側に並ぶようにして建てられるN-21'-Eの主軸を持つ南北に長い建物である。斜面等高線に斜めに建物が配置されるもので、地形の起伏よりも方位が重視されて建てられていたことが理解される。建物建築の際には床を平坦とするため、盛り土造成が行われたものと予想する。柱間配置は桁間が4間、梁間は北東側が2間だが、南西側は中央の柱の両側にも配置されており、4間状となる。規模は7.2×3.7mと、梁間の狭い細長い建物で、平面積は26.6㎡を測る。柱間の寸法は、桁間の平均で1.8m、均等な柱配置をせず、1.7~1.9m程度でややばらつく。梁間は2間計算で、1.85m。柱穴は桁間の柱が大きくいずれも方形基調で、径50~60cm、深さ20~50cmとしっかり掘られている。梁間の柱穴は中央のものが径30~40cm、深さ20cmとひとまわり小型であるが、南西側の両側の柱は桁間の柱穴とほぼ同じ規模を持つ。柱穴覆土は概ね柱抜き取りに伴う掘削埋め戻し状の堆積を示すが、一部柱痕状堆積をもつものもあり、柱穴底面に残る柱痕部の窪みなどから、柱径は20cm程度と推察される。出土遺物は柱穴から土師器が4点出土しており、図示した土師器碗HからⅠ期頃のものとして位置づけられる。

#### 6. SB187

D地区南東地区の東側に位置する建物で、北東側の柱穴が削平により消失している。梁間3間、桁間は4間残るが、さらに伸びる可能性がある。N-13'-Eの主軸を持つ建物で、SB185、SB186の主軸に似る。規模は梁行寸法4.8m、桁行寸法残存長6.3m。平面積は残存で30.2㎡を測る。柱間寸法は、桁間の平均で1.57m、均等な柱配置をせず、1.4~1.65m程度でややばらつく。梁間寸法は平均1.6mで、概ね均等に柱配置されている。柱穴は円形基調をしており、径50~60cm、深さ30cm前後と比較的しっかりしている。柱穴覆土は明瞭な柱痕状堆積は認め難く、柱穴底面にも柱痕状痕跡はない。いずれも、柱抜き取りの際の掘り直し状土層堆積を示し、黄褐色土塊を含む黒褐色土で埋められている。出土遺物は土師器のハケ目調整釜の小片が2点のみで、概ねⅠ期からⅡ2期の幅の中のものとして推察される。SB185・186と類似した建物の主軸などからみても、この時期に考えて妥当と判断される。

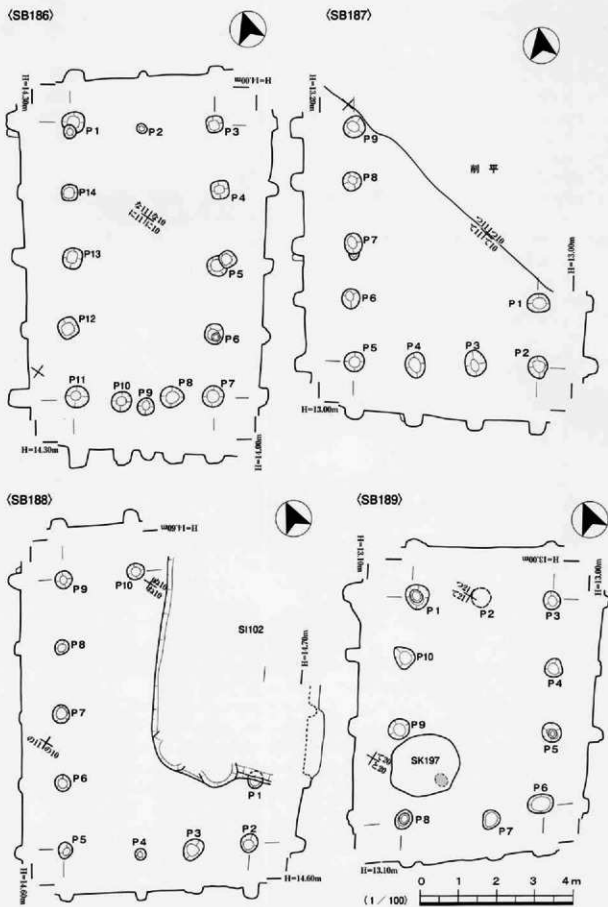
#### 7. SB188

D地区南東地区の中程からやや北西寄り、SB184の北西側に隣接して存在する4間×3間の建物である。南東側をS1102と重複しており、その部分の柱穴は未確認である。N-23'-Eの主軸を持つ南北に長い建物で、主軸方位はSB185・186と近似する。位置的にも両掘立柱建物の間の南西側に位置しており、コの字状配置の位置にあることから同時併存した建物である可能性を持つ。規模は7.2×4.8mで、平面積は34.6㎡を測る。柱間の寸法は梁間の平均で1.6mだが、均等な柱配置をせず、1.5~1.9mとばらつきが大きい。桁間寸法は平均1.8mで、概ね均等に柱配置されている。柱穴は円形プランで、四隅の柱穴は径40~50cm、深さ20~35cmと大きくしっかりと掘られているが、他の柱穴は径30cm台と小型で10~20cmと浅い。出土遺物は確認されておらず、時期判断材料に欠くが、主軸方位や建物の柱間規模などから、SB185・186と同時期のⅠ期からⅡ2期の中で考えたい。SB184よりも後出の位置づけが可能であり、堅穴建物の廃絶後に建てられた建物と理解する。

#### 8. SB189

D地区北側地区に位置する建物で、S1103の南東側に接する3間×2間の建物である。桁行の柱列は比較的並び方がよいが、梁行柱穴は北東側が削平区に入ることあつて柱間数に不明な部分がある。N-27'-Eの主軸を持つ南北に長い建物で、西隣のP8がずれているため、建物が全体的に歪んでおり、梁行寸法は3.6mだが、桁行寸法は北西側で5.9m、南東側で5.4mとなる。平面積は20.34㎡で、南東区に存在する掘立柱建物群よりも明らかに小型の規模をもち、柱間配置などから見ても、後出の様相をもつ。柱間寸法は、桁間で1.7~2.1mで、平均は1.8~1.95m。柱穴は円形プランで径40~70cm、深さ20~50cm。柱穴覆土に明瞭な柱痕状堆積は認め難いが、柱穴底面には柱部分のみ下がった段掘り状を呈するものが多く、そこから推察するに柱径は20~30cmと思われる。出土遺物は土師器片が1点のみで、時期判断材料に欠く。なお、当建物内には、上面に炉状の被熱遺構を伴う不整形円形小穴遺構、SK197が存在しており、掘立柱建物に伴う遺構である可能性がある。





第80図 D地区掘立柱建物遺構図2 (SB186・SB187・SB188・SB189)

### 第3項 土坑

D地区で確認される土坑状の穴は20基以上あるが、この中で風倒木痕状の堆積をもつものや遺物出土のない小規模なものは除外し、SK197からSK205の8基に土坑として遺構番号を付してある。なお、SK200については、SI103で述べたように、SI103の掘り方土坑の可能性が高く、遺構図や記述は提示済みであるので、ここでは割愛する。当地区の土坑の中で特殊な意図で掘られた土坑、例えば、土師器焼成土坑（土師器焼成坑）や木炭焼成土坑（製炭土坑）、墓塚、井戸などは確認できず、概ね通常の土坑と位置づけられるもので、A地区で提示した土坑類型に当てはめれば、通常土坑のA類土坑、大型土坑のB類土坑、被熱炉床遺構を上面に持ち、その下部遺構として存在するE類土坑の3種が確認される。土坑記述に際しては、A地区の分類及び提示方法に準ずるものとし、遺構層属時期についても、田嶋明人氏の北陸古代土器編年で表記する。

#### 1. SK197

D地区の北側区、で20Gr内、SB189の建物内に位置する。被熱炉床遺構を上層に形成するE類土坑に分類されるもので、規模は185×170cm、深さは20～25cmの略円形を呈す。土坑底面の平坦な形態で、炉の下部遺構的性格を持つ。出土遺物は土師器煮炊具15点、須恵器貯蔵具3点を数える。

#### 2. SK198

D地区の南東区西側、の・ね11Grに位置する不整隅丸方形呈す土坑である。上部が削平されており、本来は深い大型土坑B類であったと予想される。規模は265×260cm、深さは25cmを測るもので、出土遺物は須恵器食膳具14点、土師器食膳具8点、土師器煮炊具41点、須恵器貯蔵具3点と、削平された割に出土量は多いと言える。図示した土器からI1期新段階に位置づけられるものと判断する。

#### 3. SK199

D地区の南東区北東側、と12Grに位置する楕円形土坑である。SI104に重複する通常土坑のA類で、規模は150×100cm、深さ45cmを測る。出土遺物は土師器食膳具12点、土師器煮炊具49点、須恵器貯蔵具2点と多く、図示した土師器輪HからI期と判断される。

#### 4. SK201

D地区の南東区中程、ぬ・ね9Grに位置する隅丸方形の土坑である。規模は215×200cm、深さは48cmを測り、土坑底面の平坦な形態である。位置的にSB184の建物の中央に位置し、かつ土坑主軸が建物と一致するなど、掘立柱建物に伴う小型竈穴である可能性を持つ。SI102に一部切られて存在しており、SB184がSI102に先行するという点でも符合する。ただ、掘立柱建物に伴う積極的根拠に欠けるため、ここでは一応土坑とし、通常土坑のA類としておく。出土遺物は、須恵器食膳具2点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具19点、須恵器貯蔵具4点で、図示していないがI1期に位置づけられる坏H身が出土している。

#### 5. SK202・SJ35・SJ36

D地区の南東区北側、と12Grに位置し、SI104と重複する。土坑上面に被熱焼結面が広がるE類土坑で、ほぼ同様の高さに2箇所の炉状遺構（SJ35・36）が点在する。竈穴建物の覆土中に存在するものであり、竈穴廃絶後に掘り込まれた一連の遺構と位置づけられる。SK202は規模140×115cmの不整楕円形を呈し、深さ20cmで底面は平坦に掘られる。出土遺物は土師器煮炊具3点のみで、時期比定できる資料はない。

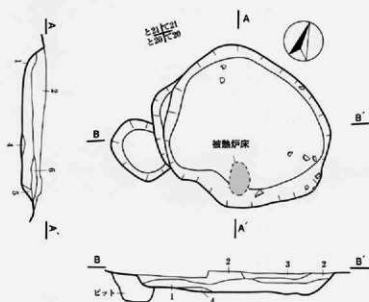
#### 6. SK203・SK204

D地区の南東区中程、ぬ8Grに位置する2基の土坑である。SK203は規模180×115cm、深さ25cmを測る長楕円形土坑。SK204は規模100×90cm、深さ20cmを測る小型不整円形土坑である。いずれも土坑底面の平坦な形態で、A類土坑に位置づけられる。SK204の出土遺物は土師器煮炊具片1点だが、SK203は須恵器食膳具2点、土師器食膳具6点、土師器煮炊具60点、須恵器貯蔵具9点と多く、図示した土師器の形態からI期に位置づけられるものと言える。

#### 7. SK205

D地区の南東区やや南西寄り、ね10Grに位置する長楕円形の土坑である。規模240×125cm、深さ45cmを測り、SI102の竈穴西側に重複して存在する。竈穴建物の掘り方土坑の可能性もあるが、土坑覆土などから見て、通常のA類土坑と考えておく。出土遺物は須恵器食膳具1点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具31点、須恵器貯蔵具13点があり、図示した土師器煮炊具の特徴などからI期に位置づけられるものと判断する。

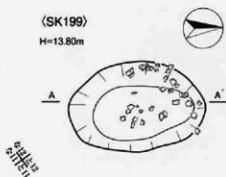
(SK197) H=13.10m



- SK197 土層表**
- 1層 黄褐色土 (OY7K30) : 焼土小塊・灰化小塊少量含有。
  - 2層 黄褐色土 (OY7K20) : 黄褐色土小塊・焼土小塊少量含有。
  - 3層 黄褐色土 (OY7K20) : 黄褐色土塊多数含有。しまりあり。
  - 4層 黄褐色土 (OY7K20) : 黄褐色土。黄褐色土塊。
  - 5層 黄褐色土 (OY7K30) : 黄褐色土小塊少量含有。
  - 6層 黄褐色土 (OY7K30) と黄褐色土が6・4で存在するし、まじりある印床土。印床上部の一部が焼化層に類似し、黄褐色土 (OY7K40) を呈す。

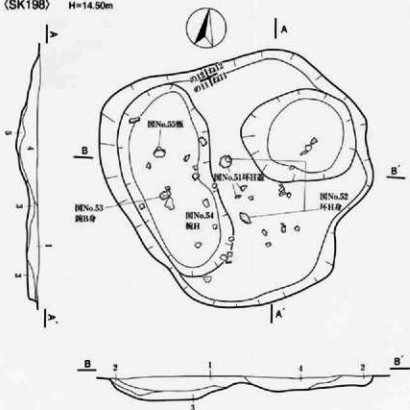
(SK199)

H=13.80m



- SK199 土層表**
- 1層 黄褐色土 (OY7K20) と黄褐色土 (OY7K30) とが7・3で混在。黄褐色土小塊・灰化小塊多数含有。
  - 2層 黄褐色土 (OY7K30) : 黄褐色土小塊少量含有。若干の灰化ひら。

(SK198) H=14.50m



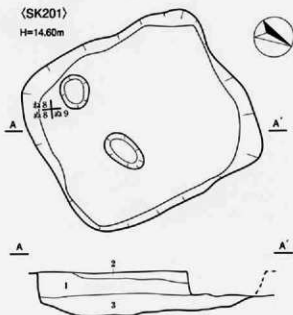
- SK198 土層表**
- 1層 黄褐色土 (OY7K20) : 灰化小塊多数含有。
  - 2層 黄褐色土 (OY7K20) : 黄褐色土塊多数含有。しまりあり。
  - 3層 土におよぶ黄褐色土 (OY7K40) と黄褐色土 (OY7K30) が9・1で混在。しまりあり。
  - 4層 黄褐色土 (OY7K20) : 黄褐色土小塊・灰化小塊・焼土と塊多数含有。
  - 5層 黄褐色土 (OY7K20) : 黄褐色土大塊多数。灰化小塊少量含有。しまりあり。



第81図 D地区土坑遺構図1 (SK197・SK198・SK199)

(SK201)

H=14.60m

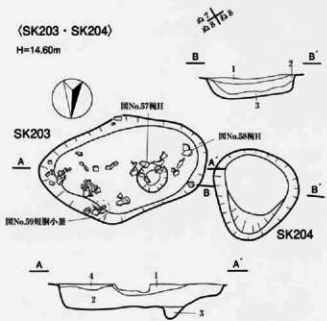


**SK201 土層表**

- 1層 黒褐色土 (T.Y7322) : 粘土小塊・黄褐色土小塊多量含有。
- 2層 黒褐色土 (T.Y7323) と褐色砂質土 (T.Y7344) が6 : 2で混在。しまり欠く。
- 3層 黒褐色土 (T.Y7322) : 黄褐色土小塊多量含有。硬質。

(SK203・SK204)

H=14.60m



**SK203 土層表**

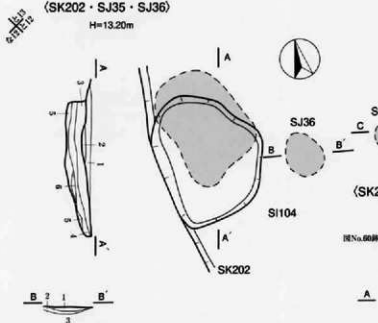
- 1層 黒褐色土 (T.Y7322) と濃い黄褐色土大塊 (T.Y7344) が6 : 4で混在する。
- 2層 黒褐色土 (T.Y7323) : 粘土塊・黄褐色土塊少量含有。
- 3層 黒褐色土 (T.Y7323) : 黄褐色土塊少量含有。
- 4層 黒褐色土 (T.Y7322) : 粘土小塊少量含有。

**SK204 土層表**

- 1層 黒褐色土 (T.Y7322) : 石灰塊・硬砂多量含有。
- 2層 黒褐色土 (T.Y7322) : 石灰小塊・黄褐色土小塊少量含有。

(SK202・SJ35・SJ36)

H=13.20m

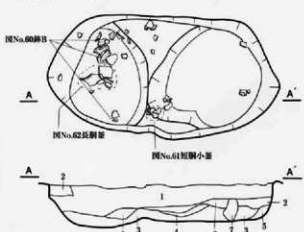


**SK202 土層表**

- 1層 黒褐色土 (T.Y7322) : 粘土小塊多量含有。
- 2層 多砂質土塊 (T.Y7344) と褐色土 (T.Y7344) が6 : 2で混在。硬く硬質砂質土上層。
- 3層 暗褐色土 (T.Y7323) : 粘土塊・石灰塊多量含有。
- 4層 黄褐色土 (T.Y7344) と暗褐色土 (T.Y7323) が6 : 4で混在。石灰小塊多量含有。
- 5層 暗褐色土 (T.Y7323) : 黄褐色土塊・石灰小塊多量含有。
- 6層 黒褐色土 (T.Y7322) と石灰大塊・石灰小塊が6 : 4で混在。

(SK205)

H=14.50m



**SK205 土層表**

- 1層 黒褐色土 (T.Y7322) : 濃い褐色土小塊多量、粘土小塊少量含有。
- 2層 黒褐色土 (T.Y7322) : 含有物ほとんどなし。
- 3層 黒褐色土 (T.Y7322) : 濃い褐色土塊少量含有。
- 4層 黒褐色土 (T.Y7322) と濃い黄褐色土塊 (T.Y7344) が6 : 4で混在。
- 5層 黒褐色土 (T.Y7322) : 濃い黄褐色土塊多量含有。
- 6層 暗褐色土 (T.Y7323) : 硬質。
- 7層 暗褐色土 (T.Y7323) : 硬質。

**SJ35・SJ36 土層表**

- 1層 暗多砂質土塊 (T.Y7344) と褐色土 (T.Y7344) が6 : 2で混在。硬質砂質土上層。
- 2層 暗褐色土 (T.Y7323) と褐色土 (T.Y7344) が6 : 4で混在。
- 3層 暗褐色土 (T.Y7323) : 石灰小塊少量含有。

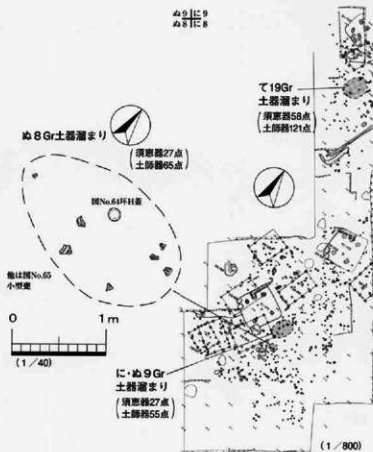
第 82 図 D地区土坑遺構図 2 (SK201・SK202・SK203・SK204・SK205・SJ35・SJ36)

## 第4項 その他の遺構と包含層

D地区で確認される上記以外の遺構としては、溝状遺構2条、ピット多数、土器溜まり遺構3箇所であるが、溝状遺構については、後出のものである可能性が高く、また、ピットについても特筆すべきことはないため、土器溜まり遺構のみ記述しておく。

土器溜まり遺構については、A地区で提示したA類のような煮炊き施設との関連性を持つものは見られず、いずれも須恵器貯蔵具を定量含む範囲に土器が散在するB類に位置づけられるものである。建物遺構の途切れる区域に位置しており、土器廃棄場の位置付けが可能と判断される。なお、ぬ8Gr土器溜まりについては、小さな範囲にまとまって土器廃棄されており、土坑に近いものかもしれない。須恵器坏H蓋の完形品と小型甕の同一個体破片が複数点出土している。

次に、包含層だが、遺構として認定しなかったものを全てを含んでおり、つまりは、遺構帰属のできなかった遺物群ということになる。第84図に示した出土量分布を見ると、土器溜まりとして上げた、て19Gr周辺と、に・ぬ9Grの南東側隣接地に集中しており、A地区と同様、B類土器溜まり的な広範囲な土器廃棄場の性格をもつものと位置づけられる。ただ、D地区の場合、A地区で見られたような、谷部や鞍部へと土器を廃棄するような傾向は認め難く、建物分布のない、隣接空白地（広場的な空間？）へ土器を集中廃棄させる傾向が強い。なお、遺物の種別構成だが、以下の破片数構成表で示したとおり、竪穴建物や土坑の土器構成と比較すると、須恵器率が高く、特に須恵器食膳具率、貯蔵具率が高くなる。土器器者炊具量は明らかに少なく、それも小破片での出土が多く、個体数の実態としては出土遺物園で提示したおりの様相であったと理解する。なお、包含層遺物の帰属時期については、古代I1期に位置づけられるものが大半を占め、II3期以降のものは極めて少ない。掘立柱建物や土坑でも述べたが、D地区はほぼ7世紀代に収まる時期の集落単位であったと理解する。A地区で定量確認された古代末期の遺物も確認されず、短期で集落移動してしまいう地区であったと言えるだろう。



第83図 D地区土器溜まり遺構図

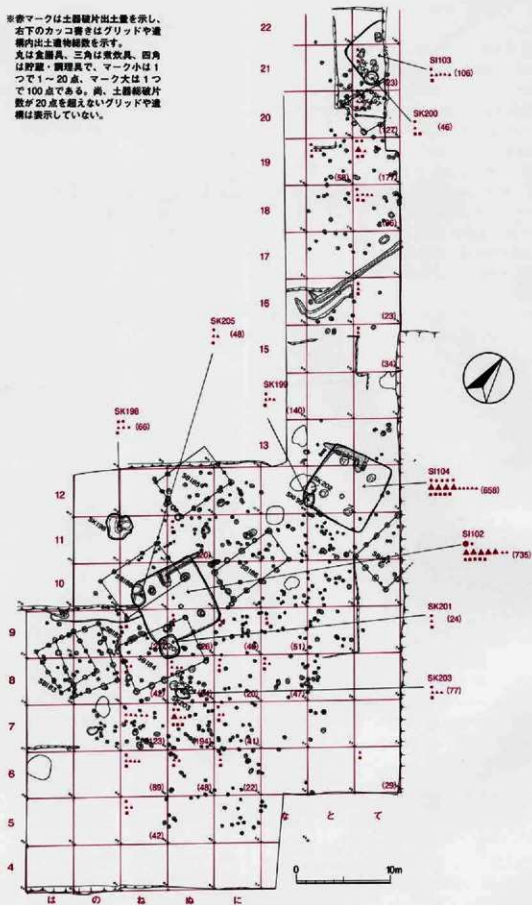
D地区出土遺構別器種破片数構成表

D地区出土地別須恵器・土師器比率対比表

種別	竪穴建物			種別計
	土坑	包含層	種別計	
須恵器破片	260	82	601	943
比率	17.3%	22.1%	32.9%	
土師器破片	1,239	289	1,227	2,755
比率	82.7%	77.9%	67.1%	
破片総量	1,499	371	1,828	

出土遺構名	食膳具		煮炊具	貯蔵具	破片総量
	須恵器	土師器	土師器	須恵器	
竪穴建物破片	68	127	1,112	192	1,499
構成比率	4.5%	8.5%	74.2%	12.8%	
土坑破片	19	32	257	63	371
構成比率	5.1%	8.6%	69.3%	17.0%	
包含層破片	200	96	1,131	401	1,828
構成比率	10.9%	5.3%	61.9%	21.9%	

※赤マークは土器破片出土量を示し、  
 右下のカッコ書きはグリッドや遺  
 構内出土物総数を示す。  
 丸は食器具、三角は炊炊具、四角  
 は貯蔵・調理具で、マーク小は1  
 つで1~20点、マーク大は1つ  
 で100点である。尚、土器破片  
 数が20点を超えないグリッドや遺  
 構は表示していない。



第84図 D地区土器出土量分布図 (1/400)

## 第V章 A地区とD地区で出土した古代の遺物

### 第1節 A地区出土の古代遺物

#### 第1項 出土遺物概要と器種分類

A地区より出土した遺物は、遺物収納箱(645×380×145mm)で275箱を数える。内訳は須恵器(陶磁器含む)105箱、土師器145箱、石製品13箱、鉄洋・鉄製品12箱で、地区別出土量としては当遺跡最多である。

当地区の調査面積は5,800㎡だが、875㎡は削平されているため、4,925㎡が実質の調査面積となり、さらにこのうちの500㎡程度は遺構基底面が遺存する程度の状況であった。つまり、4,500㎡が遺物出土面積となり、これを箱数比率(1,000㎡換算での箱数比率。田嶋明人氏が遺跡ランクを遺物量比率で出した時の手法。田嶋明人「古代の土器と中世の土師器」〔中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器〕第5回北陸中世土器研究会1992年)で示すと、61.1となる。この数値は加賀市葎原遺跡の1422や羽咋市四柳白山下遺跡の90には及ばないが、公的な施設の有存在を予想させる金沢市戸水C遺跡の51や千木ヤシキタ遺跡の50.1を上回る量比である。これらの比較資料は掘立柱建物主体の平地集落であり、煮炊具の量が当遺跡よりも著しく少ないため、そのまま比較することは危険であるが、古代I期の竪穴建物主体に営まれた小松市念仏林南遺跡の出土量比が1.45であるので、その数値の高さは歴然としている。官衙遺跡と質を同じくは考え難いが、建物の密集度など上位ランクに位置づけられよう。

遺物の時期は、別章で述べる縄文時代の土器や石器は別として、7世紀初頭、つまりは田嶋明人編年の古代I期を遡る遺物は確認していない。古代I期から12世紀前半代とされる中世I-II期の中でおさまる資料である。遺物はその間、継続的に見られるものの、遺構の帰属時期は古代I I期からIII期までが中心で、IV期以降はSB08・SB10・SB15・SB19・SK07・SK10・SK14・SK17・SK21と、III期から半減する。ただ、遺構の時期帰属できていないものも多々あり、包含層資料による時期帰属量比が参考となる。食膳具のみでの比率だが、各時期に分けた食膳具破片概数(20点程度の括りで表示した)では、古代I期が須恵器400+土師器600、II I-II 2期が須恵器900+土師器150、II 3-III期が須恵器2,800+土師器120、IV-V期が須恵器1,700+土師器180、VI期が須恵器140+土師器60となる。各時期幅が異なるため、年代幅での表示区切りをすると、西暦600年から60年間で1,000、40年間で1,050、40年間で2,920、100年間で1,880、100年間で200ということになる。つまり、包含層遺物に関しては、7世紀前半を100とすれば、後半は150に増加、8世紀前半に400とピークを迎え、8世紀後半から9世紀前半で200と半減、9世紀後半以降20に激減する状況となる。また、竪穴建物や土坑のあるうちはそこへの廃棄が中心となるため、竪穴建物の遺構数の減少する8世紀初頭をもつて、包含層資料が増加するのは当然のことであり、8世紀前半の倍増は、遺構以外への廃棄ないしは遺構自体が捉えにくい状況となつたためと考えるのが妥当である。遺構帰属時期から考えて、7世紀後半が遺跡のピークであることに違いはなく、その後の推移は激減という状況ではなく、8世紀前半代はピークをある程度維持し、後半代に減少していったものと理解される。

次に土器の器種名と分類について述べておきたい。土器は須恵器と土師器、陶磁器類があり、須恵器は田嶋編年古代I I期からVI 3期までの、7世紀初頭から10世紀中頃までのもの。土師器は古代I I期から中世I-II期までの、7世紀初頭から12世紀前半頃までのもの。陶磁器類は東濃窯産と思われる灰胎陶器または山茶碗と中国産白磁で、10世紀末から12世紀前半頃までのものである。須恵器と陶磁器類は時期が重複せず、土師器のみが全時期存在することとなる。土器様相も11世紀後半頃を境に大きく転換しており、田嶋編年の古代と中世の転換点でもあるので、土器の器種分類については分けて提示するものとする。

《古代I期》須恵器の器種分類については、これまで小松市の筆者記述報告書で述べてきたように、食膳具については田嶋明人氏の1988年北陸古代土器編年の分類案、貯蔵具類については北陸古代土器研究会第8号で提示した分類案を基本としている。ただ、今回新たに、本報告において提示した器種名もあり、それらについては、各時期の土器様相において述べることにする。また、特殊な器種や須恵質土製品については、まとめて取り上げることとした。次に、土師器であるが、須恵器同様に、これまで述べた報告書に基づくが、新たに分類名を付したものが多いため、ここで提示しておきたい。基本的に食膳具と煮炊具に分けるが、食膳具は内黒品と赤色品の他、黄土と鉄粒を混ぜた赤色塗布材により器面のみを赤く焼成した赤彩品、色調の変化をさせるための造作を特にしない通常品とに分けられる。器種では、坏や盤、皿は須恵器と同様の器種名とし、碗については糸切り口

クロ成形の無台碗を碗A、ヘラ切りロクロ成形の無台碗を碗F、非ロクロ成形成品を碗H、ロクロ成形成品を碗Bとする。高坏は中空脚の非ロクロ成形成品を高坏H、中空脚でロクロ成形成品かつ坏部が環形・碗形呈すものを高坏G、中空脚でロクロ成形成品、坏部の倒蓋形呈す高盤形を高坏Aとし、鉢については碗類よりも法量の大きいもので、煮炊具使用痕のないものとした。通常の鉢器形を鉢とし、鉄鉢形など須恵器鉢器形に準じるものはそれを適用させる。また、貯蔵具は出土量が少なく、器種は壺程度であるため、小型壺と短頸壺とを分類したのみである。煮炊具については、学史的に伝統的に使われてきた甕という語は、貯蔵具の甕との混同を招くため、従来の土師器甕は釜とし、甕とセットで湯釜として使用される長頸のもの長頸釜、煮炊きに使用される短頸のものを短頸釜とした。成形成法により、外面ハケ目調整の非ロクロのものとロクロ成形成品・調整または叩きを行うものに分けられ、前者をA類、後者をB類とした。甕は従来どおり蒸し器使用の底部穿孔または筒抜け状のもので、成形成法により釜同様、A類、B類に分類される。鍋については、広口浅身で丸底器形のもの浅鍋とし、球胴深身器形のもの深鍋とした。古代I期においては深鍋と長頸釜との識別の困難なものがあるが、基本的に把手付のタイプにあるような器形ものは深鍋とした。これについても釜同様、成形成法によりA類とB類に分けられる。また、底部がやや平底気味で碗Hに体部器形が類似する上記の鍋よりも容量の小型の器種が古代I期に多く使用されるが、これについても煮炊き痕跡から鍋として使用されたものと理解され、小型鍋と呼称する。他に、長頸釜に甕の掛け口にかけるための罫が巡る羽釜がある。

《中世土器》土師器と陶磁器があり、どちらも食器具に限られる。土師器は全てロクロ成形成品の糸切りで、法量により碗と小皿に分類される。さらに底部形態より輪高台と柱状高台、厚底、平底に分けられ、アルファベット記号ではなく、形態名称をそのまま使用する。また、焼き上がり状態から、内面を吸炭させて黒色に焼成する内黒品と通常の焼き上がりだが赤色酸化鉄粒を混在させて赤く発色させる赤色品、白色粘土を使用して白く発色させる白色品に分けられる。陶磁器は灰胎陶器、中国産白磁とともに、高台の付く碗器形で、全て有台碗とする。

土器以外のものについては、以下の遺構出土解説において、主なものを取り上げてゆくが、鉄製品や鉄滓などの鉄関連遺物については、一部のみを報告するに止める。当遺物群の取り扱いについては、遺跡全体との検討が必要で、地区別に報告する性格のものではない。当遺跡は鉄生産・鉄加工の工程を行っていることが、遺跡としての性格を物語る重要な要素と見ており、遺跡全体での報告を科学分析結果とともにまとめ、別冊として刊行する予定である。このため、今回の報告では、鉄生産に関連する遺物群の報告は一切行わず、それと切り離して処理できそうな鉄製品、つまり、鉄滓や炉壁とともに出土していない鉄製品のみを報告する。

## 第2項 各遺構出土遺物解説

遺構出土の遺物について、個別の説明は観察表に譲るとして、特徴的なものや特記事項、時期を代表できるような一括資料の土器様相などを中心として、竪穴建物、掘立柱建物、土坑、ピット、包含層の順で提示する。

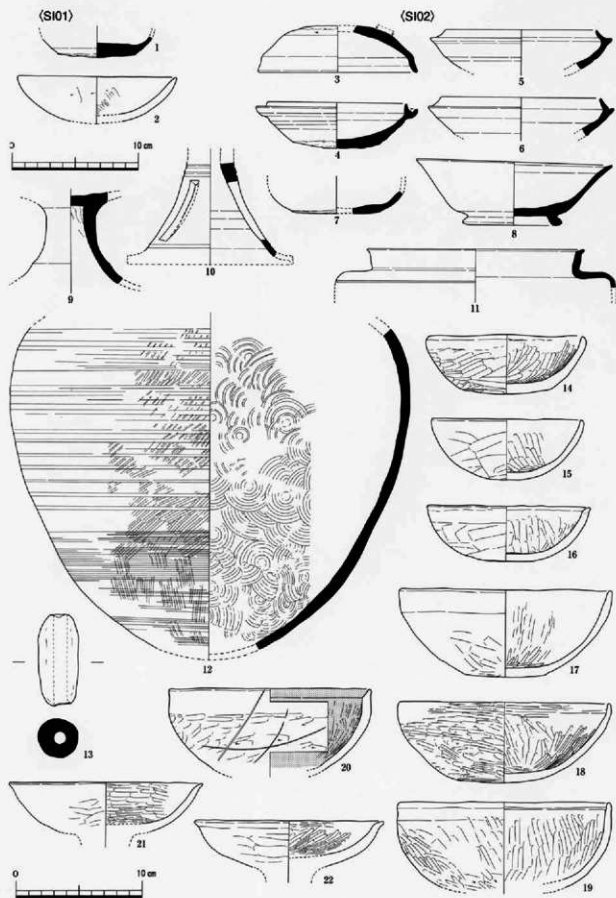
### 1. 竪穴建物

竪穴建物から出土する遺物は多く、破片数では121ページで示した出土遺物別器種破片数構成表のように、4割未満であるが、遺物破片の大きいもの、残りのよいものが多く、箱数としては過半数を占めている。構成としては、食器具が13%、煮炊具が76%、貯蔵具が11%で、時期の古いものが中心ということもあるが、竪穴内へのカマド使用土器の廃棄により、煮炊具の比率が高い。以下では出土量の多い遺構を中心に述べることにする。

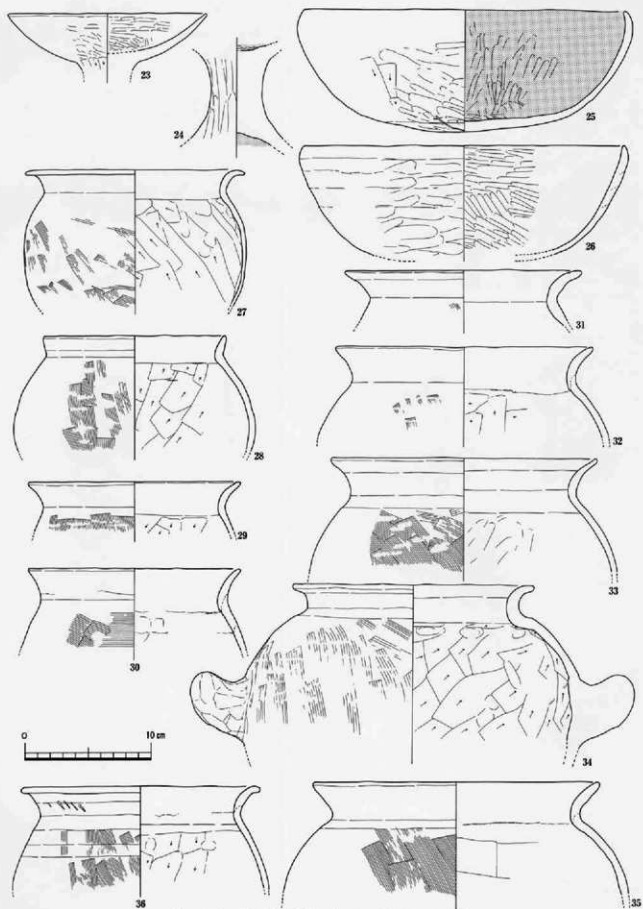
#### a. S102

8・9・11は混入品として、他は古代I期の資料である。土師器は下層から床面の資料で比較的一括性が高いが、須恵器については上層のものが多い。図示したものは坏Hが主であり、床面近くで出土した須恵器三方二段スカシの高坏HとともにI1期の様相を呈す。食器具組成の中で須恵器が主体を占めない様相であり、土師器は碗Hと高坏Hが目立つ。碗Hは口径12cm前後と16cm前後の2法量があり、口縁部の内湾する器形と短く端部が外屈する器形とがある。小型の底部から丸く立ち上がり、全体的に丸底器形を呈するもので、粗いミガキ調整が入る。内黒品または内黒焼成しようとしたが、炭素が飛んでしまった失敗品で、外面に薄くススの付くものがある。高坏Hは碗H同様の口縁部器形特徴を持ち、内黒を基本とするが、飛んでしまったものだろう。脚部は長脚タイプだが、徐々に短くなってゆく段階のものであり、坏部も大型のものはいない。碗Hの法量が二極化するこ





第85図 A地区出土遺物1 (SI01、SI02-1、S=1/3)



第86図 A地区出土遺物2 (SI02-2、S=1/3)

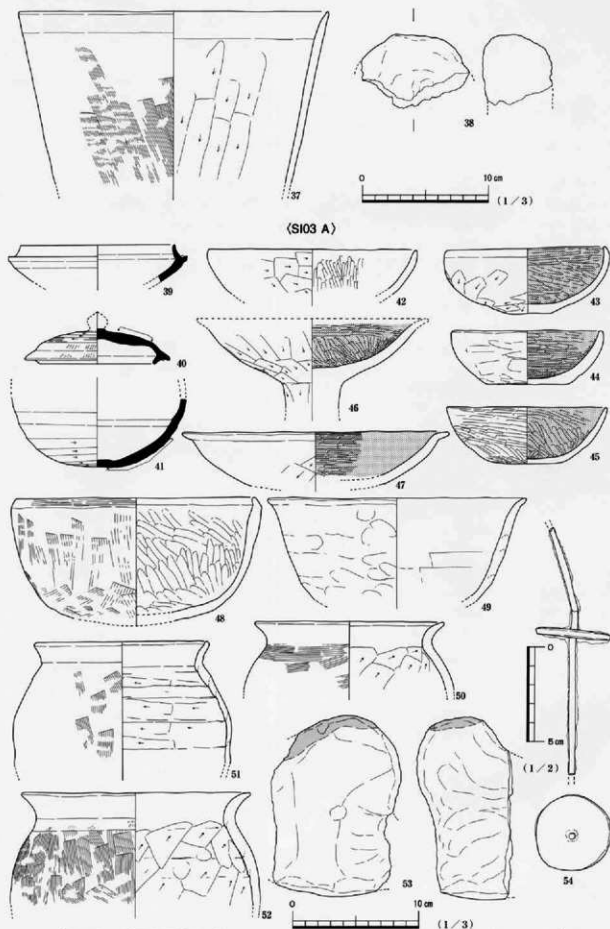
とも含め、新しい様相である可能性をもつ。小型鍋は定量存在し、比較的薄手のミガキの入るタイプ。釜の類ではロクロ成形のB類は確認されないが、長胴釜では33・35のような割の張る器形と張らない32・36が存在しており、これも新しい特徴と言える。調整は外面が縦または斜め方向のハケ目調整、内面は縦方向のケズリ調整で、全体的に薄手である。甔は全体的にスリムな器形。また、把手付きの深鍋が出土するが、球胴を呈する比較的口径の小さなもので、これについても当器種の変化過程にあるものと予想する。以上、土師器様相からは、古代I 1期資料として上げている念仏林南遺跡資料よりも新しい様相と感じられ、I 2期の典型資料とされる野々市町御鉢塚ツカダ遺跡80-5号住居資料に近い。当該資料に対比できる須恵器としては7の坏G身資料があり、下層出土であることも符号する。当資料については能美窟産であり、新たな土師器様相変化をいち早く取り入れる須恵器様相を持つ。どれだけの共伴性をもつかは積極的根拠に欠くが、南加賀窟産とした2段三方カシの高坏Hや坏Hは南加賀窟では古代I 1期の範疇であり、型式が混乱している。しかし、筆者が以前論考提示したとおり、南加賀窟群北群資料は伊津六ヶヶ丘2号窟とされるI 1期新段階の中でも新相に位置づけられる一群であり（筆者2004年の論考「北陸地域における飛鳥時代須恵器の様相」「白門考古論叢」の北群2期新段階）、能美窟などではI 2期に伴行する段階である可能性が高く、そのことを立証できる資料と言えるだろう。

#### b. SI03

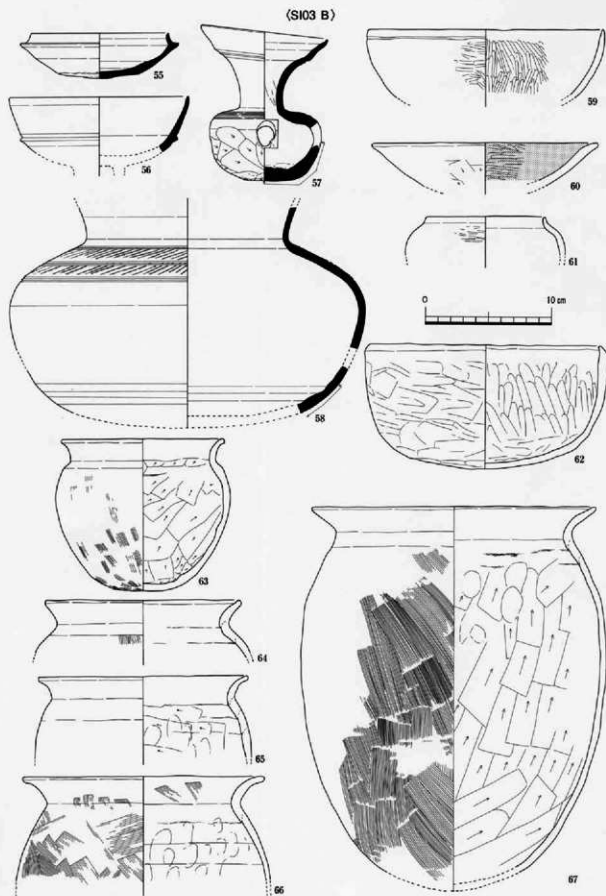
堅穴建物の重複があり、L字型カマドをもつ四本柱穴穴の初期段階の03Aと小型堅穴に建替え後の03Bに分けられる。土師器様相から見る限り、SI02と大差なく、どちらも古代I 2期のように感じる。ただ、03A堅穴の47（土師器高坏H）坏部器形はI 1期の様相を残しており、03B堅穴の67と69の土師器長胴釜はかなり割が長く、薄手となって新しい様相を示していると言えよう。また、03A堅穴の南加賀窟南群須恵器の39坏H身と40鍋b蓋（当器種について、田嶋氏は鍋とするが、筆者は前掲論考で体部沈線をもつ無蓋の深身鍋をa類、坏身がより坏形へと変化し、有蓋となった段階のものをb類と細分した）は、古代I 1期新段階に位置づけられる器形のものであり、I 1期に遡る可能性は高い。これに対し、03B堅穴の57の須恵器甔は口頸部がかなり短くなったものであり、I 2期資料として遜色はない。以上から、03A堅穴資料はI 1期新段階に限りなく近い段階の資料、03B堅穴はI 2段階の資料と言えよう。なお、58のB堅穴床面から出土した須恵器の特殊な甔であるが、極めて薄手の作りをするもので、胴部上半に沈線と曲歯状刺突文をもつものである。胎土は精選されており、当期のものとしては類例を知らない。また、A堅穴出土の53の土製支脚だが、土師胎土とは異なる泥質粘土を使用したもので、下底面と頂部は生きているが、側面の欠損するものである。頂部が三叉に分岐した支脚と考えており、頂部が被熱により黒色化している。類似したものが額見町西遺跡13号堅穴住居から出土している（『小松市額見町西遺跡』石川県埋蔵文化財センター2000年）。金属製品では直刃の鉄製鎌と鉄製紡錘車、銅製耳環が出土する。紡錘車はSI03A床面付近出土だが、それ以外は上層出土のものである。紡錘車は軸棒の遺存するほぼ完形資料で、当資料の中では全国的に見ても古い事例となろう。鎌は着柄角度の110度程度のもので、刃部は先細となる形状のもの。基部は下方に丸くなる。これも完形資料であり、当期の良好な資料となる。耳環は地金の銅のみ遺存しているものである。

#### c. SI04

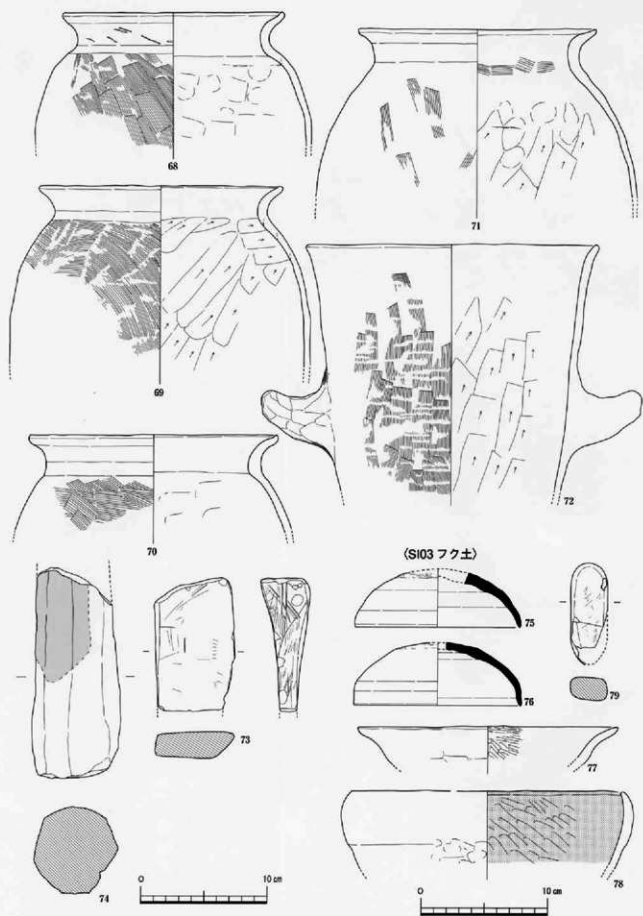
ほとんどが堅穴の掘り方土坑から出土しており、古代のII 3期に位置づけられる数少ない堅穴建物資料である。資料自体が少ないが、食器具は須恵器のみで、坏Bと坏Aで構成される。土師器煮炊具の主体はロクロ成形B類で、甔や短胴小釜、長胴釜が確認される。長胴釜は厚手で、胴部上半に叩き成形痕が残る。93の甔は内外面ハケ目調整のため、一見A類のようでもあるが、口縁部端面は面形成し、外面ハケ目調整以前にロクロナデが施されるロクロ成形のものである。B類技法のものでも、依然として古い技法を共存させる段階と言える。ハケ目調整のものは92の浅鍋と91の長胴釜で確認され、浅鍋は底部にやや平底状の面を持ち、内面がハケ目調整、外面もハケ目調整だが、下半部を手持ちケズリ調整する。また、深身器形を残しており、やや定型前の様相と見られる。長胴釜は頸部が「く」字に屈曲する器形で、口縁部にロクロビタ状の段を形成するものである。京都府綾部市周辺に分布する青野型甔系統のものであり、丹波地域から若狭にかけて広く分布が確認されるものである。ここでは丹波系煮炊具と位置づける。当煮炊具は長胴釜が主で、頸部屈曲器形と口縁部調整、そして胴部の張る器形を特徴とする。在地の土師器煮炊具よりも色調が赤く、砂粒を含む胎土が使われる特徴をもつ。酸化鉄粒を混ぜて赤く発色するよう胎土調整しているが、基本的に在地、地元土師器の胎土と思われるものである。なお、



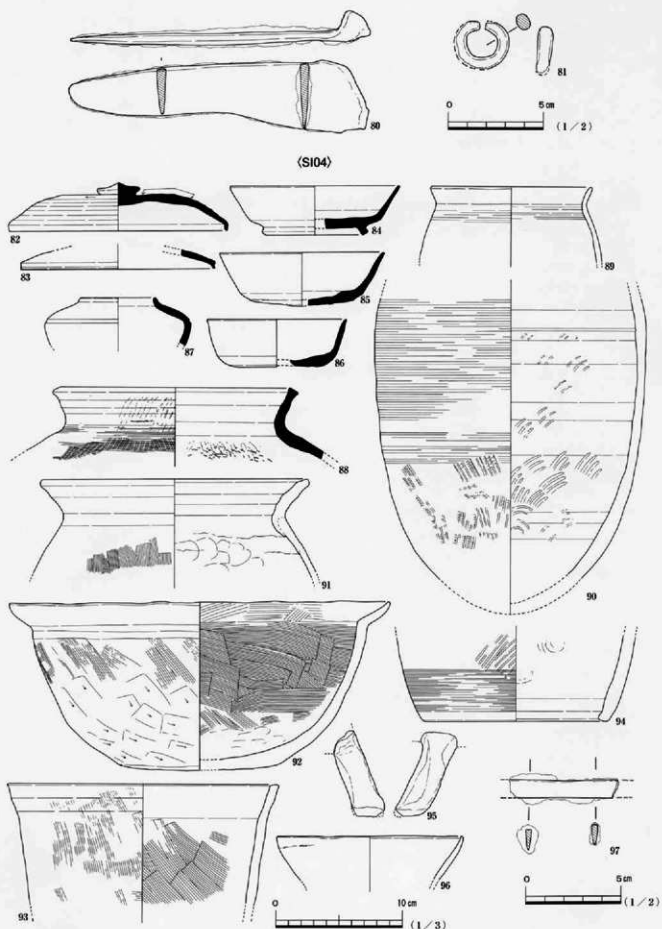
第87図 A地区出土遺物3 (SI02-3・SI03 A、37~53はS=1/3、54はS=1/2)



第88図 A地区出土遺物4 (SI03 B-1、S=1/3)



第89図 A地区出土遺物5 (SI03 B-2・SI03 覆土、S=1/3)



第90図 A地区出土遺物6 (Si03 覆土-2、Si04、80・81・97のみS=1/2、他はS=1/3)

95とした土馬の脚部と思われる破片や96の製塩土器が出土している。製塩土器はその大半が輸入品だが、これに関しては地元の胎土である可能性が高い。99の鉄製品に関しては、刀子の刃部片と思われるもので、両端を欠損するものである。

#### d. S106

掘り方資料であり、資料数は少ないが、比較的時期にまとまりをもった資料である。食膳具は須恵器坏B主体だが、赤彩土師器碗Fが少量含まれる。須恵器全般から98の坏A蓋が古代Ⅱ2期に遡る以外は、古代Ⅱ3期の様相と思われるが、坏B身の高台形態などから総体的にはⅡ3でも古手の様相と判断される。土師器碗Fは内外ミガキ調整の入念なもので、底面ケズリ調整後もミガキを施す。煮炊具は少なく、在来型ハケ目調整のA類とロクロ成形のB類とが共存する。特に、107の長胴釜は胴部のかなり狭いもので、厚手で作りの雑なものである。なお、111は製塩土器の支脚部破片で、胎土に骨針の入り他地域産のもの。112は棒状鉄製品で、長頸類の筒被頸部破片の可能性もある。

#### e. S107

古代Ⅱ1期の良好な堅穴建物資料である。食膳具は須恵器が主体的で、土師器は高坏Hのみ明示してある。ただ、破片ではあるが、赤彩の碗Fが3点と内黒の碗Hが16点ほど出土しており、須恵器の主体化と土師器碗Hから碗Fへ移行する段階の資料群と位置づけられる。須恵器食膳具に坏Bは確認されず、坏Gと坏Aでは構成され、体部下位にケズリ調整をもつへう切りの碗Fと高坏Gの坏部大タイプが確認される。坏Gと坏Aの識別は困難な部分はあるが、身は体部立ち上がりと内底面の仕上げナデ調整、蓋も内面調整を基準とし、口径においても坏Aがやや大きくなっている。当段階はちよと両器種が入れ代わってゆく段階であり、Ⅱ1期の古段階と新段階の過渡的の様相のものと言えよう。125の土師器高坏Hは坏部碗形のもので、脚基部が細く、脚端部が広がってゆかない点など、この時期の特徴と言えよう。煮炊具はロクロ成形のB類が明確には確認できず、図示したように在来型成形のA類煮炊具で占められる。全体的にⅠ期の様相を継承するように見えるが、128の頸部屈曲が明瞭で内面ハケ目調整を施すものはⅡ期の様相であり、加えて外面下半にケズリ調整を施す点は後述するが、近江系煮炊具の特徴でもある。また、器形的に定型化の様相をもつ130の浅鍋の存在も、Ⅱ期の様相といえるだろう。

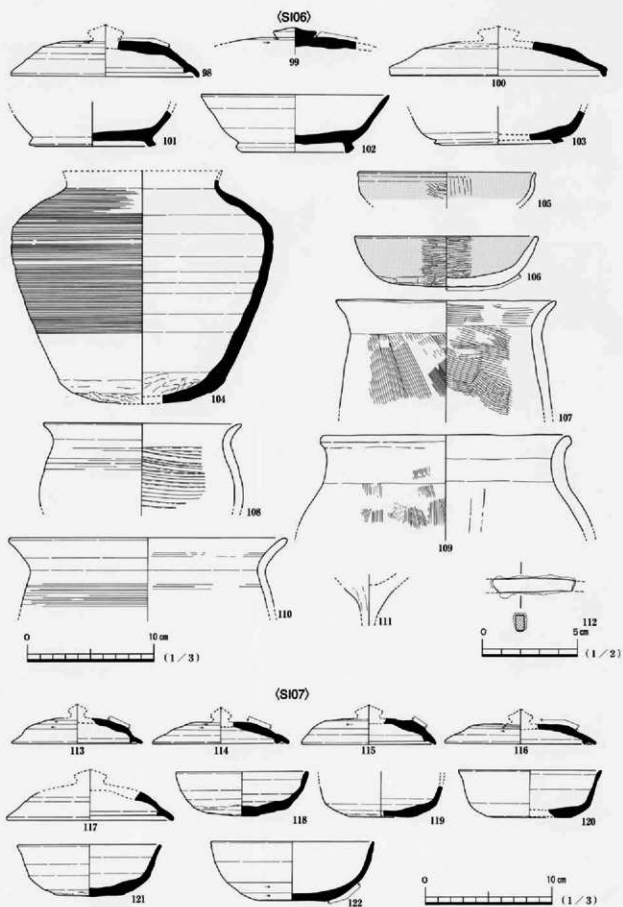
#### f. S108

掘り方内遺物とカマド付近の廃棄土器に時期差があり、単一時期の資料提示とはなっていないため、特筆すべき資料のみ述べる。134は返りのある坏蓋状器形のもので、口径やケズリ調整の入念さ、厚さなどから、須恵質の無脚円面碗と判断した。使用した痕跡はなく、この状態で上面に降灰する。140の石製紡錘車は扁平タイプで、一部欠け痕跡のある略定形品である。欠け部分も含め磨耗が顕著である。139の製塩土器はバケツ状器形を呈す平底型タイプで、新しい形態のものである。輸入品ではなく、地元産と思われる。

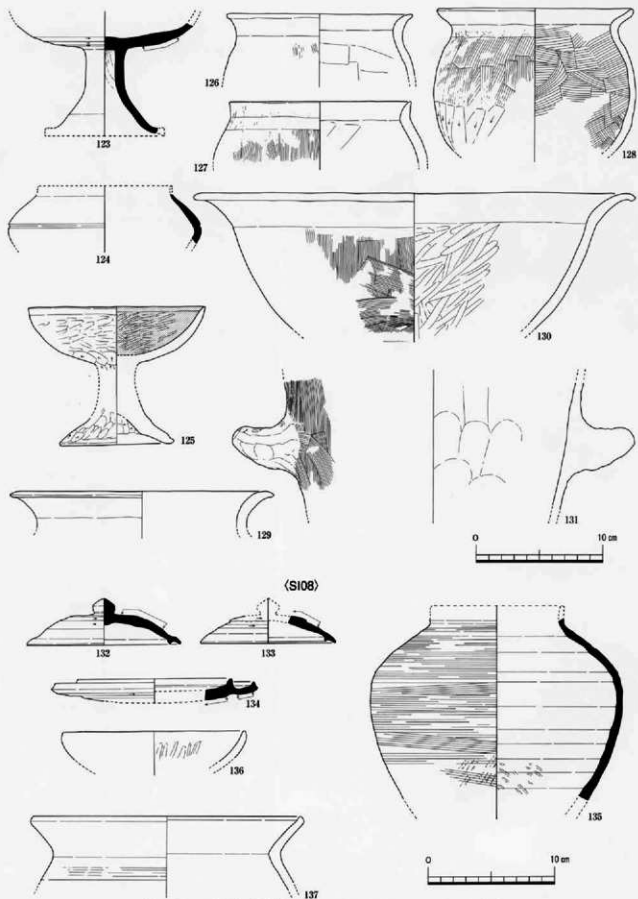
#### g. S109

古代Ⅰ期からⅤ期までのものが混在するが、カマド周辺を中心にⅢ期に位置づけられる資料が多く、Ⅲ期の良好な堅穴建物資料と考えている。古代Ⅲ期の食膳具は須恵器坏Bと坏Aでは構成され、それに赤彩土師器坏B蓋と碗F、内黒の高坏Gが少量加わるという組成を示す。赤彩土師器の坏B蓋、碗Fともに薄手で大型のものであり、丁寧な作りをしている。高坏Gは基部細く、脚部が短く開く器形のもので、この時期の内黒土師器の最終段階だろう。いずれも南加賀産と推察できる。煮炊具も窯場の胎土が大半を占めており、窯場が少量生産に入るとともに、消費地への供給が安定してきたことを物語る。浅鍋が増加する段階で、Ⅱ3期の定着段階から、当期に増殖したものと理解される。胴部下半に叩き成形痕跡を残すものや深身器形が目立ち、厚手を呈するという特徴がある。長胴釜は在来型のハケ目調整を最終段階に施す164・165が依然として定量を占め、定型化されつつあるタイプ(166)と共存することが特徴と言える。短胴小釜も在来型技法であるハケ目調整とケズリ調整を最終工程で施すものが当期の特徴で、胴部下半の内面ハケ目、外面ケズリにより、丸底化することを基本とする。平底のまま仕上げるⅣ期の短胴小釜をもって、北陸型煮炊具は定型化し、長胴釜においても在来型技法を払拭してゆくのである。なお、174の管状土師器製品は土鍾状だが、厚く大型であるため支脚と考えた。また、Ⅳ1期に位置付けられる144の須恵器坏B蓋大量は、内面に黒痕と研磨痕をもつ転用碗で、つまみ部分を打ち欠いたような痕跡を持つものである。

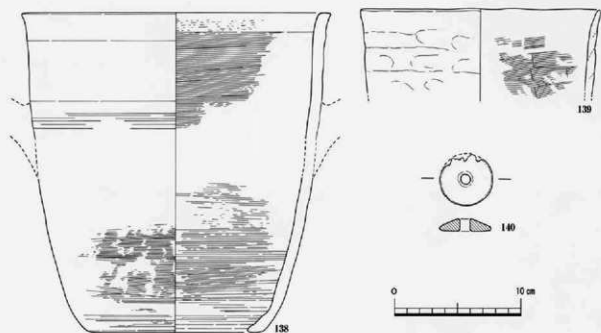




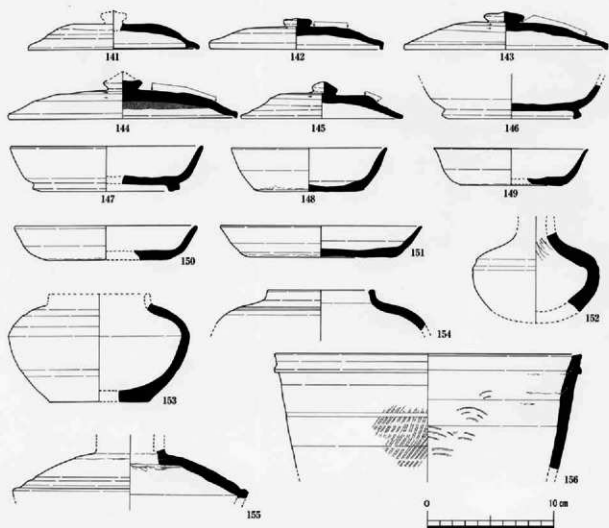
第91図 A地区出土遺物7 (S106・S107-1、112のみS=1/2、他はS=1/3)



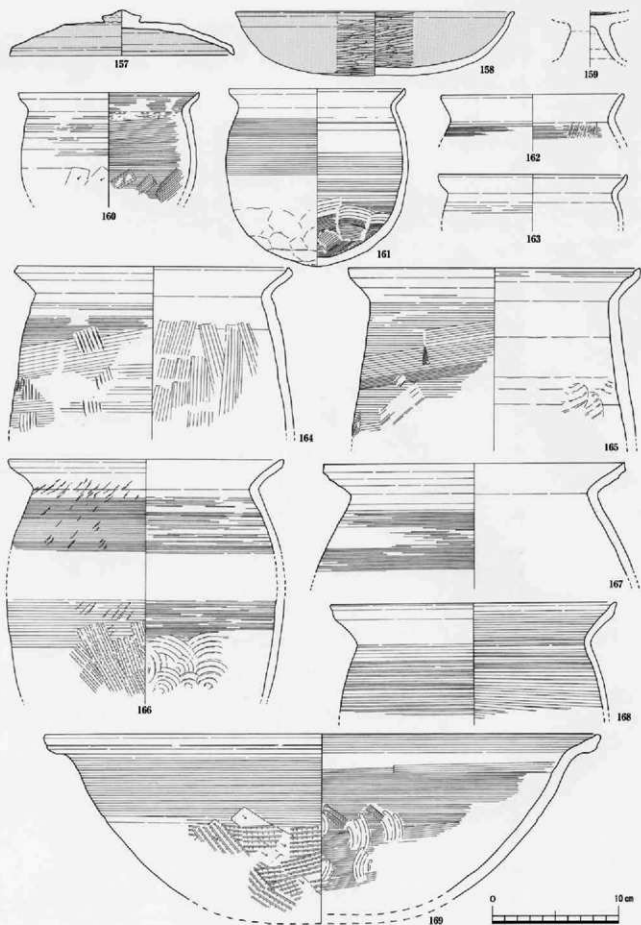
第92図 A地区出土遺物B (SI07-2・SI08-1、S=1/3)



(SI09)



第93図 A地区出土遺物9 (SI08-2・SI09-1、S=1/3)



第94図 A地区出土遺物10 (SI09-2、S=1/3)

## h. S110

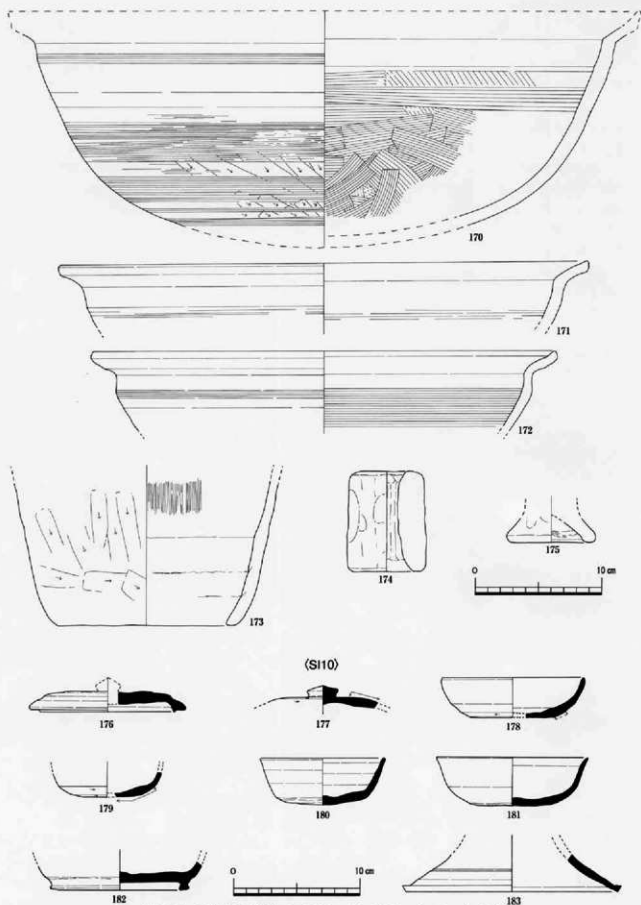
182の上層資料を除外すれば、古代Ⅱ1期から一部Ⅱ2期に入る時期に位置付けられる資料である。食器具は土師器椀Hや高坏Hが少量確認されるが、ほぼ須恵器で占められる段階で、有蓋坏Aと椀Gで構成される。掘り方ではⅡ2期に遡る坏G身(179・180)が出土しており、時間差がある。煮炊具は在来型A類技法で占められるが、Ⅰ期に主体的な内面ヘラナデ後のケズリ調整長胴釜(187~189)と内面に粗いハケ目調整を施す新たに出現する長胴釜(192・193)とが併存する。前者は胴部上位や中位に張りを持つ器形であるのに対し、後者は下膨れ器形または頸部括れが乏しく胴張りのない器形のもので、胎土も異なる傾向がある。明らかに異なるタイプの煮炊具であり、在来型Ⅰ類と在来型Ⅱ類に分類しておく。また、全体的な器形は在来型Ⅰ類に近いが、胴部内面をハケ目調整し、外面下半を縦方向のケズリ調整する長胴釜191がある。当技法は関西地域北東部に分布する近江系煮炊具に特徴的なもので、190の受け口状となる口縁部破片も器形や内面横ハケ目調整など特徴が類似する。地元の胎土のものであり、在地産であるが、近江系煮炊具を模倣したものと言えよう。浅鉢はまだ少なく、深身の器形で口縁部が短く外反する特徴など定型前的な様相と言える。製塩土器は底部丸底器形を呈する鉢状器形のものと思われるもの。なお、堅穴上層から中実脚タイプの土製支脚が3個体出土しており、198・199には「×」のヘラ記号が記される。197は上端部破片だが、頂部を三叉にするタイプと予想される。200は鉄製不具合金具で、穿孔が見られる。

## i. S111

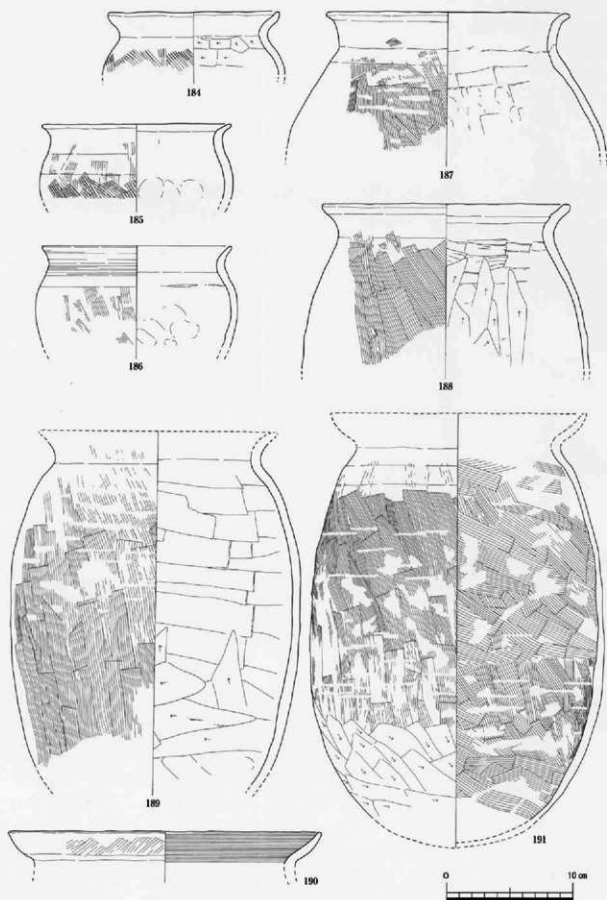
当遺跡の中では最も古い段階の堅穴建物資料であり、古代Ⅰ1期に位置づけられるものである。201の須恵器坏H蓋は能美窯産で口径13cmを測るものであり、能美窯の八里向山J遺跡窯資料よりも古い段階、古代Ⅰ1期資料の中でも古段階に位置づけられる。食器具は土師器主体であり、椀Hと高坏Hで占められる様相や内黒品が高い率であること、203の底部明瞭な椀Hの存在、口縁部外屈する深身の204など、当段階資料の特徴を示すものと考えられる。しかしながら、207の高坏Hは坏部器形が椀形となり、脚部が基部細く、短くなってきていること、212のカマド廃棄された長胴釜が在来型Ⅰ類の中でも頸部括れ明瞭となって長胴器形となっていることなど、古段階の典型資料とは言えない。201は使用痕顕著な遺物であり、長期使用も推察されるため、全体的には新段階に位置づけておくのが妥当と判断される。なお、覆土上層には古代Ⅱ2期の一括資料(214~221)があり、須恵器は口縁部折り曲げ形態の坏B蓋と返りの微弱化した坏A蓋、底面ケズリ調整を持つ坏B身、やや小型法量の有蓋坏A身がある。土師器食器具では口径19cm台の非口ロクロ成形品があり、成形や器形的には椀Hの流れにあるものである。赤彩を施しており、椀Fを意識した製品と位置づけられる。

## j. S112

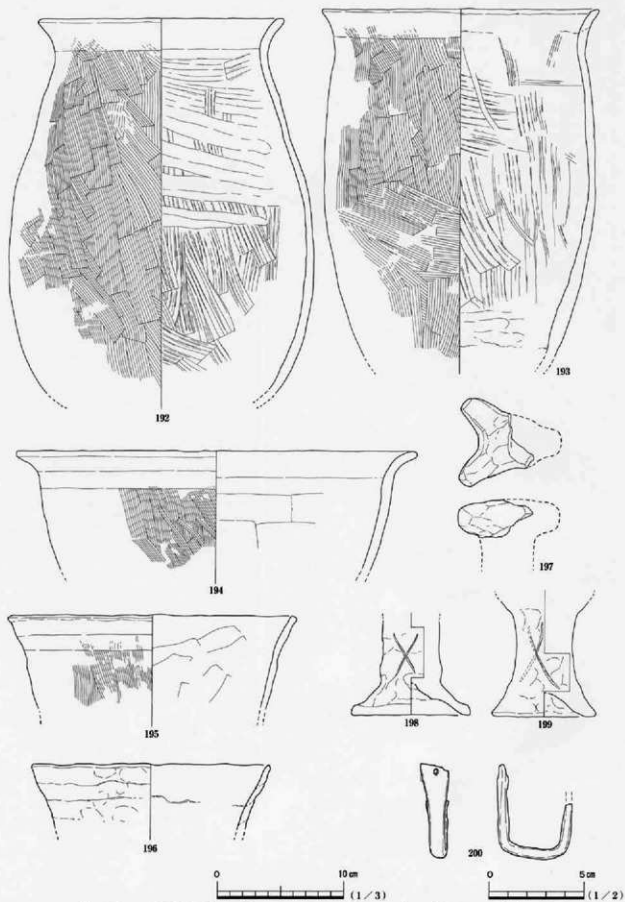
堅穴覆土上層等に222・223の須恵器坏Hが混在するが、堅穴に伴う資料は古代Ⅱ2期のものである。食器具は須恵器主体の構成で、坏A蓋はつまみが扁平形となり、坏A身の底面は広く平坦のものが主体となる。坏B身が定量存在し、底面ケズリ調整の省略や坏部器形の特徴など定着段階の様相をもち、Ⅱ2期でも新相に位置づけられる可能性を持つ。ただ、坏B高台はまだ足高で小型をもつ点や、小型高坏Gが存在する点、折り曲げ形態の坏蓋が確認されないこと、坏Hの椀相でもあり、Ⅱ2期新段階とは言えない。土師器食器具に椀Fは確認されず、内黒品も含め、椀Hが確認されるのみである。237は内面黒色しない通常品で、内湾器形を呈すが、全体的に薄手でⅠ期の椀Hとは様相が異なる。煮炊具は在来型のA類とロクロ成形によるB類に分けられる。長胴釜はA類に限られ、その中でも在来型Ⅱ類にはほぼ統一される様相を持つ。口縁部が長めに伸びる特徴や口縁端部の僅かに積み上げる器形特徴など、当類型の典型的資料と言える。短胴小釜はB類に限られる。胴部カキ目かロクロヒダを残すもので、口頸部は「く」字屈曲する。底面ヘラ切りの後に内面から底部を押し出し気味にナゲ調整した平底に近い器形の239と内面押し出しに加えて外面持ちケズリ調整で丸底器形とする240とがある。鍋類はなく、甌はB類のロクロ成形品。底部筒抜けタイプで、胴部下半に叩き成形痕を残し、上半はカキ目調整後に縦方向のハケ目調整を施す。把手は三角形板状粘土を内湾気味に付すもので、新しい把手形態となっている。当段階のロクロ成形B類煮炊具については、須恵器成形の技法を取り入れたものとの理解も可能だが、朝鮮系軟質土器の影響により出現したものと見ており、原始北陸型煮炊具と位置づけている(望月精司「北陸型煮炊具の出現と成立過程」『北陸の考古学Ⅲ』石川考古学研究会1999年)。これらの朝鮮系との関連をもつものか判断しにくい。須恵器貯蔵具で在地産胎土とは異なる甌が確認される。底部丸底の球形胴部をもつ甌で、金属器系の水甌のよう



第95図 A地区出土遺物 11 (SI09-3・S110-1、S=1/3)



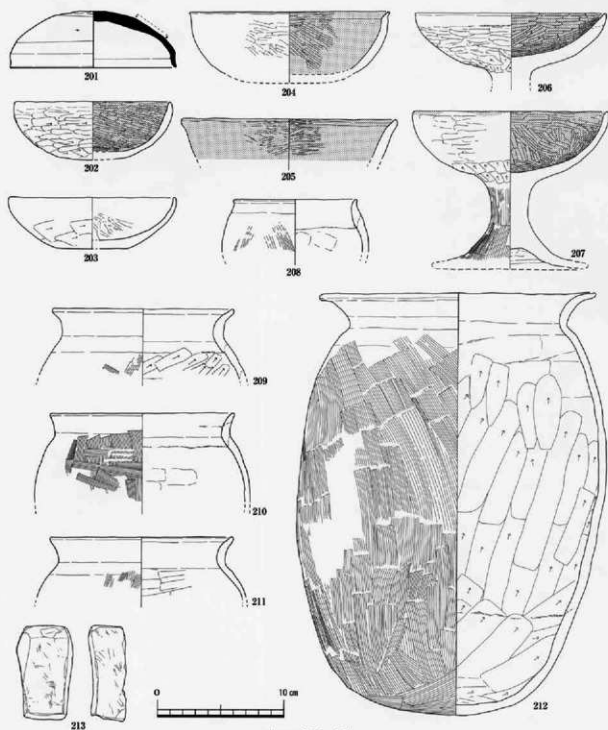
第96図 A地区出土遺物 12 (SI10-2、S=1/3)



第97図 A地区出土遺物 13 (SI10-3、200のみS=1/2、他はS=1/3)



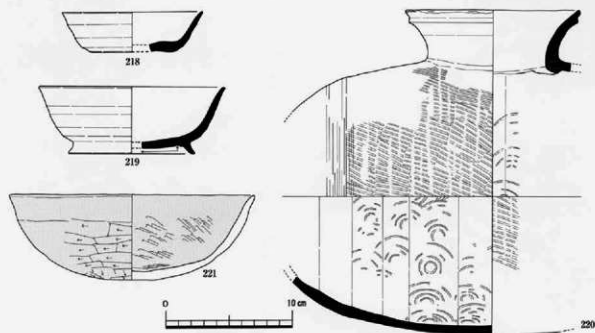
〈SI11〉



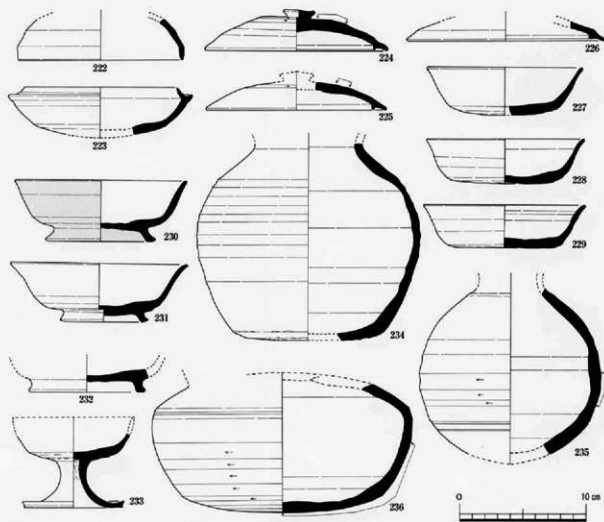
〈SI11 上層一括〉



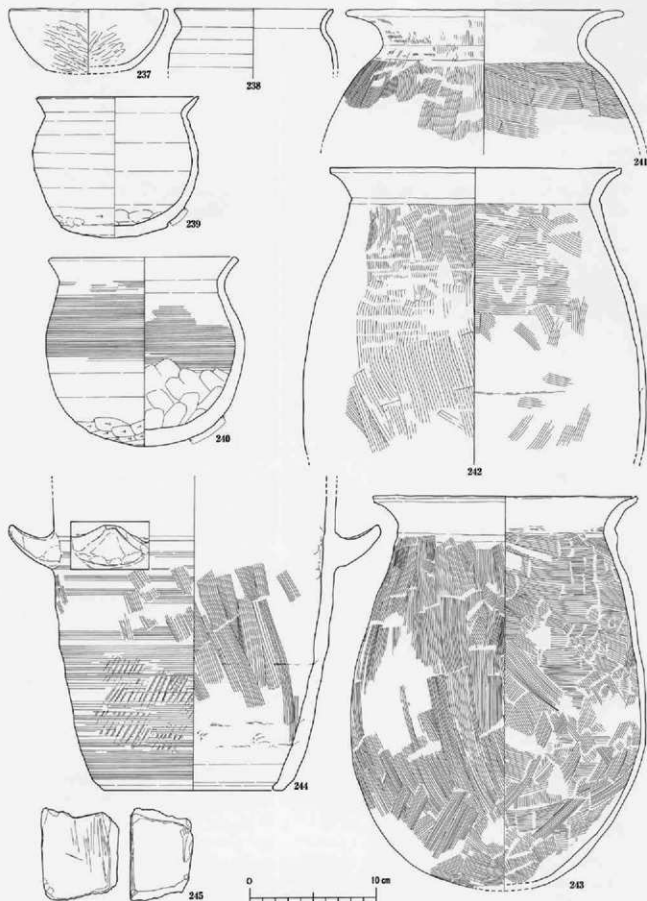
第98図 A地区出土遺物 14 (SI11・SI11上層一括-1、S=1/3)



(SI12)



第99図 A地区出土遺物 15 (SI11 上層一括-2・SI12-1、S=1/3)



第100図 A地区出土遺物 16 (SI12-2、S=1/3)

にも見える。搬入品であろう。

#### k. SI13

SI11同様、当地区最古段階に位置づけられる古代ⅠⅠ期の一括資料である。食膳具では須恵器を数点図示してあるが、いずれも上層出土であり、下層以下の資料は土師器輪Hで占められる。口縁部内湾器形と外屈器形とがあり、どちらも大ぶりて厚手で丁寧な作りをする。煮炊具は小型鍋と広口小鍋が定量存在し、長胴釜は全て在来型A類の古相様相であるⅠ類に統一される。胴部張りの強い傾向があり、手付深鍋の器形や大型法量呈すことなど、古代ⅠⅠ期の中でも古い様相をもつものかもしれない。ただ、共存する須恵器はなく、SI11と同時期と判断するのが穏当だろう。

#### l. SI14

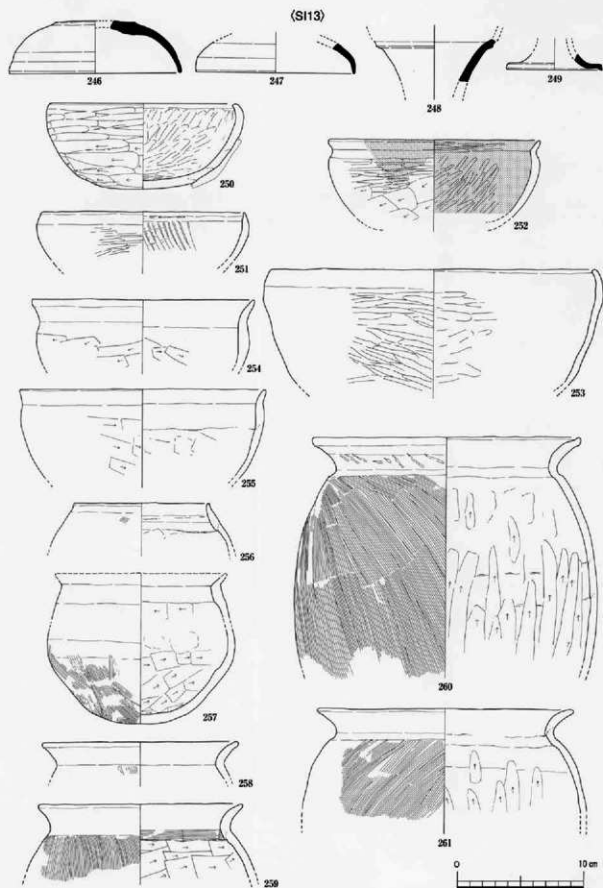
古代ⅡⅢ期に位置づけられる数少ない堅穴建物資料である。食膳具は須恵器主体に出土しており、土師器は碗H破片が数点あるのみである。269・270の須恵器環B蓋身器形は当期の中でも古手様相のものであり、掘り方出土の環A蓋の存在を考えると、Ⅱ2期からの過渡期的段階とも位置づけられる。土師器煮炊具は全て在来型A類技法のもので、ロクロ成形は確認されない。在来型はⅡ類主体だが、Ⅰ期の様相を残すⅠ類も定量あり、当期まで胎土の煮炊具が残存する可能性を持つ。ただ、全体的には口頸部が長くなり、薄手の作りとなるなど変化が見られる。なお、276の短胴小釜は在来型A類ながら、平底形態のもので、底面に木敷板を残す。

#### m. SI15

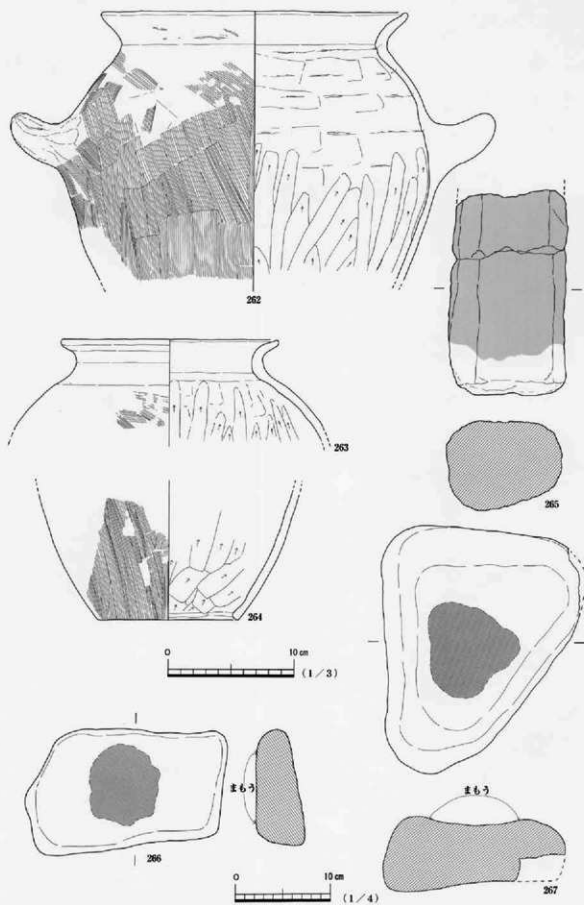
掘り方土坑出土遺物のみであり、資料の一括性は信憑性を欠くが、刀子鉄杖器が2点出土している。特に288は関から柄の部分が遺存する資料で、柄の元の部分に木質か革状のものが巻きついている。関部分の形態が直角片岡のもので、刃部の幅が狭いものである。

#### n. SI17

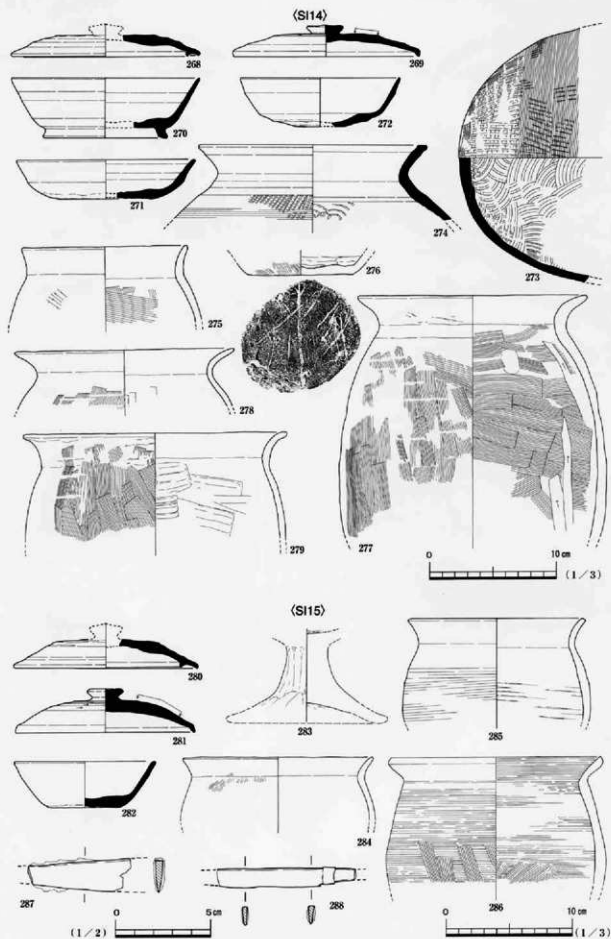
覆土から出土する資料は古代ⅠⅠ期からⅣⅠ期まで幅があり、一括性を提示できる資料は床下や床面、カマド周辺及び焼土遺構より下の覆土下層資料のみとなる。289・290の古代ⅠⅠ期に位置づけられる須恵器環HやⅡⅠ期に位置付け可能な292～296、304の須恵器環Gは別として、土師器資料を中心に古代ⅡⅡ期のまとまった資料と言え、須恵器食膳具では297～300・307～318が該当する。須恵器食膳具の主体は環Aで、身はやや丸底気味底部から体部外反する薄手の形態を呈し、無蓋が定量存在する。蓋は返りがかなり微弱となった扁平つまみを伴うもので、定量の折り曲げ形態が出現している。298はその中でも古手の様相を持つもので、299・300は当期の最終の様相のものであろう。環B身は高台がしっかりと踏ん張る形態だが、足高状ではなく、器形もかなり定型化される。ただ、314の口縁部内湾器形や底面ケズリ調整のものは金属器模倣形態を残している。小型高坏Gや317の有脚鉢の存在も、ⅡⅡ期の中では古い様相を残すものだろう。316の有台環は、体部沈線を持つ深身器形の小型法量のもので、底面ケズリ調整で薄手作りなど精製品と位置づけられるものである。有蓋器種であり、環B身の深身最小法量と位置づけ可能だが、産地と推察される南加賀産ではこのような法量の環Bは当段階に確認例がなく、特殊容器と位置づけられていたものだろう。同法量・形態のものがSK38でも出土しており、特注品的なものだったのだろうか。これと極めて近似する有台環が、上越市今池遺跡SK24からも出土している。古代Ⅲ期に位置づけられるのもので、井上高明氏は当器種をコップ形須恵器とし、枳のな容器として使用された可能性を提示している（井上高明「コップ形須恵器の考察」『考古学雑誌』第79巻第4号1994年）。器種本来の用途とは別に、その可能性は考えておく必要がある。土師器食膳具については量が少なく、赤彩を施す碗Fと放射状暗紋を内面に施す赤色品の碗F、ロクロ成形で中空となる高坏G、非ロクロの内黒高坏Hが少量存在するのみである。高坏Hは伝統的な地元胎土だが、高坏Gは地元胎土でも新しいB胎土、碗Fは窯場焼成品と予想されるものであり、土師器の窯場生産供給品の初期的な事例と言える。煮炊具は在来型技法のA類とロクロ成形技法のB類が併存しており、量的に拮抗した状況にある。短胴小釜A類は器形や技法でⅠ期との明確な差が認めにくいものだが、胎土に地元B類が確認されることと332のような胴部内外面横ハケ目調整を施す口縁部「く」字屈曲のタイプが出現することが変化と言える。B類は薄手のもので、胴部上半外側口縁ナデ、内面カキ目で、下半では内面からハケ目調整により押し出し、外面で手持ちケズリ調整して丸底にする特徴を持つ。長胴釜は在来型の比率が低く、ロクロ成形のB類が主体的に確認される。在来型Ⅰ類は確認されず、335のⅡ類が典型例と言える。口縁部「く」字屈曲のもので、内外面をハケ目調整する。底部境に粘土織目があり、その部分が薄く作ら

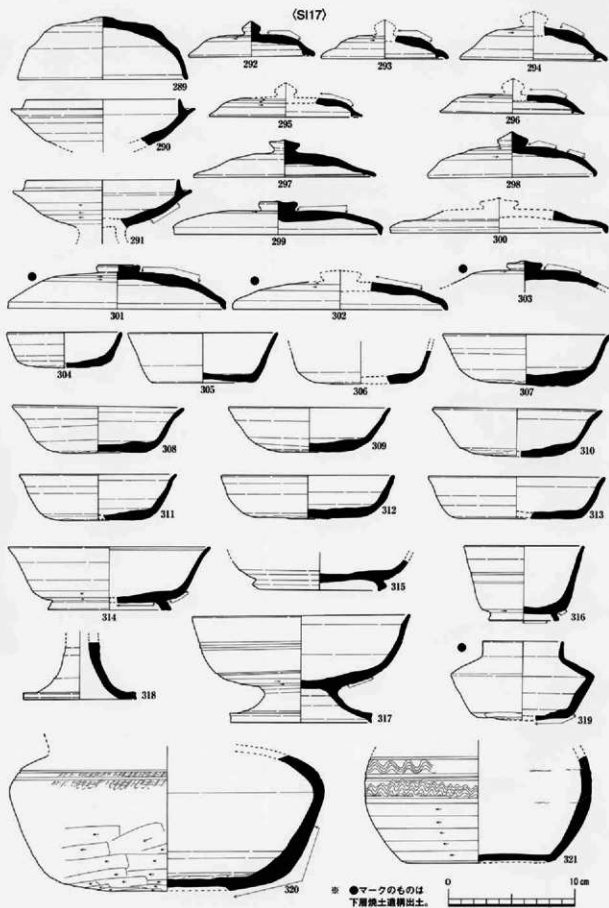


第101図 A地区出土遺物 17 (SI13-1、S=1/3)



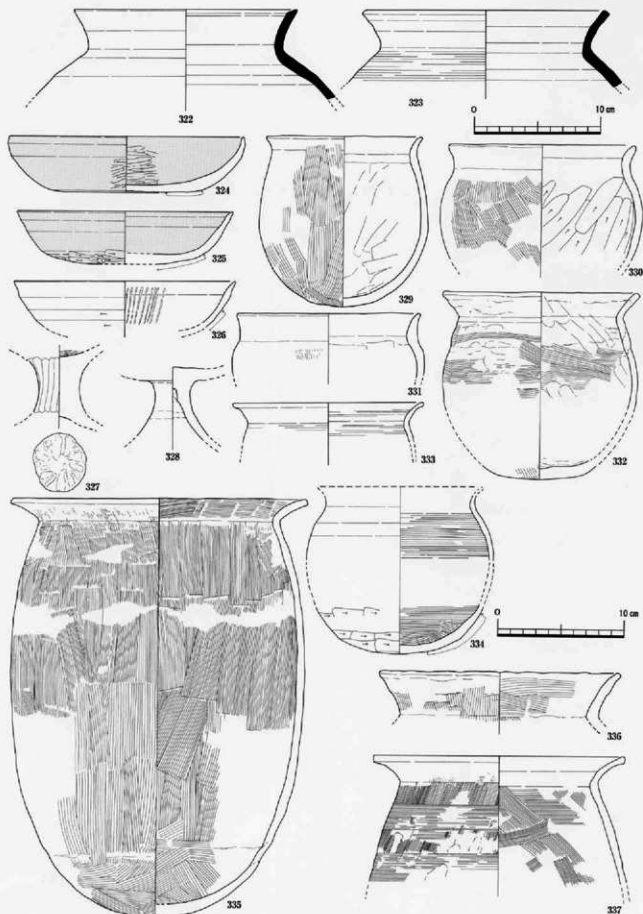
第102図 A地区出土遺物18 (SI13-2、266・267はS=1/4、他はS=1/3)



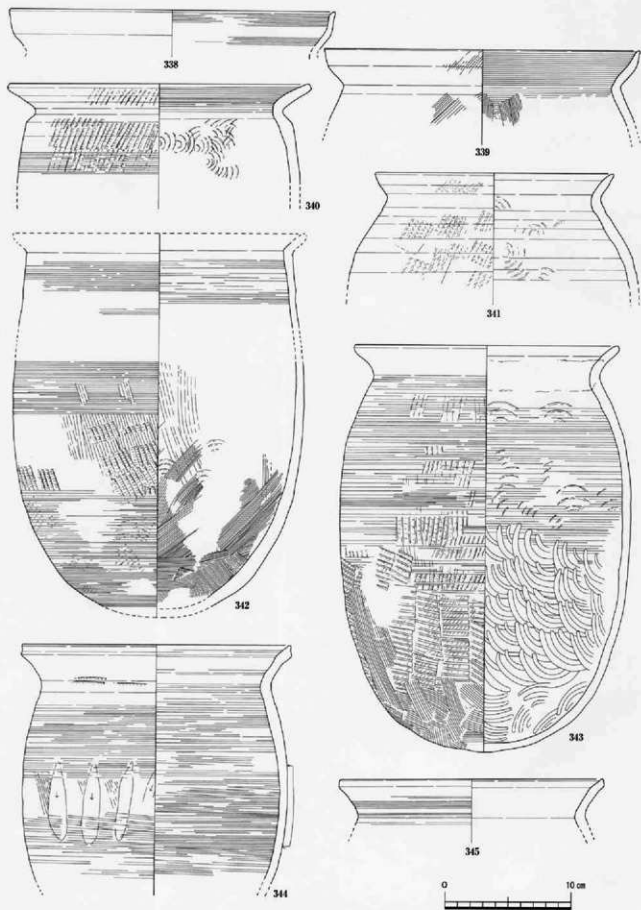


第104図 A地区出土遺物20 (SI17-1、S=1/3)

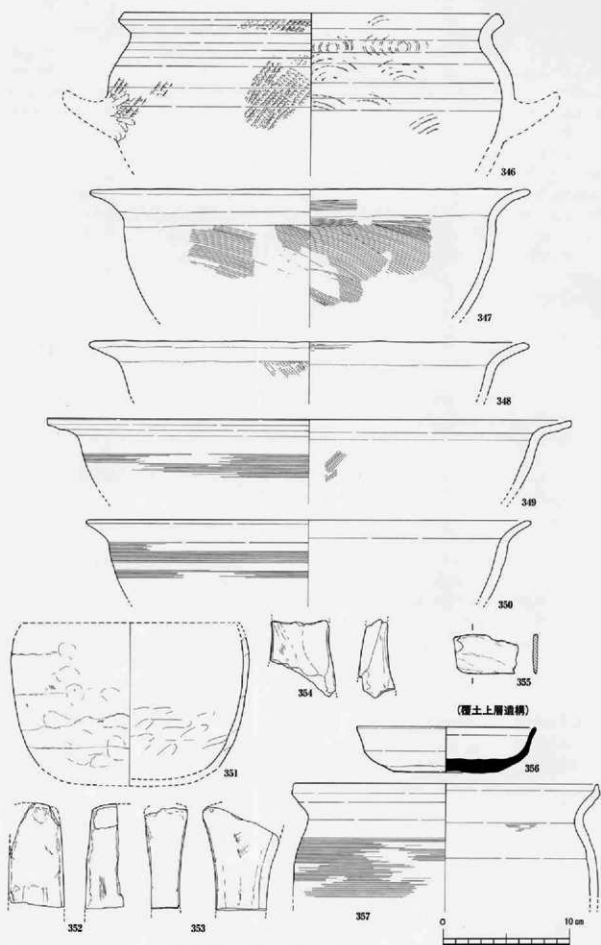




第105図 A地区出土遺物 21 (S117-2、S=1/3)



第106図 A地区出土遺物22 (SI17-3、S=1/3)



第107図 A地区出土遺物23 (SI17-4、S=1/3)

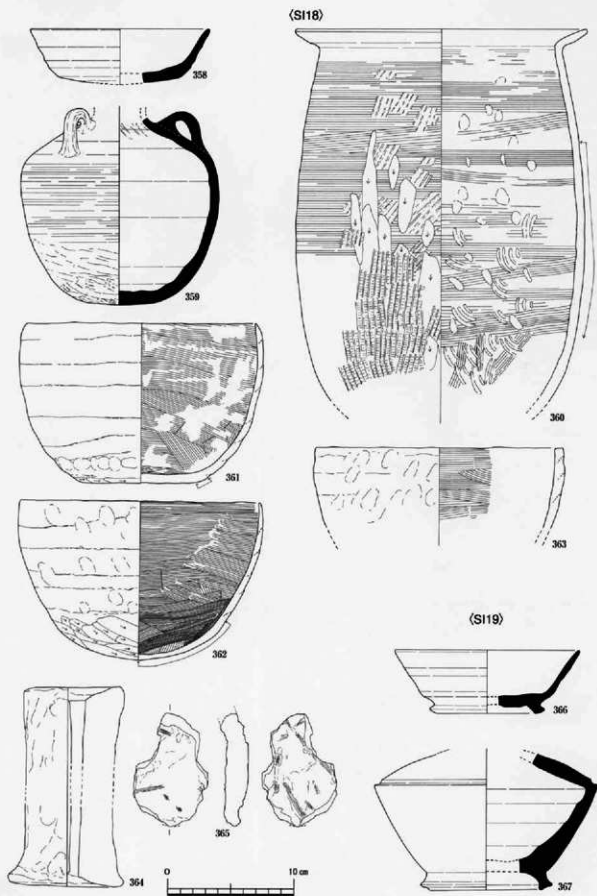
れている点や調整が変化していることから見て、底部を丸底に成形した鉢状土台に胴部を積み上げ成形してゆく技法がとられている可能性がある。また、337は同様の器形を呈する在来型Ⅱ類と見ているものだが、外面の縦方向ハケ目調整後に横ハケ目調整を施すものである。短胴小釜でも見られたものであり、A類のロクロ成形模倣とも考えられる。在来型Ⅱ類以外では336とした内外面粗いハケ目調整を施す種々なタイプと338・339の受け口状口縁部をもつタイプとがある。前者は口縁部の波打つような作りの雑なもので、これまでのⅠ・Ⅱ類長胴釜胎土とは異なる搬入品的な土師器である。後者は前述したが、近江系煮炊具を模倣した在地土師器と予想される。当期におけるロクロ・叩き成形煮炊具は朝鮮系軟質土器とも位置づけられるものであり、当型穴建物資料では量的に目立つ。大きく2タイプに分けられるが、ロクロ型Ⅰ類(340・341・343)が主体的な存在で、胴部長胴の口縁部外反後に端部丸くおさめる器形のもの。成形は胴部上半または口頸部まで叩き成形が施されるもので、その後上半をカキ目調整かナデ調整、その後胴部下半から底部叩き出し成形をする(最終でハケ目調整の入るものもあり)。ロクロ型Ⅱ類(342・344)は口縁部外反後に端部積み上げ成形するもので、胴部上半はカキ目調整で、その後中位から下半を縦ハケ目調整、縦方向ケズリ調整した後、底部叩き出し成形が入るものである。底部叩き出し後にさらに外面カキ目調整、内面ハケ目調整をしており、在来型技法との融合が確認される。本来、このような他地域系煮炊具は本貫地の技法や形態をそのまま写して製作されるものと在地技法との融合の中で製作されるものがあり、後者の中から新たな在地の土師器が生まれてくる場合が多い。後者の存在が後に北陸型煮炊具を生み出す土壌になるものと考えられ、当期にそのような融合形態が見られることは重要と判断する。次に銅網だが、小型銅の名残りかと思われる351の薄手で深身のタイプがあるが、消滅段階と言え、口縁部長く外反する定型化された浅銅が出現する。技法は在来型A類が主体だが、ロクロ成形のB類が「定量出現している。なお、346の深銅はB類技法による新たな器形のもので、把手の取り付け箇所から見て、三角形板状把手を付すものと理解される。当期のB類技法版も同様の把手形態であり、新たな把手形態として、導入されたものだろう。なお、堅穴建物に伴う資料であるかは判断しにくいだが、321とした壺の胴部下半資料は注目されるものである。胎土から搬入品と推察されるもので、外面に黒色釉が掛かる。底面まで厚く付着しているため、意識的に塗布された可能性が高く、塗布材は黄土か赤彩に使用するような酸化鉄を混ぜたドベ状のものとも予想される。胴部中位に飾り波状文・沈線紋をもつなど、装飾を施す特殊な容器である。

#### o. S118

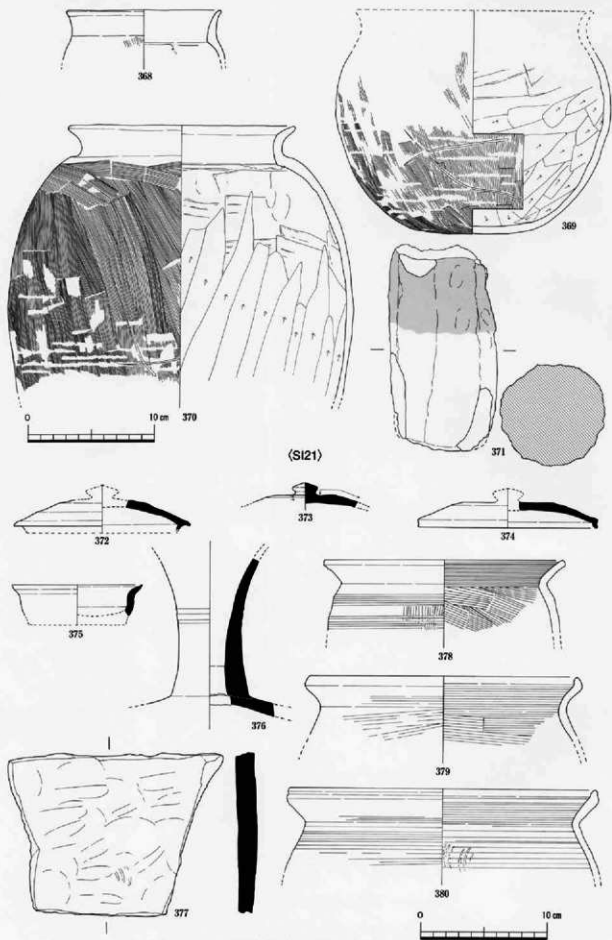
出土土器は少ないが、カマドから360の土師器長胴釜が出土しており、358の須恵器坏AとともにⅡ3期の資料と判断される。長胴釜はB類技法のⅠ類タイプだが、成形叩き後にカキ目調整し、外面下半を縦方向ケズリしてから胴下半の叩き出し成形を行っている。胴部成形叩きの内面当ては指の背を当てており、底部叩き出しには同心円文当て具を使用する。比較的薄手に作られており、焼成もよい。359の須恵器三耳壺は南加賀窯の林タカヤマ支群で確認されるⅠ期のもので、特徴的な器種である。他に、製塩土器が4個体、土製支脚、焼成粘土塊が出土している。製塩土器はいずれも小型銅に器形が類似するような鉢形器形のもので、外面に粘土積層面を残し、内面に横ハケ目調整が施される薄手のものである。地元胎土のものには底部丸底と平底とがあり、丸底は手持ちケズリ、平底には底面にシダ状の木葉痕が残る。また、胎土に骨針を含む北加賀のものも搬入品として存在するが、口縁上端が面を持つ厚手のもので、図示した3個体いずれでも外面ススと内面薄ゴケ状痕跡がある。焼成粘土塊は両面に一部縦線痕跡をもつもので、縁部は破面となるものである。厚手でやや泥状の土が使われており、筆者が焼成粘土塊B類とした土師器焼成に伴う覆い天井片の可能性を持つものである(望月精司「古代土師器焼成坑出土の焼成粘土塊と土師器焼成技術」『窯跡研究』創刊号2005年)。当遺跡では土師器焼成坑が確認されていることから、それに伴う遺物の可能性をもつ。

#### p. S119

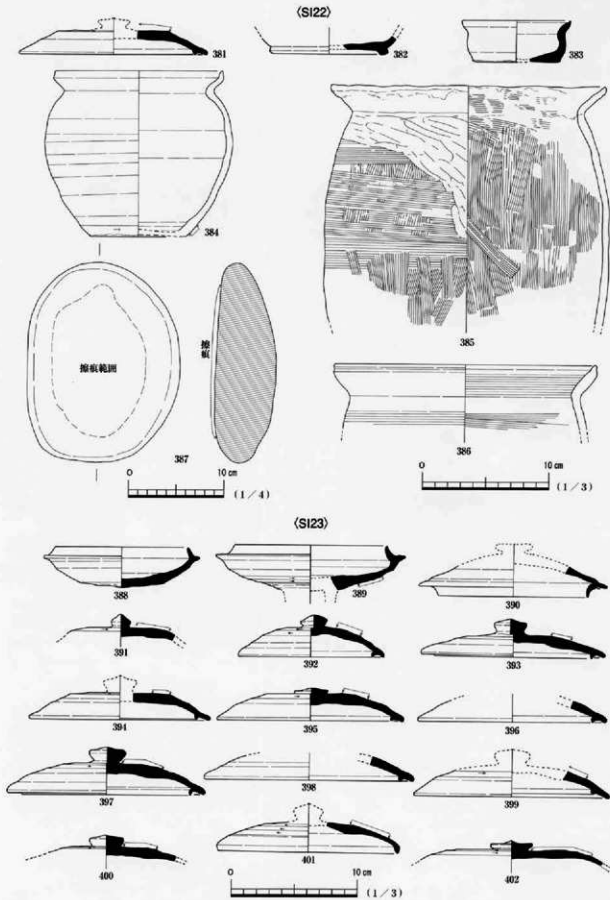
須恵器と土師器の時期が異なり、堅穴建物の帰属時期に混乱があるが、カマドから出土する煮炊具は古代Ⅱ1期の様相のものである。当地区の土師器煮炊具の中では最も古い形態を残すもので、370の胴の張る在来型長胴釜Ⅰ類タイプはⅡ1古段階の念仏林南遺跡の様相に近い。胴部中位外面にヘラ記号「×」をもつもので、369の短胴釜についても、胴部外面に「×」ヘラ記号をもつ。小釜法量とはならない球胴器形を呈すもので、Ⅱ1期新段階には消滅してゆくものである。液体の内容物を煮たコゲ帯痕跡が内面に明確に残る。なお、共存する須恵器はⅡ3期に位置づけられるもので、両者の時期には大きな開きがある。



第108図 A地区出土遺物 24 (SI18、SI19-1、S=1/3)



第109図 A地区出土遺物25 (SI19-2、SI21、S=1/3)



第110図 A地区出土遺物26 (SI22、SI23-1、387のみS=1/4、他はS=1/3)

## q. SI23

覆土から出土する資料は古代Ⅰ1期からⅡ2期まで幅があり、特に中層より上の遺物はⅡ3期以降に位置づけられる。一括性を提示できる資料は床下や床面、カマド周辺及び下層資料のみであり、古相資料である388～390の古代Ⅰ1期に位置づけられるものやⅠ2期に位置付け可能な391・392の須恵器坏Gと414の小型高坏Gを除けば、土師器資料を中心に古代Ⅱ2期のまとまった資料と言える。SI17に近似した様相をもつ資料であり、須恵器食器類では393・404・407・409・411・415・416が該当する。定型化した坏B身が定量存在し、蓋では折り曲げ口縁のものが出現、扁平つまみが定量確認される。返りをもつ蓋が主体的であるのはSI17と同様であり、南加賀地域の特徴と言える。なお、坏B身411の外側面には「十」墨書がある。土師器食器類については比較的多く出土しているが、赤彩を施す有蓋の坏型器種は中上層出土のものであり、427～432の碗Fと438・439の高坏が当期に該当する。碗Fは深身と浅身とに分けられ、深身427は外面回転ミガキ調整、内面放射状暗紋を施すものである。胎土は赤色酸化鉄粒を練り込むもので、同じように外面回転ミガキ調整、内面放射状暗紋と螺旋状暗紋を施す浅身器形の430も赤色土器である。当地区の他の暗紋土師器も同様の傾向があり、意識的に赤彩品とは分けていたものと理解される。赤彩品の場合、発色材を表面塗布することが必要であり、その方法ではうまく暗紋を施すことができなかったのであろう。430には底面へラ切り痕とその上から回転ミガキ調整を施した様子が確認でき、薄手で丁寧な作り、胎土は精選された良質のものである。赤彩の碗Fは、428・429の底部丸底気味器形から体部開くタイプと431・432の口縁部で緩くS字形となるタイプとがある。発色材塗布後にミガキ調整を施すものが一般的だが、428のみはミガキ調整しないもので、塗布した際のハケ工具痕跡が残っている。いずれも須恵器窯場製品であり、428の底面には須恵器へラ記号と同様の先端の突った工具で「×」の記号を塗布後に記している。高坏は内面黒色の高坏Hと高坏Gの破片のみである。煮炊具は在来型A類とロクロ成形B類が併存する。短胴小釜はB類に統一される。ロクロナデの444以外はカキ目調整を持つもので、442は胴部下内面からハケ目調整により押し出し、外面で手持ちケズリ調整して丸底にする。口縁部は薄く長く「く」字屈曲するもので、端部は丸くおさめるのが基本である。長胴釜は在来型の比率が高いが、個々に特徴を持つもので、当期に一般的なⅡ類に該当するものはない。胴部は張らないが、内面へラナデの446や外面粗いハケ目調整で内面へラナデ、頸部括れの弱い雑な作りの447、調整技法は在来型だが、口縁部成形がロクロ成形状で端面形成する448、口縁部内面にロクロヒダ状の段をもつ所謂丹波系の449などが確認される。ロクロ成形B類は胴部叩き成形後にカキ目調整するⅠ類(451)と在来型との融合技法であるⅡ類(450)がある。Ⅱ類は縦ハケ目調整後にカキ目調整し、胴部下半を叩き出し成形するもので、口縁部を丸くおさめる形態のものである。鍋類は口縁部長く外反する定型化された浅鍋のみ確認される。技法は在来型A類主体だが、453の内面にはカキ目調整が入る。次に甔については、須恵質と土師質の両方が出土している。須恵質のものは須恵器同様の胎土、土師質は土師器煮炊具同様の混和材混入胎土である。須恵質はロクロ成形の須恵器的技法によるもので、三角形板状把手を付す。土師質の455は、窯場焼成されたような焼成痕跡を持つもので、内面はハケ目調整だが、外面には叩き成形痕を残す。把手形態は剥離痕跡から棒状把手と推察され、剥離した胴部側には接着のための刺突が密に入る。なお、堅穴建物に伴う資料であるかは判断しにくい。418の鉄鉢形の鉢E、420の胴部上位に刺突をもつ装飾性高い丸底壺、423の平瓶、424の横瓶、425・426の中壺など須恵器貯蔵具が多く出土している。いずれも、当期に位置づけられることに矛盾のない器種である。

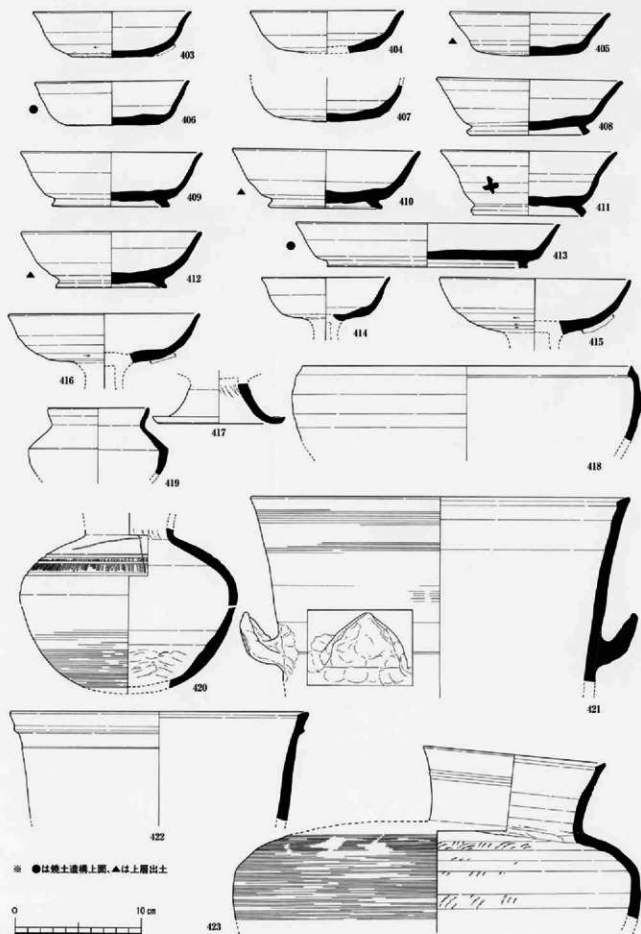
## r. SI24

SI23に切られる堅穴建物で、463～465の土師器煮炊具が堅穴に伴うものと予想されるが、須恵器や466の浅鍋についてはSI23からの混入品の可能性が高い。特に、423の板状把手が付く須恵器については、把手基部が幅広く、三角形板状把手とも異なっており、鳥形甔の尾の部分ではないかと予想する。胴部は叩き成形を伴う扁平な器形を呈するもので、Ⅱ2期の平瓶器形に類似する。SI23からは423の平瓶が出土しており、接合関係の確認はないが、同一個体の可能性を持つものである。

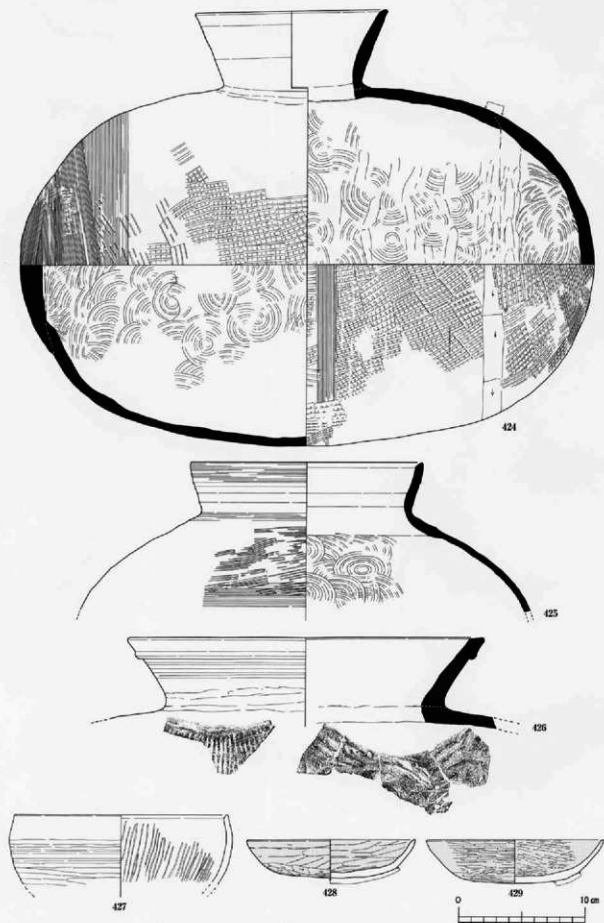
## s. SI26

出土量は極めて少ないが、下層出土の図示したものは時期的にまとまりをもった資料と判断される。467の須恵器坏H蓋は能美窯産、468の坏H身と469の坏G蓋は南加賀窯北群産で、南加賀窯北群の伝統的器種の器形・法量の遺存傾向と能美窯の先進地型式変化に併行した法量・器形変化の動向の差から見て、いずれも同一時期、

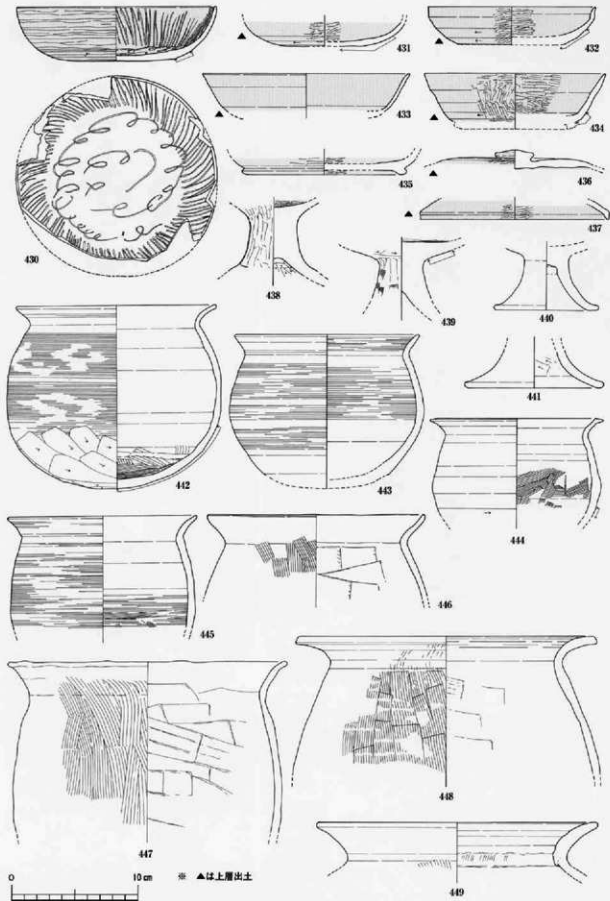




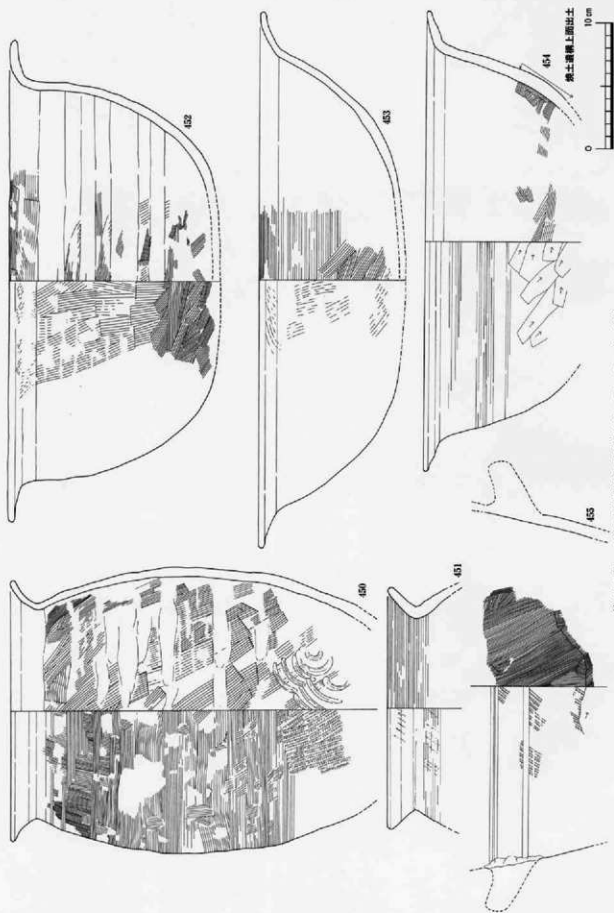
第111図 A地区出土遺物 27 (SI23-2、S=1/3)



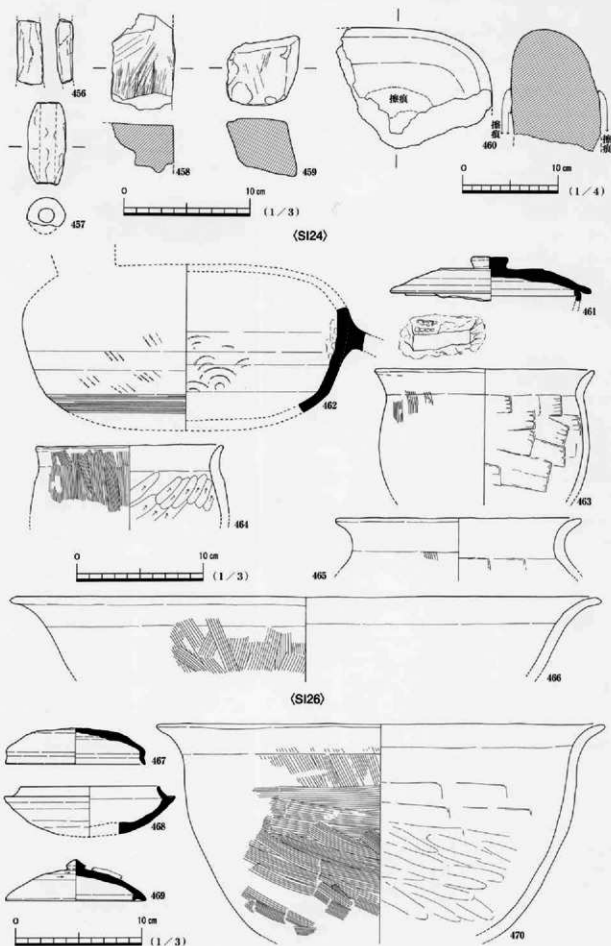
第112図 A地区出土遺物 28 (S123-3、S=1/3)



第113図 A地区出土遺物 29 (SI23-4, S=1/3)



第114図 A地区出土遺物 30 (S123-5, S=1/3)



第115図 A地区出土遺物 31 (S123-6、S124、S126、460のみS=1/4、他はS=1/3)

古代Ⅰ2期に位置づけられるものと見られる。坏G蓋はつまみがしっかりとした宝珠形ではないが、口径11cmのもので、戸津六ヶ丘2号室に同法量のものが出土する。同時期の坏Hは身口径で11cm程度に分布しており、器形的にも468と類似する。能美窯では同時期、坏Hは極限状態まで小型化しており、能美3期古段階に位置づける河田山6号墳の坏H身は身口径9cm程度となり、扁平化している。467の蓋が当型式に入るものと言え、能美窯でも坏Gは469的な器形を呈す。南加賀窯と能美窯の併行関係を示す貴重な資料と位置づけられる（望月掲掲2004年論文）。また、これに伴って土器器浅鍋が出土しており、口縁部がまだ短い点や深身を呈する点など、定型前の様相を見せる。ただ、Ⅰ期の広口小型鍋的なものから法量は大きくなって、浅鍋としての器種を成立させている。Ⅰ2期の良好な資料と言えるだろう。

#### t. SI28

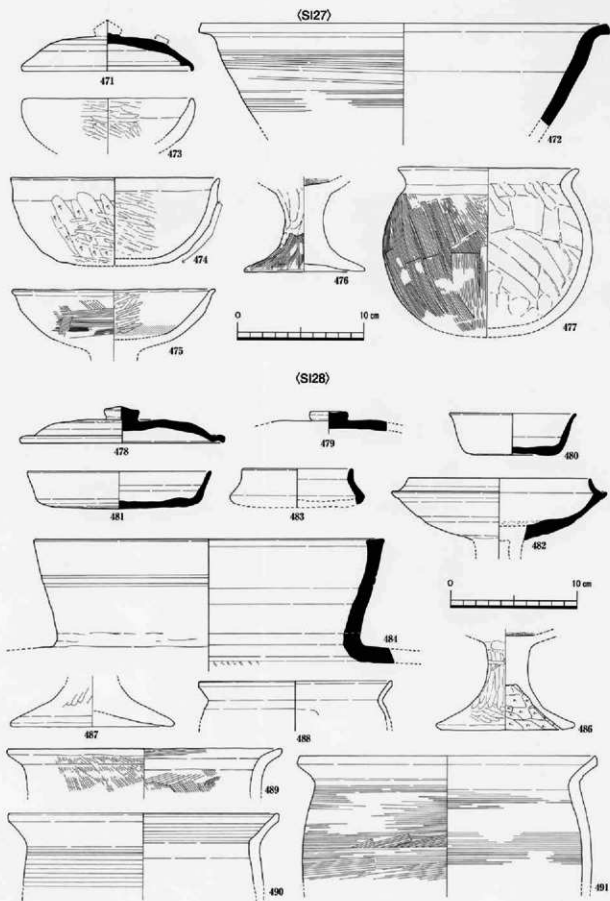
覆土層に古代Ⅰ期～Ⅱ1期頃及び古代Ⅴ期頃の遺物が混在するが、下層から床面、掘り方出土の資料は古代Ⅲ期にははまるとまる資料である。479・481の須恵器食膳具器形、法量は矢田野山Ⅰ号窯のⅢ次窯資料に近似しており、Ⅲ期でも新相に位置づけられるものである。土器器煮炊具はロクロ成形のものに限られ、488の短胴小釜はロクロナデ調整の薄手のもので、頸部を「く」字屈曲後口縁部でやや積み上げる形状をもつ。490～493の長胴釜は全体的に厚手ではあるが、口頸部形態は同様の器形へ統一される様相を持ち、胴部調整もカキ目調整に統一され、在来型のハケ目調整を施さなくなる。494の浅鍋も口縁部積み上げ形状を呈しており、土器器煮炊具は北陸型煮炊具確立段階の様相をなす。これら煮炊具は須恵器窯場での生産を思わせる資料ではあるが、胎土観察からはⅡ期以来の地元胎土と大差なく、地元生産品の可能性が高い。他に、当型穴資料として提示したものに須恵器大甕がある。SI23やSI25、SI33、SK35、SB16及び包含層など様々な箇所と接合関係にあり、大甕廃棄の様相をうかがわせる。底部付近に広めに磨耗痕跡を持つもので、使用状態を物語る資料と言える。なお、覆土層からは土製支脚と鉄製品が出土する。支脚は中突脚タイプで、側面にヘラ記号をもつもの。鉄製品は厚い鉄板状の鍛造未成品で、型により切断された痕跡を持つ。

#### u. SI29

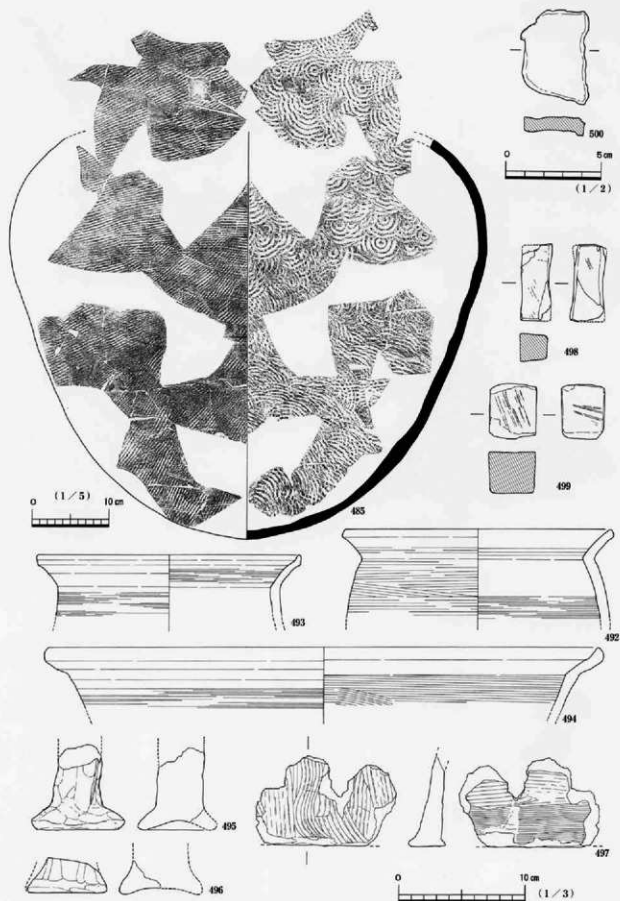
型穴内へ廃棄された遺物が極めて少なく、良好な状態で出土したものは502・503の須恵器坏Gの完形品セットのみである。他に図示したものは上層出土であり、共存資料とは言い難い。須恵器坏Gは南加賀窯南群産と推察されるもので、身口径が8cm台を測る最小径段階の資料である。身底面の調整は雑で、立ち上がり形状など坏Gの典型的資料であり、蓋のつまみ形態や返りの微弱的な形状など、金比羅山5号窯資料が類似する。当窯では須恵器坏Hは出土せず、坏G生産へシフトした段階の資料であり、古代Ⅰ2期の典型例と位置づけられる。

#### v. SI31

508・513・514・522は古代Ⅰ2期からⅡ1期古段階に位置づけられる資料だが、他は概ね古代Ⅱ2期に位置付け可能と判断する。須恵器食膳具では509の坏A、510・511の坏B身が該当する。510の坏B身は足高で、底面ケズリ調整をする薄手の作りのものであり、古手の印象を受けるが、他はⅡ3期的な様相のものであり、Ⅱ2期の中でも新しく位置付けておくのが妥当だろう。土器器は赤彩の椀Fとロクロ成形の高坏、煮炊具では短胴小釜と長胴釜がある。518は使用痕跡をもつものだが、他は使用痕跡をもたない焼成製品で、黒斑が多く確認される。焼き弾けのような焼成剥離痕跡をもつものが多く確認されている点や、叩き痕跡に同一工具の複数個体を確認できる点から、当型穴内に土器器焼成した際の破損品を廃棄したものと理解される。当遺跡内で確認される当期の土器器焼成坑はB地区検出のもの1基だけだが、これらの資料は遺跡内での土器器生産を裏付ける資料となるだろう。土器器焼成製品は、517の短胴小釜と520～526の長胴釜とあり、いずれも口縁部を丸くおさめる形態をもつ。長胴釜は口縁部まで内外面の叩き成形痕跡を残すもので、最終工程で底部叩き出しを行うものである。なお、526の長胴釜底部は厚手で大型のものであり、別器種の可能性もある。胎土は地元B類とした古代Ⅱ1期以降に出現してくる在来型Ⅱ期の胎土や朝鮮系軟質土器とした初期のロクロ成形品胎土と同一であり、当形態の土器器へ転換する段階で、当遺跡近隣の土器器生産が始まったことを物語る資料となろう。なお、土器器生産関連遺物として512の須恵器窯場使用の置台が出土している。坏B底部破片に窯土が溶着したもので、破面にも土が付着しているため、窯の中で置台として使用されたものだろう。Ⅰ2～Ⅱ1期古相の資料については、508の坏G蓋と513の蓋が目される。坏G蓋は内面全体に薄く墨痕のあるもので、当期の転用使用を示す貴重な資料である。蓋については、胴穿孔部の突出する東海系型であり、南加賀窯でも東海系型を生産していたことを物

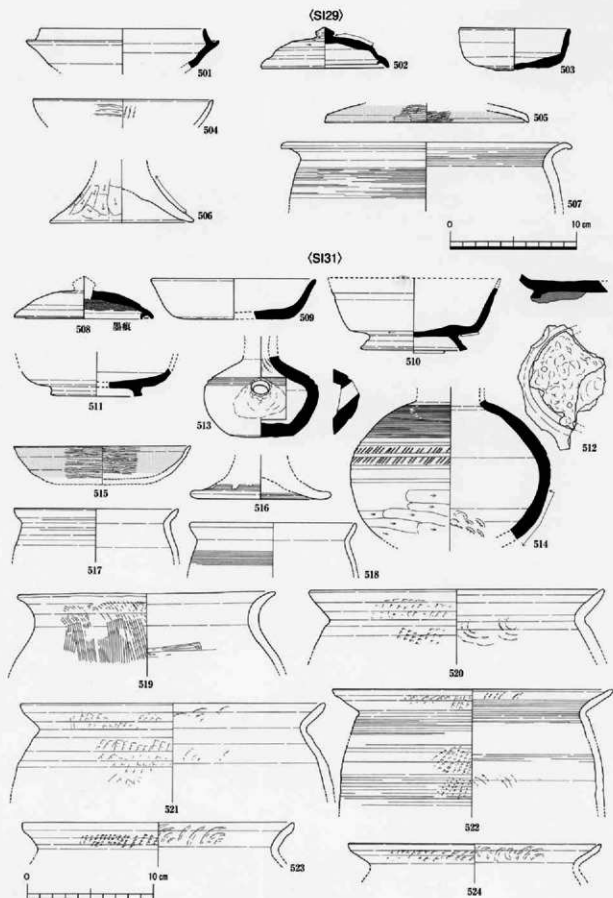


第116図 A地区出土遺物32 (SI27、SI28-1、S=1/3)



第117図 A地区出土遺物33 (S128-2、485はS=1/5、500はS=1/2、他はS=1/3)





第118図 A地区出土遺物34 (SI29、SI31-1、S-1/3)

語る。当遺形態は、古代Ⅱ2期からⅡ1期にかけて、越中や越前の窯で生産が確認されており、東海の窯との併行関係を考える上での重要な資料となる（望月前掲2004年論文）。

#### w. SI32

須恵器2点を図示しているが、いずれも当堅穴建物に伴うものとは考え難い。平飯はⅡ2期に位置づけられる大型のもので、ほぼ完形のもの。平底飯としたものは搬入品（陶器窯？）と考えられるもので、時期比定困難なものである。つまり、食器具は土師器で構成されるものであり、輪Hで占められる。内面黒色のとんだ状態のもので、器形などから見て、古代Ⅱ1期に位置づけられる。煮炊具はいずれも在来型A類のもので、伝統的な技法のⅠ類に該当するものである。胴張りの深鍋の存在、小型鍋の存在など、当期の器種組成が揃う。ただ、カマド内から出土する535・536の長胴釜については、当期のものとしては、胴の細長いタイプであり、Ⅱ2期の様相に近い。かなり厚手ではあるが、537のような浅鍋器形も存在することから、Ⅱ2期の範疇で考えるのが妥当かもしれない。なお、当堅穴建物からは、他に538の製塩土器と540の鉄器が出土している。製塩土器は底部に棒状脚の付く形態が予想されるもので、内面上位にコゲ帯状の痕跡があり、白色の付着物がうすく確認される。胎土は骨針を含む北加賀地域のものであり、焼塩容器として持ち込まれたものと理解される。鉄器は細長い刀子状製品であり、柄から開付近と刃部中位が遺存する。両開形態のもので、柄はかなり長く作られている。開の部分に革か木質状のものが巻き付いている。

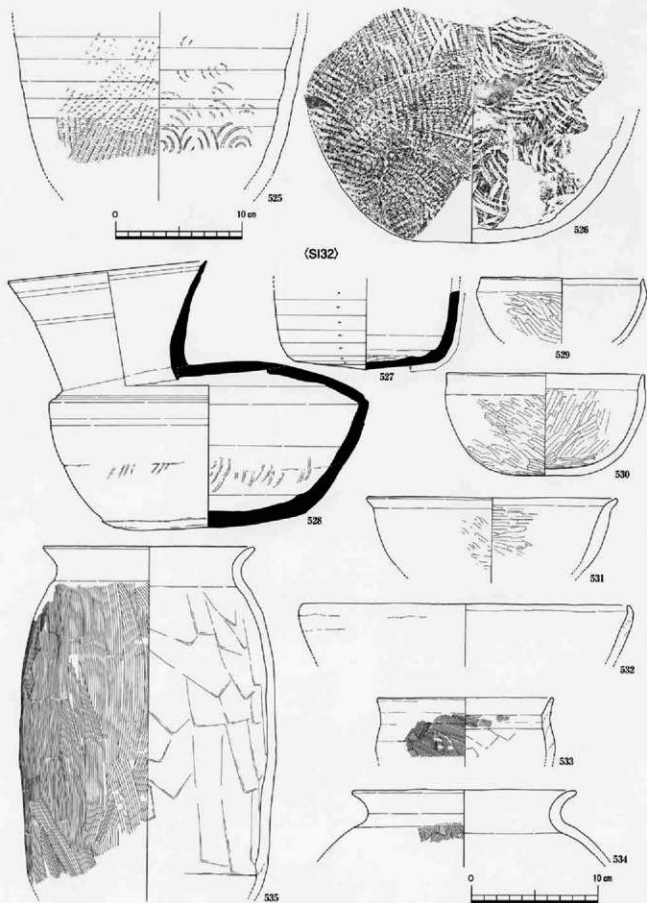
#### x. SI33

堅穴建物の西側開付近に掘られたピットと覆土上層から中層に古代Ⅱ2～Ⅱ3期の資料が多く存在しており、図示したものの大半がこれに該当する。堅穴建物廃絶後の資料であり、541・542・545・546・549・550・552など良好な須恵器一括資料と言える。坏Aから坏Bへ組成主体を移行させてゆく段階の資料であり、Ⅱ3期の最古段階資料とも位置づけられる。当期資料と思われる甕形土製品がともに出土しており、周辺の包含層資料等と接合し、復元の図を提示している。叩き成形による甕形土製品で、下端での大きさが51cmを測る比較的大型のものである。水平天井部をもち、掛け口部分を切り取ったもので、倒立成形段階に筒抜け状にせず、平底底部を作ってから細積み叩き成形したものと理解される。成形叩き後に中程に沈線を遣らし、天井に掛け口部分を切り取って、天井外面から側縁部にケズリ調整したもので、美口部の切り取りは台形状になり、底が貼り付けられる。底形状はあまり上を向かず、水平に取り付けられるもので、胎土は当期の煮炊具地元胎土であるB類が使われる。SI31で述べたように、B類は当遺跡周辺で生産された可能性のある土師器であり、当甕形土製品についても同様と理解される。なお、当甕の使用痕跡だが、内面に部分的にススが付着しており、甕として使用された痕跡をもつ。ただ、被熱状態は短胴小釜のような器面が荒れるほど強くはなく、頻繁に使用するものではなかったであろう。このような叩き成形を施す甕形土製品は、他にも当遺跡から出土しており、南加賀窯跡群でもⅡ3期に位置づけられるものが生産されている。しかしながら、当資料のような平坦な天井部形状を持つものは確認例がなく、特殊なものと位置づけられる。このような天井部形状を持つ叩き成形の甕形土製品は、大阪府寝屋川市長保寺遺跡などで出土が確認される。5世紀後半代のもつと見られており、この遺跡での朝鮮系軟質土器のまもった出土から、朝鮮系統の形態、技法によるものとの見方が妥当とされている（寝屋川市教育委員会歴史シンポジウム資料「失われた古代の形」1997年）。

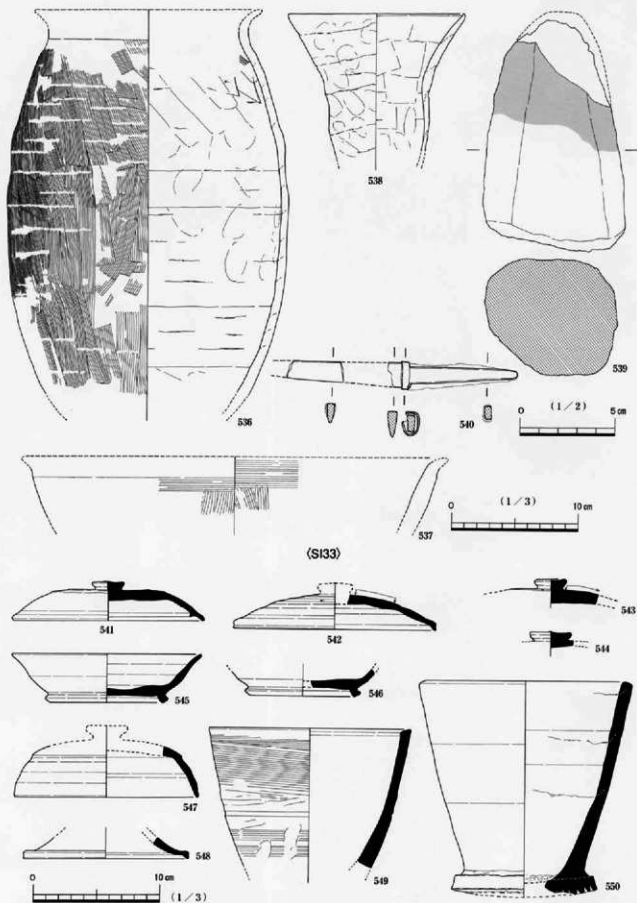
次に、当堅穴建物に伴う資料について述べる。須恵器では547と548の高坏、土師器では553の輪H、554・555の小型鍋、556の短胴小釜、557の長胴釜、559の深鍋、562の飯が該当し、古代Ⅱ1期に位置づけられるものと見られる。全て在来型技法のもので、輪H器形や長胴釜の器形など、比較的古い印象を受ける資料が多い。須恵器食器具が含まれていないことも同様であり、古代Ⅱ1期でも古段階に位置づけられる可能性を持つ。

## 2. 掘立柱建物

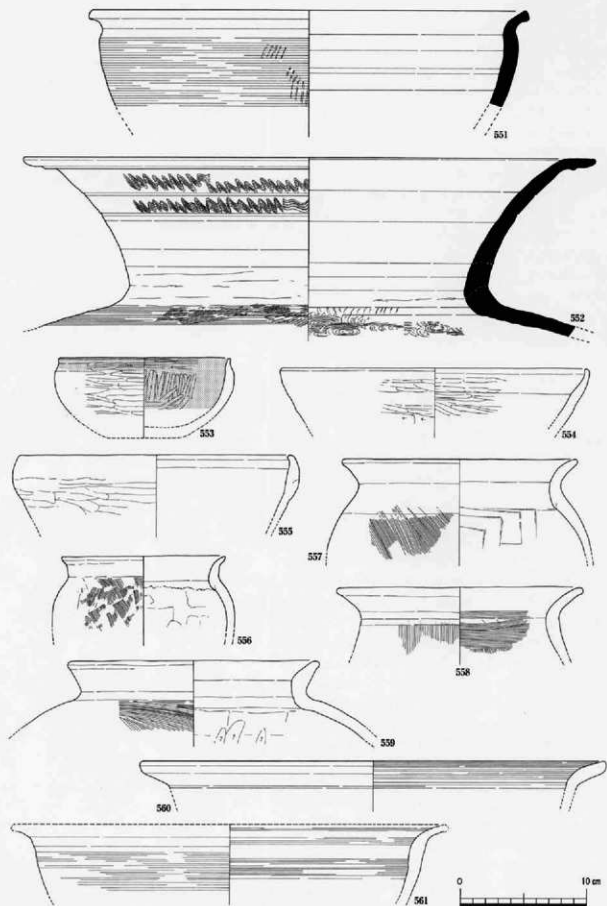
掘立柱建物出土遺物は少なく、まとまった資料提示がなされるものはないが、SB10とSB11の資料についてのみ述べておく。SB10は古代Ⅱ1期以降の資料で、特にP4からは中世Ⅱ1期の輪が2個体出土する。どちらも内黒品で、581は内面ミガキ調整のあるもの、580はミガキ調整を施さない底径の小型のものである。前者が中世Ⅱ1期、後者はⅡ1～Ⅱ2期に位置づけられる。次に、SB11の資料についてだが、当掘立柱建物のP12からはSI31で提示した焼成破損土師器煮炊具の小破片がまとまって出土しており、多くのものに焼け弾けのような焼成剥離痕跡



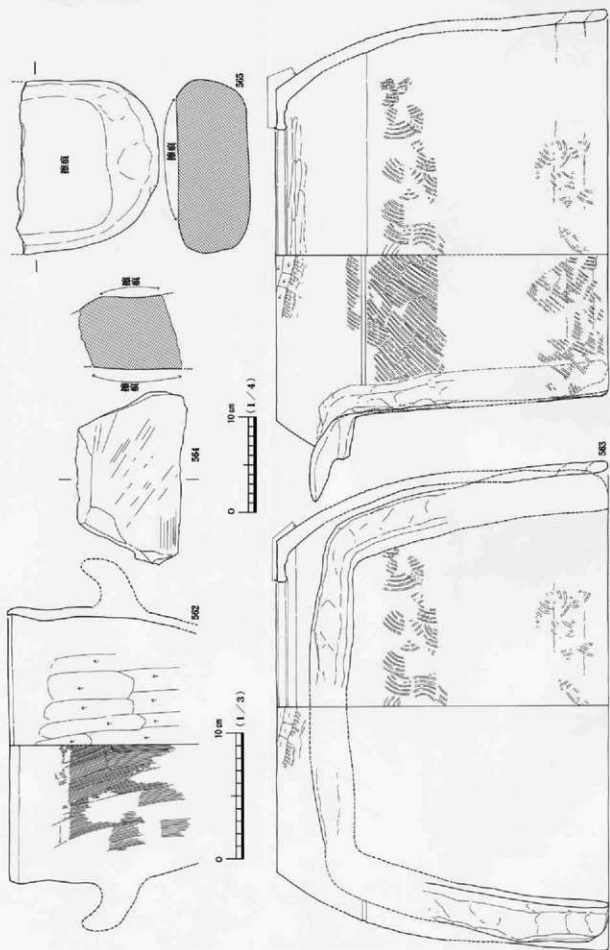
第119図 A地区出土遺物35 (SI31-2、SI32-1、S=1/3)



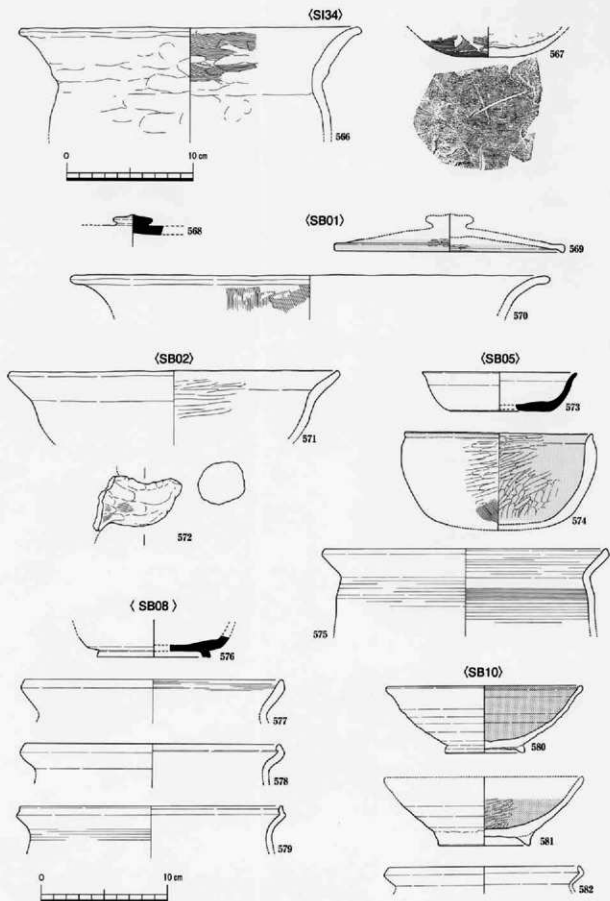
第120図 A地区出土遺物36 (SI32-2、SI33-1、540はS=1/2、他はS=1/3)



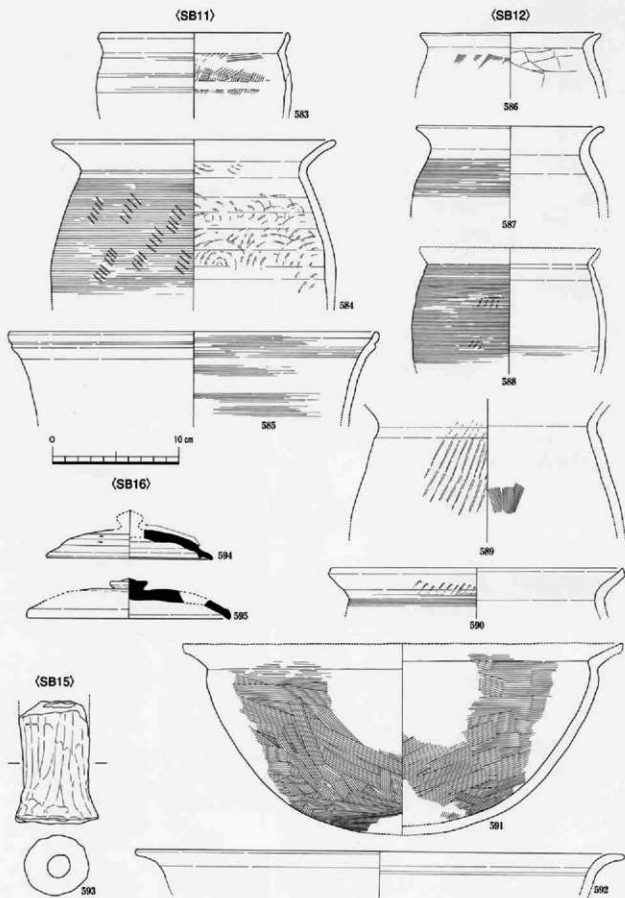
第121図 A地区出土遺物37 (SI33-2、S=1/3)



第122図 A地区出土遺物 38 (S133-3、562のみS=1/3、他はS=1/4)



第123図 A地区出土遺物39 (SI34, SB01, SB02, SB05, SB08, SB10, S=1/3)



第124図 A地区出土遺物40 (SB11、SB12、SB15、SB16、S=1/3)



が見られる。叩き痕跡からSI31と同様のものと理解される。

### 3. 土坑

土坑からは8,640点の土器を出土している。須恵器が26%、土師器が74%で、器種構成では食膳具が13%、煮炊具が71%、貯蔵具が16%となる。堅穴建物よりも貯蔵具率が高く、その分、須恵器の率が高くなっている。以下では、出土量の多い遺構を中心に説明を加える。

#### a. SK05

堅穴建物の掘り方土坑となる可能性の高い資料であり、ほぼ古代Ⅲ期にまとまる土器が出土している。須恵器杯Bの法量分化が確立される以前の段階のもので、598は手付深鍋状器形を呈す須恵器鉢である。三角形板状把手を付すもので、胴部叩き成形を施す。胎土に砂粒が多く含まれているが、泥和材的なものではない。なお、600の土師器飯だが、ロクロ成形の小型品で、外面縦ハケ目調整を施す。大きき的には短胴小釜とセットで使われたものだろう。外面は被熱による剥落が顕著で、内面下位に黒い付着物がある。

#### b. SK06

当地区の古代遺構の中では最も新しく位置づけられるもので、古代Ⅳ2期に位置づけられる。遺物が少なく、様相提示のできるような資料ではないが、須恵器、土師器とも南加賀窯産と推察される。

#### c. SK07・SK10

古代Ⅲ期に位置づけられる土坑資料である。両者の土坑に関連性はないが、いずれも大型土坑と位置づけられるもので、一緒に述べておく。須恵器は南加賀窯産のもので、矢田野向山1号窯のⅡ次窯段階からⅢ次窯段階の須恵器食膳具に近似する。共存する土師器はSK07ではⅠ期からⅡ2期頃のものだが、SK10ではⅢ期に位置づけられる長胴釜、浅鍋、飯が出土する。いずれもロクロ成形で、南加賀窯産は浅鍋のみであり、他は地元B類に該当する。長胴釜は頸部「く」字屈曲後に、口縁端部に面形成するもので、胴部上半に叩き成形は見られず、紐積み後にカキ目調整を施すものである。カキ目調整前に胴部外面に縦方向のハケ目を施す工程を挟むものもあり、胴部中位以下を外面は縦ケズリ調整、内面は縦ハケ目調整で薄くした後、最終工程で底部叩き出し成形を行う。全体的に厚手で重量感がある。浅鍋は胴部カキ目調整のみの厚手のもので、矢田野向山1号窯出土のものと同器調整などがよく似る。飯は底部筒抜けタイプで外端突出するタイプ。胴部下端の内面に黒褐色のコゲツキが見られる。他に小型平底の製塩土器、輪の羽口がある。製塩土器は地元胎土のもので強く被熱し赤く変色する。

#### d. SK09

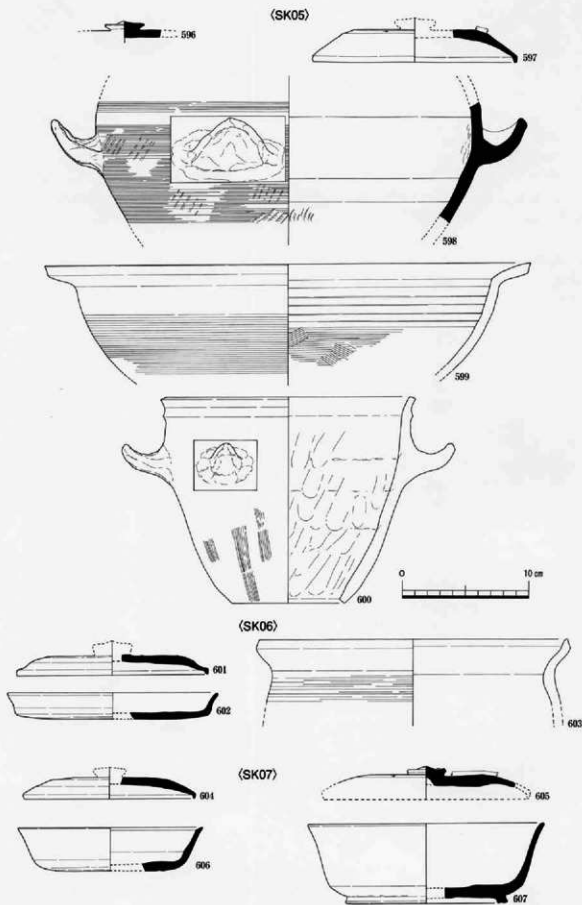
出土遺物は少ないが、古代Ⅳ1期に位置づけられる数少ない土坑資料であり、取り上げておく。須恵器はまだ扁平器形を残す杯Aと大型無蓋の短頸壺。土師器はロクロ成形の長胴釜と飯が出土する。両者とも南加賀窯産の胎土で、飯の口縁部は有段状のものである。なお、当土坑からは図示していないが、棒状支脚付き製塩土器の底部付近破片と思われるものが出土している。

#### e. SK11

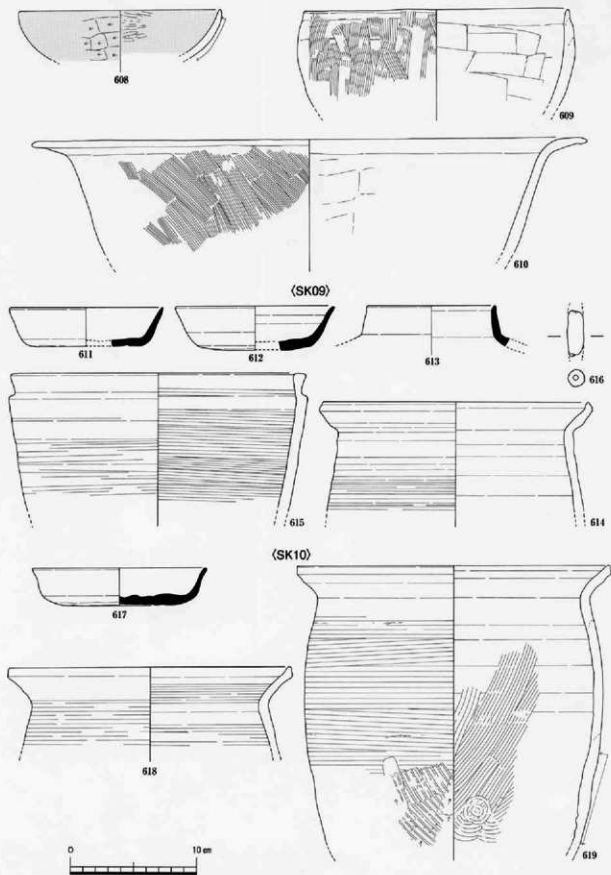
多量の土器が廃棄された大型土坑である。古代Ⅰ2～Ⅱ1期に位置づけられるものとⅡ2期に位置づけられるものがあり、前者には626～628の杯G・A蓋、633～635の杯G身、640・641の貯蔵具類など須恵器が、後者には629～632の杯A・B蓋、636～637の杯A・B身、638の飯などの須恵器に加えて、642～648の土師器類が該当する。土師器は内面放射状暗紋を持つ赤彩の椀F、大型の坏部形態をもつ高坏Gの内面黒色品、ロクロ成形の釜類。丸底鉢状器形を呈す製塩土器などがある。また、注目される遺物として、639の須恵器壺？と649～652の土製支脚がある。須恵器壺？は南加賀窯産だが、精選された胎土のもので、内外面ともにミガキ調整が施される丸底のものである。底部のみのため、壺にしてあるが、内面をミガキ調整するものであり、鉢状の器種かもしれない。土製支脚については、4個体出土しており、いずれも中空タイプの小型類型のものである。被熱により表面が赤色変化しているもので、厚手の651は地元B類胎土、他の厚手のものは地元A類胎土である。

#### f. SK14・SK17

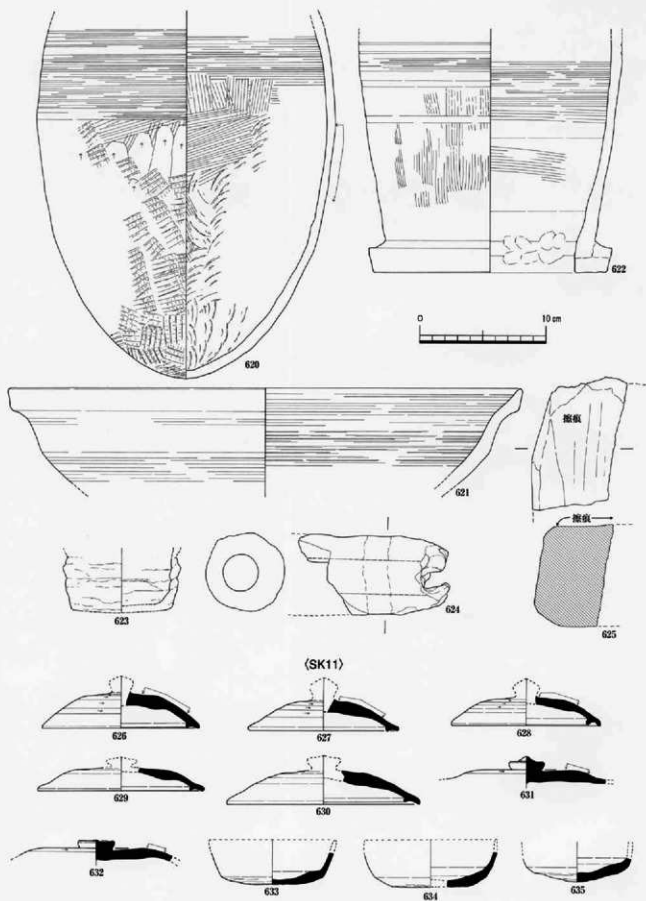
いずれも遺物量の少ない土坑資料だが、時期のわかる土師器椀Aが出土しており、それとともに注目される出土品があるので述べておく。SK14出土の赤彩土師器椀Aは底面平坦な器形を呈すもので、体部下半から底面まで回転ケズリを施すものだが、形状から底部糸切りと判断されるものである。大型法量タイプで、まだ扁平状の



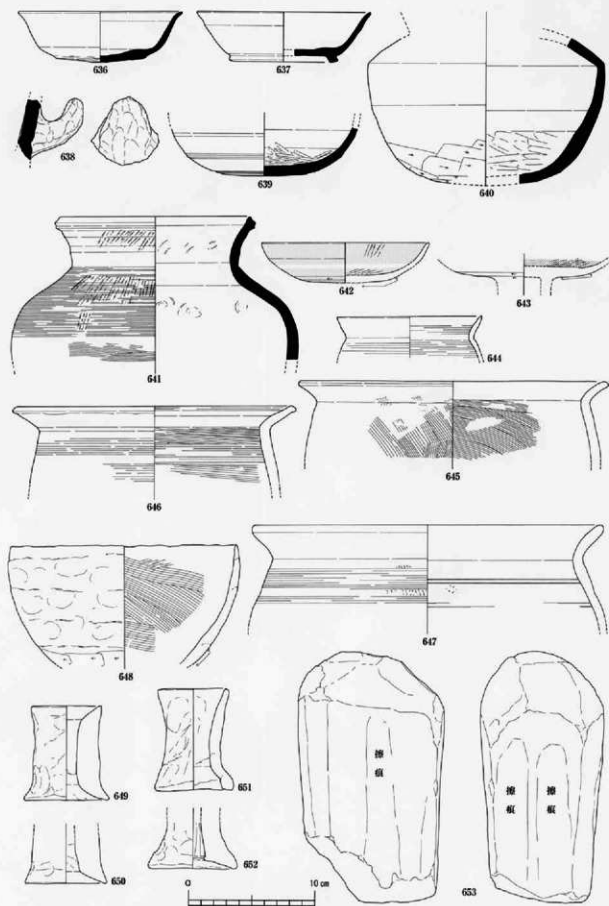
第125図 A地区出土遺物41 (SK05・SK06・SK07-1、S=1/3)



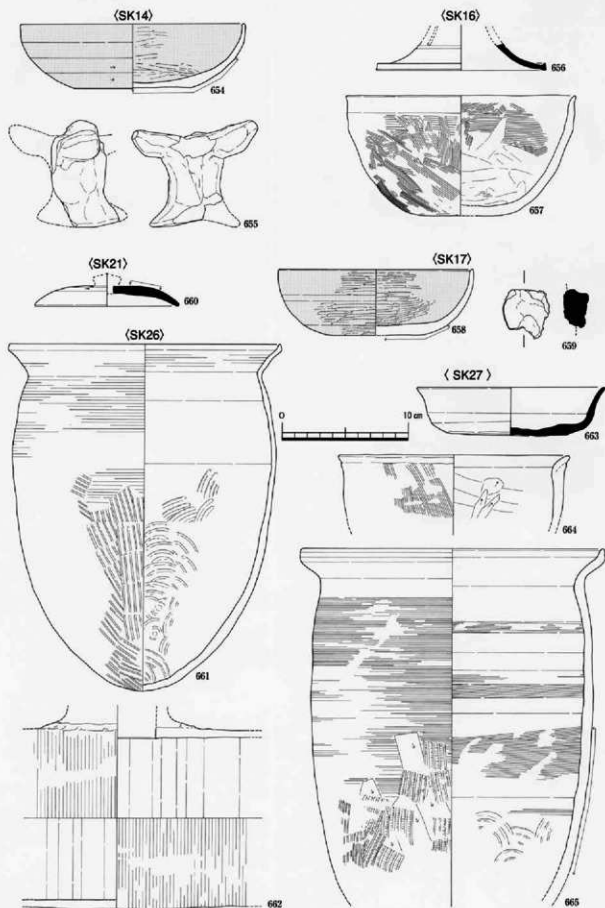
第126図 A地区出土遺物42 (SK07-2、SK09、SK10-1、S=1/3)



第127図 A地区出土遺物43 (SK10-2、SK11-1、S=1/3)



第128図 A地区出土遺物44 (SK11-2、S=1/3)



第129図 A地区出土遺物45 (SK14、SK16、SK17、SK21、SK26、SK27、S = 1/3)

器形を呈する点から見て、Ⅲ期からⅣ1期に位置づけられる資料と言える。ここからは655の土製支脚が出土している。中実脚タイプで、頂部は2つ以上に分かれている。欠損状態から4つの突起があるようにも見えるが、一つは小さなものであり、三叉タイプの範疇で考えられるものと見る。次に、SK17だが、赤彩土師器輪Aは大型法量のもので、やや口縁部への開きが弱くなったものである。Ⅳ2古期に位置づけられる。なお、当土坑からは須恵器窯跡の窯壁片が出土している。小片ではあるが、溶解した面をもつ。須恵器のかませ材として製品に溶着した窯土や置台片ではなく、何らかの意図ないしは偶然で、当遺跡に持ち込まれたものだろう。須恵器貯蔵具専用焼台の出土と同様の意味を持つ資料と判断する。

#### g. SK26

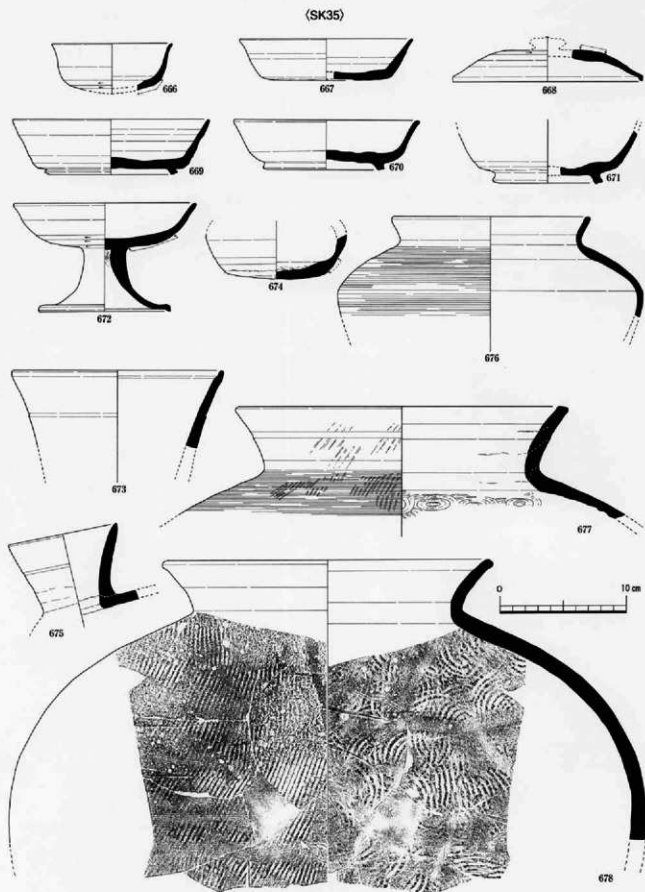
Ⅳ2新时期からⅤ1期頃に位置づけられる土坑で、遺存状態のよい土師器長胴釜が出土している。南加賀窯産のもので、胴部は紐積み後にカキ目調整、胴部下半以下を叩き出し成形するものである。全体的に薄手に作られており、口縁部は上に短く引き出されている。当土坑からは662の土師質の円筒形土製品が出土している。外面にカキ目調整が施されるもので、南加賀窯産である。二ツ梨一貫山窯跡では当期の土師器焼成坑群が存在しており、ここで多くの円筒形土製品が焼成されている。当資料のように、円筒形の胴部に円孔を穿ち、その部分に横瓶のような口を付ける、横口付き円筒形土製品がある。屈曲部の繋ぎの機能を持っていたのだろう（望月精司「円筒形土器について」『二ツ梨一貫山窯跡』小松市教育委員会2002年）。

#### h. SK35

大量の土器を出土する大型土坑であり、一部古代Ⅱ1期に位置づけられるものもあるが、概ね古代Ⅱ3期からⅢ期に位置づけられる資料である。須恵器食膳具は坏B身に671のようなⅡ3期でも古手のものがあるが、坏Aも含め、Ⅱ3期からⅢ期古相の中で考えられるもので、全体的に平類は扁平な器形となっている。672の高坏GはほぼⅡ3期に終了する器形のものであり、脚部が短めである特徴は、Ⅱ2期の様相を残している。食膳具では定量の赤彩土師器が存在する。684・685の坏B蓋身はⅢ期のもので、679・683の碗Fは概ねⅡ3期に位置づけられる。碗FはⅡ2期の器形から口径が大きくなって全体的に扁平化しており、口縁部に682のような短く外反する器形のもの加わってくる。赤彩の高坏はなく、中空脚で坏部の大きく開く、内黒高坏Gが存在するのみである。この高坏は非ロクロ成形の地元胎土のもので、この時期頃に境に終了するものと見られる。煮炊具は全てロクロ成形B類であり、在来技法との融合が見られるものが多い。687の短胴小釜は外面縦ハゲ目調整後に内外カキ目調整し、底面を内外面のハゲ目調整で丸底気味にしているものである。689の長胴釜は成形叩き後にカキ目調整、その後縦方向のハゲ目調整、そして最終工程の胴部下半叩き出し成形を行うもので、口縁部を丸くおさめる器形をもつ。短胴小釜も含め、Ⅲ3期でも古手に位置づけられようか。これらの胎土は地元B類だが、Ⅲ期に位置づけられる688・690・691は、南加賀窯産と思われる胎土であり、この頃が土師器供給の転換時期とみなされる。貯蔵具は中壺をはじめ、鉢F、小型壺、平瓶、壺Fなど多くの器種が確認される。完形や半完形品で出土するものはなく、他遺構や包含層と接合する事例が多い。概ねⅡ1期からⅢ期の範疇でおさまるものである。他には、土製支脚と鉄製品が出土している。土製支脚は中空タイプと中実タイプがあり、比較的小型のものである。鉄製品は刃幅の狭い刀子状の刃部破片のものである。

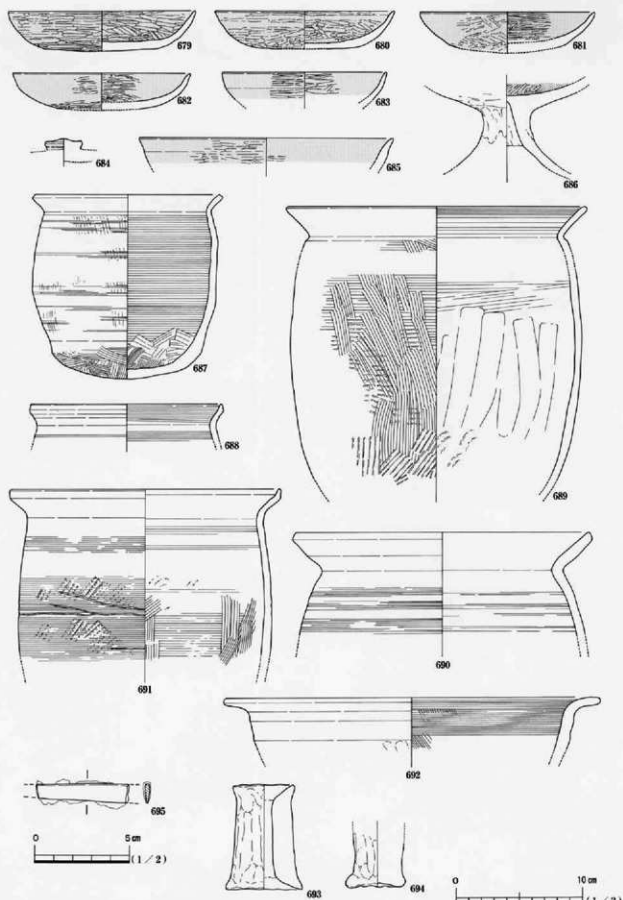
#### i. SK36

土器を大量廃棄する大型土坑であり、古代Ⅰ期に位置づけられる696～699・709を除けば、概ね古代Ⅱ2期におさまるものと理解される。須恵器食膳具は坏Aと坏Bで占められ、Ⅱ2期でも新相に位置づけられそうである。700の大型坏B蓋はⅢ期に下る可能性もあるが、Ⅱ2期の大型法量の可能性も否定できない。土師器食膳具は放射状暗紋の入る赤色土師の碗Fが確認され、煮炊具ではロクロ成形のB類があるが、主体は在来型A類のⅡ類タイプである。胎土は地元B類に限られ、716の口縁部が長く伸びるタイプは当期の特徴的な器形と言える。なお、715は胴部器形などから見て、深鍋と分類されるものである。当器種はⅡ2期までは確認されるが、その後消滅し、Ⅱ2期にはロクロ成形の新たな深鍋に移行する器種である。器形的には遡る可能性もあるが、内面ハゲ目調整やB類胎土で比較的薄く作られる点など、Ⅱ2期に該当する特徴を持つものであり、当期まで在来型技法の手付深鍋が存続していたことを示すものだろう。浅鍋については、当期では初期事例となるロクロ成形のものが、胴部下半にケズリ調整を伴う。口縁部特徴などからⅡ2期の範疇と考えられる。

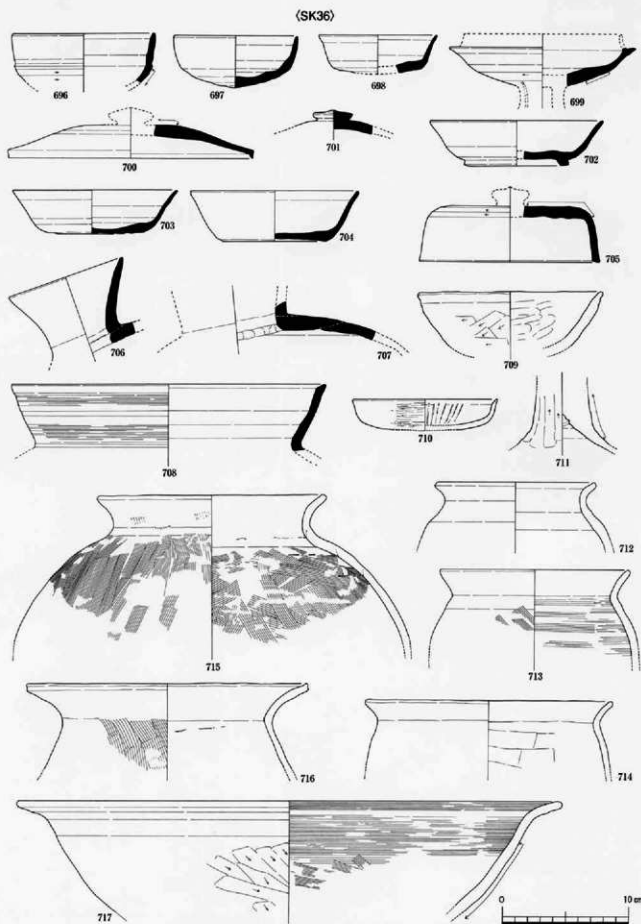


第130図 A地区出土遺物46 (SK35-1、S=1/3)

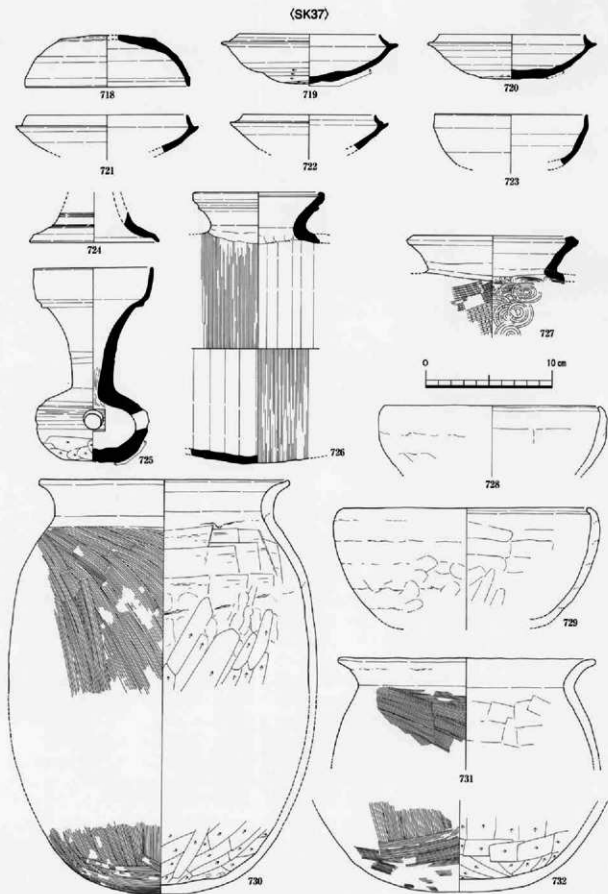




第131図 A地区出土遺物47 (SK35-2、695のみS=1/2、他はS=1/3)



第132図 A地区出土遺物48 (SK36、S=1/3)



第133図 A地区出土遺物49 (SK37-1、S=1/3)

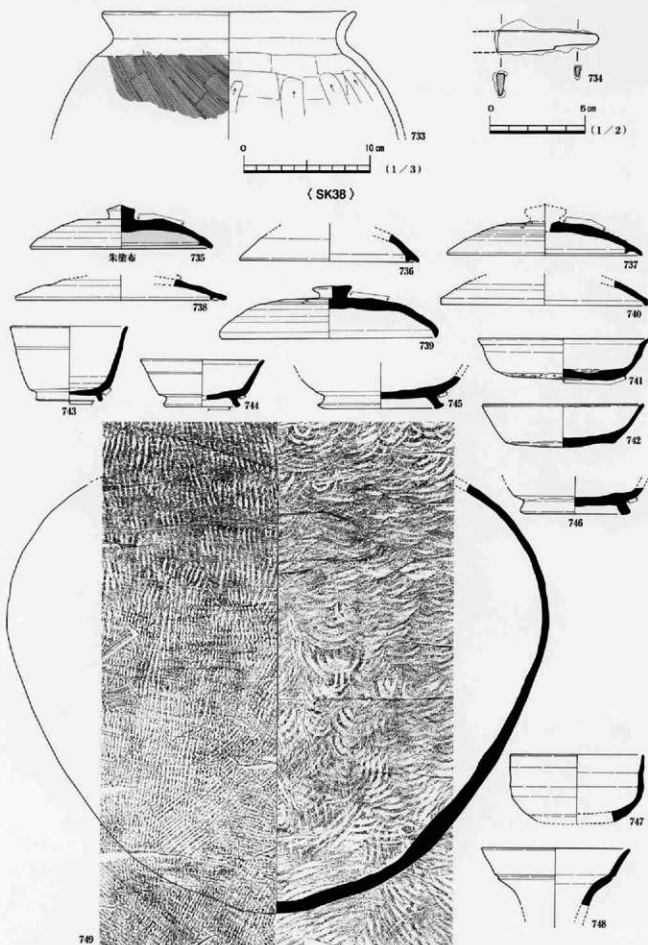
## j. SK37

古代Ⅰ期に位置づけられる大型土坑資料である。須恵器食器はほぼⅠ期新段階にまとまる様相があり、南加賀窯南群産と能美窯産とが量的に拮抗する。坏Hは全体的に薄手で、身口径で10~11cm台に主体を置き、立ち上がりの内傾する器形が目立つ。723の鍋b身の出土、724の高坏脚はかなり小型化し、726のロクロ成形する小型タイプの横板が存在する点など、まさしく古代Ⅰ期新段階の様相である。唯一確認される南加賀窯北群産は725の甕のみで、口頸部が依然として長い形態をなす。土師器食器は破片で内黒輪Hが数点出土するのみであり、堅穴建物の食器具構成とは様相が異なる。小松市の念仏林南遺跡でも確認されたことだが、土坑資料での須恵器率の高さは何か要因があるものかもしれない。これは掘立柱建物を主体に構成する平地集落の様相との対比の上でも共通することで、遺跡のクラスを示すものとは言い難いように感じる。土師器煮炊具については、小型鍋と長胴釜、深鍋が出土する。在来型のⅠ期タイプで、長胴釜は胴が長くなる、Ⅰ期新段階に位置づけられるものである。730の外面には広くスス痕跡が残るが、底面の中央にはススの付着がなく、丸く変色した部分がある。カマド支脚の接触痕跡と考えている。なお、深鍋の底部と考える732は733の胴部上半部破片と同一個体と考えているものであるが、この外底面中央にも同様の支脚痕跡があり、カマドでの使用を予測させる。この深鍋の内面には底面中央部分を除いて薄いコゲの付着が確認される。短胴小釜の口縁部に付くようなものであり、何か水分の多いものを煮た際の灰汁のようなものがこびり付いたものだろう。その他の出土品としては734の鉄製品がある。刀子の柄部分から刃部中程にかけてのもので、片岡タイプのものである。刃の幅は狭く、小型のものである。

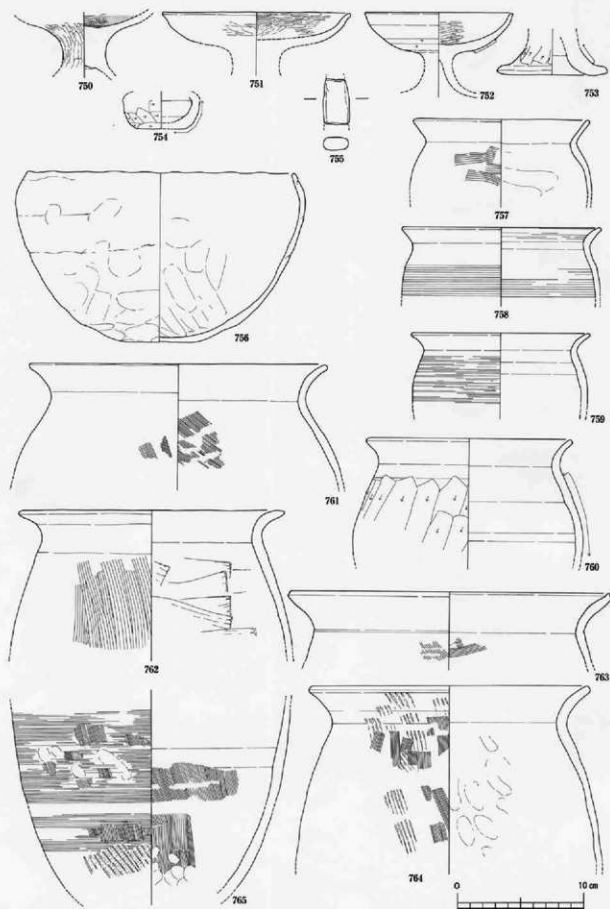
## k. SK38

土器を大量に廃棄する大型土坑ではあるが、747・748の須恵器が古代Ⅰ期に位置づけられる以外は、Ⅱ期にまとまる良好な基準資料である。食器具は須恵器が大半で、土師器は暗紋の施される赤色土器や赤彩の碗Fが出土するが、破片のため、高坏のみ図示してある。須恵器食器具は坏Aと坏Bで構成される。坏Aは身口径13cm程度のもので、扁平な器形をしており、法量の小さな一群が消滅した段階と見る。蓋も比較的扁平形で、返りは微弱化している。坏Bは高台の踏ん張る形態のもので、定量存在しており、口縁部折り曲げの蓋が定型化した段階と言える。以上の様相から見て、Ⅱ期でも新相と位置づけられよう。なお、735の坏A蓋だが、内面全体にベンガラ状のもので赤色塗彩するものである。一見、朱墨の墨溜めかとも考えられたが、赤色塗布は口縁部まで及んでおり、意識的に塗ったものと判断した。内面にのみ彩する意図は不明だが、朱墨溜め容器とは考え難いものである。また、有台坏で口径9cm台の最小法量をもつものが2点出土している。743はSI17で出土したものと極めて法量、器形、作り、胎土の似た精緻な作りの特殊品で、コップ形須恵器の可能性を示したものである。有蓋の焼き方をしており、内面に使用痕跡が確認されないなども同様の特徴と言える。この深身器形に対し、744は扁平器形を呈すもので、これについては無蓋で焼成されている。高台の作りや底面調整など類似する様相があり、底部沈線を施す点、全体的にシャープな作りをする点でも、同様の意図をもつ器容と位置づけられる。この有台坏を構造的な機能を想定するコップ形須恵器と考えるとすれば、器容がこれだけ異なるのはやはり問題があり(743は1.74d、744は1.18d)、用途を特定することに躊躇する。土師器食器具は、中実鍋をもつ非ロクロの高坏Hと須恵器系の高坏Gがあり、前者は内黒品、後者は通常品である。高坏Hは内外ミガキ調整を基本とし、坏部器形は皿状に浅くなる。器形的には須恵器高坏Gの大量法の器形に近い。高坏Gはそれよりも小型のもので、外面はロクロ成形によるが、内面は手持ちのミガキ調整が施される。

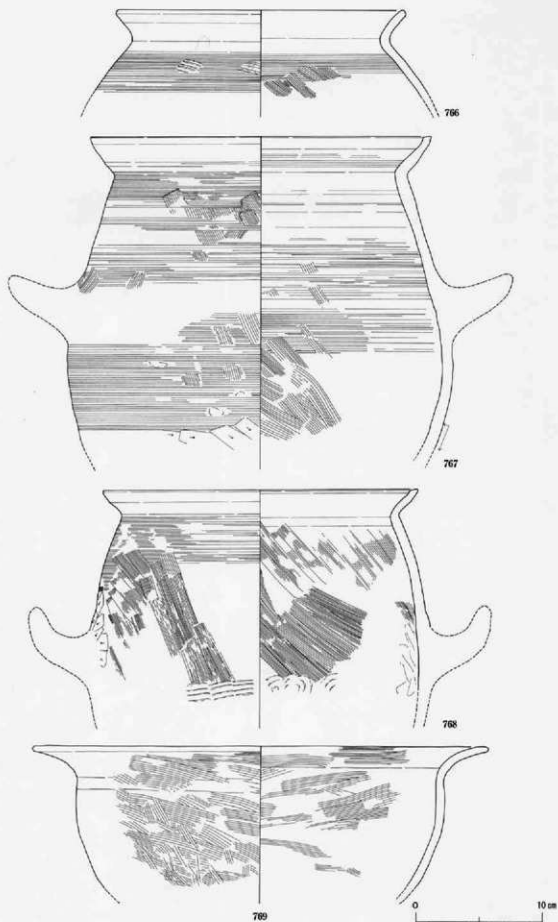
煮炊具は、短胴小釜、長胴釜、手付深鍋、浅鍋、甕で構成される。Ⅰ期に普遍的に見られた小型鍋はないが、薄手で口縁部内湾のものが存在する。同様の器種とも考えられるが、器形は当期に出現してくる鉢形器形を呈す製塩土器に近く、その可能性もある。被熱痕跡が顕著で、内面上位に薄いコゲ痕跡を持つ。短胴小釜は地元胎土B類にほぼ統一される様相で、成形はB類が主体を占める。757の在来型A類は頸部「く」字屈曲の薄手のもので、B類に近い。ロクロ成形のB類はカキ目調整のものとロクロナデ後に外面に縦方向ケズリを施すものがある。長胴釜でもロクロ成形と在来型とが併存する様相にあり、在来型でも古い様相を持つ762についても、胴部の張らない器形となる。内面ハケ目調整のⅡ期タイプが主体的で、叩き成形やロクロ調整のB類技法を併用する融合型が主体を占める。なお、765は須恵器同様に高火度還元焙焼成された叩き成形を持つ長胴釜だが、在来技法である縦方向のハケ目調整後にカキ目調整、底部叩き出し成形するものである。つまり、このような在来技法



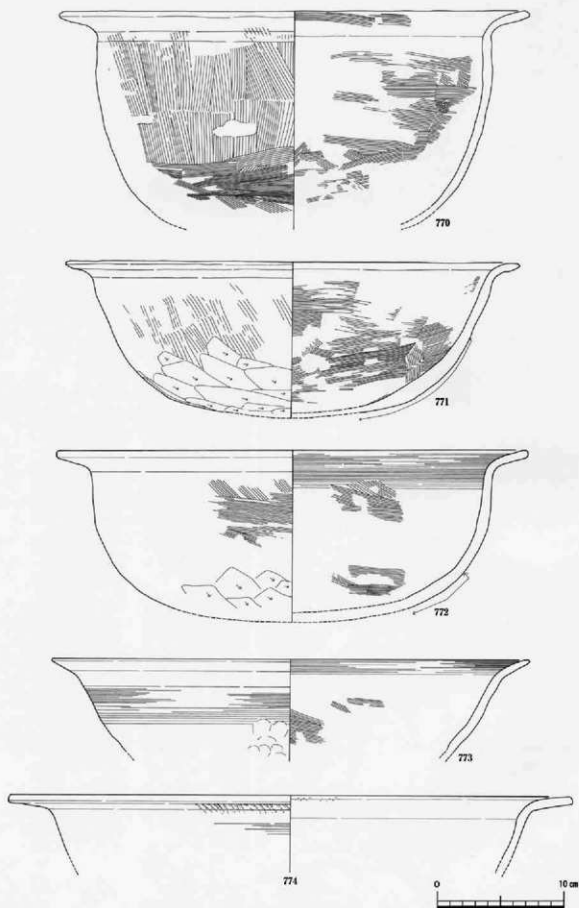
第134図 A地区出土遺物50 (SK37-2、SK38-1、734はS=1/2、他はS=1/3)



第135図 A地区出土遺物 51 (SK38-2、S=1/3)



第136図 A地区出土遺物52 (SK38-3、S=1/3)



第137図 A地区出土遺物 53 (SK38-4、S=1/3)



とロクロ成形技法との融合型と言える土師器煮炊具が須恵器窯で焼成されていたことを示すものであり、胎土は須恵器と同様のものが使われている。次に、手付深鍋についてだが、2個体確認されており、胎土や器形特徴などからはほぼ同様の形態をなすものと理解している。把手が遺存しておらず、形態は不明だが、胴部痕跡から見て、在来型の棒状把手ではない可能性が高い。口縁部は受け口状を呈す近江系統の長胴釜に類似するもので、767の胴部下半をケズリ調整する点でも共通性がある。しかしながら、両者ともカキ目調整を施し、768については胴部下半に叩き出し成形が伴う。当期に出現するSI17で出土したような深鍋と比較すると、全体的な器形は明らかに在来型系統にあり、在来型にロクロ成形を取り入れたものと見るのが妥当と考える。在来型深鍋の終焉的なものないしは移行期のものと見ることが可能である。浅鍋は出土量が多く、定着の様相を示している。叩き成形を伴うものは限られ、在来型技法が主体を占める。在来型でも、内外面をハケ目調整のみで仕上げる従来のものに、外面胴部下半から底面にかけてケズリ調整を施すタイプや胴部上半カキ目調整を施すロクロ成形融合型が加わり、以降、定着の様相を見せる。口縁部を長く外反させる器形など、当資料は浅鍋の定型化が確立し、以降、普遍化する成形技法が出現してくる点で、Ⅱ2期でもかなり新相に位置づけられる資料と言える。以上に対し、概は全くの在来型技法によるもので、把手形態も牛角状と言える伝統的形態を保持する。ただ、薄手となる点や胎土がⅠ期のものとは異なる点で、当期に位置づけている。

なお、土器以外では777の石製紡錘車が出土している。Ⅰ期に見られた滑石製紡錘車とは異なり、大型のもので、重量も71gと倍近い。石材も、軽石状の凝灰岩質であり、実用的な印象が濃いものとなっている。

#### 4. ビット及び包含層

ビット出土、包含層出土資料を一括して述べる。遺構としてのまとまりのあるものではないため、古代土器及び土製品、中世土器、石製品、鉄製品の項目に分けて述べる。

##### a. 古代土器及び土製品

包含層出土の古代土器については、121ページと139ページで数量や構成の概要を述べているため、ここでは須恵器と土師器の各時期の様相変化、特殊土製品などの説明を行うこととした。

##### 〔須恵器〕

〔当地区最古資料について〕遺構出土の須恵器は、概ね古代Ⅰ1期新段階以降と見ているが、包含層資料では、古段階に位置づけられる資料がある。同じ法量でも伝統的な法量を残しながら南加賀窯北群産須恵器は除外視して考える必要があるが、能美窯産の805坏H身や798長脚二段三方透かし高坏、南加賀窯南群産の799・800坏H蓋は、古段階に位置付けて問題ないだろう。しかしながら、包含層資料でも、古段階に位置づけられるものは僅少であり、当地区での集落成立は新段階以降とするのが妥当である。

〔Ⅰ2～Ⅱ1期須恵器について〕包含層資料では意識的にⅠ2期からⅡ1期にかけての食膳具を破片であっても図示したが、遺構資料も含めて、前後の時期に比べて量的に少ないのは明白で、時期幅を同等におくことに疑問を持っている。この点については前掲論文（2004年望月論文）を参照していただくとして、当期の坏Hと坏Gについて述べておく。Ⅰ2期は坏H、坏Gとも最小口径を測る時期で、能美窯産では81の身口径9cm前後の坏Hが確認される。これと同時に位置づけられる南加賀窯北群産808は身口径10cm前後であり、これと共伴して身口径が10cm以上を測る坏Hが主体的に存在する。能美窯は口径の縮小が早い段階に見られる窯場で、身口径10cm程度の809はⅠ1期新段階に位置づけられるものと考えている。Ⅰ2期に坏Hと共伴する坏Gは口径に生産地による差異は見られない傾向を持つ。窯によって数量に差はあるだろうが、主体的な存在になる以前の段階と見る。坏Gが主体を占めるのはⅡ1期であるが、当期は同じ返り蓋の伴う坏Aが出現する段階で、蓋での厳密な識別は困難と言える。図示した坏Gの一部はⅡ1期のものだが、坏Aの中でⅡ1期に位置づけられる資料の存在も含め、Ⅰ2期からⅡ1期の坏G・坏Aは数量的に少なく、位置付けが困難なものである。古墳や横穴資料などの当時期の坏G資料に比べて集落での資料の少なさが当器種のもつ意味なのかもしれない。なお、当時期に伴うものとして、胴穿孔部の突出する東海系属（878）が確認される。南加賀窯南群産と思われるもので、SI31資料とともに南加賀窯で定量生産されていたことを示す資料である。

〔Ⅱ2期～Ⅳ期の須恵器食膳具〕包含層資料における時期ごとの食膳具量推移については既に述べたとおりだが、図示した須恵器食膳具資料を見ても、Ⅱ3期以降も定量の土器が存在していることがわかる。Ⅳ期以降に定

着する盤類が定数存在していることやV期に出現する新たな器形の坏B類の存在など遺跡としての存続を物語っている。VI期に入ると、やはり量は少なくなるが、ビッドから単体で出土するVI期の坏B身783の存在など、VII期も含め、遺跡としてはやはり存続するのだろう。

**(鉢類や貯蔵具類、特殊容器類)** 様々な貯蔵具類が出土しており、遺構資料として提示したもののうち、特に大型貯蔵具類については、包含層出土のものと接合するものが大半を占める。器種としてはIII期以降に増加してくる長頸瓶や短頸壺などの器種が少なく、I期からII期に見られる横瓶や提瓶、平瓶、壺などの確認が多い。特に壺の出土量は多く、I期からIV期頃のもの様々な法量で出土している。鉢類も各種あり、879の鉢は古い時期に位置づけられる形態をしている。特殊容器としては882の足基部破片がある。三足容器と見られるもので、足の付く箇所に突帯が通る。胴部器形は胴張り器形の壺状を呈しており、三足の獣脚が付される羽釜状の器種ではないかと考えている。灰白色を呈すやや還元焼成の甘いもので、内面が瓦質とも言うような吸炭のような焼き上がりとなっており、その点でも火舎の機能が想定される三足羽釜の可能性を示唆する。

#### (土師器)

ビッド及び包含層から出土する土師器は少なく、特に記すことはないが、941の広口小型鍋と942の羽釜について述べておく。広口小型鍋は半完形品で、厚手で内外面ともミガキ調整を施すものである。外面にススと顕著な被熱痕跡、内口頭部に薄いコゲ帯痕跡を残すなど、短胴小釜同様の使用痕跡をもつ。羽釜はロクロ成形の薄手のもので、南加賀窯産である。同様の器種は二ツ栗一貫山窯跡でV期からVI期に生産されており、他の様々な器種も含め、そこからの供給が濃厚である。なお、906の長胴釜と943・944の瓶については、須恵器質粘土の、窯での焼成を示唆する資料である。特に長胴釜は高火度還元焼成されたもので、断面は灰色だが、表面のみ褐色を呈しており、本来は酸化焼成で仕上げる意図があったものと見る。SK38出土の765と同様の性質のものであり、在来技法である縦方向のハケ目調整が入る融合型と言える。瓶については、断面灰色を呈すものの、須恵器質とまではゆかず、表面は土師質に近いものとなっている。外面を縦方向の粗いハケ目調整が入り、内面に軽積み痕跡を残すもので、非ロクロ成形品である。このような点で、長胴釜とは異なるが、土師器とは異なるものであり、同様の位置付けがなされるものと見る。

#### (土製品)

**(定型硯・転用硯)** 定型硯は全て円面硯で、遺構出土の破片のものも含めると7点出土している。図示したものは907の筆立付無垢有溝式圓硯、908の重厚な作りの無垢無溝式圓硯、909の薄手の圓硯である。909は透かしが線刻状となるIV期以降のものだが、他は方形透かしをもつ作りのよいもので、7世紀末から8世紀前半代のものである。SI08の無脚円面硯も含め、古い段階での定型硯所有を示す。ただ、これら定型硯には、硯面に磨耗痕が見られず、頻繁な使用の形跡はない。転用硯に関しては、910の剝削片の転用硯がある。SI21でも同様のものが出土しており、SI31では古代I 2期からII 1期に位置づけられる坏G蓋内面を墨溜めに転用した事例がある。ただ、これ以外では検出例はなく、IV期以降でもSI09でIV 1期の坏B蓋転用硯1点が出土するだけである。なお、朱墨硯ではないが、内面や外面に朱を塗布した須恵器がII 2期の坏壺や坏B身で確認されている。朱墨溜めの可能性もあるが、包含層出土の827も含め、塗布した可能性が高いと見ている。ただ、朱墨使用はこの段階に既に行われていたものであり、II 2の須恵器坏B身外面に記された「十」字の墨書も古い段階での墨書行為を示す資料と言える。渡来人と識字層という関連性を示唆する資料と言える。

**(土製椎状錘)** 古代椎衝に伴う棒秤の錘である。銅製椎を陶製模造したもので、911のキノコ型を呈すものと912の円錐状を呈すものがある。前者のキノコ型は傘部に縦の沈線を描き、花卉状を表現したもので、下端にも十字の線刻を施す。紐通し形態は横穴の円く錘部をもつもので、比較的忠実に銅製椎を模造したものと見える。形態的に当土製品の古い段階のものであり、7世紀末から8世紀前半頃のものと思われる(望月精司「古代椎状錘に関する一考察」『北陸の古代と土器』北陸古代土器研究会2003年)。後者は小破片のため、形態特性を記すことができないが、底面には何かの線刻が見られるもので、横穴の円く錘部が付くものと予想する。両者とも南加賀窯産のもので、使用痕跡は見られない。

**(土製紡錘車)** 913は須恵質の紡錘車で、断面台形を呈す石製紡錘車の土製模造品と位置づけられるものである。北陸では古代の土製紡錘車は極めて検出例が少なく、日常的に使用するものとは考え難いが、線部の欠けなど使用痕の多いものであり、土製椎状錘同様、陶製代用品の可能性が高い。

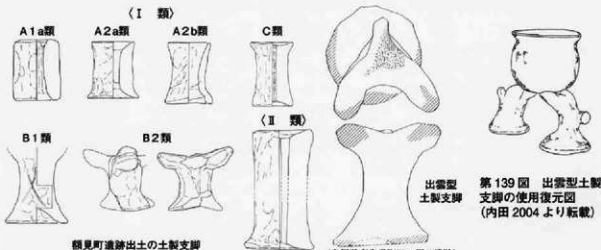
(焼台) 遺構出土のものも含め、16点が出土している。当遺跡で出土する焼台(914~920)は全て南加賀窯土の貯蔵具専用焼台で、須恵器窯で使用される窯道具が何らかの経緯で持ち込まれたものである。一部には製品に溶着したまま持ち込まれ、当遺跡で製品から剥がされたものもあると見られるが、916は口縁部の一部に小欠があるのみの完形品で、焼台そのものを持ち込んだというものである。底部には窯土の付着があり、焼台使用後であることは間違いない。当遺跡の土器生産関連遺跡という一端を示す資料と考えている。当焼台は南加賀窯に8世紀中頃以降出現するもので、9世紀前半以降に多用される。使用される貯蔵具の底部器形により形態が分けられ、平底器種は口縁部外屈形のA類と直立し浅身のB類、有台器種は口縁部内傾するC類、丸底器種は大形で深身のD類が使用される。A地区ではA類以外の類型全てが出土しており、当資料の形態特徴から概ね9世紀前半頃のものと思われる。

(瓦状土製品) 921と922は同一個体の可能性がある灰白色を呈する須恵質土製品で、内面に布目状圧痕、外面にナデを施す(一部叩きあり)ものである。破片であるため、円筒形を呈するものか、半截して丸瓦状とするものかは不明だが、内面布目痕跡から瓦状土製品としたものである。円筒形土製品のようなものかもしれない。

(円筒形土製品) 図示したもの以外にも複数破片が出土しているが、10点に満たない数量である。945~949はいずれもロクロ成形のもので、二ツ梨一貫山窯のものと近似する。口縁部がソケット状に有段形状をなすA類と円筒状のままのD類が出土しており、底部をもつものもないものがある。また、備部に別に口が付く、横口付きタイプの出土も確認しており、その点でも二ツ梨一貫山窯のものと同じである。Ⅳ期からⅤ期に位置づけられるものと考えられる。当土製品の用途については、カマドなどの煮炊き施設の煙突部またはカマド芯材に使用された可能性を以前提示したことがあるが(望月精司「円筒形土器について」『二ツ梨一貫山窯跡』小松市教育委員会2002年)、当土製品が使われたであろう時期には、当遺跡にはカマドを造り付ける竪穴建物(竪穴)が消失段階で、他の用途も考える必要がある。ただ、947にはススの付着が認められており、簡易な組み立て式カマドに使われた可能性も否定できない。消費地での出土状況や使用痕跡の集積が必要である。

(甕型土製品) SI33で示した叩き成形の甕形土製品を始め、当地区からは複数個体の甕形土製品が出土しており、同一個体如何を問わなければ、57点の破片が出土している。全形を復元できる資料は少ないが、出土量は多いほうだと考えている。包含層で提示したものは、いずれもハケ目調整のもので、胎土は地元B2類と、叩き成形のものと同様のものである。

(土製支脚) 遺構出土のものも含め、土製支脚についてまとめておきたい。当地区出土の土製支脚は、破片数だが109点という数量が出土している。支脚の高さから7.5~10cmのⅠ類と10cm以上的大型Ⅱ類とに分けられる。Ⅱ類は364・593の上下端を僅かに窪めただけの円柱状土製品で、中央に1cm以上の孔が開くものである。被熱痕跡の付くものであり、形状や大きさから見てカマド支脚の可能性が高いものである。Ⅰ類は当地区で一般的に出土する支脚サイズで、出土量も多い。中空に作るA類と中実にするB類、中実だが中央に孔を穿つ中実穿孔のC類に分けられ、当地区ではA類とB類のみが出土している。A類は外観が円筒形となる管状型A1類と上下端の広



第138図 額見町遺跡土製支脚分類図と出雲型土製支脚

出雲型土製支脚  
第139図 出雲型土製支脚の使用復元図  
(内田2004より転載)

(高橋昭雄「出雲町四ツ磨遺跡」『図説平泉「由良地域の古墳時代後期～奈良時代」の概観」(1) 古代文化研究所 No.12, 2011)

がる鼓型A2類とに分けられる。A1類は数量的には少ない形態で、さらに厚い粘土板を巻きつけたようなA1a類(174)と薄手で端面をもつ円筒形土製品状のA1b類(955)とに細分できる。A2類は上下端の広がり強弱により、さらに細分の可能性はあるが、これについても厚いA2a類(649・650・652・693・790・797・954・956)と薄手に作るA2b類(651)とに分けられる。前者が多数を占める形態で、上下端面中央が窪み、器などを受けるような形態をなす。中実B類については、完存するものが少なく、判断材料を欠くが、器を受ける側の支脚上部が下端と同様の裾広がり形態となる鼓型呈すB1類(198・199)と頂部が三つの突起に分岐する三叉形態のB2類(197・655)とに分けられる。中実のため、脚部はA類よりも細く、下端はいずれも裾広がりして、下面中央の窪み形態をなす。このタイプには脚面に「×」のヘラ記号が記されたものが複数点あり(198・199・495)、他地区でも同様のヘラ記号が確認される。以上のI類サイズの支脚については、脚側面が被熱を受けて赤く変色するものが多く確認され、加熱使用するための器を浮かせる台脚として使用されたことが理解される。堅穴建物の造り付けカマドに据え付けられる石製支脚の長さは、17~20cm弱あり、床に埋められていた部分を考慮しても15cm程度は地中に出ていたものと理解され、I類支脚とは大きさに差がある。ただ、石製支脚を使用するI期~II期の造り付けカマドから、II期からIII期にはカマドは極度に小型化しており、掘立柱建物の煮炊き施設も含め、簡易な構造の煮炊き施設に変化した可能性が高い。それに伴って支脚も小型化した可能性は十分にある。当地区では造り付けカマドに据え置かれた土製支脚事例はないが、II期には土製支脚が出現しており、8世紀には出土量が増し、土製支脚を使用する事例は増加していったものと理解する。支脚は単体で使用する場合、長脚蓋を支えるカマド状施設が必要となるが、被熱痕跡から見て直接火にかけて使用した可能性の高い短脚小釜のような器種はカマドに掛けられる容器ではなかった。舟のような簡易な煮炊き施設で使用されたものだろう。カマド施設を構築しない形状のものであれば、支脚単体で容器を支えることは不可能であり、石組みによる簡易な施設かまたは支脚三本で器を支えるのが通常であったろう。遺跡から出土する複数の被熱を受けた石などはそのようなものであった可能性がある。さて、当遺跡から出土する頂部の三叉形態となるB2類支脚については、カマドでの単体使用に作られたものではなく、二本向かい合わせで五徳のように使用するための専用支脚であった可能性がある。バブアニューギニアのディミリ村を紹介した『精霊と土と炭』(福本繁樹1994年東京美術)という図書に、頂部の三叉形になる土製支脚を向かい合わせて置き、その上に鍋を置いて煮炊きする事例が紹介されている。実は、これと極めて類似する形態の土製支脚(大型の支脚で、頂部形態が耳のとがった犬の頭部のような形状をしていることから犬頭輪型支脚とも言われるが、出雲型土製支脚としておく)が出雲地域を中心に分布する。出雲では6世紀後半に出現し、7世紀をピークに8世紀前半まで確認されるもので、二つを背中合わせで対に組み合わせる方法が復元されている(内田律雄「魔神と魔の祭祀」『季刊考古学』第87号 雄山閣2004年)。土製支脚使用と当形態の出現について、時期的にも近い出雲地域との関連性を考慮する必要があるかもしれない。なお、当土製支脚は、他の地区からも多く出土しており、詳細については、今後の報告書で再考することとしたい。

(土鍾) いずれも漁撈網鍾と考えられている管状土鍾で、包含層出土の3点は全て土師質のものである。遺構出土の3点を加え、破片を含めても、15点に満たない数であり、その少なさが目に付く。当遺跡が台地上に立地する遺跡である点が理由のようにも思われるが、遺跡は海縁の台地に位置しており、遺跡内で貝をまとめて廃棄したピットがあるなど、漁具を使用する環境になかったとは考え難い。それよりも、当遺跡が手工業生産に関連する遺跡であるという性格に主要因があるようにも思える。

## b. 中世土器

年代的にはまだ平安時代だが、土器編年上、中世に位置付けられる土器群である。田嶋編年の中世I-I1期からI-II1期に位置付けられる土器が少量出土しており、ピット出土のものも含めて概要を記す。

《土師器》この時期の土師器は食膳具でほぼ占められ、煮炊具は限られたものとなる。当地区からは食膳具のみ出土しており、碗と小皿に分けられる。121ページに記したように包含層でも疎らに土器の分布が確認できるが、残りが乏しかったこともあり、図示していない。ピットや掘立柱建物から出土するものとはほぼ同時期と考えている。いずれも出土地点はまとまりがなく、P115から出土した788の柱状高台小皿と789の厚底碗が唯一の共伴資料である。同一の胎土をしており、田尻シンベイダン01大溝を指標とするI-II1期に該当すると見る。同様の時期に位置づけられるのがSB10出土S80の内黒輪高台碗である。同様の胎土で、高台は貼り付けだが、極めて

低く、底面ナデ調整するものである。内面のミガキ調整はなく、ロクロ成形のまま仕上げている。同様の特徴を持つ内黒釉が小松市松栗遺跡4号大溝上層から出土している。SB10の他ピット出土の580も内黒輪高台輪だが、高台が高めで底面余切りを残すもので、内面ミガキ調整を施すや古い印象を受けるものである。内黒輪高台輪で内面ミガキ調整を施すものはP10でも出土している。ミガキ調整のない内黒釉と同じ胎土のものであり、高台形態などからⅠ-Ⅰ期に位置づけられるものと見られる。P92、P94の平底小皿については、定型化された段階の様相を持つ点からⅠ-Ⅱ期に位置づけるのが妥当だろう。以上のように、中世土師器はⅠ-Ⅰ期～Ⅱ期の中でおさまるものであり、年代観としては11世紀後半から12世紀初頭に位置づけられる。

《灰釉陶器または山茶碗、中国産磁器》陶器類は灰釉陶器から山茶碗へ変質する時期の有台碗で、東濃産の可能性が高いものである。底面調整や施釉の状態から、底面から体部下位をケズリ調整し施釉を掛け掛ける923は九石2号窯式期頃、施釉掛けだけ底面調整をせずに糸切底となる924は明和27号窯式期頃、底面糸切底で内面のみ一部掛け施釉が無釉の925・926は西坂1号窯式期と判断される。暦年代観では九石が1000年前後、西坂が11世紀後半から12世紀初頭頃とされている。次に、中国産磁器は、全て白磁碗である。小さな破片のみの出土だが、口縁部や底部器形などから、山本信夫氏の白磁分類におけるⅡ類(927)とⅣ類(928～931)にほぼ該当すると見られる。氏の大宰府貿易陶磁編年表のC期、暦年代観では11世紀後半から12世紀前半があたりである(山本信夫「大宰府白磁分類と編年(基礎編)」石川県立埋蔵文化財センター勉強会資料1993年)。以上、灰釉陶器は若く古い時期のものも見られるが、陶磁器は概ね土師器から求められる中世Ⅰ-Ⅰ期からⅡ期の年代観の範囲にあると見てよい。時期的には問題ないが、土師器食器資料が少量であるのに対し、これだけの陶磁器類が存在することに当遺跡の性格が出ている。もともと、当期における集落中核域から当地区は外れているため、土師器が少ないのであるが、それでもこれだけの舶載磁器と国産陶器が入り込んでいる状況は注目し値する。当期の土器廃棄遺構や建物跡はF・G・H地区に集中しており、その際の報告において詳細は述べる。

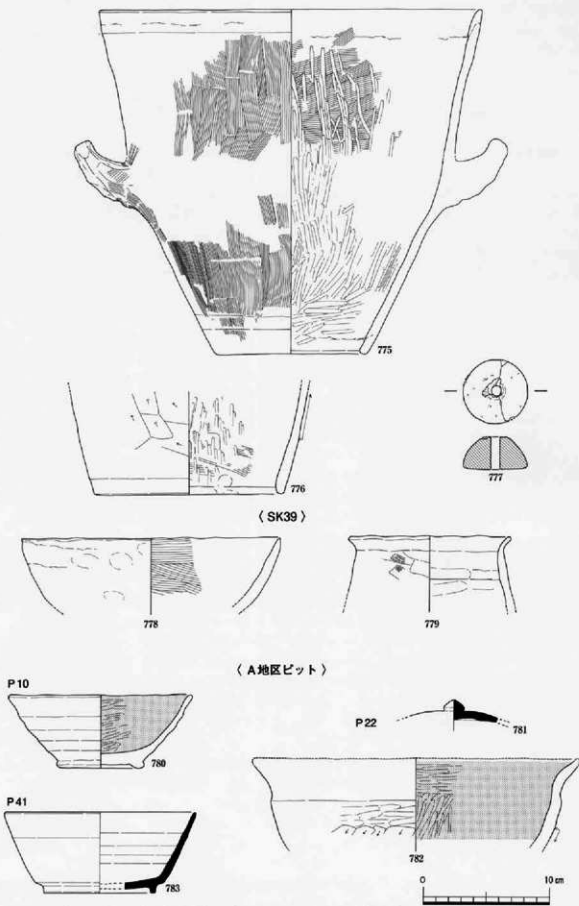
### c. 石製品

当地区より出土する石製品はカマド焚口部に使用される凝灰岩切石や石製支脚などのカマド構築材を除くと、ほぼ砥石と石製紡錘車に限られる。砥石については乳白色凝灰岩を使用する比較的小型のものから砂岩等の比較的大型のもの、大型の平坦面を持つ礫石を砥石または何かを摺るため、敲くための石として使用したものなどがある。これら砥石の数量については、凝灰岩質のものが33点、礫石使用の大型のものが26点で、出土量としては多いほうと判断する。石製紡錘車については、包含層出土の961・962以外は、遺構で2点出土するのみであり、量的には決して多いとは言えない。断面台形を呈すしっかりとした形態のものは滑石製のもので、962の厚いものと140の薄いものがある。どちらも縁部に欠けや磨り減りなどが認められる使用痕跡著なもので、線刻のような装飾的要素は認められない。滑石製紡錘車は、近接する古代Ⅰ期集落の念仏林南遺跡で5点出土しており、当遺跡でも古い時期の遺構に伴う傾向が強い。古代Ⅰ期に営まれるD地区では5点の滑石製紡錘車が出土しており、やはり、古い段階の石製品であることが理解される。A地区では滑石製以外にも凝灰岩質の紡錘車が出土している。SK38出土の完形品に加え、包含層でも961の平面形が長楕円形状を呈するものが出土しており、注目される。凝灰岩でも緑色凝灰岩製のものは古墳時代もあり、性質の異なるものと見られるが、このような白色系のもを使用する事例は少なく、7世紀後半以降に見られるものなのかもしれない。古代Ⅰ期の滑石製ものは仮器としての性格も具備していた可能性もあり、鉄製紡錘車の普及してくる段階になって、石製のものも実用的な側面を強く出していった可能性を考えている。

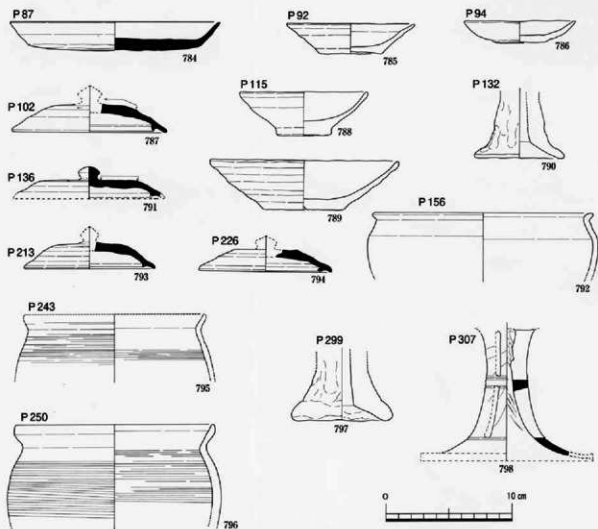
### d. 金属製品

金属製品は、遺構出土で耳環が出土している以外、全て鉄製品である。鉄製品の概観については、鉄生産関連遺物編で報告するので、ここでは包含層資料のみ説明しておく。964は直刃鎌と思われるもので、刃部下半が欠損するものである。刃部の途中で折れ曲がっており、着柄角度も不明である。965はかなり錆化の進行したもののだが、履設鎌の刃部と思われるものである。966は断面長方形気味の棒状鉄製品で、かなり太いものである。先端に向かい徐々に細くなる形状をしており、可能性としてであるが、鍛冶道具である鉄鉋の一部と考えている。

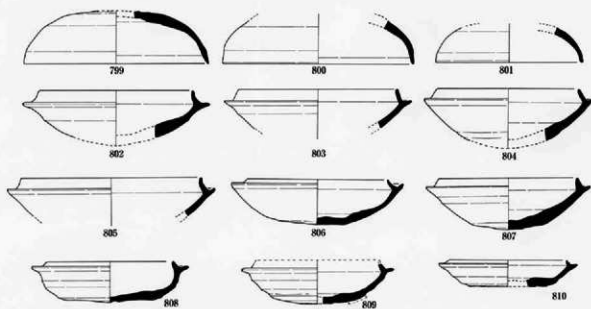
以上、包含層等の出土遺物概要及びA地区の特殊遺物に関する考察を述べた。A地区出土遺物には遺構でも述べたように、朝鮮系軟質土器と言えるようなものや特殊な貯蔵具類などが存在しており、当遺跡の特性を物語る資料の一端を担っている。これらについては、次の報告で考察することとしたい。



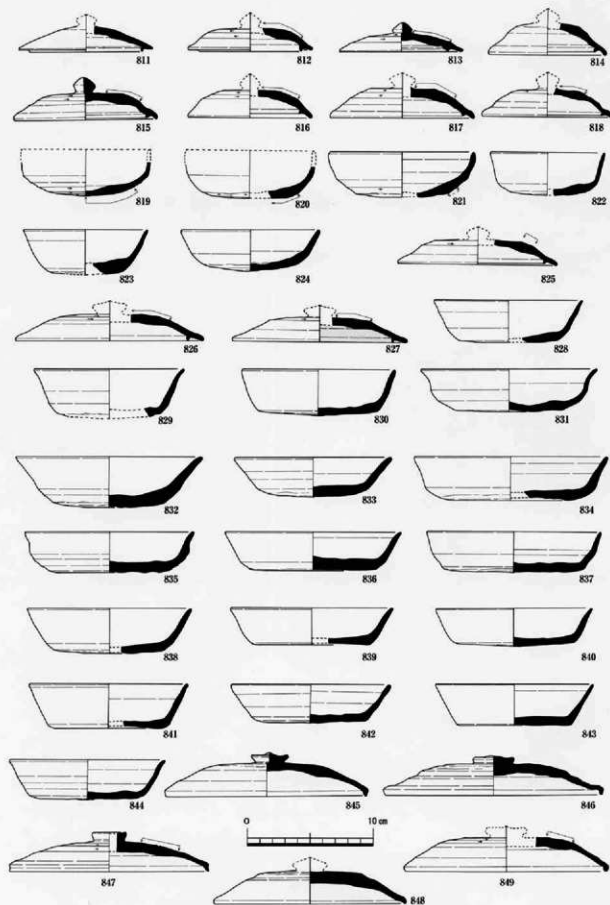
第140図 A地区出土遺物 54 (SK38-5、SK39、A地区ビット-1、S=1/3)



( A地区包含層 )

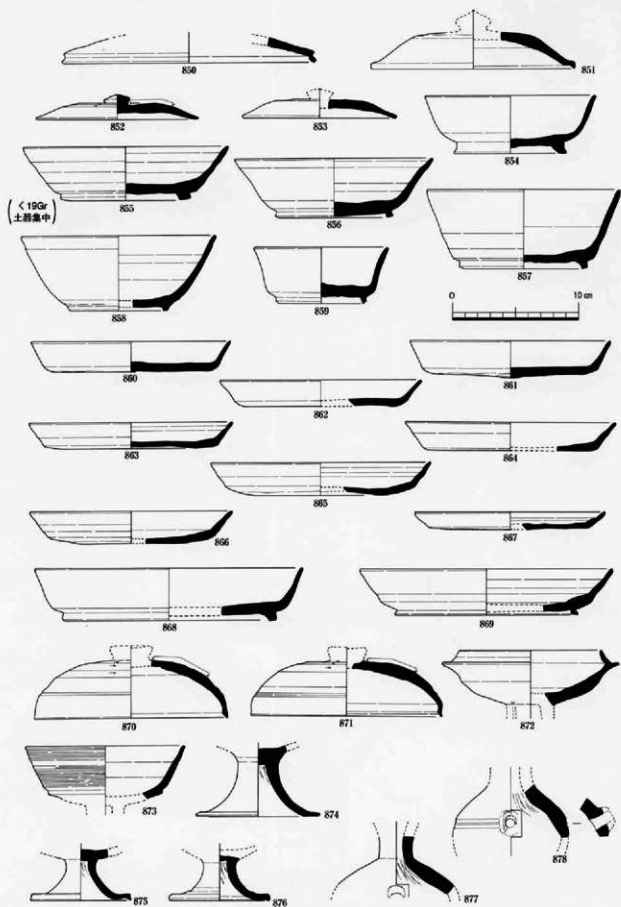


第 141 図 A地区出土遺物 55 (A地区ピット-2、A地区包含層-1、S=1/3)

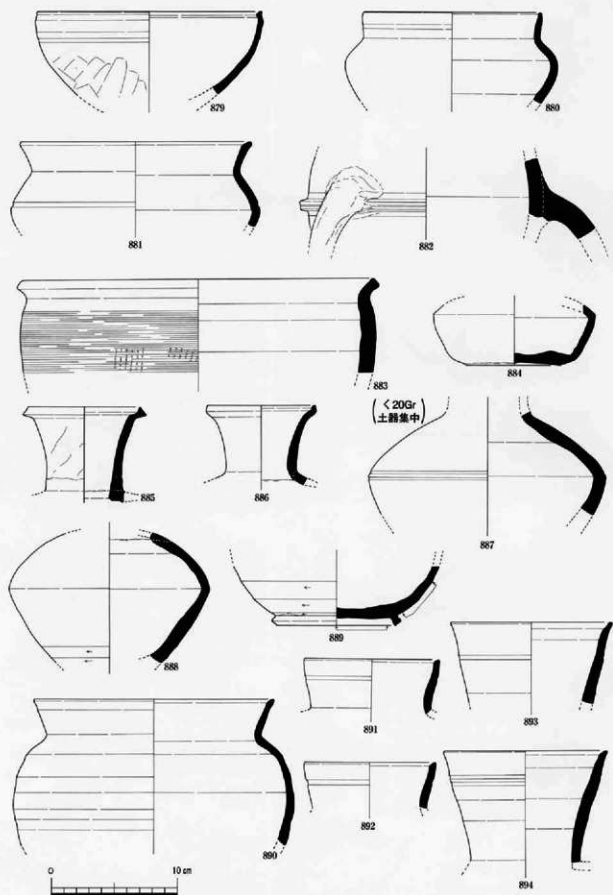


第142図 A地区出土遺物56 (A地区包含層-2、S=1/3)

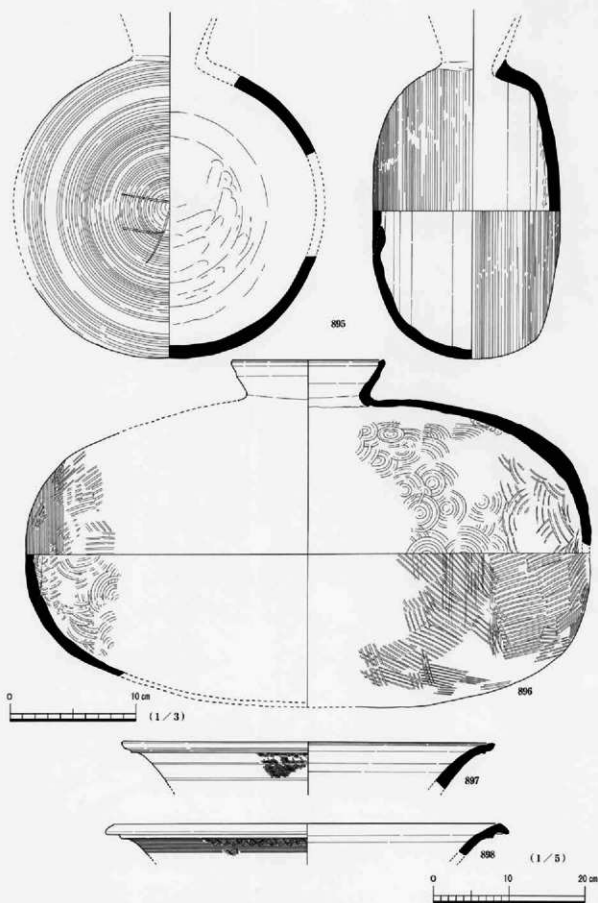




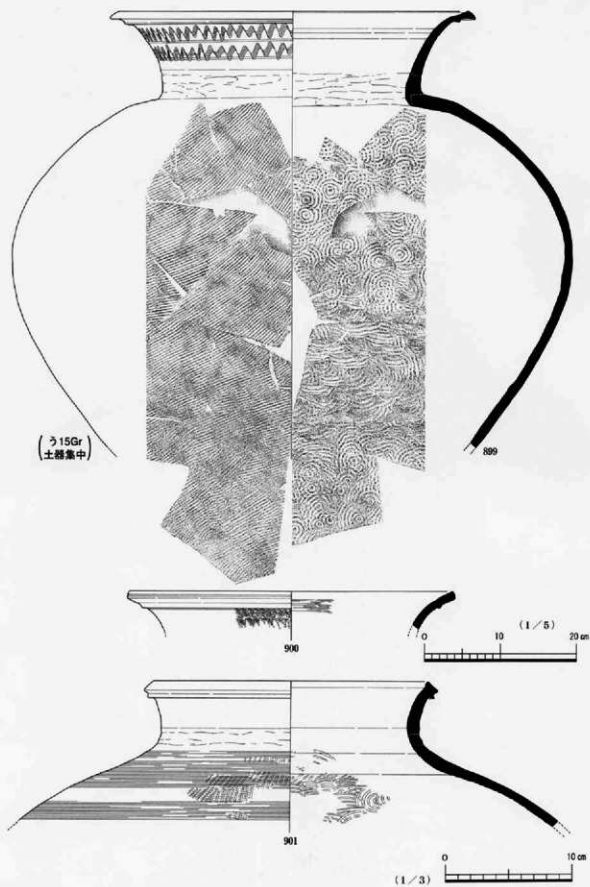
第143図 A地区出土遺物 57 (A地区包含層-3、S=1/3)



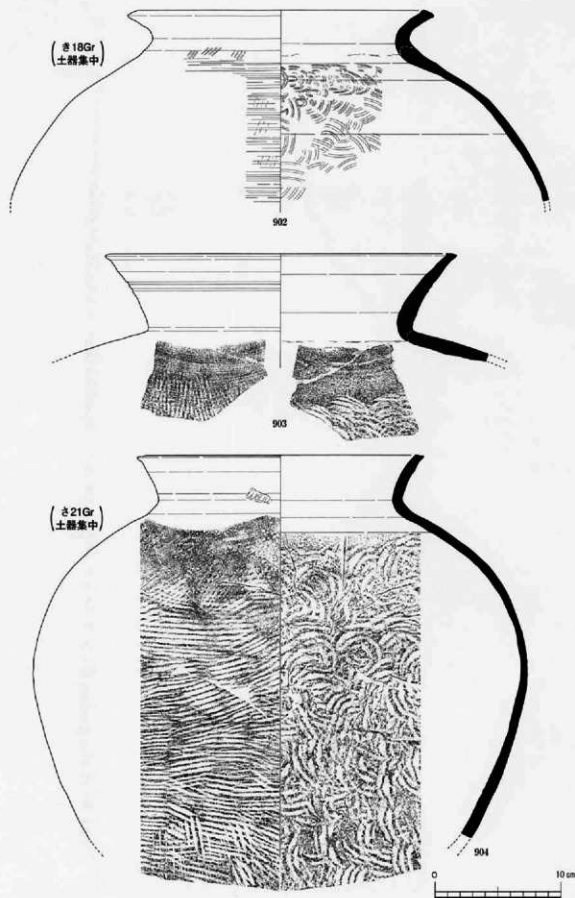
第144図 A地区出土遺物58 (A地区包含層-4、S=1/3)



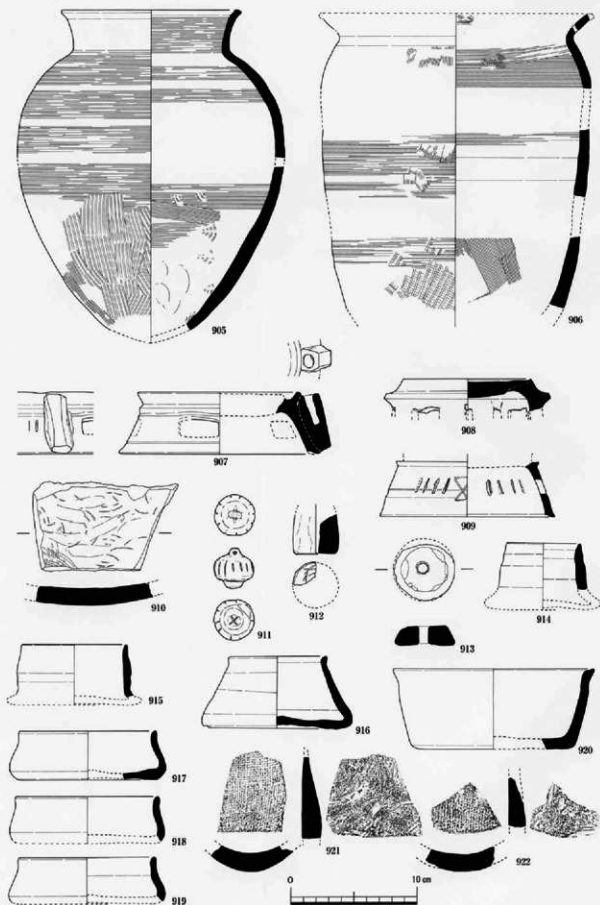
第145図 A地区出土遺物59 (A地区包含層-5、895・896はS=1/3、897・898はS=1/5)



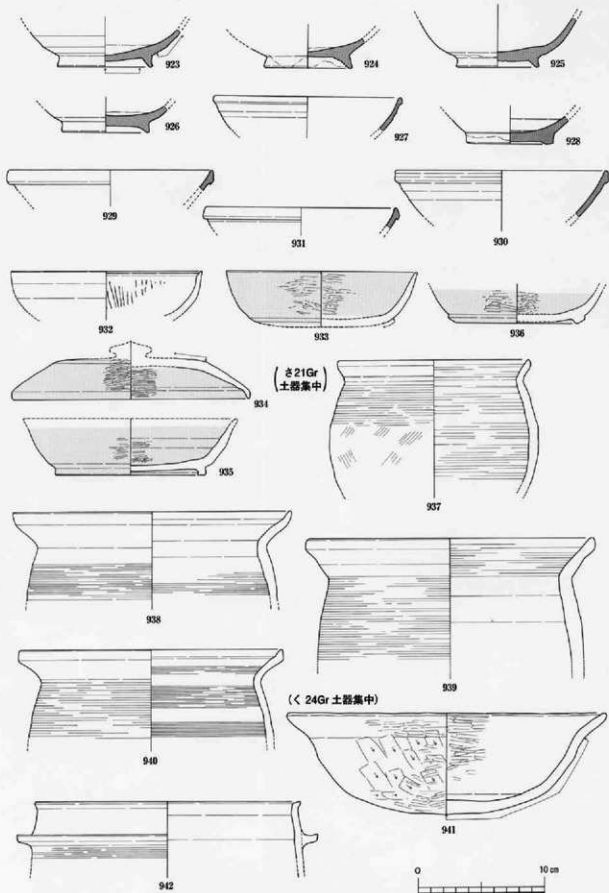
第146図 A地区出土遺物60 (A地区包含層-6、899・900はS=1/5、901はS=1/3)



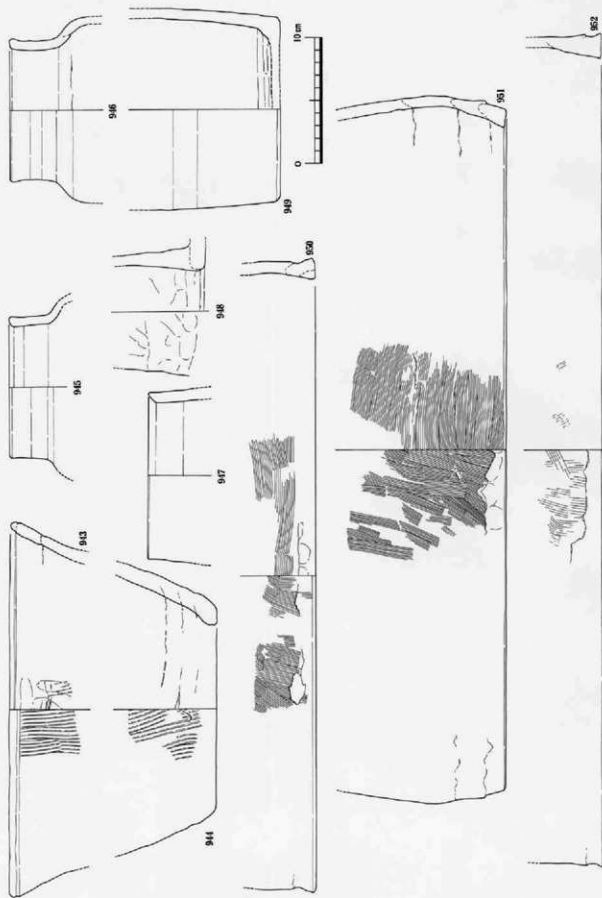
第147図 A地区出土遺物61 (A地区包含層-7、S=1/3)



第148図 A地区出土遺物62 (A地区包含層-B、S=1/3)

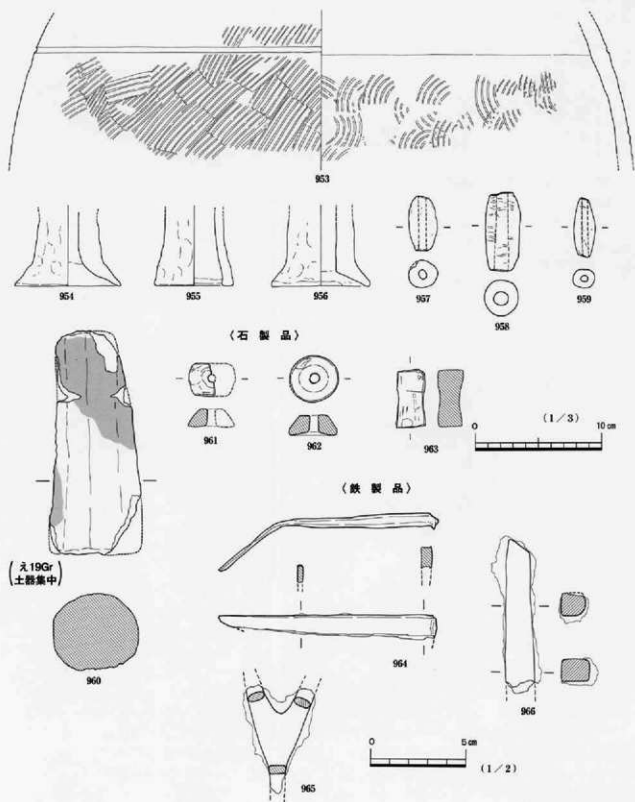


第149図 A地区出土遺物63 (A地区包含層-9、S=1/3)



第150図 A地区出土遺物64 (A地区包舎一10、S=1/3)





第151図 A地区出土遺物 65 (A地区包含層-11、964~966はS=1/2、他はS=1/3)

## 第2節 D地区出土の古代遺物

## 第1項 出土遺物概要と器種分類

D地区より出土した遺物は、遺物収納箱(645×380×145mm)で24箱ある。内訳は須恵器7箱、土師器14箱、石製品2箱、鉄滓・鉄製品1箱で、地区別出土量としては当遺跡で最も少ない。

出土遺物の時期は、概ね7世紀前半代、田嶋福年の古代I1期にまとまる傾向がある。竪穴建物や掘立柱建物へ混在する形で、Ⅱ2～Ⅱ3期の遺物が僅かに確認されるが、包含層資料においても古代I期以外の資料は僅少であり、古代I期より下る時期の遺物はD地区には存在していなかった可能性が高い。I期以外の遺物は他地区からの紛れ込みという印象が強く、建物群は半世紀程度の存続期間で移動し、その後は当地区を集落域として使用していなかったのではないかと考えられる。以下に、各遺構出土の遺物解説を述べるが、土器の器種名と分類についてはA地区に準拠するものとし、鉄関連遺物についても同様の扱いとする。

## 第2項 各遺構出土遺物解説

遺構出土の遺物について、個別の説明は観察表に譲るとして、特徴的なものや特記事項、時期を代表できるような一括資料の土器様相などを中心として、竪穴建物とその他遺構及び包含層の順で述べる。

## 1. 竪穴建物

A地区同様、竪穴建物から出土する遺物は多く、破片数換算で4割以上を占める。構成としては、食器が13%、煮炊具が74%、貯蔵具が13%で、竪穴内へのカマド使用土器の廃棄により煮炊具の比率が高くなっている。

## a. S1102

5の須恵器杯B身は古代Ⅱ3期頃の混入品として、他は古代I1期の資料である。遺物量は多くはなく、下層以下の一括性高い資料も少ないが、覆土出土のものは概ね単一時期のものと言える。食器は土師器の比率がやや高いが、須恵器も杯Hを中心に定量存在しており、図示したものも含め、古代I1期古段階に中心をおくものと見る。須恵器は能美産産が目立ち、7の横瓶は円盤閉塞した後内面当て具を伴う叩き成形を施すものである。土師器は口縁部外屈する碗Hと高坏H脚部があるが、両者とも内黒品の率はやや低めで、高坏Hの脚部器形が短めであるなど、やや新しい様相を見せる。なお、碗Hには外面にスス痕、内面口縁部に帯状のコゲが付着しており、煮炊きに使用したかのような痕跡を示す。煮炊具はカマド内への廃棄がなく、図示できたような復元率の高いものは乏しいが、器種は小型鍋、手付深鍋、短胴小釜、長胴釜、瓶と揃っている。図示できたのは、小型鍋と手付深鍋、短胴小釜のみで、いずれも在来製技法によるものである。小型鍋は内面ミガキ、外面ハケ目調整の入るタイプである。なお、土器以外では、カマドから円筒形土製品の破片と、覆土から砥石と石製支脚が出土する。

## b. S1104

概ね古代I1期にまとまる資料である。遺物量が多く、特に下層から床面に伴う一括性高い資料が多い。カマド内の煮炊具一括廃棄はあるが、胴部破片のみであり、図示できる煮炊具資料に欠く。食器は須恵器が主体を占め、土師器はやや少ない傾向がある。須恵器は杯H蓋・身と高坏Hではほぼ構成されるが、体部装飾を伴う大型の鉢a身(22・23)がある。金属器系の鉢B(26・27)、そして当期ではまだ一般的ではない鉢Fの存在も含め、特殊器種が目立つ。大型の鉢aについては、いずれも南加賀産産で、口縁部内面に段を形成し、体部沈線を施すなど金属器模倣の器種である。特に22は体部に柳描きの連続斜行線文を入れるもので、脚の付く高脚鍋の可能性もある。内面降灰しておらず、蓋を伴う可能性のある焼き方をしているが、基本的には無蓋器種と言えるもので、I1期古段階に出現する器種と言える。相伴する杯Hに関しては、身口径で12cm程度だが、底面ケズリ調整のあるものもあり、I1期でもやや古手の様相を示している。なお、同じ南加賀産産で、高坏Hの2段二方スカシが上段と下段で位置がずれる、所謂交互スカシとなるものが確認される(24)。高坏の交互スカシは、国内では一般的なものではなく、多くは朝鮮半島の陶質土器に見られる高坏脚の交互スカシにその系譜を求めている。南加賀産産をはじめ、北陸の他の須恵器産でも、このような高坏は確認されておらず、朝鮮半島との関連性を示す資料の可能性を持つ。ただし、スカシを交互に穿つ点以外は、通常の在産高坏Hに見られる技法であり、特殊な感はない。

土師器は碗Hと高環Hで構成され、内黒率が高い。34のような脚の短めなものもあるが、33・35のような長脚になるようなものが主流で、全体的には古い様相を残す。碗Hは大型のものが目立ち、31は法量的に鉢に近い。なお、37の小型鍋としたもの内面ミガキ調整を伴うす手のもので、器形的にも鉢状を呈するため、仏器的な大型の鉢である可能性もある。煮炊具はいずれも外面ハケ目調整、内面ヘラナデ、ケズリ調整を施す在来型技法によるものに統一されている。その他の遺物としては石製紡錘車が1点と石製支脚が1点出土する。いずれも完形品であり、紡錘車は小さな欠けや磨耗痕跡が顕著なものである。支脚は被熱使用痕跡を明瞭に残すもので、当堅穴建物のカマド支脚に使われたものだろう。

## 2. D地区出土遺物様相（その他の遺構及び包含層）

堅穴建物以外の遺構資料については、一つの遺構でまとまった資料がなく、时期的にも大きくはばらつきがないため、個別遺構説明は行わず、包含層も含めて、当地区出土遺物の时期的な特徴と特筆すべき資料についての説明を加えることとした。

### a. D地区の古代Ⅰ1期資料について

上記の堅穴建物資料を含め、古代Ⅰ1期資料としては、A地区に比べると須恵器食膳具の率が高いという特徴がある。A地区の食膳具の須恵器比率については、隣接する当期の堅穴建物集落群、念仏林南遺跡の様相と比較しても少なすぎるきらいがあり、A地区の様相が当期としては異質であった可能性がある。ただ、包含層内には当期の須恵器が定量あり、堅穴建物への遺存資料のみを対象としているための結果とも言えよう。D地区の食膳具中須恵器率は52%、念仏林南遺跡では64%であり、この辺が当期の食膳具比率の実態であったと理解する。

A地区では遺構出土資料がほぼ古代Ⅰ1期新段階以降としたが、D地区では確実に古段階に位置づけられる資料がある。南加賀窯北群産須恵器環Hは口径が縮小してゆかないため、判断しにくい。能美窯産や南加賀窯南群産須恵器環Hは新段階でいち早く法量の小型化が進行するため、編年指標になりえる。それに基づけば、SI102の2・3、SI104の17、包含層の68・70は古段階資料と言え、また、口縁部内面に段を形成し、体部沈線や連続判突などの装飾を施す金属器模倣の須恵器鉢a(22・23)が定量見られることも古段階の要素だろう。これらは無蓋が基本と考えられるが、やや径が小さく薄手となった76は有蓋の可能性が高い。44・73・74は返りの大きな作りのよい大ぶりのもので、無蓋の可能性を持つものである。特に44・73は南加賀窯南群産と推察されるもので、つまみ基部径から孔頭ないしは小型宝珠形を呈すつまみが付くものと予想される。那谷金比羅山6号窯で出土する鉢蓋に近いものと判断でき、古代Ⅰ1期新段階に位置づけられる。Ⅰ1期新段階になって出現する環形を呈す須恵器鉢b身(51・75)の存在、口径10cm程度に小型化した南加賀窯南群産環H(63)なども新段階までの幅で当地区が存続したことを示すだろう。

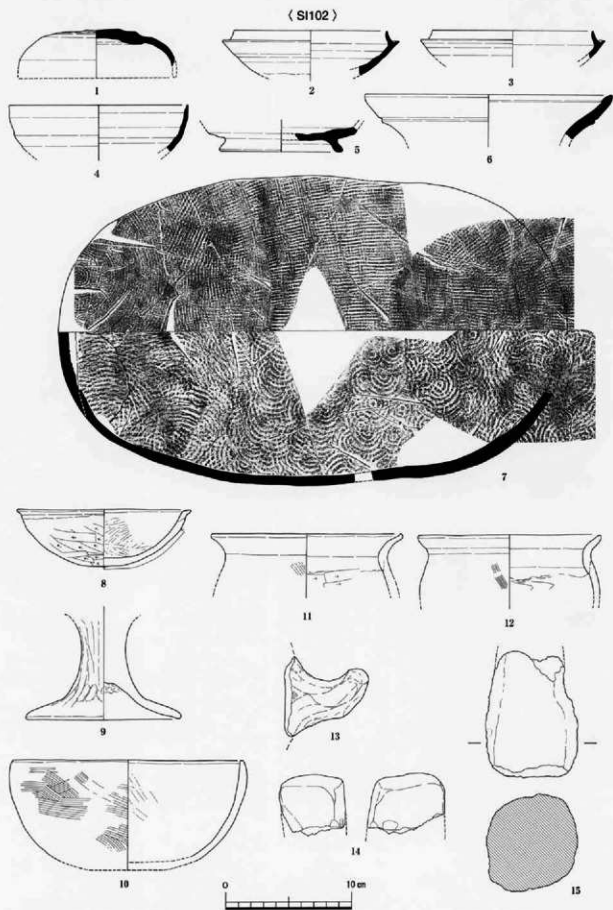
当地区はⅠ1期の古・新のどちらに中心があったかは判断しにくい。堅穴建物から掘立柱建物へという流れであれば、堅穴建物は古段階、掘立柱建物は新段階に中心があった可能性がある。須恵器に共伴する土師器は少なく、様相を提示する資料は恵まれないが、Ⅰ期の様相を逸脱するものは見られず、煮炊具廃棄が目立たないというのが特徴とも言える。須恵器に金属器系の鉢類が目立つことも特徴の一つで、銅鏡の存在など、当期としては良品の須恵器を保有している。

### b. D地区の土製品について

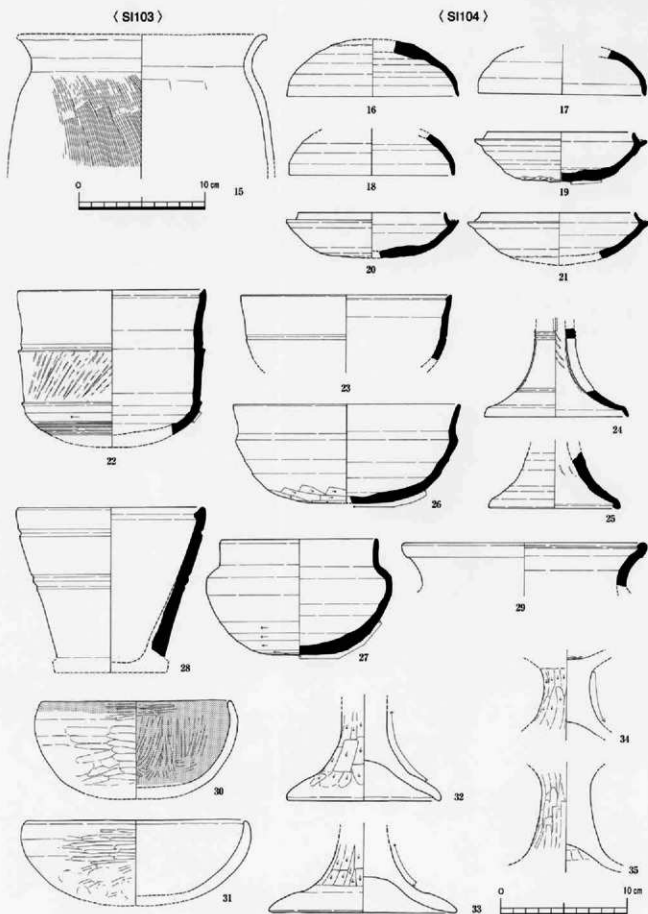
特筆するような土製品の出土はなく、漁撈網罟である管状土鉢と円筒形土製品、土製支脚が各1点ずつ出土するだけである。いずれも土師質のもので、土製支脚はⅡ期以降のものだろう。なお、A地区で定量出土する製塩土器については当地区での出土を確認していない。Ⅰ期の堅穴建物集落である念仏林南遺跡でも製塩土器は未確認であり、製塩土器はⅡ期以降になって当地区へ搬入されるようになったものと言えるだろう。

### c. D地区の石製品について

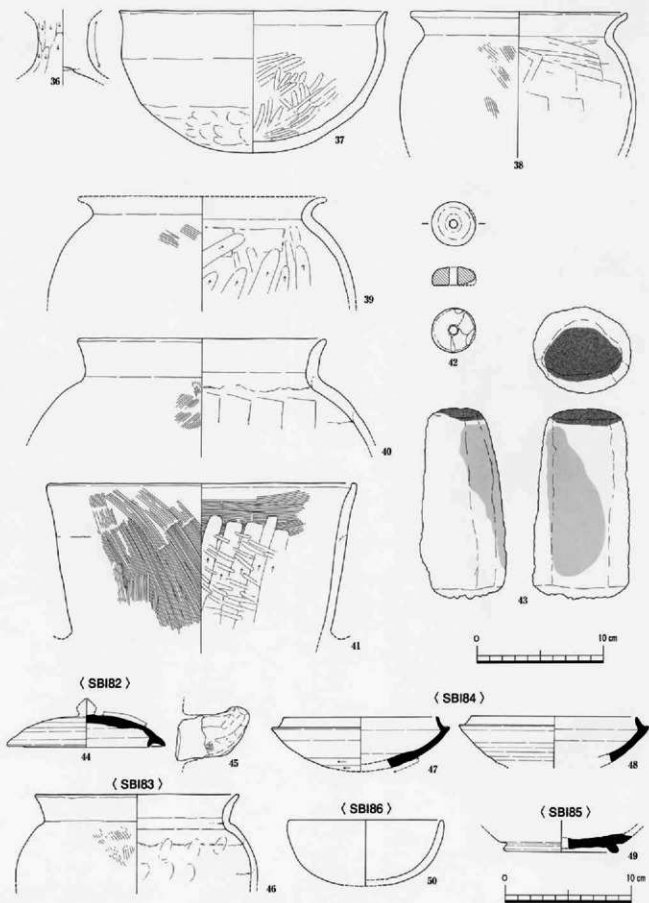
当地区より出土する石製品はカマド焚口部材の凝灰岩切石や石製支脚等のカマド構築材を除くと、砥石と石製紡錘車に限られる。砥石はSI102の1点が凝灰岩の小型品である以外は、大型の平坦面を持つものであり、数量的には少ない。これに対し、紡錘車は5点と多く、A地区出土の4点を超える。82の断面台形を呈すしっかりとしたものや42の薄い土鏡頭形のものがあり、いずれも滑石製である。縁部に欠けや磨り減りなど使用痕跡顕著なものも多く、A地区同様、線刻のような装飾的要素は認められない。



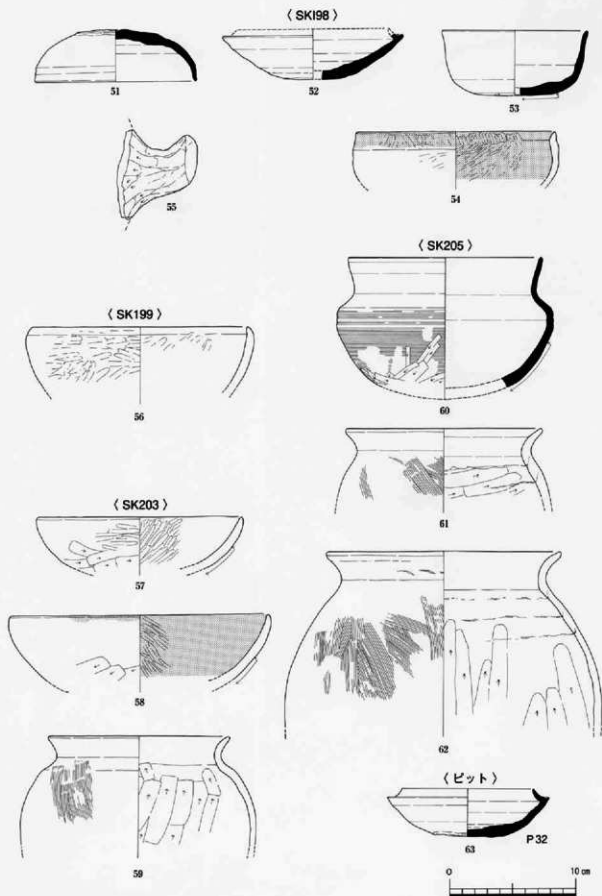
第152図 D地区出土遺物1 (SI102、S=1/3)



第153図 D地区出土遺物2 (SI103、SI104-1、S=1/3)

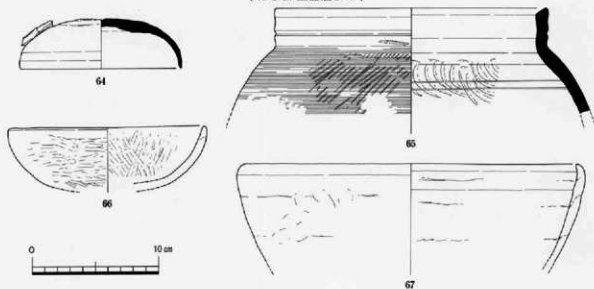


第154図 D地区出土遺物3 (SI104-2・SB182~186、S=1/3)

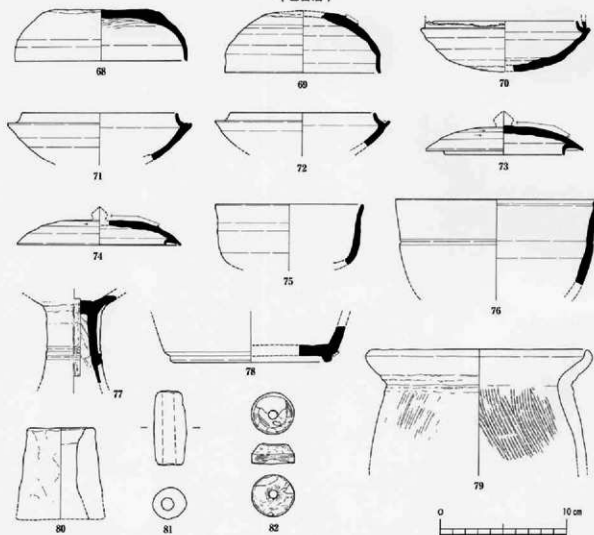


第155図 D地区出土遺物4 (SK198・SK199・SK203・SK205、ピット、S=1/3)

(ぬ8Gr 土器溜まり)



(包含層)



第156図 D地区出土遺物5 (ぬ8Gr 土器溜まり、包含層、S=1/3)



## 付表 額見町遺跡出土古代遺物観察表

## 1. A地区出土遺物観察表

遺物番号	種別・品名	出土位置	図号 (cm)	粘土	色・地	形状	特徴	観察者	備考	記録番号	
5001	1 磁器・灰白身	5B0D	—	焼粘土質	7390/1・黄緑	1/4	口付			5013	
	2 土師・灰白身	5B0A	①320	焼粘土質	22996/3・黄	1/4	内ノリヤ			5014	
5002	3 磁器・灰白身	5B0D上層	①325, ①367	焼粘土質	23192/2・黄緑	1/4	1線輪ケヤリ			5012	
	4 磁器・灰白身	5B0D中層	①316, ①336, ①347, ①348	焼粘土質	7336/1・黄緑	3/4	1線輪			5013	
	5 磁器・灰白身	5B0A	①321, ①344, ①350	焼粘土質	1995/1・黄緑	1/10	1線			5015	
6 磁器・灰白身	5B0C・A上層・B	①328, ①347, ①350	焼粘土質	7393/1・黄	1/5	1線			5016		
7 磁器・灰白身	5B0D下層	—	—	焼粘土質	9771/1・黄	1/3	1線			5017	
8 磁器・灰白身	5B0D中層	①335, ①351, ①374, ①375	—	焼粘土質	1995/1・黄緑	2/3	2線			5018	
9 磁器・灰白身	5B0D・A+C上層	①317	—	焼粘土質	9191/1・黄緑	1線	1線			5019	
10 磁器・灰白身	5B0D中層	—	—	焼粘土質	9191/1・黄緑	1線	1線			5017	
11 磁器・灰白身	5B0C上層・D20・E20	①316, ①362, ①363	—	焼粘土質	9529/1・黄緑	1線	1線			5019	
12 磁器・小割	5B0A上層・D17・C17	①364	—	焼粘土質	7339/1・黄緑	1/4	1線	輪リハ明カキヤリ, 内Dヤリ		5019	
13 磁器・黄緑土質	5B0C	①374, ①381, ①383	—	焼粘土質	1977/1・黄	2線	—			5026	
14 土師・灰白身	5B0D	①328, ①358, ①366	—	焼粘土質	19797/3・黄	2線	1	内輪リヤ		5022	
15 土師・灰白身	5B0C	①318, ①348	—	焼粘土質	19798/4・黄	1/2	1	内輪リヤ		5014	
16 土師・灰白身	5B0D下層	①328, ①344	—	焼粘土質	19797/3・黄	9/10	1	内輪リヤ, 内輪リヤ		5013	
17 土師・灰白身	5B0D上層	①316, ①376	—	焼粘土質	9796/2/4・黄	2/5	1	内輪リヤ		5017	
18 土師・灰白身	5B0D上層	①316, ①384	—	焼粘土質	7393/3/3・黄緑	3/5	1	内輪リヤ		5016	
19 土師・灰白身	5B0D中層	①316	—	焼粘土質	9796/4・黄	1/2	1	内輪リヤ		5018	
20 土師・灰白身	5B0D	①357	—	焼粘土質	72936/9・黄	1/3	1	内輪リヤ		5015	
21 土師・灰白身	5B0D下層	①313	—	焼粘土質	72937/9・黄	1/3	1-2	内輪リヤ, 焼輪リヤ		5023	
22 土師・灰白身	5B0C	①348	—	焼粘土質	23936/5・黄	1/7	1-2	内輪リヤ, 焼輪リヤ		5019	
23 土師・灰白身	5B0D	①318, ①359	—	焼粘土質	19797/6・黄	1-2	1	内輪リヤ, 焼輪リヤ		5021	
24 土師・灰白身	5B0D上層	①355	—	焼粘土質	73938/1/1・黄	1線	1-2	内輪リヤ, 焼輪リヤ		5023	
25 土師・小割	5B0D上層・D20	①358	—	焼粘土質	19796/4・黄	1/4	1	内輪リヤ		5019	
26 土師・小割	5B0C中層	①374	—	焼粘土質	19798/4・黄	1/3	1	内輪リヤ, 焼輪リヤ		5019	
27 土師・灰白身	5B0D中層	①320, ①378, ①384, ①387	—	焼粘土質	9796/2/4・黄	3/4	1	内輪リヤ, 内輪リヤ		5015	
28 土師・灰白身	5B0D上層	①315, ①363, ①381	—	焼粘土質	72937/5・黄	1/8	1	内輪リヤ, 内輪リヤ		5016	
29 土師・灰白身	5B0D中層	①315, ①384	—	焼粘土質	9796/6・黄	1線	1	内輪リヤ内		5019	
30 土師・灰白身	5B0C	①367, ①387	—	焼粘土質	19798/4・黄	1/15	1	内輪リヤ, 内輪リヤ		5019	
31 土師・灰白身	5B0D上層	①315, ①387	—	焼粘土質	72937/5・黄	1線	1	1線		5016	
32 土師・灰白身	5B0C中層	①320, ①377	—	焼粘土質	19797/3・黄	1/30	1	内輪リヤ, 内輪リヤ		5015	
33 土師・灰白身	5B0D中層	①328, ①374	—	焼粘土質	72937/6・黄	1/30	1	内輪リヤ, 内輪リヤ		5016	
34 土師・灰白身	5B0D中層	①318, ①384, ①387	—	焼粘土質	19798/4・黄	3/2	1	内輪リヤ, 内輪リヤ		5013	
35 土師・灰白身	5B0D上層	①325, ①389	—	焼粘土質	19797/4・黄	1/12	1	内輪リヤ, 内輪リヤ		5013	
36 土師・灰白身	5B0D上層	①318, ①319	—	焼粘土質	9796/4・黄	1/12	1	内輪リヤ, 内輪リヤ		5017	
37 土師・灰白身	5B0D中層	①386	—	焼粘土質	72937/6・黄	1/8	1	内輪リヤ, 内輪リヤ		5015	
38 土師・灰白身	5B0D上層	—	—	黄緑土質	19797/2・黄	—	—			5015	
5003	39 磁器・灰白身	5B0C下層	①312, ①343, ①361	焼粘土質	23877/1・黄	1/6	1/1			5016	
	40 磁器・灰白身	5B0C	①320, ①377	焼粘土質	1995/1・黄	3/5	1線	1線輪リヤ		5016	
	41 磁器・灰白身	5B0D上層	①328, ①374	焼粘土質	72937/6・黄	1/30	1	内輪リヤ		5016	
	42 土師・灰白身	5B0D中層	①315, ①384	—	焼粘土質	19798/4・黄	1/12	1	内輪リヤ, 内輪リヤ		5014
	43 土師・灰白身	5B0D上層	①318, ①381	—	焼粘土質	5878/7/3・黄	1/12	1	内輪リヤ, 内輪リヤ		5013
	44 土師・灰白身	5B0C中層	①320, ①377	—	焼粘土質	19797/3・黄	1/2	1	内輪リヤ, 内輪リヤ		5015
	45 土師・灰白身	5B0D中層	①312, ①343	—	焼粘土質	13197/1・黄	1/2	1	内輪リヤ, 内輪リヤ		5013
	46 土師・灰白身	5B0D上層	①318, ①384	—	焼粘土質	23796/4・黄	2/2	1	内輪リヤ, 内輪リヤ		5013
	47 土師・灰白身	5B0C上層・D20	①321	—	焼粘土質	19797/3・黄	1/12	1	内輪リヤ, 内輪リヤ		5013
	48 土師・小割	5B0B	①318, ①381	—	焼粘土質	5878/7/3・黄	1線	1-2	内輪リヤ, 内輪リヤ		5013
	49 土師・小割 (E1)	5B0D中層	①384	—	焼粘土質	23796/4・黄	1/4	1-2	内輪リヤ, 内輪リヤ		5013
	50 土師・灰白身	5B0D中層	①318, ①381	—	焼粘土質	72937/4・黄	1/12	1	内輪リヤ, 内輪リヤ		5013
	51 土師・灰白身	5B0B	①318, ①381, ①387	—	焼粘土質	19798/3・黄	1/10	1-2	内輪リヤ, 内輪リヤ		5013
	52 土師・灰白身	5B0D中層	①318, ①381	—	焼粘土質	19797/3・黄	1/10	1-2	内輪リヤ, 内輪リヤ		5017
	53 土師・灰白身	5B0D上層	①318, ①381	—	焼粘土質	19798/4・黄	1/2	—			5014
	54 土師・灰白身	5B0C中層	①320, ①377	—	焼粘土質	—	—	—			5013
	5004	55 磁器・灰白身	5B0D中層・E20	①361, ①365, ①376, ①386	焼粘土質	9529/1・黄	1線	1線	黄土ヤリ, 焼輪リヤ		5015
		56 磁器・灰白身	5B0D中層	①342	—	焼粘土質	19796/4・黄	1/4	1線		5017
		57 磁器・灰白身	5B0D上層・D20	①318, ①381, ①388, ①391, ①394	—	焼粘土質	19796/4・黄	1/4	1線		5017
58 磁器・灰白身		5B0D上層	①318, ①381	—	焼粘土質	9529/1・黄	1/2	—		5013	
59 土師・灰白身		5B0D中層	①318, ①381	—	焼粘土質	23796/4・黄	1/2	1	内輪リヤ		5013
60 土師・灰白身		5B0D中層	①312, ①343	—	焼粘土質	19797/4・黄	1/10	1	内輪リヤ, 内輪リヤ		5013
61 土師・灰白身		5B0D中層	①317, ①376	—	焼粘土質	9797/4・黄	1/10	1	内輪リヤ, 内輪リヤ		5013
62 土師・小割		5B0D中層	①384	—	焼粘土質	9797/4・黄	2/3	—		5013	
63 土師・小割		5B0D上層	①318, ①388	—	焼粘土質	73937/6・黄	3/3	1-2	内輪リヤ・焼輪リヤ		5013
64 土師・灰白身		5B0D中層	①312, ①343, ①381, ①383, ①385	—	焼粘土質	9797/4・黄	2/3	1-2	内輪リヤ, 内輪リヤ		5019
65 土師・灰白身		5B0D上層	①315, ①386	—	焼粘土質	9796/4・黄	1線	1-2	内輪リヤ		5019
66 土師・灰白身		5B0D上層	①316, ①385	—	焼粘土質	9796/4・黄	1/20	1-2	内輪リヤ, 内輪リヤ		5015
67 土師・灰白身		5B0D中層	①318, ①381	—	焼粘土質	19798/4・黄	1/4	1-2	内輪リヤ, 内輪リヤ		5013
68 土師・灰白身		5B0D中層	①312, ①343, ①381, ①383	—	焼粘土質	19798/4・黄	1/9	1-2	内輪リヤ, 内輪リヤ		5014
69 土師・灰白身		5B0D上層	①318, ①386, ①388	—	焼粘土質	73937/4・黄	1/12	1	内輪リヤ, 内輪リヤ		5014
70 土師・灰白身		5B0D上層	①318, ①381	—	焼粘土質	9796/4・黄	1/20	1	内輪リヤ		5014
71 土師・灰白身		5B0D中層	①318, ①381	—	焼粘土質	19798/4・黄	1/7	1	内輪リヤ, 内輪リヤ		5014
72 土師・灰白身	5B0D中層	①321	—	焼粘土質	72935/5・黄	1/30	1-2	内輪リヤ, 内輪リヤ		5013	
73 石・灰白	5B0D	①377	—	石・灰白	23878/1	—	—			5013	
74 石・灰白	5B0D中層	①378, ①384	—	石・灰白	23878/2	—	—			5013	
5005	75 磁器・灰白身	5B0D上層	①318, ①384	焼粘土質	72977/1・黄	1/4	1/1			5013	
	76 磁器・灰白身	5B0D上層	①312, ①360	焼粘土質	19777/1・黄	1/9	1/1			5013	
	77 土師・灰白身	5B0D中層	①320	—	焼粘土質	23796/4・黄	1/30	1	内輪リヤ		5017
	78 土師・小割	5B0D上層	①318, ①381	—	焼粘土質	9796/4・黄	1/20	1	内輪リヤ		5013
	79 土師・灰白身	5B0D上層	①318, ①381	—	焼粘土質	19798/4・黄	7/8	—			5013
	80 土師・灰白身	5B0D上層	①318, ①381	—	—	—	—	—			5013
	81 土師・灰白身	5B0D上層	①318, ①381	—	—	—	—	—			5013
	82 土師・灰白身	5B0D上層	①318, ①381	—	—	—	—	—			5013
	83 土師・灰白身	5B0D上層	①318, ①381	—	—	—	—	—			5013
	84 土師・灰白身	5B0D上層	①318, ①381	—	—	—	—	—			5013
5006	85 磁器・灰白身	5B0D中層	①312, ①343, ①381, ①383	焼粘土質	72977/1・黄	1/4	1線			5013	
	86 磁器・灰白身	5B0D中層	①312, ①343, ①381, ①383	焼粘土質	72977/1・黄	1/4	1線			5013	
	87 磁器・灰白身	5B0D中層	①312, ①343, ①381, ①383	焼粘土質	72977/1・黄	1/4	1線			5013	
	88 磁器・灰白身	5B0D中層	①312, ①343, ①381, ①383	焼粘土質	72977/1・黄	1/4	1線			5013	









付表 額見町遺跡出土古代遺物観察表

遺物番号	種類・器種	出土地点	図録 No.0	出土	色・地	残存	時期	調査者	備考	写真番号
3021	鏡・銅・銅人面尊	S22F113	11747, 10230, 10212, 10210, 10211	銅造像	576.1・紫銅	1/2	22	大谷アサ	鏡1面, 鏡柄銅片	5224
306	鏡・銅人面尊	S22F11	11148, 10216	銅造像	576.1・紫銅	1/2	22	大谷アサ	鏡1面	5223
307	鏡・銅人面尊	S22F12-30-30-C7層	11150, 10218, 10213, 10214, 10215	銅造像	576.1・紫銅	焼付	22	大谷アサ	鏡1面, 鏡柄銅片	5225
308	鏡・銅人面尊	S22D1	11165, 10216	銅造像	1070.1・黒	1/2	22	大谷アサ	鏡1面	5224
309	鏡・銅人面尊	S22F11-30-30-C7層	11150, 10216	銅造像	1070.1・黒	1/2	22	大谷アサ	鏡1面	5227
310	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216	銅造像	576.1・紫銅	2/5	22	大谷アサ	鏡1面, 鏡柄銅片	5225
311	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216	銅造像	576.1・紫銅	1/4	22	大谷アサ	鏡柄銅片	5225
312	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216	銅造像	576.1・紫銅	1/4	22	大谷アサ	鏡1面, 内穴中央部	5225
313	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216	銅造像	737.7・黒	5/6	22	内野直樹・中野隆雄	鏡1面	5225.30
314	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216	銅造像	737.7・黒	1/5	22	内野直樹	鏡1面	5225.30
315	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216	銅造像	877.1・黒	1/5	22-23	内野直樹	鏡1面	5225.24
316	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216	銅造像	273.9・赤銅	3/4	22-23	内野直樹	鏡1面	5225.21
317	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216	銅造像	737.7・黒	1/2	22	内野直樹・中野隆雄	鏡1面	5225.28
318	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216	銅造像	737.7・黒	5/6	22	内野直樹・中野隆雄	鏡1面, 内穴中央部	5225.15
319	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216	銅造像	2076.1・紫銅	1/4	22	内野直樹	鏡1面	5225.19
320	鏡・銅人面尊	S22D1	11148, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	3/5	22-23	内野直樹	鏡1面	5225.18
321	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹, 藤原利雄・川口洋一	鏡1面	5225.17
322	鏡・銅人面尊	S22D1	11141, 10215, 10218, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	5/6	22	内野直樹	鏡1面	5225.10
323	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/4	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
324	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
325	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
326	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
327	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
328	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
329	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
330	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
331	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
332	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
333	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
334	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
335	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
336	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
337	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
338	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
339	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
340	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
341	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
342	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
343	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
344	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
345	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
346	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
347	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
348	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
349	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
350	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
351	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
352	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
353	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
354	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
355	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
356	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
357	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
358	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
359	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20
360	鏡・銅人面尊	S22F11	11150, 10216, 10211, 10210	銅造像	2076.1・紫銅	1/2	22	内野直樹	鏡1面	5225.20









付表 瀬見町遺跡出土古代遺物観察表

高塚	番号	種類・形態	出土地点	高さ (cm)	出土	色・質	残存	時期	調査等	備考	実照番号
SK06	607	銅貨・高坪型	SK36-30	11112	瀬見町小石人	577.1・高坪	埋没品	11	埋下跡ナシ	製造地不詳、埋没品類	SK362
	608	銅貨・高坪型	SK36-31	1196	埋没品	577.1・高坪	1・9	1.2	埋没品類	埋没品類	SK363
	609	銅貨・高坪型	SK36-32	1197	埋没品	237.1・高坪	1.1	1.2	埋没品類	埋没品類	SK364
	610	銅貨・高坪型	SK36-33	変形18	高加瀬郡	576.1・高坪	埋没品	11	埋下跡ナシ	埋没品類	SK364
	700	銅貨・高坪型	SK36-40	11033	高加瀬郡	237.1・高坪	1.6	0.2	ナメテリ	高坪型	SK362
	701	銅貨・高坪型	SK363	埋没品1, 埋没品2	高加瀬郡	576.1・高坪	1.0	0.2		高坪型	SK361
	702	銅貨・高坪型	SK364	11116, 高坪, 高坪1	高加瀬郡	576.1・高坪	1.0	0.2		高坪型	SK363
	703	銅貨・高坪型	SK36-179	11135, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.4	0.2		埋没品類	SK364
	704	銅貨・高坪型	SK36-128-下層	11113, 高坪1	高加瀬郡	576.1・高坪	3.2	0.2		埋没品類	SK365
	705	銅貨・高坪型	SK36-29	11115	高加瀬郡	576.1・高坪	1.1	0.2	ナメテリ	高坪型	SK361
	706	銅貨・高坪型	SK36-184-101	1194, 高坪1	高加瀬郡	577.1・高坪	11.0	0.2		高坪型	SK364
	707	銅貨・高坪型	SK36A	高坪1	高加瀬郡	576.1・高坪	1.0	0.2		高坪型	SK360
	708	銅貨・高坪型	SK36-178	11216, 高坪1, 高坪16	高加瀬郡	577.1・高坪	11.0	0.2		高坪型	SK360
	709	銅貨・高坪型	SK36	11113	高加瀬郡	576.1・高坪	1.0	1		高坪型	SK360
	710	銅貨・高坪型	SK36-183	11116, 高坪1	高加瀬郡	577.1・高坪	1.0	0.2		高坪型	SK364
711	銅貨・高坪型	SK36-101	-	高加瀬郡	737.6・高坪	埋没品	1	高坪ナシ		SK365	
712	銅貨・高坪型	SK36-185	11213, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.1	0.2	高坪ナシ	高坪型	SK364	
713	銅貨・高坪型	SK36-22	11117, 高坪1	高加瀬郡	107.6・高坪	1.0	0.2	内側ナシ, 高坪ナシ	高坪型	SK365	
714	銅貨・高坪型	SK36-413-下層	11094, 高坪1	高加瀬郡	107.6・高坪	1.1	0.2	内側ナシ	高坪型	SK366	
715	銅貨・高坪型	SK36-182	11174, 高坪1	高加瀬郡	576.1・高坪	1.4	0.2	高坪ナシ		SK366	
716	銅貨・高坪型	SK36-182	11211, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.1	0.2	埋没品類		SK367	
717	銅貨・高坪型	SK36-49-160	11126, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	内側ナシ, 高坪ナシ	高坪型	SK369	
SK07	718	銅貨・高坪型	SK37-40	11128, 高坪1	高加瀬郡	577.1・高坪	1.0	1.1	埋下跡ナシ		SK371
	719	銅貨・高坪型	SK37-24	11111, 高坪1, 高坪16, 高坪1	高加瀬郡	577.1・高坪	5.6	1.1	埋下跡ナシ	高坪型	SK372
	720	銅貨・高坪型	SK37-35+人19+高坪中	11115, 高坪1, 高坪1, 高坪1	高加瀬郡	577.1・高坪	2.0	1.1	高坪埋没品ナシ	高坪型	SK373
	721	銅貨・高坪型	SK370	11127, 高坪1, 高坪1	高加瀬郡	237.1・高坪	1.1	1.1			SK373
	722	銅貨・高坪型	SK37-29	11015, 高坪1, 高坪1	高加瀬郡	577.1・高坪	1.4	1.1			SK374
	723	銅貨・高坪型	SK37-116	11121	高加瀬郡	237.1・高坪	1.0	1.1			SK374
	724	銅貨・高坪型	SK37-11	高坪1	高加瀬郡	54.0・高坪	埋没品	1	高坪ナシ		SK375
	725	銅貨・高坪型	SK37-112	1103, 高坪1, 高坪1	高加瀬郡	54.0・高坪	埋没品	1.1	高坪ナシ		SK376
	726	銅貨・高坪型	SK37-25+高坪+高坪中	高坪1, 高坪1, 高坪1	高加瀬郡	54.0・高坪	1.0	1			SK379
	727	銅貨・高坪型	SK37-11+高坪+高坪中	11126, 高坪1, 高坪1	高加瀬郡	54.0・高坪	11.0	1.1	高坪埋没品ナシ	高坪型	SK370
	728	銅貨・高坪型	SK371	11175	高加瀬郡	107.6・高坪	1.1	1.1	高坪ナシ, 高坪ナシ	高坪型	SK371
	729	銅貨・高坪型	SK37-116	11121	高加瀬郡	576.1・高坪	1.0	1.1	高坪ナシ, 高坪ナシ	高坪型	SK372
	730	銅貨・高坪型	SK37-116-10-14	11184, 高坪1, 高坪1, 高坪1	高加瀬郡	576.1・高坪	1.4	1.1	高坪ナシ, 高坪ナシ	高坪型	SK373
	731	銅貨・高坪型	SK37-11	11105, 高坪1	高加瀬郡	237.6・高坪	1.1	1.1	高坪ナシ, 高坪ナシ	高坪型	SK374
	732	銅貨・高坪型	SK37-11-1	-	高加瀬郡	576.1・高坪	高坪型	1.1	高坪ナシ, 高坪ナシ	高坪型	SK374
733	銅貨・高坪型	SK37-10	11185, 高坪1	高加瀬郡	107.6・高坪	1.1	1.1	高坪ナシ, 高坪ナシ	高坪型	SK375	
SK08	734	銅貨・高坪型	SK370	55+59+13	-	-	1-4	-	-	高坪埋没品, 高坪埋没品	SK372
	735	銅貨・高坪型	SK37-116-10-10+高坪	SK37-116-10-10+高坪	11184, 高坪1, 高坪1, 高坪1	高加瀬郡	237.1・高坪	1.2	0.2	高坪ナシ	SK374
	736	銅貨・高坪型	SK36-11	11140, 高坪1	高加瀬郡	237.1・高坪	1.8	0.1	0.2		SK375
	737	銅貨・高坪型	SK36-49	11014, 高坪1	高加瀬郡	237.1・高坪	1.0	0.2	高坪ナシ	高坪型	SK361
	738	銅貨・高坪型	SK36-204	1184, 高坪1	高加瀬郡	577.1・高坪	1.8	0.2	高坪ナシ	高坪型	SK362
	739	銅貨・高坪型	SK36-200	1186, 高坪1, 高坪1, 高坪1	高加瀬郡	576.1・高坪	2.3	0.2	高坪ナシ	高坪型	SK365
	740	銅貨・高坪型	SK37-1	11183	高加瀬郡	107.6・高坪	1.8	0.2	0.2		SK366
	741	銅貨・高坪型	SK36-204-262	11184, 高坪1	高加瀬郡	237.1・高坪	高坪型	0.2	高坪ナシ	高坪型	SK361
	742	銅貨・高坪型	SK36-119	11126, 高坪1	高加瀬郡	237.1・高坪	高坪型	0.2			SK362
	743	銅貨・高坪型	SK36-114-120+高坪(1+高坪)	1181, 高坪1, 高坪1, 高坪1	高加瀬郡	54.0・高坪	高坪型	0.2	高坪ナシ	高坪型	SK367
	744	銅貨・高坪型	SK36-119	1184, 高坪1, 高坪1, 高坪1	高加瀬郡	576.1・高坪	2.5	0.2	高坪ナシ	高坪型	SK368
	745	銅貨・高坪型	SK36-20	11140, 高坪1	高加瀬郡	237.1・高坪	1.0	0.2	高坪ナシ	高坪型	SK369
	746	銅貨・高坪型	SK36-20	11140, 高坪1	高加瀬郡	237.1・高坪	1.0	0.2	高坪ナシ	高坪型	SK369
	747	銅貨・高坪型	SK36-206+高坪	11158, 高坪1	高加瀬郡	576.1・高坪	1.5	1.1			SK369
	748	銅貨・高坪型	SK36A	11116	高加瀬郡	737.1・高坪	1.0	1.1			SK369
749	銅貨・高坪型	SK36-206+高坪+高坪中	11116, 高坪1, 高坪1	高加瀬郡	237.1・高坪	1.0	1.1	高坪埋没品ナシ	高坪型	SK361	
750	銅貨・高坪型	SK36-205	高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	埋没品	0.2	高坪ナシ		SK363	
751	銅貨・高坪型	SK36-1	11116	高加瀬郡	107.6・高坪	1.1	0.2	高坪ナシ	高坪型	SK364	
752	銅貨・高坪型	SK36-10	高坪1	高加瀬郡	237.6・高坪	埋没品	0.2	高坪ナシ		SK364	
753	銅貨・高坪型	SK36-18	11115, 高坪1, 高坪1	高加瀬郡	576.1・高坪	1.2	0.2	高坪ナシ	高坪型	SK365	
754	銅貨・高坪型	SK36-20	高坪1	高加瀬郡	107.6・高坪	1.4	-	高坪ナシ		SK365	
755	銅貨・高坪型	SK36-1	16+22+11	高加瀬郡	237.6・高坪	埋没品	-	-	-	SK366	
756	銅貨・高坪型	SK36-41-49-206-207-下層	11216, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	2.3	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK367	
757	銅貨・高坪型	SK36-41-41-下層	11114, 高坪1, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.9	0.2	高坪ナシ	高坪型	SK367	
758	銅貨・高坪型	SK36-43-01下層	11113, 高坪1	高加瀬郡	576.1・高坪	1.8	0.2	高坪ナシ	高坪型	SK369	
759	銅貨・高坪型	SK36-119	11118, 高坪1, 高坪1	高加瀬郡	576.1・高坪	1.9	0.2	高坪ナシ	高坪型	SK368	
760	銅貨・高坪型	SK36-219-220	11119, 高坪1, 高坪1	高加瀬郡	237.6・高坪	1.2	0.2	高坪ナシ	高坪型	SK369	
761	銅貨・高坪型	SK36-105-100	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.4	0.2	高坪ナシ	高坪型	SK361	
762	銅貨・高坪型	SK36-119-1下層	11210, 高坪1	高加瀬郡	107.6・高坪	1.1	0.2	高坪ナシ, 高坪ナシ	高坪型	SK361	
763	銅貨・高坪型	SK36-12-300-下層	11210, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪ナシ	高坪型	SK361	
764	銅貨・高坪型	SK36-119-1下層	11211, 高坪1	高加瀬郡	576.1・高坪	1.8	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK364	
765	銅貨・高坪型	SK36-180-90-110-120	-	高加瀬郡	237.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
766	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
767	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
768	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
769	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
770	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
771	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
772	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
773	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
774	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
775	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
776	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
777	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
778	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
779	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
780	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
781	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
782	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
783	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
784	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
785	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
786	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
787	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
788	銅貨・高坪型	SK36-180-90	11214, 高坪1	高加瀬郡	737.6・高坪	1.0	0.2	高坪埋没品, 高坪埋没品	高坪型	SK368	
789											







付表 額見町遺跡出土古代遺物観察表

遺物番号	種類・状態	出土地点	位置 (m)	出土層	色・傷	長	幅	厚	重量	調査者	備考	撮影番号
S104	29 土師・小瓶	S104-79-103	T103	焼成土(平土)	23713・黒灰	1.0	1.1	0.1	1.1	内側平直、内口平	内側縁直	S104-11
	30 土師・小瓶	S104-79-104	C114	焼成土	23737/4・黒灰	1.5	1.1	0.1	1.1	内側平直、内口平	内側縁直	S104-20
	31 土師・小瓶	S104-79-105	D174	焼成土	10788/2・赤	1.5	1.1	0.1	1.1	内外平直、内口平	内側縁直、内口縁直	S104-28
	32 土師・小瓶	S104-81+101	焼成土	10787/3・赤	1.5	1.1	0.1	1.1	内外平直、内口平		S104-35	
	33 土師・小瓶	S104-81+102	焼成土	10788/4・赤	1.5	1.1	0.1	1.1	内外平直、内口平		S104-37	
	34 土師・小瓶	S104-75	焼成土	10787/4・赤	1.5	1.1	0.1	1.1	内外平直	内側縁直	S104-38	
	35 土師・小瓶	S104-82	焼成土	10788/4・黒	1.5	1.1	0.1	1.1	内外平直		S104-47	
	36 土師・小瓶	S104-77	焼成土	23737/4・赤	1.4	1.1	0.1	1.1	内外平直		S104-26	
	37 土師・小瓶	S104-77+108	T101, 焼成土	10787/3・赤	1.5	1.1	0.1	1.1	内外平直、内口平	内側縁直	S104-27	
	38 土師・小瓶	S104-13-4	T101, 焼成土	10787/4・赤	1.4	1.1	0.1	1.1	内外平直、内口平	内側縁直、内口縁直	S104-23	
	39 土師・小瓶	S104-73	焼成土	10787/2・赤	1.6	1.1	0.1	1.1	内外平直、内口平		S104-34	
	40 土師・小瓶	S104-11	T102, 焼成土	23737/4・赤	1.30	1.1	0.1	1.1	内外平直、内口平	内側縁直、内口縁直	S104-25	
	41 土師・小瓶	S104-15+下層	T120	焼成土	23737/3・赤	1.70	1.1	0.1	1.1	内外平直、内口平	内側縁直、内口縁直	S104-29
	42 石・磁器	内側7+985, 灰7	石巻石	-	焼成	-	-	-	-	底穴直、孔下縁直、底直	底直	S104-22
	43 石・土器	S104-75	3.60, 2.76, 高150	土師土質(焼成土)	-	焼成	-	-	-	土師土質、輪郭平直縁直		S104-28
S1040	44 土師・小瓶	S1040-11+58	T124, 焼成土	焼成土	10771・赤	4.8	1.8	0.1	1.1	内外平直	底直	S104-12
	45 土師・小瓶	S1040-14	焼成土	10788/4・赤	4.8	1.8	0.1	1.1	内外平直		S104-22	
S1042	46 土師・小瓶	S1040-7	T102, 焼成土	焼成土	10787/4・赤	1.8	1.1	0.1	1.1	内外平直、内側縁直	内側縁直	S104-33
S1044	47 土師・小瓶	S1040-2	T101, 土師土質, 焼成土	焼成土	500/2・赤	1.5	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S104-21
	48 土師・小瓶	S1040-13+60	T103, 土師土質, 焼成土	焼成土	10825/1・赤	1.8	1.1	0.1	1.1	内外平直		S104-44
S1045	49 土師・小瓶	S1040-3	091, 土師土質	焼成土	10771/1・赤	1.8	1.1	0.1	1.1	内外平直	内側縁直	S104-45
S1046	50 土師・小瓶	S1040-9	T102, 土師土質	焼成土	10787/3・赤	1.5	1.1	0.1	1.1	内外平直		S104-36
S1048	51 土師・小瓶	S1040-11+10+13	T101, 焼成土	焼成土	10781/1・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S104-32
	52 土師・小瓶	S1040-13+18	焼成土	10771・赤	1.2	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S104-35	
	53 土師・小瓶	S1040-5	焼成土	10771・赤	1.2	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S104-31	
	54 土師・小瓶	S1040-10	T102	焼成土	10788/3・赤	1.70	1.1	0.1	1.1	内外平直	内側縁直	S104-43
	55 土師・小瓶	S1040-2	焼成土	10787/3・赤	1.5	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S104-37	
S1049	56 土師・小瓶	S1040-14	T102	焼成土	10787/3・赤	1.5	1.1	0.1	1.1	内外平直、内口平		S104-27
	57 土師・小瓶	S1040-14	T104	焼成土	500/4・赤	1.8	1.1	0.1	1.1	内外平直		S104-28
	58 土師・小瓶	S1040-2	T104	焼成土	500/2・赤	1.5	1.1	0.1	1.1	内外平直		S104-21
S1050	59 土師・小瓶	S1050-2	T102, 焼成土	焼成土	10787/4・赤	1.5	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S105-2
S1052	60 土師・小瓶	S1050-2	T102, 焼成土	焼成土	10787/4・赤	1.5	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S105-3
S1054	61 土師・小瓶	S1050-11+10+13+18+19+20	T101, 焼成土	焼成土	10771・赤	1.5	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S105-1
	62 土師・小瓶	S1050-2	T104, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直、内口平	底直	S105-3
	63 土師・小瓶	S1050-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S105-3
S1056	64 土師・小瓶	S1050-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S105-3
S1058	65 土師・小瓶	S1050-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S105-3
S1060	66 土師・小瓶	S1060-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S106-1
S1062	67 土師・小瓶	S1060-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S106-2
S1064	68 土師・小瓶	S1060-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S106-3
S1066	69 土師・小瓶	S1060-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S106-4
S1068	70 土師・小瓶	S1060-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S106-5
S1070	71 土師・小瓶	S1070-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S107-1
S1072	72 土師・小瓶	S1070-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S107-2
S1074	73 土師・小瓶	S1070-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S107-3
S1076	74 土師・小瓶	S1070-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S107-4
S1078	75 土師・小瓶	S1070-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S107-5
S1080	76 土師・小瓶	S1080-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S108-1
S1082	77 土師・小瓶	S1080-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S108-2
S1084	78 土師・小瓶	S1080-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S108-3
S1086	79 土師・小瓶	S1080-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S108-4
S1088	80 土師・小瓶	S1080-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S108-5
S1090	81 土師・小瓶	S1090-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S109-1
S1092	82 土師・小瓶	S1090-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S109-2
S1094	83 土師・小瓶	S1090-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S109-3
S1096	84 土師・小瓶	S1090-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S109-4
S1098	85 土師・小瓶	S1090-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S109-5
S1100	86 土師・小瓶	S1100-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S110-1
S1102	87 土師・小瓶	S1100-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S110-2
S1104	88 土師・小瓶	S1100-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S110-3
S1106	89 土師・小瓶	S1100-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S110-4
S1108	90 土師・小瓶	S1100-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S110-5
S1110	91 土師・小瓶	S1110-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S111-1
S1112	92 土師・小瓶	S1110-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S111-2
S1114	93 土師・小瓶	S1110-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S111-3
S1116	94 土師・小瓶	S1110-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S111-4
S1118	95 土師・小瓶	S1110-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S111-5
S1120	96 土師・小瓶	S1120-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S112-1
S1122	97 土師・小瓶	S1120-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S112-2
S1124	98 土師・小瓶	S1120-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S112-3
S1126	99 土師・小瓶	S1120-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S112-4
S1128	100 土師・小瓶	S1120-2	T102, 焼成土	焼成土	10788/3・赤	2.4	1.1	0.1	1.1	内外平直	底直	S112-5

## 古代遺物観察記載上の凡例

観察物の出土状況については、前記観察表で表示し、追加調査は南西縁部北側ないしは内側、北側など1区画の範囲内、南西縁部北側調査箇所より部分区域を指示する。焼土は焼成土である。若くは土質の小石、くずなど含有物の多少あるものには赤を付す。砂の少ない貝殻のものには土を付す。砂が多量な(土質)の中や砂質のものにはラシとした。なお、焼成土は焼成土のものがあったが、焼成土と推定可能なものもは焼成土と付した。

土師器は土質に土師土質と推定されたものが認められる場合は焼成土と併記する。焼成土と推定されたものは焼成土と推定されたものがある場合は焼成土と推定されたものに分けられ、さらに以下のとおり付した。

焼成土1-焼成土と推定されたものが認められる場合は、焼成土(黒色・褐色・白色)を多量、黒色焼成土を少量含有する。焼成土のくずは土質のくずが多い。

焼成土2-焼成土1の砂粒(白色・褐色)を多量、褐色の焼成土を少量含有する。

焼成土3-焼成土1に白色くずや焼成土くずを中量から多量含有する焼成土。

焼成土4-土質焼成土の多い焼成土。焼成土のくずは土質のくずが多い。

焼成土5-土質焼成土の多い焼成土。焼成土のくずは土質のくずが多い。

焼成土6-土質焼成土の多い焼成土。焼成土のくずは土質のくずが多い。

焼成土7-土質焼成土の多い焼成土。焼成土のくずは土質のくずが多い。

焼成土8-土質焼成土の多い焼成土。焼成土のくずは土質のくずが多い。

焼成土9-土質焼成土の多い焼成土。焼成土のくずは土質のくずが多い。

焼成土10-土質焼成土の多い焼成土。焼成土のくずは土質のくずが多い。

焼成土11-土質焼成土の多い焼成土。焼成土のくずは土質のくずが多い。

焼成土12-土質焼成土の多い焼成土。焼成土のくずは土質のくずが多い。

焼成土13-土質焼成土の多い焼成土。焼成土のくずは土質のくずが多い。

焼成土14-土質焼成土の多い焼成土。焼成土のくずは土質のくずが多い。

焼成土15-土質焼成土の多い焼成土。焼成土のくずは土質のくずが多い。

焼成土16-土質焼成土の多い焼成土。焼成土のくずは土質のくずが多い。

焼成土17-土質焼成土の多い焼成土。焼成土のくずは土質のくずが多い。

焼成土18-土質焼成土の多い焼成土。焼成土のくずは土質のくずが多い。

焼成土19-土質焼成土の多い焼成土。焼成土のくずは土質のくずが多い。

焼成土20-土質焼成土の多い焼成土。焼成土のくずは土質のくずが多い。

焼成土21-土質焼成土の多い焼成土。焼成土のくずは土質のくずが多い。

焼成土22-土質焼成土の多い焼成土。焼成土のくずは土質のくずが多い。

焼成土23-土質焼成土の多い焼成土。焼成土のくずは土質のくずが多い。

## 古代土師器観察記載上の凡例

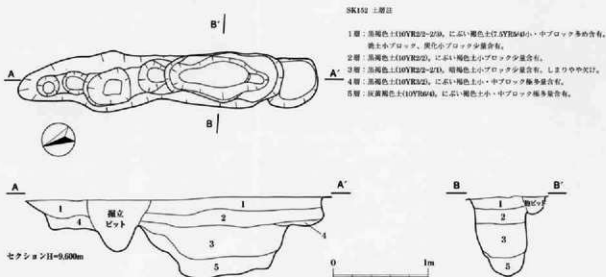
## 第VI章 縄文時代以前の遺構と遺物

### 第1節 遺構と遺物の分布状況

本章では額見町遺跡全域の資料を対象に報告する。本遺跡全域から縄文時代のもと考えられる土器・石器が出土している。これ以前のもは確認されていない。遺物の分布は、1グリッド内に1点出土するという状況が殆どで、多くても3点程度が2～3箇所といったところである。極端な集中箇所はなく、しいて言えばA区南東側のあ～と-17～23グリッド、B区北軸中央ライン付近、C区中央付近、G・H区の土器だまり箇所や道路跡に比較的多くまわっていると云えようが、全体としては散布程度である。

遺構はC区SK152の土坑1基のみ縄文時代の可能性がある。この土坑は黒褐色土主体の覆土をもつ深さ85cm、長さ315cm、幅55cmの長楕円形のもので、同時代の土器破片が1点出土している。この土坑の検出箇所がC区削平区域であるので、本来深さはもっとあったと思われ、落とし穴土坑として役割を担った可能性がある。

遺物は、包含層や古代遺構である竪穴建物跡の崩り方土坑や掘立柱建物跡の柱穴内、廃棄土坑等から出土するものがあり、後世に紛れ込んだといった出土状況である。遺物には摩滅したものも多く、地表に露出していたものがたまたま遺構内に混入した可能性は、非常に高い。道路跡埋め敷きと共に出土する石器もある。後の世に縄文時代の遺物と知らず、石として意識的に使った例となろう。



第157図 SK152平面図・覆土セクション図(S=1/40)

### 第2節 遺物

#### 1. 縄文土器

出土数は、破片数で40点、個体数で18個体と少ない。出土したうち、実測可能なものは10点のみであった。なお以下記述する色調での記号は、『新版標準土色帖』に基づいている。

##### (1) 土器観察

1は深鉢型土器の口縁部で、口径推定14.8cm、残存高6.0cmを測り、色調は外面にぶい橙色7.5YR7/4、内面浅黄橙色7.5YR8/4、断面は黒色を呈す。出土地点は、え23Gr包含層下層。口縁部から3cm下に横方向の半隆起線が3条確認できるが、半截竹管の平行沈線が重なって3条となっており、重なり部分の中央線は太いものとなっている。この下に斜め方向の平行する半隆起線が残存部分で確認できる。胎土は、粘土に焼成土器で赤色または橙色を呈す粉砕粒(以下焼成土器の粉砕粒と記述)が多量に混入し、砂混入は少なく手触りが柔らかい。

2はA地区い17Gr包含層下層出土の口縁部破片で、煎手状を呈す幅0.6cm、厚さ0.2～0.5cmの浮帯をもつものである。浮帯右側が半截竹管で削られており、基帯と呼ぶべきであろうか。口縁部も浮帯と同じように盛り上げて成形されている。色調は外面にぶい橙色7.5YR7/3、内面にぶい橙色～橙色7.5YR7/3～7/6、断面

は褐灰色であった。胎土は焼成土器の粉砕粒を混入するが、砂は少なく手触りが柔らかい。

3は深鉢型土器と考えられる胴底部破片で、厚さ0.8～1.5cmを測る。外面に縄文施文が確認でき、無節の燃糸文が部分的に確認できるものである。原体RRの可能性が高い。内面には底部転換点で指撫でが確認でき、焼成はやや堅緻であり、色調は外面浅黄褐色10YR8/3、内面橙色5YR6/6、断面は灰黒色を呈す。出土地点はA地区う22Gr包含層下層。胎土は砂と焼成土器の粉砕粒を多量に混入する。

4は外面に、浮帯を器面にしっかり付着させて周囲を沈線で縁取った意仲区画(木下1986)内にD型刺突文(工藤1985)をもつもので、2箇所の意仲区画間に斜め方向の沈線が施されている。高、外面の一部に煤が付着している。内面中央には、若干絞り込んだような痕跡が残るものの、よく撫でられている。色調は、外面が浅黄褐色7.5YR8/3、内面が浅黄褐色7.5YR8/4～8/6、断面は黒灰色であった。胎土は、粘土への砂混入が少なく、手触りが柔らかい。また、焼成土器の粉砕粒が混入する。出土地点は、B区さ37Gr包含層である。

5は胴部破片で、外面は縄文施文がなされているが、この施文は残存部分の一部分で確認でき、その他は撫でつけられたような痕跡があって、判断が難しいところである。胎土から縄文土器と判断し、実測した。施文は無節の燃糸文で、原体はRRと思われる。内面では粘土粒痕跡が確認できる。焼成は非常に良好で、やや堅緻な質を持っている。色調は外面にぶい黄褐色10YR7/3、内面にぶい黄褐色10YR7/4、断面は黒灰色を呈し、出土地点はA地区う22Gr包含層下層。胎土は焼成土器粉砕粒を多量に混入するが、砂混入は少ない。

6はC地区SKI52から出土した底部破片で、底径6.8cm、残存高3.8cmを測る。内外とも摩耗が著しく、地紋やモチーフが確認できない。胎土は多量の砂、石粒、焼成土器粉砕粒を混入する。

7はA地区え23Gr包含層下層出土で、底径7.0cm、残存高3.9cmを呈す底部破片。外面には残存部分で縦方向12条の半隆起線が確認でき、半截竹管の押し当てが弱く、やや沈線状をなす。内面底部から胴部への転換点で爪痕が確認できる。色調は外面浅黄褐色10YR8/4、内面橙色5YR7/6、断面黒色である。胎土は焼成土器粉砕粒が混入し、砂混入は少なく手触りが柔らかい。

8は底部破片で、底径7.5cmを測る。外面に網代圧痕がころうじて確認でき、内面は工具による撫で後、指撫でが確認できる。色調は外面橙色7.5YR7/6、内面灰褐色7.5YR5/2、断面もほぼ外面と同色を呈す。出土地点はB地区古代竪穴建物SI37床面からだが、紛れ込んだものだろう。底外面には網代圧痕が確認できる。胎土は焼成土器粉砕粒を多量に混入する。

9は深鉢型土器の底部で、H地区P714出土。底径10.2cm、残存高3.5cmを測り、色調は内面にぶい黄褐色10YR7/4、外面橙色2.5YR6/8、断面黒色の生焼け状態を呈す。外面に縦方向の沈線状文、内面は底部から胴部の転換点にかけて少量の粘土が覗き足され、撫でつけられている。また、外面は底部を除き全面に被熱を受けている。底部外面には網代圧痕がころうじて確認できる。胎土は多量の砂と焼成土器粉砕粒を混入する。

10はH地区P451から出土した深鉢型土器の底部である。底径9.4cm、残存高7.5cmを測り、厚さ0.5～0.7cmの薄手で、外面には原体RLの単節縄文が充填され、内面は全面撫でつけられている。胎土は砂混入が少なく、手触りは柔らかい。また、焼成土器粉砕粒も混入する。

## (2) 胎土と土器焼成

基本として粘土素地に、焼成土器粉砕粒または砂を混ぜ込んでいる。出土点数が少ないため、比較することは難しいものの、焼成土器粉砕粒混入が主体で、砂の混入はトータルとして少なく、比較的手触りは柔らかいものが多い。このような手触りの特徴は、北陸での縄文中期後半によく見られるものということである。また、土器の断面は黒色ないし黒灰色、中には褐灰色を呈すものも数点あるものの、基本的に焼きは甘い状態である。3・7は比較的硬めで、柔らかさの中にもよく焼き締まった感触をもっており、焼成時に温度が高くなったものと考えられる。ペースとなる粘土そのものは、在地特有の砂を含む土という特徴を十分備えていると思われる。

## (3) 時期

額見町遺跡出土の縄文土器は、施文から半截竹管による半隆起線文をもつもの、縄文施文をもつもの、浮帯をもつもの、意仲区画に刺突文をもつものと4つの特徴がある。出土土器は破片で小片も多いが、これらの特徴に一致するものを、欄年、様式のもつ特徴に当てはめて考えてみることを試みた。そして、色調や器肉の厚みからも検討してみたいと思う。

【大杉谷式】2の浮帯にはキザミが無く、また実測されていない破片で浮帯を伴うものにも一貫してキザミが施



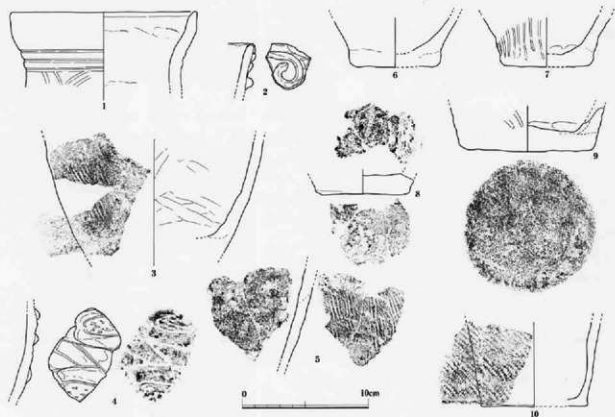
されていないことから、キザミを伴う古府式ではなく、大杉谷式のものと考えられる。

4の浮帯にもキザミは伴っていない。大杉谷式の特徴として、窓枠区画をもつものが捉えられている。そして、浮帯付着が丁寧でしっかりと行われる成形法から次第に簡単に付着させるものへと移行、窓枠区画内の刺突文から綾杉文への移行といった傾向がある。4の場合は各々前者にあたり、大杉谷式の古層と位置づけ可能だろう。【古府式】1の口縁部下括れに施された横方向の半隆起線文、また7の底部際の縦方向半隆起線文は古府式のもつ特徴の一つに当てはまると言えよう。

色調では、実測されていないものも含め、いずれの土器も表面は橙褐色系であって、前期の特徴にあたる褐色系と異なり、縄文中期以降の焼成特徴をもつと考えられる。

器内の厚みでは、10は若干薄手であるものの、その他は器内は厚い。この厚みは、半截竹管による施文を施すことに要因があると言われており、中期の特徴である。半截竹管による施文が行われなくなると共に器内は次第に薄くなる傾向から、10のような薄手のものでは半截竹管による施文を行わなくなる時期以降に位置づけられる。また、中期でも西日本系の器内は薄く、縄文原体がLL、RRという特徴を持っていることがあり、10の場合、原体はRLと在地の縄文特徴である。西日本の器内、在地縄文、そしておそらく在地胎土といった特徴があると言えよう。また、後期においては、丁寧なナデやミガキを施す特徴をもつようだが、10は撫でを施しているもののミガキとまでは言えない。よって中期後半の末あたりが妥当だろう。

資料が非常に少ないため果たして言い切っているものか、判断が難しいところであるが、総見町遺跡から出土した縄文土器は、古府式から大杉谷式に位置づけられると考えられ、縄文中期中葉末から中期後半を経て中期後半末と、3段階の位置づけができると思われる。



第158図 出土縄文土器 (S=1/3)

## 2. 縄文時代の石器

石器は51点出土する。内訳は石鎌4点、石錘1点、石槍1点、楔形石器1点、打製石斧10点、敲打器1点、磨製石斧11点（未製品1）、台石1点、磨石2点、有溝砥石1点、剥片16点、石核1点、不明品2点である。

**石鎌** 打製石鎌4点が出土している。3は基部に挟りが入っている凹基無茎式、他3点は平基のものである。4は刃先が折損しているが長身のものと思われる。

**石錘** 剥片の一端を細めていることから石錘としている。明確な身部を作出していないが、先端加工され摩擦の使用痕がみられるものである。

**石槍** 槍先先頭器が1点出土している。槍先が折損しており、流紋岩製で、木葉形を呈す。

**楔形石器** 表裏に両極剥離が認められるもので、片側の階段状剥離、上下方向からのみ加撃痕を有す。

**打製石斧** 10点出土しており、5点実測した。3種類のものがあり、それぞれ性格が異なるものと考えられる。

8は刃先片面が使用による摩擦で著しい光沢をおび、刃先端は潰れている。近隣の念仏林遺跡で出土する東北系の石筥と呼ばれるものと同類のものと思われる。9・10・11は大型の礫端片を素材とし、剥離・敲打による成形加工を施した石器である。いずれも着柄のためか、基部寄りに挟りが入られている。9は使用により片面全面が摩擦しており、特に刃部先端が光沢を帯びている。11も使用により片面全面が摩擦している。10も使用により片面の刃部半分が摩擦しており、擦痕と言うべきか、線状痕というべきか、線状の傷が両面に残る。12は基部をはじめ全面に調整が施されており、片面の刃に摩擦の使用痕が見られる。

**敲打器** 両側面、端面ともに顕著に敲打痕が認められるものである。敲打だけの目的で使用されたものは、この1点だけである。

**磨製石斧** 未製品を含め11点出土し、6点実測した。実測したものはすべて定角式である。明瞭な稜線により側面が画されるが、17・18は稜線の明確さに欠け、乳棒状の形態を持つ。18の片面は摩擦し、光沢こそないが、つるつるした手触りである。基部で若干の光沢が認められる。17は片方の側面に明確な敲打痕、基部・刃部の両端面に打撃によるものか欠損がある。また、基部の腹・背・側面全体に光沢が認められる。14は唯一石材に花崗岩を用いているもので、側面端部に敲打痕が見られる。16は両側面に光沢が認められ、実測図左側面度合いが強い。13は基部破片で、端面に敲打痕、両側面で摩擦による光沢が著しい。以上の光沢は基部で認められ、柄装着痕の可能性がある。本遺跡からは3種類の磨製石斧が出土していると言える。明確な稜線により側面が画される定角式、定角式だが乳棒状形態もみられるもの、そして18のような定角式で小型のものである。

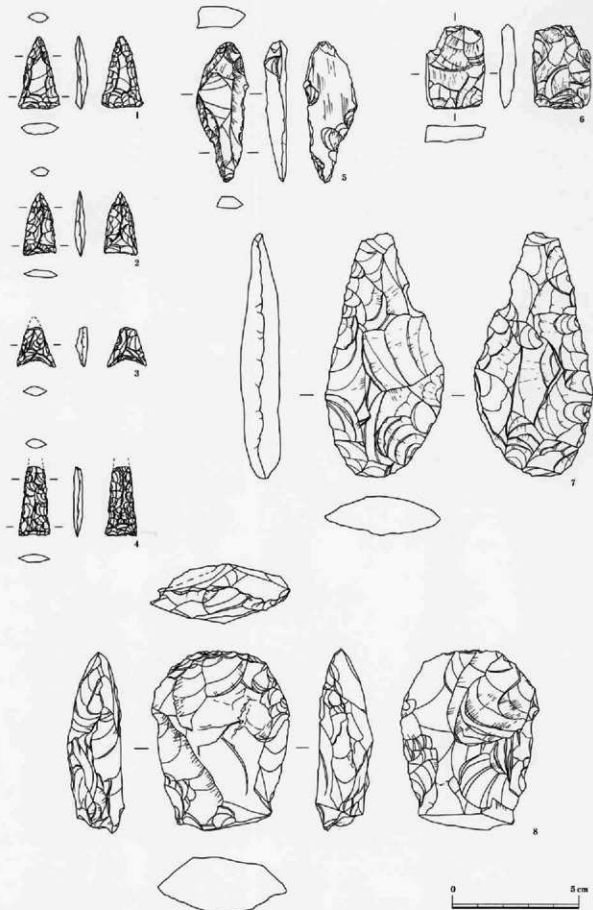
**磨石** 先端の欠損する円礫で、両面中央が摩擦していることから磨石とした。線状痕、傷はなく、つるつるとした感触がある。

**有溝砥石** 断面がV字状を呈す溝状の磨石を中央に有し、この両側に線状の傷が多数確認できるものである。背面中央では、明らかに摩擦し面化しており、こちらの方がよりつるつるとしている。また、先端や側面では敲打痕が確認できる。磨石、敲打器としても使用されたと考えられる。

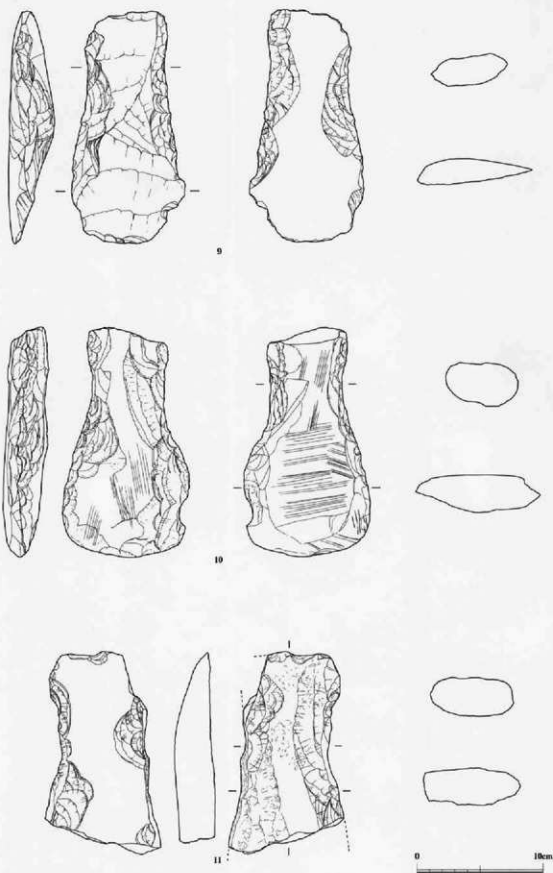
**剥片・石核** 剥片は、16点出土しているが、実測していない。地表面に露出したためと思われるような摩擦の著しいものや、何か他の石器を制作中に同時に割れたような細片が多い。石核は1点出土しているが、破砕的なものであり、櫻田I類（櫻田1988 念仏林遺跡）相当のものと思われる。

## 参考文献

- |                                 |                              |
|---------------------------------|------------------------------|
| 朝日町教育委員会 2004「楊川遺跡」             | 小松市教育委員会 2004「八里向山遺跡群」       |
| 大野市教育委員会 1985「石近次郎遺跡Ⅱ」          | 小松市教育委員会 1994「念仏林南遺跡Ⅰ」       |
| 木下哲夫 1986「常安式 雑感」『福井考古学会会誌 第4号』 | 小松市教育委員会 1988「念仏林遺跡」         |
| 福井考古学会                          | 鈴木道之助 1991「図録・石器入門辞典（縄文）」柏書房 |
| 小林達雄編 1988「古代史復元3 縄文人の道具」講談社    | 戸沢光則編 1994「縄文時代研究辞典」東京堂出版    |



第159図 出土石器(1) (S= 1/3)



第160图 出土石器(2)(S=1/3)



第161図 出土石器(3) (S=1/3)

図号	遺物No.	発掘No.	出土地区	出土Gr.	出土遺構	石造名	充存等	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	打面	調整角	折れ	備考
1	3	26	H区	9.29	上層土層(タマリ)	石造	完形	凝灰岩	28	1.1	4.0	1.67				
2	4	27	H区	6.33	S73.5中層	石造	完形	御石(安山岩)	25	1.3	0.4	1.07				
3	4	28	H区	6.33	北条村(タマリ)5-VIC区	石造	先端折損	御石(安山岩)	1.6	1.5	0.4	0.71				
4	4	28	H区	6.33	上層土層(タマリ)183	石造	先端折損	凝灰岩	2.1	1.2	0.5	1.27				
5	29	30	H区	6.32	SK140	礎石	完形	御石(安山岩)	3.1	2.1	0.5	1.95				
6	17	30	H区	6.32	SK140	棟石	完形	凝灰岩	3.2	2.1	0.5	1.95				両側折損
7	26	10	C区	6.32	SK6 A区上層	石造	先端折損	凝灰岩	9.7	1.5	1.5	47.66				
8	27	12	B区	6.43	東上	打版石造	完形	火山礫凝灰岩	7.1	5.5	2.2	80.52				
9	43	23	H区	6.29	土層(タマリ)5-1267	打版石造	完形	安山岩	18.5	9.0	3.5	513.90				
10	42	22	A区	6.29	SK32上層	打版石造	完形	安山岩	18.3	10.1	3.5	674.90				
11	44	24	H区	6.32	上層土層(タマリ)137	打版石造	半完形	火山礫凝灰岩	18.1	9.1	3.2	558.30				
12	45	25	不明	不明	不明	打版石造	完形	凝灰岩	18.0	7.0	3.3	335.30				
47	47		H区	6.29	上層土層(タマリ)159	打版石造	中央部破片	凝灰岩	8.3	7.5	2.1	242.01				
48	48		H区	6.29	上層土層(タマリ)159	打版石造	破片	火山礫凝灰岩	7.7	6.5	2.4	162.57				
49	49		A区	6.29	上層土層(タマリ)159	打版石造	破片	内蔵凝灰岩	8.4	5.1	1.6	96.00				
50	50		A区	6.29	上層土層(タマリ)159	打版石造	破片	凝灰岩	10.8	5.3	1.4	78.69				
51	51		A区	6.29	上層土層(タマリ)159	打版石造	破片	凝灰岩	10.8	5.3	1.4	78.69				
52	52	17	G区	6.17	S102.587	打版石造	右側破片	凝灰岩	9.0	6.5	2.5	263.17				
53	35	16	G区	6.17	S102.683	打版石造	右側破片	凝灰岩	8.4	7.7	3.6	376.80				
14	35	16	G区	6.19	不明	打版石造	左側破片	凝灰岩	2.5	2.2	1.0	61.8				
15	51	21	A区	6.26	不明	打版石造	完形	凝灰岩	6.1	5.9	2.8	150.52				
16	38	18	B区	6.26	上層土層(タマリ)168	打版石造	完形	安山岩	14.4	6.0	3.8	552.60				
17	40	14	H区	6.25	不明	打版石造	完形	安山岩	13.8	6.5	2.9	327.90				
18	34	13	不明	不明	不明	打版石造	完形	凝灰岩	0.9	3.2	0.7	1.21				
20	20		B区	6.25	S116 P13	打版石造	破片	凝灰岩	5.3	5.5	2.3	138.18				
23	33		B区	6.25	S79.14	打版石造	破片	砂岩?	3.7	4.7	1.2	26.46				
24	37		B区	6.25	土層(タマリ)5-126	打版石造	破片	凝灰岩	3.5	6.0	1.9	28.60				
25	37		B区	6.25	不明	打版石造	破片	凝灰岩	1.2	0.7	0.5	285.36				
41	41		D区	6.25	S102 P3	有蓋石造(木製品)	破片	火山礫凝灰岩	13.3	6.3	2.1	231.89				
19	32	15	D区	6.25	S104 B区後乱	礎石	破片	安山岩	6.3	6.3	3.1	91.81				
20	26	11	H区	6.33	土層(タマリ)30	礎石?	破片	安山岩	7.3	7.7	3.2	91.81				
21	21	19	A区	6.33	上層土層(タマリ)30	礎石	半完形	砂岩	7.0	5.4	3.2	300.92				
21	21	19	C区	6.37	SK9.2	有蓋石造	完形	砂岩	12.6	10.1	5.6	976.60				
5	5		C区	6.37	SK3 A区	礎石	破片	凝灰岩	3.8	3.7	2.3	41.81				
6	6		D区	6.37	不明	礎石	破片	安山岩	4.2	3.5	0.5	15.26			上	
7	7		D区	6.37	S1102	礎石	破片	凝灰岩	4.2	3.5	0.5	10.06	打面			
8	8		C区	6.37	SK180上層	礎石	破片	凝灰岩	3.2	2.5	0.9	7.75	調整角		132	
9	9		C区	6.37	不明	礎石	破片	凝灰岩	2.5	1.8	0.3	1.95	欠損			
10	10		C区	6.37	不明	礎石	破片	凝灰岩	2.6	2.1	0.7	3.05	不明			
11	11		C区	6.38	不明	礎石	破片	凝灰岩	2.5	2.7	0.8	6.78	不明			
12	12		C区	6.38	不明	礎石	破片	凝灰岩	2.5	2.9	0.7	2.72	不明			
13	13		C区	6.38	SK138 C区	礎石	破片	凝灰岩	4.0	1.1	0.4	41.12	調整角		118	
14	14		D区	6.38	SK128 B区	礎石	破片	凝灰岩	2.1	2.5	0.5	2.09	欠損			
15	15		C区	6.38	SK1 P6	礎石	破片	凝灰岩	3.1	3.8	1.5	15.58	欠損		左	
16	16		C区	6.38	SK132 I48	礎石	破片	安山岩	6.8	3.5	1.4	20.82	欠損			
18	18		C区	6.38	SK115 161	礎石	破片	不明	3.9	2.9	1.4	19.61	不明			
19	19		C区	6.38	SK117	礎石	破片	不明	4.5	5.1	1.8	51.57	欠損			
22	22		H区	6.38	SK38 C区下層	礎石	破片	凝灰岩	2.8	1.6	0.4	21.3	不明			
23	23		C区	6.38	S78.587	有蓋石造(木製品)	不明(破文でない?)	御石(安山岩)	6.6	3.6	1.1	1.35	欠損			
24	24		G区	6.38	SK100 D区	不明(破文でない?)	不明(破文でない?)	安山岩	6.7	1.5	0.2	42.00				
25	25		G区	6.38	P1681	不明(破文でない?)	不明(破文でない?)	内蔵凝灰岩	5.0	3.6	3.1	46.22				

## 出土石造物属性表

## 第Ⅶ章 総 括

### －額見町遺跡の古代竪穴建物構造と造り付けカマドについて－

#### 第1節 古代竪穴建物構造に関する検討

竪穴建物に関する構造復元研究は、近年、主に上屋構造の復元と間取りや生活空間としての復元に焦点を当て、建築学的側面からの検討や民俗事例からの復元検討が盛んになされるようになってきた。竪穴建物を建築する上で、どのような技術が存在していたのかを理解し、遺構痕跡から理論的に位置づけていく研究は重要と言える。ただ、竪穴建物が営まれる地形は多くが台地上であり、上屋を構築する建物部材などは遺存しないのが通常である。焼失家屋における炭化材の残存が廃棄状態で残るような事例を除けば、建物復元できるだけの資料を得ることは稀と言える。つまり、通常の竪穴建物調査事例から構造復元を考えてゆく場合、竪穴建物に残された掘削遺構の形状や痕跡、堆積状態から考察してゆくことが常套手段である。竪穴の形態とその中での柱穴配置、火処の構造と位置、付属的に掘られる壁周溝や穴、床面の硬化状態、床の下部構造など、残された遺構からいかに読み取ってゆくのかという視点が重要視されるわけで、近年、桐生直彦氏そして米沢容一氏を中心とする「考古学を楽しむ会」の面々など東京周辺の研究者たちにより、古代の造り付けカマドを持つ竪穴建物について、盛んに論じられるようになってきた。遺構の解明においては、どれだけ数の竪穴建物調査が行われたのかではなく、遺存状態の良い遺構または遺構復元の材料となるような資料を、構造復元、痕跡把握の観点からどれだけ正確に情報を読み取り得たのか、新たな視点または調査方法、記録媒体を模索し、調査に従事したのが重要と言える。額見町遺跡の調査は、上記の研究に触れる以前のものであり、調査視点に最新の研究成果を生かすことはできなかったが、筆者が調査に着手する前に、類似条件で立地する竪穴建物群、念仏林南遺跡の調査及びその整理作業に従事する機会があり、そこで培った調査視点と調査方法により、自分なりの視点で遺構調査を行うことができた。以下では、額見町遺跡の竪穴建物の柱配置と造り付けカマドの位置関係、竪穴形態などから竪穴建物の上屋構造も視野に入れた構造類型と特徴を提示し、それが時間軸でどのような変遷を見せるのかを述べてみたい。

#### 1. 竪穴建物構造の類型と構造復元

額見町遺跡の竪穴建物について、主柱穴配置と壁際付属施設、造り付けカマドの位置から、竪穴壁の壁際に支柱や周溝を持たない通常の造り付けカマド付設竪穴建物をⅠ類とし、竪穴壁に壁周溝や壁支柱を伴う竪穴建物をⅡ類として大別する。前者は竪穴壁の外側にも建物空間が広がる構造で、竪穴壁と建物壁とは別のもの、竪穴部は建物の土間的な空間となる構造のものである。伏屋式建物構造が代表的なものと言えるが、外壁が存在することも検討を要する。後者は竪穴壁の部分に建物壁を構築する、宮本長二郎氏が「壁立式竪穴住居」と規定された建物構造であり（宮本1996）、壁際支柱や周溝は建物壁構築に伴う支柱や壁の掘り方と判断する。ただ、当建物構造には四本主柱があり、その位置関係から壁を外壁と見るかどうかという問題も実はある。この点は後述する。

##### Ⅰ類 竪穴壁が建物壁とならない構造（一般的竪穴建物構造）

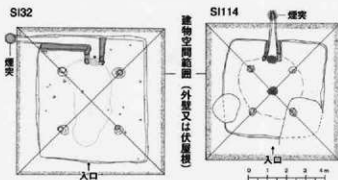
主柱を竪穴内、竪穴長辺壁際、竪穴外のいずれかに建て、竪穴壁部分が建物の壁に直接関連しない構造のものである。主柱が竪穴内にあったものが時間軸経過の中で、壁際や竪穴外に出てゆくのは、基本的に竪穴部分が建物の土間部分に相当する構造の所以であり、後述するL字型カマドの煙道が竪穴外に出た後も長く伸びてゆくことが竪穴壁より広い空間が建物空間であったことの傍証になるものと理解する。竪穴と主柱配置の仕方によって、凡そ正方形の竪穴に四本主柱を対角線上に配置するA類、造り付けカマドを付設する奥壁を短辺とし、長辺の壁際に主柱を配置する長方形竪穴のB類、B類同様の長方形竪穴で、主柱は竪穴外に出て、主柱穴の確認されないC類に分類される。総体的に竪穴の形状は各辺の歪みが目立ち、コーナーはやや丸く整っていないものが多い。隅丸方形に近いものもあり、正方形を志向したものと長方形を志向するものがあるが、これは主柱配置に要因がある。後述するⅡ類の建物構造とはその点が根本的に異なり、竪穴壁の意味を如実に物語る。

〔A類〕 A類は竪穴内に主柱穴を対角線上に配置するA1類が基本であるが、片側のみ柱列が壁際へ寄るS110が1例のみあり、これをA2類としておく。ただ、柱配置以外はA1類と同様の構造のもので、B類へ構造変化する段階の折衷的形態とも考えられる。A1類は竪穴規模と主柱穴間規模とがほぼ比例関係にあるが、後述する

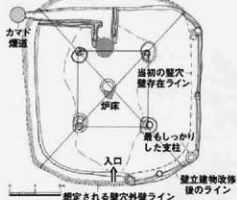
ように建物規模を考えた上で、主柱間規模は重要な要素であり、堅穴床面積と主柱穴間面積により建物規模ランクを、堅穴面積約55㎡以上の特大建物（SI102：堅58.5㎡、柱17.6㎡、SI104：堅54.7㎡、柱15.1㎡、他にC地区SI81該当）、堅穴面積55～39㎡の大型建物（SI11：堅53.9㎡、柱9.0㎡、SI07：堅51.0㎡、柱8.1㎡、SI33：堅43.6㎡、柱12.2㎡、SI02：堅39.1㎡、柱9.0㎡、SI32：堅38.9㎡、柱9.0㎡）、堅穴面積36～25㎡の中型建物（SI03 A：堅36.2㎡、柱6.5㎡、SI13：堅28.6㎡、柱5.8㎡、他にB地区SI35、SI36、SI38、SI68、C地区SI88、G地区SI114など該当）、堅穴面積25㎡以下の小型建物（B地区のSI39のみ該当、堅22.5㎡、柱3.6㎡）に分けている。主柱間規模の縮小に比例して堅穴面積は縮小する関係にあり、概ね堅穴床面積の大小が堅穴建物規模を示す。後述するが、堅穴外に広がる建物空間はA1類の場合、それほど大きな差はなく、基本的に同一構造の建物と理解される。これに対しA2類のSI10は堅穴面積が17.6㎡と小型建物であるのに、主柱間面積は7.3㎡に及び中型建物ランクに位置づけられ、後述するB類建物の構造に近いものと理解される。A2類も含め、小型建物は小型無煙道型カマド（カマド構造については次節で述べる）を付設するが、中型建物以上では大型のL字型カマドを基本としている（SI114のみ戸外直結煙道型カマド）。カマド付設箇所は奥壁中央に統一され、主柱穴のカマド脇に径50cm～100cm、深さ50cm未満の不正円形ピットが掘られることが多い。位置的には貯蔵穴と呼ばれるものだが、ピット内にはカマド廃絶に伴うような焼土塊や支脚、焚口構架のカマド部材などが廃棄されており、貯蔵用の穴であるかは判断しにくい。堅穴建物の火処は通常、カマドのみだが、特大建物では主柱穴間内に被熱床面をもつものがある。SI81、SI102、SI104で確認できており、被熱状態から見て恒常的な火処施設として使われた可能性がある。特に大型以上の建物で目立ち、その機能を唆しよう。

当類型の建物構造について、堅穴壁がそのまま建物壁とならない傍証として、当建物に付設されるL字型カマドの煙道が堅穴外に出てからも一定距離伸びている事象をあげる。L字型カマドは堅穴壁沿いに煙道が廻り堅穴外へ出てゆくが、煙道端に円形ピットが掘られるものが多く、煙突付設のための掘り方と見ている。戸外において煙道を必要以上に伸ばすことは意味がなく、オンドル付き建物の民俗事例などを見ても、煙突は建物壁のすぐ横に建てられる例が多い。煙道遺存の良いSI02やSI13、SI32を見る限り、堅穴外から煙道端ピットまでの距離は堅穴壁からピット中心までで130～140cm程度あり、堅穴壁から100cm程度までは建物の占有空間であった可能性が高い（SI114の戸外直結煙道型カマドの煙道長からみても堅穴の100cm四方は建物空間だったろう）。

当堅穴類型は、宮本氏の分類で言えば、伏屋B式・C式住居とされるものに該当するが、当類型を伏屋式建物とするには理解しにくい事例がB地区SI76で検出されている。詳細な検討は次年度報告に譲るが、L字型カマドを持つI類のA1類堅穴で、右側の堅穴壁部分のみ支柱を等間隔に配置する壁周溝が伴っている。この壁周溝と支柱はII類構造に該当するもので、この部分では堅穴壁で壁立ち構造となる。つまりは建物壁になっていると理解される。何らかの要因で建物の右側部分が破損し、それを修繕した際に、当期に新しく導入されてきた壁立ち構造を採用したものと理解したい。右側の周溝を伴う堅穴壁は、元の堅穴壁ラインより50cm近く拡張されており、壁周溝ラインは元の堅穴壁ラインである角が隅丸になるように意識的に多角形としている。手前側の堅穴壁のズレは元の堅穴外壁に合わせるために拡張したものと予想でき、元の建物空間、つまりももとの堅穴外壁は堅穴壁から50cm外側に存在していたことを物語る。当堅穴建物の場合、伏屋根の垂木が直接地面に接



第162図 堅穴建物I A1類の建物空間予想図



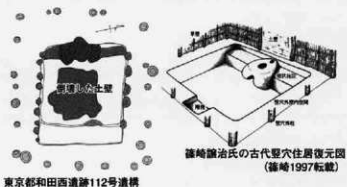
第163図 SI76の堅穴壁改修と建物復元図



するような構造ではなく、建物空間を外壁によって区画する構造のものであったと理解される。このような事例を全てのⅠA類構造に適用できるとは限らないが、同様の性格を持つ建物がⅠA類構造からⅡ類構造へ展開する要因として、ⅠA類に関しては伏屋式建物構造ではなく、もともと堅穴外壁を伴う構造であったからではないかと考えたい。古代堅穴建物構造については、近年土壁状の外壁が倒塌遺存する事例が報告され、草壁や土壁による外壁で囲まれた建物構造が復元されている(篠崎1997)。群馬県黒井峯の埋没住居から復元された伏屋式建物構造とともに、古代堅穴建物構造には様々な形態があったことを考えさせられる。当事例に関しても、その傍証となるものと理解したい。



宮本長二郎氏の堅穴住居断面模式図(宮本1996転載)



東京都和田道跡112号遺構

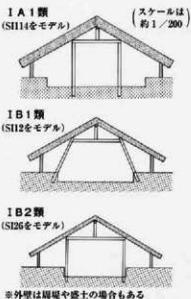
篠崎諭治氏の古代堅穴住居復元図(篠崎1997転載)

第164図 堅穴住居上壁構造復元案事例

《B類》 B類は堅穴長辺壁沿いに主柱穴を配置するもので、両側壁に2本ずつ配置するB1類と3本ないしは4本配置するB2類に分けられる。堅穴はカマド付設置壁面を短辺とし、柱穴設置される側を長辺とする長方形堅穴で、カマドは無煙道型の小型カマドに限られ、カマドソダのまっすぐ付くA類と逆「U」字状にソダの廻る小型b類とがある。カマド付設置位置も奥壁中央の1類、片側にやや寄って付設の2類、コーナーに斜め付設の3類があり、a1類からb2類、b3類へという変遷の流れがある。A類に事例の多い貯蔵穴状ピットは少数例見られるが、カマド脇という決まった空間に位置するものではなく、建物内部空間に違いが感じられる。主柱配置や主柱の規模がA類とは全く異なっているため、内部空間も異なっていたものと予想され、同時に主柱間規模にA類と同様の意味があるとは考え難い。柱本数が増えるにしたがって、主柱間の外に出てゆく建物空間は減少するものと考えられよう。堅穴規模はB1類で25～20㎡(SI12:21.8㎡, SI73 B:24.9㎡)、B2類で20～15㎡(SI08:18.4㎡, SI19:18.9㎡, SI26:17.0㎡)あるが、いずれもA類堅穴の小型建物ランク範疇内であり、柱穴の深さや太さはA類に比べて浅く細い。特に、B2類に関しては極めて貧弱な柱穴であり、柱の並びも良くない。C1類とした長方形堅穴タイプとは堅穴プランや規模、カマド付設置位置などはほぼ一致を見ており、柱穴の掘り込みが浅いために削平されてしまったものが多かったものと見ている。

このB2類の複数本並ぶ柱穴だが、これを主柱穴としたことに関して異論もあろう。ただ、主柱穴でなければ、外壁を支える支柱という理解となり、堅穴際で外壁の立つ構造となる。建物としてはかなり小型の長方形建物となり、同じ堅穴幅を挟んで主柱穴を壁際へ設定したB1類との関連性も説明がしにくくなる。ただ、C1類は堅穴外に主柱穴をもち、かつその外周に外壁に伴う支柱をもつということとなり、矛盾も感じる。このようなC1類の建物を篠崎氏らは主柱をもたず、外壁のみで立たせる壁立構造を復元している(篠崎1997)。複数要素で復元案を考えてゆく必要性はあるが、堅穴壁際支柱の並ぶⅡ類構造の支柱とは柱配置が異なることを重視し、ここでは主柱穴としておく。

さて、これに対し、堅穴B1類の柱穴に関しては、柱痕も明瞭に見られ、かなり深く掘られるなど、A類堅穴の主柱に近い。ただ、B1類柱穴に関しては20～30°内傾して掘られており、主柱が内側に傾斜して建てられる特異な建物構造となる。A2類とした片側の主柱列のみ壁際へ出るSI10も壁際の柱穴はやや内傾気味に掘られており、柱穴が壁際へ寄ったことによる柱間の広がり、つまり屋根の加重負担を軽減するために、主柱



第165図 堅穴建物上壁復元模式図

を内傾させていた可能性があるではないか。当類型の場合、建物空間を推察させる根拠を持たないが、柱の位置から見て、竪穴壁からさらに建物空間は広がっていたものと予想される。ただ、主柱が貧弱である点やB1類の内傾する柱の立ち方から見て、A類の主柱規模と建物空間規模との比率は適用できず、建物空間としては大きくともA1類の中型竪穴規模程度ではなかったかと考える。当建物に関しても、A類同様に、外壁の建つ建物構造である可能性はあるが、検証する資料に欠き、伏屋式構造も視野に、今後検討してゆく必要があろう。

《C類》 C類は主柱穴の確認されないものだが、本来的には竪穴外に主柱穴が存在すべきものと想定している（何らかの要因で削平され未検出か、周境盛土内に柱穴存在か）。比較的しっかりとした長方形を呈すC1類と長辺に丸味をもった隅丸長方形呈すC2類とがあり、前者は前述したようにB2類の柱列が竪穴外に並ぶタイプと理解している。竪穴規模はC1類がB2類同様20～15mにほぼ収まる（SI03 B: 18.5 m、SI18: 14.8 m、SI31: 20.2 m）のに対し、C2類はSI27の22.9 mと、ひとまわり大型の竪穴規模をもつ。なお、竪穴の形態としてはC1類に該当するが、カマドは無煙道型ではなく、小型のL字型カマドをコーナーに付設するSI29がある。竪穴規模は25.1 mと他よりひとまわり大きく、分けて考える必要がある。後述する壁立ち建物に該当させることも考慮しておく必要があろう。C1類については上述のようにB2類と同様のものと理解するとし、C2類についてのみ述べることにするが、C2類に該当するものは削平されて不確定なものも多く、SI14なども可能性としてはあるが、確実な例はSI27のみに止まる。縦長小判型に近い形状で、小型無煙道型カマドa類が奥壁中央に付設される。C1類のような側柱が伴う可能性は高いが、周辺に不揃いの小ピットがあり、主柱を伴わず、伏屋根が掛かる構造のものも考えておく必要があろう。

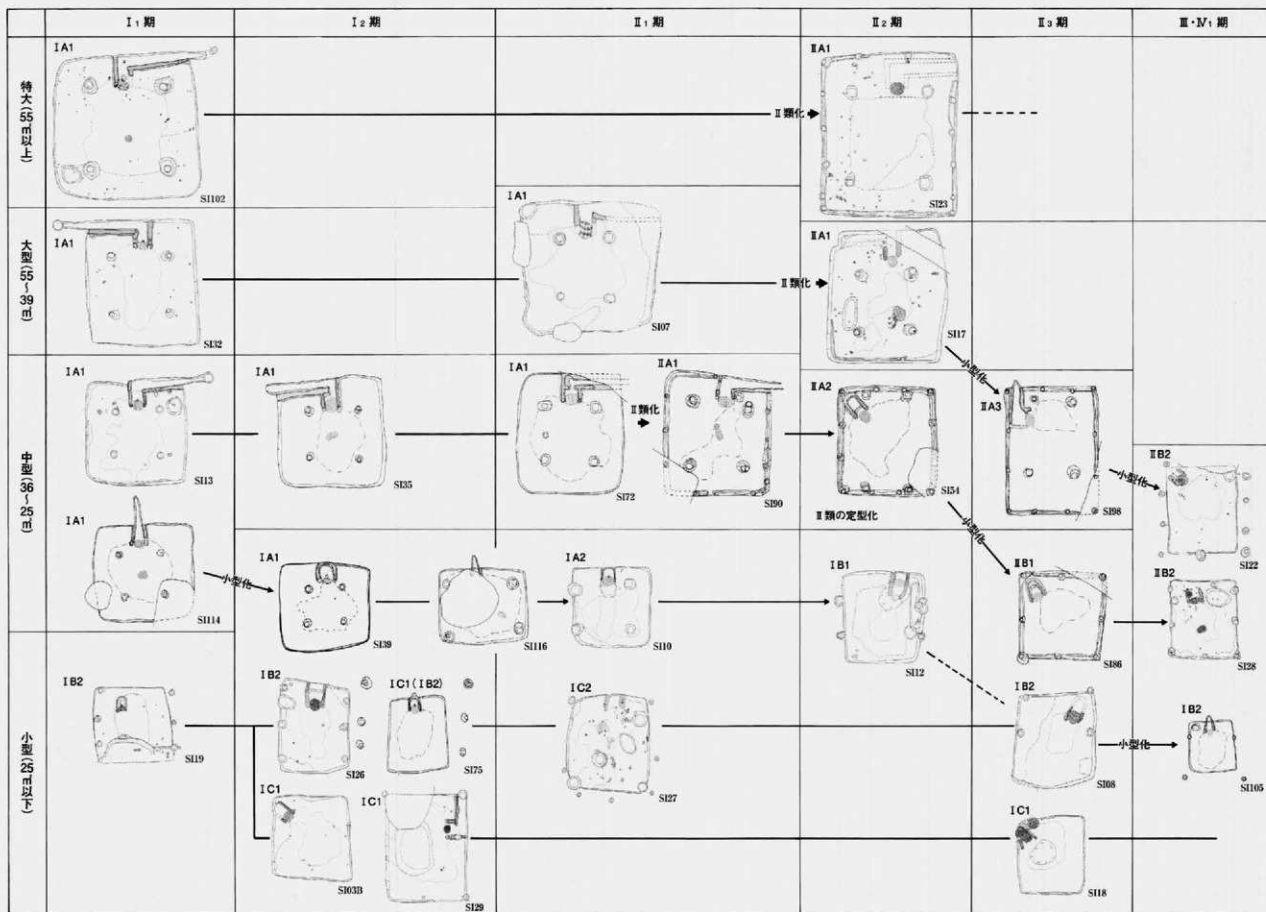
## II類 竪穴壁で壁の立つ構造

竪穴壁の部分で周溝や支柱が巡る構造のものである。竪穴の各辺は直線的で隅が角張るなど、I類とは竪穴形態に明瞭な違いがある。長方形を呈するものが基本だが、小型化に伴って正方形に近いものも出現してくる。当建物構造については壁周溝内覆土に板層を埋設したような裏込め土の確認事例があることや、支柱穴の配置が均等でいずれも深くしっかりとしたものであること、四隅柱穴が特に深く深い点などから、竪穴壁箇所建物壁が立つ、壁立式建物構造を想定する（壁立式構造とは大壁造りのような壁自体で立つ構造のものを本来言うところ指されるが、宮本氏の種類案に基づき壁立式とする）。ただ、この板層がそのまま建物外壁となったものであるのか、さらに竪穴部分のみが建物空間であったのかという点については、以下で述べる主柱穴の理解により異なってくる。建物内に掘られる四本主柱穴の有無により、主柱穴の存在するA類と主柱穴の存在しないB類とに分ける。

《A類》 壁立支柱の他に主柱穴が存在する建物構造である。主柱穴の位置により、竪穴の隅対角線上に四本主柱穴を均等配置するA1類と四本主柱穴の短辺側二本のみが壁際に寄ったり、壁外に出るA2類、四本主柱穴とも均等に短辺側に寄るか、竪穴外に出るA3類に分けられる。A1類は短辺側隅のほぼ中央に大型のL字型カマドが付設されるのに対し、A2・A3類ではカマドは小型となり、L字型カマドが長辺のかなり隅の方に寄って付設されるタイプか、竪穴コーナーに斜めに小型無煙道型b類が付設されるタイプとなる。各類型とも主柱穴は明瞭な柱痕をもち、大型の掘り方を伴う。主柱で桁を組み支える構造の建物であり、A1類は主柱穴の位置や間隔から考えて、基本的にはI A類に近い建物構造であったと理解することが可能である。ただ、I A類の建物外壁に支柱が伴っていたとしても、II類のようなしっかりとした支柱ではなく、II類の長方形を呈す外壁と主柱穴配置が正方形ではなく縦長の形状をしていることなど、根本的な建物構造は別のものではあったとみなされる。

これが時間軸とともにA2類、A3類という構造へ展開してゆくことが、当建物構造の問題であると考えている。竪穴際に主柱が寄り、竪穴外に出てゆくことをどのように理解するのか。通常は建物空間がその分だけ竪穴外に伸びている、つまりは建物空間の一部が土間状の竪穴部であったと考えればよいのであるが、そうすれば、壁立式建物構造という理解と矛盾してくる。もともと長方形の竪穴空間をさらに短辺側に拡張してゆく理由や、四本柱とも完全に竪穴外に出てしまうB地区 SI69などはあまりに桁の長さが広く、間に柱もないなど、主柱としては極めて理解困難な配置をしていく。当建物類型の場合、壁支柱がかなりしっかりとしており、これのみで十分に建物を支えることが可能であるという点が重要で、それがB類という主柱穴をもたない建物構造を生む。A類の主柱に関しては、異なる視点、例えば大型の屋根を支える様持ち柱や2階建て部分の構築主柱、または入口施設や主屋建物の張り出し部という視点でも検討が必要である。

次に竪穴床面積についてだが、30 m以上を測るものに限られ、概ね建物としては中型規模以上にランクされ



第166図 額見町遺跡古代竪穴建物変遷図(1/200)



る。その中でも SI23 は堅穴面積 60 m<sup>2</sup>以上を測る特大建物で、主柱面積は 20 m<sup>2</sup>を測る。他は C 地区 SI91 の 40.6 m<sup>2</sup>が次いで大きく、C 地区 SI90 の 37.6 m<sup>2</sup>、B 地区 SI69 の 37.0 m<sup>2</sup>、C 地区 SI98 の 33.5 m<sup>2</sup>、比較的小型のもので B 地区 SI54 の 30.2 m<sup>2</sup>を測る。主柱面積は概ね 10～12 m<sup>2</sup>前後であり、I A 1 類の主柱面積比率中心が 23% 程度に比べると、35% 程度と明らかに大きな空間を占める。これは堅穴壁際や外に主柱が位置する A 2 類や A 3 類が存在するためでもあるが、均等配置する A 1 類についても 28～30% 程度と高い割合を示しており、当建物構造の主柱配置の特徴と言えるものである。

《B 類》 B 類は主柱穴の見られない構造のもので、堅穴壁周溝と支柱のみで建てられる構造のものである。壁周溝内に支柱が均等配置される B 1 類と周溝が伴わない支柱のみ B 2 類に分けられる。なお、B 2 類については I B 2 類との識別が困難だが、堅穴の角がしっかりとした長方形で長辺側のみではなく短辺側にも支柱が存在する SI21・SI28 など当類型に入れている。なお、支柱を確認できない SI22 についても当類型に該当する可能性をもつ。B 1 類は堅穴が正方形に近いプランを持ち、C 地区 SI86 の 21.6 m<sup>2</sup>、G 地区 SI117 の 19.4 m<sup>2</sup>など堅穴床面積は 20 m<sup>2</sup>前後と小型規模のラックとなる。B 2 類は SI21 の 17.0 m<sup>2</sup>、SI22 の 18.7 m<sup>2</sup>、SI28 の 14.7 m<sup>2</sup>とさらに小型を呈し、カマドはいずれも小型無煙道型 b 類がコーナーに向かって斜めに付設される。当類型の場合、基本構造は A 類と同様であり、主柱が存在しないとすれば、II 類建物構造における主柱穴は当建物の主体的構造でなかったこととなる。ただ、当類型が建物として小型である点から、堅穴外に主柱穴が設置される A 3 類の主柱穴が浅く小型であったために削平で確認されなかった可能性もないとは言えない。II 類建物の主柱構造機能の問題と合わせて検討が必要となろう。

## 2. 堅穴建物の時間軸での変遷様相

以上の類型化した堅穴建物を時間軸に沿って提示したのが第 166 図であり、古代 I 1 期から堅穴建物が消滅する N 1 期までの変遷様相を以下に述べる。

《I 1 期》 特大建物、大型建物、中型建物、小型建物が存在する。中型建物以上は全て I A 1 類であり、しかもそのほとんどが L 字型カマドを付設する。念仏林南遺跡で確認された無煙道型のカマドは確認されず（望月 1995）、L 字型カマドでないものは戸外直結煙道型の SI114 のみである。小型建物は I A 3 類で、小型無煙道型カマドが奥壁中央に付設される。建物規模は大型と中型が主体で、小型建物は僅かに存在するのみである。

《I 2 期》 I 1 期の建物構造、建物規模の構成を継承するものであり、大型、中型の I A 1 類が主体を占める。I 1 期に比べて中型建物の率が高くなっており、I A 1 類建物の小型化傾向という評価も可能と言える。カマドは L 字型カマド付設のもので占められるが、戸外への煙道の伸びがやや短くなる傾向があり、堅穴規模の全体的な小型化と一連のものである可能性をもつ。当期の特徴としては、I B 2 類や I C 類の小型堅穴建物の定着が上げられる。カマドは小型無煙道型 a 1 類が主体的だが、コーナー付設の b 3 類や煙道が奥壁より戸外へ伸びる戸外直結煙道型も確認される。また、小型 L 字型カマドを付設する I C 類も出現しており、大きく堅穴建物構造を転換させる II 期の予兆が見え始める段階と評価できる。

《II 1 期》 I 1 期からの継続と言える L 字型カマド付設の I A 1 類堅穴建物が終焉する時期である。大型と中型において L 字型カマド付設の I A 1 類が存在するが、SI72 のように堅穴プランがやや縦長となり、四本主柱穴間隔もそれに伴い縦長になる傾向が見える。また、これと同様の堅穴プラン、主柱穴配置をもつが、壁周溝をもつ SI90 が確認される。当建物では、明確な支柱が均等配置されておらず、II 類建物の定型前段階の様相を示す。I 類構造から II 類構造への転換を物語る建物と言えよう。また、II 1 期終末に位置づけられる SI76 では前述のとおり、修復段階で堅穴壁の一部を II 類建物構造（明確な支柱配置する壁周溝併用建物）に作り変えた可能性があり、新型建物構造が導入される初期段階と位置づけられる。加えて、当期の大きな特徴として、小型建物の増加が上げられる。I 2 期で定着を見た I B 2 類や I C 類に加えて、当期には小型建物規模の I A 1 類や I A 2 類が出現し、カマドは小型無煙道型 b 類が増加する。当期の堅穴建物は、全体的には I 期の建物構造を引きずるが、確実に新たな建物構造導入の端緒を見せており、また、小型建物主体化という流れも確実にさせる段階でもある。堅穴建物において大型、中型が減少してゆくことは、集落全体としての堅穴建物の役割低下を意味するものと言え、次第に孤立柱建物が主要建物として位置づけられてゆく。

《Ⅱ2期》 当期の建物構造の大きな特徴としては、定型化されたⅡ類構造が出現することである。特大建物や大型建物ではSI23やSI17のようにⅡA1類であり（SI17は純粋なⅡ類構造ではないが、一部に壁周溝を伴うなど純粋なⅡA1類からは逸脱している）、カマドは大型のものが奥壁中央に付設される。明確な遺存事例はないが、L字型カマドの可能性が高く、SI90の建物構造の延長に当該建物構造が存在すると理解する。中型建物は主柱穴が壁際ないしは壁外へ出てゆくⅡA2類で、これについては無煙道型カマドのb3類が付設される。カマド頂部の延長線上に壁支柱が位置しているため、煙道が戶外へと伸びていく構造は考え難く、建物壁の手前で、つまり逆「U」字の頂点にカマド挿煙口が設定されていたものと理解する。これまでⅡA1類構造であった中型以上の建物は当該階を以てほぼⅡA類構造へ転換したものであり、建物構造の大きな変遷点であると評価される。小型建物はⅡ1期の継続としてⅡB2類やⅡC類が存続し、加えてⅡ1期に定量見られたⅡA1類やⅡA2類から完全に主柱穴が竪穴壁際へと寄ったⅡB1類へと変化する。当該建物の変化は、ⅡB2類に見る長方形竪穴化に伴った柱配置の変化であり、型式変化的な動きであろうと理解される。当該階でも小型建物の比率は高く、竪穴建物の過半数は小型建物占める段階であったと理解される。

《Ⅱ3期》 竪穴建物から掘立柱建物への建物様式の移行が急速に進行する段階である。竪穴建物規模は中型以上のランクに限られ、その中で最も大型を呈すSI98は当期の古手段階に位置づけられる。壁立構造の中でも主柱穴の一方のみが偏るⅡA3類構造であり、煙道の短い小型L字型カマドを付設するなど、Ⅱ2期の特大・大型竪穴建物の流れのもと、それが小型化していったものと理解できる。出土遺物が確認されていないため、当期に位置付け可能なのか、疑問もあるが、同類型建物は他に2棟あり、上ランクの建物として複数棟が存在していた可能性を持つ。小型建物は伝統的に継承されるⅡB2類、ⅡC類が存在するほか、Ⅱ類建物も加わる。主柱穴がなく、正方形を呈すⅡB1類で、カマドは小型無煙道型のb3類と、Ⅱ類竪穴と同様である。

《Ⅲ期以降》 Ⅲ期以降、竪穴建物はさらに減少し、小型規模に限られるなど、主要な建物は掘立柱建物となる段階である。大型竪穴建物の流れを持つⅡ類系統と出現当初から小型竪穴建物として存続するⅡB類系統とで構成され、当期はさらに小型化が進行する。特に、Ⅱ類建物は壁周溝を伴わずに主柱穴のみが偏るⅡB2類へ変化し、竪穴建物の終局的様相を示してくる。ただ、当集落遺跡の全体的な様相として、Ⅳ2期以降に建物数が減少する傾向があり、Ⅳ2期での竪穴建物消滅はそのような集落動向の中での現象と理解することも可能である。

### 3. 竪穴建物の床面硬化と掘り方土坑から見えるもの

当遺跡の竪穴建物跡にはこれまで述べた竪穴、主柱穴・支柱穴、壁周溝、造り付けカマド、炉床、貯蔵穴以外にも、様々な痕跡が残されている。入口施設や棚状施設、寝間や居間、間仕切り施設など、建物として機能するために必要な様々な施設の痕跡が残されているはずである。しかしながら、当遺跡の調査では、上記施設を積極的に示す遺構痕跡は確認できず、集落構成を考える上でも重要な入口の特定も困難を極める状況であった。このため、床面硬化部分の記録、貼床の状態、床下構造などを積極的に調査記録してきたが、そこから見える建物空間としての復元及び通有に見られる掘り方土坑について、以下で考えてみたい。

本文報告では、床面の土質や硬化状態を図に付記したが、硬化面の広がりや計測することで、建物空間としての土間や寝間としての区分、入口部の特定に繋がるものとの指摘がなされている（米沢1997）。本来は、硬度計での数値を示すことで信憑性は高まるが、当遺跡で提示したものはあくまでも印象の域を出るものではなく、感覚的な観察記録としての位置づけである。時期や竪穴構造によって床下遺構や床面硬化が異なっており、各時期の建物構造ごとにそれらを提示し、どのような変化が見られるのかを示すこととする。

まず、ⅡA1類やⅡA1類の奥壁中央にカマドを有する正方形系統の竪穴建物についてだが、特大から中型まで規模を問わず、カマド笑口前面から四本主柱穴間にかけてが最も硬化する。特に笑口前面の硬化範囲はやや広めとなり、そこから遠ざかるに従い、硬化範囲が狭まる傾向を持つ。その硬化面が主軸上に伸びて手前壁面まで続くものが多く（SI02では右側、SI07では左側へ硬化面伸びる）、硬化面を竪穴使用痕と位置づければ、最も人の出入りが顕著な部分、つまり、入口施設の箇所を示す可能性を持つ。カマド笑口前面の空間は炊事場を伴う土間としての空間かつ、その中央に炉を併設する竪穴が複数認められる点から居間としての機能を併設していたものと理解される。主柱穴間の左右両側の竪穴壁までの空間は、多くが軟質の貼床が施される部分で、硬化も顕著ではない。住居空間としては寝間に相当すると予想でき、行き来する使用頻度の低さに加えて、この部分で

の板や草状の敷物効果により床が硬化しなかった可能性が高い。または意識的にこの部分を軟質とさせておくような貼床を行っていた可能性もある。当類型の堅穴建物には、主柱穴から壁までの空間に、長楕円形土坑または連続土坑的な浅い掘り方土坑を掘削する場合が多く、特にⅠ期のⅠA類堅穴では少数の大型土坑を掘削する傾向が強い(SI03A、SI11、SI13、SI32、SI33、SI102等)。土器片を混在させた黄褐色土塊混じりの黒褐色系土が埋められており、通常の土坑覆土とは明らかに異なる。

当遺跡の堅穴建物は多くが緻密な粘土層に床面構築しており、湿気が抜けにくいという地質的条件がある。掘削地盤が一部層層の入る地層では掘り方土坑を掘削しておらず、この掘り方土坑が、堅穴内に進入した水等の地下への浸透と地下から上がる湿気防止に効果があったものと考えている。掘り方土坑は、念仏林南遺跡など、北陸の事例を見る限り、弥生時代や古墳時代中期までの堅穴建物には確認されておらず、造り付けカマド付き堅穴建物構造とともに導入された可能性がある。あたかも、須恵器窯跡の焼成部境に設けられる舟底状ピット(湿気抜き施設)掘削に通じる感があり、新たな堅穴掘削の技術として導入された可能性がある。ただ、Ⅱ期以降の堅穴では壁沿いに加えて、主柱穴間域においても掘り方土坑を掘削しており、小規模な土坑を密に連続して掘削するものへと変化する(SI07・SI17・SI23等)。堅穴全体に掘り方土坑を掘削して行く意図は、湿気抜きとは別の意図に変化した可能性もあるが、Ⅰ期の堅穴掘削法の発展系として、堅穴床面全体に及んだとも考えられよう。

以上の正方形堅穴に対し、側壁沿い主柱となる長方形系統の堅穴をもつⅠB類やⅠC類については、堅穴空間全体へ硬化面が及ぶ傾向が強い。カマド焚口前面から主軸上に硬化面は伸び、入口施設はカマドの付設される奥壁の対面に存在していたと考えられる。柱配置から考えても、最も自然な入口の位置と言えるだろう。ただ、コーナーにカマドが付設される場合、硬化面はカマド焚口前面から堅穴中央部のみの狭い範囲に止まるものが多く、特に正方形系統となるものに関しては顕著である。ⅡA2類やⅡB類系統も同様の傾向で、床の硬化面はカマド焚口位置に大きく関連することがわかる。このような小型堅穴建物の場合、掘り方土坑は堅穴の中央に略円形の大形土坑が少数で掘削された場合が多い(SI08、SI12、SI18、SI26、SI29等)。硬化面範囲と重なるものも多く、建物内空間の利用目的に関係なく、堅穴部の湿気を抜くという意識であったものと推察する。

以上、当遺跡の掘り方土坑について、筆者は湿気抜きという機能を想定したが、別の理解も示されている。特に関東の事例から掘り方の形態を集め、掘削意図を考察した青木敬氏の論稿は注目される。氏によれば堅穴の隅部を重点的に掘り込むものが多く、隅角を先に掘り込んで行くこと、壁間溝部の掘り込みが深いことなどから、掘り方は堅穴設計プランに基づく掘削手順等の掘削工法上の痕跡であると理解されている(青木2000)。確かに、堅穴掘削において、その規模やプランの設計は概ね存在していただろうが、それほど緻密な計算のもとで掘削を行っていたのか、疑問がある。建物の規模は堅穴部のみではなく、主柱穴の位置に大きく関連している。堅穴建物と言えども外壁や屋根の範囲が本来の建物空間であり、堅穴プランにのみ掘削の重点を置いたとは考え難い。どちらかといえば、主柱穴配置に建物設計上の基点を置いていたものと感じる。筆者がここで示した湿気抜きという意図は、全国の堅穴建物事例に通じるものとは考えていないが、造り付けカマド付設の堅穴建物の出現とともに顕在化してゆくことは他地域でも指摘されていることであり(米沢2001)、カマド付設と同様に、新たな堅穴建物様式として導入されてきたものと言えらるだろう。どうしても湿気の溜まる堅穴部の除湿効果を考へて、掘削されるようにしたものと見るのが妥当ではないかと考えるのである。

#### 参考文献

- 青木 敬 2000 「堅穴建物の掘り形を考える—特徴的な掘込みを有する事例について—」『土壁』第4号 考古学を楽しむ会  
 浅川丈夫編 1998 『奈良国立文化財研究所シンポジウム報告 先史日本の住居とその周辺』同成社  
 朝生直彦 2004 『古代堅穴建物の発掘調査法』平成16年度奈良文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者専門研修資料『古代集落遺跡調査課程』  
 藤崎論治 1997 「倒壊したもうひとつの壁—「堅穴外壁」をめぐる問題—」『土壁』創刊号 考古学を楽しむ会  
 宮本長二郎 1996 『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版  
 望月精司 1995 「古墳時代後期の遺構と遺物」『念仏林南遺跡Ⅱ』小松市教育委員会  
 米沢容一 1997 「硬い床と軟らかい床—硬化面から得られる諸情報—」『土壁』創刊号 考古学を楽しむ会  
 米沢容一 2001 「硬化面と掘り形—硬化面研究の反省—」『土壁』第5号 考古学を楽しむ会

## 第2節 造り付けカマドに関する検討

額見町遺跡の竪穴建物には全て造り付けカマドが付設される。当遺跡の名を全国に知らしめた所謂オンドル状遺構であるL字型カマドをはじめ、小型の無煙道型カマドや戸外直結煙道型カマドなど様々な形態のカマドがある。L字型カマドの分布論や集成、系譜論については多くの論稿があり（宮崎1993、亀田1993、松室1996、上垣・松室1996、小嶋1999、崎崎2005）、ここでそれを再検討することに意義があるとは感じないため、本報告では、造り付けカマドに見る額見町遺跡の特徴及びカマド構造の復元、煮炊具使用から見たカマドの機能、廃棄に伴うカマド破壊等の問題について、隣接地域の遺跡資料も含め、論じてみたい。

### 1. 額見町遺跡及び隣接地域の造り付けカマド類型と構造復元

額見町遺跡の所在する小松南部から加賀地域の台地上には、古代Ⅰ期からⅣ期までの竪穴建物を主体とする集落遺跡が分布しており、その大半に造り付けカマドが付設される。越前から加賀地域における造り付けカマドの出現は早くとも6世紀後半以降であり、定着を見るのは古代Ⅰ期と言え。造り付けカマドを付設する竪穴建物は短期のうちに越前・加賀地域に普及しており、7世紀の一般的な竪穴建物構造として定着を見る。しかしながら、当地域で調査報告された事例は極めて少なく、報告されたとしても焚口の被熱面のみを示すだけで、構造復元を検討できる資料は極めて限られている。幸い、額見町遺跡では良好な状態の造り付けカマドが調査でき、近郊に位置する念仏林南遺跡や額見町西遺跡、千崎遺跡でも資料が得られているため、南加賀地域の造り付けカマドを題材として、類型ごとの構造特徴を整理し、その上で構築方法及び構造復元を提示してみたい。

造り付けカマドは煙道形態や支脚位置、全体的な形状等から規模に違いがあり、小型のSI26がカマド本体部長125cm、焚口内寸幅55cm、面積0.69㎡程度であるのに対し（念仏林南13号住で特殊な極小タイプに全長50cm、焚口幅23cmのものあり）、大型のSI33では全長180cm、焚口内寸幅75cm、面積1.35㎡の規模を持つ。相対的に中型以上の竪穴建物には通常サイズ以上のカマドが付設され、小型竪穴建物では小型サイズが付設されることが多く、概ねの傾向としては竪穴建物の規模との関連性は強いといえる。ただ、竪穴面積との比率で考えれば、小型竪穴ではカマドの占める割合は4%（電0.69㎡/竪穴17㎡）であるのに対し、大型建物では3%（電1.35㎡/竪穴43.6㎡）を占めるに止まるなど、面積比例してゆかないのが通常である。これはカマドに掛ける容器の大きさに違いがないという点に基本要素があり、カマド本来の機能や容器の掛け口の問題など、構造類型化するには規模の類型化は困難とみている。そこで、分類要素としては、カマド構築の際の保有技術系統の問題として、煙道構造に着目し、L字（煙道）型カマド、戸外直結煙道型カマド、無煙道型カマドに分け、さらにその中で、掛け口構造、焚口構造、本体構築方法などの検討を加えてみたい。

#### a. L字型カマド

月津台地の古代集落遺跡では、額見町遺跡、額見町西遺跡、矢田野遺跡、葉師遺跡で確認例があり、古代Ⅰ期の竪穴建物としては主体的な煙道構造であったといえる。「オンドル状遺構」や「原始炕」などとも呼ばれる朝鮮半島系カマドであり、本稿ではカマド分類名称としてL字型カマドの用語を使用した。が、本来には朝鮮半島系要素を積極的に示す用語として「オンドル状遺構」を使用することが最も適当ではないかと考えている。それは、国内産陶質土器を初期須恵器と呼ぶのに対し、国内産軟質土器を朝鮮系軟質土器と呼び、朝鮮系土器とは呼ばないのと同様の意味であり、そこには通常のものとは異なる意識を用語で示そうという意図がある。

L字型カマドには奥壁中央付設で左右一方へ煙道が伸びてゆく通常タイプと、付設箇所が竪穴隅（長方形竪穴の長辺側の隅寄り）へ寄る煙道の短いタイプとがある。焚口幅は両者とも数値の幅の中にあるが、カマド本体長部分では120cm以下の短輪煙道タイプに対し、通常タイプは130cm～180cm（140～150cmに分布するものと170～180cmに分布するものとに分布域が分かれる）と奥行きが長い。両タイプとも焚口部分のみ凝灰岩切石を鳥居状に組んで構築されるものが多く、遺存していなくてもこの部分での石屑や抜き取り痕を確認できるものがほとんどである。天井石も凝灰岩で、支脚も同じ石材が使われている。極めて軟質かつ軽量の凝灰岩で、脆いが耐火度の高い特徴的な石材をしている。焚口幅は煙道短輪型で70cm前後だが、通常型では50～80cmと分布範囲が広く、70～75cmと55～60cmに分かれる傾向があるが、規模や時期に関連するものではなく、作り癖のようなものかもしれない。焚口端から30～40cm奥の中央に支脚が立ち、この手前側で被熱焼結面が広がる。支脚は西日本のカマドに通常見られる1本で、カマド本体の奥行きの長さから支脚を伴わない掛け口がさらに奥へ



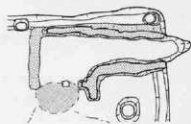
箇所に並ぶ可能性もある（中国出土のカマド形明器や朝鮮半島淡沙里遺跡35号住居の造り付けカマドを見ると、縦列掛け口のカマドの場合、瓶の乗る支脚付き掛け口の奥にもう一つ小型径の掛け口が伴う。渡辺1993、李1994）。しかし支脚より奥に被熱痕跡が広がらないことや長胴釜の奥に器高の低い鍋や短胴小釜が並ぶことは想像しにくいことから、二個掛け口だったとしてもどれだけの加熱機能があったかは疑問がある。設置状態または被熱痕から復元される床からの支脚高（SI13・SI32・SI104事例からは13～15cmであり、これに当期の長胴釜の外周スス痕跡から復元できる設置想定箇所（長胴釜に付着するスス痕の切れる個所から掛け口固定は長胴釜最大径ではなく、胴部最上位から頸部と推察でき、釜の最大径よりも大きく開けられた掛け口での設置には粘土を巻き付けて固定した可能性がある）から底部までの高さ25～28cmを加算すると、掛け口での高さは40cm前後となる。当数値はカマド高を復元した各氏論考とほぼ同数値であり（荒井1999、原2001）、構造が異なっても、湯釜の器高に規格を置いたためカマド高は均質な数値となるのだろう。

カマド本体の天井は焚口天井がそうであるように、平坦に蓋をするような構造と予想され、さらに粘土で隙間を埋めて作り上げたと考えられる。カマド本体の被熱は焚口床以外にその側壁内面にも及ぶが、薄く焼土化する程度で、L字に煙道屈曲して行く部分ではほとんど被熱痕の確認がなくなる。この煙道屈曲部分で障壁状に突出するものがあり、当堅穴の出現期から（SI102や額見町西3号住）継続的に見られる。L字に曲がる部分からの片側障壁が一般的だが、両側から突出するB地区SI72のようなタイプもあり、煙道への火の流れを押さえ込むような働きがあったものと言えよう。カマド本体の床傾斜はほとんどなく、煙道において若干傾斜してゆく程度であり、末端で煙突を立ち上げなければ、煙は焚口へ逆流した可能性がある。

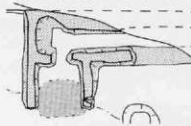
焚口が石組みである以外は、基本的にカマド本体から煙道までを粘土作りする構造のもので、カマド本体側壁から煙道の堅穴壁側は地山壁のまま、特に粘土構築は認められない。一部壁立構造のSI98で堅穴壁側に粘土構築を行うタイプがあるが、これについては堅穴壁で建物壁が立ち上がる構造のため、基本的に当該タイプでは例外的なものであったと言えよう。つまり、堅穴壁と同じ高さまで煙道ソデが直立していた可能性が高く、その部分で蓋をするように天井を架ける構造であったろう。煙道ソデは堅穴内ではカマド本体同様の粘土構築だが、堅穴外に出ると断面半円形の溝となり、末端へと徐々に立ち上がり細くなる。末端に浅いピットがあり、これを煙突の纏り方としたが、堅穴外の溝部分での煙道構造も含め、復元する材料に欠く。覆土には構築粘土層が混在しており、堅穴内部同様に蓋をする構造であった可能性もあるが、木製や土製の管を通す構造であった可能性もある。溝の末端でどのような構造としたのか、全く根拠がないが、隣接する建物壁やピット内への土砂流入防止、煙の焚口への逆流防止のため、地面に穴が開いていただけとは考え難く、木製か土製の煙突が直立する様子を想像する。朝鮮半島では原始坑を伴う遺跡から木製煙突や土製煙突の出土も報告されているようで（李2001）、時期は下がるが当遺跡から出土する円筒型土製品の存在も関連する可能性がある。

本文で若干述べたが、当カマドの本体から煙道部の粘土構築構造は、当遺跡または他の隣接遺跡で確認される無煙道型カマドの粘土構築とは様相が異なり、極めてソデ構築粘土が厚く直立する断面形を呈す。ソデ構築粘土の断ち割り断面を観察すると幾層にも異なる粘土を飯糰状に突き固めていることが理解される（写真42・62）。無煙道型カマドには見られなかったものであり、特に頑強に作られたものと言えよう。このソデ構築や天井構築においては下から積み上げて天井を架ける方法ではなく、上から蓋をするような形状であり、アーチ状に積み上げでもしなければ粘土のみで作り上げることは困難と言えよう。最も簡単な方法とえば、箱状に組んだ板の上に粘土を貼り付けて構築し、板を焼ききればよいのだが、カマド本体や煙道部のソデ内面に残るケズリ整形痕跡から、その方法も考え難い。とすれば、ソデは板枠を組んだ中に粘土を詰めて構築、面整形しておき（建物基礎のような作り方）、乾燥した後に天井に板を掛けて粘土で被覆する方法が最も妥当と言えよう。ただ、SI13やSI33の煙道部に認められる粘土ブロックの繋ぎ目を思わせる事例（写真59～61、写真113・114）を見ると、

短煙道型 (SI98)



通常型の両側障壁タイプ (SI72)



第167図 L字型カマド類型図 (1/60)

立方体の粘土塊を切石のように組み上げて構築したようにも見える。天井もこのような粘土塊を渡して骨組みとし、粘土で最終的に被覆するような方法が採られたとは考えられないだろう。粘土塊は暖気に叩き締めてから適当な大きさに切り分け、火乾し煉瓦のように乾燥させておけばかなりの強度があった可能性がある。凝灰岩切石を使用した部分は最も被熱の強い部分であり、被熱強度の問題からその部分のみを凝灰岩で作ったものだろうが、煙道上で暖を探る「炕」でない限りは粘土塊積み構造であっても問題はなかったのではないかと考えるのである。



第168図 L字型カマドの粘土塊積み事例 (SI13、1/60)

石組みでカマド本体から煙道までを構築する朝鮮半島の「原始炕」を粘土塊で構築するようなものであり、当遺跡の中で初期のL字型カマドに見られるということも興味深い。朝鮮半島で検出される「原始炕」は現在のところ石組み構造が主体的だが、埴組み構造のものも確認され（原三国時代の水原西屯洞7号住居）、最近では粘土作り事例もかなり増加している（李 2001）。全てのL字型カマドに当構築方法が採用されたとは考えていないが、一つの構築方法として検討してみる価値はあるのではないだろうか。当遺跡ではL字型カマドが集落成立初期のⅠ1期古段階から存在し、以降Ⅱ2期まで大型堅牢建築物を主体に存続してゆく。終焉期はⅡ3期古段階で、煙道短縮したものが竈立建物構造に付設され、それをもって姿を消してゆくのである。

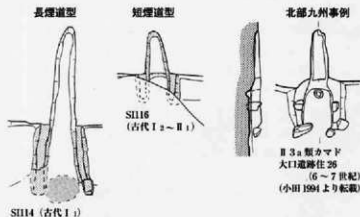
### b. 戸外直結煙道型カマド

煙道がカマド主軸上に竈穴外へと伸びる構造のものうち、建物外壁の外側（50～100cm程度）まで煙道が伸びるものである。遺構上面が割平された状態での調査であるため、確認できる煙道端よりもさらに伸びていた可能性は高く、竈穴壁から50cm以上突出したものを当構造と認定しておく。なお、後述する無煙道型にも竈穴壁から一部突出したものもあるが、明確な煙道部として伸びるものとカマド本体の奥壁が突出するものとは異なると理解しており、当該型に入れるものは前者のみとする。

カマドはいずれも竈穴奥壁の中央付近に造り付けられるもので、四本支柱穴を竈穴内にもつものに限られる。中型建物に付設される煙道100cm以上を測るSI114（Ⅰ1期）と小型建物に付設される煙道100cm未満のSI116（Ⅰ2～Ⅰ1期）の2例が確認されるのみであり、いずれもG地区に隣接して立地していることから、建替えの可能性も考えられる。SI114は竈口を凝灰岩切石による石組み構造、それ以外のカマド本体は厚いソデ粘土で構築する重厚な作りのものである。竈穴外の煙道部は半円形の溝がそのまま伸びてゆく形態で、地山を掘削しただけで、粘土構築等は認められず、L字型カマドの竈穴外煙道の様相に似る。竈口内寸幅65cmから竈穴奥壁の内寸35cmへ「ハ」字気味にソデが取り付いており、煙道端へ向かって徐々に細く浅い形状となる。カマド本体長は110cm、煙道長は160cm、煙道端の奥に浅い小ビットがあり、L字型カマド同様に煙突付設の掘り方の可能性がある。ソデの被熱痕跡はL字型カマドとほぼ同様で、竈口床面のみが焼結し、煙道部では全く被熱痕跡を確認していない。SI116は本体部分の大半を土坑に切られているため、実態は不明だが、SI114カマドを全体的に小型とした形態で、同様の構造を有していた可能性は高い。

当カマド構造については、情報が入り不足している材料に欠くが、L字型カマドと煙道の伸びる方向が異なるだけで、煙道や排煙部の構造はよく似ている。ただ、カマド本体の構築方法においては、粘土塊積みによる方法は採られた可能性が低く、小型化した段階のカマドも含め、竈穴内で粘土構築する方法であったと予想される。

当カマド構造は越前・加賀地域の他遺跡で確認した例がなく、当地域では主体的に取り入れられなかったカマド構造と言える。類似する煙道構造を持つ地域としては北部九州があげられ、6世紀後半から7世紀前半にかけて竈穴の縮小化に



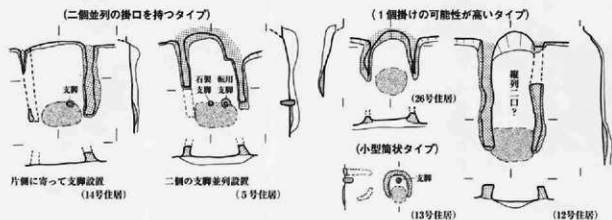
第169図 観見町遺跡の戸外直結煙道型カマドと九州事例（1/60）



る（B地区 SI73 B）。支脚も石製は確認できなくなり、石製よりやや小型の土製支脚が主体となる。カマド付設位置は3類が増加するに伴い、b・c類構造が主体的となり、カマドの床傾斜は奥へ向かって立ち上がるものとなる。相対的にカマドソデを残す事例がa類より少なく、それは簡易な作りとなったことを示すだろう。

各時期を通して、カマド規模は焚口幅33cmの小型のものから60cmを測る大きめのものまで分布域は広いが、L字型の50～80cmに比較すれば、小型のものが主体的で、カマド本体長についても60～125cmと幅を持つ。支脚遺存事例から、焚口端から30cm程度奥に支脚設置されていたと想定できる。本体長から見てさらに奥に掛け口を設けるような構造は考えにくく、中央一つ掛けのタイプと理解する。

以上の額見町遺跡や千崎遺跡に見られる無煙道型カマドに対し、念仏林南遺跡では異なる構造のものが主体を占める。念仏林南のものは時期がI1期にはほぼ限定されるという時期差の問題もあるが、確認される支脚の位置は左右に寄る二口並列の掛け口をもつ構造のもので、片側が石製支脚、片側が高坏脚の転用支脚のものもある。カマド付設位置は奥壁中央の1類のみで、カマド形態はa類構造に限られる。焚口を石組みする構造のものではなく、ソデの作りは全体的に薄く壁が内傾する構造が目につく。焚口幅は70～80cm、本体長は100～145cmと、額見町のものに比べて大きい（望月1995）。以上の規模や形態構造のものが主体を占めるが、焚口幅を50～60cmと狭く取り、竈穴壁面に突出してゆくタイプが存在する。支脚痕を確認しているものはないが、焚口幅から一個掛けが縦列配置の掛け口と予想され、縦列配置のものはソデを厚く作り、本体長を160～170cmと長くする。



第172図 念仏林南遺跡検出の無煙道型カマド (1/60)

このように、念仏林南遺跡のカマド構造は額見町遺跡とは様相が異なり、さらに道跡内でも二系統のカマドが存在したことになる。二口並列掛け口タイプは東日本で確認されるもので（杉井1993）、静岡から新潟以東で主体的に見られる。静岡の事例は関東などで検出されるソデが重厚で本体長の長めに作られるタイプで、新潟のものは煙道が戸外に伸び、支脚は土製のものが使われる（鈴木1994）。そのような意味で、純粋に東日本系統のカマドと言えないものではなく、それはL字型カマドや戸外直結煙道型カマドと同様の地域の中で融合した形態を作り出しているものと理解される。ただ、複数の出自の系統を持つ竈穴建物に近接した地域に棲み分けするかのよう集落形成していたことは確かで、月津台地の7世紀集落形成を考える上で重要な要素と評価できる。

なお、念仏林南には竈穴内での主柱穴が存在しない小型長方形竈穴が1軒確認されるが、付設されるカマドは焚口幅23cm、本体長50cmの極めて小型の逆U字型すものである。支脚はカマド奥寄り中央に設置されており、甕型土製品に似た排煙口を持たない筒状のカマドであったと考えられる。これよりも焚口幅33cmとやや大きいものが額見町遺跡のI1期の小型竈穴（SI19）に付設されている。焚口は凝灰岩で石組みするが、同一時期のものであり、類似した小型カマド構造であった可能性がある。

## 2. 煮炊具使用痕跡と造り付けカマドの機能

国内における竈穴建物の造り付けカマド出現は、炉からの進化とする説と朝鮮半島からの新たな生活様式として導入されたとする説とがある。カマド出現とともに長調釜と飯という蒸す調理具セットが導入されることや、初期の造り付けカマドに朝鮮半島系遺物が伴うこと等から、後者の説がほぼ定説化されている。西日本のみなら

ず、東北部から関東甲信越地域において、5世紀後半には堅穴建物に造り付けカマドが導入され、それとともに甗が確認されるようになる。使用痕観察から、甗を蒸器、それとセットで出土する長胴化した釜を湯釜として使用する形態へ変化した。つまり米を煮る調理から米を蒸す調理へと理解されている(坂井1988、宇野1999)。北陸でも5世紀後半には甗が出現し、球形を呈していた煮炊具は次第に長胴化するともに、使用痕跡も湯釜使用の痕跡が確認されるようになる。しかし北陸では甗とセットで導入されるはずの造り付けカマドは導入されず、堅穴建物の火処は依然として炉が付設される。甗型土製品の出土が当期に確認されるものの、祭祀場等特殊な煮炊きに限られるようで、通常の集落では当期に出土が顕在化する土製支脚を使って簡易な組み立て式カマドを設置したのだろう。ただ、当期の甗出土量は少なく、蒸す調理方法は6世紀中頃までは一般的なものと言いきれない。造り付けカマドが普及する古代Ⅰ期までは米を蒸す調理と煮る調理は併用されていた可能性が高いだろう。筆者は以前に念仏林南遺跡資料を検討した際、使用痕観察から古代Ⅰ期における蒸す調理の定着と短胴小釜の副食調理具の使い分けを提示したが(望月1995)、本報告ではそれ以降の様相を含めて検討したいと考えている。なお、使用痕観察資料は額見町遺跡を中心とするが、北陸各地の煮炊具観察で得た所見を加味して行う。

#### a. 古代Ⅰ期～Ⅳ期の土器器煮炊具使用痕跡

煮炊具は長胴釜、甗、短胴小釜、小型釜、深鍋、浅鍋を取り上げる。

長胴釜(写真図版20)はⅠ期以降、Ⅳ期までは概ね同様の使用痕跡が確認できるものと理解している。外面に広く薄くススが付着するものが多く、底面から胴部下半を中心に胴部上位まで及ぶ。口縁部まで及ぶものもあるが、これに関しては頸部のスス付着は弱く、頸部付近でカマド掛け口に掛かっている状況が観察される。また、底面の一部に支脚痕を思わせるスス付着のない部分が確認され、当器種の支脚設置を予測させる。全体的に強い被熱を受けたような器面の置い劣化はない。5世紀前半の内面下半コゲ痕跡を持つ煮炊具と比較するとススの付着度合いや被熱劣化の違いは明白である。内面はきれいなままのものも多く、暗く変色したようなコゲが胴部上～中位付近より下において確認される。また、口縁部内面に甗底部との接合部を思わせる擦れを確認できるものがある。甗は特に顕著な使用痕は確認しにくい、念仏林南遺跡で底部外面のみスス付着がないものがあり、長胴釜と重なる部分を思わせる。このように、甗と長胴釜がセット使用である事は間違いなく、釜は湯釜機能専用の容器として定型化されたのだろう。カマド設置専用の容器であり、Ⅰ期からⅣ期までに器高(30～34cmの幅内)や口径に大きな変動が見られないのはこのような要因によるものとみたい。甗は長胴釜に比べて絶対数が足りないが、直接火を受けない容器であるため長期使用に耐えた可能性はあろう。また、底部の抜けた釜の再利用や木製甗(蒸甗)の存在も考えられよう。

短胴小釜(写真図版21)も長胴釜同様、Ⅰ期からⅣ期まで使用痕跡に変化は認められない。外面の強い被熱による器面劣化や赤変が顕著で、胴下位～底面よりも胴部中位以上で顕著となる。ススの付着は被熱により飛んだか剥落してしまったものが多いが、下半部ではススが残る、底面ではススの付着も弱いが目立つ。支脚痕と思われるスス付着のない部分があるが、被熱度合いが底面より胴部側面が強いことから見て、高い支脚で持ち上げ底面から加熱する方法ではなかったと予想される。当期の造り付けカマドの復元高から見て、短胴小釜を造り付けカマドに掛けられ直接炎が当たることはまずなく、加えて口縁部までのスス付着等、カマドに掛ける容器とは考え難い。専ら炉に掛けられる容器であり、低い支脚で床から浮かし、胴側面へ直に炎が当たるような加熱方法だったろう。内面は底面付近にコゲ痕跡を明瞭に残すものもあるが、多くは胴部上半で薄いコゲ痕跡を残すもので、下半部はきれいな状態のものが多い。胴部上半以上に広くコゲを残すものと頸部から口縁部の狭い幅でコゲの付くものがあるが、後者が主体的で、何かを煮た際に出るアクがこびりついたものと言える。汁系のもの何かを茹でた際の痕跡だろう。粥のようなものを煮ることも考えられなくもないが、糊のようなネバツキが生じるものにおいてはどうしても下半部のコゲを生じさせるはずである。

これとはほぼ同様の使用痕を持つものに小型鍋(写真図版22-13)がある。Ⅰ期に顕在化する容器で、把手付きもあり、現在の鍋に近い容器である。用途も同様と推察でき、それは短胴小釜の用途と共通するだろう。

深鍋(写真図版22-14)は底面スス付着や支脚痕、把手箇所より上へはスス付着が及ばない等から、カマドに掛ける容器の可能性が高い。長胴釜と同様の掛け口に設置される可能性があるが、Ⅱ期以降は器形が変化した、数量も減ってⅢ期以降は確認できなくなる。おそらくⅡ期以降に定着、増加する浅鍋へ機能が移って行ったものなのだろう。深鍋の内面使用痕は胴部上位から下でコゲ痕を持つものが多く、特に底面でコゲを残すものが確認さ

れる。ただ、内面に広くヨゴレ状痕跡をもつものや頸部にコゲバンドのみを形成するものなど痕跡が多様であり、様々な煮炊きに使われた可能性がある。しかしながら、底面コゲ痕をもつのは当器種のみであり、大鍋という用途が妥当と判断される。浅鍋の使用痕(写真図版23-15)もこれに類似する。内面中位から底面にかけてコゲ痕跡をもつものが多く、コゲツキというほどの顕著なものではないが、範囲広くコゲが付く。ただ、コゲのつかないきれいな内面のもも同量程度あり、胴上半にコゲバンドをもつ、茹でるような調理痕跡を持つものも少量ながら確認される。外面は胴部中位から底面まで広くススの付着が見られ、支脚痕は確認されない。やや径は大きい、カマドに掛けた可能性が高く、口縁部にススが及ぶものに関しても、掛け口からススがもれて付着したものと考えられよう。被熱の度合いは長胴釜に類似し、炎が直にあたるような炉での加熱はやや想像しにくい。

以上、煮炊き使用痕跡を概観したが、V期以降も同様の痕跡は確認されるものの、器壁が薄くなり、特にVI期以降は一過性の使用や未使用のまま廃棄されるような祭祀性を帯びたものが増加する。南加賀窯跡群の生産器種構成に見る変化(V期の長胴釜3/短胴小釜3/浅鍋3/飯1からVI期に3/5.5/1/0.5となり、短胴小釜が増加する。宮都で人面黒書される容器に共通する器種であり、祭祀的器種の側面も具備していただろう。福井県明寺山廃寺。清水町1998)はその祭祀的使用を示す資料となろう。この頃、鑄造技術の進展によって鉄製容器が地方でも使われてくる可能性があるが、日常生活に使用されるのは早くともVI期以降と予想しており、やはりVI期の窯場での土師器煮炊具生産終了までは土製煮炊具が主要なものであったと考えざるを得ない(望月2002)。

#### b. 煮炊き具の使われる施設と用途

以上の使用痕跡から求められる各器種の用途と使用される施設を整理すると、最も被熱痕跡が強い短胴小釜や小型鍋は炎の直接当たる炉での使用が予想される。石や粘土または土器などを組んで、五徳のような簡易な施設を作り、火に掛けたと予想される。使用痕跡の度合いの高さや当器種の数量的な割合から、日常的に使用される容器と位置づけ可能で、内容物は水分のなくなるような調理ではなく、茹でるや汁気の多いものを煮るといった調理と理解する。米の調理をするための器種とは考え難く、汁気の多い粥のようなものを煮たとしてもそれを主食としたとは考えにくい。やはり従来言われているような副食調理具という位置付けが妥当だろう。ただ、前述のように、V～VI期には副食調理+祭祀具という側面も含めて考えておく必要性はある。

浅鍋や深鍋、長胴釜はカマドでの使用が予想される。外面被熱痕跡は短胴小釜と異なり、被熱による劣化や強いススの付着はなく、特に長胴釜はススの付着が少ない傾向にある。このような被熱度合いの差を使用頻度の差と見ることが可能だが、炉とカマドという異なる条件下のものであり、カマドの効率的な熱使用に起因する可能性があらう。カマドの焚口被熱痕跡は支脚より手前にあることが通常で、焚口付近が最も焼結するものが多い。燃料を奥へ意識的に差し込まなければ、焚口付近に燃料があったわけで、掛煙口への空気の流れにより熱をカマド内へ送り、長胴釜を熱したのだろう。長胴釜全体を炎が覆う状況にはなく、カマド内の壁や床などの焼土化が焚口のみで奥へと続かない状況がそれを示す。焚口床面の強い焼結は、決してカマドでの使用頻度が常に劣るものではないことを物語るし、カマド全体を焼くことで効率的に長胴釜を熱することができたのだろう。内内容を煮る短胴小釜と違い、湯を沸かすだけの釜は器面の劣化が煮る調理よりも進行しづらかったとも考えられよう。

長胴釜の外面使用痕をカマドという施設に要因があると考えれば、竈穴建物内に付設されるカマドには日常的に長胴釜が掛けられ、湯が沸かされたこととなる。飯の出土量は少ないが、VI期まで定量生産され続ける器種であり、湯を沸かすだけとは考え難く、木製や転用品が瓶として使われたと積極的に理解したい。IV期以降に竈穴建物が独立柱建物へ移行してゆく段階で、造り付けカマドはなくなるが、長胴釜使用痕や変わらない器形と法量の維持、瓶や長胴釜のIII期以降不変の生産量などから考えて、平地建物内の常設のカマドや屋外の簡易組み立て式カマドにより、蒸す調理施設としてのカマドを存続させていた可能性が高い。そうでなければ、長胴釜の法量維持は説明が困難である。甕型土製品がそのような役割を担ったことも検討すべきだが、出土個数や写真図版23-17にあげた内面被熱の度合い等から見て、祭祀的なハレの用具として位置づけられていた可能性が高いと考える。甕型土製品を日常用具として位置づけられるほど出土量の多い地域が存在することも事実だが、少なくとも北陸西部については、竈穴建物の消滅と同時に増加することはなく、特殊用具の位置付けが妥当なのである。

#### c. 米の調理方法について

以上述べたように、長胴釜の定量使用やそれを掛けるカマドの広域普及、煮る容器において米を煮た痕跡が乏しいという点などから見て、北陸においては少なくとも6世紀後半から10世紀頃まで、主食である米の調理は

飯と長胴釜を使った蒸す調理に主体があったと考えざるを得ない。深鍋や浅鍋はカマドで煮る調理を行った可能性が高い容器だが、使用痕跡が一定ではなく、米を煮る際に生じる吹きこぼれ痕が確認できないこと等、米を主食として調理した容器とは認定しにくい。以前、佐原真氏が「東日本の一部のある期間を例外として古代以来、人々は、常日頃は米を直接煮て食べ、祭りには蒸したという理解で大過ない」（佐原 1987）とされたように、確かに関西西南部より西の地域では 8 世紀中頃以降に長胴釜の胴が短くなり、口径に最大径をもつような器形へ変化し、深鍋に似た胴の丸い器形も多く確認されるようになる。堅穴建物とその頃には消滅する傾向があり、それと連動した動きのようにも見える。ただ、西日本で確認される胴の短くなった長胴釜に米を煮たようなコゲツキ痕跡を確認することは稀で、北部九州地域の堅穴建物の遺存や山陰地域での使用痕跡報告（岩橋 2004）など、佐原氏の説を裏付ける資料は現状では確認しにくからう。今後各地域の使用痕跡を確認することは必要だが、日本の広い地域で、日常的に米を蒸す調理が行われていた可能性は高いと考えている。決して、東日本の一部のある期間の特殊事情によるものでないことはほぼ定説となっていると感じるのである。最近刊行された狩野敏次氏の「かまど」は、佐原説を補強する論を展開しており、多くの興味深い指摘がなされているが、氏の使われている絵巻等資料は平安後期以降のものである、10 世紀以前の様相とは異なるものと理解したい（狩野 2004）。氏が日常の煮炊きとして上げる五徳での煮る調理は、古代の副食調理にあたる短胴小釜の如での煮炊き調理に通じるだろう。弘法大師行状絵詞に見る乞食の煮炊きでは鍋のみだが、建物内での煮炊きにはカマドにも描かれており、主食である米はやはりカマドに掛けられた羽釜で煮る調理が行われていたものと理解したい。

以上の米の調理方法を選択する上で、米の品種は重要な意味をなす。現在の感覚からすれば、米を蒸す調理は糯で、梗米であれば、粘り気のないバサバサとした飯となる。南アジアなどではそのような飯を好んで食す地域があるようだが、日本の箸食では無理であろう。古代の手持ち食器と箸食文化がこの頃に定着していたとすれば、箸で掴みやすい粘り気のある糯を好んだと言える。梗米ならやはり煮て食べていたと考えざるを得ない。中世以降に水田経営が盛んとなり、梗米が普及したため、煮る調理に変わった可能性はあるが、5 世紀以前でも梗米であるのかも含め、品種に関して検討する必要がある。小林正史氏が小論で指摘されているように（小林 2003）、栽培環境や蒸す調理方法の効率性など、様々な面から飯と釜、カマドの問題について検討する必要性を感じる。

### 3. 造り付けカマドの破壊とカマド祭祀について

堅穴建物に造り付けられるカマドのほとんどがそうであるように、額見町遺跡の事例においても堅穴建物の廃絶に伴い、造り付けカマドに対して必ず何らかの破壊行為を行っている。カマド天井を除去したものをはじめ、焚口に設置した石組み石材や支脚の抜き取り、カマドの基礎部分までもを根こそぎ破壊するものもある。カマド破壊に伴い、煮炊具を中心にカマド本体並び周辺へ土器廃棄を行っており、複数個体の長胴釜の半完形品をまとめて捨てたり、意識的に細片化したものを廃棄するなど、様々な廃棄行為を行う。また、カマド破壊の際のカマド構築粘土塊を土師器とともに貯蔵穴と呼ばれるカマド脇のピットへ廃棄したり、抜き取った支脚を全く異なる箇所に立てるなど、意味不明の行為も多い。カマド廃棄に伴う煮炊具は、その堅穴建物で使われたものを廃棄してゆくと思うのだが、複数個体のものをまとめてカマドへ捨てる様子を見ると、カマドへ常に掛けられる容器以外にも建物内には複数の煮炊具が存在していたことを物語る。他の遺跡の事例検討をしていないが、額見町遺跡 A 地区では特徴的な土器廃棄が複数個体確認されており、他に事例を知らないため、以下に説明しておきたい。

SI02 と SI03 A、SI13 で確認されるもので、全て L 字型カマドを付設する堅穴建物である。3 軒は A 地区南側に位置するまとまりをもった堅穴群で、SI13 が I 1 期の中でもやや古手、SI03 A が I 1 期新段階、SI02 が I 2 期というように、短期間の中で建替えられた可能性をもつ。SI13 は当地区の中で最古段階の堅穴建物であり、この地に古代集落を営んだ際の初期構成員という位置付けが可能である。注目される土器廃棄は、L 字型カマドの煙道の伸びる反対側の壁際床面に並べ置くように土師器の半完形品を廃棄するもので、SI13 では長胴釜と手付深鍋の上半部完形品を、SI02 では短胴小釜と手付深鍋の上半部完形品を、SI03 A では高坏脚部完形品を正位、小型鍋の底部欠損の完形品を伏せて、土製支脚と短胴小釜は半欠け品を置くようにして設置している。SI02 や SI13 は捨てるという出方ではなく、口縁部高を合わせるようにして床面に固定したような出方であるため、調理具等の置き場として設置した器台のようにも思ったが、SI03 A の出方は廃棄であり、カマド壁際面に並べ置くように捨たられるカマド使用用具の共通性という観点から、同様の性質を持つ廃棄行為と位置づけた。L 字型

カマドに住む人々が従来言われている朝鮮半島系移民という理解に立てば、このような破壊行為も当地でカマド作りを始めた朝鮮系移民がもたらしたこととなる。特に、3軒の事例は集落成立初期の竪穴建物の建替えである可能性が高く、このような煮炊具廃棄は渡来人の破壊祭祀の風習を色濃く出しているものなのかもしれない。

#### 参考文献

- 荒井健治 1999「かまどのある風景」『瓦衣千年－森部夫先生還暦記念論文集－』森部夫先生還暦記念論文集刊行会
- 岩橋孝典 2004「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について（2）－甎の検討及び変形土器、土製支脚の使用痕・被熱痕分析－」『古代文化研究』第12号 鳥根県古代文化センター
- 宇野隆夫 1999「古墳時代中・後期における食器・調理法の革新」『日本考古学』第7号 日本考古学協会
- 上垣幸徳・松室孝樹 1996「石組みの煙道を持つカマド－古代の暖房施設試論－」『紀要』9（財）滋賀県文化財保護協会
- 小田和利 1994「北部九州のカマドについて」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 亀田修一 1993「考古学から見た渡来人」『古代文化談義』30（中）九州古文化研究会
- 狩野敏次 2004『ものと人間の文化史117 かまど』法政大学出版局
- 小嶋芳孝 1999「オンドルと竪穴」『史学研究 あおもり』2号 青森市
- 小林正史 2003「土鍋のコゲから何が分かるか（その6）日本の古代に蒸し米が普及した理由」『石川考古』第275号 石川考古学研究会
- 坂井秀弥 1988「古代のごはんは蒸した「甎」であった－古代の米調理法復元メモ－」『新潟考古学談話会会報』2号 新潟考古学談話会
- 佐原 真 1987「煮るか蒸すか」『飲食史林』第7号 飲食史林研究会
- 清水町教育委員会 1998「越前・明寺山廃寺」
- 杉井 健 1993「甎の地域性とその背景」『考古学研究』157号 考古学研究会
- 鈴木俊成 1994「古墳時代後期の竪穴住居について」『上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ（一之口遺跡東地区）』新潟県教育委員会
- 田中茂良 1993「甎構造に関しての一考察」『市原市文化財センター研究紀要』Ⅱ（財）市原市文化財センター
- 原 智之 2001「甎復原の試み」『土壁』第5号 考古学を楽しむ会
- 橋崎直子 2005「北部九州における初期カマド・L字型カマドの導入と展開」『九州における渡来人の受容と展開』第8回九州南方後円墳研究会実行委員会
- 松室孝樹 1996「竪穴住居に設置されるL字型カマドについて－日本国内検出例の集成－」『韓式系土器研究Ⅵ』韓式系土器研究会
- 宮崎幹也 1993「カマドの採用と普及－L字型カマドの復原－」『角田文衛先生寿章記念論集 古代世界の諸相』
- 望月精司 1995「古墳時代後期の遺構と遺物」『念仏林遺跡Ⅱ』小松市教育委員会
- 望月精司 2002「Ⅳ1期～Ⅴ2期までの土師器様相」『Ⅵ2期～Ⅵ3期の土師器様相変遷』『ニッ栗一貫山跡跡』小松市教育委員会
- 李 弘鍾 1994「甎施設の登場と地域的様相」『大阪文化財研究』第6号（財）大阪文化財センター
- 李 健茂 2001「韓国古代のオンドル（温突）状遺構と住文化」『日韓国際シンポジウム 飛鳥の王権とカガの渡来人』石川県立歴史博物館
- 渡辺芳郎 1993「中国におけるカマドの変遷と地域性－カマド形明器からの検討－」『古文化談義』29 九州古文化研究会
- 谷 旬 1982「古代東国のカマド」『研究紀要』7（財）千葉県文化財センター

#### 〈追記〉

額見町遺跡発掘調査報告は調査地区ごとに5分冊で刊行する予定である。各報告に付される総括は本来であれば、報告した地区の総括を掲載すべきだが、遺跡全体での内容を網羅した総括としなければ、内容が重複したり、その都度、訂正が行われることとなろう。このため、集落構成や集落単位変遷などの総括は最終報告に委ね、今回は竪穴建物と造り付けカマドについてのみを取り上げた。未報告地区の資料も含めて検討しているため、報告と前後することとなるがご容赦願いたい。また、遺構では掘立柱建物、竪穴、鍛冶炉と製炭土坑、土師器焼成遺構をはじめとした土器生産関連、道路状遺構など、遺物では土器や特殊遺物、鉄関連遺物とその分析について、次回以降の報告で今回の報告同様にご考察してゆく予定である。





写真1 顔見町遺跡遠景斜めの航空写真（北方からA地区及び遺跡全景望む）



写真2 顔見町遺跡遠景斜めの航空写真（西方からA地区及び市加賀丘陵を望む）



写真3 顔見町遺跡遠景斜めの航空写真（東方からA地区及び柴山湖・海岸線を望む）



写真4 額見町遺跡A地区、D地区遠景垂直航空写真



写真5 額見町遺跡A地区全景垂直航空写真



写真6 A地区検出の堅穴建物群分布状況斜め写真(左:調査区西端から、右:調査区南端から)



写真7 SI02完掘全景



写真8 L字型カマド全景



写真13 L字型カマド本体部分全景



写真17 掘り方全景



写真9 L字型カマド確認面



写真10 L字型カマド横断面



写真11 L字型カマド縦断面



写真12 L字型カマド煙道断面



写真14 L字型カマド左袖被熱状態



写真15 L字型カマド右袖被熱状態



写真16 カマド右側煮炊具配列設置

《SI02 遺構調査写真》



写真18 SI03 全景 (SI03 AとSI03 B重複)



写真22 SI03 AのL字型カマド全景



写真25 SI03 完掘全景 (SI03 AとSI03 B重複)



写真19 竪穴内遺物出土状況



写真20 竪穴内下層・床面遺物出土状況



写真21 AのL字型カマド煙道部破壊に伴う土層茶枯土塊散乱の状況



写真23 L字型カマド横断面



写真24 L字型カマド左側土師器(小鍋・高坏・支脚・短割小釜を配列設置)

《SI03 遺構調査写真》





写真 26 SI07 完掘全景 (SK09 重複)



写真 27 SI07 遺物出土状況



写真 28 カマド全景 (L字型カマドか?)

〈SI07 遺構調査写真〉



写真 29 SI08 完掘全景



写真 30 小型カマド完掘全景

写真 31 竪穴土層観察ベルト遺存状態

〈SI08 遺構調査写真〉





写真 32 SI09 完掘全景

(SI09 遺構調査写真)

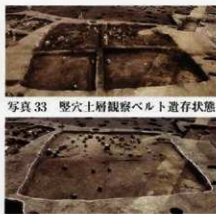


写真 33 竪穴土層観察ベルト遺存状態



写真 34 遺物出土状況全景



写真 35 SI10 完掘全景



写真 36 カマド遺物出土状況



写真 37 遺物出土状況全景



写真 38 カマド縦断面

(SI10 遺構調査写真)



写真 39 SI11 完掘全景



写真 40 カマド煙道部土層断面



写真41 SI11 L字型カマド全景（右袖側から）



写真42 L字型カマド煙道断ち割り断面



写真43 竪穴土層断面及びカマド袖粘土塊散乱



写真44 L字型カマドと袖粘土塊の散乱状況

〈SI11 遺構調査写真〉



写真45 SI12 完掘全景



写真46 竪穴内遺物出土状況



写真47 竪穴内床面直上遺物出土状況全景



写真48 カマド完掘及び周辺遺物出土状況



写真49 カマド縦断面

〈SI12 遺構調査写真〉

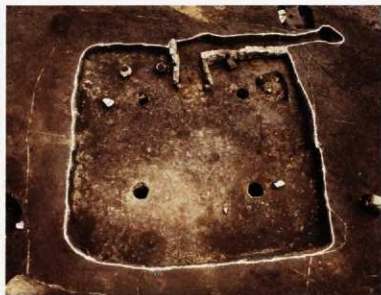


写真50 SI13完掘全景垂直写真



写真51 SI13完掘全景斜め写真



写真52 L字型カマド全景



写真53 カマド左側へ底部打ち欠き配列設置された手付深鍋と長柄釜  
(SI13遺構調査写真)



写真54 カマド覆土縦断面



写真55 カマド覆土横断面



写真56 カマド煙道末端ビット覆土断面



写真57 カマド煙道覆土断面



写真58 カマド煙道覆土断面





写真 59 SI13 L字型カマド本体部分完掘



写真 60 カマド本体袖内側被熱痕 (上:左袖、下:右袖)



写真 61 L字型カマド煙道部分の粘土構築状況 (左:手前側から、右:奥側から、煙道粘土は複数方形塊で構成)

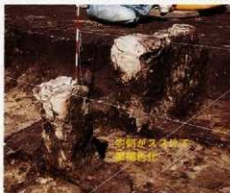


写真 62 L字型カマド袖構築粘土スチ割り断面 (左:本体部、中:煙道部、右:煙道アップ=版築状に互層呈す)

《SI13 遺構調査写真》



写真 63 SI14 完掘全景



写真 64 カマド土層断面  
《SI14 遺構調査写真》



写真 65 SI17 完掘全景  
《SI17 遺構調査写真》



写真66 SI17 竖穴覆土土層ベルト遺存全景



写真67 竖穴内遺物出土状況



写真69 SI17 掘り方完掘全景



写真68 カマド突口被熱面

《SI17 遺構調査写真》



写真70 SI18 完掘全景



写真72 カマド土層横断面



写真71 SI18 カマド完掘全景



写真73 カマド完掘被熱面(右被熱は1次面?)



写真74 掘り方土坑断面

《SI18 遺構調査写真》



写真 75 SI19・21 及びSK38 完掘全景



写真 76 SI19 土層ベルト遺存全景



写真 78 SI21 土層ベルト遺存全景



写真 77 SI19 カマド遺物出土状況

〈SI19・21 遺構調査写真〉



写真 79 SI22 完掘全景

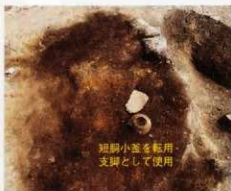


写真 80 SI22 カマド完掘全景

〈SI22 遺構調査写真〉



写真 81 SI23 完掘全景



写真 82 SI23 遺物出土状況全景



写真 83 SI23 掘り方完掘全景

〈SI23 遺構調査写真〉



写真84 SI26 完掘全景



写真85 竪穴覆土土層ベルト遺存全景



写真87 掘り方土層ベルト遺存全景

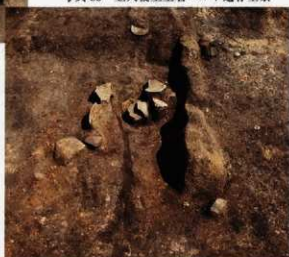


写真86 カマド全景

《SI26 遺構調査写真》



写真88 SI27 完掘全景



写真90 竪穴覆土土層ベルト遺存全景



写真89 床面遺存の炭化木材と焼土分布(火災住居)

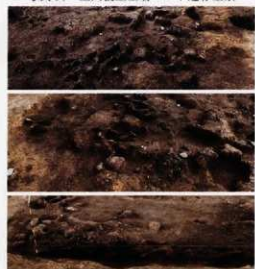


写真91 炭化材と焼土分布及び断面  
(断面が床直上でなく、炭化材間層接む状況判明)

《SI27 遺構調査写真》





写真92 SI29 完掘全景 (左方に重複はSK35)



写真93 SI29・SK35 遺物出土状況



写真94 SI29 L字型カマド土層断面



写真96 SI30・SK39 完掘全景



写真95 SI29 L字型カマド完掘全景

《SI29・30 遺構調査写真》



写真97 SI32 完掘全景



写真98 竪穴覆土土層ベルト遺存全景



写真99 掘り方完掘全景



写真100 L字型カマド完掘全景



写真101 L字型カマド (右袖側から)

《SI32 遺構調査写真》



写真102 SI32 L字型カマド土層横断面



写真103 煙道土層断面



写真104 煙道断ち割り



写真105 L字型カマド焚口遺物出土状況



写真106 L字型カマド本体部完掘全景

《SI32 遺構調査写真》



写真107 SI33 完掘全景



写真109 竪穴覆土土層ベルト遺存全景



写真110 L字型カマド本体土層断面



写真108 L字型カマド完掘全景



写真111 L字型カマド煙道土層断面



写真 112 SI33 L字型カマド本体完掘全景



写真 113 L字型カマド完掘全景 (煙道端側から)

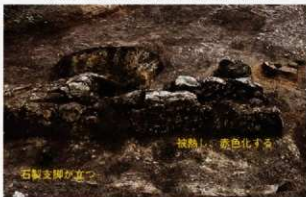


写真 114 L字型カマド煙道袖内側の被熱状況



写真 115 L字型カマド煙道断ち割り断面

《SI33 遺構調査写真》



写真 116 SK35 (上: 全景、下: 土層断面)



写真 118 SK12 出土のヤマトシジミ



写真 117 SK38 (上: 上中层遺物出土全景、中: 下層遺物出土全景、下: 下層遺物アップ)

《A区 SK 遺構調査写真》



写真 119 額見町遺跡D地区全景垂直航空写真



写真 120 SI102 完掘全景

《SI102 遺構調査写真》

写真 121 堅穴覆土ベルト遺存全景



写真 122 SI104 完掘全景





写真 123 SI104 整穴覆土土層ベルト遺存全景



写真 125 L字型カマド本体完掘全景



写真 124 覆土内遺物出土状況全景



写真 126 L字型カマド覆土横断面



写真 127 L字型カマド完掘全景(左袖斜めから)



写真 130 掘り方全景



写真 128 L字型カマド覆土土層縦断面



写真 129 L字型カマド煙道断ち割り断面

《SI104 遺構調査写真》



写真1 額見町遺跡A・D地区出土古代I 1期の土器群 (A地区SI03A・SI11・SI13及びD地区出土の集合)



写真2 額見町遺跡A地区出土古代I 2期の土器群 (SI02・SI03B・SI29・SI32出土の集合)



写真3 額見町遺跡A地区出土古代II 2期の土器群 (SI23一括品)



写真4 額見町遺跡A地区出土古代Ⅱ2期の土器群 (SI12一括品)



写真5 額見町遺跡A地区出土古代Ⅱ2期の土器群 (SI17・SK38出土の集合)



写真6 額見町遺跡A地区出土の須恵器飯類と土製支脚

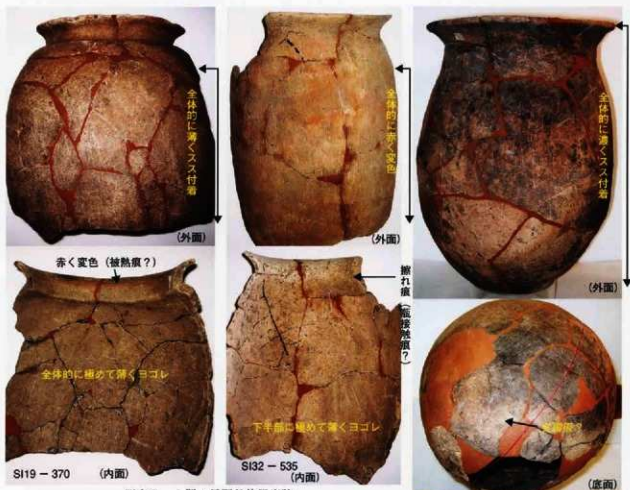


写真7 I期の長胴釜使用痕跡



写真8 II期の長胴釜使用痕跡



写真9 III~IV期の長胴釜使用痕跡

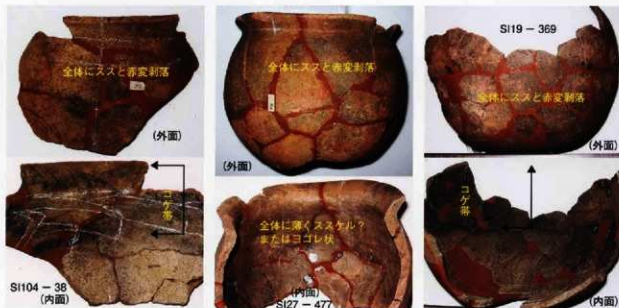


写真 10 1期の短胴小釜使用痕跡 (右は短胴釜)

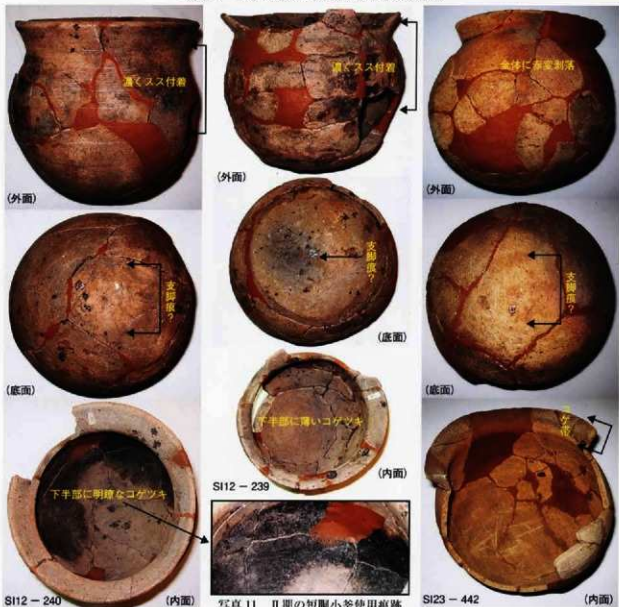


写真 11 2期の短胴小釜使用痕跡





写真12 II期の短胴小釜使用痕跡



写真13 I期の小型鍋使用痕跡(右は広口タイプ)



写真14 I期の小型浅鍋(941)及び深鍋(262・732・733)、椀H(250・530)の使用痕跡

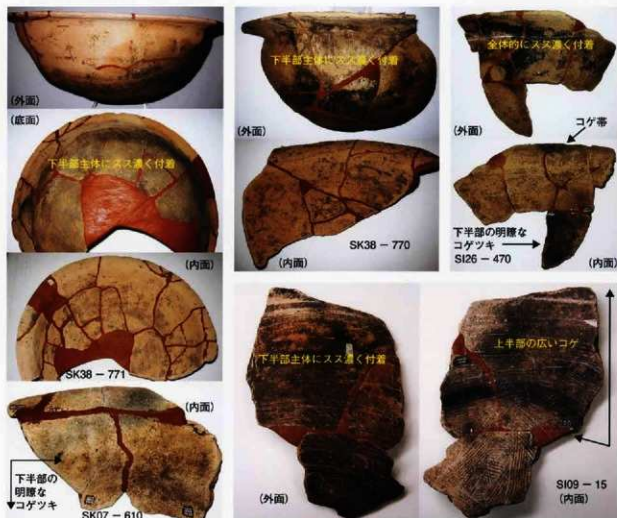


写真 15 II 期から III 期の浅鍋使用痕跡



写真 16 製塩土器の使用痕跡



写真 17 II 期の土製甕使用痕跡



写真18 I期の石製支脚使用痕跡(左からSI03、SI13、SI32のカマド使用支脚)



写真19 土製支脚使用痕跡(左からSI03、SK11、SK14出土。SK14のものは出雲型)



写真20 高火度還元焙焼成土師器長脚釜(叩き成形、ハケ目調整あり)



SB11 出土の焼成剥離品

写真21 遺跡内焼成を示す焼成剥離痕のある土師器煮炊具片



SI18-365

写真23 土師器焼成に伴う可能性のある焼成粘土塊



写真22 SI31 出土黒斑付き土師器煮炊具(全て叩き成形の焼成堅緻品で、使用痕跡無し)





口縁部欠け  
製品から剥  
がした際の  
痕跡か？



底面に窯土溶着

包含層 916

写真 24 使用痕跡のある貯蔵具専用焼台



包含層 682

写真 25 須恵器特殊貯蔵具 (三足羽釜？)



SI03-58

写真 26 須恵器特殊貯蔵具 (肩部斜行刺突文をもつ裝飾壺)



包含層 908

包含層 909

包含層 907

写真 29 圓足門面観



SI23-420

写真 27 須恵器特殊貯蔵具 (肩部連続刺突文をもつ裝飾壺)

黒色釉が厚く表面に掛かる。内底面降灰は  
緑色系自然釉で、黒色釉は  
黄土塗布か？



SI17-321

写真 28 須恵器特殊貯蔵具 (波状文裝飾壺、外面黒色釉塗布？)



SK38-777

包含層 962

D地区包含層 82

包含層 913

SI08-140

D地区 SI102-42

写真 31 轆轤車 (左下:須恵質、左上:凝灰岩製、他:滑石製)



包含層 911

写真 30 須恵質椎状罎 (波状文裝飾壺、外面黒色釉塗布？)



写真32 朝鮮系土師器長胴釜(口縁部クロクロ成形器形等)

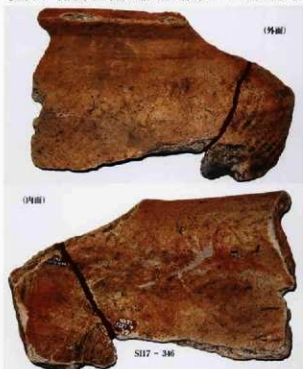


写真34 朝鮮系土師器手付深鍋(叩き成形技法と口縁部器形)



写真36 近江系土師器深鍋(口縁受口状と内面ハケ目)



写真33 朝鮮系土師器釜(叩き成形技法による短胴系)

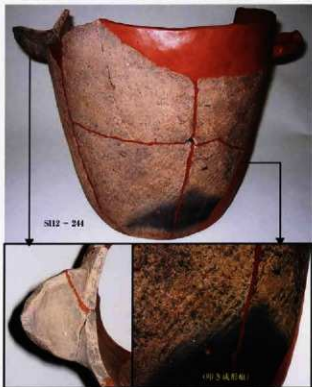


写真35 朝鮮系土師器飯(叩き成形技法と把手形徳)



写真37 丹波系土師器長胴釜(口縁部クロクロヒダと赤色胎土)



1



2



3



4



5



7



外側



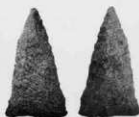
内側



9 (外側)



10



1



2



3



4



5



6



7



7



8





9



10



11



12



13



14



16



17



18



15



20



19



20 使用砥



21



使用砥

## 額見町遺跡 I

- 串・額見地区産業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1 -

発 行 日 平成 18 年 3 月 31 日

編集・発行者 小松市教育委員会  
文化課 埋蔵文化財調査室  
〒 923-0801 石川県小松市園町ホ 62 番地  
(TEL) 0761-24-8132

印 刷 英文堂印刷



Excavation Reports of the Cultural Sites  
in Nukamimachi Sites  
Vol. I



2006. 3. 31

Komatsu City Board Of Education